アリストパネス

高津春繁編

世界古典文学全集

12

筑摩書房



ディオニュソスとその信女たち（紀元前六世紀）

目次

アリストパネス

アカルナイの人々

登場人物

ディカイオポリス
触れ役
アンピテオス
ペルシア大王のところから帰ったアテナイの使節たち
プセウダルタバス
テオロス
アカルナイの人々のコロス
ディカイオポリスの娘
エウリピデスの召使
エウリピデス
ラマコス
メガラの男
二人の少女　すなわちメガラの男の二人の娘
告訴常習者
ボイオティアの男
ニカルコス
ラマコスの召使
百姓
花聟の附添人
使者

［背景は三軒の民家。中央のはディカイオポリスの家で両側にエウリピデスとラマコスの家が並ぶ。舞台の手前は民会の議場たるプニュックスの台地を二、三の長椅子により象徴的に示している。ただし議場は空席でディカイオポリスただ一人開会を待ちくたびれている。いらだたしげな身振りあってのち独白(1)］

ディカイオポリス　心を噛まれる思いをしたのもそもそも幾度か。嬉しい目にはとんと会わぬ。全くとんとない、四度きりだ(2)。痛い目ときたら、これに引きかえまさに浜の真砂だ。さあ、一つ考えてみよう、何か欣びの名にふさわしい目にあったことがあるかな？　はて、思い当った。あれは心もはればれする見物(みせもの)だった。クレオンめが吐き出しおった五タラントン(3)はな。これにはわしも有頂天になったものだ。それでわしはこの手柄ゆえに、騎士の連中に惚れとるのだ(4)。ヘラスにふさわしいことだからな。（八）

　すると今度は悲劇がかった痛い目を見せられた。アイスキュロスの作(もの)(5)を口をあけて待っとると、奴(やつ)(6)は「テオグニス、謡(うた)い方を入れて(7)」と呼ぼうじゃないか。これでわしの心臓がどれほど揺すぶられたと思いなさる。

　だがまた嬉しかったのはモスコス(8)のあとをうけてデクシテオス(9)がボイオティア節(10)を謡いに出たときだった。ところで今年はたまげて眼玉を白黒させてしもうた、あのカイリス(11)が軍歌をうなろうと這い出したのを見たときには。（一六）

　だがわしは産湯(うぶゆ)をつかってこの方今日日(きょうび)ほどに石鹸が目にしみたことはありませぬわい。と申すのは早朝の主要民会(12)だとあるのにこのプニュックスには人っ子一人見当らぬ。奴らは広場(アゴラ)(13)でべちゃくちゃしゃべりながらあっちこっちと赭土(あかつち)(14)を塗った縄をよけるのに大わらわだ。当番の評議員の連中もまだ現われないが、遅くやって来て互いに押し合いへし合いするんだろう。どやどやと流れ込んでいちばんの椅子の

取り合いをするさまはまさに名状すべからずだ。ところがいかにして平和をもたらすかについてはいっこうに心を使わぬ。おお祖国よ、祖国よ。わしはいつでも民会へ一番乗りにやって来て腰を据える。するとたった一人なので溜め息をつき、あくびをし、手足を伸ばし、屁をひる。退屈のあまりに地面に絵を描き、むだ毛を引き抜き、勘定をする。平和をねがい[1]つつ田舎の方をうち眺めると町方はつくづくいやになり、自分の在が恋しうなる。わしの村じゃ「炭[2]はいかが」とか「酢は、オリーヴ油はいかが」なんてのは聞いたためしがなく、「いかが」なんてことはそもそも知らなかった。何でも村でできるんで「いかが」さま[3]はござらなかった。

さて本日ここへまかり出たのはほかでもない。いささか所存あってのこと、もし誰か和議以外のことをしゃべろうものなら声はりあげて弁士の邪魔をし悪態を放ってやるためだ。

〔このとき当番の評議員たち登場〕

そら見ろ、評議員先生どもの正午のご臨席ときた。言わんこっちゃない。わしのご託宣の通り、前列の席へと皆して押し合ってござる。

触れ役　〔集った市民たちに向い〕前へ進んで、お祓いをしたなかま[4]で進んで。

アンピテオス[5]　もう誰かしゃべったんですか。

触れ役　〔大声にて〕発言希望者はありませんか?

アンピテオス　はい私。

触れ役　誰です?

アンピテオス　アンピテオスで。

触れ役　じゃ人間じゃないですな。

アンピテオス　いかにも。不死の身です。と申すのは初代のアンピテオスはデメテルとトリプトレモスのあいだに生まれ、この人の子がケレオスで、ケレオスの妻パイナレテは私の祖母に当ります。その伜がリュキノス[6]で、その子が私というわけです。かくて不死身の私ひとりに神々はラケダイモン人と和約を結ぶことを委ねたもうた。さて私は不死身ではあるが、諸君、路銀をもちませぬ。当番評議員たちがよこさないので。

触れ役　弓持ちども[7]!

〔二、三の弓をもった警吏、彼を演壇から引き下そうとする〕

アンピテオス　おおトリプトレモスとケレオス! 見殺しになさるか?

〔アンピテオス議場のそとに曳き出される〕

ディカイオポリス　〔立ち上って〕おお議員諸君、そりゃ民会を汚す行ないだ。われわれのために和議をとり結び、干戈を納めることを企てた者を曳っぱり出すとは。

触れ役　〔ディカイオポリスに向い〕席について黙っていろ。

ディカイオポリス　アポロンにかけてわしは黙りはせぬぞ。議員諸氏がわしのために和平の動議をせぬかぎりは。

触れ役　〔大声にて〕大王[8]のもとへのお使者たち。

ディカイオポリス　〔聞えよがしの独白[9]〕なるほど大王とな。わしはお使者だとか、奴らの孔雀だとか瞞着だとかにはうんざりしとる。

触れ役　静粛!

ディカイオポリス　〔ペルシア風の衣裳で登場した使者たちを認めて〕これはこれは! おおエクバタナ[10]! そのかっこうは何だ!

使者の一人　〔尊大な調子で〕諸君がわれわれを大王のもとへ一日二ドラクメの手当を給して派遣せられたのはエウテュメネスのアルコンの年[11]であった。

ディカイオポリス　〔独白〕おお気の毒なドラクメだ。

使者の一人　そしてカユストロスの野[12]をのらりくらりと進むのはまことに心の疲れることであった。天蓋つきの轎[13]のなかにやんわりと身を横たえて寿命を縮めてゆく[14]。

ディカイオポリス　〔独白〕わしときたら城壁のところで[15]藁に寝て元気旺盛だったが。

使者の一人　盛んに歓迎の宴が催され、われわれはやむなくぎあまんと[16]

黄金の盃で生の美し酒[1]を飲まされた次第であった。

ディカイオポリス 〔独白〕おお、祖国クラナアイ[2]よ、汝に使節どもの嘲弄がわかるかな？

使者の一人 けだし夷狄の民が人間とみなすのは牛飲馬食しうる者のみだからである。

ディカイオポリス 〔独白〕われわれのあいだじゃ遊治郎と衆道の達人に限るようにな。

使者の一人 われわれは四年目に王宮に到達いたした。しかるに大王は軍隊を引き具して雪隠[3]へと赴かれ、八カ月のあいだ黄金山の上にしゃがんでおられた。

ディカイオポリス そして尻をつぼめたのは[4]いつだ？

使者の一人 満月のときであった[5]。ついでご帰館の途[6]につかれた。しかるのちわれわれを歓待せられ、壺で丸焼きにした牛を幾頭も出されたのであった。

ディカイオポリス 〔独白〕牛の壺焼きなぞ見たものがあるものか。法螺を吹くにもほどがある。

使者の一人 またゼウスに誓って申すが、クレオニュモス[7]の三倍もある鳥をわれわれに振舞われた。その名は詐欺[8]と申したが。

ディカイオポリス それでお前はわれわれを欺しとるんだな。二ドラクメも取りおって。

使者の一人 さてわれわれはプセウダルタバス閣下[9]を、かの「大王の眼[10]」でいらせらるるお方をお連れ申した。

ディカイオポリス 〔独白〕鳥が貴様の使節面をつついて眼玉をくり抜くがええわ。

触れ役 〔大声で〕「大王のお目付役」ご入来。

〔滑稽な服装で一つ目入道の面をつけた人物が二人の宦官風の男を従え、その高い地位にふさわしく悠々と登場〕

ディカイオポリス おお、ヘラクレスさま！ 神々も照覧あれ、この人間め、軍船[11]の姿を装うたか？ あるいは岬を廻って船渠を捜すというか？ 一つ目の下についとるのは櫂の巻き革[12]かな？

使者の一人 さあ閣下、大王がアテナイ人に告げるようにと閣下を派遣された要件をお話しください。プセウダルタバス殿。

プセウダルタバス いあるたまん えくさるくす あなぴっそない さとら[13]。

使者の一人 あなた方、閣下の仰せられることわかりますか？

ディカイオポリス アポロンにかけてわしにゃわからぬ。

使者の一人 大王が諸君に黄金を送るだろうと言っておられる。〔プセウダルタバスに向い〕閣下、黄金というところをもっと大声にはっきりと願います。

プセウダルタバス あなた金受け取らに、ゆるふん やおにあ人[14]。

ディカイオポリス やれやれ、情けなや、こりゃまことにはっきりしとる。

使者の一人 いったい何と仰せられるのですかな？

ディカイオポリス 何だと[15]？ イオニア人はゆるふんだと仰せられる、毛唐から黄金を期待するようではな。

使者の一人 いや、このお方は幾つもの行嚢につめた黄金のことを言うておられる。

ディカイオポリス なるほど行嚢とな。貴様えらいぺてん師だぞ。消えて失せろ！ わしが独りでこやつを調べてみせよう。〔プセウダルタバスに向い〕さあ、はっきりと白状するのだ[16]――〔拳を見せつつ〕これが見えないか――それともサルディス染めに染めあげてもらいたいか。大王はわれわれに金を送るというのか？

〔プセウダルタバス首を上にあげて否定する〕

ではわれわれは使者どもに一杯食わされたわけか。

〔プセウダルタバスと二人の宦官、首を下げて肯定する〕

こやつらはみんなヘレネス流にうなずいたぞ。確かにこの土地廻りの者にちがいない。二人の宦官のうち、こいつは誰だかわしはちゃんと知っとる。シビュルティオスの伜のクレイステネスだ[17]。おお、せっ

かちな尻を剃り上げた奴め[1]！　猿知恵[2]にこんな髯で宦官を装ってわれわれのもとへまかり出たのか？

〔この時ディカイオポリス彼の面をはがし無髯の顔をむき出す〕

こっちは、はて誰だったか？　たしかストラトン[3]じゃなかったかな？

触れ役　静粛、着席。評議会[4]が「大王の眼」閣下を迎賓館(プリュタネイオン)[5]にて迎えられます。

ディカイオポリス　こりゃまさしく首を絞められる思いだ。ところでわしがここでぶらついてるのに、あの連中の歓迎を妨げる戸口は一つもない、と言うのか？　よし！　一つ大それた仕事に乗り出そう。そこでと、アンピテオス先生はどこにおいでだ？

アンピテオス　〔議場に馳せ帰って〕ここに控えております。

ディカイオポリス　おぬしにこの八ドラクメ[6]をつかわすゆえラケダイモン人との和議を結んでくだされい。ただし相手はわしと子供らと家内だけですぞ。〔評議員や他の市民たちに向い〕おぬしがたは勝手に使者を送ってあくびしとるがええわ[7]。

〔ペルシア帰りの使者の一行、「大王の眼」などこれまでにすでに退場〕

触れ役　〔大声で〕シタルケス[8]に使いしたテオロス[9]殿、どうぞ。

テオロス　はい。

ディカイオポリス　また別口のいかさま師が呼び出されたぞ。

テオロス　われわれとても永らくトラキアにとどまるわけではなかったが――

ディカイオポリス　〔独白〕仰せの通り、もしもしこたま日当を貰えるんでなかったらな。

テオロス　たまたま雪が全トラキアを覆い、河川ことごとく凍結ということがなかったなら。

ディカイオポリス　〔独白〕それはまさしく当市でテオグニス[10]が競演に出たころというわけだ。

テオロス　そのころ私はシタルケスと飲みつづけておりました。実のところこの仁は途方もないアテナイびいきで心底から諸君に惚れ込んでおった証拠には「美しきアテナイ人」と壁に落書きするのがつねであった。先のころわれわれがアテナイ市民権を賦与いたした彼の息子[11]はアパトゥリア祭[12]のソーセージが大好物で、祖国[13]を援助せんことを父君に懇願したのであった。すると彼は灌奠(かんてん)を行なって援助を誓ったのであるが、それもなみたいていのことではない、アテナイ人に「何と大した蝗虫(いなご)[14]の群がおいでなすった」とうならせるほどの軍勢を動かす由である。

ディカイオポリス　〔独白〕貴様がここで並べ立てるのを一つでも真(ま)に受けるくらいなら、くたばったほうがまだましさ、もっとも蝗虫の一件は別だがな[15]。

テオロス　そこで今やご本人がトラキア中のもっとも好戦的なる一種族を諸君のために送った次第である。

ディカイオポリス　〔皮肉な調子で〕そりゃ全く議論の余地なしだ。

触れ役　テオロス氏のお連れ申したトラキアの方々、どうぞこちらへ。

〔トラキア人革製の男根もあらわに登場〕

ディカイオポリス　〔独白〕こりゃまた何とも迷惑なこと。

テオロス　〔大声で〕オドマントイ[16]族の軍隊。

ディカイオポリス　〔独白〕オドマントイとな。いったい何としたことだ。トラキア人の「息子」を裸にしたの[17]は誰だ。

テオロス　この方々に二ドラクメの日当[18]を呈すればその楯[19]で実にボイオティア全土を蹂躙するであろう。

ディカイオポリス　〔独白〕このむけまら野郎どもに二ドラクメか？　ほんに軍艦の漕ぎ手[20]、国家の干城[21]が聞いて泣くだろうて。

〔オドマントイたち、ディカイオポリスのにんにくの入った袋を奪う〕

やれ情けなや[22]、こりゃたまらん！　オドマントイの野郎わしのにんにくを横取りしおった。そのにんにく下におろさんか？

テオロス　このやくざ者め！　このにんにく食らった者ども[1]には近寄らぬがよいぞ。

ディカイオポリス　議員方、わしがこんな目にあってるのを見殺しにされるか。それも自分の国で夷狄（えびす）どもの手にかかって。もうやめるがええわ。民会をトラキア人の日当[2]のために開くなどは禁物だ。言わんこっちゃない、ゼウスさまのお告げが、ぽつりぽつりと落ちて来おった。〔俄か雨〕

触れ役　トラキアの方々は退場してまた明後日ご出頭ください。議員方が民会を解散されますから。

〔評議員たち、触れ役、テオロス、オドマントイ退場。ディカイオポリス独り居残る〕

ディカイオポリス　ええいまいましい。サラダ[3]の大損害だ。

〔アンピテオス息せき切って登場〕

ところでアンピテオスがラケダイモンからご到着だ。ご機嫌よう、アンピテオス君。

アンピテオス　〔息をはずませて〕駈け止るまでは、それどころじゃない。アカルナイの連中に追いつめられて逃げてるとこです。

ディカイオポリス　どうしたんだ？

アンピテオス　わたしはあんたのための条約を持って急いでやって来ました。するとアカルナイの年寄りどもが嗅ぎつけ[4]たんです。あのマラトンの勇士[5]で、屈強頑健な、まるで樫（かし）か楓（かえで）[6]みたいな老人どもです。そこで大声張り上げ[7]どなることには「この汚れた奴め、わしらの葡萄が伐り倒されてんのに、和議を結ぶ気か」って。それできゃつらのぼろ服に石を集めて入れおった。私は逃げる一手。奴らは大声あげて追っかける始末で。

ディカイオポリス　勝手にどなるがええわ。だが和約はできたかね？

アンピテオス　はいたしかに。三通りの見本[8]がござんして。これは五年間の和議ですが、一つお毒味願いましょう。

ディカイオポリス　〔一本の葡萄酒瓶から一口味わって〕なっちょらん！

アンピテオス　どうしました？

ディカイオポリス　こりゃごめんだ。瀝青（ちゃん）と建艦の臭い[9]がするからな。

アンピテオス　じゃこの十年の和約をお毒味ください。

ディカイオポリス　〔別の瓶から味わって〕こいつはえらく酸っぱくて外国への使節とか同盟国の暇つぶし[10]のような臭いがする。

アンピテオス　じゃこれは三十年間の和約で陸上海上を問わず[11]有効です。

ディカイオポリス　〔渡された瓶から味わって満悦の態で〕おおディオニュソス祭[12]、こやつの風味はアンブロシアにネクタル[13]だ。「三日間の糧食用意[14]」なぞどこ吹く風といった味だ。そして口に含めば「どこへでもお気に召すまま」と言ってるようだ。こいつを頂戴してお神酒（みき）に供え飲み干すといたそう。アカルナイの先生どもは「さらばご機嫌よろしう」だ。わしは戦争だの災難なぞとはもう縁を切ったんだから家にはいって[15]在方（ざいかた）のディオニュソス祭[16]と行こう。

アンピテオス　私はあのアカルナイの奴らから逃げるとしましょう。

〔アカルナイの炭焼きの老人どものコロス登場、歌を歌いながらアンピテオスを追跡の形〕

コロス　皆の衆、この方角だ。追っかけろ。通りかかった者がありゃ、誰彼なしにきゃつのことを訊こうぞ。奴を捉えるのは国家のため。〔観客に向って〕さてもしどなたかあの和議を持参した奴の行方をご存じの方はお知らせ願います。

とり逃がしたわ。影も形も見えはせぬ。
寄る年波にゃかなわぬもの。
若かったころ炭俵背にひっかつぎ
パウロス[17]にくっついて走った時分の
わしに追っかけられたとしたら、この和約の媒（なかだち）だとて

かようにやすやすと逃げもできれば、軽々と失せもせなんだろうに。
今じゃ向う脛はすっかり硬ばり
老骨ラクラテイデス[1]の脚も重うなって
捉えそこねたわ。したがやるまいぞ。
老いたりとはいえ名にし負うアカルナイ人の手を逃れ、大あくびと
　はまいらぬて。

きゃつこそは、おおゼウス大神はじめもろもろの神々、
敵と和議した憎い奴。
わしらときたらその敵に腹立ちまぎれの戦いを、
荒された地所のそのゆえに、いよいよ激く仕掛ける覚悟だ。
そして尖って痛みの激しい葦……のようにぐさりと
奴らにつき刺さって、わしの葡萄畠を踏みにじるのを
止めさせぬうちは、どうして、戦さの手を緩めるどころか。

何はともかくきゃつをば捜して、石打村[2]の方に目を配り、
見つかるまでは山を越え谷を渉っても追いかけようぞ。
こんな男にゃどれだけ石を投げたとてわしの腹はおさまらぬ。

〔舞台は同じであるが民会の議場たるプニュックスではなくてディカイオポリスの田舎の家の気持〕

ディカイオポリス　〔背景の家のなかから重々しい声で〕静粛、静粛。

コロスの長　みなの衆、おだまりなされ。方々、あの「静粛」の言葉を聞かれたか？　これこそてっきりわれらの捜す当人ですぞ。だが一同しばらくこちらへ身を潜めましょう。きゃつは贄を捧げに出てくること間違いなしだ。〔コロス一時退場〕

〔ディカイオポリス家の中から出て来て、巨大な男根を先につけた棒を運ぶ二人の奴隷と、聖什を容れた籠を運ぶ彼の娘とからなるディオニュソス祭の行列の出発の準備を整える〕

ディカイオポリス　静粛、静粛。[3]籠の運び手はもう少し先に出て。〔奴隷の一人に向い〕クサンティアス、男根棒を真直ぐに立てるんだ。〔娘に向い〕お前は籠を下して。お供えをはじめるんだから。

娘　お母さん、こちらにおしゃじを渡してくださいな。このお煎餅にスープを注ぎ[4]ますから。

ディカイオポリス　さあ、それでよしと。〔厳粛な口調で〕おお、主ディオニュソス。家族一同とともにとり行ないまする行列と供犠が御心に叶い、軍役に煩わされずに在のディオニュソス祭をつつがなく相済ませますように、かつはまた三十年の和約がわが身の幸となりますように。〔娘に向い〕さあ、お前は籠をめでたく立派に運ぶんだよ。ぴりっと締った顔つきでな。[5]お前にまぐわいをする人は何て仕合せなんだろう。きっと明け方にはお前に劣らずおならの名人てな鼬[6]をこさえるだろう。さあ出発だ。人混みのなか[7]で誰かにうっかりお前の黄金の小間物をかじられ[8]ないようよくよく気をつけるんだよ。〔奴隷に向い〕おい、クサンティアス、お前ら二人の役目は籠持ちの後から男根棒をしゃんと立ててくことだ。わしは陽根歌を歌いながらついて行こう。〔妻に向い〕お前は屋根から見物しといで。さあ出発だ。

〔ディカイオポリス一人で歌う〕

おおバッカスの伴なるパレス、[9]
お主は酒神の飲み相手、ぬば玉の夜の放浪者。
間男、衆道[10]の達人よ。
六年ぶりに在に帰り
主の名呼べば心も躍る。
独り気ままに和議したからにゃ
戦争騒ぎは他人のこと
ラマコス風情[11]はわしゃ知らぬ。

遥かにまさった愉しみは、おおパレス、パレス、
色気のついた薪取り
ストリュモドロス[1]の娉(はしため)のトラキア女がわしがもち山[2]で
盗むところを見つけ出し、腰をつかまえ持ちあげて
倒した揚句にやることだ。
パレス、パレス。

お主がわしらと飲むときにゃ、どんちゃん騒ぎのそのあとで
朝っぱらから飲み干すは、これぞ平和の盃だ。
楯は囲炉裏にぶらさげて。

〔コロス再び登場〕

コロスの長　これこそ当の本人だ、こやつこそ。
投げろ、投げろ、投げろ、投げろ。
〔ディカイオポリスに向いコロス石を投げるが、当らぬ〕
打って打って打ちのめすのだ、この卑怯者めを。
投げんか、投げんか。

〔ディカイオポリス動ぜず、行列をするはずの娘と二人の奴隷はこの間に退場〕

ディカイオポリス　〔儀式用の壺を抱きしめつつ〕ヘラクレスさま。こりゃ何としたこと。壺[3]が毀(こわ)れるて。

コロス　やっつけ　たいのは　おぬし自身　性根の腐った　この頭！
〔右の五句に応じてコロス大股に五歩ディカイオポリス目がけつめかける〕

ディカイオポリス　そりゃまたいかなる仔細(しさい)あって？　アカルナイのご老人がた。

コロス　お訊ねとあらば教えて進ぜよう。おぬしこそは恥わきまえぬいまいましい奴。おお祖国への裏切者。独り勝手に和議とり結び、おめおめわしにつらを向けるとは。

ディカイオポリス　だがおぬしがたはわしが何ゆえ和議したかをご存じあるまい。さあ、お聞きくだされい。

コロス　おぬしのいいわけ聞くとな！　くたばりおれ。飛礫(つぶて)で埋めてくれるわ。

ディカイオポリス　いや、せめてはわしの言い分聞いた後に願いたい。ご立派な方々、まあちょっとお控えくだされい。

コロス　控えちゃおられぬ。問答無用。
わしがおぬしを嫌うのは、その皮剝いで切り刻み
騎士の靴底にしようと思うかのクレオン[4]にも劣らぬのだ。
ラコニア人と和約したおぬしの長談義
聴く耳持つどころか、あくまで仇(かたき)がとりたいのだ。

ディカイオポリス　おお方々。ラコニア人はさておいてわしの和約が立派かどうか、しばらくお聴きくだされい。

コロスの長　立派とはよくも吐(ぬ)かした。祭壇[5]も握手も誓言もない相手と和議したおぬしとしたことが。

ディカイオポリス　わしはよう心得とる。われらが激しく責め立てるラコニア人にしてからが、今日の騒動をいっさいがっさい引き起した者とは腑に落ちぬ話。

コロスの長　いっさいがっさいではない、とな。この不埒者め。かようなこと臆面もなくわれらに向ってほざく気か？　それ聞いてこのわしが捨てておけるとでも思うたか？

ディカイオポリス　すべて、とは申されぬ、すべてとは。このわしがこまかに述べ立てりゃ、あの人たちとてわしらを怨むふしぶしのあるのが分明(ぶんみょう)と相成ろう。

コロスの長　これはまた前代未聞の不思議な言葉。おぬしが仇(かたき)のためにわれらに向い弁じ立てるとは。

ディカイオポリス　してもしわしの言い分が誤りで、みなの衆のお気に

召さねば、俎に首さし延べてしゃべってもよろしいですぞ。

コロスの長　さあ、村の衆、どうしてさっさと石を投げんのだ。こやつを飛礫でほぐして[1]緋染めの衣に織らんちゅう手はないぞ。

ディカイオポリス　おぬしがたの心のなかの黒い燃えさしがまた赤々とおこってきましたな。お聴きなさらんか。ほんとうにお聴きくださらんか。アカルネウス家のご一統[2]。

コロスの長　いや決して聴くわけにはまいらぬ。

ディカイオポリス　〔深刻に〕ではこのわしは恐ろしい目にあうわけだ。

コロスの長　おぬしの言うこと聴くよりは、命を捨てるがまだましだ。

ディカイオポリス　そうは言いたもうな、アカルナイの方々。

コロスの長　必定ただちに死すべきことを覚悟めされい。

ディカイオポリス　さらばわしもおぬしがたを噛み殺して進ぜよう。こちらでもおぬしがたのいとしいうちにもこのうえない者を殺してくれよう。おぬしがたの間から人質をとってあるによって、一つ連れて来て切り刻んでやりましょう。〔ディカイオポリス家のうちにとび込む〕

コロスの長　〔コロスに向い〕はて村の衆。あの脅し文句はわれらアカルナイ人に向って、どういうつもりであろう。よもやお互いの誰かの子供を家のうちに閉め込んどるのではあるまいな。さもなけりゃ何でああ大胆に振舞うのか。

〔ディカイオポリス小刀と古びた炭籠とを持って現れる〕

ディカイオポリス　さあ飛礫なぞは御意のままだ。〔炭籠を指しつつ〕わしはこいつをやっつけるのだ。即座におぬしがたのうちで誰が炭を可愛がるかがわかるというわけさ。

コロスの長　南無三宝。この炭籠はわしの同村の者[3]でござる。なにとぞしばらくご猶予を。お待ち、お待ちくだされい。

ディカイオポリス　いくらでも喚くがええ。殺すことには変りはござらぬ。わしは断じて耳はかしませぬぞ。

コロス　そやつに劣らぬ永の年月、炭を愛した己が身を切られるような切ない思い。

ディカイオポリス　先刻わしが頼んだ折にも、おぬしがたはいっかな聴こうとはせなんだじゃないか。

コロス　こうとなったら、お気に召すまま、ラコニア人へのおのろけを、一つ手放しにやるがええ。[4]いとしい炭籠だけはどうあっても見殺しなどはできぬのだ。

ディカイオポリス　まあ第一にその石ころを地面にあけなされ。

コロス　〔石を捨てて〕すっかり地面にあけました。おぬしもその短刀を置きなされ。

ディカイオポリス　だが着物のどこかにまだ石が隠れちゃいないかな。

コロス　〔踊りめぐりつつ〕地面に向けて払い落した。ごらんの通り着物はひらひら。口実はもうやめにして、おぬしも打物を置きなされ。踊りめぐるに従って、着物はかようにひいらひら。

ディカイオポリス　〔勝ち誇って〕おぬしがたはまさに大声張りあげるところだった。今すこしでパルネス山の炭までも胆を潰したはずじゃ。それも同村の衆の心なさにはじまったこと。〔己の着衣の汚れを指しつつ〕ほれ恐ろしさのあまり、この炭籠はまるで烏賊のように粉炭をこんなにもらしましたぞ。情けない話だが、人の心というものは、たとえてみれば未熟の葡萄のようなもの。だからじきに打つの怒鳴るのとおっぱじめるが、公平な議論には耳をかそうとせぬ。わしは俎の上に首さし延べてまでラケダイモン人のために申し開きをしようと肚をきめたのだったが。だがわしだとて命の惜しい道理には変りはござらぬ。

コロス　なぜにおぬしは戸口からその俎を持ち出して、なあ、頑固な親爺どの、おぬしの大風呂敷をひろげなさらぬ。わしとしてはおぬしの心のうちを知りとうてならぬ。ところがおぬしが自分から裁きの形を決めたからにゃ、俎をここに並べたうえでしゃべり出すのが筋道だ。

〔ディカイオポリス家のなかから俎を持ち出し舞台の中央に置

く〕

ディカイオポリス　さあ、ごろうじあれ、俎はこの通り。また演説をしようというのはこのちっぽけな男一匹。もちろんゼウスにかけて誓ってよいがわしは断じて楯のうしろに身を隠すなどの卑怯はせぬ。ただひたすらラケダイモン人に味方して自分の意見を吐くまでだ。とはいえ懸念の種は数々ある。百姓どもの遣り口は、誰か一人のいかさま師が先生たちや国家をばいわれの有無にかかわらず賞めさえすればそれこそたちまち有頂天だ。この手に[1]かかって知らぬあいだに売ったり買ったりされてるのだ。年寄りどもの心のうちをわしはすっかり見抜いているがあの人たちの生き甲斐は判決で噛みつくことただ一つだ。かく申すわし[2]がクレオンのために去年の狂言[3]で会うた災難は骨身にこたえて忘れもせぬ。と申すのはこのわしを評議会[4]へと引きずり込み悪口雑言、舌三寸に嘘八百を並べ立てキュクロボロスの濁流みたいに騒然と罵りつづけたのだ。お蔭さまでこのわしは泥にまみれ、すんでのところでお陀仏さ。ところでまず演説開始といく前に一つごめん蒙ってできる限り哀れな姿[5]をいたしたい。（三六四）

〔ディカイオポリスはエウリピデスの作品『テレポス』で観客によく知られていた乞食姿のテレポスの雄弁の故事にちなみ、姿をやつしたのち演説にかかろうと立ち去りかける〕

コロス　なぜかように身をかわし、辞を設けて引きのばすのだ。それがしとしては、ヒエロニュモス[6]から、黄泉にあるという暗闇の蓬髪[7]の兜をおぬしが借りてこようと苦しうない。或いはまたシシュポスの知恵[8]をめぐらすもよかろう。この論議には遁げ口上の余地はないのだ。

ディカイオポリス　〔悲劇風に〕いよいよ決意を固めるべきときだ。そこでエウリピデス先生を訪ねにゃならん。

〔在の自分の家から遠路アテナイ市中のエウリピデスの家を訪ねることを示すために舞台をそろそろと歩き廻った後に背景の第二の戸口を訪ねる〕

〔玄関番の奴隷に向って〕これ、これ。

玄関番　どなたかね？

ディカイオポリス　エウリピデス先生はお宅かね？

玄関番　〔悲劇の調子を真似て〕ご不在でもあり、おいでにもなる[9]――おわかりですかね？（三九五）

ディカイオポリス　おいでもあるが、ご不在とは？

玄関番　全くおっしゃる通りで、ご老体。魂はよそに[10]お出ましで歌の文句を捜してござるがご当人はお宅の高いところで狂言をつくっておられるで。

ディカイオポリス　〔感嘆して独白〕おおまことに幸多きエウリピデス、召使までがかように聡明な応待をするとは。〔奴隷に向い〕で、あの人をちょっと呼び出してくれんか。

玄関番　〔戸口をしめつつ〕そりゃかないませぬ。

ディカイオポリス　さもあろうが……わしは立ち去りませぬぞ。一つ戸をたたいてみよう。〔戸口をたたきつつ〕エウリピデス、エウリさん。〔悲劇の口調で〕今までにも、もしや誰かに耳かされたなら、なにとぞ一つお聴き入れを。かく呼ばわるはわたし――コレイダイ[11]のディカイオポリスなる者で。（四〇六）

エウリピデス　〔家のなかから〕だが暇がない。

ディカイオポリス　せり出し[12]で出てくださるまいか？

エウリピデス　それもかなわぬ。

ディカイオポリス　そこを一つまげて……。

エウリピデス　ではせり出しでお目にかかろう。降りる暇[13]はないのだ。

〔エウリピデスせり出しで高いところに現れる〕

ディカイオポリス　エウリピデス！

エウリピデス　何てけたたましい声を立てるんだ。

ディカイオポリス　高いところでご執筆ですな。下だっていいでしょうに。どうりでびっこがたくさんできるってわけですな。ところでなぜ

そんな悲劇に出てくるような襤褸をご着用なんです。そぞろ哀れを催すお召し物ですな。なるほど乞食をたくさん出しなさるのも合点が行く。ところでエウリピデス先生、先生の両膝にかけてお願いしますが何か旧い出しもののなかから襤褸を一着拝借できませぬかな。コロスの方々に向って長広舌[1]をふるわにゃなりませぬ、演説に一つつまずいたら、命にかかわるというわけでして。

エウリピデス　どういう襤褸かね。〔壁にかかった面の一つを指しつつ〕この薄倖の老人オイネウス[2]が舞台に着て出たやつかね。

ディカイオポリス　オイネウスのどころじゃない、もっとみじめな人のを。

エウリピデス　盲のポイニックス[3]のかな？

ディカイオポリス　いや、ポイニックスのでもない。ポイニックスよりひとしおみじめな仁ので。

エウリピデス　この人はいったいどういう破れ衣がほしいんだ。乞食のピロクテテス[4]のじゃないか？

ディカイオポリス　いや、それより幾層倍か乞食らしい人のです。

エウリピデス　〔他の面を指しつつ〕じゃお前さんの欲しいってのはこのびっこのベレロポンテス[5]の着てた穢い着物かね。

ディカイオポリス　ベレロポンテスとも違います。もっともわたしの考えてる人もやはりびっこでしたが、物乞いをしておしゃべりやで、口八丁という仁でした。

エウリピデス　思い当った。ミュシアの人テレポス[6]だろう。

ディカイオポリス　いかにも、テレポスで。お願いでござんす。どうぞこの仁の襁褓を拝領いたしたい。

エウリピデス　〔奴隷に向い〕おいこの人にテレポスの破れ衣を渡してくれ。テュエステス[7]の襤褸の上でイーノー[8]の奴とのあいだにあるんだ。〔ディカイオポリスに向い〕さあ、そいつを持っていきたまえ。

ディカイオポリス　〔破れ衣を観衆に穴が見えるようにひろげつつ〕おお、森羅万象を洞見し、照覧したもうゼウス大神[9]、わしに能う限りみじめないでたちを与えたまえ。

〔破れ衣を身につけた後エウリピデスに向い〕エウリピデス先生、これをくださったご親切に甘えて襤褸につきもののあれもご無心願えませぬか。つまり頭にのっけるミュシアの帽子のことでして。〔悲劇口調で〕「実を申せば今日という今日乞食の役をせにゃなりませぬ。中身はいつもと変らぬながら、姿形を偽りまする。」見物衆はわしの正体を先刻ご存じだが謡い方のご連中は馬鹿面さげて立ち並び、わしの舌三寸に手玉にとられる、といった寸法でして。

エウリピデス　進ぜよう。〔悲劇口調で〕「そちこそは猛き心にこまかな細工をめぐらす者だ。」

ディカイオポリス　〔帽子をかぶりつつ感謝して〕先生にはよいご果報を。したが「テレポスに対して[10]はわしが心に思いめぐらす運命を。」〔衣裳の効果を欣びつつ〕しめたぞ。早くも味な文句が口をついて出るわ。ところでこのうえは乞食の杖もいただきとうなりました。

エウリピデス　〔杖を渡しつつ〕こいつを貰ったらとっとと「石造りの館よりまかり去れ[11]。」

ディカイオポリス　〔悲劇口調で〕おおわが心よ。そちの見る通り、このわしはまださまざまの小道具がなくてはならぬのに御殿から逐い払われる。さあおぬしはしつっこく食い下っておねだりをするのだ。エウリピデス先生。ランプの火で焼けほげた籠[12]を一つくださらんか。

エウリピデス　おぬしとしたことが、柳籠なぞ何に使うのか。

ディカイオポリス　何とていり用はござりませぬが、欲しうてかないませぬ。

エウリピデス　〔籠を渡しつつ〕うるさい人だな。とっととわが家より[13]立ち去りたまえ。

ディカイオポリス　これはしたり！　どうぞお仕合せに――ちょうど昔先生の母者びと[14]がさようであったふうに。

エウリピデス　もう帰ってくれんか。

ディカイオポリス　いえ、あとたった一ついただけませぬか。緑のぶっ

かけた茶椀を一つ。

エウリピデス　〔渡しつつ〕貰ったら失せるんだ。家(や)のうちがうるさくてかなわん。

ディカイオポリス　ゼウスにかけて、おぬしは識らずしてひじょうの禍(まが)事(ごと)を働いとるのだ。〔調子をかえて〕だが親切なエウリピデス先生、たった一つ、海綿のつまった土瓶[1]をくださりませぬか。(四六〇)

エウリピデス　こやつめ、わしの悲劇をすっかり溲(さら)っちまうな[2]。〔渡しつつ〕さあ、こいつを持って失せろ。

ディカイオポリス　失せましょう。だがこれは弱った。まだ一つ手に入れんでは身の破滅という品がござる。聴いてくだされ。なあ、いとも優しいエウリピデス先生。これさえ手にしたらさっさと出かけて、決して舞い戻りませぬ。この籠のなかにしおれた葉っぱ[3]をいただきたいので。

エウリピデス　全く命取りだ。〔渡しつつ〕それ。わしの狂言もみんなかたなしだ。(四七〇)

ディカイオポリス　もうたくさんで。ではごめん蒙[4]りましょう。わしとしたことが「殿様方のお気に召さぬとも心得ず」えらいお邪魔をいたします。〔立ち去りかけて〕これはしたり。まさに身の破滅だ。全計画の成否の鍵をすっかり失念つかまつった。なあ、いとも優しくお慕わしきエウリ先生、これ以上おねだりしたら地獄に堕ちてもいといま[5]せぬ。ただ一つ、これだけ、これっきりですが母者びとから山人蔘をお世話してくださりませ。

エウリピデス　おのれ無礼者め！　〔召使に対し〕「館の扉を閉める[6]がよい。」(四七八)

〔エウリピデス「せり出し」により再び背景のなかにはいる〕

ディカイオポリス　〔悲劇風の独白〕おおわが心よ。山人蔘なしに行かにゃならぬ。だがおぬしはいかに大きな争いが目の前に控えてるかわきまえとるのか。ラケダイモン人の肩を持って演説をやろうというからには。さあ、わしの心よ。進むべきときが来た。出発の線は目の前だ。動けないのか？　エウリピデスをのみこんだおぬしじゃなかったか。出かした！　さあ、わがおののく心よ。〔舞台中央の俎を指しつつ〕あそこに行って、おぬしの思う存分をしゃべったら、頭をそのうえに引き渡すのだ。勇気を出せ、さあ行くんだ。見上げたぞ、わしの心。

〔これより舞台はエウリピデスの家のところではなくなり、俎を前にしてアカルナイの老人連とディカイオポリスの問答した場面、すなわち先のディカイオポリスの家の前の場面となる。その間エウリピデスのせり出しが再び戻ったこと以外に舞台装置のうえに変化はない〕

コロス　〔驚愕を表わす韻律にて〕はて何を企てた。何をいう気だ。思うても見よ。恥わきまえぬ、鉄(くろがね)の心根じゃないか。国家の前に頸投げ出し、たった一人で衆に逆らいしゃべろうとは。したがこやつめ企てにおののく風情はいっこう見せぬ。よし！　おぬし自身の発意であれば、さっさと語るがよろしかろう。(四九五)

〔エウリピデスのテレポスの姿をしたディカイオポリス、俎を前にしてテレポスの科白をまねつつ大演説に移る〕

ディカイオポリス　観衆の皆の衆、やきもちはご無用[7]ですぞ。乞食のわしが、身のほどわきまえずアテナイ人の前に狂言[8]のなかに国家のことを弁じ立てても。狂言とても正邪の別は心得とりまする。いささかお耳に痛かろうが、わしはこれから正しいことを開陳[9]いたそう。というのは、ここではクレオンめも、外国人を前にして国家に毒づく、などと咎め立てはできぬはずだ。これはレナイオンの競演[10]ゆえ、見物とてもわれわれだけだ。外国人はまだ姿を見せぬ。貢租[11]も到着せぬし、同盟市の方々とてご同様だ。われわれは今籾(もみ)をえりわけたようにさっぱりしとる。居留外人などは、わしに言わせりゃ、市民の麸(ふすま)さ[12]。さてわしとてラケダイモン人を憎むことは決して人後に落ちぬ。されば、タイナロスにいます神ポセイドン[13]が一揺りゆすってきゃつらの頭上に家をぶっつぶされますよう。と申すわけは、わしの葡萄畠とてやはりき

やつらのお蔭で伐り倒された。しかしだ、この演説をお聴きの方はみなわしの友だちと思うが、われわれはなぜこんなことでラコニア人を責め立てるんだ。われわれのうちの或る者どもが――国家がというのではない。この点お忘れないように――国家のことを言ってるのじゃないが、性の悪い小童、造りそこねの、値打ちもない、刻印とは違った贋金野郎がメガラ人の小袖[1]をうるさく訴えおった。すると胡瓜や仔兎や仔豚やにんにくや塩の塊[2]を見つけ次第こいつはメガラの品だと極めつけられ、即日競売に付せられた[3]。これはまだ小さなことだし、この土地での出来事だった。しかるに売女のシマイタ[4]をコッタボス遊び[5]に夢中の若い衆がメガラまで足をのばして盗み出しおった。するとメガラ人どもがこの屈辱にいきり立ち仕返しにアスパシアから売女二人を[6]盗み出した。かくて戦争の緒が全ヘレネスに三人の淫売婦[7]からひらかれた次第だ。そこでオリュンポスのペリクレスどのが稲妻を光らせ[8]雷鳴を轟かせてヘラス世界をひっかき廻し、酒宴の歌のように書き上げた法律を発布せられた。「メガラびとは陸にも市場にも、はてはまた海上にも陸上にも留まるべからず」と。かくてメガラ人どもは一歩一歩と飢に迫られ[9]、淫売婦にはじまるかの決議をわれわれがひっくりかえすようラケダイモン人にもとめたのだ。だがわれわれはあの人たちの度重なる懇願を聴き容れなんだ。かくしてたちまち楯の打ち合う響きとは相成った。ひとあるいは言うであろう。「彼ら[10]はかく振舞うべきではなかった」と。しからばいかに振舞うべきだったろうか、お訊ねいたしたい。さてもしもラケダイモンの某が船を漕ぎ出してセリポス人[11]の仔犬を告発して公売に付したならおぬしがたは「館のうちに[12]て座視したであろうか。いや、それはまことに思いも寄らぬこと。」おぬしがたは必定ただちに三百艘[13]の軍船を海に浮かべ、市街に満つるは兵卒のどよめき、艦長[14]をとり巻く叫び声、日当の支給に、女神像[15]の塗り変え、兵糧の割当に、ざわめき返る列柱廊[16]、革嚢、櫂の緒、水甕の買い手、にんにく、オリーヴ、網袋入りの玉葱、花冠、ひしこ、笛[17]吹き女につかみ合いだ。船渠に充つるは櫂板の鉋かけ、木釘を打つ音、櫂穴への革紐つけ、笛に楫取り、呼子に口笛だ。定めしこう振舞ったとわしは信ずる。それとも「テレポスならそうはせなんだ」とでも言うのか。しょせんおぬし方は分別が足りぬと言うわけだ。

〔ディカイオポリスの大演説によりコロスが主戦派と和平派の二つに分裂する。全体の音頭取りが主戦派の第一セミ・コロスを代弁し、和平に傾いた第二セミ・コロスから一人が臨時の音頭とりとなって立ち廻る〕

第一セミ・コロスの長　〔皮肉と軽蔑の調子で〕いやお説の通りだ、すれっからしの恥さらしめ！　乞食の身をもってわれらにあえて雑言放つか？　誰それがたとえ告訴を業としたとて、われらに向いお前が非を鳴らすか？

第二セミ・コロスの長　ポセイドンにかけて申すが、あの男の言うところはみな正しいことばかり、一つの嘘言も混っておらぬ。

第一セミ・コロスの長　〔仲間の異議に当惑して〕さらば申そう、たとえ真の理にもせよ、この男めが述べ立てるべき筋合であろうか？　だがかかる放言行なったうえは、ただごとではすむまいぞ。〔ディカイオポリスを擲たんとして彼に近寄る〕

第二セミ・コロスの長　これこれ。おぬしどこへ行きなさる。お留りなされい。この男を打擲するにおいては、おぬし自らつり上げらるるぞ。

〔オーケストラにおいてつかみ合いとなる。第一セミ・コロスの長は第二セミ・コロスの長によりかかえ上げられる〕

第一セミ・コロスの長　〔背景のラマコスの家に向い〕おおラマコス。眼光稲妻のごときお方。ご光臨あってお助けを！　兜にいかめしい羽根うちつけたラマコス閣下。おおわれらが友にして[18]同族のお方。あるいは誰か部隊長でも、将軍でも城攻めの名人でも、急いでお助けを！　腰を捉えられてしもうた！

〔ラマコス背景の戸口の一つより登場。彼は部隊長の服装で、三重の巨大な羽根をつけた兜をかぶりゴルゴンの頭の図を表わした

楯を持ち、緋の外套をつけている〕

ラマコス 〔大声にて〕戦いの雄たけびは、どっちからわしの耳にとどいたのかな？ どちら側を援けりゃよいのだ？ どちらに味方して喧嘩の一役を買えと言うのだ？ 楯容れのなかからゴルゴン(1)の目を覚ましたのはいったい誰だ。

ディカイオポリス 〔皮肉に〕おお英雄ラマコス閣下、その前立てに伏兵ども！

第一セミ・コロス おおラマコス殿。この男はわが国をば先刻から頭ごなしに悪口いたすではござらぬか。

ラマコス 〔ディカイオポリスに向い〕「貴様乞食の分際にてかようのことをぬかすか(2)？」

ディカイオポリス おお英雄のラマコス殿。何分にもお許しのほどを。乞食の身をもって口を開き喋々いたしましたれど。

ラマコス して、お前はわれらのことを何と言いおった？ 一つ話してみんか。

ディカイオポリス 〔皮肉に〕とんと想い出せませぬ。閣下のいかめしい出で立ちにめまいいたしました。お願いでござります。〔ラマコスの楯の図を指しつつ〕なにとぞそこなる妖怪(3)をお遠ざけのほどを。

ラマコス そら。

ディカイオポリス ではそれを裏がえしに立てていただきたい。

ラマコス 〔楯の凹面を示しつつ〕ごらんの通り。

ディカイオポリス 〔胃の悪い者が羽根を使って吐くのを装い〕次にはその兜の前立てから羽根を一本くださりませ。

ラマコス さあ、柔かい羽根を進ぜよう。

ディカイオポリス わしの頭をつかまえてくださされませ。吐き気を催してまいった。その前立てはどうも性に合いませぬ。

〔羽根を使って吐こうとする〕

ラマコス お前さん、何をする気だ。この柔かい羽根で吐こうってのか？ (五八七)

ディカイオポリス これが柔かい羽根ですと！ いったいそりゃどんな鳥の羽根ですかな？ 法螺吹き鳥のとでも言うのか？

ラマコス 畜生！ くたばっちまえ。

ディカイオポリス おどしてもはじまりませんぜ。ラマコス閣下――こいつは力ずくでは決められませぬ。力自慢をなさるのなら、なぜわしを裸にしなさらぬ(4)。〔ラマコスの衣の前をひろげて革製の偉大なる男根を示しつつ〕見事な武器をお持ちのくせに。 (五九〇)

ラマコス お前は乞食の分際をもって将軍(5)についてかかる言葉を吐くか。

ディカイオポリス わしが乞食だと？

ラマコス そんならいったい何者だ。

〔ディカイオポリスは恐らくここでテレポスの襤褸(ぼろ)を脱ぎ捨て、平素の姿にかえる〕 (五九四)

ディカイオポリス 何者だと？ 有能なる市民で猟官の輩じゃない。開戦このかた軍隊一点ばりだが、おぬしは開戦このかた給料一点ばりじゃないか。

ラマコス 〔誇らしげに〕わしは皆から選挙されたのだからな。

ディカイオポリス 三羽の郭公鳥(6)によってな。それにうんざりしたればこそわしは和議を結んだのだ。白髪の老人までが部隊に編入され、おぬしのような若者は義務をのがれてある者はトラキアで三ドラクメ(7)の日当にありついとる。ティサメノス(8)やパイニッポス(9)とか無頼漢(ならずもの)のヒッパルコスの手合がそれだ。ほかの奴らはカレスのお供をしたり、カオネス(10)のとこをほっついてる。ゲレトテオドロスとかディオメイアの法螺吹き(11)どもがそれだ。また別の者どもはカマリネやゲラや可笑市(げらげら)(12)に腰を据えてる始末だ。 (六〇六)

ラマコス その人たちは挙手で選ばれたんだぜ。

ディカイオポリス ところでお訊ねいたしたいが、おぬしたちはいつも何かにつけて日当を貰っとるが、〔コロスを指して〕この人たちは誰も貰わぬのはどうしたわけかな。さあ、「粉炭氏(こなずみ)」、ほんとうの話がおぬしは白髪頭の今日までに使節に出たことがおありかな？ 頭を振っ

てる。[1]分別もあるし働きもあるのだがな。アントラキュロスとかエウポリデスとかプリニデスの諸君はいかが？　あんた方のうちで誰かエクバタナやカオネスを見たものがあるかな？　見ぬ、と言うとる。しかるにコイシュラ姫のご一門[2]やラマコスはごらんになった。この方々は組合の掛け金[3]や借金を払われんので、つい先刻、まるで夕方の洗い水を流すときのように、友だち仲間が「退いた、退いた」をお勧め申したのだが。

ラマコス　おお民主政治よ。かようなことに我慢がなろうか。

ディカイオポリス　ラマコスが日当を貰わぬとあっては、たしかに我慢がなるまい。

ラマコス　だがわしは全ペロポネソス人を相手にとことんまで戦い抜き、至るところであるいは船を浮べ、あるいは歩兵によって力の限り敵を悩ます覚悟だ。　〔ラマコス退場〕

ディカイオポリス　わしの方は全ペロポネソス人並びにメガラ人、またボイオティア人に対し、わし一人と商売取引をなしラマコスとは行なわぬよう布令を出すとしよう。

〔ディカイオポリス退場。かれにすっかり説得されたコロスは活溌な舞踊をするために上衣を脱いで普通の市民の姿になり、観客の方に向き直る〕

コロスの長　あの男は遂に議論で勝を占め、和議についても皆の衆を説得[4]いたした。われらは衣を打ち脱ぎつつアナパイストス[5]の調べを歌おうよ。

　われらの師匠[6]が狂言の謡い手を指導されてこの方、自分の腕前を自慢するとて見物衆の前におでましのことはいまだござらぬ。しかし尻の軽いアテナイ人を前にして、敵の奴らが先生をば、われらの国家を茶化すとか、皆の衆を辱めるとか、しきりに悪口いたすにより、後悔[7]も早いアテナイ人に一席弁解したいと仰せられます。お師匠さまのおっしゃるには、狂言作者というものはあんた方にたいへんな恩を施してる。先生のおかげで、あんた方は外国人の弁舌[8]にすっかりたぶらかされたり、追従言われて夢中になったり、骨なしの市民になったりするのをやっと免れてる、というわけでさ。さきごろ諸市[9]からのお使者たちがあんた方を騙そうとてまず「菫の冠つけたる」[10]と形容いたした。誰か一人がこう呼べば、即刻「冠」ゆえに尻が落着かぬありさまだった。もしも誰かがあんた方に胡麻をすろうとして「輝けるアテナイ」と言おうものなら、サディン向きの「輝ける」の一語で何でもかんでも手に入れたろう。こういったことで狂言作者はあんた方にえらくお礼を言われてよいのだ。民主政下の諸市の民衆のほんとの状を暴露したのもそのお手柄の一つでさ。さればこそやがて諸市の人たちが貢租を納めにあんた方のところへまいるであろうが、その人たちはアテナイで危険を冒して正論を吐いた天下無双の作家へのお目通りを希望いたしておる。彼の勇気の評判はすでに遠くに響いたので大王までがラケダイモン人の使節[11]を訊問のみぎりに、まず手初めに尋ねられたは、海上を支配するはいずれの側か、それについては、この作家がいずれの側をさかんに難ずるかであった。そして仰せらるるには「朕惟うにかかる人物を忠言者にもつ人々こそ必ずや善良にして戦勝の機多かるべし」と。かかる次第でラケダイモン人は諸君に平和を申し入れ、かつはアイギナ[12]を要求してるが、本心明かせばあの島などはどうでもよいので、ただこの作家を手に入れたい[13]のさ。だが絶対に渡してはなりませぬぞ。先生の狂言こそは正義を守るものだから。先生が進んで約束されるには、諸君の幸福を希うがゆえに[14]いろいろと善いことを訓えてやろうが、追従言ったり、金握らせたり、かついだり、果ては不埒なまねしたり、妙な讃辞を呈するなどはもってのほか、ひとえに最善を教えてつかわす、と。

　こんな次第でクレオンはわしに向って
あらゆる策をやってみるのが結構だ。

善と正義が味方だからには
国事についてあいつみたいに
腰抜けだとか淫らな奴とか
言われる気遣いは毛頭ござらぬ。

第一セミ・コロス　いざ来ませ(1)。アカルナイなる芸神、燃えさかる火の
　勢もて。
譬うれば櫟の炭より団扇の風に煽られて、火花の跳びはねるときの
　ごとく。
小魚はわきに横たわり、一人はタソスの名産なる輝くソース(2)を調合
し、
一人は麦粉を捏ね廻す(3)。かかる折の炭火のごとくに
燃え出でつつ、心地よき田舎人の節廻し(4)を携えて、
汝と同じ生まれなるわがもとへ来りたまえかし。（六六五）

昔気質のわれら年寄りが国家に対し小言申そう。われらのかつて打ち立てた海戦の勲にふさわしくこの老齢になり諸君から扱われると思いきや、かえってひどい虐待だ。諸君はわれら年寄りどもを訴訟のなかに巻き込んで、嘴の黄色い弁者たちから嗤われ放題にしとるじゃないか。もちろんわれらは今日では取るに足らない耄碌者、たとえば古びた楽器のよう、ひたすら杖を「転ばぬ先のポセイドン(5)」と頼っておる。寄る年波に口ごもりつつ、かの石の前(6)につっ立って裁きの暗い影(7)を眺めるばかりじゃ。すると一方若者は提訴の役にありついて相手を捉えたが最後、たちまち円転滑脱の言葉でわしらを打ちのめす。それからわしらを引きずり上げ、言葉のわなで訊問し、ティトノス老人(8)を支離滅裂にし、周章狼狽させるのだ。こちらときては老齢のおかげで口をもぐもぐ、裁きに敗れてすごすご立ち去る。それから後は泣きの涙で、友だち仲間に言うことにゃ「棺桶買うとて貯めといた金額だけ罰金うけて出てまいった」と。（六九一）

第二セミ・コロス　白髪頭の老人を漏刻(9)のわきでくたばらせるとはまことにもって穏かならぬ。その昔おぬしらと幾多艱難をわかち合い、男の熱い汗水を拭うたもそも幾度か、マラトンにおいては国家のために勇戦敢闘したものだ。さよう、マラトンに出陣のみぎりには敵をみごとに逐い散らしたが今日(10)は無頼漢にひどく逐いつめられ(11)、あげくの果てはつかまっちまう。これに対してマルプシアスの手合は何と答弁できようか？（七〇一）

ツキュディデス(12)のような背の曲った老人がスキュタイの荒野(13)に、と申すのはこの饒舌弁士のケフィソデモス(14)にひっつかまってまいってしまう(15)とは何たることだ。それゆえわしはあのご老体が弓手風情に小突かれるのを見て、同情のあまりそっと涙を拭うたものだ。あの仁こそは、デメテル(16)にかけて申すが、あのツキュディデスでござったころには女神アカイア(17)の御心にも逆ろうたであろう豪の者、まず手初めには十人のエウアトロス(18)をねじ伏せて(19)ひとたび叫べば三千の弓手をもその号令になびかせ、また彼の父の一族を射たおしたでもあろうはず。しかし年寄りにどうしても高枕で眠らせぬと言う以上、せめて彼らの裁判は別扱いと決議されたい。さすれば老人を訴うる弁士としては歯抜けの老人、片や若者を訴うるは、若衆(20)におしゃべりにクレイニアスの息子(21)というわけだ。そして今後は年寄りは年寄りで、若者たちは若者が追放するとし、逃げた者には科料といたそう。（七一九）

［ディカイオポリス再び舞台に現れ、平和の象徴として私設の市場を設ける。市場の境界として杭を数本立てる。ディカイオポリスは市場の目付け役を象徴する三本の大きな革紐を手にしている］

ディカイオポリス　［杭を指しつつ独白］これがわしの市場の境界じゃ。ここでペロポネソスの者は誰でも、またメガラ人もボイオティア人も

取引できるのじゃ。ただしわしだけに売るので、ラマコスにはごめんという条件つきだ。そして市場の目付け役[1]としてこのレプロイ産の、籤に当った[2]三本の革紐を任命する。ここには告訴常習者[3]は立入りご法度だ。その他誰でも密告者風情は足を入れさせぬ。わしは和議締結の碑文[4]を持って来て市場のうちの目につくところに立てるとしよう。

〔ディカイオポリス退場。一人の大きな袋を背負ったメガラ人が二人の幼い娘を伴ってオーケストラの左手より登場。彼らのまさに飢死に瀕していることがその容貌から見られる。父はメガラの方言で話すが、その文法は純粋のドーリックではない〕

メガラの男　メガラ人どもに懐しいアタナイ[5]の市場。ご機嫌よう。友情のゼウスさまにかけて[6]わしはお前さまを母者びとのように慕うており[7]ました。このみじめな父親の可哀そうな餓鬼ども、さあこっちに上るんだよ。そしたらひょっとおまんまにありつけることもあろうからな。さあ、わしの言う[9]ことにしっかりお腹をかして[8]聴くんだよ。どっちがええかね。売られんのとお腹がぺこぺこなのと。

娘　売られんの。売られんの。

メガラの男　わしもそう思う。だがお前らみたいなものを買ってわかりきった大損をするほどの鈍物がいったいいるかな。だがわしにも一つメガラ風のうまい工面[10]がある。お前たちの姿を変えて豚っ仔を持って来たと触れ込むとしよう。〔豚の蹄や鼻のついた皮を渡しながら〕この仔豚の蹄ぐるみひっかぶって[11]いい種の豚っ仔のふりをするんだ。〔おどかすように〕ヘルメスさまにかけて、売れんでもういちど家に帰ったら、ひもじさをいやというほど味わうだろうて。そいからこの豚の鼻もくっつけて〔袋の口をあけながら〕お次にはこの袋のなかにはいるんだ。そいからぶうぶう鼻を鳴らしたり、コイコイと啼いて密儀[12]に使う豚っ仔の声を出すんだ。私はディカイオポリスがどこにいるか触れ役で呼んでみよう。〔呼出し役の声色をまねつつ〕ディカイオポリス！　豚の仔を買わんか。〔ディカイオポリス登場〕

ディカイオポリス　何だ？　メガラのひとだ？

メガラの男　商売のためにまいったんで。

ディカイオポリス　どんなあんばいかね。

メガラの男　朝から晩までいろりのはたで飢えとりますわい。[13]

ディカイオポリス　〔「飢えてる」を「飲んでる」と聞きちがえて〕笛吹きまでいたら、ゼウスにかけて、定めし申し分なかろうて。ところでメガラ人がたは、そのほかには何してござるな？

メガラの男　ほかに何とていたし方もござりませぬ。私どもが故郷から出てまいった折にも先議役[14]の方々[15]がどうしたらいちばん手っ取り早く、いちばんみじめにくたばれるかを国家のために相談の最中でござった。

ディカイオポリス　じゃ、あんたもおっつけ娑婆のうるささからぬけるさ。

メガラの男　ほんにさようでござります。

ディカイオポリス　ほかにメガラの話はないかね？　小麦の値ごろはどんなかね？

メガラの男　わしらのとこじゃ神様のように崇められとりますで。

ディカイオポリス[16]　じゃ塩は持って来たかな。

メガラの男　塩田はおぬし方が管理してござるのじゃなかったかな？

ディカイオポリス　にんにくもないかな？

メガラの男　にんにくですと？　おぬし方は、いつも侵入する折[17]にまるで野鼠みたいにへらの先でそいつの頭を掘り出しなすった。

ディカイオポリス　じゃいったい何を持って来たのかね。

メガラの男　密儀のための仔豚でござんす。

ディカイオポリス　そりゃ結構、一つ見せて貰おうか。

メガラの男　〔袋のうちから豚に扮した一人の娘を引き出しつつ〕みごとなもんで。なんなら持ち上げてごらんになって。むっちりとみごとに肥えとりますで。

ディカイオポリス　〔手を触れて娘であることに気づいて〕こりゃそもそも何たることだ。

メガラの男　ゼウスさまにかけて、仔豚に違いござんせん。

ディカイオポリス　何だと？　どういう種類の仔豚かな？
メガラの男　メガラ産でして。それともこやつは仔豚じゃないとでもおっしゃいますかな？
ディカイオポリス　どうもわしには合点がまいらぬ。
メガラの男　こりゃ恐れ入った。〔観衆に向って〕どうでしょう、このひとの物を信じないことと言ったら、これが仔豚じゃないと言い張ってござる。〔ディカイオポリスに向い〕ですが、お望みなら、一つ麝香草で香をつけた塩を賭けましょうや――こいつがギリシア語で申す仔豚でないかどうか。
ディカイオポリス　いやこいつは人間の[1]――
メガラの男　ディオクレス[2]にかけまして、そりゃわしのものに相違ない。おぬしは誰のだと言いなさる？　鳴くとこを一つお聞かせしようか。
ディカイオポリス　そりゃ願ってもないこと。
メガラの男　〔娘の一人に向い〕仔豚よ、早く声を出すんだ。鳴かん気かな。こん畜生、だまりこくって。ヘルメスさまにかけて、もいちど家さ帰すぞ。
娘　〔豚の声を真似て〕コイ、コイ。
メガラの男　豚の仔でござんしょう？
ディカイオポリス　どうやら仔豚らしうなった。したが五年も育てれば立派な女陰[3]と相成ろう。
メガラの男　ほんに、きっと生みの母親に似ることでござんしょう。
ディカイオポリス　したがこりゃ犠にはならぬわい。
メガラの男　何とおっしゃる。何でお供えになりませぬ？
ディカイオポリス　尻尾がござらぬ[4]。
メガラの男　まだ若いからで。育て上げれば大きく太くて、赤い[5]尻尾がつきましょう。〔別の娘を袋から出しつつ〕飼おうっておぼしめしなら、こりゃいい仔ですぜ。
ディカイオポリス　やあ、この女陰は片方のに瓜二つだ。
メガラの男　母親も父親も全く同じなのでして。こやつに肉がついて柔かい毛が生え出したらアプロディテへのお供え[6]にはうってつけでござんす。
ディカイオポリス　だがアプロディテには仔豚は供えぬものだが。
メガラの男　仔豚がアプロディテにいけませぬと？　あの女神だけは格別でござんす。それどころか、この仔豚どもの肉を焼き串に刺して召し上ったら、その味はこたえられませんや。
ディカイオポリス　もう母親なしでも食べるかね。
メガラの男　ポセイドンにかけて、違いありませぬ――それに父親がおりませんでも。
ディカイオポリス　いちばんの好物は何かな？
メガラの男　与るものは何でも食べまさあ。ご自分で訊いてごらんなされ。
ディカイオポリス　仔豚よ、仔豚よ。
娘　コイ、コイ。
ディカイオポリス　「豌豆[7]」も食べるかな？
娘　コイ、コイ。
ディカイオポリス　ピバリスの「干無花果[8]」はどうだ？
娘　コイ、コイ。
ディカイオポリス　「干無花果」と聞いて二匹ともえらくはっきり鳴きおった。さあ、仔豚どもにやるのだ、誰か家のなかから干無花果を持ってまいれ。だがほんとうに食うかな？　〔無花果を与えて、娘たちの貪り食うのを見て〕こりゃ呆れた[9]。まあ、なんとがつがつしとるんだ。おお、畏れ多いヘラクレスさまもご照覧あれ。この仔豚はどこの産かな。どうやら紀[10]の国の生まれらしいて。
メガラの男　〔独白〕だが干無花果をすっかり頂戴したわけじゃないて。ここに一つわしも拾いました。〔男もこっそりそれを食う〕
ディカイオポリス　お世辞抜きに二匹とも育ちの良い四足だ。いくらで買おうかね。一つ言ってくれんか。
メガラの男　片方のはにんにくの一束、も一つの方は、よろしければ、

五合[1]の塩では。

ディカイオポリス　それで買うとしましょう。ちょっとここに待ってくだされ。

メガラの男　心得ました。商いの神ヘルメスさま、わしの家内もそれにわしの母者びともこのように手放せますように[2]。

〔ディカイオポリスは塩とにんにくとを取りに家のうちに入る。入れ代りに告訴常習者が登場して取引成功を喜んでいるメガラの男をびっくりさせる〕

告訴常習者　こらお前、いったいどこの人間だ。

メガラの男　メガラの仔豚商人で。

告訴常習者　じゃおれはこの仔豚と貴様とを敵として訴えるぞ。

メガラの男　これこそは他でもない、われわれの禍のもとと相なったご本尊[3]の登場だ。

告訴常習者　メガラの男だなどと大口たたいて後で泣くぞ。その袋をよこさんか。

メガラの男　ディカイオポリス、ディカイオポリスさん、訴えられちまう。

ディカイオポリス　〔家のなかから再び現れる〕相手は誰だ？　あんたを訴えるってのは。〔革の鞭をとり上げて〕市場の目付けども、告訴で飯を食う野郎を戸口[4]からしめ出さんか。灯心もなしにどういう料簡であの人を訴えようってんだ。

告訴常習者　敵を訴えてるだけじゃないか。

ディカイオポリス　〔革の鞭をもって告訴常習者を打ちつつ〕痛い目見るぞ。とっとと失せてよそで告訴するがええ。

〔告訴常習者逃げ出す〕

メガラの男　アタナイちゅうとこにゃえらい悪党がいるもんだな。

ディカイオポリス　心配はご無用、これメガラの人。おぬしが仔豚売った代金としてこのにんにくと塩を受け取って安穏にお暮しなされ。

メガラの男　だがわしらの国には「安穏」はござんせん。

ディカイオポリス　こりゃいらぬこと願うたわけだが、わしの身にその願いがかないますよう。

メガラの男　〔退場しつつ〕さあ仔豚どもよ。お父っつぁんがいなくとも誰かがくださったら塩添えた麦菓子をいただいてみるんだぞ。

〔メガラの男退場。ディカイオポリス仔豚とともに家に入る〕

コロス　仕合せ目出度きこの男。

〔コロスの長に向い〕その企てが上首尾に進む様子を
ごろうじないか？　この男こそ
市場に神輿を据えたまま、
たんまり収入があるだろう。
クテシアスやその他の
告発者流がまぎれ込もうと
泣き面せずには坐れまい。

また食べ物の買占め人がおぬしに損さす憂いもないし、
プレピスめが自分の極道を棚に上げ[5]、おぬしに濡れ衣
きせもせにゃ、クレオニュモスと押し合うこともない。
汚れに染まぬ上衣を羽織って、おぬしは市場を練り廻す。
ヒュペルボロス[6]に鉢合せしたとて
裁判沙汰にはなりはせぬ。

間男風に剃刀で頭を剃った[7]クラティノス[8]が、
市場でおぬしに会ったとて、近寄って来るおそれもない。
奴こそ、これをたとえれば、極悪非道のアルテモン[9]。
歌謡の道にゃ素早いけれど[10]、
鼻もちならぬ腋臭[11]のにおいで
牡山羊の子種と誰にもわかる。
なおまた悪党の親玉のパウソン[12]とてもおぬしに向い

市場でからかうわけには参らぬ。コラルゴス(1)区の恥さらし、
悪に浸ったリュシストラトス(2)、
月に三十日の余も
震えがとまらず空き腹かかえた
あの仁だとてご同様。（八五九）

〔一人のボイオティア人多くの荷を担ぎ、さらに一人の荷担ぎの奴隷をつれて登場。また彼らのつれて来たボイオティア人の笛吹きども登場〕

ボイオティアの男　〔荷をおろして〕ヘラクレスもご照覧あれ(3)、肩の痛むにゃ参ったわ。〔奴隷に向って〕イスメニアス、薄荷を静かにおろすんだぞ。さあ、おぬしたちテーバイからついてまいった笛吹きがたは角笛(4)とり出し「犬の尻(5)」を一つ吹いてくだされ。（八六三）

〔笛吹きども騒々しく吹き立てる〕

ディカイオポリス　〔家のなかから現れて〕いまいましい、止めんか。蜂どもは外へ行った行った。このくたばりぞこない、おまけにカイリス(6)流のぶんぶん唸る蜂ども(7)はどこからわしの戸口に飛んで来おった。

ボイオティアの男　イオラオスにかけまして、どなたさまか存じませぬが、欣んでやめさせましょう。奴らはテーバイからわっちの後ろで吹き立てまして薄荷の花を地べたに吹き落しちゃいました。ところで、何ぞお望みの品がありましたら、わっちの持って来た品のなかから、鶏でも、四つ翅(8)でも、一つお買いになってくだせいまし。（八七一）

〔笛吹きども立ち去る〕

ディカイオポリス　〔態度を改めて〕おお、ようこそ。饅頭食いのボイオティアの仁。何を持って見えたかね。

ボイオティアの男　一口に申せば(9)、ボイオティアの名物いっさいがっさいでござんす。まよらな、薄荷、葦莫蓙、灯心、野鴨、赤鴉、鷓鴣、黒鴨、千鳥、かいつぶり。

ディカイオポリス　おぬしはまるで鳥追いの木枯し(10)のようにこの市場に現れたな。

ボイオティアの男　それにまた家鴨、兎、狐、土竜、猬、猫、穴熊(11)、貂、川獺、コパイス湖(12)の鰻も持って来やした。（八八〇）

ディカイオポリス　おお、他人のために涎のたれる珍味をもたらした仁、ご持参とあらば、一つ鰻の尊顔を拝ませていただきたい。

ボイオティアの男　〔籠をあけつつ〕「コパイスの湖に棲む五十人の乙女らのもっとも年たけしもの(13)」そこから出て、よそのお方にご挨拶だ。

ディカイオポリス　おお、おぬしこそはいとしの君、久しう恋い焦がれた女(14)、狂言の謡い手どもの憧れの的、してまたモリュコス(15)の大好物、ようこそおいでなすった。召使どもさあここへ焜炉と団扇とを持ち出すんだ。そら、お前たち、このいちばん立派な鰻をじっくり拝見しないか。六年の年月恋い焦がれたのがやっとご到来だ。お前らも一つご挨拶に及ばにゃ。炭はわしがこの珍客のためにお前らにつかわすといたそう。さあ、そいつを出すんだ。「死んだ(16)とてわしは大根おろしを添えたおぬしの蒲焼きからは離れまいぞ」（八九四）

ボイオティアの男　だがこいつのお代はどうなりますんで。

ディカイオポリス　そいつは市場の税金として納めてもらうんだな。ところで、お訊ねしたいが、他の品も売りなさる気かな。

ボイオティアの男　はい、そりゃいっさいがっさい。

ディカイオポリス　それじゃ値はいくらにつけなさる。それとも何か別の品をここからあちらに持って行くか。

ボイオティアの男　さよう、アタナイにゃあってボイオティアにゃねえもんを。（九〇〇）

ディカイオポリス　パレロン(17)の小鰮か瀬戸物(18)でも買って行くか。

ボイオティアの男　小鰮か瀬戸物だって。そりゃ故国にもござんす。わしらがとこになくて、ここにゃたんとあるものちゅうと。

ディカイオポリス　読めたわ！　告訴気違いめを瀬戸物みたいに縛って行くさ。

ボイオティアの男　二柱の神(19)にかけて、そりゃえらい儲けになりまっせ。

悪知恵でいっぱいの猿を買うたも同然ですからな。

〔新たに告訴常習者ニカルコス登場〕

ディカイオポリス　噂をすれば影とやら、ニカルコスの奴が告訴の種をさがしに来おった。

ボイオティアの男　こいつ体(なり)は小せいな。

ディカイオポリス　したが総身悪知恵で固まっとる。

ニカルコス　こりゃ誰の品物だ。

ボイオティアの男　わっちのでがす。テーバイから来やした、デウスさまもご照覧あれ。

ニカルコス　わしの仕事はこの品々を敵(かたき)として訴えることだ。

ボイオティアの男　ぜんたいどんな目にあいなすったら、こんな鳥ども相手に戦争やいさかいを仕掛けなさる。

ニカルコス　そのうえにお前も訴えるぞ。

ボイオティアの男　いったいわしにどんな恨みがあんなさる？

ニカルコス　話してつかわそう。はたの者にも納得のいくようにな。

〔裁判の口調で〕お前は敵国から灯心を輸入しておる。

ディカイオポリス　〔皮肉に〕[1]すると灯心ゆえに告発するのか。

ニカルコス　これが船渠(ドック)を焚(や)かぬとは限るまい。

ディカイオポリス　船渠、灯心？

ニカルコス　いかにも。

ディカイオポリス　どうすりゃそうなる？

ニカルコス　誰かボイオティア人がかぶと虫にそいつを結びつけて火をつけたうえで船渠(ドック)に送りこむかも知れん。大きな北風の日を選んで、水路を通じてな。そしたらいちど船に火がついたが最後一瞬にしてぜんたい火の海だ。

ディカイオポリス　くたばりぞこないめ！　かぶと虫と灯心で火の海だと！

〔ニカルコスを革紐で打つ〕

ニカルコス　証人を呼ぶぞ[2]！

ディカイオポリス　〔奴隷に向い〕奴の口を縛っちまえ。

ボイオティアの男　藁屑をくだせいまし。一つ包んでやりやしょう。瀬戸物みたいに運ぶうちにこわれちゃいけねえから。

〔ディカイオポリス、ボイオティア人、召使の奴隷力を合せてニカルコスに猿轡(さるぐつわ)をし、縛り上げ、藁で包む。その間に合唱〕

コロスの長　しっかり縛れ、善い男、
お客のために、その品を。
運ぶあいだに
こわさぬように。

ディカイオポリス　そいつは先刻ご承知だ。
べちゃくちゃしゃべるが、ひびが入り
いやな音(ね)を出す[3]この野郎は
神々からも嫌われる。

コロスの長　そいつは何に使うのかい。

ディカイオポリス　万事に役立つ容れ物さ。
悪事の混合器(クラテール)[4]、訴訟の擂り鉢。
会計報告を照らして見せる
燭台にもなりゃ、騒動を
掻き廻すための平鉢[5]だ。

コロスの長　こんな器を
家(や)のうちで
毎日平気で使っておらりょか、
しょっちゅうこんなにがたぴしするのを。

ディカイオポリス　そいつときたら、なあおぬし、頑丈至極、
足を捉えて頭を下に
吊るしたところで
こわれる心配はご無用だ。

コロスの長　〔ボイオティアの男に向い〕そいつはおぬしに何よりだ。

ボイオティアの男　とにかく、わっちは収穫[1]をいたしやしょう。

コロスの長　さあご珍客
　おぬしの今言うた収穫に
　重宝至極の告訴気違いを一枚加えて
　腰巾着にしなさるがええ。

ディカイオポリス　このくたばりぞこねを縛るにゃいかい骨折った。〔ボイオティアの男の背にニカルコスを背負わせつつ〕さあ、ボイオティアの仁、瀬戸物を受け取って持ち上げなされ。

ボイオティアの男　〔自分の奴隷に向い〕イスメニアスどん、さあこっちへ来て肩をさげるんだ。

ディカイオポリス　どうか取扱いに気を配ってお宅までお運びなされ。まったくの話が、ひびだらけの品を運ぶのだからな、それでも――したがこの荷を運べばきっとご利益がありますて。つまり告訴気違いどもについては、お仕合せというわけですわい。

〔ボイオティアの男とその奴隷退場。ディカイオポリス己の家にはいる。一人の召使がラマコスの家から出て来る〕

ラマコスの召使　ディカイオポリス！

ディカイオポリス　〔再び戸口から現れて〕何だ。何で呼んどるんだ。

ラマコスの召使　なぜですって？　ラマコスさまがあなたに対しこの一ドラクメでコエスの祭[2]への鶫を分けてくれるよう、また、三ドラクメでコパイス湖の鰻を、とのご下命です。

ディカイオポリス　鰻をご所望のそのラマコスとはどんな方かな。

ラマコスの召使　あのおっかない、牛皮の楯を手に、ゴルゴンを振り廻し、三つの影打つ前立てをゆすぶるお方で。

ディカイオポリス　ゼウスさまにかけて、ごめんこうむろう。わしにその楯をくれたとてな。塩漬魚[3]の上に前立てをゆさぶるがええわ。大きな声でも立てようものなら市場の目付けを呼ぶぞ[4]。わしは自分のためにこの品々を持って「鶫や黒鳥の翼にうち乗り[5]」家のうちに引き取りましょう。

〔ディカイオポリス鳥や獣を両腕にかかえて家のうちにはいる〕

第一セミ・コロス　ごろうじあったか、おお国をあげての皆の衆、このところなる分別男が、衆に抜き出たこの知恵者が、和議を結んだばっかりに、種々の品を取引するのを。家で使うて重宝な品も、温めて食うに向く品々も、一つ残らず手に入れた。ありとあらゆる財宝が、おのずとこの仁に集るのだ。わしもこれから「戦争」は玄関払い[6]と相決めた。こやつがわしのそばに身を横たえてハルモディオスを唄うなどとは真平ごめんだ。なぜならこやつは酒乱の性で、ひとがいい気で楽しむところへ、飲んだくれては押し入ってひっくりかえすやら、こぼすやら、悪さの限りをしたあげく喧嘩口論おっぱじめ、わしがなだめて「まあ、おぬし、腰落着けていっぱいどうか、この盃でお近づきを[7]」とすすめたところで耳かすどころか、ひとしお猛って[8]わしが畠の杭に火をつけ、葡萄の木からは、無理無体に酒を搾る始末。

第二セミ・コロス　それにひきかえこの仁は[9]ご馳走ゆえに心は空に、気が大きくなり戸口の外まで羽根を散らして、楽しい生活[10]の証拠を見せてる。おお美わしのキュプリスと、また懐しのカリテスとも、幼な馴染の和解の女神、御身の花の顔を今まで知らずに過ごしたのだ[11]。わたしと御身を愛神が、花冠をつけて絵に描かれた彼の姿にふさわしく、固く結んでくれるよう。それとも御身はこのわしを老碌爺[13]と思召さるるか。したが御身に連れ添えば次の三つは楽なもの[12]。まず手はじめに背の低い葡萄の列を長く走らせ、それに並ぶは無花果苗の嫩い枝、三番目には軒葡萄の一列を――この老人の体力で。そして畠のまわりをぐるりと囲むはオリーヴの並木。かくして御身もこのわしも新月の祭に膏にゃいっさいこと欠かぬ。

〔せり出しによってディカイオポリスの厨房のありさまが舞台に現れる。触れ役登場〕

触れ役　東西、東西。父祖伝来の慣習をもちまして早飲みの会をラッパの吹奏裡に相催しまする。いちばん先に飲み干したる御方がクテシポンの革嚢[1]を頂戴の定めにござります。

〔触れ役退場〕

ディカイオポリス　〔召使の奴隷どもに向い〕それ男たち、女ども、聞えなかったか。何しとるんだ。触れ役の声が耳にはいらんのか。よく火を通すんだぞ。裏をかえしてすっかり焙り、兎の肉は早く串を抜くんだ。花冠も編まにゃ。鶫を刺すんだ、串を持って来んか。

第一セミ・コロス　羨ましいかな、おぬしの計略。
それにもいやまし羨ましいは、なあ、そちの人、
目のあたりなる珍味の数々。

ディカイオポリス　鶫が目の前で焼けているぜ、さあ、何と言いなさる。（一〇一〇）

第一セミ・コロス　いやはや、これはまた味なお言葉。

ディカイオポリス　〔召使に〕火を掻き立てろ。

第一セミ・コロス　お聞きの通り、あの仁は
板前の腕も鮮かに
ご馳走の準備に大わらわ。

〔百姓デルケテス悄然として登場〕

百姓　やれやれ、情けなや。

ディカイオポリス　おお、ヘラクレス、こりゃ誰じゃ。

百姓　不仕合せな男でござんす。

ディカイオポリス　じゃ不幸はお前一人で背負っとけ。

百姓　ねえ旦那、あんたひとりで和議を結びなすったが、わしにもちっとばかり平和って奴をわけていただきたいので――五年ばかりでも結構でござんすが。（一〇二一）

ディカイオポリス　どんな目にあったんだね。

百姓　牡牛二匹とられて、えらい難儀しとりますだ。

ディカイオポリス　どこの者だね。

百姓　ピュレ[2]の者でして、ボイオティア人どもがくすねてゆきやした。[3]

ディカイオポリス　おお、そりゃ重ね重ねご愁傷な。それで白い着物をきとるのかな。

百姓　〔相手の皮肉に無関心に〕[4]それが、ゼウスさまもご照覧あれ、このわしを糞だらけのなかで養ってまいった可愛い奴らで。

ディカイオポリス　それでさしあたり何が望みなんだ。

百姓　二匹の牛めのために涙を流し過ぎて両の眼を失いましたで。そんでピュレのデルケテス[5]にご慈悲かけられるならさっそくにも両の眼に「平和」の薬を点していただきたいもんで。（一〇二九）

ディカイオポリス　だが気の毒な仁、わしは施療医ではない[6]のでな。

百姓　旦那、お願いでござんす、何とか二匹の牛を取り戻したいもんで。

ディカイオポリス　叶わぬ。ピッタロス[7]の弟子んとこへでも行って泣くがええ。

百姓　旦那、わっちのために「平和」の一滴をこの葦の茎にたらしてくだせいまし。

ディカイオポリス　雀の涙だけもやらんぞ。よそへ失せて泣くがええ。

百姓　ああ情けなや、働きもんの二匹の牛っ子よ。

〔百姓嘆きつつ退場〕

第二セミ・コロス　和議のお神酒に醍醐の味を
いちど覚えたこの男は、誰にも
お相伴はさせぬ気だ。

ディカイオポリス　〔召使に向い〕お前は腸詰に蜜をかけるんだ。烏賊はよくあぶるんだぞ。（一〇四一）

第二セミ・コロスの長　〔傍のコロスに〕お聞き召されたか、きゃつの高声。

ディカイオポリス　鰻を焼くんだ。

第二セミ・コロスの長　わしも、まわりの者どもも飢え死にしますわ。その、えもいえぬ香りをかいでおぬしの上ずった声をきいては。

ディカイオポリス　〔コロスの長の言葉も耳に入らずに〕こいつもこんがりとほどよくあぶるんだぞ。

〔花聟の付添人登場〕

花聟の付添い　ディカイオポリスさん。

ディカイオポリス　こりゃ誰じゃ。誰じゃ。

花聟の付添い　それがしの花聟から、あなたに披露の宴の肉料理をお届けするよう頼まれました。

ディカイオポリス　どなたかは存ぜぬが、それは重畳。

花聟の付添い　それで、花聟の申しますには、肉料理を進ぜますかわりに出征を免れ、閨のうちにて合戦いたさんがために、あなたからこの香油瓶に平和の一滴を注いでいただきたい、とのことでして。

ディカイオポリス　持って帰れ、肉はいらぬによって早う持ち帰れ。一千ドラクメ払うたとて注いでは進ぜませぬぞ。〔女の登場するのに気づいて〕ところであの女は誰じゃ。

花聟の付添い　花嫁の付添いでして花嫁からあなたに内密のお願いがあってまいりました。

ディカイオポリス　〔花嫁の付添いに向い〕さておぬしのご注文は？〔彼女の内密の願いをきいて〕おお神々よ。これはまた笑止千万。わしに折り入っての花嫁の望みとは、花聟の一件を家のなかで守護いたしたいとな。〔召使に向い〕和議のお神酒を持って来い。この女にだけはわけて進ぜよう。女子ゆえに戦争にはあずかっておらぬからな。〔花嫁の付添いに向い酒を注ぎつつ〕さあ、おぬし、香油瓶でこの下から受けて。これをどう使うかご存じかな。花嫁に言伝て願いたい。兵隊の召集[1]がはじまったら、夜中にこれを花聟の逸物に塗るのじゃ。〔召使に〕さあ和議のお神酒は元のとこへ戻せ。

〔花聟、花嫁の付添い退場。ディカイオポリス再び料理に移る〕

ひしゃくを持って来い。酒を壜に移そうから。

〔召使退場。一人の触れ役急ぎ足にて右手から登場〕

コロス　〔悲劇の調子で〕またもひとり眉皺寄せて馳せ参ずるは何やら不吉の報せの様子。

触れ役　ああ、重なる難儀に負け戦[2]さそのうえ例のラマコス風情か。

〔触れ役ラマコスの家の戸口を叩く。ラマコスはコエスの祭に出るつもりで平服で現れる〕

ラマコス　〔悲劇風の、かつ居丈高な調子で〕青銅の鋲打ちつけたる館[3]を打つは誰ぞ。

触れ役　将軍がたがあなたに今日即刻前立ていかめしく[4]部下引きつれて出征さるるよう命ぜられました。それから雪の降る中で峠を守れとのことであります。競飲とキュトロイ[5]の折を狙ってボイオティア人の盗賊どもが侵入するとの噂であります。

ディカイオポリス　情けなや、頭数ばかりで働きのない将軍ども。

ラマコス　わしがお祭にもかたれぬとはふびんじゃないか。

ディカイオポリス　ああ、悲しや、ラマコス戦術の出征軍。

ラマコス　やれ運の悪いこと、お前がこのわしを笑いおるか。

ディカイオポリス　四つ翅つけたるゲリュオネス[6]と争う気か。

ラマコス　やれやれ、この触れ役は何と因果な報せをもたらしおった。

〔使者右手より登場〕

ディカイオポリス　〔ラマコスの口調をまねて〕やれやれ、いかなる報せをもたらしてきゃつは馳せ参じたかな。

使者　ディカイオポリス。

ディカイオポリス　何だ。

使者　宴会へと急いでおいでください。重箱と徳利をお忘れなく。ディオニュソスの神官があなたを待っておられる。さあお急ぎのほどを。あなたのためにだいぶ宴会が遅れております。用意は万端手落ちなく整い寝椅子に食卓、枕に敷蒲団、花冠に香油、種々のご馳走、それに

白首まで侍ってますぜ。押麦菓子に蜜入り(1)パン、胡麻せんべいにウェーファース、ハルモディオスの大好物のべっぴんの踊り子たちときてまさあ。さあ、一生懸命いだり。

ラマコス　ああ、仕合せつたなきこのわが身。

ディカイオポリス　おぬしがあの大きなゴルゴンの力にすがっているせ(2)いじゃ。〔召使に向い〕さあ店をしまえ、(3)そしてご馳走を詰めろ。

〔せり出しが元に戻る〕

ラマコス　〔自分の召使に〕おいおい、わしの柳行李をここに出しとくれ。

ディカイオポリス　〔自分の召使に〕おいおい、わしの重箱をここに出しとくれ。

ラマコス　お前、麝香塩と玉葱を持って来い。

ディカイオポリス　わしには魚の切身をな。玉葱はごめんじゃ。（一〇〇）

ラマコス　おい、あの古い塩魚を一枚(4)持って来い。

ディカイオポリス　おいわしにも一枚くれ。(5)あそこで(6)火を入れてやろう。

ラマコス　兜から羽根を二本抜いて来い。

ディカイオポリス　わしには鳩と鶫（つぐみ）を持って来い。

ラマコス　駝鳥の羽根は白くてみごとなもんだな。

ディカイオポリス　鳩の肉は金色を帯びてみごとなもんだな。

ラマコス　そちの人、わしの武具を笑うのはやめられたい。

ディカイオポリス　そちの人、わしの鶫に横目をつかうのはやめられたい。

ラマコス　〔召使に〕わしの三本の前立ての箱を出して来い。

ディカイオポリス　〔召使に〕わしにも兎の肉の皿をくれんか。（一一〇）

ラマコス　〔前立てを調べつつ〕なるほど、蛾が前立てを食いおったかな。

ディカイオポリス　〔兎肉の皿を眺めつつ〕なるほど、饗宴より一足先に兎の煮込みをお毒味しようかな。

ラマコス　そちの人、わしに話しかけるのはご容赦を。

ディカイオポリス　そりゃ見当ちがい。〔召使の一人を指して〕わしとこいつとは先ほどより口論の最中。お前一つ賭をしてラマコスどのにご判定願おうじゃないか。蝗（いなご）(7)と鶫とどっちがおいしいか。

ラマコス　こら思い上った口たたくな。

ディカイオポリス　〔ラマコスの言葉にかまわず、召使に〕蝗がはるかに優ると判定召された。

ラマコス　〔召使に〕おい、お前。わしの槍を取り下してここへ持って来い。

ディカイオポリス　おい、お前。わしの腸詰を火から下してここへ持って来い。（一一九）

ラマコス　さあ、槍の鞘を抜こうぞ。〔召使に〕それ、しっかり握ってろ。

ディカイオポリス　〔腸詰の焼き串を握らせつつ〕お前もこれをしっかり握ってろ。

ラマコス　おい、楯掛けを持って来い。

ディカイオポリス　〔腹をさすりつつ〕わしのこいつのためには焼き立てのパンを持ってこい。

ラマコス　さあ、ゴルゴンを背につけた円い楯をここに持って来い。

ディカイオポリス　わしにもチーズを背につけた円い蜜菓子を出すんだ。

ラマコス　こりゃ世間にいう明らさまな嘲りじゃないか。

ディカイオポリス　こりゃ世間にいう涎の垂れる蜜菓子じゃないか。

ラマコス　〔召使に〕おい、油をさせ。〔楯を磨きつつ〕この青銅の表に一人の老人が兵役忌避で調べられとるのが見える。（一二九）

ディカイオポリス(8)　おい蜜をかけろ。〔皿をみつめつつ〕ここにも老人がゴルガソスの伜ラマコスに大いに嘆けと言っとるのがはっきり見える。

ラマコス　さあ、お前、ここに武士（もののふ）の胸当てを持って来い。

ディカイオポリス　さあ、お前、わしにも胸当てとして一升壜を取り出して来い。

ラマコス　これに身を固めて敵と争うのだ。
ディカイオポリス　これに身を温めて飲み仲間と争うのだ。
ラマコス　お前、楯に毛布をくくりつけてくれ。
ディカイオポリス　お前、ご馳走を重箱にくくりつけてくれ。[1]
ラマコス　柳行李はわしが自分で持って行く。
ディカイオポリス　わしは外套をひっかけて出かけるとしよう。
ラマコス　〔召使に〕楯を持ち上げろ、そしてお前、それを持って出発だ。雪になったな。やれやれ、冬景色とおいでか。（一一四〇）
ディカイオポリス　〔己の奴隷に〕ご馳走を持ち上げろ。宴会風景とおいでか。

〔ラマコスとディカイオポリス、その召使とともに左右に分れて退場〕

コロスの長　いざ進め、心も軽く、戦さの道を。
とはいえ二人の行く道は、こりゃまたえらい違い方。
きゃつが花冠(かんむり)美わしく、酒酌みかわすそのあいだ
おぬしときたら、寒さに凍えて敵(かたき)を見張る。
そのころきゃつは蒲団のなかで
色気盛りの若い娘(こ)に
くだんのところをこすらせる。（一一四九）

コロス　唾を飛ばすおしゃべり野郎、三文文士で俗謡作りのアンティマコスを早く申せばゼウスさまがたきのめしてくださるように。この奴こそはレナイアの祭に謡い方の世話をして[2]可哀そうにこのわしを慰労の宴からしめ出し[3]くさった。一生に一度こんな景色が眺めたいもの。きゃつが槍烏賊[4]に涎を垂らし、揚った烏賊はじゅうじゅう音立て卓子にのって、軍艦みたいに奴のところに入港する。奴がそいつに手を出すとたんに雌犬が失敬して逃げるというのさ。（一一六〇）

これがあいつの災難のはじまり、お次は闇夜の禍だ。馬乗り廻したその後で瘧(おこり)に震えて家路をたどる。すると酒乱のオレステス[5]がきゃつの頭をぶち割るのだ。こちらは小石(つぶて)をつかもうとするが、暗さは暗し、垂れたばかりの糞ひっつかむ[6]。これを飛礫に攻撃すれば的ははずれて打ち当てたのはクラティノスというわけさ。（一一七三）

〔ラマコスの召使息せき切って登場〕

召使　〔悲劇風に〕おお、ラマコスどののお館に召し使わるる方々、湯を、湯を薬罐(やかん)に沸かしてくだされい。繃帯と膏薬とまた脂をしませた羊毛に亜麻布をくるぶしのために用意なされい。ご主人は溝を跳び越そうとて杭[7]で負傷なされた。またくるぶしをねじって脱臼せられた。そのうえ石の上に墜落[8]して頭蓋骨を粉砕せられ、かくて楯からゴルゴンを目覚ましたもうた。法螺吹きどのの大きな和毛(にこげ)[9]が岩の上に落ちたとき、大音声にわめかれたは「おお光輝ある陽の目よ。おんみの光を仰ぐもこれが最期。いよいよお別れだ。わしは亡き数に入るのだ」と。かく語ったのち溝のなかに落ちなされたが再び[10]立ち上って、味方の逃亡兵どもを食いとめられ、槍を揮って盗賊らを逐い散らされた。それご本人のお帰りだ。戸口をあけなされ。（一一八九）

〔ラマコス召使らに支えられつつ左手より登場〕

ラマコス　〔悲劇風に誇張した口調で〕悲しいかな。悲しいかな。突き刺すようなこの痛手のおぞましさ。情けなや、仇の槍先にかかって命を落すとは。それはさておき何としても嘆かわしいは、ディカイオポリスめがわしの傷ついたを見てわしの不運を大口あけて笑うこと。

〔ディカイオポリス男根をつけた姿で泥酔して二人の白拍子に支えられつつ右手より登場〕

ディカイオポリス　〔ラマコスを真似て、しかし普通の口調で〕やれ、やれ。この女子(おなご)どもの胸はえろうむっちりしてまるめろを思わせるわ。おお、金色に輝くご両人、わしに柔かく接吻してくだされ。色気たっぷり、舌を使ってな。〔一行脱落〕一升壜を一番がけに飲み干したは

このわしだからな。

ラマコス　おお、かくまで難儀を重ねるとはみじめきわまるわしの運命。ああ、ああ、堪え難き傷の痛み。

ディカイオポリス　〔ラマコスに気づいて〕よう、よう、小騎士ラマコスどの。[1]ご機嫌よう。

ラマコス　〔悲劇の主人公をまねて〕呪われしわが身かな。

ディカイオポリス　〔白拍子の一人に〕接吻とはどうしたわけだ。

ラマコス　難儀いたすわ。

ディカイオポリス　〔白拍子の一人に〕噛みつくとはどうしたわけだ。

ラマコス　想い出すも悲しや、かの激しき合戦(シュンボレー)の折に。

ディカイオポリス　コエスの祭に誰がおぬしから銭(シュンボライ)を取り立てた？[2]

ラマコス　おお、薬師如来(パイアーン)、[3]薬師如来(パイアーン)。

ディカイオポリス　したが今日はお薬師様の日(パイオーニア)[4]じゃないて。

ラマコス　つかんでくれ、脛をつかんでくれ。〔痛みにひるんで〕畜生。お願いだ、しっかりつかんでくれ。

ディカイオポリス　〔二人の白拍子に〕さあご両所、いい娘(こ)だ。真ん中んとこの大事なものをしっかりつかんでくれ。

ラマコス　頭を石に打ちつけてふらふらする。目がくらんでまいった。

ディカイオポリス　わしも寝たいわ。あそこが立って暗がりの一儀がいたしとうなった。

ラマコス　〔召使たちに〕ピッタロス先生[5]のとこへ手厚う運び出してくれ。

ディカイオポリス　審判員[6]のとこへわしを運んでくれ。バシレウス[7]はどこへ行った。革嚢[8]を拝領いたしたい。

ラマコス　いたましや槍先に骨を貫かれた。

〔ラマコス傷口を観衆に示しつつ召使に運ばれて退場〕

ディカイオポリス　〔革嚢を受け取り観衆に示しつつ〕ごろうじあれ。すっかり空じゃ。[9]やあれめでたや、[10]一の勝。

コロス　おお、ご老体、ご所望とあらば、われらも歌おう。やあれめでたや。一の勝。

ディカイオポリス　かてて加えて、わしは水を割らずになみなみとつぎ、ぐいと一息に飲み干しました。

コロス　おお、見上げたお方、めでたや、めでたや。酒嚢を持ってお進みなされ。

ディカイオポリス　おぬしがたも歌いながらおつづきなされい。やあれめでたや、一の勝。

コロス　お望みにより、酒嚢とおぬしのために
われらもともに歌いつつ後からお伴と参りましょう。
やあれめでたや一の勝。

〔一同賑やかに歌いつつ退場〕

訳註

五(1) ギリシア劇の舞台装置はきわめて簡単で非写実的であった。喜劇では三軒の民家の並んでいる背景がもっとも多かったと考えられる。プニュックスはアクロポリスの西の丘にあり、議長格に当る当番評議会員五十人のみが椅子に腰かけ、一般市民はしゃがんでいたらしい。それで二、三の長椅子で民会議場を象徴したものらしい。

(2) 四という字は少ない数を示すのに使われた。主人公は以下に嬉しかった例二つを挙げているに過ぎぬことに注意。

(3) クレオンはペリクレス歿後のアテナイ平民派の領袖で主戦論者。その家が革鞣業だったので革屋のクレオンと呼ばれた。相当の人物だったに違いないが極端民主派の好戦的態度を敵視したアリストパネスとは犬猿の仲だったことは、本篇のパラバシスに明らかであり、また直接にクレオン攻撃を目的として書かれた次年上演の『騎士』の一篇がもっともよくこれを物語る。クレオンが五タラントン（タラントンは二六・八六キログラムの重量。ここはそれだけの重量の銀貨である）を吐き出したという史実は、古註引くところのテオポンポスによれば、デロス同盟に属する二、三の島嶼が同盟のための醵金——実はアテナイへの貢租にひとしかった——の軽減のためにクレオンに贈賄し、アテナイ市民説得を求めたが、騎士身分の人たちがこれを知って反対し、その金をクレオンから取り上げたことであった。

(4) 前六世紀初葉のソロンの改革によりアテナイ市民はその土地財産の多寡により五百メディムノス級、騎士級、農民級、労働者級の四級に分たれたが、ここのはその騎士級ではなくて、前五世紀の前半以来国家から補助金を与えられて騎兵として従軍し、また一日一ドラクメの馬匹飼料を与えられていた人々。国家の補助があっても騎兵としての軍役は支出がかさみ、自然に相当の富裕者のみが騎兵に登録された。そこで彼らは土地財産のない市民のあいだの民主政には反対の立場をとり、一般平民からは嫌われた。

(5) アイスキュロスは本篇の上演よりすでに三十年以上も前に歿していた。悲喜劇とも大ディオニュシア祭及びレナイア祭においては新作競演を原則とし、旧作再演は田園のディオニュシア祭に限られた。前四世紀の後半においては新作競演に先立ち三大悲劇詩人の作品の再演を行なうのが恒例だったらしいが、前五世紀においてはこれは稀な例外であった。ここはその稀な例外の場合か、田園のディオニュシア祭のことか明らかでないが、とにかく、保守的なディカイオポリスは口をあいて、すなわち大いに期待してアイスキュロスの荘重な劇を待っていたのである。

(6) 劇の競演の順は抽籤（ちゅうせん）で定められたので、観客や作者にはここに「奴」と書かれている触れ役が知らせた。

(7) テオグニスは古註により「きわめて冷たい悲劇作者、三十人（すなわち前四〇四年の寡頭支配者）の一人で雪と渾名（あだな）された」と見えている。「謡い方」と訳したのはコロスで、テオグニス自身がコロスの練習の指導者であったため。

(8) ラヴェンナ本古註では拙劣な歌手とする。

(9) 古註により、もっとも優れた歌手でデルポイのピュティア祭典における優勝者だったとされている。

(10) テルパンドロスのはじめた古風な優れた旋律。平静な序曲にはじまり急調な曲に移ったものらしく想像されている。

(11) 古註に「竪琴や笛に合わせて歌った拙い歌手」として見える。

(12) 前四世紀末のアリストテレスの時代には定例民会は三十五、六日からなるプリュタネイアごとに四回で、その日時及びそのうちのどれを主要民会とするかについては定めがなく、評議会の五百人の議員中の各プリュタネイアごとの当番議員、すなわち五十人のプリュタネイスがこれを定めた。（アリストテレス『アテナイ人の国制』四三章参照）

(13) 都市国家の政治、経済生活の中心をなした広場。戸外生活を好んだギリシア市民の交際の場所であるとともに商業の中心でもあった。アテナイのアゴラはアクロポリスの西北にあった。

(14) 広場で雑談に耽って民会に赴かぬ者が多かったのでスキュタイ人で国有奴隷であった警吏が縄に赭土（あかつち）を塗ったのを引っぱって人々をプニュックスに追い立てる習慣だった。

六(1) 「在」と訳したのは次行の「村」と同様に原語はデーモスで紀元前六世紀末葉のクレイステネスの改革以来アッティケ行政の基礎的単位をなしたもの。

(2) 本劇上演は冬の真中のレナイア祭だった。古註にはアカルナイが北のパルネス山に近く炭焼きが盛んだったとしており、これはやがて登場するアカルナイの人々のコロスの歌でも明らかである。

(3) これは「鋸」或いは「鋸を挽く人」を意味する字。しかし作者の言いたいのは木挽のいないことではなくて、商売人のおらぬことであり、三四行以下に「いかが」と訳した **priamai**（「買う」という動詞）の字を擬人化して洒落ているのである。

(4) 民会議場の神聖を保つために開会に先だち、お祓いの役が犠牲にされた仔豚を持って会場の周囲を廻った。その血によって区画された線のなかに入れと全会衆に呼びかけるのである。

(5) 「父方、母方両系統とも神より出でたる者」の意であるが、ギリシア神話には見えず、古註はデメテルとトリプトレモスとの神官としている。

(6) 普通にはケレオスはエレウシスの王で、その娘たちが、己の娘を捜しあぐんで路傍に憩うていたデメテルを見つけ出し、女神はケレオスの子たるトリプトレモスに農業の知識を授けた、とされる。パイナレテ、リュキノスはともに架空の名。作者はここで勝手に系図を作っている。

(7) 今日の巡査に当る一千人の武装したスキュタイ人で国有奴隷であった。

(8) この時代に単に王とか大王とか言えばペルシアのアカイメネス王朝の専制王を指した。

(9) これは当時のギリシアでは珍しい鳥であった。古註がいうように使節の土産物の意味である。

(10) メディアの古都。メディアを滅ぼしたアカイメネス王朝の首都はスサであったが、王がここで過したのは春の三カ月で、冬の七カ月はバビロンで送り、エクバタナの宮殿は夏の二カ月の離宮とされた。

(11) アテナイ人は九人の執政官（アルコン）の筆頭の者の名によって年次を示した。エウテュメネスのアルコンだった年は前四三七—四三六年であり、本篇の上演は前四二五年であった。それゆえ使者たちは実に十年間もアジアの土地にぶらぶらしていたわけで、作者はその理由が一日二ドラクメの日当を貰いつづけるにあったと皮肉っているのである。

(12) 小アジアのリュディアのカユストロス河流域の平野。この河はエペソスのところでエーゲ海に注いでいる。エペソスからこの河に沿ってリュディアの首都サルディスに出で、それから有名なペルシアの「王道」により約三カ月で首都のスサに達するのが通常の交通路であった。（ヘロドトス第五巻五二以下）

(13) ペルシア帝国内で貴人、ことに貴婦人が用いた贅沢な轎。東洋婦人の人に姿を見せない習慣から轎の四囲には幕が垂れていた。

(14) ペルシアの王道は駅亭の制度がよく整って安全なので知られていた。当時のギリシアは道路が悪く、宿屋の設備はなく、追剝ぎの危険すらあって旅行は決して楽ではなかった。それに比すればペルシアへの使節は遊んでいるようなものだったことは観衆によくわかっていたはずであるのに、使節は人をくった報告をやってのけるのである。前行の「心の疲れる」も同じ。

(15) これは使節の楽な旅に対してアテナイ市民一般がスパルタとの交戦に苦労しているありさまを対比した句。城壁とはアテナイ市の周囲の、またそれとペイライエウスの港とを連絡する長城であり、その歩哨に立つのは主としてディカイオポリスのような老年市民の役だった。

(16) ガラスはフェニキア人が発明したと伝えられるが、今日ではエジプトで早くその製法が知られたことが明らかになった。ガラス器が盛んにできたのは紀元前後にアレクサンドレイアでガラス吹きの技術が発明されてからで、ここではガラスの盃はひじょうな珍什の意味である。

七 (1) ギリシア人のあいだでは葡萄酒は必ず水に割って飲むべきものとされ、宴飲となれば酒と水との混合器がつきものだった。

(2) **kranaos** とは「岩山の」という形容詞でピンダロスにはアテナイの形容詞として使われている。悲劇にも使われたこの名は古風な呼び方で使節の柔弱な態度を不快とするディカイオポリスの人柄をしのばせる。

(3) 古註に「山」(**oros**) という字には **amis**（おかわ）の義があるとしているがその当否は明らかでない。ペルシア大王は属州からの租税により莫大な黄金の所有者で、その金力によりギリシアの政局を左右したのは周知の事実であろう。ペルシアの黄金は当時のギリシア人の常識であった。それと「しゃがんで」と訳した **ekezen**（大便をしていた）の字が容易に想像させる事実とにひっかけた洒落。

(4) つぼめたと訳した **xynēgagen** の字は「集めた」とも訳せる。古註は八一行の「雪隠」は戦争とあるべく、ここは「軍隊を集合せしめた」とある

のが大王にふさわしく観客の期待した句であるのに、思いがけぬ尾籠なことを持ち出した点を指摘している。

(5) 満月というのは恐らくヘロドトス（第六巻一〇六）に見えるマラトンの合戦の際のスパルタ人の故事が考えられているのであろう。このときスパルタ人は満月にならねば民会を開かぬ慣習を重んじて時を費し遂に合戦に間に合わなかった。

(6) 壺と訳した **kribanos** とは蓋つきの陶器で周囲に薪を焚いてパンを焼くための道具。とうてい牛を容れる大きさではなかった。ヘロドトス（第一巻一三三）によれば富裕なペルシア人は誕生日には竈で丸焼きにした牛や馬やラクダや驢馬を食卓に供すると見えるのをもじったもの。

(7) ひじょうの大男、かつ食いしんぼう、しかも臆病なので市民のあいだに話題に上った人物。

(8) **phenax** 不死の霊鳥 **phoinix** を連想せしめる語なので、ロジャースの英訳では鷗と詐欺師の両義のある **gull** の字が当てられているが、邦語では鷺がこれに近いかと思う。

(9) 直訳すれば「偽アルタバス」。古註はペルシア人にアルタバゼスとかアルタクセルクセスとかいう名のあることからの冗談で、また **artabe** とはペルシアやエジプトの枡目の名であるゆえ「偽った量目」の義でもある、としている。

(10) クセノポン（『キュロスの教育』第八巻）に「王の耳」とともにペルシア大王の按察使風の臣下として見える。

(11) 次行とともに、一つ目の面をかぶった役者がいわば手探りでそろりそろりと舞台に進み出るさまを坐礁せぬようにそろそろ入港する船にたとえたもの（古註）。なおロジャースは当時の船が舳の両側に目を描いていたとの説を紹介している。

(12) 軍艦の橈の橈穴にあたる部分に海水浸入を防ぐために巻いた革。「大王の眼」の仮面の巨眼の縁に革がついていたために、彼を軍船にたとえた結果つけた一行と思われるが、この一句を挿入と見る者もある。

(13) 外国人の片言を述べる場面はアリストパネスの作品に稀でなく、それらは文法的に誤っている程度であるがこの一句は難解である。「朽ちたものを修繕しはじめた」の義かとされる。四字のうち三字はそれを意味するに近い字である。

(14) 原語は「**anus** の締りの悪いイオニア人よ」の義。東洋人はイオニア人という呼び名をもってヘレネスを無差別に呼んだが、イオニア人は柔弱との聞えが高くアテナイ人はイオニア人と呼ばれることを好まなかった（ヘロドトス第一巻一四三）。

(15) アリストパネスの思想をもってすればギリシア人相互がかく戦争に憂き身をやつし、彼らが伝統的に蔑視した夷狄の民の代表たるペルシア人の王朝に軍資金を仰ぐとはもってのほかのことであった。この戦役の当初、前四三〇年早くもスパルタは使節をペルシア大王のもとに送り、同盟したがって軍資供給を説得せんと試みたが、使節の一行がトラキアでアテナイ人のために捕えられて失敗した（ツキュディデス第二巻六七）。アリストパネスがかかる政情に対し忿懣（ふんまん）の情を禁じ得なかったことはいうまでもない。本篇では単なる諷刺にとどまっているが、前四二一年上演の『平和』一〇五行、四〇六行以下では反ペルシア思想を明瞭に謳い、前四一一年の『女の平和』一一三三行以下では「夷狄の軍がわれらの敵として存するのに諸君はヘレネスを屠り、その市を毀つ」と主人公に語らしめている。また同年の『女だけの祭』三六〇行以下ではコロスをして「欲に目がくらんでメディア人（すなわちペルシア人）を国内に招く者は神々を瀆（けが）し、わが市に危害を加うる者だ」と歌わしめている。

(16) リュディアの首都サルディスの人々は羊毛染色を発明したと伝えられ、その技術に秀でていた。その色は真紅色だったので、ここは「血染め」の意である。

(17) 本篇以下『蛙』に至る二十年間作者が絶えず髯のない女々しい男として登場させている人物。シビュルティオスはプルタルコス（『アルキビアデス』三）に「シビュルティオスの体育場」のことが見えるので男性的な体軀の持主で対照のためにクレイステネスの親とされたと想像される。

八

(1) 古註にエウリピデスの『メデイア』の一句のもじりとあるが、そのなかには当る句がないので他の佚作からのものと解される。

(2) これはアルキロコスの句のもじりで原句は「おお猿よ、こんな尻を持って」で、その「尻」(pygē) を「髯」(pōgōn) に改めたのである。「こんな髯」とあるが宦官には髯がないのがふさわしい。それゆえ「こんな髯で」は、

クレイステネスについて周知の「髯のない、のっぺりした顔で」の義だと解される。

(3) 古註にこれもまた無髯の女々しい男とされている。

(4) ソロンの制度では、旧四部族から各百人を出した四百人の会議だったが、前六世紀末のクレイステネスの改革以来新しい十部族から毎年五十人を抽籤で選び、都合五百人からなる会議。その機能は民会への提案の予備的審議その他多岐にわたり、議員は祭日を除き毎日会合した（『アテナイ人の国制』四三、四五、四八、六二章参照）。

(5) アクロポリスの西麓にあった公共建築。ここで国家に功労のあった市民や外国からの使節などが饗応され、それは甚だ名誉のこととされた。なおアテナイ人で外国に使した者も、この恩典にあずかったので、ここの場合「大王の眼」ばかりでなく、これをつれて来た使者たちも迎賓館に赴いたはずである。

(6) 前の記事から推してスパルタへの往復は四日を要したことになる。もちろん本篇ではアンピテオスはやがてスパルタから帰って来るが。

(7) 古註のいう通り「馬鹿な目を見る」の義。

(8) トラキアのオドリュサイ族の王。その版図はエーゲ海岸のアブデラ市から黒海岸のダニューブ河口に及び、ヨーロッパのいかなる王国より大であった（ツキュディデス第二巻九七）。この王国の起源について、また紀元前四三一年シタルケスがアテナイと同盟関係に入り、かつ彼の息子のサドコスがアテナイ市民権を与えられたことはツキュディデスに詳しい。

(9) theōros とは普通名詞では一市の祭典に他市から参列する来賓を意味する。

(10) 彼のあだ名は雪であった。五ページ註（7）参照。

(11) 前註をみよ。

(12) エペソス、コロポンの二市を除くイオニア諸市及びアテナイで行なわれた兄弟団（フラトリア）の祭礼（ヘロドトス第一巻一四七）。Pyanepsiōn（今日の十―十一月にわたる）に三日間行なわれた。この祭の名は a（一つの）と patēr（父）で、同一の父祖から出た者の祭の意味と思われるが、古註はこれを apatē すなわち「瞞着」の字に由来するとし、この通俗語源を説明するために長たらしい伝説を伝え、また作者がここにアパトゥリア祭を持ち出したのはアテナイ人がテオロスにより「かつがれている」のを諷刺するとしている。

(13) アテナイのこと。

(14) 蝗虫の大群の襲来が作物に大害を与えることを暗示した皮肉な表現である。

(15) トラキア兵が、蝗の植物に対するように、アテナイ人に対して与えるかも知れぬ迷惑について言ったもの。

(16) ストリュモン河下流左岸のトラキアの一部族。

(17) apothriaken thrion の字はいちじくの葉であるが praeputium をも意味した（『女の議会』七〇七行参照）。このトラキア兵どもが『雲』五三八行に誌されたような革製の phallus glande nudata を着用に及んで登場したために発せられた言葉。ディカイオポリス自身も五九二行から推すとやはり外から見える陽物をつけていたが、それは Aufbindung d. Gliedes により relative Dezenz を示していた。

(18) アテナイ市民の重装兵の日当も一オボロス半でポテイダイア攻撃の特別の困難な際に二ドラクメだった（ツキュディデス第三巻一七）。ツキュディデス（第七巻二七）によればかかる夷狄の同盟者の軽装兵の日当は一ドラクメだった。

(19) トラキア人の得意の武具は円い小楯と投槍だった。

(20) 三段櫂船の最上段の漕ぎ手。もっとも長い橈を操るゆえにいちばん苦労だったが、その日当は一ドラクメだったらしい。

(21) これはいささか皮肉である。地主的、保守的な作者は極端民主派、すなわち主戦派の支持者だった無産の軍艦漕ぎ手には内心大した好意はなかったろうから。

(22) 『女の議会』三〇七行にむかしは玉葱やオリーヴやパンなどを携えて民会に出席する風習だったと見えている。

九

(1) 古註は闘雞からのたとえとし、にんにくを与えられた雄雞は闘志がいっそう激しくなるとして『騎士』四九四行を引用している。

(2) 雨や雷や稲妻など。古註はかかる現象が起ると民会を停止するならわしだったと誌している。

(3) 古註にバターとにんにくと卵とで作るとあり、一種のサラダである。

(4) 古註は条約（spondai この字は元来酒の灌奠を意味する）の締結に酒

の灌奠を行なうところから、酒に因んでこの字を使ったものと説明している。以下三種の条約が醸造年代を異にする三種の葡萄酒にたとえられている。

（5）有名なマラトンの戦いは前四九〇年のことであるから、この戦いに参加した者は当時ほとんどなかったはずで、この名は一種のことわざのようになっていたらしい。

（6）頑健、剛情のたとえであるが、アカルナイの邑の人々がその北部のパルネス山中のかかる木を伐って炭を焼くのを生業とせることから使われた言葉であるとロジャースは註している。

（7）いうまでもなくアルキダモス麾下のスパルタの侵入軍の仕業であり、ツキュディデスはスパルタ側がアッティカ地方の主邑の一つアカルナイに占拠し、周囲の果樹園を伐り倒すことによりアカルナイ人を激昂させ籠城軍を決戦におびき出そうとしたがペリクレスが応じなかった旨を伝えている。それゆえこの句はとくにアカルナイの人々の言葉として意味深長である。

（8）「見本」と訳したのは **geumata** すなわち「味」である。葡萄酒の見本を入れた三本の瓶をアンピテオスは三種の条約にたとえてディカイオポリスに渡すのである。

（9）「瀝青（樹脂）の臭いは葡萄酒にも船にも共通ゆえ」と古註は説明している。葡萄酒に樹脂を加えたのは芳香のためであるが、ディカイオポリスはそれを無視して軍艦の臭いを連想し、五年間の和約ではその間両国が建艦競争をするに過ぎぬとしてこれを斥けるのである。

（10）一般の解釈では現在武装している同盟国が短い和議によりお払い箱になり、やがてまた同盟に引き入れられ武装せねばならぬ中間の期間の無駄の意とされる。しかしあまりはっきりした説明ではないのでスターキーはラヴェンナ本古註が「破滅」の義に説明しているのを採って、同盟国の「迷惑」としている。

（11）条約にしばしば使われた常套句。

（12）喜びの表現。平和の結果たるこの祭典への期待を表わす（古註）。

（13）いうまでもなくギリシアの神々の食物と飲み物で、不老長生の仙薬である。

（14）「三日間の糧食を携えて集合」というのが市民を戦争に徴集するときしばしば出される告示であったことは『平和』三一二行で明らかである。かかる招集はもう永久に他人ごとだ、の意。

（15）背景に見える家にはいること。ここで場面は、民会の議場たるプニュクスではなくてディカイオポリスの家になっているわけである。

（16）田園のディオニュシアは市の大ディオニュシアに対し小ディオニュシアとも呼ばれ、前者が三月に行なわれたのに対し、十二―一月に当る **Poseideōn** の月に行なわれ、国家的行事ではなくて各区（デーモス）の主催であり、演劇には旧作が上演された。

（17）古註によればオリュンピア競技の勝者で競走の選手であった。重装競走に優れたばかりでなく、五種競技にも優勝したと伝えられる。

10（1）スターキーは後に出て来るラマコスと同様に **la** と **kratos**（「力」の義）を合わせて作者が勝手に造った字で、若い時代の体力を暗示したものと解した。しかしこの名の実在人物はプルタルコス（『ペリクレス』三五）にペリクレスを訴えた人物として伝えられ、またキルヒナー（**Prosopographia Attica**）はこの他に三人の同名者を挙げている。

（2）アテナイとマラトンとの間の **Pallene** を指すが、これを選んだのには特別の意味があるのではなく、石を投げる（**ballein**）の字に語呂を合わせて**P**を**B**に変えた洒落。

（3）――以下はディオニュソス祭の行列のありさまを演じているので有名な部分である。アリストテレスが『詩学』のなかで喜劇はディオニュソス祭の陽物歌から起ったと述べているので喜劇成立史上注目に価する。アテナイオスによればシキュオンでは最古の喜劇役者は陽根担ぎと呼ばれた。もちろんここに描かれたのはアテナイ市全体のでも、ほんとうの田園のディオニュシアでもなく単に一家族のそれに過ぎぬ。

（4）お煎餅と訳した **elatēr** は古註によれば平たいパンでそのなかにスープを注いで祭壇に供えた。

（5）下の「おならをする」にかかる。

（6）古註の説く通り「子供」とあるべきところ。鼬（いたち）はアリストパネスの作品にはしばしば出て来る動物で、ロジャースは現代の猫と全く同一ではないとしても、家庭で飼われた一種の猫と主張している。日本では鼬と屁との関係は浅からぬので鼬と訳した。

（7）たった四人の行列で他の村人は見物するわけでもあるまいが、平和など

きの村の賑わいを想わせる句。仰山に言った滑稽。しかしコロスの退いたのち観衆の近くを行列が進むので、観衆中に手癖の悪いものがいるかも知れぬぞと皮肉ったのかも知れぬ。

(8) たぶん当時の俗語で「盗む」の意味の、婉曲な言いまわし。

(9) 男根 (phallos) を擬人化せるもの。

(10) いうまでもなく作者はアルコンによって年を数えており、ペロポネソス戦役は前四三一—四三〇年のエウテュデモスの年にはじまり、この戯曲は前四二六—四二五年のエウテュノスの年に上演された。その間に四人のアルコンがあり、ギリシア風の数え方によりその前後の年を含めて六年と言ったもので厳密には六年に満たない。

(11) 固有名詞が複数形で使われている。ラマコスは前四七〇年ごろ生まれ、好戦的なので知られたアテナイ市民。そのうえにその名前が machē (戦) の字に通ずるところから作者は主戦派の代表者として後に登場させている。前四三七年ペリクレスとともに黒海方面に出動、前四二五/四年の将軍となる。前四一六/五年再度将軍、翌年度もシシリーにおいて将軍職を帯び、前四一四年シュラクサイと戦って死す。プルタルコス(『ニキアス』)には勇敢、廉直かつ質素で清貧をもって聞えたとされている。しかし戦争に熱心だったためにアリストパネスにより本篇ではディカイオポリスの敵役とされた。

一一(1) 婢たる女奴隷の主人の名であるが、婢がトラキア女であるゆえ、トラキアのストリュモン河のことを響かせたものであろう。

(2) 山と訳した phelleus は山羊などの好む岩地。アッティカの地名として呼ばれた場合もある。

(3) お供えのためのスープを容れた壺。古註はディカイオポリスが自分の頭をかまわずに壺を後生大事にしているのを喜劇的としている。

(4) ここに、作者が翌年発表したクレオン攻撃の作『騎士』への伏線がある。「靴底」の字はクレオンが革屋だったため。

(5) 古註は「契約は言葉と行為と手とによって行われる。言葉は誓約で、行為とは祭壇での犠(いけにえ)であり、手とは信義が右手(の握手)により生まれるゆえ」と説明している。

一二(1) 羊毛から糸を紡ぐときの仕草にたとえたもの。日本なら「八裂きにして」とあるべきところ。

(2) アカルナイの邑の人々を実在せぬアカルネウスなる祖先から出たとしたもの。

(3) アッティカのうちアカルナイでとくに炭が盛んに焼かれたため、老人連は炭のゆえに炭籠を同村の者と直感的に言ったのである。

(4) ラコニア人はすなわちスパルタ人。

一三(1) 民衆裁判所の審判員に年寄りが多く、彼らが『蜂』に見えるように三オボロスの日当に満悦し、また有罪判決を下したり、それを免れんとする被告の家族などにちやほやされるのを喜ぶことを難じたもの。

(2) 以下の文句が示す通りここではディカイオポリスが作者アリストパネスの身になって語っている。普通ならパラバシスにおいてコロスにより語られることが筆頭の役者により語られるのである。この事実からディカイオポリスの役を作者自身が演じたとの推定も生まれている。

(3) 去年の狂言云々——古註は『バビュロニア人』を指す。この作はアリストパネスにより『アカルナイの人々』より先に上演された。そのなかで彼は多くの人々を非難した。何となれば外国人の面前で抽籤や選挙による役人やクレオンを嘲笑したから。これに憤慨したクレオンは作者が民衆や評議会を侮辱せるものとして市民への不正のゆえに告訴した……」と伝えている。『バビュロニア人』の上演は前四二六年春の大ディオニュシア祭においてであり、クレオンは三七九行によれば作者を五百人の評議会に告訴したものらしいが、結局作者は有罪となることは免れたらしい。

(4) アテナイ市中を冬季に滔々と流れた川。ギリシアでは夏季には河川はたいてい涸渇し、冬の豪雨の折にひじょうな勢いで流れた。

(5) これは乞食の姿に身をやつしてアガメムノンなどの前に長広舌をふるい、おのれの目的を達したというエウリピデスの作品『テレポス』の同名の主人公のことを考えているのである。この作品は佚して伝わらないが推定による荒筋を述べれば、テレポスはアルゴスのアレウスの娘アウゲの私生児で、父はその出生を憤って娘とその子を箱に納めて海に流したがたまたま小アジアのミュシアに漂着し、母はミュシア王テウトラスの妃となり、テレポスはその養子となった。その後ギリシア軍がトロイア攻撃に際し、ミュシアをプリアモスの領土と間違えて侵入したときテレポスは奮戦してこれを撃退したが、彼自身はアキレウスの槍により不治の傷を負うた。そこで彼は乞食姿に変装

してデルポイを訪ね、おのれを傷つけた者がその傷を癒す旨の託宣を与えられた。アキレウスはじめギリシアの英雄たちがアガメムノンの宮殿に集っていると知ったテレポスは本篇四三〇行以下に誌されたような乞食の姿でこの宮殿を訪れる（これがエウリピデスの原作の序幕）。アガメムノンの妃クリュタイムネストラは夫と不和であったが、彼女の同情によりギリシアの貴族たちの面前に現れることとなったテレポスは、クリュタイムネストラとアガメムノンとのあいだの不和を利用し、おのれの素姓を彼女に打ち明けた後、王と妃のあいだに生まれた幼児オレステスを人質に使い、自分の望みが容れられねば即座に彼を殺すことを決心する（三二五―三二七行の「炭籠を切り刻む」という趣向はこれのもじりである）。英雄たちはたまたま前回のミュシア遠征の際のテレポスの活躍を回想し、憤りを新たにしつつあった。そこで彼はおのれの素姓を知られぬようにしてテレポスを弁護し、またトロイア方弁護の大演説（本篇四一六行参照）を行なう。遂にアガメムノンもテレポスに対する考えを改めるが、たまたまアキレウスの登場によりこの乞食の何者であるかが問題とされる。遂に（おそらくオデュッセウスにより）彼がテレポスその人であることが露見するが、彼はこのとき幼児オレステスを捕え来ってこれを殺害すると脅かす。脅迫と嘆願とによってアキレウスの怒りもようやく静まり、彼の槍が持ち出されてテレポスの傷も癒える。最後にアガメムノンはテレポスがトロイア遠征の道案内たるべしとの預言を思い出し、彼にこの役を引き受けることを頼む。テレポスはトロイア王の聟であったが、不治の傷の癒えた欣びにこの役を引き受ける。以上のような筋だったらしく、本篇にはしばしばこのエウリピデスの、おそらく観衆にはよく知られていた、悲劇の句や趣向が利用されている。

(6)　抒情詩ならびに悲劇の作者で頭髪を伸び放題にしていた、と古註は伝える。

(7)　黄泉（ハデス）にはそれをかぶれば姿を神々の前にもかくす兜があったと伝えられる。『イーリアス』第五巻八四五。それとヒエロニュモスの頭の毛とを結びつけたものである。ここの二行の意味はディカイオポリスが乞食の姿をとりたいと申し出たのに対し、いかなる姿をとっても、姿をかくしても結構というついでに当時の一文士の頭髪を諷したもの。

(8)　シシュポスはコリントの王で姦計にたけていた。その罰に冥界において巨石を山上に推し上げる苦役を課せられ、その石が頂上に達するとたちまち逆転し彼を永遠に苦しめたとされているが、『イーリアス』（第六巻一五三）には「人間のうちでもっとも狡知にたけた者」とされている。

(9)　これは主人のエウリピデスの作品のなかにしばしば見えた言い廻しをその奴隷の口をかりて述べたもの。（『アルケスティス』五二一他）。

(10)　一三ページ註（13）参照。

(11)　アカルナイの北の区。区所属は前五〇八年のクレイステネスの改革当時の市民の居住地により決定され、その子孫はどこに住んでも区所属に変更はなかった。それゆえディカイオポリスがコレイダイ区民でありながらアカルナイに住んだことは法制上可能であるが、アカルナイを故郷のように言っている点から見て、コレイダイ区民とあるのはいささか奇妙である。それゆえこの区名はおそらく言葉の洒落であろう。ラヴェンナ本古註はエウリピデスがその作品にしばしば跛者(chōlos)の主人公を扱ったので（四一一行参照）語呂の似た区の者とした、と説明しているが、それはディカイオポリスがこれによってこの名士への面会を容易ならしめうると考えた、の意であろう。

(12)　仮にせり出しと訳した ekkyklēma とは室内を場面としなかったギリシア演劇で室内の光景を観客に示すために用いた廻転装置。

(13)　三九九行参照。ラヴェンナ本古註にエウリピデスは「舞台の上高きところに現る」とあり、家のなかでは二階にいたものと想われる。

四(1)　古註は、エウリピデスが好んで作中に長科白を入れたので、長広舌の句により彼に気に入ろうとしたのだとしている。

(2)　「この」というのはラヴェンナ本古註によれば、オイネウスの面がちょうどエウリピデスの身近かにあったためである。テュデウスの父なるオイネウスはカリュドンの王であったがアグリオスの子らのために王位を奪われ、ヘラスを乞食姿で流浪した。テュデウスがテーバイを包囲中に歿した後に、彼の子すなわちおのれの孫のディオメデスにより王位に復された。エウリピデスのこの作は伝わらない。

(3)　アミュントルの息子のポイニックスのことは『イーリアス』（第九巻四三七以下）の彼の経歴告白により伝えられる。後世の伝えでは彼は父の妾のピュティアを犯したとの疑いから父により盲目にされたうえ勘当された。ペレウスを訪れて失明を癒され、ペレウスの子のアキレウスの師傅となったと

いう。この作品も現存しない。

(4) トロイア遠征軍に加わり、悪疾のゆえにレムノス島に独り置き去りにされた人物。三大悲劇詩人をはじめ多くの作者により扱われたが、ソポクレスのそれが現存する。エウリピデスのは前四三一年に上演されたが現存せぬ。

(5) ベレロポンテス或いはベレロポンはシシュポスの孫で、グラウコスとエウリュメダのあいだに生まれた。ポセイドンとメドゥサとのあいだに生まれた有翼馬ペガソスを得た。アルゴスの王プロトスの妻のアンテイアはこの美少年への邪恋を斥けられて、夫にこの少年を訴えた結果、彼はおのれを殺害するようにとの内容を暗号で誌した手紙を携え、リュキア王なるアンテイアの父の許に送られた。ここで王命により怪獣キマイラ退治をはじめ、さまざまの功業を立て、王の娘を与えられたが、後に神々に嫌われ、人々との交わりを避けて荒野に彷徨したという(『イーリアス』第六巻一五五以下)。後世、彼がペガソスで天空を翔けんとして、ゼウスの送った虻によって馬が悩まされたために落馬し、びっことなったとの伝えが生まれた。エウリピデスは彼を神々を否定する者として描いたが、ここの本文との関係につき古註は「天馬から墜ちたときの彼の汚れた姿を指す」としている。

(6) 一三ページ註(5)を見よ。

(7) テュエステスはペロプスとヒッポダメイアとのあいだに生まれ、アトレウスの兄弟。アトレウスとの不和からさまざまの悲劇が起った。エウリピデスでこの人物の登場する作品は佚し、どの場面で主人公が弊衣で出るか不明。

(8) イーノーとオルコメノスの王アタマスとの伝説はさまざまに伝えられているが、エウリピデスの採用したのでは、イーノーはアタマスの最初の妻で、バッカス信徒として山中を永くさまよい、行方不明とされたためにアタマスは後妻を迎えた。後にイーノーの生存を知った彼は彼女を連れ戻し婢の姿で家に入れた。これから悲劇が展開するが、イーノーの弊衣とは放浪から連れ戻されるときの彼女の姿であろう。

(9) ラヴェンナ本古註のいうように、襤褸に穴の多いことと、大神の万物を洞見する力とを比較した洒落である。

(10) 『テレポス』からの引用らしい。おそらくは乞食姿のテレポスが、その正体を現わさぬ前に会議する英雄の面前で偽ってテレポスを呪って放った言葉らしい。

(11) これもおそらくは『テレポス』からの引用。

(12) 風をよけるためにランプを覆うのに使って底の焦げた籠の意。籠もまた悲劇『テレポス』の主人公の持ちものだったことはディオゲネス・ラエルティオスにキュニコス派のクラテスがこの派に志したのは或る悲劇でテレポスが籠を携え、その他みじめな出で立ちなのを見てからだったとの伝えが見えるので明らかである。

(13) これも『テレポス』からの借用らしい。

(14) ラヴェンナ本古註はここを説明して、エウリピデスの母のクレイトが野菜売りの女だったのを非難したものとしている。エウリピデスの家系は卑しくなかったらしいが、アリストパネスは本篇四七八行、『蛙』八四〇行、『女だけの祭』三八七行、四五六行でエウリピデスの母が野菜売りの女だったとの世間の噂を取りあげているゆえに、ここも古註の説くように、皮肉な意味を含んでいるのかも知れない。

一五(1) テレポスがその槍創を浄めるために携えていたものとスターキーは解している。

(2) 「創作能力を奪う」の義ではなくて、『テレポス』の主人公の小道具を洗いざらい取りあげる、の意。四七〇行参照。

(3) しおれた葉っぱ——たとえば人参の根ではなくて、その葉のごとき極貧者の食物の意。

(4) 古註は「エウリピデスの『オイネウス』からのもじりであるが、シュムマコスは『テレポス』からのそれでもあるとする」と伝う。

(5) 「母者びと」については一四ページ註(14)を見よ。山人参は野生の植物で四六九行の「葉っぱ」と同様最下級の食物だった。

(6) エウリピデスの悲劇のもじり。ただし舞台では奴隷がエウリピデスの家の戸口を閉めるのではなくて、ト書きの通り「せり出し」のエウリピデスがひっ込むのである。

(7) 喜劇のことであるが trāgōidia(悲劇)に似せて作られた新造語 trygōidia。

(8) 語る本人の名は「正義(ディカイオス)の国家(ポリス)」を意味することに注意。「狂言とても」ではなくて喜劇こそは権力者に媚びずして自由に政治を批判せるものであった。ただし、主人公の言葉としては「狂言とても」は理論上おかしいが、

ここでは主人公が、あたかもパラバシスの合唱のように全く作者の代弁をしている。

(9)　クレオンと作者との関係については三七七行以下参照。「外国人を前にして」というのは、前年の『バビュロニア人』が春の大ディオニュソス祭の競演に上演され、デロス同盟諸市の人々をはじめ多数の外国市民が観衆のなかにあったので、作者に対するクレオンの告発理由が外人の前に国家の体面を汚すというにあったのと、本篇の場合とを比較しているのである。本篇は冬のレナイア祭に上演されたので、別に外人の観劇を禁止する規定はなかったが、春祭のように同盟市の貢租納入の時期ではなかったし、冬季には航海が稀だったので、外人の臨席者ははなはだ少なかった。

(10)　レナイオンの祭（レナイア）はディオニュソスのための冬季の祭で、今日の一―二月に当るガメリオンの月の十二日から数日間にわたった新酒の祭であって演劇の行なわれた場所のレナイオンはリムナイと呼ばれた地域にあったらしいが、その正確な位置についてはいろいろ議論がある。

(11)　デロス同盟諸市の毎年の醵出金。本来この同盟の規約では同盟市は艦船あるいはその代りに金員を出すことになっていたが、アテナイのみが海軍を維持し、他市が多く貨幣代納を採って海軍を怠るに及び、アテナイが醵出金を自由に処分してもこれに反抗する手段を失い、醵出金はあたかもアテナイへの貢租のごとくになった。そして毎年の貢租はディオニュソス祭に、観衆の面前に展示されたという。

(12)　居留外人（メトイコス）はアテナイ市に一定期間以上滞在せる外人で特別の場合を除き土地所有を許されず、金貸し、商業、手工業等に発展せる身分。いろいろの義務を課せられたが、参政権を全然認められず、各人がアテナイ市民の一人を保護者としていた。アテナイにはとくに在留外人が多かった。麩というのは同盟市の人々を籾に、市民を純白の小麦粉にたとえての表現である。

(13)　タイナロスはラコニア南端の岬。ここに海神であるとともに地震の神であるポセイドンの神殿があった。スパルタのヘロットの或る者が逃亡してこの神殿の避難所により一身の安全を図ったのを、スパルタ人は引き出して処刑した。前四六四年夏に起ったスパルタの有名な大地震はこの瀆神の結果と考えられていた。

一六(1)　メガラ市民の多くが下衣の製造で生計を立てていたことはクセノポン『メモラビリア』で有名である。それは夷狄の民である奴隷を使用して生産されたと誌されている。なお『平和』一〇〇二行参照。

(2)　これらをアッティカでメガラ人が売ることを禁ぜられたのが、五三三行に見える「メガラ人に関する決議」の結果とすれば、作者は事実を前後させているわけであるが、この有名な決議の前に（前四三三年の夏より前）、単にメガラ商品のアッティカへの輸入を禁止したとの推定がある。アテナイとメガラとの関係は前四四六年にメガラがアテナイの守備兵を殺戮して以来、すこぶる険悪なものがあった。メガラの植民市ビュザンティオンはサモス島のアテナイからの離叛をたすけ、最近には前四三五年以来のコリュキュラ・コリント間の争いに前四三三年アテナイがコリュキュラと同盟した後にも、コリントを応援していた。土地狭小で手工業や商業に頼り農業では自給自足のできなかったメガラに対しては経済的封鎖がもっとも有効だったのでかかる手段がとられたのである。なお七六〇行以下にディカイオポリスを訪れるメガラ人はにんにくも塩も持たず、ただ仔豚に装ったおのれの娘のみを連れている。

(3)　これは「政府が没収して公売に付した」の意であろう。

(4)　ペロポネソス戦役の原因を、ツキュディデスのように、アテナイ・スパルタ両国の政治力の対立から説明せずしてペリクレス一人の利害から、すなわち彼に親しかった人々ペイディアスやアナクサゴラスや彼の妾アスパシアに向けられた非難をそらすためにペリクレスが戦いをはじめた、とする巷説は『平和』六〇三行以下に見え、プルタルコスの「ペリクレス」三〇―三二節に詳説されている。ここでは上のような巷説よりもさらに荒唐無稽に、ちょうどヘロドトスの開巻劈頭に出る東西抗争の起源の説と同様に、かの大戦役が売女（ばいた）の争奪にはじまるとされているが、ツキュディデス（第一巻一三九・二）にメガラ人がエレウシスの神殿領にあった耕地を不法に耕作し、またアテナイの逃亡奴隷をかくまったことがアテナイのメガラ攻撃の理由とされており、この逃亡奴隷の事件が売女争奪の説話のもととなったことはありそうである。なおプルタルコス上掲所には、これ以来メガラ人は戦争の責任をペリクレスとアスパシアに帰しているとし、この五二四行以下の四行の有名な文句をその証拠にしている、と記している。

(5)　宴飲の席で酒の飲み残りを特定の器に投げ入れる競技。

(6) アスパシアは言うまでもなくミレトス生まれの才色兼備の白拍子でペリクレスの愛妾であった。プルタルコス（「ペリクレス」二四）には彼女がその家に雛妓を養っていた、と見える。この巷説は本篇のこの部分から生まれたのかも知れぬが、ペリクレスの在世当時からこの種の疑惑が保守的な人々の口端に上ったことは、ペリクレスを目の敵にした喜劇作者のヘルミッポスにより、かのアスパシアが自由人の女をペリクレスにとり持つ、との理由で訴えられ、ペリクレスの熱弁のお蔭で辛うじて免れた、という事実から察せられる。この巷説がおそらく本行の文句を生んだのであろう。

(7) ペリクレスをその勢力と稀有の雄弁のゆえにオリュンポス山に宮居する神々の王ゼウスにたとえたもの。その愛妾アスパシアはゼウスの妃たるヘーラーと渾名されていた（プルタルコス前掲箇所参照）。

(8) ラヴェンナ本古註に「抒情詩人なるロドスのティモクレオンは富を難じて宴席の歌を作れり。その冒頭の句は『おお、盲目（めしい）なる福の神（プルートス）よ、汝は／陸（くが）にもわだつみにも、／はた内陸にも姿を示さざれ。／黄泉と三途の河こそは／汝に似合いの住家なれ。汝ゆえにこそ／人みなによろずの禍は生まるるなれ』なりしが、ペリクレスの提案になる、かの決議はこの詩句に類似せり」云々と見える。ティモクレオンは前五世紀前半の人である。この有名なメガラ人についての決議の内容はツキュディデス（第一巻一三九・二）に「メガラ人がアテナイ支配圏内にある港湾及びアッティケの市場を使用することを禁ず」と伝えられている。それがペリクレスにより提案され、民会を通過した時期は明確ではないがブーゾルトは前四三三―四三二年の冬であろう、としている。

(9) 「メガラの決議」の結果メガラ人はアテナイはもちろん、黒海方面の穀物集散地たるビュザンティオンに出入りできなくなった。耕地に乏しいメガラの人々が食糧にひどく困った事情は本篇七二九行以下、とくに七五一―七五六行を見よ。なお七六〇行以下参照。

(10) スパルタ人のこと。この一行はやはり『テレポス』からの引用らしい。

(11) セリポスはスパルタの真東に当るキュクラデス諸島中のつまらぬ島で、イオニア人が住んでいた。仔犬もやはり無価値なものの例にとったわけである。告発と公売とはアテナイ人のメガラ商品に対する仕打ちをそのままラコニア人に移して仮定したもの。ただしスパルタ人のあいだにはアテナイにおけるような告訴常習者はいなかったし、アテナイ人がセリポス島に仔犬を輸出したわけでもないからメガラ人の立場とここの仮定とは充分に一致はしない。しかし作者はそのようなこまかい論理には拘泥しなかった。

(12) 古註はこれも『テレポス』からの引用としている。

(13) これは開戦に際しペリクレスがアテナイ人に公表した就航できる三段櫂船の数に一致する（ツキュディデス第二巻・三）。

(14) 艦長と訳した triērarchos はアテナイの富人が輪番で担当した公共奉仕の一つ。三段櫂船の建造ではないが、艤装や乗組員の徴募やまた漕ぎ手への日当の不足分の補充をせねばならなかった（ツキュディデス第六巻三一・三）。

(15) 古註によれば三段櫂船の船首にはパラスすなわちアテナ女神の木像が安置されていた。それは金箔を塗ってあったので、ときどき塗り替えを要した。

(16) これは古註にペリクレスがペイライエウスに建造した「挽き割りを売る柱廊」とされている。それは船渠に接していた。

(17) 饗宴の席に興を添えた女で日本の芸者に当るが、それはしばしば不見転（みずてん）であった。

(18) アテナイ人は当時十の部族（ピュレ）と呼ばれる行政単位に分れていた。これは古い四部族と異り血縁的にも地域的にも連絡のない三十の trittys を機械的に三つずつ組み合わせたものであった。もしラマコスの部族がアカルナイ人のと同じとすればオイネイスと呼ばれた部族であるが、ここはロジャースの主張するように単に「主張を同じくする仲間」くらいの意味かも知れない。

一七 (1) ゴルゴンはすでに『イーリアス』に、それぞれアテナ女神及びアガメムノンの楯の図柄として見えており、それは恐ろしい顔をしたものとされている。ヘシオドスによりケートーとポルキュスとのあいだに生まれ、オケアノスの彼方に住む三姉妹ステンノー、エウリュアレス、メドゥサがゴルゴンとされ、そのうちメドゥサのみが死すべき運命にあったが、ポセイドンと情交せる後にペルセウスにより首を切られた、と謳われている。ピンダロスでは、切られたメドゥサの首を見た者は直ちに石に化すとの説話が見られる。本行の文句はラマコスの楯にメドゥサの顔がたぶん浮彫りにされていたためで、ゴルゴンとはすなわち彼の楯のことである。一一八一行参照。

(2) ここも『テレポス』からの引用と思われる。ただし論理的にはラマコス

はまだディカイオポリスの主張を知らぬはずなのでこの一行は五五八行、五九三行を繰り返した挿入と見る校訂者もある。

(3) 五七四行に出たゴルゴンのこと。

(4) この字は **praeputium retrahere alicui** の義。喜劇役者は革製の男根をつけていた。次行の「武器」にも男根の義があった。

(5) 一〇ページ註(11)に述べたようにラマコスは前四二五/四二四年の将軍であった。本篇の上演は前四二五年一月であるから、ラマコスの将軍就任以前であり、それゆえ五九三―六一九行は後に再演の際に作者が挿入したものであるとか、ラマコスがこれより前に将軍だったことがあるとかなどの推定があるが、スターキーは「将軍」の字は『テレポス』からの借用に過ぎずとし、本篇の末尾においてはラマコスが将軍の資格では現れぬ点を指摘している。

(6) 郭公は声ばかりで知恵のない意味に使われた。三羽というのは彼の選挙がもちろん三人によって行なわれたのではないが、市民に大きな関心を起さなかった、の意であろう。

(7) 一三六行参照。

(8) これらの名の人物はアテナイにたくさんあったが誰を指したか明らかでない。要するに名門の出で無能な者を指したらしい。

(9) 前四世紀のアテナイの有名な将軍カレスの祖父か。

(10) エピルス沿海地方にいた勇猛な種族(ツキュディデス第二巻六〇・六、八〇・一)。彼らは前四三〇年、四二九年にアテナイ軍と戦っている。

(11) ディオメイアはアテナイ附近の区名。そこにはヘラクレスの祠(ほこら)のあったことが『蛙』六五一行に見え、ロジャースはこの祠に集った藪医者のことを言ったか、としている。

(12) カマリネ、ゲラはともにシシリー島南岸のドーリア系の植民市で、前者はシュラクサイの、後者はロドス島の人々により建てられた。これらの市に留まっているアテナイ人は使節である。本篇七六行に使節たちの「嗤(わら)うべき態度」とあり、原文の **Katagela** はこの **katagelōs** から作った架空の市名。「可笑市」の意なので「げらげら笑う」というのに因み、本文のごときルビを附した。蓋し **Katagela** は **Gela** に因んだ語呂合せだから。

一六 (1) 六一四行の「見ぬ」云々とともにディカイオポリスの自問自答であろう。

(2) コイシュラは前六世紀末葉のクレイステネスの祖母で、ここはこのアテナイ随一の名門の祖の意味で使われている。この名の娘はアルクメオン家にはたくさんあった。『雲』四六行以下、八〇〇行参照。

(3) 組合と訳した **eranos** は相互扶助のための血縁者その他のクラブ、及びその仲間の掛け金を意味した。デモステネスにそれを怠る者がもっとも破廉恥な者として述べられている。

(4) 「皆の衆」の原字は ō dēmos であるから、コロスのアカルナイ人ばかりでなく、この劇の観衆を含めている気持である。

(5) アナパイストスは —◡◡— を主とする韻で、アリストパネスではパラバシスの本来の部分を指した。

(6) コロスの練習を指導したのは通常競演される劇の作者であった。すなわちここではアリストパネスを指す。

(7) もっともよい例は前四二八年、ミュティレネ市民がアテナイに叛いたときクレオンの主張により市民全部を死刑にし、婦女子は奴隷に売るべしといったん決議した後に後悔し、翌日の民会で穏和な処置を主張したディオドトスの動議を可決した際のことであろう(ツキュディデス第三巻三六以下)。

(8) これは多くの註釈者によりソフィストのうちでも弁論に長じたゴルギアスを頭として前四二七年アテナイに送られ市民を熱狂せしめたシシリー島のレオンティノイの使節団のことを暗に諷したものと解されている。当時レオンティノイはシュラクサイに攻められ、アテナイに求援したのであったが、ゴルギアスの弁舌はアテナイ人を説得するに成功した。これ以来アテナイはシシリー島と関係を生じ、遂に前四一五―四一三年の悲劇的なシシリー遠征となった。ただし作者のこれまでの作品、すなわち『バビュロニア人』や『宴の人々』が、本文にいうようにこの点についてどの程度の影響力があったかは今日不明である。

(9) 六四二行以下に見えるのと同様にデロス同盟諸市の一部と見る。

(10) 「菫の冠つけたる」はアプロディテについて用いられた形容詞で「神々しい」の義。また菫 (**toion**) はイオニア人たるアテナイ人がその音のうえから好んだ花だった。ピンダロスは有名なアテナイ讃歌のうちで『おお、輝きて菫の冠つけ、歌に聞えしヘラスの支柱(ささえ)、その名も高きアターナイ、神さびしこの市(まち)』と謳い、それによってアテナイの国賓となったが、一方祖国テ

ーバイから一千ドラクメの罰金を科せられたという。

(11) 大王とはペルシアの大王。スパルタとペルシア王朝との関係については、七ページ註(15)参照。ツキュディデス(第四巻五〇)によれば、本篇上演の年、偶然にアテナイ人に捕えられたペルシアからスパルタへの使節の持した、アッシリア語で書かれた大王の書簡には「たびたび使節到来すれど、各人の言い分を異にし、要求を理解し難し」とあった。ただし以下に述べられる大王の御下問はむろん作りごとである。

(12) アテナイの外港のペイライエウスから二十マイルほど沖にあったドーリス人のポリスで、海上に発展し、アテナイとはつねに仇敵の関係にあった。前四五八―四五五年アテナイはこれを征服し、その城壁を毀して海軍を引き渡させ、かつアテナイへの貢租納入を命じた。ペロポネソス戦役開始直前の交渉でスパルタ人はアイギナの自治回復をアテナイに申し入れたが聴かれず、開戦第一年にアテナイ人はアイギナ島民を逐い出し、その後間もなく自国の移民を送った。アイギナ島民はスパルタの力でアルゴスとラコニアの境なるテュレアに土地を与えられ、一部はヘラス各地に分散した。本文にスパルタが「アイギナを要求している」とあるのは上述の自治回復の要求のことであろう。

(13) ここはアイギナ島とアリストパネスとの関係を暗示するところとして重要である。この点については

(a) ラヴェンナ本古註の本篇一三ページ註(3)にある「クレオンが彼に対し非市民なりとの訴えをなした」との伝え。

(b) プラトンの『ソクラテスの弁明』への古註に含まれるアリストパネス伝中に「彼はまたテオゲネスがアイギナ誌に載するところによればアイギナに分配地を与えられたり」とあること。

(c) ピンダロスにアリストパネスの息子でアイギナの人たるアリストクレイデスの優勝を謳っていること。

これらの所伝を綜合して考うべきである。この行の記事は全く冗談であるが、作者がアイギナ島と全く無縁であったならば、かかる冗談も筆にのせられなかったであろう。

(14) 原文は「日当を提供したり」である。それは作者を讃めさせるためであるが、ロジャースはここに日当提供によって民衆を味方にせんとするクレオンへの諷刺を見ている。

一九

(1) 以下はアカルナイの炭焼き老人たちにちなみ、炭火のさかんにおこる状をのべて、そのように猛烈な勢いでアテナイの現状を攻撃する旨を告げている。

(2) タソスはエーゲ海北岸の島。これは塩、酢、油を混合した一種の塩水であった。「輝く」と訳した語は本来「輝くリボンをつけた」の義で、クーロンによればタソスのソースをかき混ぜた際に表面に油が環状に浮くことから来た形容。

(3) これはフライの衣ではなくて、別にパン菓子を焼くための準備の意味。

(4) 原字は「demos(区)を同じくする」の意で、やはり芸神と同じくアカルナイ人なるわれらの許に、の意。

(5) 航海者が海上安全を海神ポセイドンに祈ったために生まれた形容。老人どもは昔は海戦に参加したのでこの神に頼ったが、今では歩行にも自信がなくて杖をついている、の意。

(6) アリストテレスの『アテナイ人の国制』七章一節、五五章五節に見える石で、その前で誓いが行なわれるとされており、『蜂』三三二行にそのうえで判決の投票が数えられるとされている石が同一物だろうとされている。

(7) 「裁き」の原字は dikē であるが、この字は「正義」をも意味し、悲劇に「正義の光明」の句が使われるのをもじって、勝味のない裁判の成行きの義に使ったもの。

(8) アプロディテへの讃歌二一九―二三九行に不死を得たためにいつまでも老齢の苦をつづけた者として見える。

(9) 裁判所には原告、被告の弁論の時間を限定するため水時計が備えてあった(『蜂』九三行、『アテナイ人の国制』六七章三節)。「漏刻のわきで」とは「裁判所で」の意。

(10) 告訴されて、有罪の判決を受けること。

(11) 古註は喧嘩ずきの能弁、かつ騒々しい人物だったとしている。

(12) このツキュディデスはオロロスの子で史家として有名な同名人ではなくて、メレシアスの息子。名門に生まれキモンと姻戚関係にあった。キモンの死後保守派の領袖としてペリクレスと争った。前四四二年に陶片追放により十年間の国外放逐にあった。帰国の後老齢の身で告訴された(『蜂』九四七

行参照)。保守的なアリストパネスが彼に同情しているのは当然であるが、アリストテレスも『アテナイ人の国制』二八章で彼をニキアスとともに「善かつ美、また政治的能力豊かで、国家を祖国の伝統に従って導いた者との定評があった」としている。

(13) これはツキュディデスを訴えた、次行のケピソデモスに黒海北岸のスキュタイ人の血が血統上あったところからいったもので「スキュタイ人のやくざ者」ぐらいの意味。この句はアイスキュロスの『縛られたプロメテウス』の「スキュティアの道へ、未踏の荒野に(われらは来りぬ)」の句が有名となっていたので使われたらしい。

(14) リュシアスにはケピィソデモスなる告訴常習者が見えているが不明。

(15) すでに本篇五四行に出た、アテナイ市の一千人の公共奴隷。弓をもって治安に当った。彼らがスキュタイ人だったところからケピソデモスを罵ってかく言ったもの。

(16) 原文は **tēn Achaian** で難解な句である。この女神の形容詞を古代人は **achos**(悲哀)すなわち娘のペルセポネを奪われた女神デメテルの悲しみから来たと解釈した。ただし「嘆きの女神」がいかなる難題を持ち出すものと考えられていたかは不明で、本文を変改する試みもいろいろ行なわれたがまだ満足すべきものはない。

(17) この字は「競技に優れし者」を意味し、スターキーは **court-wrestlers** と訳して法廷の弁舌に秀でた者という普通名詞と解しているが、古註は実在の人物としており、『蜂』五九二行にはクレオニュモスと並んで見え、**Hol-cades** の断片にも出て来る。それゆえケピソデモスとともにツキュディデスを訴えた者とすべきであろう。

(18) 後の「射斃し」とともに相撲と弓術の言葉であるが、これらはエウアトロスという名とケピソデモスのスキュタイ系の血統から使った表現で、ツキュディデスがその道の名人だったという意味ではない。スキュタイ人は弓術に秀でているので有名だった。

(19) ケピソデモスの父はアテナイ人であるが、その父の母あるいは妻がスキュタイ人であったことを言ったものか。

(20) 原字は衆道、若道を行なう蔭間(eurȳprōktos)すなわち「anus の広い男」。

(21) クレイニアスの息子とは有名なアルキビアデスである。すでにここでアルキビアデスは悪徳の骨頂とされている。

二〇(1) アリストテレスの『アテナイ人の国制』五一章に「アゴラノモイ〈十人〉も抽籤せられ、五人はペイライエウスに、五人は市にこれを置く。清浄にして純正なものが売られるようにすべての商品を監督するのが法律で規定された彼らの役目である」と見えている。古註に彼らは皮の鞭を携えていたとあり、ここはその鞭で彼らを象徴したのである。八二四行、九六八行に主人公のこの役への呼びかけが見える。

(2) 籤に当った、というのは当時アテナイの役人が大部分抽籤により選ばれたのを言ったもの。「レプロイ産の」と訳した原語は古註にいろいろ説明されているがはっきりせぬ文句である。**lepō** すなわち「皮を剝ぐ」という字が暗に考えられていたことは諸家の認めるところで、ラヴェンナ本古註に「アテナイ近郊に **Lepr**〈**oi**〉なる土地があり革鞣が行なわれた」とある。

(3) アテナイ民主政治の悪しき産物として作者がつねに敵視したもの。彼らはデモステネスに極悪非道の例として見えている。

(4) これは決議や条約を誌した長方形の大理石板碑。アテナイのアクロポリスからはそのおびただしい数が出土し、公刊されている。

(5) アテナイのドーリア系方言。

(6) 本文には単に **philion** とあるだけであるが、**Zeus philios** を指す。この神は友情をすこぶる重視したギリシア市民の倫理の一つの現れであり、友人同士の日常会話においてもしばしば誓いの場合に呼びかけられている。

(7) この字の実際の意味は明らかでない。ロジャースはこの当時から舞台がオーケストラより高くて、オーケストラからそれに上る意味とし、スターキーはオーケストラのなかに(すなわちまだ舞台とオーケストラとが同一平面にあったとして)ディカイオポリスが商品を売るための台を設け、それに商品としての娘たちが上るように言ったものとしている。

(8) 心を傾けてというのをもじったもの。

(9) いうまでもなく奴隷として売られるのであるが、古典古代の奴隷制社会では父が自分の子を売るということは東洋社会におけるほどには行なわれなかった。ここと八一七行の記事は、架空ではあるが、窮乏の極まるところ、子供のみならず妻や母まで売ることがあったと想像せしめる意味で貴重である。

(10) この句はおそらく『Susarion にはじまるメガラの茶番劇に出て来そうな工面」の意。『蜂』五七行には「メガラから盗んで来たお笑い」のことが見えており、ロジャースはそれが本篇の以下の部分を指したのではないかとしている。

(11) いうまでもなくヘルメスは商業の神であった。

(12) エレウシスのデメテルの密儀。この密儀には特定の儀式を経て得度した者だけが参加できた。そして得度の式に仔豚を犠牲獣として使ったことは『平和』三七四―三七五行で明らかである。

(13) これは「いろりのそばで酒を飲む」(プラトン『国家』第四巻四二〇E参照)と言う、鼓腹撃壌を表わすことわざをもじったもの。メガラ人の窮状は以下におけるメガラ人の答や、『平和』四八三行以下に明らかであるが、ディカイオポリスは彼の答を上のことわざと聞きちがえたので、酒宴につきものの笛吹きの女を連想して次行のように答える。

(14) 評議会や民会にかけるべき議案をあらかじめ審議する役。貴族政の法律擁護者、民主政の評議会に対して寡頭政の機関であるとアリストテレスは述べている。アテナイではシシリー島遠征の結果国家が苦境に立ってから十人からなるこの役が設けられ、前四一一年上演の『女の平和』に登場する。

(15) いうまでもなく喜劇に常套の「意想外の句」である。

(16) 本文は単に「塩」であるが、古註にはメガラの外港のニサイアで塩が固められる、とあるゆえにかく訳した。メガラが在来、仔豚や塩を輸出していたことは五二一行から察せられる。メガラが占領されたのは前四二四年であるが、ツキュディデス(第三巻五一)にアテナイ軍が前四二七年にニサイアのところの岬、あるいは島を占領したとあり、塩田をも支配していたゆえにこの反問となったと思われる。

(17) プルタルコス(『ペリクレス』三〇)によればペロポネソス戦役開始直後のころカリノスの提案により、メガラ人に対し必ず年に二度侵入すべきことを将軍たちは宣誓すべしと定められ、事実これは毎年行なわれていた(ツキュディデス第四巻六六)。開戦第一年にはペリクレスが司令官として侵入している(同第二巻三一)。

三 (1) ディカイオポリスは「人間のいわゆる仔豚(すなわち女陰)」と言おうとしたのである。二一ページ註(3)参照。

(2) アテナイの生まれであるが、メガラ人のために戦い、その際自分の愛する少年のために命を失ったとされる人物。後世までメガラ人に尊敬され、ディオクレアという祭が行なわれた(ラヴェンナ本古註)。

(3) 「仔豚」の語は俗語で女陰の陰語として使われた。以下これを利用して猥雑なユーモアが展開されている。

(4) 祭儀に当って尻尾のつまった動物、その他一般に不完全、不健康なものは犠牲獣として使われなかった。

(5) ラヴェンナ本古註は「男の posthē(男根)のごとくに」と補っており、この説明によってこの行の意味は想像されよう。

(6) 「処女を奪う」こと。古註はアプロディテの愛人のアドニスが野豚に殺されたとの説話のゆえにこの女神に豚を捧げぬ習慣だったとしているが、アテナイオスはカリマコスあるいはゼノドトスを引き、アルゴス人がこれを供えたとしている。

(7) ラヴェンナ本古註はこの字がときに男性性器の陰語として使われたので、ここに持ち出した、としている。

(8) ピバリスはアッティケの境に近いメガラ領の低地で、そこにできる無花果は、干無花果を作るのに最良との定評があった。アテナイオスに詳しい。なお『平和』一三五〇行では無花果が女陰の意味で使われているが、クーロンは干無花果の字が両義を有ち、「豌豆」と対をなしていることを指摘している。

(9) ヘラクレスは食いしんぼうで有名だったのでそれに呼びかけたもの。

(10) 原字の Tragasaia という形容詞は Tragasai という地名が Troas 地方にあったのを利用し、tragеō, trōgō(噛る、食う)の字の意味を含ませて「貪り食う国」の意に用いたもの。ロジャースは Aetallian=Eat-all-ian として Aetolian を響かせ、スターキーは Hungarian としている。

三 (1) 原字の 1 khoinix は一・〇九リットルである。塩もにんにくもともにメガラの名産だったのに今はそれらの少量と引きかえに二人の娘を売らねばならぬところにメガラ人の窮状がよく示されている。

(2) 二〇ページ註(9)参照。

(3) 五一七―五二二行参照。

(4) phainō という字が「明るみに出す」と「告訴する」の二義があるとこ

ろから言った洒落。「灯心もなしに」というのは「筋道の立った理由もなしに」の意であろう。

(5) 七ページ註(7)参照。ここではとくに彼の体の馬鹿に大きい点から引かれたと思われる。

(6) クレオンの歿(前四二二年)後、彼に代って民衆煽動者として活躍した。この時代にはやはり告訴常習者の一人だったことがこれでわかる。『雲』の八七四―八七六行には、彼が一タラントンの金をソフィストに払って裁判のかけ引きを勉強したことが見え、『女だけの祭』八三九―八四五行には彼の母が金貸しをしていたことが非難されている。

(7) 「頭を剃った」とあるのは kēpos と呼ばれた頭の刈り方で、前頭部の毛を長くちょんまげ風にのばしてまとめ、その周囲を剃り上げたもので柔弱な伊達者の好んだところであった。

(8) 一一七三行にも出て来るが、これはロジャースもスターキーも作者の先輩である有名な喜劇作者とは別人であろうとしている。彼は本篇上演のときにエウポリスとともに賞を争い、二等となったがすでにひじょうの高齢であった。次年の『騎士』でも作者はこの先輩を大いに揶揄(やゆ)しているが、同時にこの老作家の実力は充分認めており、本篇の悪罵とははなはだ調子がちがう。老クラティノスに対する作者の評価については『騎士』五二六―五三六行を見よ。

(9) アルテモンは単に形容詞の都合から引合いに出されたもので「輿で運び廻されるアルテモン」ということが著名だったので、これに似た原語の形容詞を使った結果である。アルテモンについてはプルタルコスによるとペリクレスがサモスを攻囲したとき(前四四〇年)、土木の技師であったが跛者だったため輿で舁ぎ廻されながら指揮をしたとあり、また別にヘラクレイデスの伝えとしてもっと古い同名の人物に、俄か分限でつねにペルシアの貴人のように輿にのって歩いたために「舁ぎ廻されるアルテモン」と呼ばれた者があったとしている。ヘラクレイデスが拠りどころとするアナクレオンの、このアルテモンを非難する詩句はアテナイオスに見える。

(10) これは即興の才のあったことであろうが、ロジャースはクラティノスをかの喜劇作者とは別とする結果この一行は不適当とし、挿入として訳出していない。しかし別人としても必ずしも挿入と見る必要はないと思う。

(11) 直訳すれば「Tragasaios を父として」。Tragasaios は八〇八行では trōgō からの新造語であったが、ここは悪臭の強い牡山羊 (tragos) からの造語。

(12) ラヴェンナ本古註に貧乏絵師とあり、アリストテレス『詩学』には実物より悪く人物を描いた画家としてパウソンの名が見える。『女だけの祭』九四九行以下には断食を好んだ旨を諷され、『福の神』六〇二行には貧神の食卓仲間とされている。

三(1) アッティケの区 (demos) で、ペリクレスの所属区として有名であるが、正確な位置は不明。

(2) 『騎士』一二六七行に、同じく窮乏して餓えたトゥマンティスと並記され、『蜂』七八七行には『意地悪いひやかし手』とされている。

(3) ボイオティア人が誓言、懇願に用いた句。

(4) 原字は「骨笛」でラヴェンナ本古註に「牡鹿の骨から笛をつくった」とある。

(5) ラヴェンナ本古註によれば「犬の尻をのぞけ」という句(『女の議会』二五五行参照)ではじまる端唄であり、異説もあるが一般にこの解釈がとられている。

(6) 五ページ註(11)参照。

(7) イピクレスの子でヘラクレスのレルネの沼地に棲む水蛇(ヒュドラ)退治に加勢し、ヘラクレスはおのれの妻メガラを彼に与えた。ラヴェンナ本古註はこの英雄がテーバイで尊崇されたとしている。

(8) 四つ翅は「四つ足」とあるべきところをふざけたものであろう。ラヴェンナ本古註は「四つ翅」とは蝗のことであるとしている。

(9) これは料理に使われた英名 marjoram と呼ばれる植物。

(10) 「木枯し」は自由訳で、晩秋、初冬の風ではなく、春の北風とアリストテレスは説明している。従って必ずしも鳥「追い」ではないかも知れぬが、「木枯し」としたのでかく訳した。

(11) 原語は piktis で書写板の意があったことは確実で、その次の iktis (野猫或いは一種の貂)と語調を合わせるために入れたことは明らかであるので、ロジャースは easels and weasels (訳せば「画架といたち」)と自由訳しているが、或る不明の動物でたぶん brock あるいは badger だろう

とするのが通説である。

(12) ボイオティア地方の大きな湖沼。今日は英人により干拓されたが、それまでその鰻は有名であった。ギリシア人は一般に魚類を大いに愛好したが、鰻も珍味とされた。

(13) アイスキュロスの佚作『武具の審判』の句のもじり。原句は「ネレイデスなる乙女たち五十人の主」で、海神ネレウスとドリスとのあいだに生まれた五十人の乙女ネレイデスの一人なるテティス、すなわちアキレウスの母に呼びかけた句。

(14) ラヴェンナ本古註に「コロスは公共の費用で（すなわち実は合唱団世話人の出費で—訳者）振舞われた」とある。

(15) ラヴェンナ本古註は食いしんぼうなので挙げられたとしている。

(16) これはエウリピデス『アルケスティス』三六七行以下でペライの王アドメトスが、彼の身代りに死に臨む妻アルケスティスに与える言葉。その原句は「わしに信実を竭したただ一人のおぬしとは、わしが死んだとて決して離るることはないぞ」である。

(17) アテナイ市の南に当る海岸の区。ここはペイライエウスがアテナイの外港となる以前にはアッティケ第一の船着場だった。

(18) 実際は釉薬をかけぬ陶器。アテナイ市の西北部には「陶師区」があって、その製品は永い歴史があり、前五世紀のころにはギリシアの陶器製造の中心だった。

(19) ボイオティア人のあいだではゼウスとアンティオペとのあいだに生まれたアムピオンとゼトスの双生児を指したと考えられている。

二四 (1) 船渠はペイライエウスの軍港にあり、海上覇権を生命とするアテナイにとってはこれを焚かれては大変であった。おそらくここを焚くという噂が当時実際にあったためにこの問答となったとおもわれる。

(2) 反抗の言葉。ディカイオポリスの暴行に対して「誰か見届けてくれ」の意。

(3) 前行の「ひびが入り」と訳した原語に対するラヴェンナ本古註に「火を入れる際に毀れる陶器をかく呼ぶ。火で毀れた陶器はいやな響きがする」とあるのを参照。つまり告発常習者をできそこないの陶器にたとえたのである。

(4) 直訳すれば「会計報告の義務のある者を」。民主政下のアテナイでは役人は一年の任期の終った後、その執務報告を公表せねばならなかった。前五世紀については『蜂』五七一行、五八七行に明らかであるし、前四世紀のくわしい規定は『アテナイ人の国制』四九章三節に見られる。市民は自由に報告中の不審の点を訴えたので、告訴常習者にはこの制度を悪用する機会が大いにあった。それについては『騎士』二五九行、八二五行を参照。

(5) 器は kylix（平鉢）であるゆえ「薬を調合する」とあるべきをもじったもの。kylix は普通は酒をのむための杯に使われる字であるが、ここは上のような意味なので「平鉢」と訳した。

二五 (1) ラヴェンナ本古註の一解説は「ボイオティア人が百姓なのでかく言ったものであるが、真の意味はこの告訴常習者を利用して大いに利益をえようとの意」としている。

(2) 今日の二—三月にわたるアンテステリオンの月に行なわれたディオニュソスの祭アンテステリアは、その月の十二日にはじまり、十一日の夜中からアルコン・バシレウスの妻とディオニュソス神（の木像）との、ブコレイオンにおける「まぐわい」の儀式が執り行なわれ、十二日の午後からコエスすなわち「酒灌ぎ」の祝が行なわれた。この行事は太古パンディオンの王だったとき母殺しの罪に穢れたオレステスがアレイオスパゴス会議の審判を受けるためにアテナイに来たときに由来するとされた。誰も母殺しのオレステスと盃をともにすることを欲せず、しかも彼のために乾杯する気持はあったので、別々の盃で乾杯し、またこの王が大盃に注いだ酒を早く飲み干した者に菓子を褒美に出し、飲み滓をディオニュソスの神域に捧げてこぼす(cheō)ように命じたことからこの祭の名が起ったという。酒は政府が出し、肴は一部は政府が出したが、一部は各自が持ち寄った。行事はリムナイのディオニュソスの神域で行なわれたが、もちろん全市民がこれにあずかったわけではなく、大衆の娯楽であった。参加についての規定の詳細は不明。

(3) ラヴェンナ本古註は「これは従軍せる者の食物」としている。なお一一〇一行参照。

(4) 「革の鞭で打つぞ」の意。

(5) これは「急いで」の意で、古註は古くからあった歌謡の句を引用したものとしている。

(6) ギリシア人は横臥して饗宴を行なった。ハルモディオスはアリストゲイ

トンとともに僭主ヒッパルコスを暗殺した美少年。ここの「ハルモディオス」はハルモディオスを頌めたたえた酒宴の歌の意味。

(7)　これは葡萄樹を支えた杭。樹木に乏しいアッティケではそれは安価ではなかったらしい。

(8)　これは葡萄樹を伐りたおすことにより酒の醸造まで不可能にするの意で、スパルタ軍の暴行への不平である。

(9)　ラヴェンナ本古註は「贅沢な鳥料理の準備中なるを示すため」と説明している。

(10)　キュプリスはアプロディテの異名。カリテスは「優美」の化身。アプロディテの随伴者であった三人の美女。

(11)　ラヴェンナ本古註は「絵師ゼウクシスはアテナイのアプロディテの神殿にばらの花の冠をつけて若さの美に輝くエロスの姿を描けり」としている。ゼウクシスは当時第一流の画家であった。

(12)　直訳すれば「さらに三つのものを加える」であるが、ラヴェンナ本古註が示すように「おのれの体力は老いてますます旺んなり」という裏の意味が含まれている。

(13)　以下についてはラヴェンナ本古註に「性交にたとえて」とか「性交の体位を述べるかわりに百姓らしくかく述べた」とも説明されている。

二六(1)　クテシポンについては不明であるが、ラヴェンナ本古註は肥満して太鼓腹の者だったとしている。コエスの祭の早飲み優勝者への賞品はときにより異ったようであるが、古註はオリーヴの枝の冠と葡萄酒を容れた革嚢だったとしている。ロジャースが註で示しているように人間の皮を剝いで革嚢にするという譬喩はギリシア人のしばしば用いたところで、クテシポン云々は日本流に言えば大きな酒樽が賞品に出る、の義である。

(2)　アッティケの北部、パルネス山の西部の小邑で、アカルナイの北方に当り、アテナイからアカルナイを経てボイオティアのテーバイに至る街道に沿うていた。

(3)　古註は「ピュレーの人々は白衣を着たり」としているが、この句についてロジャースは喪服は黒色ときまっていたので、百姓がはなはだしい不幸にもかかわらず白衣でいるのをひやかしたとしている。

(4)　直訳すれば「あらゆる牛糞のなかで」。「結構ずくめのなかで」という常套句を百姓ゆえにもじったもの。

(5)　スターキーは **derkomai** が「はっきり見る」という字であるゆえこの百姓の名は「目明き」を意味し、そこに失明云々との対比があることを指摘している。

(6)　古註に「公に選出された医師たちが公共役員として無料で診療した」とあり、これはアテナイに限ったことではなかった。ヘロドトス（第三巻一三一）によれば南イタリアのクロトンのデモケデスはアイギナ、アテナイ、サモスで公務医員として活動し、年俸一タラントンの高給を与えられていた。なお前四世紀初葉になるとアテナイは国庫窮乏し公務医員を備えなかった（『福の神』四〇七行以下参照）。

(7)　ロジャースは前註に出る公共医師としている。

二七(1)　直訳すれば「出征兵の登録が行なわれるときに」（アリストテレス『アテナイ人の国制』に詳しい）。その際におのれの名を除いてもらうような不正が行なわれ得たのは『騎士』一三六九行、『平和』一一八〇行から察せられる。

(2)　本文は単に戦さ (**machai**) であるが、それは次の **Lamachoi** と語呂を合わせてあるので「負け」の二字を加えた。

(3)　これは古い時代の貴族の武ばった邸宅の戸口のさまをいったもの。背景のラマコスの家の戸口には彼の好戦的性格を示すために武器などが吊り下げられていたとロジャースは想像している。

(4)　字義的にはアッティケへの「侵入口」である。次行により敵はボイオティア人であるから、前出のピュレを通る道の山中の部分であろう。この他ボイオティアとアテナイとの通路はボイオティアの東端からオロポス、デケレイアを経てアテナイに至るものと、エレウテライからエレウシスに出るものとあった。

(5)　コエスの祭の次の日の祭。キュトロスは土瓶のような土器であり、古代人が考えたところでは、デウカリオンのときの洪水に助かった人々が壺で煮た料理をオリュンポスの神々ではなくてディオニュソスと地下のヘルメス（すなわち亡霊の同伴者と考えられたヘルメス）に捧げたことにはじまったとされ、アルコン・バシレウスの妻その他上流の女どもが壺で煮た料理を祭壇に供えた。

（６）附近の島に住み、三頭あるいは三つの胴を持ち、また六手六足であったと伝えられる。ヘラクレスはこの怪物の飼う牛群を奪うことを命ぜられて果した。ここで主人公がゲリュオネスを持ち出したについて、ラヴェンナ本古註は「この一行の意味はゲリュオネスのごとき、ヘラクレスをも悩ました強者と汝は争うか、である」とし、別の古註は主人公が蝗（八七一行参照）あるいは散乱した鳥の羽根（九八八行参照）を手にとって示すものと考えている。

二八（１）ここは原典をいかに読むかでたいへん違った解釈となる。ロジャースとともに写本を認めれば本訳のようになる。それは僭主ヒッパルコスの暗殺者として英雄視されたハルモディオスも素行はあまりよくなかったと解し、酒宴の歌に前出のとおり「いとしのハルモディオスよ……」とあるのを作者がもじったと解する。スターキー、クーロンは原文に手を加えて酒宴歌の原形を生かし、「踊り子たちもすでにいるし、『いとしのハルモディオス』の歌もはじまっている」と解する。

（２）この原字は本来「上に書く」の義であるから、ここは「彼の楯の図にゴルゴンなどを描いたせいだ」との意を含んでいるが、この動詞の medium 形は在留外人が市民の一人をそのパトロンに選んで、自らをその被護者として登録することに使われた。それで訳文のごとき意となる。

（３）直訳すれば「閉じろ」。せり出しを元へ戻す命令と思われる。

（４）原字 thrion は「無花果の葉一枚」の意。アテナイ人は食物を無花果の葉で包んで食卓に供する習慣があった。ここは古い塩魚をこの葉にくるんで出征に持って行くのである。塩魚については二五ページ註（３）参照。

（５）ここに単に thrion とあるのはラヴェンナ本古註がディデュモスを引いて説明するところでは牛豚肉の脂肪に蜜、小麦粉、卵、乳を混じて無花果の葉にくるみ、肉汁の中で煮たものですこぶる美味とされていた。

（６）饗宴の場で。

（７）ラヴェンナ本古註が「ラマコスが蝗を食わねばならぬのを軽蔑するため」と説明している通り、兵士は行軍中かかるものを食うことがあった。

（８）ゴルゴンの図のついた楯を誇るラマコスをひやかすために勝手に作った名。ツキュディデスによればラマコスはクセノパネスの子であった。

二九（１）重箱と訳した原字は正しくは「籠」である。本文の意味は単にラマコスの句を真似たとも見られるし、「ありあまる珍味を籠の外につるせ」の義にもとれる。

（２）コロスの世話人たるコレーゴスの役をしたこと。この役は富裕市民が輪番で負担し、コロスの練習期間の手当てや衣裳その他の出費を受け持ち、さらに本文にも見えるように競演の後にはコロス、合唱指導者と作者とをご馳走してねぎらった。金離れのよい者をこの役にえた作者はしからざる者に比し競演の上で有利だった。

（３）この「わし」を作者アリストパネスのことをコロスが代弁していると見るか、コロスを指すと見るかは、写本に二種の本文が伝わるので学者の見解が対立しているが、作者がカリストラトスの名で作品を発表していたためにこの代理人のみが饗宴に呼ばれた事実を指すとのロジャースの解釈に従った。

（４）これは普通の烏賊とは異り、アテナイ人がひじょうの珍味としたもの。

（５）有名な悲劇の主人公オレステスと同名のアテナイ人はこのころにはなかった。ロジャースの指摘するように『鳥』七一二行、一四九一行はこの名が追剝ぎの別名だったことを示している。

（６）二二ページ註（８）参照。

（７）これは約十一年後にラマコスがシシリー島で戦死したときの状況と不思議に一致している。

（８）これは楯の表面のゴルゴンの図柄を傷つけた、の意。

（９）前出。実はラマコスの兜の前立てをなす駝鳥の羽根。

（10）一〇七七行に見える、ボイオティアからの侵入者。

三〇（１）原字 Lamachippion は、ラマコスの名に名門に多かった馬（hippos）の字をつけて持ち上げ、さらに -ion の指小詞をつけてけなした造語。

（２）これは xymbolē の字が前行の「合戦」の義と饗宴の際の客人どもの費用の持ち寄り、すなわち「割り勘」の意味とがあったので、ラマコスの「合戦」の語にさっそく洒落たもの。ロジャースは charge の字で両方を訳している。コエスの際の競飲にはご馳走は持ち寄っても、金を取り立てることはなかったことが本文によってわかる。

（３）これは本来神々のための医師を意味し、アポロンの呼び名となり、また医者、救い手をも意味した。

（４）パイオニア祭なるものについては他に伝えがなく、パイアンから急造し

た言葉であろう。

(5)　二六ページ註(7)参照。

(6)　これは競飲会の審判員であるが、同時に観衆のなかにいる五人の競演審判員を暗示している。

(7)　アテナイの九人のアルコンの一人。その名は「王」を意味し、原始王政の名残りを物語る。もっぱら祭祀を司り、レナイア祭はこの役人が主宰したので演劇も彼が管掌した(『アテナイ人の国制』五七章)。またコエスの競飲を主宰したのも、確実ではないが、多分バシレウスであったとおもわれる。バシレウスは観衆中で前列の特別席にいたから、ロジャースはディカイオポリスが彼の行方を訊ねた後に身ぶりか何かで目の前のバシレウスを指し示したと想像している。

(8)　コエスの競飲優勝者への賞品。喜劇優勝者の賞品は蔦の冠であった。

(9)　スターキーはディカイオポリスが舞台でいま一度その革嚢いっぱいの酒を飲んで見せると想像しているが、単に空の革嚢を示すことによって今さき行なわれた競飲における優勝ぶりを暗示したと見てもよいであろう。

(10)　原字は **tēnella**　これはアルキロコスの優勝歌以来普及した言葉で、本篇一二三〇行へのラヴェンナ本古註や『鳥』一七六四行への古註はそれを伴奏の笛の音を真似たものとしているので、本来は「ぴぃぴぃ」など訳すべきだが意訳した。

騎　士

登場人物

デーモス家の下男甲　　デモステネス。
同乙　　ニキアス。
同丙　　パプラゴニア人[1]、政治家クレオンに擬す。
豚肉屋　　名はアゴラクリトス。
コロス　　アテナイの騎士より成る。
デーモス　　右の下男たちの主人。アテナイ国家に擬す。

場　面

背景はデーモス家の屋敷を示す。

〔下男甲（デモステネスの似顔の仮面をつけている。以下デモステネスと記す）体をさすりながら屋敷のなかから出てくる〕

デモステネス　ああ、痛え痛え、ひでえ目にあった。さきごろ買われたばかりのパプラゴニア人の悪党め「神々よ[2]、願わくは、彼が悪巧みもろとも、打ち亡ぼしたまえ」だ。

実際あいつが屋敷に入りこんできてこのかたというものは、あいつのお蔭でわれわれ下男は擲(なぐ)られ通しだからな。

〔下男乙（将軍ニキアスに似せた面をつけている。以下ニキアスとする）同じく体をさすりながら、つづいて登場〕

ニキアス　まったく、パプラゴニア人のうちであいつが真先にいちばんひでえ目にあって、くたばりゃいいにな、あいつの口汚ねえ悪口雑言もろともによ。

デモステネス　おお朋輩か、可哀そうに。どんな具合だ。

ニキアス　ご同様ひでえもんだ。

デモステネス　じゃこっちへ来て、オリュンポス[3]作曲の愁嘆節(ぼやきぶし)でも、泣き声合わせて歌うとしようや。

両名　〔節をつけてべそをかきつつ〕メソメソ、メソメソ、メソメソ。

デモステネス　泣いていたってどうにかなるってものじゃねえ。おれたちゃ、泣いているよりなんとか助かる算段を立てなきゃならねえんだろう、ええ？

ニキアス　どういう算段があるってんだ、いってみろよ。

デモステネス　お前が先にいっていいよ、おれは争いごとは嫌いなんでな。

ニキアス　いいや、おれは金輪際いわねえ、まあ気にしねえでいってみなよ。そうしたらおれもいうからさ。

デモステネス　〔女の声色(こわいろ)で〕「わたしのいわねばならぬことを、お前が代りにいってくれることができたらいいのにねえ[4]」

ニキアス　おれにはとてもそんな勇気はないね。まあ、エウリピデスみてえに、気の利いたいい廻しができりゃいいけどな。[1]
デモステネス　おいおい勘弁してくれよ、八百屋の話で悩ますのは。それより旦那除けのまじない踊りの手振りでも考えたらどうだ。
ニキアス　じゃあ、おれのやるように、ろーうーよとつづけて一息にいってみろ。
デモステネス　ずらか。
ニキアス　そこでだな。ろうよのあとにずらかというんだ。
デモステネス　いうともよ。ろうよといやあいいんだろう。
ニキアス　うまい、うまい。そしたら今度はな、擦る[2]ときみてえに、はじめはそろそろとろうよ、それからは駈足でずらかといってみろ。
デモステネス　ろうよ、ずらか、ろうよ、ずらかろうよ。
ニキアス　それだ。良いだろう。
デモステネス　そりゃ良いことは良いが。ただ皮のことを考えると、なんか縁起がよくねえような気がするな。
ニキアス　どうしてだ。
デモステネス　だってよ、擦ると皮がむけるだろうが。[3]
ニキアス　そうなりゃあ、どこかの神殿へ逃げ込んで〔舌足らずで〕ごしんぞう[4]（御神像）の前にひれ伏すのがいちばんよかろうな。
デモステネス　なに〔どもって〕ご、ごしんぞうだって。お前は本当に神様なんかあると思っているのか。
ニキアス　思っているとも。
デモステネス　どういう証拠でそう思うんだ。
ニキアス　なぜかって、「神様の憎まれっ子」という言葉があるだろう、おれが正にそれだからさ。どうだ巧いこというだろう。
デモステネス　なあるほどね。しかしなにかほかの算段もせねばなるまいて。おれから見物衆に事情をお話ししたらどうかな。
ニキアス　わるくねえな。しかしだ、まず見物衆にお願いしてみようじゃねえか、おれたちのいうことなすことが、お気に召したかどうかお顔つきで知らせていただきてえってことをだ。〔たぶん観衆はここで拍手喝采〕
デモステネス　じゃ、おれから一つお話し申し上げようか。〔観客席に向って〕わたしどもの主人と申しますのは、民会区[5]に住むデーモスという、手に負えぬわからずやの隠居でございまして、性分はいたって野暮、豆食らい[6]でかんしゃく持ち、そのうえ少々耳も遠いときています。ところがこのうちの主人が前の晦日の市で買ってきた奴隷というのが、パプラゴニア生れの革屋で、悪知恵の働くことと人に毒づくことではどんな者にもひけをとらないという大変な代物。このパプラゴニアの革屋めが主人のこういう気質をすっかりのみ込み、でれでれと尻尾を振りやがって、べんちゃらをいってはとり入り、革の切れっ端みてえなごたくをならべて、主人をたらし込んでおります。まあ、こんな具合に抜かしやがるんで。「デーモスの旦那、裁判が一つ片づきやしたら、まずひと風呂浴び、飯にして、ジャンジャン飲んだり食ったりなさるんですな。へえ、日当三十円（三オボロス[7]）をどうぞ。お食事の用意をいたしやしょうか。」そう抜かすと、わたしらの用意した料理をひったくって[8]、うまく主人のご機嫌をとってしまうのがあのパプラゴニア人の手なんでございます。つい先だっても、わたしがピュロスでスパルタ・パンをせっかくこね上げた矢先、あの野郎がまわりをウロウロほっつき廻った挙句、わたしがこねたパンをかっさらって、自分がそれを主人に食わせるということがありました。わたしらを寄せつけねえで、旦那の世話は自分以外誰にもさせやがらねえ、食事している主人のそばに坐り込み、蝿叩き――それも並の蝿叩きじゃねえ、革の蝿叩きなんぞを持ちゃあがって、弁士を追いちらしているんでございます。

　またこいつがご託宣みてえなことをならべると、うちの隠居は手もなく神がかりになっちまう。主人が呆けちまえば、もう奴の思う壺にはまったも同然でさあ、おおっぴらに根も葉もない嘘をでっちあげて朋輩のことを告げ口をする、その挙句わたしらに鞭の雨が降ってくる

というわけなんでございます。それから奴はわれわれ下男の間を廻って、ねだり、脅かし、ゆすりをやります。「おい、ヒュラス[1]を見たか。あれが擲られるようにしたのはおれの細工さ。お前らもおれの納得のゆくようにしねえと、今日この日くたばってしまうぞ。」そこでわたしらは奴に握らせる、そうしなきゃ、隠居に足蹴にされて、ふだんの幾層倍もばばたれなけりゃならないんでございますからね。(七〇)

〔ニキアスに〕ところで朋輩よ、おれたちはどんな手でゆくか、また誰を頼ったものか、大急行で思案しようぜ。

ニキアス　さっきのろうよでゆくのがいちばん良いだろう。

デモステネス　ところがどうしてもあいつの目を盗むことができねえ。(七三)四方八方見張っていやがるからな。片足でピュロス、もう一方の足で民会を踏まえていやがる。あいつはおそろしく大股だからな、尻は確かにカオニア[2]に坐っているが、両手はアイトリア[3]、心はクロピダイ[4]にあり、といった具合だ。

ニキアス　こうなっちゃあ、おれたちはいっそ、くたばっちまう方がましだな。

デモステネス　そんなら、どうしたらいちばん男らしく死ねるか考えなよ。(八〇)

ニキアス　どうしたら——どうしたらいちばん男らしくか。そうだ、牛の生血をのむのがいちばんいいぞ。テミストクレス[5]みてえな死に方がよかろうじゃねえか。

デモステネス　そんなものはまっぴらだ、飲むんならお互いの良い運を祈って生の酒だな。そうすりゃあ良い知恵が浮かばねえでもあるまいよ。

ニキアス　生の酒だと抜かしやがる。お前には飲むことの方が大切なんだからな。だいたい酔っぱらいにどうして良い知恵が浮かぶんだよ。

デモステネス　おいおい本気かい、お前さん。全く手前は井戸水野郎だよ、下らねえことばかり抜かしやがって。おこがましくも、酒に分別をつける功徳がねえっていうのか。物事を捗らせるに、酒より結構なものがあるかってんだ。いいか。人間はな、酒をのむと、金ができる、仕事はうまくゆく、裁判は勝つ、自分が仕合せになるばかりじゃねえ、友達にもためになれるんだぞ。さあ急いで一杯もって来い。頭に湿り気をくれて、なんか気の利いたことをいってやらな。

ニキアス　やれやれ。お前に飲ましたらいったいどんなことをしてくれるというんだ。(九六)

デモステネス　たんと良いことをしてやるさ。さあ、もって来い。〔ニキアス酒をとりに家のなかへ入る。デモステネスは宴会の席でするように横になりながら〕おれは横になるとしようか。やがて酔っぱらったら、ここらいっぱいに計略や分別や算段の小間物をならべてやらあ。

ニキアス　〔奥から酒壺と盃をもって出てくる〕ああ、運がよかった。見咎められずに酒を盗んできたぞ。

デモステネス　なあおい、パプラゴニア人はどうしてる。(一〇三)

ニキアス　いかさま師め、紅梅焼[6]（公売やき）を食ったうえ酔っぱらいやがって、革にくるまり大の字の高鼾だ。

デモステネス　じゃあさあ、神様にお供えするんだ、どくどくとたっぷり生酒をついでくれ。

ニキアス　ようしそれ、良い運を祈ってお供えしてくれよ。(一〇六)

デモステネス　飲め飲め、ぐうっと飲め、プラムノスの尊のお神酒[7]を。〔盃を飲み乾す。よい考えの浮かんだ態で〕おお忝なや、プラムノスの尊、この知恵は全くあなたさまのたまもの。わたしごときの考えではございませぬ。

ニキアス　おいおい、その知恵たあ何だ、たのむからいってくれよ。

デモステネス　あいつのねている間にな、急いで奴の託宣を盗んでここへもってくるんだ。(一一〇)

ニキアス　そりゃやってもいいがな。お前の尊はいいが、お蔭でひでえ祟りをうけそうで恐えなあ。

〔しぶしぶ中へ入ってゆく〕

デモステネス　〔酒壺をひきよせ〕じゃ酒はこっちへいただいてと、頭

に湿り気をくれて気の利いたことをいえるようにな。
ニキアス　〔盗んだ託宣なるものをもって現われる〕あいつの屁の音と鼾ときたら全くひでえもんだ。おかげで奴の後生大切にしまっていた託宣を気づかれずに盗んでこれた。
デモステネス　でかしたぞ、朋輩。お前はさっさと酌をしてくれ。さあ、おれが読んでやるからそれをかしな、さて中に何とあるかな。おおこれは予言だ、さあ早く盃だ、盃だ。
ニキアス　さあ〔盃をわたし〕そこでお告げに何とある。
デモステネス　もう一杯注（つ）げよ。
ニキアス　お告げに「もう一杯注げよ[1]」と書いてあるのか。
デモステネス　ふうむ、こりゃバキスのお告げだぞ。
ニキアス　それで。
デモステネス　さあ早く盃だ。
ニキアス　バキスはよっぽど盃が好きと見えるな。
デモステネス　あのいけ好かねえパプラゴニア人め、これであいつが前からひた隠しに隠していやがった理由（わけ）がのみこめたぞ。手前の身についてのお告げを恐がってやがったんだな。
ニキアス　ていうのはどういうわけだ。
デモステネス　あいつも永いこたあないと、ここに書いてあるんだ。
ニキアス　それで、どういう具合にそうなるてんだ。
デモステネス　どんな具合にかってか。お告げにははっきりいってある、まず綱屋[2]が現われて、この男が国の政治をあずかる第一号だとな。
ニキアス　ふうん、その何とか屋が第一号だと。それで、その次は。
デモステネス　この男のあとに今度は羊屋[3]が出て来る、第二号だ。
ニキアス　それで物売り屋が二人だな。その第二号はどんな目にあうんだい。
デモステネス　また別の、この男よりもっといやらしい悪党が出てくるまで、政権を握るんだとさ。それからこの男もやられちまう。次にあの革屋が出てくるからだ、強欲でキュクロボロス河[4]みてえな声をして、がなり立てるあのパプラゴニア人がだ。
ニキアス　じゃあの羊屋は、どうしても革屋にやられなくちゃならなかったわけか。
デモステネス　そのとおり。
ニキアス　情ない話だな。何とかもう一人だけ、何とか屋が出て来ねえものかな。
デモステネス　いやもう一人いるんだ、凄え商売の男が。
ニキアス　そりゃいったいどんな男だ、いってくれよ。
デモステネス　いってやろうか。
ニキアス　たのむ。
デモステネス　革屋を追払うのはな、豚肉屋[5]だ。
ニキアス　豚肉屋。なるほどこれは大した商売だな。それで、その男をどこから探してきたらいいんだ。
デモステネス　おれたちが探すより仕様がねえ。おお、ちょうどその男がやってくるじゃねえか。アゴラへゆくところだな。こりゃあ神様の思召だ。
〔豚肉屋　俎（まないた）をかついで登場〕おーい、豚肉屋君。どうぞ、どうぞこっちへ〔舞台中央を指し〕上がってください。あんたにお国とわれわれ二人を救ってもらわなくちゃあ。
豚肉屋　どうしたんだね。お前さんたちは、どういうわけでおれに声をかけなさったんだ。
デモステネス　まあこっちへ来て下さいよ。あんたがどんなに運のいい仕合せな人かってことをお話ししますから。
ニキアス　〔デモステネスに〕おい、さあ俎をおあずかりしねえか。それから神様のお告げのことを、この方にお話ししろよ。おれはこれからパプラゴニア人の様子を見に行ってくるからな。〔ニキアス退場〕
デモステネス　さあ、あんたはまず道具を地面に置いて、それから大地と神様方を拝むんですな。
豚肉屋　お前さんのいう通りしたよ。それで。

デモステネス　仕合せな人だよ、金もできるし。今は何でもねえが、明日になりゃあ大変なお偉方だ。この大アテナイ国の元首だからね。
豚肉屋　悪ふざけは止めてくれよ、おれはこの腸(わた)を洗って、腸詰を売らなきゃならねえんだから。 (一六一)
デモステネス　冗談いっちゃいけねえ。腸(わた)たあ何です。こっちを見てごろうじろ。〔観客席の方を指し〕人がいっぱい並んでいるのが見えませんかね。
豚肉屋　ああ見えるよ。
デモステネス　あんたはあの連中全部の総大将になるんですよ。アゴラも港も民会場(プニュクス)もあんたの指揮下だ。評議会(ブーレー)を踏みつけるのも、将軍連を吊るし上げるのも勝手、縛ろうが牢へ入れようが自由自在、迎賓館(プリュタネイオン)で女を買ってもいいんですぜ。 (一六七)
豚肉屋　おれがかね。
デモステネス　あんたがですよ。いや、あんたはまだ全部見てはおられん。この俎の上へ乗って、まわりの島々を眺めてごろうじろ。
豚肉屋　ああ、眺めたよ。
デモステネス　どうです。取引所(エンポリア)や商船も見えましたかね。 (一七二)
豚肉屋　見えたよ。
デモステネス　どうです、大変な運を摑んだことがお判りでしょう。それから、さあ右の眼をカリアの方へ、左の眼をカルタゴの方へ向けるんです。
豚肉屋　そうやって首の筋を違えたら(1)、おれは運が好いのかね。 (一七五)
デモステネス　そういうわけじゃございませんので、つまりあれらがみんなあんたの食い物になるというんでさ。このお告げに書いてある通り、あんたは第一番の男におなりになるんですからね。
豚肉屋　豚肉屋のおれが、どうやって男になれるんだね。
デモステネス　いやそれなればこそ、あんたは男をあげられるんでさあ。アゴラずれして無鉄砲な悪党のあんただからさ。 (一八一)
豚肉屋　おれはどうも自分がそんな大した権勢をもつ値打のある人間だたあ思えないね。
デモステネス　あれあれ、どうして自分で値打がねえなんて考えなさるんです。どうもなんか真面目なことを考えすぎて、それにこだわっておいでのようですぜ。あんたは堅気の生れなんですかい。 (一八五)
豚肉屋　冗談じゃねえ、やくざにきまってらあな。
デモステネス　まあなんて運の好い人だ。政治をやるにゃ打ってつけでさあ。
豚肉屋　しかしなあ、おれは教育のねえ人間なんだ。知っているのはイロハだけだが、それだって話にならねえくらいひでえもんだ。 (一八九)
デモステネス　話にならねえくらいひでえもんでも、イロハを知ってなさるというのは、玉に瑕(きず)だね。きょう日の政治なんざ、教育のある人や人格者のするもんじゃありません。無学で下等な男の仕事なんですからな。ともかく、せっかく神様がお告げでもってあんたにくださるというものを、逃がしちゃいけませんぜ。 (一九四)
豚肉屋　そのお告げはどういう風にいってるんだね。
デモステネス　全くうめえことといってますぜ。どうにでもとれるように、うまく謎めかしてね。

　しかれども曲れる爪の革鷲が
　生血(いきち)吸う愚かなる大蛇(おろち)を嘴(くちばし)に銜(くわ)えたる日、
　その日こそパプラゴニア族の韮汁(にらじる)は絶え、
　肝(きも)売り人らに大いなる誉れを神は賜うぞよ、
　それよりむしろ腸詰を売らまほしと望まざる限り。

豚肉屋　それがいったいこのおれにどういう関係があるというんだね。 (二〇一) 教えてくれないか。
デモステネス　革鷲ってえのがつまり例のパプラゴニア人のことでさあ。
豚肉屋　「曲れる爪の」というのは。
デモステネス　それこそ、そのものずばりじゃございませんか。こう手を曲げてなんでもかっさらっていくからでさあ。 (二〇五)
豚肉屋　大蛇(おろち)とは、何のことをいうんだろうね。

デモステネス　そんなもなあ、明々白々じゃありませんか、大蛇の図体も長えが腸詰も長え。それから腸詰も大蛇も生血を吸いまさあね。そこでお告げの意味は、大蛇が革鷲の上手な口で丸めこまれねえ限りは、必ず革鷲をやっつけるというわけでさ。(二一〇)

豚肉屋　お告げの文句は気に入ったが、さあて、国を治めるなんてことが、どうやったらおれにできるかな。

デモステネス　そんなこたあ、わけありませんや。あんたがいつもやってなさることをそのままやりゃあいいんでさあ。なんでもかんでも切り刻んで、ごちゃまぜにして詰めこんじまう、それからちょっと庖丁を利かした公約で味つけして、国民をいつも丸めこんでおけばいいんですよ。政治家になるそのほかの条件はあんたにみんな揃ってまさあ、いやらしい声はしてるし、生れは悪い、アゴラずれはしている、とね。あんたには政治をやるに必要なものは全部具わっているわけですよ。いろんな予言もデルポイの神託も、その点ピッタリ一致していまさあ、さあ冠をつけて、「のろまの尊(コアレモス)」にお神酒をお供えなさい。それからあの野郎とどう戦うか作戦をねるんですな。(二二三)

豚肉屋　しかし、だれがおれの相棒になってくれるんだろう。金持連中はあいつを恐がっているし、貧乏人は貧乏人で屁ロ垂れてるしな。

デモステネス　勇敢なる騎士一千(1)がいまさあね、あの連中は奴を憎んでるんですから、あんたを助けますよ。そのほか市民のうちで教養のある方々はきてくれましょうし、見物衆のなかからも甲斐性のある人はみんな助けてくださいますよ。それにこのわたしも驥尾(きび)に付してね。それに神様だってお助けくださいますよ。第一恐がらなくてもいいんです。ちっとも本物に似ちゃいねえんですからね。(2)マスク造りの職人がみんなあいつを恐がって、似せて作るのをいやだといったんでさあ。しかし見物衆は勘がいいから、あいつだということは判ってくださるでしょうがね。(二三三)

ニキアス　〔内から〕おやおやえらいことになった。パプラゴ ニア人がでてきやがった。

〔パプラゴニア人（実はクレオン）登場〕

パプラゴニア人　やいやい、十二柱の神様にかけて誓ってもいいが、貴様ら二人は今に始まったことじゃねえがデーモスさまに謀反をたくらみやがって、ただじゃおかねえぞ。〔デモステネスの飲んでいる盃を見て〕おっ、そのカルキスの盃(3)はどうしたってことだ。貴様ら、カルキス人をそそのかして叛乱をさせようとしてるに違いねえ、こん畜生め、二人とも生命はねえぞ、死刑だ。(二三九)

デモステネス　〔豚肉屋に〕おいお前さん、どうして逃げるんです、行っちまっちゃこまりますよ。豚肉屋さま、どうぞ勝負をなげないでくださいな。おーい、騎士の旦那たち、きておくんなさい。今が潮時ですぜ。シモンさんにパナイティオスさん、(4)さあ右翼へ突撃だ。〔豚肉屋に〕味方がそこまできましたぜ。さあ廻れ右して、しっかり戦っておくんなさい。ほれあの砂煙が、近づいている証拠でさあ。さあしっかり戦って追い討ちをかけ、追っ払っちまってくださいよ。(二四六)

〔二十四人の騎士より成るコロス、凄まじい勢いでオルケストラへ登場〕

コロスの長　さあ、あの悪党を打って打って打ちのめせ。わが騎士隊の厄病神、ゆすり、たかり、飽くことを知らぬ貪欲の魔の淵(カリュブディス)のような、悪党も悪党、このうえもない悪党をだ。実際あいつは一日のうちに何回となく悪党根性をさらけ出したのだから、吾輩もこうやって「悪党」を何度も繰り返していわねば気がすまぬのだ。(二五〇)

さあたたきのめし、あくまで追いつめ、もみくちゃにしてど肝を抜いてやれ、吾輩たちのやっているようにあいつを憎み抜くのだ。そして喊声をあげて肉迫攻撃をかけてやれ。ただ逃げられないように気をつけろよ。あいつは、エウクラテス(5)が一目散に麩小屋(ふすまごや)へ逃げ込んだときみたいに、逃げ道をいろいろ心得ているからな。(二五四)

パプラゴニア人　おーい、陪審員の隠居さん方、三十円のお仲間連(6)よ、あんたらは、不正だろうが、不正でなかろうが、ともかくおれがわめ

き立てたお蔭で食わせてもらってるんだ。助けにきてくれよ。謀反人たちになぐられてるんだ。

コロスの長　当然のことだぞ。貴様は監査を控えた役人を、まるで無花果(いちじく)みたいに触ってみて、青いか熟しているか、熟しかけかを試しながら搾りあげ、いじきたなく国費をつまみ食いしている奴だからな。薄ぼんやりしてくみしやすそうな男を見つけ出すと、ケルソネソス[1]からでもひっぱってきて、羽交締め、足がらみにして肩をねじ上げ、挙句の果て、腹を踏んづけてしまう。そして国民のなかから、金があって悪気がなく事なかれ主義でビクビクしている、小羊のような薄のろの人間を物色しているのだ。

パプラゴニア人　旦那方もこいつらと一緒になってわたしを攻撃なさるんですかい。わたしが擲(なぐ)られてるのは、旦那方のせいなんですぜ。つまりもとはといえば、旦那方の武勇を顕彰するために、国家としては旦那方の頌徳碑をたてるべきだという意見を、わたしが出そうとしたからなんでさあ。

コロスの長　あきれはてた駄法螺吹きめ、ヘナヘナとまるで革紐みたいに嫌らしい奴だな。〔コロスに向かい〕どうだ、こいつは吾輩たちをまるで耄碌(もうろく)あつかいして、うまく丸めこむつもりだぞ。奴がこれで〔拳を示し〕勝つ気なら、こっちもこれでなぐり倒してやる。またこっちへ逃げてくれれば、この脛に衝き当るという寸法だ。

パプラゴニア人　ああわが祖国よ、国民よ、この獣みてえな野郎どもに腹をどやされるたあ情ねえなあ。

コロスの長　そうやって吠えているのか。貴様がいつもがなりたてて国中をてんやわんやにしているようにな。

パプラゴニア人　〔豚肉屋に〕怒鳴ることなら負けねえぞ。まず手始めにこの声で、貴様を怒鳴り負かしてやろう。

コロスの長　お前がこの男を怒鳴り負かしたら、お前の勝[3]でテトテト[2]だ。しかし厚かましさの競争でこっちの男が勝ったら、賞品は吾輩たちのものだぞ。

パプラゴニア人　おれはこいつを告発するぞ、こいつはペロポンネソス軍に艦隊用の肉汁[4]を輸出してやがるんだ。

豚肉屋　なにいってやがんだ。おれの方もこいつを告発してやる、こいつが毎日腹ペコで迎賓館へ駆け込んでは腹一杯になって駆け出してくるといってな。[5]

デモステネス　そうだそうだ、パンに肉に塩魚と禁制品を輸出してやがるんですからね、こいつは。ペリクレスさんでもそんなことは一度も許してもらえなかったのにねえ。〔以下激しい調子で応酬〕

パプラゴニア人　〔豚肉屋とデモステネスに〕うぬ貴様ら、たちまちくたばらしてやるからな。

豚肉屋　お前の三倍も凄い声で怒鳴ってやるぞ。

パプラゴニア人　こっちもわめいて貴様をわめき倒してやらあ。

豚肉屋　こっちも怒鳴って貴様を怒鳴り倒してやらあ。

パプラゴニア人　将軍になって戦争してみろ、ぼろくそにいってやるから。

豚肉屋　貴様の背中をどやしてやるから。

パプラゴニア人　さんざん大法螺吹いて悩ましてやるぞ。

豚肉屋　中途でぶち切って、させるもんかい。

パプラゴニア人　瞬きしねえでじっとおれの顔をみてみろ。

豚肉屋　〔ぐっとパプラゴニア人を睨みつけ〕おれだってアゴラで育った人間だあ。

パプラゴニア人　ぐずぐずいうと〔革みてえに〕切り刻んでしまうぞ。

豚肉屋　つべこべ抜かすと、糞だらけにしてやるぞ。

パプラゴニア人　実をいやあおれは手癖が悪い。手前にゃそんな器用な真似はできめえ。

豚肉屋　冗談いっちゃいけねえ、アゴラのヘルメスさま[6]にかけてもいいが、おれだっておんなじだ。そればかりじゃねえ、人に見られりゃあ、しらも切らあ。

パプラゴニア人　できもしねえことを偉そうに自分の手柄みてえに抜か

すなよ。貴様のことをお役人に訴えてやるぞ、貴様がお供えの臓物を、一割税も払わねえで握っているってな。

コロス　ああ嫌らしくも厭わしきわめき屋よ、
汝が無恥厚顔の振舞いは、
大地に充ち、
民会に満ち、
税金に充ち、訴訟に満ち、
裁判所にも充ち満てり。
泥土を掻きまぜ
われらが祖国をことごとく
攪乱したるこの悪人、
吹鳴りちらして[2]われらが祖国アテナイを聾せしめ、
鮪とる漁師のごとく、岩の上より窺いて貢租を狙う。

パプラゴニア人　貴様らのこの陰謀が、どこで前から縫い上げられてたか、おれにゃあちゃんと判ってるんだぞ。

豚肉屋　なあるほど、縫い上げるときたな。（靴を）縫うなあ、おれが肉団子を作ると同様、お前の専門だからな。貴様ときたら、安価牛の革を厚く見せかけようと斜交に截ちゃあがって、田舎者に売りつけたという悪賢い奴だ、一日も穿かねえうちに、二手幅以上も伸びちまってパクパクだってんだからね。

デモステネス　そうだそうだ。わしもこいつにその通りやられて、町内の連中や友達からさんざん笑われたんでさあ。なにしろペルガサイ区へ着かねえうちに、わたしゃ靴のなかで泳いでたんですからね。

コロス　お前ときたらはじめから、厚顔無恥を発揮していたではないか。
弁論家たちを牛耳るには、それが唯一の武器だからな。
その武器を恃み、国の首長たる地位を利して、お前は外国人の金持を搾っているのだ。
ヒッポダモスの倅[3]はそれを見てベソをかいているぞ。
ところが有難いことに、ここにもう一人、
お前よりもっと嫌らしい男が現われた。
必ずやこの男が、たちまちお前を倒し
悪辣、厚顔、悪謀みでも、
お前を負かしてくれるだろう。
〔豚肉屋に〕ところで君、君はこの節名士といわれるご連中と同じ育ちの人間だ。
堅気の教養をうけても、何にもならぬことを一つ証明して見せてくれ。

豚肉屋　ようし、この野郎が国民としてどんな男か、見せてあげるから、そこで聞いていなせえ。

パプラゴニア人　おれに（先に）しゃべらせろよ。

豚肉屋　駄目駄目、おれだって悪党なんだぞ。

デモステネス　〔豚肉屋に〕それでなおきかねえなら、「先祖代々悪党だぞ」といっておやんなさい。

パプラゴニア人　どうしても嫌だってえのか。

豚肉屋　駄目だ。

パプラゴニア人　おれだってひかねえ。

豚肉屋　発言順についちゃゆずれねえ。まずこのことでとことんまで争うぞ。

パプラゴニア人　畜生め、ムシャクシャして体が破裂しそうだ。

豚肉屋　いいや、どうしても駄目だ。

デモステネス　おいおいあんた、駄目だなんていわないで、あいつを破裂させちまいなさいよ。

パプラゴニア人　だいたい貴様はどういう自信があって、おれに楯つくようなことをいうんだ。

豚肉屋　おれだって弁じたり、わさびを利かしたりするくらいのことはできるからだ。

パプラゴニア人　ふん、「弁ずる」ときたな。そりゃお前だって、なんか切り立ての生肉みてえなことが起ってきたときなら、手際よく料理しちまうくらいのことはできるだろうよ。どうも貴様は、手前の今の立場が判っちゃいねえらしい。問題は大衆なんだぞ。例えば在留外人相手かなんぞのケチな訴訟事件を扱ってだ、夜も寝ねえで予習し、街を歩きながらも暗誦したうえで、水ばかりガブガブ飲んで大見栄を切り、友人連をウンザリさせて、まあどうやらうまく弁論をすましたからって、自分は一かどの弁士だと思ってやがる。物を知らねえにもほどがある大馬鹿野郎だ。

豚肉屋　じゃあ訊くが、このアテナイの国が、貴様独りにまくし立てられて物もいえねえでいるのはだな、手前いったい何を飲みながらそうやったんだ。

パプラゴニア人　だいたいこのおれに太刀討ちできる奴があると思ってるのか。焼き鮪のホカホカを平らげてから、生酒を一升ひっかけ、ピュロスの将軍連をボロクソにやっつけにゆこうというおれさまによ。

豚肉屋　おれはな、牛と豚の臓物（もつ）を食ったあとで、汁を吸い、それから手も足も洗わねえで弁論家連を怒鳴り倒し、ニキアスにも気を揉ましてやらあ。

デモステネス　〔豚肉屋に〕あんたのいったことは、どれもこれも気に入ったが、ただ一つだけ面白くねえことがありますね。あんたが独りで汁を吸っちまうってところがね。

パプラゴニア人　しかし手前にゃ、鱸（すずき）[1]を食ってミレトス人をこづき廻す芸当はできめえ。

豚肉屋　おれは牛の肋肉を食ったら鉱山を買わあ。[2]

パプラゴニア人　おれは評議会（ブーレー）に飛び込んで、滅茶滅茶にあらしてやるぞ。

豚肉屋　貴様の尻を腸詰の皮代りにもみくちゃにしてやるぞ。

パプラゴニア人　こっちは尻を掴まえてさかさまにぶらさげ外へほっぽり出してやらあ。

デモステネス　この男をひきずり出すんなら、おれも黙っちゃいられねえ、一緒におれもひきずり出してみろ。

〔応酬いよいよ激しくなる〕

パプラゴニア人　足枷（あしかせ）にかけてやるからな。

豚肉屋　臆病罪で訴えてやるぞ。

パプラゴニア人　鞣（なめ）し台にかけて貴様の皮を鞣しちまうぞ。

豚肉屋　貴様の皮を剝いで泥棒用の財布を造ってやらあ。

パプラゴニア人　地面に伸ばして杭（くい）で留めちまうぞ。

豚肉屋　切り刻んでミンチにしてやるからな。

パプラゴニア人　睫毛（まつげ）をむしりとってやる。

豚肉屋　貴様の咽喉仏（のどぼとけ）を切り裂いちまうぞ。

デモステネス　そうだ、料理人式にあいつの口に支え棒を突っ込んで舌をひっぱり出し、口をアングリ威勢よく開けたところで――尻の穴に発疹が出てねえか調べてやりましょうや。[3]

コロス　火よりも熱いものがあるとは知らなんだ。
街（ちまた）で聞くあの厚顔無恥の言葉より
もっとひどい言葉があるとは
知らなんだ。
こんどのことは決して生易しいことではなかったのだな。〔豚肉屋に〕さあ、ゆるめずにかかっていってこづき廻してやりたまえ。
生ぬるいことをしてはいかん、
君はあいつの胴中をおさえているんだからな。
今この一撃でそいつを柔（やわ）しておけば、
あとはさっぱり意気地がなくなるんだ、吾輩はこいつの性質をよく知っているのだ。

デモステネス　しかしね、この野郎は生れ落ちて以来、今日までずっとそういう人間だったんだが、近頃[1]になって他人の種子を蒔いてくれたのを失敬して刈り入れやがって、一かどの名士面をするようになったんでさあ。そこから持ってきた例の穂にだね、足枷をはめて乾干しにし、売りつけようという腹でいるんですよ。（三九四）

パプラゴニア人　おれはな、評議会にまだ息があり、またデーモスの旦那が間抜け面をして坐っている限りは、貴様らなんかこわくも何ともねえんだぞ。

コロス　ううんこいつめ、何から何までなんという恥知らずの振舞いだ。
さっきから顔色一つ変えよらん、
貴様を憎まぬなら、クラティノス[2]の小便蒲団になるか、
モルシモス[3]の悲劇のコロスに雇われて歌う方がましだぞ。（四〇〇）
ときもところもわかたずに、わいろの花にとまって（甘い汁を吸っている奴め）
吸い溜めたのを、吸うときのようにあっさりと吐き出せばよいに。
そのときわれらはただこう歌うぞ、
「よき幸を祝いて、飲めや飲め」と。
あのイウリオス[4]の伜、『飯番』の隠居もきっと喜んで、
「目出度、目出度」と『バッコスさまよ』を歌うだろうよ。

パプラゴニア人　厚かましさの競争じゃあ、貴様らおれに勝てるもんかよ、絶対にな。それに負けるようなら、おれはもう、アゴラのゼウスさまの神饌をいただかねえよ。（四一〇）

豚肉屋　餓鬼のときから年がら年中、拳骨と肉庖丁で叩かれて辛抱してきたおれだ、この競争じゃ貴様を負かす自信があらあ。さもなきゃ、指拭きパン[5]を飯代りにして、ここまで育ってきた甲斐がねえや。

パプラゴニア人　なるほど犬みてえに指拭きパンを食ってか。それじゃあな、犬の食い物を食ってる貴様が、いったいどういうわけでおこがましくも、犬面狒々（のこのおれさま）に刃向うてんだ。（四一六）

豚肉屋　餓鬼のときにゃ、いろいろわるさをしてみんなをひっかけてやったもんだ。たとえばこういって板前の奴らをよくだましたな。「ほうれ、見な、見えるだろう。春が来たなあ、燕だ」。みんなそっちを見る、その間に肉を失敬するという寸法だ。（四二〇）

デモステネス　まったく器用な肉[6]――じゃあねえ方ですねえ、先見の明があんなさった。嫁菜を食うときみてえに、燕の来るより先に盗ねた人ですからね。

豚肉屋　そんなことをやっても、誰にも気づかれなかった。万一誰かがみてたら、股の間に隠して、神かけてそんなことをした覚えはねえとしらをきったもんだ。それでな、さる弁論家がおれのそうやってるところを見て、いったもんだ。「この子供は今にきっと国を治める人物になるに違えねえ」って。（四二六）

デモステネス　うめえこと当てましたね。しかしその推量がどこから来たかってえと、いうまでもねえ、あんたがかっさらっといてしらを切ってる、肉は尻の間にはさんであるのを見たからでさあね。

パプラゴニア人　〔豚肉屋に〕貴様がもう生意気な真似のできねえようにしてやる。〔デモステネスの方を向いて〕いやこいつだけじゃあねえ、お前ら二人ともだ。〔豚肉屋に〕さあこれから物凄いつむじ風みてえに貴様に襲いかかってやるぞ、陸といわず海といわず滅茶滅茶に吹き荒してな。（四三二）

豚肉屋　そんならおれは、帆――じゃねえ腸詰を捲いて、波のまにまにのどかに船を進めるさ、貴様はせいぜい大声で泣き喚いてやがれっていってな。

デモステネス　あっしだって、船が洩り出したら汲み出し方は引き受けますぜ。（四三四）

パプラゴニア人　このアテナイの公金を何百万円[7]もチョロまかしたうえノホホンとさせちゃおかねえぞ。

デモステネス　〔豚肉屋に〕さあ気をつけて、帆をおろしてくださいよ。

この野郎、北東風と密告風を吹き出しゃがりましたからね。

パプラゴニア人　貴様がポテイダイアから三百万円うけとってることを(1)、おれはよく知ってるんだぞ。

豚肉屋　何だと。どうだそのうちから三十万円やったら黙るか。

デモステネス　〔独白〕この野郎なら喜んで受けとるね。〔大声で〕帆をあげろ。風がおさまってきたからね。（四四一）

パプラゴニア人　千万円収賄の告訴を四つも起してやるぞ。

豚肉屋　そんならこっちも貴様を、徴兵忌避で二十回、竊盗(せっとう)の方は千回以上も訴えてやらあ。

パプラゴニア人　貴様は、女神様を冒瀆した罰当り一族の出だ(2)といってやるぞ。（四四六）

豚肉屋　そんならおれは、貴様の祖父(じじい)が槍持ちで、それもだ、人もあろうに……

パプラゴニア人　誰の槍持ちだと。抜かしてみろ。

豚肉屋　……ヒッピアスのかない(3)（家内）――じゃねえ、かわ（革）いのよ。

パプラゴニア人　このごろつきめ。

豚肉屋　この悪党め。（四五〇）

デモステネス　〔豚肉屋に〕威勢よく擲(なぐ)っておやんなさい。

パプラゴニア人　痛え痛え、謀叛人どもがおれを擲りやがる。

コロス　力いっぱい威勢よく擲ってやれ、
腹をどやしつけてやれ、それから臓物と
結腸で
そいつを懲しめてやれ。（四五六）

コロスの長　ああ世にも立派な肉――いや方(かた)だ、心ばえもこれほどの人は他におらぬ。
お国にとっても、われらをはじめ国民すべてにとって救い主として
来てくださった。
議論でも、実にみごとに巧妙に奴を負かしてしまわれた。
この嬉しい気持をどう表わして、そなたを頌(たた)えたらよかろうか。

パプラゴニア人　おれはな、こんどのことが細工されてるのを、ちゃんと気づいていたんだぞ、貴様らがこの謀(たく)らみを釘と膠(にかわ)で打ちつけ、はりつけしているのを知ってたんだ。（四六三）

デモステネス　おやおや（大工の言葉できやがったぞ）〔豚肉屋に〕あんたは車大工の言葉で何かいえませんかね。

豚肉屋　おれだって、あいつがアルゴスでやってることをちゃんと知ってるぞ。表向きはアルゴスと友好を結ぶんだと抜かしてるが、実はそこで手前の都合のいいようにスパルタ人と会ってやがるんだ(4)。この細工でどんな鞴(ふいご)のかけ方をしてやがるか、おれは知ってるんだ。つまりあいつは、捕虜を台にして鍛冶仕事をしてやがるんだからな。

デモステネス　うめえうめえ、向うが膠付けなら、こっちは鍛冶屋の槌で打ち返しておやんなさい。（四七〇）

豚肉屋　〔コロスを示し〕そこの旦那方も今度のことじゃ合槌を打ってくださってるんだ。このことばかりは、金をもってこようが、友人をなかへ立てようが、おれはきかねえ。国民にみんなバラしてやるからそう思え。（四七四）

パプラゴニア人　そんならおれは今からすぐに評議会に出かけて行って、貴様らみんなの陰謀を告げてやる、貴様らが夜な夜な街で会合していることも、ペルシアの大王とぐるになって謀らんでることも、ボイオティアで向うの奴らと結託して、せっせとチーズ固めをしていることも(5)、洗いざらい言ってやるぞ。

豚肉屋　〔冷笑して〕ふん、ボイオティアじゃ、チーズの出廻りはどんな具合だな。（四八〇）

パプラゴニア人　畜生、ヘラクレスにかけて、貴様を（革みてえに）伸(の)してやるからな。〔捨科白(すてぜりふ)を残して退場〕

デモステネス　ところで、これからどうするお考えですかね。あんたが自分でいってなさるように、むかし肉を尻に隠したってえのが本当なら、なんとか方策をたててくださいよ。まあ、あんたも評議会の議事

堂へお走りになるんですな。あの野郎、評議会へ飛び込んでって、わたしらみんなの悪口をいい、ガアガア怒鳴りちらすにきまってますからね。

豚肉屋　ああゆくとも。しかしまずこうやって臓物と庖丁をここへおいておこう。〔荷物を下へ置く〕

デモステネス〔豚脂のようなものをさし出して〕さあ、これを首にお塗んなさい。あいつの舌の攻撃を躱せるようにね。

豚肉屋　なかなかいいことをいってくれるじゃねえか。体育の先生にも負けねえぞ。

デモステネス〔また何か（実はニンニク）をさし出して〕へえ、今度はこれを噉み込んでおくんなさい。

豚肉屋　何だ、そりゃ。

デモステネス　あんたがねえ、（闘鶏みてえに）ニンニクで精をつけたらいっそうよく戦えるというわけなんで、さあ早く早く。

豚肉屋　ああ、お前のいう通りしてるよ。

デモステネス　いいですかい、噛みついて毒づいて、鶏冠を食っちまい、肉垂も咬み切ってから、帰ってくるんですぜ。〔豚肉屋とデモステネス退場〕

コロスの長　元気に行ってこられよ、われらの
望むごとくに君が仕遂げ
アゴラのゼウスも君を護りたまわんことを。
みごとに勝って、かなたから再びわれらの許に
栄冠を戴いて帰りたまえ。
〔観衆の方を向いて〕さて見物のご一同、方々は
自らの種々のムーサの芸を
試みられた風雅の士じゃ、
願わくはしばらくわれらに耳を藉し
短々長格の律に乗せてわれらの語るところを、
聴きたまわんことを。

かりに旧弊な喜劇作者が吾輩らに、合口上で見物衆に一言述べよと迫ったのであれば、なかなか思う通りにはゆかなかったでしょうが、今度の場合は作者がその値打のある人物なんであります。と申すのは、この作者たるや、吾輩らの憎む連中を同じく憎み、敢えて正義を主張する勇気をもち、颱風にもつむじ風にも敢然と立ち向かう底の人物だからであります。作者の申しておるところによれば、見物衆のなかには、作者がなぜもっと早くから[1]（堂々と）自分の名義でコロスを申請しなかったのかと疑問をもち、作者を訪ねて訊される向きも多い由でありますが、このことについて吾輩らから説明してくれという依頼を作者から受けた次第であります。

作者の申しておるところによれば、荏苒日を送る仕儀になったのは、何も自分の考えが足りなかったためというわけではない、むしろ喜劇を上演することが難事中の難事であるという彼の判断によるものだそうであります。（喜劇太夫を[2]）口説いたやつは腐るほどあるが、もてた奴は滅多にないというのであります。また皆さん方が浮気の性分で、作者の先輩作家の例を見ても、年をとると皆さんに見限られてしまうのを、かねがね作者は承知しておりました。かの、群がる競争相手を打ち破り、最多数の優勝を記録したマグネス[3]が、頭に白いものが置きはじめるとともに蒙った悲運を作者は知っております。皆さん方にどんな言葉（声）でも聞かせ、「琴弾き」もつとめれば、「鳥」にもなる、「リュディア人」もやれば、「無花果蜂」にもなり、「蛙」色に染まりまでしながら、結局それでも不十分ということで、とどのつまり、年齢をとってから——若いときには夢にも思わなかったことですが——もう見物を笑わすことができないということで、舞台から追っ払われてしまいました。

それから作者はクラティノス[4]のことを思い出したといっております、この人は以前たいそうな名声を博して、さながら坦々たる平野を流れる大河の概があり、樫であろうが鈴懸であろうが競争相手であろうが、

大地から根こそぎ抜いて流し去ってしまう勢いでありました。宴会では「無花果のサンダル穿いたドーローよ」[1]と「器用な歌の職人さん」以外の歌は歌われないという位、それほどたいそうな人気であったのであります。それが今日この作者が、まるで絃はたるみ調子は外れ、継目のガタガタになった竪琴みたいに、呆けた戯言をいっているのを見ながら、皆さん方は可哀そうだとも思っておやりにならない。いい年齢をしてコンナス[2]みたいに、乾からびた優勝の冠をかぶり、口が渇いてフラフラになりながら、ほっつき歩いております。本来ならば、昔あげた数々の勝利の功で、迎賓館で酒も飲め、（舞台で）戯けたことをいわずとも、ディオニュソスの尊（の神像）のおそばに坐り顔の色も艶やかに芝居を見物しておればよいはずの人間が、であります。
またクラテス[3]が皆さん方からどんなにひどく悪口をいわれむごい仕打ちを受けましたことか。あの男はいっこうに変哲もなさそうな口から実に気の利いた奇想をこね上げて、いわば皆さんに安上りの飯をくわせてくれておりました。もっともこの男だけは、倒れたり起きたりしながらも最後までもつことはもちましたが。
わが作者は、以上のような事態に危惧を感じ、遷延していたわけであります。本人がつねづねいっている言葉を借りれば、（船乗りにしても）舵を操る前に、まず漕ぎ手にならねばならん、次は船首で見張りの役をつとめ、風を研究する、そのうえではじめて独り立ちで船を動かすということでなくてはいかんというのであります。
まあこうした事情で、われらの作者は無鉄砲に飛び出してきたわけではなく、慎重な態度で一席お笑いを申し上げようとした次第でありますから、見物の皆さん方におかれても、なにとぞ彼に万雷の歓呼を賜い、十度ならず十一度も櫂を掲げて、

レーナイアの祭の日に心籠れる喝采を送りたまえ。
われらの詩人が本意を遂げ
晴々と面も明るく
心愉しく舞台をば去れるよう。

駒の神、ポセイドンの尊、愛でたもうは
青銅の蹄の響き、
駒の嘶き、
紺青の舳もち
兵を運ぶ足早き三段船、
さてはまた若者たちが戦車を駆って
誇らしげに、また悲運を負うて
きそう競技。
いざわれらの歌舞に参じませ、
三叉の黄金の槍もち、
海豚を統べ、スニオンに鎮座します君、
またゲライストス[4]に神留りますクロノスの御子、
神々の多きなかにポルミオン[5]が最愛の神
いな、今このとき、アテナイにも
最愛の神なる君よ。

われらの父祖を頌えよう、この国と
（アテナが）聖衣とを恥かしめず、天晴れの武夫ぶりを示したかれら、
陸といわず海といわず、ゆくところつねに敵に勝って
祖国の誉れを輝かしたかれらを。
一人だにかつて敵を見て、敵の数を読むものはなく、
心は直ちに戦いに気負う。
戦いのさなかに倒れ、肩をつくとも、
すぐに跡をば拭いとり、倒れたとはいわず、
再び闘いをつづけゆく。また将軍たる者も
以前は一人だに、クレアイネトス[6]に探りをかけ、公餐を求めたるはなし。

しかるに今は、（劇場の）名誉席と公餐を与えねば、
戦わぬとまで公言す。
われらはしかし、国のため、氏神のため
報酬を求めず、ただ名を恥かしめざるよう戦うことを誇りとす。
それ以上は何も求めず、ただ願いは次の一事のみ。
すなわち、[1]やがて平和の蘇り、われらの苦闘の熄む暁は、
長髪を貯え、浴みして垢掻き落す愉しみをわれらに許せと。

ああ国の護りパラスの尊、
至尊の女神、
弓矢の技、文の道、
その勢威他に比類なき
この国をみそなわす君よ、
戦さの庭に、つねにわれらとともにある
かの勝利女神を伴いて神降りたまえ。
勝利女神こそは、われらが歌舞の伴侶として、
われらに組し、ともに敵を撃ちたもう。
されば今、御姿をここに現したまえ。
もし君がいつの日か、御技を尽し
この男の子らに栄の勝利を賜わるとせば、
そは今日を措きて他になければ。

馬たちの功おしも、われわれの知る限り賞め頌えたい。
その功績は、まこと賞讃に値するもの、突撃に戦闘に、
数々の行動をわれらとともに果したのだ。
しかしわれらの讃歎するのは、その陸上の働きよりも、
むしろかれらが軍馬の運送船に、人間さながらに飛び乗ったときの
　こと、
水筒を買い整え、いや、あるものはニンニクと玉葱すらも買い込んで。
それから、われわれ人間と少しも変らず櫂を手にとり、
精出して漕ぎながら嘶いてこういったのだ。
「ヒンヒンヒン、誰か漕ごうとする奴はいないか。
もっとしっかり握るんだ。
しっかり漕がないか、おいサン印。[2]」
いちばん若い馬たちがコリントス[3]の海岸に着いて飛び降りると、
うまごやしの代りに蟹を食い、
這い出してくるものばかりか、海の底まで行って捕えていた。
それでテオロス[4]の話では、コリントスの蟹がいったそうだ。
「ポセイドンの尊、陸にいても海にいても、いや海の底にいてさえ、
騎士の手を逃れられないとは、恐しいことでございます」と。

〔豚肉屋が登場〕

コロスの長　ああ、あんたは世にも頼もしく勇ましい人だ、あんたが不在の間、吾輩たちはどんなに気を揉んだか判らんぞ。さて恙なく帰ってこられた今、どのように戦われたか、お話し願いたい。

豚肉屋　〔大見栄を切って〕評議会破りになったといわねえで、何といおう。

コロス　ああ今こそ、皆こぞって喜びの声をあげてよいのだ。
ああ善きことを言い、さらにその
言葉よりなお善きことを仕遂げたる人よ、
願わくは、ことのすべてを
詳らかにわれらに語ってくれ。
君が物語をきくためならば
われらは千里の道も
遠しとせずにゆくだろう。されば友よ、
心安らかに話してくれ、
われらはみな君のことを嬉しく思っているのだから。

豚肉屋　いやまったく、これは聞く値打のある話だよ。おれはあれから直ぐに、奴の後を追い駆けて行ったんだが、なかじゃ野郎が案の定、雷みてえな勢いで、途方もねえことを並べ立て、騎士の旦那方を攻撃していやがる、いかにももっともらしく大法螺を吹いて、旦那方のことを謀反人だといってやがるんだ。それを聞いて評議員連中はみんなあいつの抜かした嘘で頭がいっぱいになっちまって、芥子みてえな目つきになって、額に八の字を寄せてやがる。そこでおれは評議会の連中が、あいつの言葉を丸飲みこみして、あいつのインチキにかかって、だまされてるのを見てとったんで、こういったんだ。（六三三）
「無頼の神にインチキ[1]の霊、痴愚、狡猾、厚顔の精よ、またおれが餓鬼のときから育ってきたアゴラよ、今こそおれに厚顔無恥の魂と、自在の舌と下等な声とを与えてくれ」とな。こう念じているおれの右手で、尻癖の悪い野郎が一発ならした。おれは膝まずいてお辞儀をしたね[2]。それから仕切りの柵を尻で押し開けて入ると、大口あけてこう怒鳴ってやった。（六四二）
「評議員の皆さんよ、良い話をもってきたから、お前さんたちにまずそれを聞かせてあげたいね。こんどの戦争が始まってこの方、アンチョビーがこんなに安くなったのを見たことがねえんですよ。」するとたちまちご連中の額の雲が晴れ上って、良いニュースをもってきた功績で冠を贈ろうといってくれた。そこでおれはすかさず、他人に洩らしちゃいけねえと駄目をおしておいてから、十円でしこたまアンチョビーを買い込むために、瀬戸物屋から鉢を買い占めておきなさいといってやった。すると評議員のご連中は拍手して、ポカンと口を開けておれの方を見た。パプラゴニア人めも、評議員連にどんな言葉がいちばん気に入るかということが薄々わかり、見当がついたと見えて、こんな発議をしやがった。（六五四）
「諸君、このよいニュースを聞いた今、吉報を祝って、女神さまに牛を百頭お供えしたらいいと思うんだがね。」それで評議会はまたあいつの動議に賛成ということになってしまった。おれは牛の糞で一本やられたと見たので、今度は牛二百頭でやっつけてやった。それから鰯が百尾で十円になったら、その翌日にも若牝山羊を千頭お供えしますと、アルテミスさまに願をかけようじゃないかとすすめてやった。すると評議員連はまたまた気を入れておれの方を向いてきた。これを聞いて野郎面食らってなんかブツクサいってたが、やがて当番評議員やお巡りが奴をひっぱり出しにかかった。評議員連は立ち上ってアンチョビーのことで喧々囂々だ。すると野郎は、スパルタからの使者の口上を伝えるから、ちょっとの間待ってくれと頼む。休戦交渉に来たというんだ。すると評議員は口を揃えて怒鳴ったもんだ。「なに今になって休戦交渉だと。そりゃ君、奴らはわが国でアンチョビーが安くなったのを聞いたからに違いない。われわれには休戦なんか用はない。戦争は勝手につづけさせとけ」とね。そして当番評議員に解散させろと怒鳴り、柵を飛び越して、てんでにどこかへ行っちまった。（六七五）
　そこでおれはこっそり抜け出して、アゴラであるだけの胡荽と韮を買い占めた。それから途方に暮れてるご連中に魚のつまにしろといって、無料でくれてやり、恩をかけてやったわけだ。そこで連中、おれのことをワイワイいって賞めるのほめないの、結局おれは十円の胡荽で評議会をまるまる抱き込んで、こうやって帰ってきたわけだよ。

コロス　運のよい人がするはずのことを、あんたは残らず仕遂げてきたわけだ。

　あの悪党め、悪党ぶりでも
　悪謀みでも
　人に取り入る弁口でも
　自分より一枚上手の人間に
　ぶっつかったのだ。
　しかしあんたはこれからも
　申分なく戦えるように考えておいてくれ。

吾輩たちが以前から、あんたに好意をもった味方だということは、
あんたの知っている通りだ。

〔パプラゴニア人憤然たる面持で登場〕

豚肉屋　そういえばちょうどパプラゴニア人めがやってきたぞ。土用波みてえにうねり狂って、おれを飲みこんじまおうという勢いだ。あの凄え権幕は鬼婆あそこのけだ。

パプラゴニア人　おれの（得意の）嘘八百がまだ多少とも残ってて、それでなお貴様をやっつけられねえようなら、おれの体が粉々になってもいいわ。

豚肉屋　〔パプラゴニア人のまわりを跳びはねながら、嘲弄する〕手前の脅迫は愉しいよ。貴様の空をつかむみてえな法螺をきいてると嬉しくならあ。さあこうやって馬鹿踊りをおどって、アホウアホウと鳴きながら廻ってやる。

パプラゴニア人　デメテルさまにかけて誓っていうが、貴様をこの国から食い（追い）出せねえ位なら、おれは生きちゃあいねえ。

豚肉屋　おれを食い出せねえだって。そんならおれも貴様を飲み出して、それから自分の腹が破裂するまで飲みに飲まねえ位なら、生きちゃいねえよ。

パプラゴニア人　おれがピュロス事件で稼いだ上席特権(プロエドリア)(1)にかけても誓っていうが、必ず貴様をやっつけてやる。

豚肉屋　上席特権と抜かしやがったな、貴様がその上席からおとされて、最末席で見物してるところを見てやりてえよ。

パプラゴニア人　天に誓って、足枷にかけてやる。

豚肉屋　いやに気が立ってきやがったな。おい、貴様に何を食わしてやろうかな。何がいちばん好物だ。財布か。

パプラゴニア人　貴様の臓腑(はらわた)を爪で引っ掻き出してやる。

豚肉屋　そんならおれも、手前が迎賓館で食う飯を掻き出してやらあ。

パプラゴニア人　デーモス（民会）さんのところへ引っ張ってって、貴様に思い知らせてやる。

豚肉屋　おれこそ手前を引っ張ってって、手前以上に悪口をいってやる。

パプラゴニア人　この馬鹿野郎、デーモス（民会）さんがお前のいうことなんぞきくもんかい。おれなら、好きなだけ馬鹿にしてやれるけどな。

豚肉屋　まるでデーモスさんが手前の思いのままになるみてえに、えらく自信があるんだな。

パプラゴニア人　おれはな、あの大将に何を食わせたら喜ぶか、ちゃんと心得てるからよ。

豚肉屋　それで手前は、乳母と同じように、とんでもねえ養い方をしているわけだ。食い物を噛み砕いて、ほんのちょっぴり（赤ん坊に）やり、自分は（赤ん坊の）三倍も呑みこんじまう。

パプラゴニア人　おれのこの腕前があればこそ、デーモスさんを大きくも小さくもできるわけだ。

豚肉屋　そんなこと位、おれの尻の穴だって器用にやってのけらあ。

パプラゴニア人　おい、こんどはなあ、評議会でおれをボロクソにやっつけたようなわけにゃいかねえぞ。さあデーモスさんのとこへ行こうじゃねえか。

豚肉屋　おお、行かねえでかい。さあ歩け、いいか、どうしたって行かなきゃならねえんだぞ。

〔両名デーモス家の方へ向う〕

パプラゴニア人　〔デーモス家の戸を叩いて〕デーモスの旦那、出てきてくだせえ。

豚肉屋　〔猫撫で声で〕ねえ、おとっつぁん、出てきてくださいよ。

パプラゴニア人　〔負けずに同じ調子で〕大好きなデーモスちゃんよ、出てきて、どんなにわたしがみんなにいじめられてるか見て頂戴な。

〔デーモス戸口に現れる〕

デーモス　やかましい声を立ててるのは、どいつらだ。トットと戸口から立ち退かんか。お前らは内(うち)の豊年枝(エイレシオネ)(2)を壊してしまったな。〔パプラ

ゴニア人を見て〕おお、お前はパプラゴニアから来たのじゃないか、お前をいじめているのは何者なのだ。

パプラゴニア人　わたしがね、この野郎や〔コロスを指し〕あの若僧たちに擲られてんのは、旦那のせいなんでござんすよ。（七三〇）

デーモス　どういうわけでだ。

パプラゴニア人　わたしがね、旦那が好きで旦那に惚れ込んでるからでさあ。（七三三）

デーモス〔豚肉屋に〕あんたはいったい何者かね。

豚肉屋　わたしゃこの野郎の恋仇、つまりわたしも以前から旦那が好きで、旦那に尽してえと思ってたんでさあ。わたしばかりじゃねえ、紳士方でわたしと同じ気持の人もたんとおります。ところがそのわたしらが、この野郎がいるためにどうにもならねえんです。旦那は引く手数多（あまた）の稚児さんみてえに、まともな人間を相手にしねえで、行灯屋（あんどん）[1]とか靴直しとか、革細工の職人とか、革屋なんかに身をまかしておいでになる。（七四〇）

パプラゴニア人　そりゃ、おれがデーモスの旦那に尽すからよ。

豚肉屋　どう尽してるんか、いってみろ。

パプラゴニア人　どう尽してるって。おれはな、将軍連がピュロスでグズグズしてるときに先手をとって、そこまで出掛けていき、スパルタ人を〔捕虜にして〕連れて帰ってきたんだぞ。（七四五）

豚肉屋　おれはな、道を歩いていて、誰かの煮（た）いている鍋を店からチョロまかしてきたんだぞ。

パプラゴニア人　さあデーモスの旦那、さっそく民会を開いて、わたしら二人のどっちの方が旦那に真実な気持をもってるか調べてくださいよ。この野郎を可愛がるんならそのどっちかを決めたうえで、可愛がってやっておくんなさい。

豚肉屋　そうそう、ぜひとも決めておくんなさい。もっとも場所はプニュクス[2]でなしにね。

デーモス　いいや、わしはプニュクス以外の場所には坐りたくない。さあ、みんな前へ出るんだ、プニュクスへ行かねばならん。（七五一）

豚肉屋　ああ情けねえ、駄目だなこりゃあ。この隠居ときたら家にいるときにゃ世にも珍しい位切れる人なんだが、この〔プニュクスの〕[3]岩に坐っちまうと、まるで乾無花果の銜え遊びでもしてるみてえに、口をポカンと空けたまんまなのだからね。（七五五）

コロス〔豚肉屋に〕さあ、今こそ君の帆を一杯に張って、軒昂たる意気を示し、この男を打ち負かすべき必殺の論陣を張りたまえ、この男はなかなかの策略家で、行き詰りになっても、なんとか道を探し出す要領のよい奴だ。

だからこの男には、つむじ風のように激しく猛烈にかかってゆけ。

コロスの長　気をつけなさいよ。そしてあいつが君にかかってくる前に海豚[4]を揚げて、船を〔敵船の〕横に廻し込むのだ。（七六二）

パプラゴニア人　この国を護りたもうアテナイの尊[5]に祈り奉る、わたしがアテナイの国家に対し、リュシクレス、キュンナおよびサラバッコーに次ぎ、最高の殊勲者となった暁には、現在同様、何にもしねえでも迎賓館で官費の飯が食えますように。

また万一わたしが女神さまをお憎みしたり、あるいは単身たりとも敵に立ち向い、女神さまをお護りすることをしねえような場合には、鋸で引き殺されようが、切り刻んで革紐にされようが、厭いはいたしません。（七六八）

豚肉屋　わたしもね、ねえデーモスの旦那、万一旦那を大事にしねえで真実を尽さねえようなことがあったら、切り刻んで闇汁にして煮てくださっても構いませんぜ。

もしわたしのいうことが信用できねえとおっしゃるんなら、〔俎を指して〕このうえでおろして、チーズ和（あ）えにされようが、睾丸に肉鉤をひっかけて、ケラメイコス[6]へ引っ張ってかれようが厭やしません。

パプラゴニア人　ねえデーモスの旦那、わたし位旦那のためを思っている人間は、この国に一人もいやあしませんぜ。第一わたしがあなたの

評議員を務めていた間は、国庫にある金の額ときたら大変なもので、そりゃあみんな、搾り上げたり、強請（ゆす）ったり、ねだったり、とにかく旦那の喜んでくださることなら、どんな人間も容赦しねえでやったおかげなんですぜ。（七七六）

豚肉屋　デーモスの旦那、今いやがったことなんざ、何も自慢するほどのことじゃねえ。そんなこと位、わたしだって直ぐにでもやって差し上げますさあ。他人（ひと）のパンをかっさらってきて、旦那に食べさせてあげますよ。まず旦那に知ってもらわなくちゃならねえことは、この野郎がなにも心（しん）から旦那を大切に思っているわけじゃねえ、ただ結構な相伴に与かろうという算段だということでさあ。その証拠にゃ旦那が御国のためにマラトンでペルシア人と戦い、みごとに勝ってわたしらに鼻高々で吹聴できるようにさせてくださった旦那がですよ、岩の上にこうやって尻を痛くして坐っておいでになるのを眺めながら、この野郎はなんとも思っちゃいません。わたしが〔座蒲団を示し〕旦那のためにこれを縫ってきて差し上げたのと、えらい違いでさあ。さあ尻をあげてこの上にふんわり坐っておくんなさい、サラミスのときみてえに尻の皮をむかねえようにね。(1)（七八五）

デーモス〔座蒲団に坐って嬉しげに〕おいおい、あんたはいったい何者かね。名にし負うハルモディオス家(2)の流れを汲んだ人じゃないのかね。あんたの行為はまったく立派だ、それこそ愛国的（愛（ピロ）デーモス）だな。（七八七）

パプラゴニア人　ふん、けちな追従でいい子になりやがったな。

豚肉屋　貴様はこれよりもっとけちな餌で旦那を釣ったじゃねえか。

パプラゴニア人〔デーモスに〕万が一にも今までに、わたしより以上に国家（デーモス）のために戦い、わたし以上に旦那のことを大切に思ったものが一人でもいたら、わたしゃ首をかけてもいいですぜ。

豚肉屋　旦那がもう八年目(3)になるというのにまだ樽や鷹の巣や櫓なんぞに住んでおいでの様子を見ながら、お気の毒とも思わねえどころか、そんなところへ閉じ込めておいて甘い汁を搾り取っている貴様が、旦那のことを「大切に思っている」とはしゃらくせいやい。アルケプトレモス(4)がせっかく平和をもってきてくれたのに、手前はそれを吹き散らしちまうし、休戦の話をもってきた使節団の尻を擲って追い払ってしまやがった。（七九六）

パプラゴニア人　それもわが国（デーモス）が、全ヘラスを支配できるようにするためによ。このお告げにちゃんと書いてあらあ、旦那が辛抱してさえいなさったら、やがてアルカディアで五十円の日当をもらって、裁判できるようになるはずだって。(5)いずれにせよこの方は、おれが養ってお世話をする、日当の三十円の財源ぐらいは、まともに行かなきゃインチキだろうが構わねえ、何とか見つけ出してくれらあ。

豚肉屋　貴様のもくろんでるのは、旦那がアルカディアを支配することじゃなくて、旦那が戦争に追い廻されて、目も眩んじまい、貴様のしてる悪事もよく見えず、手当やその他の入費で首が廻らず、ポカンと間抜面を貴様の方に向けておいでなさるのをいいことに、あっちこっちの国を搾り上げ、賄賂をとろうっていうんだろう。しかしな、いつか旦那が田舎へ帰って平和にお暮しになるようになり、ひきわり小麦を食って元気を恢復し、オリーヴの搾り粕と言葉を交すようになられた晩にゃ、貴様に日当を払ってたお蔭で、どれだけ貴重なものをいかれてたかということに気がつかれるに違いねえ。そうなりゃ今度戻ってこられるときは田舎の頑固おやじだ、貴様を弾劾する票集めにおいでにならあ。貴様もそれを承知しておればこそ、旦那をだまし、自己宣伝の、夢みてえなことを並べ立てて旦那を煙に巻いてやがるんだ。

パプラゴニア人　貴様がアテナイの皆さんとデーモスの旦那に向って、おれのことをこきおろすたあ、全くべらぼうな話だぞ。お国のためにこれまでテミストクレスよりも——ほんとだぞ——テミストクレスよりも遙かに功績をあげてきたおれをだ。（八〇三）

豚肉屋〔朗誦の調子で〕「おおアルゴスの国よ、聞きたまえこの者の申すことばを。」(6)〔パプラゴニア人に向って〕手前がテミストクレスに張合うってえのかい。あのお方はな、おれたちの町がまだいっぱいに

なってねえのを見てとって、満々と縁までみたしてくださった。そればかりじゃねえ、ペイライエウスを捏ね入れて飯どきに間に合せてもくれたし[1]、魚も元のはそのまんまで、新しいのをおまけに付けてくれたような人だぞ、ところが手前ときたら、託宣みてえな訳のわからねえごたくを並べやがって、無暗に城壁で仕切っちゃこのアテナイをけちな国にしようとしやがった、テミストクレスに張合おうという手前がよ。それなのにだ、あのお方は国を追われなさる、手前はアキレス麦[2]のパンで指を拭いて良い気になってやがるんだからなあ。（八一九）

パプラゴニア人　ねえデーモスの旦那、わたしがこの野郎からこれほどまでに酷え口を利かれるたあ、あんまりじゃござんせんかね、それもみんなわたしが旦那のためを思っているところから来てるんですからね。（八二〇）

デーモス　〔パプラゴニア人に〕おい止めろ、止めんか。口汚く悪態つくのはやめろ。今もそうだが、なにも今に始まったことじゃない、ずっと以前からお前がわたしの眼を盗んで勝手なことをしてきたことは、ちゃんと判っているのだ。

豚肉屋　さすがはデーモスの旦那だ、ねえ旦那こんな悪い奴はありませんよ、ありとあらゆる悪事を働いているんですからね。旦那がポカンと口をあけていなさるときを見はからって、会計検査をうける役人を搾り上げて甘い汁は吸う、それから国庫の金を両の手で掻き出して、くすねてるんですからね。（八二七）

パプラゴニア人　ちぇっ覚えてやがれ、こっちは手前を二百万円横領で訴えてやるからな。

豚肉屋　貴様はこのアテナイの国民に対して、このうえもない悪事を働きやがったくせに、いまさらなにをバタバタ騒ぎ立てるんだ。おれは貴様がミュティレネ[3]から、二十五万円以上の賄賂をとったことをきっとバラしてやる。それができねえ位なら生きちゃいねえやい。

コロス　まったく君は万民のこのうえない救いとして来てくれた。君の弁舌は素晴らしい。君がこの調子で闘ってゆけば、君はギリシア第一の人となり、この国の支配を独占し、三叉の矛をふるって同盟国を牛耳るようになるだろう、その矛で天地を揺さぶり、しこたま金を儲けられるぞ。またいったん捉えた以上、この男を放しなさるなよ、君ほどの（強い）脇腹があれば、易々と退治できるからね。（八四二）

パプラゴニア人　騎士の旦那方、まだなかなかそうご注文通りにゃいってませんぜ。何しろわたしゃ、敵どもが一言（いちごん）[4]もねえ位の手柄を立ててるんですからね、ピュロスから鹵獲してきた楯の一かけらでも残ってる限りはですよ。（八四六）

豚肉屋　おっと、その「楯」というところで待った。そこで尻尾を摑まえたぞ。そうじゃねえか、かりにも手前がデーモスの旦那のためを思ってるんだったら、あの楯をわざわざ把手をつけたまんまで掛けとく法[5]はねえじゃねえか。デーモスの旦那、こりゃ旦那がこの野郎を懲そうとなさった場合に、そうはさせねえという計略に違えありませんぜ。ほれごらんなさい、あいつのところにゃ革屋の若いのが犇めいていましょう、その周りにゃ蜜屋やチーズ屋が住んでる、こいつらはみんなぐるなんでさあ。ですから旦那が鼻を鳴らして貝殻遊び[6]でもしようってな顔でもなすったら、こいつらは闇にまぎれて楯をひきおろして大至急、わたしらの小麦の入ってくる道を抑えちまうにきまってますよ。（八五七）

デーモス　ふうん、怪しからん。ほんとうに楯には把手がつけたままか。〔パプラゴニア人に〕この悪党めが、よくも永い間、このデーモスをこんなペテンにかけてだましてきたな。

パプラゴニア人　冗談じゃありませんよ旦那、すぐ人のいうなりになっちゃ駄目ですよ。いいですか、わたしほど旦那のためを思ってる人間は、ほかに探そうたって見つかるもんじゃありませんぜ。わたしゃたった一人で謀反人どもを抑えたし、町で何か謀む奴らがありゃ、たちまち見つけ出してわめいてきたんですからね。（八六三）

豚肉屋　そりゃつまり、手前は鰻取りと同じだからよ。沼が静かじゃ何も獲れねえ。泥土をひきっかき廻せば獲物があるってわけだ。手前だ

って国をひっかき廻しておいては、獲物をせしめてやがる。さあ一つだけおれの訊くことに答えてみろ、手前はそうやって手広く革を商っているが、一度でもここの旦那に、靴の修繕用の革の切れ端一つでも自腹で差し上げたことがあるのか、旦那のためを思っていると抜かしてる手前がよ。（八六九）

デーモス　いいや、絶対にそんなことをしてもらった覚えはないな。

豚肉屋　〔デーモスに〕どうです、この野郎がどんな人間かお判りになりましたかね。〔靴一足を差し出し〕ところでわたしゃ、旦那に穿いてもらいてえと思って、こうやって靴を一足買ってきましたよ。

デーモス　〔喜んで〕わしの知っている限りの人間のうち、あんたほど国家（デーモス）に尽し、国のため、またわしの足の指のためを思ってくれる人はおらんわい。（八七四）

パプラゴニア人　靴一足にそんなえらい効き目があるとはべらぼうだね、わたしが旦那に尽してきたこと[1]をみんな忘れてしまうなんてね。わたしゃね、あのグリュットスの野郎の籍をけずって、おかま連中を抑えたんですぜ。（八七七）

豚肉屋　全く、手前みてえに尻の穴をのぞいといて、おかまを抑えたたあ、べらぼうだよ。しかも手前があいつらを抑えたのは、ほかでもねえ、あいつらが弁論家にでもなったら大変だ、と思ってやったにきまってらあ、ここの旦那がこの年齢（とし）で下着もなしでおいでになるのに、両袖つきのシャツを作ってあげようとも思やがらねえ、それもこの冬のさなかによ。しかしねえ旦那、わたしがこれを〔肌着を差し出し〕差し上げますよ。（八八二）

デーモス　こういうものはテミストクレスでも気がつかなかったな。そりゃペイライエウスもなかなかの思いつきだったが、わしの考えじゃその名案もこのシャツには及ばないな。

パプラゴニア人　畜生め、なんという小積な猿知恵でおれをやっつけようとしやがるんだ。

豚肉屋　馬鹿をいえ。おれはな、ただ酔っぱらいが糞を垂れにゆくとき（他人の草履を穿く）みてえに、貴様のいつもやる手を、草履代りに使ってるだけだ。

パプラゴニア人　おべんちゃらなら手前がおれに勝てるもんかい。〔自分の上衣を脱いで〕おれはな、これを旦那に羽織らせてあげるんだ。ふん、手前は吠え面をかいてるがいい、この悪党め。（八九一）

デーモス　〔拒んで〕まっぴらだ。お前なんぞは烏の餌になってくたばってしまえ。革臭くってたまらんぞ。

豚肉屋　第一この野郎は旦那を窒息させるつもりで、わざとこんなものをお着せしようとしたんですぜ。以前にも旦那に謀反を企てたことがあったんです。旦那はシルピオン[2]の茎が安くなったときのことを覚えておいでですかい。

デーモス　覚えているとも。（八九五）

豚肉屋　それもこの野郎にちゃんと目論見があって、安くなるように骨を折ったんですよ。みんなが買って食べる、それで裁判所じゃ陪審員がブーブーやって、毒ガスで共倒れにしてやろうってわけでさあ。

デーモス　そういえばたしかに、コプロス区（うんこ）[3]の男で、わしにそういう話をしたのがいたな。

豚肉屋　〔観客に向って〕それでお前さん方も、お互いにブーブーやったせいで、髪が赤黄色くなっちまったんじゃありませんかね。（九〇〇）

デーモス　これはたしかにピュランドロス（あかげのおとこ）[4]の謀略だったにちがいないな。

パプラゴニア人　こん畜生め、何てひでえ悪ふざけで、嫌がらせをしやがるんだ。

豚肉屋　法螺吹きでも手前を負かしてみろという、女神さまのご託宣があったからよ。

パプラゴニア人　貴様がおれに勝てるもんかい。それというのは、ねえデーモスの旦那、旦那が何にもしねえで遊んでおいでになっても、お給金を〔盃に〕なみなみと〔飲まして〕差し上げますからね。（九〇五）

豚肉屋　そんならわたしゃね旦那、この軟膏の壺を差し上げますから、どうぞ向う脛の傷にお塗りになってください。

パプラゴニア人　わたしは白髪を抜いて旦那に若返っていただきましょう。

豚肉屋　さあ、お目んめをお拭きになるのに、この兎の尻尾をどうぞ。

パプラゴニア人　デーモスの旦那、どうぞ手洟をかんで、その手をわたしの頭でお拭きになって。

豚肉屋　いや、わたしの頭でどうぞ。

パプラゴニア人　いいや、是非わたしので。〔豚肉屋に〕貴様を造船委員[1]長の役につかせて、いくら金をつぎ込んで修繕しても、切りのねえような古船を背負いこみ、さんざん自腹を切らせてやるから、そう思え。おまけに帆まで腐ってるのを当てがうように、ちゃんと細工をしてやるからな。

豚肉屋　この野郎、猛り狂ってやがる。おいおい、良い加減にしねえと、煮えこぼれるぜ。こりゃどうも、二三本薪を減らして、汁——いや脅迫の実の方もこうやって少しかい出しておかねばなるまいて。

〔豚肉屋、パプラゴニア人の怒り狂っているのを汁の煮立っているのに見立て、釜の下の薪をへらし、汁の中実を杓子でかい出す仕種をする〕

パプラゴニア人　いいか、手前を財産税でニッチもサッチもいかねえようにして、このお礼はたんまりしてやるぜ。手前の名を高額所得者の表に入れるように、按配しとくからな。

豚肉屋　おれは脅迫めいたことは何にもいわねえ。ただおれが希望するのはこれだけだ——手前の家で烏賊鍋が火にかかってシュウシュウいってる、手前は（民会で）ミレトス事件[2]で発言し、うまくやったら三四十万円儲けられるという算段だ、烏賊を腹いっぱい食って、民会にも遅れねえようにしようってんで、気が急いていやがる、ところが手前が食う前に、民会から人が呼びに来る、手前は四十万円は欲しいし、烏賊は食いたいしで、けっきょく烏賊が咽喉につかえて死んじまえばいいと、まあこういうことだ。

コロス　いいぞ、いいぞ、ゼウス、アポロン、デメテルみんなにかけて、いいぞ。

デーモス　どうも、いろいろな点から見るに、この男は立派な市民のようだな、今までこれほど大衆に尽そうという男はいなかったようだ、大衆向き——一山十円の大衆向きというやつだな。〔パプラゴニア人の方を向いて〕それにひきかえお前はだ、わしのことを思っているなど抜かしながら、このわしをまるで軍鶏みたいに、けしかけることしかしなかった。さあ、わしの（認印付き）指輪を返すんだ、もうお前には執事役をやらせんのだからな。

パプラゴニア人　へえ、お返ししますよ。ただね、わたしにお邸の差配をさせねえようになさりゃ、こんどはまたわたしに輪をかけた悪党が出てきますから、それだけは承知しといていただきますぜ。

デーモス　〔受け取った指輪を眺めながら〕どうもこの指輪はわしのではないぞ。この模様は違っているようだ。それともわしの眼がおかしいのかな。

豚肉屋　どれどれ、旦那のはどんな模様だったんです。

デーモス　十分にあぶった牛の脂肉[3]が一枚だ。

豚肉屋　そんな模様は、ここにゃござんせんね。

デーモス　脂肉がないと。じゃ、何が描いてある。

豚肉屋　海猫が岩の上で、大口あけて演説をしていまさあ。

デーモス　わあ、こりゃえらいことじゃ。

豚肉屋　どうなすったんで。

デーモス　そんなものは、あっちへもっていってくれ。あいつのもっていたのは、わしのではない、クレオニュモス[4]のだったのだ。〔自分の指輪を外して〕さあ、これを渡すからわしの執事を務めてくれ。

パプラゴニア人　いや、それはまだまだ。ねえ旦那、後生ですから、その前にわたしの託宣をきいてくださいよ。

豚肉屋　わたしのもどうぞ。

パプラゴニア人　こいつのいうことなどおききになったら、革袋にならなきゃなりませんぜ。

豚肉屋　こいつのいうことをおききになったら、せがれの皮が付根までめくれてきますぜ。

パプラゴニア人　わたしの託宣にはね、旦那が薔薇の冠も美々しく、世界を統ぶるべし、とありますぜ。

豚肉屋　わたしの方にはね、縫取りしたる紫衣を纏い冠を戴き、黄金の車に駕して汝(な)が狩る（告訴する）は——スミキュテ（の阿魔）とその情夫、と出てます(1)。

パプラゴニア人　よし、そんなら手前の託宣を持ってこい、旦那に聞いていただくんだ。

豚肉屋　いいとも。貴様の方ももってこいよ。

パプラゴニア人　おお、もってくるとも。

豚肉屋　おれだってもってくるぞ。こん畜生、こうなりゃ、なにがどうなったって引くものかい。

〔パプラゴニア人はデーモス家の屋敷のなかへ、豚肉屋は右手の通路から退場〕

コロス　クレオンがくたばったらば、
さぞや陽は麗らかに照り輝こう、
この国の住人はいうもさらなり、
他国から来るものどもにも。
ところが、「訴訟」の見本市場で、
なんとも手に負えぬ年寄りどもが、
こういい返すのをきいた。
「もしあの男がこの国で
威勢を失ったらば大変じゃ、
大切な台所道具が二つもなくなるぞ、
すりこ木と杓子がだ(2)」
それから、あいつの豚音楽にも
感心するよ、おれたちは。
子供のときに、あいつと一緒に塾に通ってた
同窓生のいうのには、
あいつはいつも竪琴を
ドーリス調(ドリスティ)(3)にしか合せない、
ほかの調子は習いたがらなかったそうな。
そこで師匠が腹を立て
破門にしたが、そのときいうには、
「この子はどうも
おもらい調(ドロドキスティ)しか
覚えられないらしいわい」

〔パプラゴニア人、大きな包みをかかえて屋敷から出てくる〕

パプラゴニア人〔デーモスに〕どうです旦那、ごらんなさい、これでまだ全部じゃねえんですからね。

〔豚肉屋、同じく大きな包みをもって登場〕

豚肉屋　ううん重い、ばば垂れそうだ。これでもまだみんなじゃねえんだからな。

デーモス　そりゃいったいなんだね。

パプラゴニア人　託宣ですよ。

デーモス　それ全部がか。

パプラゴニア人　旦那、驚きましたかね。なあに、わたしのところにゃ、もう一箱いっぱいあるんですぜ。

豚肉屋　こちとらは、あと屋根裏と、物置二つがとこ詰まってます。

デーモス　ええ、さてと、その託宣というのは、いったい誰のだね。

パプラゴニア人　わたしのはバキス(4)ので。

デーモス〔豚肉屋に〕お前さんのは。

豚肉屋　わたしのはグラニス(4)のでさ、バキスの兄貴のね。

デーモス　ところで、その託宣というのは、何についてなんだね。

パプラゴニア人　アテナイのこと、ピュロスのこと、旦那のこと、わたしのこと、そのほか何でもありますよ。
デーモス　〔豚肉屋に〕お前さんのは。
豚肉屋　アテナイのこと、豆スープのこと、スパルタ人のこと、とりたての鮪のこと、市場でメリケン粉の目方を誤魔化している連中のこと、それから旦那のことに、このわたしのことなどですよ。〔傍白〕どんなもんだい、あの野郎、まらでも噛みやがれ。
デーモス　じゃ、ひとつその託宣というのを読んできかせてくれないか。とりわけわたしについての嬉しいやつ、わたしが雲の上の鷲になるってやつを忘れないでな。
パプラゴニア人　じゃ、よみますから、耳の穴をほじってようくお聞きになってくださいよ。〔読む〕

「エレクテウスの子よ、(1)託宣の道筋を辿り、心してきけよ。
これは畏くもアポロンが、宮の奥より尊貴なる鼎越しにくだしたもうたお告げであるぞよ。
かの牙鋭き聖なる犬を大切にせよとのことであるぞ。
汝のために吠え、汝のために凄まじくわめきつつ、
汝に手当を給与するあの犬をじゃ。もっとも犬めは、そうでもせねば身の破滅、
彼めを憎む鳥ども数知れず、ガアガアと鳴いて責めたてるからじゃが」

デーモス、これはさっぱりどういう意味か、わしには判らんな。エレクテウスだの鳥だの犬だのと、これはいったいどういうことになるのだな。
パプラゴニア人　このわたしが犬でござんすよ、旦那のために吠えてますでしょう。つまりポイボス（アポロン）さまは、この犬のわたしを大切にせよと、旦那にお告げになったわけですよ。
豚肉屋　いいえ旦那、託宣の意味はそんなんじゃありませんよ。この犬野郎が、お宅の戸をかじるときみてえに、託宣をかじりとって（肝心なところを）抜かしやがるから、そんなことになるんで。わたしの方には、この犬めについて、ちゃんと正しいことが判ってます。
デーモス　じゃ、あんたの方のを読んでくれ。いや、その前に石を拾っておこう。託宣の犬に噛みつかれぬ用心にな。
豚肉屋　〔読む〕

「エレクテウスの子よ、人売りの地獄犬(ケルベロス)に心せよ。
尾を振ってへつらい、汝の食事どきには機を窺って、
汝があらぬ方を見呆けておれば、お副食(かず)をとって食うぞ。
また夜ともなれば汝の眼を盗み、犬式に台所へと忍び込み、
皿も――島も奇麗になめてしまうぞ」

デーモス　ようグラニス、この方がはるかにましじゃ。
パプラゴニア人　おっと旦那、まあ次のを聞いて、そのうえで判定してくださいよ。

「女ありて、聖なるアテナイに獅子を生むべし、
この獅子は雲霞のごとき蚋(ぶよ)を相手に、さながら己が仔を護るがごとく決然と踏みこたえて
戦うであろうぞ。汝、木の砦、鉄の櫓を築き
この獅子を守らねばならぬぞよ」

どうです。このお告げの意味がお判りですかね。
デーモス　さっぱり判らんな、おれには。
パプラゴニア人　神さまははっきりと旦那に、わたしを大切にしろとおっしゃったんですよ。つまりわたしは、旦那にとっちゃ獅子(レオン)の代り(アンティ)なんですからね。
デーモス　へえ、お前がいつの間に、アンティレオン(ししがわり)(2)になっていたのかな。
豚肉屋　託宣のなかで、この野郎がわざと旦那に教えないでいることが一つあるんですよ。ロクシアス（アポロン）さまがこの野郎を入れておけって旦那にお告げになった「鉄と木の砦」がどういう意味だかってことをね。

デーモス　じゃ、神さまはいったいどういう意味でいわれたんだね。

豚肉屋　この野郎を（手足と頸を入れる）五つ穴の枷木(かせぎ)にかけて監禁しておけとお告げになりましたのさ。

デーモス　なるほど、そういうお告げなら、すぐにでも実現させたいものだな。

パプラゴニア人　〔託宣の調子で〕「さような言葉を信ずるなよ。やきもち焼きの鳥どもがわめいておるのじゃ。
隼を大切にせよ。汝がためにスパルタの小鳥どもを
ひっくくって連れてきたのは、あの隼であることを、ゆめ忘れるなよ」

豚肉屋　〔託宣の調子で〕「さようなことは、このパプラゴニア人めが一杯機嫌で仕出かしたことじゃ。
愚かなるケクロポス[1]の子よ、そのようなことに感心することはないぞよ。
女子でも男が載せてやれば、荷を運ぶことはできるもの。
ただ女子には戦さはできぬ、いくさをすれば、くそをしてしまうぞ」

パプラゴニア人　「されど託宣にいう『ピュロスの前のピュロス』なる言葉をゆめ忘れるなよ。
『ピュロスの前にピュロスあり[2]』と」

デーモス　「ピュロスの前に」とは、どういう意味だな。

豚肉屋　この野郎は風呂場の湯槽(ピュエロス)[3]を占領しちまうといってますんで。

デーモス　じゃ、わしは今日は風呂を浴びられないというわけか。

豚肉屋　残念ながら、あの野郎が湯槽をかっさらっていっちまいましたからね。
ところで、ここに海軍についての託宣がありますぜ。これこそ旦那に特別念を入れて、聞いていただかなきゃなりません。

デーモス　聞こうじゃないか。まず第一に、どうやって水兵たちに給料を払ってやったらいいか、そのところをよんでくれ。

豚肉屋　「アイゲウスの子よ[4]、かの『犬狐』めに心してだまされまいぞ。
忍びよって噛みつき、逃げ足速く、陰険狡猾なる狐めじゃぞよ」
どうです、この意味がお判りになりましたかね。

デーモス　その「犬狐」というのは、ピロストラトス[5]のことだろう。

豚肉屋　なかなか。この野郎がいつも、分担金を徴集するために船脚の速い船をせがんでいますでしょう。それでロクシアス（アポロン）さまが旦那に、そんなものをあいつにやってはいかんぞよ、とお告げになったんですよ。

デーモス　しかし、どうして三段櫂船が犬狐ということになるんだ。

豚肉屋　そりゃ、三段櫂船も犬も脚が速いからでさあ。

デーモス　それではだな、犬とだけいえばいいのに、狐を添えてるのはどういうわけだ。

豚肉屋　それはつまり、兵隊を子狐にたとえたんですよ。どっちも葡萄を食って畑を荒しますからね。

デーモス　そうか、ところで子狐どもに払う給料は、どこから賄ったものかな。

豚肉屋　そいつはこのわたしが三日以内にちゃんと工面しますよ。〔また託宣をよむ調子で〕
「しかしまた次のお告げをよく承われ、
レトの御子（アポロン）が、キュレネ[6]に謀(たば)かれるなと汝をば戒めたもうたかのお告げを」

デーモス　キュレネというのはどこのキュレネかな。

豚肉屋　この野郎の手のことを、キュレネと仰せられたんですよ、ズバリじゃありませんか。こいつはこうやって〔丸めた手を差し出し物乞いの真似をする〕「この手に(キュレー)お恵みを」っていってますからね。

パプラゴニア人　なあに、こいつのいってるのは間違ってます。ポイボス（アポロン）さまがキュレネとおっしゃったのは、ディオペイテス[7]の手という謎ですよ。うめいもんじゃありませんか。それはそうと、こちとらにゃ旦那について、例の鳥のお告げがありますぜ。旦那が鷲

になって、世界に君臨なさるってやつがね。（一〇八七）

豚肉屋　わたしには、旦那が陸のみか紅海(エリュトラ)(1)をも統べ、エクバタナ(2)で上等の菓子を食いながら、裁判できるってえのがありますぜ。

パプラゴニア人　わたしは夢を見たんですがね、その(3)夢で女神さま（アテナ）ご自身が手桶でデーモスの旦那の頭から富健水をかけておいでになりましたぜ。（一〇九一）

豚肉屋　なにを、おれだって夢をみたぞ。わたしの夢では、女神さまおんみずからアクロポリスを降りておいでになる、女神さまの肩に梟がとまってました。それから桶で頭から、旦那にはアンブロシア（神々の食物）を、この野郎には韮汁をぶっかけなさったという夢でした。

デーモス　いいぞ、いいぞ。まったくグラニスほど頭のいい人間はおらんな。〔豚肉屋に〕だからさあ、お前さんにみんな任せるから、この老人を指導して、再教育してくれ。

パプラゴニア人　旦那お願いです、そいつだけはまだにしてちょっと待ってくださいよ。旦那に大麦を差し上げますし、毎日の生活費をもちますから。（一一〇一）

デーモス　わしはな、もう大麦の話などされるのは我慢がならんのだ。これまでお前やトゥパネス(4)に何度だまされてきたか判らんほどだからな。

パプラゴニア人　それじゃ、こんどは大麦のちゃんと挽いて粉にしたのを差し上げますから。

豚肉屋　わたしゃ、よく捏ねてもうパンに焼いたのを差し上げますよ。それに焼き魚のおかずも添えましてね。もうおあがりになりさえすりゃいいんで。（一一〇六）

デーモス　じゃ、二人とも急いでやってみてくれ。わしはな、お前たち二人のうち、わしによくしてくれた方に民会(プニュクス)の手綱をまかせるから。

パプラゴニア人　おれが先に家へ帰ろう。

〔屋敷のなかへ入る〕

豚肉屋　冗談いうねえ、おれの方が先だ。〔急いで退場〕（一一一〇）

コロス　デーモスさんよ、あんたの支配は大したもので、
世界中の人間が、あんたをまるで
殿様(テュランノス)みたいに恐れているが、
実は御し易いお人好し、
べんちゃらをいわれ、
だまされるのが大好きで
いつもポカンと口をあけ、弁士の話を
きいている。根からの腑抜けではないが、
いま分別が留守らしい。（一一二〇）

デーモス　わしを馬鹿だと思うとは、
お前がたこそ、その長い髪の間に分別が
入っておらぬ証拠だぞ。わしはな、わざと
こうやって阿呆の真似をしてるのだ。
赤ん坊みたいに毎日を、オッパイくれと
せがんで暮すも楽しいし、
手癖の悪い差配を一人
養ってるのも目論見あってだ。
こいつが十分盗み溜めたのを見計い、
ひっつかまえてどやすのさ。（一一三〇）

コロス　もしもあんたのいわれるように、
ちゃんとした成算あって、そのようにやっておいでであるならば、
実(げ)に天晴れなお振舞い、
ことにわざわざこの連中を
公の犠牲用の牛豚並みに
民会(プニュクス)のなかで飼い肥らせ、
おかずが切れたら、そのなかの
肥ったやつをぶち殺し
舌鼓をうつおつもりとは、

全く恐れ入りました。

デーモス　わしがどんなに鮮やかに、あの連中を出しぬくか、
お前がたも見るがいい。
自分が一かど賢いものと自惚れて
わしをだましたつもりの連中をだ。
わしはいつでも見ぬふりで、
やつらがくすねてるのを見張っている。
それから投票壺の筒口を
ゾンデ代りに咽喉に突き込み、
わしのとこからくすねたものを、
すっかりみんな吐き出さす。

〔屋敷のなかからパプラゴニア人、同時に横手から豚肉屋がそれぞれ食物を入れた籠とテーブルと椅子などをもって急いで登場。危く衝突しそうになる〕

パプラゴニア人　ちぇ、邪魔だ、くたばっちまえ。

豚肉屋　手前こそくたばれ、こん畜生め。

パプラゴニア人　デーモスの旦那え、わたしゃ旦那によくして上げてえばかりに、ちゃんとこう準備をととのえて、三年も前から控えているんですぜ。

豚肉屋　こちとらは、十年も十二年も千年も、いやその前の前からおりますんで。

デーモス　わしの方は三万年も、いやその前の前からお前たちを待ちくたびれて、お前たちが嫌になってたところだ。

豚肉屋　ところで旦那は、これからどうするのか、心得ておいでになりますかね。

デーモス　わしが知らなきゃ、お前が教えてくれるんだな。

豚肉屋　わたしとこの野郎を、スタートラインからスタートさせておくんなさい。わたしらが旦那に親切をつくす競争は、公平にやらなくちゃいけませんからね。

デーモス　よし、そうしよう。位置につけ。

〔両名それぞれの位置でデーモスに向って駆け出す構えをとる〕

パプラゴニア人と豚肉屋　さあ、ようがす。

デーモス　用意、ドン。

豚肉屋　〔パプラゴニア人に〕おれの前に出やがると承知しねえぞ。

デーモス　〔独白の口調で〕今日はまったく、わしを大切に想ってくれるこいつらによくしてもらって、わしは仕合せだな。これを仕合せと思わんようなら、勿体ぶった偏窟爺といわれても仕方があるまいて。

パプラゴニア人　〔デーモスに駆けよって椅子を差し出し〕どうです。わたしが先に椅子をもってきて上げましたぜ。

豚肉屋　〔テーブルをデーモスのそばに置いて〕しかしこの野郎はテーブルはもってきませんでしたぜ。こりゃ、わたしの方が先のまた先ですよ。

パプラゴニア人　ほれ、旦那にこの菓子をもってきましたよ。ピュロス産の麦を捏ねて焼きましたんで。

豚肉屋　わたしゃ匙パン[1]をもって上りました、これは（アテナ）女神さまが象牙のお指で、お掬(すく)いになった匙パンでして。

デーモス　女神さまは、なんとまた大きな指をおもちになってるものだて。

パプラゴニア人　〔スープ皿を前に置き〕へえ、この豆スープをどうぞ。[2]どうです、うまそうな良い色をしてましょう。ピュライマコスのアテナさまがおんみずから、かきまぜてくださったやつなんで。

豚肉屋　〔スープの鍋をデーモスの頭の上にかざして〕デーモスの旦那、まごうかたなく女神さまは、旦那を守ってくださってますぜ。今もこうやって、汁のなみなみ入った鍋を旦那の頭の上にかざしていてくださるんですからね。

デーモス　女神さまがまごうかたなくわしの頭の上に鍋をかざしてくださらんと、このアテナイの町は保(も)たんものかな。

パプラゴニア人　この魚の切り身は、「軍威しの尊（いくさおど）[1]」から旦那への賜わり物でして。

豚肉屋　この汁煮の肉と、皺胃と瘤胃の切り身は「猛父姫（たけちちひめ）[2]」から賜わりましたもので。

デーモス　忝（かたじけ）なや、われわれの奉納した「聖衣」のことを思い出してくださったものと見えるな。（一一八〇）

パプラゴニア人　「ゴルゴーの前立打った兜を召したる」女神さまから、旦那にこの「櫂（かい）せんべい[3]」を頂戴せよとのお言葉でした。これを食って船をうまく動かせるようにってわけでして。

豚肉屋　それじゃ、これをどうぞ。

デーモス　この臓物（エンテラ）をどうしろっていうんだね。

豚肉屋　三段橈船の腹板（エンテロネイア）に使うようにと、女神さまがわざわざ旦那に御下賜になったんですよ。まごうかたなく、女神さまはわが海軍をお守りくださっていますぜ。〔盃を差し出し〕それから、これを一杯おやりください、三―二[4]に割ってあります。（一一八七）

デーモス　〔飲んで〕こりゃうまい、まったく。ことに水三つがよく割れている。

豚肉屋　そりゃそうでしょうよ、水三つをお割りになったのは「三生姫（みつあれ）[5]（トリトゲネス）」ですからね。

パプラゴニア人　じゃこんどは、このこってりした菓子パンを一片どうぞ。（一一九〇）

豚肉屋　わたしからは、この菓子パンの丸っぽをどうぞ。

パプラゴニア人　〔シチュー鍋を出して、豚肉屋に〕手前にゃ、兎をご馳走する算段はつくめえ。おれのとこにゃあるんだぞ。

豚肉屋　〔独白〕こりゃ弱った。こうっと、なんか野郎をひっかけてやる算段を講ぜねばなるまいて。（一一九四）

パプラゴニア人　〔シチュー鍋を豚肉屋にみせびらかして〕どうだ、これを見てみろ。ざまあみやがれ。

豚肉屋　そんなものがなんでえ。〔遠くを指して〕おれんとこへはな、ほれ、あの連中が今やってくらあ。

パプラゴニア人　そりゃだれだ。

豚肉屋　銀の詰まった袋をもった使節団よ。

パプラゴニア人　どこに、どこに。〔鍋を置いて、豚肉屋の指した方角を見る〕

豚肉屋　そんなこたあ、貴様の知ったことじゃねえ。外国人なんかほっとかねえか。〔鍋をとりあげ、デーモスに差し出す〕大切（だいじ）な大切なデーモスの旦那え、どうです、わたしのもってきたこの兎は。

パプラゴニア人　〔あわててふり返り〕なんてえことだ、ひとのものを盗みやがるとは、ひでえ野郎だな、手前は。（一二〇〇）

豚肉屋　なにを抜かしやがる。手前の連れてきたピュロスの捕虜だって同じこっちゃねえか。

デーモス　〔豚肉屋に〕しかしな、お前さんはいったいどうしてこれを盗もうなんて思いついたんだね。

豚肉屋　「思いつきは女神さまから授かりましたが、盗んだのは、このわたしでございます[6]。」危険を冒したのはこのわたし。

パプラゴニア人　しかし、それを料理したのはこのわたし。

デーモス　〔パプラゴニア人に〕お前はもうあっちへゆけ。おれは料理を出してくれた者に恩を着るんだからな。（一二〇五）

パプラゴニア人　ああ情けねえ、このおれが厚かましさの競争でしてやられるとはな。

豚肉屋　デーモスの旦那、わたしら二人のうち、どっちが旦那――いや旦那の胃袋にお気に召したのか、どうしてはっきり決めてくださらねえんです。

デーモス　お前さんらの優劣をきめるのに、どういう証拠を楯にしたら、わしの審判が正しいと、観客のみなさんが考えてくださるか、と思ってな。（一二一〇）

豚肉屋　そりゃ、わたしに考えがあります。そおっといって、わたしの籠をとり、なかになにが入ってるか調べてごらんなさいまし。それか

らパプラゴニア人のをね。そうすりゃ、ご心配はいりません、立派に判定がおできになりますよ。

デーモス〔豚肉屋の籠を調べて〕さてな、なにが入っているかな。

豚肉屋　どうです、空（から）っぽでしょう、おとっちゃん。みんな旦那に上げちまったんだからね。（一二一五）

デーモス　なるほど、この籠は国家想い（デーモス）だな。

豚肉屋　こんどは、こっちへきてパプラゴニア人の野郎の籠を調べてくださいよ。〔蓋をあけ〕どうです、こりゃ。

デーモス　こりゃ驚いた。うまいもので一杯じゃないか。途方もなくみごとな菓子パンが、とっておいてあるぞ。わしには、たったこれっぽっち〔指で大きさを示すしぐさ〕切ってくれよったが。（一二二〇）

豚肉屋　この野郎はね、以前から旦那に、これと同じようなことをやってきてるんですぜ。とってきたものを、ほんのちょっぴり旦那にお裾わけして、残りをたんまり自分のためにとりのけていたんですよ。

デーモス〔パプラゴニア人に〕この悪人め、そうやって貴様は盗みを働いては、わしをだましてきたのか。「それじゃというに、わしとしたことが、そなたに冠を贈ったり、褒美を与えたりしたとはなあ[1]」

パプラゴニア人　わたしゃね、お国のために善かれと思って、盗みもしたんですよ。（一二二六）

デーモス　さっさとその冠をぬげ。この男〔豚肉屋を指し〕にかぶらせてやるんじゃ。

豚肉屋　さっさとぬがねえか、この碌でなし。

パプラゴニア人　ぬぐもんかい。こちとらにゃあな、おれが負ける人間はこの世にたった一人しかいねえ、その一人をちゃんといってくれてるデルポイの神託があるんだ。（一二三〇）

豚肉屋　そりゃ、おれの名前だろう、ちゃんとはっきりいってあるに違いねえ。

パプラゴニア人　よし、それじゃ、手前がアポロンさまの託宣に合うかどうか、ためして見ようじゃねえか。まずはじめに、これを訊いてやろう。手前は餓鬼のときに、どの先生のところへ習いに行ってた。

豚肉屋　おれはな、毛焼穴のなかでもって、拳骨で鍛えられたもんよ。

パプラゴニア人　なんだって。〔独白〕「なんとこの託宣の、わが胸にひびくことよ[2]」〔気をとり直し〕まあいい。それじゃな、体育の先生のところじゃ、どんな手を習った。（一二三八）

豚肉屋　盗んでも、しらを切り、まともに相手を見据える、ことを教わった。

パプラゴニア人〔怖気づいて、独白〕「おおポイボスよ、アポロン・リュキオスよ、わたしをどういう目にあわそうとなされます[3]。」〔豚肉屋に〕一人前になってから、どんな商売をやった。（一二四一）

豚肉屋　腸詰を売ったり——

パプラゴニア人　それから。

豚肉屋　体を売ったりもした。

パプラゴニア人〔恐怖して独白〕なんとも情けねえことになった。おれも、もう駄目だな。あとはただ一つ、心細い望みの綱があるだけだ〔豚肉屋に〕もう一つ、これだけ訊くがな。手前が腸詰を売ったのはアゴラでか、それとも都門のとこでか。（一二四六）

豚肉屋　塩魚を売ってる、都門のとこだ。

パプラゴニア人　ああ、ああ、アポロンさまのお告げは成就してしまったか。

「そなたたち、この不幸な男を中へ転げ入れてくれ[4]」

〔冠をぬぎ〕冠よ、さらばじゃ。わたしもそなたと別れたくはないが、

別れねばならぬ。やがてまただれかが、そなたを自分のものとするであろう。（一二五〇）

盗み心ではわたしに及ばぬとしても、きっとわたしより仕合せな人が[5]。

〔パプラゴニア人地上に崩れ伏し息絶えた態〕

豚肉屋　ヘラスのゼウスさま、勝利の誉れはあなたのもの。（一二五四）

デモステネス　優勝者、万々歳。あんたが男になれたのはわたしのお蔭だってことを、忘れないでいてくださいよ。それで、けちなお願いがあるんですがね。あんたのパノス[1]ってことで裁判関係秘書官に使ってくださいな。（一二五六）

デーモス　ところで、お前さんの名前は、何ていいなさる。

豚肉屋　アゴラクリトスってんで。アゴラで喧嘩口論（クリネスタイ）しちゃあ食ってたものですからね。

デーモス　それじゃ、わしの一身はアゴラクリトスに任すことにする、それからこのパプラゴニア人の身柄もあずけよう。（一二六〇）

豚肉屋　デーモスの旦那、わたしは旦那を大切にお世話しますぜ。旦那もきっと、世界中でわたしほど、この「クチシマリナイ国[2]」にとって有益な人間はいねえ、と認めてくださいますよ。

〔一同デーモスの屋敷のなかへ入り、コロスのみ残る〕

コロス〔観客に向って話しかける〕

歌[3]のはじめに、歌の終りに
かくばかり賞（め）でたきはなし、
足早の馬の駆り手ら、
リュシストラス[4]がことも歌わず、
また家無しのトゥマンティス[5]を
苦しめて快とせざるは。（一二七〇）
この者は、おおアポロンよ、つねに貧しく、
神さびしピュトー[6]の宮の
君が箙にすがりつつ、さめざめと泣き伏して
貧苦より救いたまえと祈るなり。（一二七三）

悪人どもを誹ることは、なんら咎むべきことではなく、むしろ、正しく判断さえすれば、それは善人への讃美なのであります。さてこれから槍玉にあげねばならぬ男が、もし名の通った人間であったならば、わが親愛なる紳士の名まで挙げずに済むのでありますが。――すなわち、アリグノトス[7]氏が黒白を識別し、勇壮高雅の音楽を解する君子であることは、知らぬ者とてありませんが、このアリグノトス氏に、その性格が似も似つかぬアリプラデスという無頼の弟があるのであります。それも自分から無頼になろうとしているのだから、処置なしであ
ります。（一二八二）

しかしこの男は、ただ無頼であるというだけではありません――もっとも無頼でなければ、われわれが目をつけることもないわけですがね――いや、世にも無頼な男といってもまだ足りません。この男は、なんとも奇怪なことを発明したのであります。すなわち、われとわが舌を破廉恥極まる快楽で汚しているのでありまして、淫売宿で売女どもと戯れ、淫水をねぶっては、髯をよごす、女どもの股ぐらをまさぐる、ポリュムネストス[8]まがいの猥歌を作って、オイオニコス[9]となじむ、といった態たらくなのであります。かかる男を嫌悪せぬようなものは、われらと同じ盃で酒くみ交すことは、断じて許されぬのであります。

いくそたび夜の想いに（一二九〇）
耽りしかわれ[10]。
クレオニュモス[11]なにゆえにかく安らかに飯食らうかと、
その理由（ことわり）をたずねつつ。
人のいう、かれ富める屋敷に
寄食して、
いつまでも水屋離れず、
家人やむなく、かれにかく乞いて言いしと。
「主よ、願わくは立ち去りて、
食膳のみは残したまえよ」（一二九九）

なんでも人の噂では、三段橈船(トリエレス)嬢たちが寄り合いをしたそうでありますが、そのなかの年輩の一人がこういったというのであります。

「ねえみんな、街で評判になってることを聞いてない。みんなの噂じゃね、カルタゴを攻めるから、わたしらを百パイくれろっていってる嫌な男がいるんだそうだけど、それがあのいけすかないヒュペルボロスなのよ[1]」（一三〇四）

するとそれは大変、とうてい辛抱できぬということになったのでありますが、そのとき、まだ男を知らない一人がいうには、

「まあ、まっぴらよ、あんな男に自由にされてたまるものですか。どうしても仕方がないっていうなら、このまんま虫に食われて老い朽ちてしまうわ」（するともう一人が）（一三〇八）

「このナウソンの娘ナウパンテ[2]だって、あんな奴のいうことなんかきくものかい。松材のこの船体は、伊達じゃないんだからね。万一アテナイ人がそんなことをきめたら、テセウス神社か怨霊廟[3]に乗り入れ、坐りこんでかばっていただくわよ。わたしらを率いて、お国に対しチャラけたことなんかさせるものか。どうしても出かけたいなら、あいつがいつも燭台を載せて売ってる台を、船代りに進水させて、自分ひとりで遠征して、お陀仏になりゃいいのさ」（一三一五）

〔豚肉屋が立派な服装にかえ、堂々たる態度で屋敷のなかから現れる〕

豚肉屋　〔荘重な口調で〕口を閉じ、徒(いたずら)なる言葉を吐くを慎まれよ。また証言も控え、裁判所を閉じよ——これはこの国の大の好物ではあるがな——、観衆諸氏はみな、国の新しい幸を祝って、歓呼の声を挙げられよ。

コロス　聖なるアテナイ、また友邦の島々の光とも救世主とも仰ぐ君よ、八衢(やちまた)を犠牲の煙で満たすべく、携えてこられたその吉報とは何でしょうか。（一三二〇）

豚肉屋　あの老醜のデーモス殿を、そなたらのためにこのわたしが美しく煮直してあげたのじゃ[4]。

コロス　とはまた、驚くべき工夫を案出されたものですが、そのデーモスさんは、どこにおられます。

豚肉屋　いにしえの、菫挿せる[5]アテナイに住んでおられる。

コロス　どうしたらお会いできますか。どんな衣裳をつけておられます。またどのように変えられましたか[6]。（一三二四）

豚肉屋　そのむかし、アリステイデスやミルティアデス[7]と会食しておられたときそのままじゃ、そなたらも直ぐ見られよう。ほれ、もう城門の戸の開く音が聞える。さあ、一同歓呼の声を挙げられよ、名も高きデーモスの住む、ふりにし都、いくたびか歌にうたわれ、いみじくも美わしきアテナイが姿を現わすのじゃ。（一三二八）

コロス　艶やかに匂い耀(かがよ)い、菫を挿し、ひとみなの羨み仰ぐアテナイよ[8]、この国とヘラスを統べる一天万乗の君をば、今やわれらに示したまえ。

〔若がえったデーモス、豪華な古式の衣裳をつけ、にこやかに登場〕

豚肉屋　ほれ、そこにやってこられた。髪には黄金の蟬の髪留め[9]、昔ながらの衣裳も堂々と、もはや貝殻の臭味はなく、平和の匂いを漂わせ、没薬(もつやく)をぬりこめて、お出ましになった。

コロス　ヘラスの民を統べたもう君よ、よくこそ。われわれも、お仕合せにあやかりたいもの。まったく、今のこのご境遇は、この国とマラトンの勝利碑にふさわしいものというべきですからな。（一三三三）

デーモス　アゴラクリトスよ、こっちへ来られよ。そなたに勝る友はないぞ。わしを煮直してくれた恩には礼の言葉もない。

豚肉屋　〔皮肉に〕へえ、そうですかねえ。しかしねえ、旦那が今まで、どんな人間で、どんなやり方をしておいでになったか、ご存じだったら、こんどはわたしを神さま扱いなさりかねませんぜ。（一三三六）

デーモス　わしのこれまでのやり方がどんなだったか、またわしがどんな人間だったか、いってきかせてくれ。（一三三九）

豚肉屋　第一に、民会でたれかが立って、「デーモスさん、わたしゃぞ

っこんあんたに惚れこんで、お慕いしています、あんたのためを思い、あんたのために計ってるのは、わたしだけですよ」とかなんとか前口上を述べやがると、旦那はいつも（鳥みてえに）羽根をバタバタ、（牛みてえに）角をふり立てて、得意満面だ。

デーモス　わしがかな。（一三四四）

豚肉屋　その野郎は、散々そうやっておいて、旦那をひっかけ、それでドロンでさ。

デーモス　なんだって。わしをそんな目に合わせよったのか。わしはそれに気がつかなかったのかな。

豚肉屋　旦那のお耳は、傘みてえに、開いたりしぼんだりでしたんでね。

デーモス　それほどまで、わしは耄碌して、ぼけていたのかな。（一三四九）

豚肉屋　それからですよ、二人の弁士が立って、一人は軍艦を造れといい、もう一人は、その金を給料に廻せという。そうするとかならず給料論者が建艦論者を追い抜いて、勝っちまうんですな。

〔デーモス俯目になってモジモジする〕ねえ旦那、どうして下を向いちまって、じっと一所に落着いていねえんです。

デーモス　わしは、今まで犯してきた過ちが、恥かしいのじゃ。（一三五五）

豚肉屋　なあに、気になさるこたありません。そりゃ旦那の罪じゃねえ、そうやって旦那をだましてた奴らが悪いんですよ。

　ところで一つ、わたしの質問に答えていただけませんか。かりに悪党の弁護士がいて、「この事件を有罪にしねえようなら、お前ら陪審員に麦粉の配給を止めちまうぞ」といった場合、いったい旦那はこの弁護士をどうなさいます。（一三六一）

デーモス　そいつの首にヒュペルボロスを縛りつけ、眼よりも高く持ち上げて、仕置き穴へ投げ込んでやるな。

豚肉屋　こんどはまったく、筋の通った正しいお言葉ですな。そのほか、どんなふうに政治をやってゆくおつもりか、聞かせていただけませんかね。（一三六五）

デーモス　さようさ、まず軍船の漕手たちには全部、入港次第、給料を全額支払うとしよう。[1]

豚肉屋　擦り切れかけた臀がみんな、お情けに感激しますぜ。

デーモス　次は、いったん出征名簿に登録された重装兵は、情実で編成替えになるようなことはさせない、はじめに登録されたまんまにして置くようにする。（一三七一）

豚肉屋　クレオニュモスの楯の把手にゃ、そりゃ大打撃ですな。[2]

デーモス　また未成年者がアゴラで[3]ぶらぶら油を売るのを禁ずるぞ。

豚肉屋　それじゃ、クレイステネスとストラトン[4]は、どこで油を売りますかな。（一三七四）

デーモス　わしのいうのは、香水市場にいる青二才どものことだ。あの界隈にとぐろを巻いて、こんなことをベチャクチャやっている連中だ。

〔声色を使って〕

「ねえ、パイアクス[5]って、頭の良い人だねえ。鮮やかに死刑を逃れちゃった。論理的で説得的、警句的で明晰で印象的だし、野次を抑える骨という点じゃ、まったく名人芸的なとこがあるからねえ[6]」といった工合だ。（一三八〇）

豚肉屋　旦那は、饒舌的なやつには嘲弄的というわけですかね。

デーモス　そうだ、わしはあの連中にはみんな、法令いじりなんぞはやめさせて、強制的に狩にゆかせるつもりでいるのじゃ。

豚肉屋　じゃあ、そういうふうにしていただくことにして、どうぞこの折畳み椅子[7]と、椅子持ちのボーイ――ちゃんと玉をぶらさげた奴ですぜ――をお受け取りください。お気が向いたら、このボーイを椅子代りになすっても構やしません。（一三八六）

デーモス　昔ながらの境遇に戻れて、わしは仕合せ者じゃ。

豚肉屋　わたしが、旦那に三十年媾和をあげられるようになったら、そのときこそ自分は仕合せ者じゃといっていただきましょう。

　おおい媾和[8]よ、早くこっちへおいで。

〔美しく着飾った娘「媾和」が登場〕

デーモス　これはこれは、なんという別嬪じゃ、ほんとに、この娘とし

っぽり媾和してもよいのかい。お前さん、いったいどうやってこの娘を手に入れたんだ。（一三九二）

豚肉屋　あのパプラゴニア人の野郎が、旦那に渡したくねえばっかりに、家のなかへ隠しといたんじゃありませんかね。今はわたしが旦那にお渡ししますから、どうぞ在所へ連れてっておくんなさい。（一三九五）

デーモス　こんなことを仕出かした、あのパプラゴニア人に、お前さんはいったいどんな仕置きをするつもりだね。

豚肉屋　なあに、大したことをするつもりはありません。わたしの商売をやらせますよ。都門の傍（わき）で独りぼっち、犬の肉と驢馬の肉を混ぜながら、腸詰を売らせます。酔払っちゃあ、淫売どもと喧嘩したり、風呂の流し水を飲んだりさせてやりますよ。（一四〇一）

デーモス　なるほど、うまいことを考えたな。淫売や三助と怒鳴り合うなんてのは、いかにもあの男に似合っている。さてお前さんは、今度の功績により迎賓館に招待し、あの悪党めが坐っていた席につかせてあげよう。さあこの蛙色（萌黄色）の式服をつけて、わしと一緒にきなさい。それからこの男は外へ運び出して、さっきいった商売をやらせるのだ。こいつめに今までさんざん苦しめられていた外人にも、見せてやれるようにな。（一四〇八）

〔数人の男駆けより、倒れているパプラゴニア人を担ぎあげ、それとともに一同退場〕

訳註

五一（1）　パプラゴニアは小アジア、黒海南岸の地方名。この地方からきている奴隷の多かったことは事実であろうが、ここでとくにパプラゴニア人ということにしたのは、九一九行にも使ってある paphlazein「荒れ狂う」という言葉にかけたもので、クレオンの特性を諷したつもり。

（2）　喜劇に頻出する、叙事詩や悲劇作品中の章句の引用やパロディーは、出所不明のものも少なからず、またパロディーであるか否かも決定しがたいものも多いが、いちおうそれらしき箇所は引用符号で囲むか、行を換えて示してある。

（3）　前七世紀に活躍したというプリュギアの音楽家。とくに笛の名手として名高かった。

（4）　エウリピデス『ヒッポリュトス』三四五行で、パイドラが自分の秘めた恋を語りかねて乳母にいう科白を、そのまま借用している。

五二（1）　エウリピデスの母が野菜売りだったという、恐らくは喜劇作家たちの捏造したゴシップにひっかけている。

（2）　手淫の意らしい。

（3）　前註に関連して。

（4）　ニキアスが迷信家であったので、この言葉をふるえ声でいった、と解すべきか（ロジャース説）。ただし写本によっては、格別舌たらずでいった風には、なっていないのもある。

（5）　もちろん本当の区名ではない。

（6）　民会の選挙のとき、投票用に豆を用いたところから。

（7）　はじめ一オボロスであったのを、クレオンが人気取りの目的で三オボロスにひき上げた。古代アテナイの貨幣価値を今日のものに換算することはむつかしい。しかし、多少ともわかり易くするため、きわめて粗雑な換算であるが、一オボロスを十円ということにしておいた。

（8）　あとにもたびたび出てくるが、クレオンがピュロスにおける、デモステネスらの功を横取りしたことを指す。

五三（1）　これは単に奴隷の名として、あげただけのものらしい。

(2) 「カオネス族」(地名とすればカオニア) はエペイロスの部族とも、トラキアの部族ともいうが、いずれにしても辺境の蛮族。ここではおそらく khaskein「ぽっかり口を開く」という語にかけて、「尻の穴の大きい、好色の」という洒落なのであろう。

(3) アイトリアはもちろん現実の地方名であるが、ここでは aitein「たかる、ゆする」にかけている。

(4) **Kropidai** という区は、アテナイの東南方に現実にあったらしいが、r を l にかえて、**Klopidai** とし、klops「泥棒」にかけた。

(5) テミストクレスは、高名なアテナイの政治家で、第二次ペルシア戦役における最大の英雄である。失脚後ペルシア王に重用されたが、牛の生血をのんで自殺を遂げたという。ただしこの自殺説は、プルタルコスその他に言及されてはいるが、ツキュディデスは認めず、おそらく風説に過ぎなかったのであろう。

(6) クレオンが、没収財産の公売などで私利を営んでいることを諷したもの。epipasta はビスケット風のもの。

(7) 「プラムノスの酒」というのは、ホメロス以来よく使われる表現で、その原義については、古来から諸説あるが、要するに銘酒ということ、わが「灘の生一本」というのに相当するのであろう。それを神格化して、ふざけているわけ。

五四(1) ボイオティア出身の、当時高名の予言者、彼のことは、アリストパネスの他の喜劇にも、またヘロドトスやパウサニアスにも言及されている。

(2) ここに綱屋というのは、エウクラテスというデマゴーグを指す、と古註は記している。

(3) これはリュシクレスという政治家を指すものらしい。彼は実際家畜商人であった。ペリクレスの死後、彼の愛人として有名な才媛アスパシアと、結婚したことが知られている。

(4) アッティカの急湍の名。冬の雨季には水がふえて、凄じい水音を立てたところから。

(5) ここに豚肉屋と訳したのは、普通は「ソーセージ屋」と訳される。allas というのは、牛や豚の内臓から作った食料品で、厳密な意味ではソーセージとも違い、何と訳してよいかわからない。

五五(1) カリアとカルタゴは、西と東の正反対であるから。

五六(1) ここにいう騎士が、本作品のコロスの形成員で、かつ題名にもなっていることは、いうまでもないが、アテナイの騎兵隊は、十部族(ピュレー)から百名ずつ、合計千名で、二人の騎兵長官(ヒッパルコイ)の指揮下にあった。

(2) 古註は、仮面製作者がクレオンの怒りを怖れて、クレオンに似せた面を造ることを拒んだこと、さらには俳優もクレオンの役を引き受けることを躊躇したので、アリストパネス自身がこの役を演じた、ことなどを挙げているが、その真偽はともかくとして、クレオンをあからさまに戯画化することには、多大の危険が伴ったであろうことは疑いない。

(3) エウボイア島のカルキスは、銀や銅の器物の産地として有名であった。カルキスは前四四五年に、アテナイに反乱を起し、ペリクレスによって鎮圧されたことがあった。ただし、エウボイアのカルキスではなく、マケドニアのカルキディケを指すのだ、とする説もある。この種のいいがかりをつけて、反対派を弾圧するのが、クレオンの常套手段であったのであろう。

(4) シモンとパナイティオスは、二人の騎兵長官の名である、と古註にある。

(5) 五四ページ註(2)にエウクラテスの名はすでに挙げた。彼は製粉業者でもあったので、麩小屋というのは、それにひっかけたのであると、古註は記している。

(6) 五二ページ註(7)を参照。

五七(1) ケルソネソスはトラキアの地名。アテナイへの食糧供給地として重要であった。

(2) tenella という言葉は、アルキロコス(前七世紀の詩人)が造った擬声語で、絃の音を表わしたものらしく、勝利者を讃える句に常用された。アリストパネスは、その語から tenellos という語を新造して、「勝利者」の意に用いているのである。なお、この辺の科白の割当ては、とくに混乱していて、確実なことは判らない。

(3) ここには単に「賞品」としたが、原語は pyramus で焼菓子の類。古註によれば、宴会で徹宵飲みあかした人が、賞品として焼菓子をもらう風習があったという。

(4) hypozomata(船体補強用の資材)の代りに、zomeumata(肉汁、ソースの類)といったもの(古註)。

(5) スパクテリアでの戦勝の功により、クレオンは迎賓館で公費の食事を給与されることになった。ペリクレスはこの特権を受けなかったらしい。

(6) 古註によれば、実際アゴラの中央に「アゴラのヘルメス」と呼ばれる、ヘルメスの神像があったらしい。ヘルメスは盗賊の神ということにもなっているので、ここでとくに挙げたのであろう。

五八(1) 没収された財産とか、戦利品などは、その一割をアテナ女神に献納せねばならなかった。ここでは「財産」というべきところを、相手が豚肉屋なので「臓物」と洒落たのである。

(2) 地中海では、鮪が一定の季節に、大群を成して浅瀬に近づくので、漁師は海岸の岩上でそれを見張る。テオクリトスの牧歌第三の描写は有名である。

(3) アルケプトレモスという、穏健な政治家。和平派でスパルタとの媾和を策したが、クレオンの反対で成功しなかった。

五九(1) labrax という魚は、分類学的には鱸（すずき）の類であるらしいが、貪欲で獰猛な魚らしい。フランスで loup de mer 「海の狼」と呼ばれるのが、これに当る。小アジアの都市ミレトスで捕れるのが、最も珍味とされた。クレオンがミレトスをどのように悩ましたか、その具体的なことは知られていない。

(2) 鉱山を買う、というのが何を皮肉っているのか、よくわからない。いずれクレオンの瀆職的行為の一つを諷しているのであろう。

(3) 肉屋が、豚の病気（痳疹の類の）を検べるため、口を開けさせ、舌に発疹が出ているかどうか、を見るのになぞらえている。

六〇(1) いうまでもなく、ピュロス戦のことを指す。次の「穂」というのは、クレオンが捕えて、アテナイへ連れてきた、スパルタの捕虜たちを指すのであろう。

(2) クラティノスは、アリストパネスのやや先輩に当る、高名な喜劇作家。大酒飲みであるところから、こうふざけたのである（六二ページ註（4）参照）。

(3) モルシモスは、アイスキュロスの血縁に当る当時の悲劇作家。凡庸な作家であったのであろうが、アリストパネスはほかのところでも、彼を痛烈に罵倒している（『平和』八〇三行、『蛙』一五一行）。

(4) 詳細は不明であるが、穀類取引の監督官でもあって、クレオンに怨みをもっていた人物かとも考えられる。

(5) 生パンを丸めて、団子状にしたもの。宴会のとき、客がよごれた指をこれで拭き、あとは犬に投げ与えたものという。

(6) 「嫁菜」と訳したのは、実は「いらくさ」の類で、春期の青物として愛用された。利尿の効もあるらしい。若く柔かい間しか食べられないので、燕の来るまでが、その食用になる時期であった。

(7) 原語では「何タラントンも……」とある。タラントンはオボロスに換算すれば、三万六千オボロスであるから、オボロスを十円とした（五二ページ註（7）参照）われわれの建前を一貫すれば、一タラントンは三十六万円になる理窟である。しかし次の箇所では一タラントンを三十万円と仮にしておいた。以下も同様に金の換算は厳密にはしてない。

六一(1) 北方カルキディケ半島にある、コリントスの植民都市。この喜劇が上演される約五年前、前四三〇年に永い包囲攻撃の後アテナイに屈したが、そのときの降伏条件が比較的寛大であったので、関係の将軍たちが収賄の嫌疑をうけたらしい。

(2) アルクメオニダイ家の一族だという意味。アルクメオニダイは、その昔キュロンの乱のとき、アテナ女神冒瀆の罪を犯したというので、後々までそれが一族の禍因となった。ペリクレスの母親がその一族の出だというので、敵方から嫌がらせをうけたことは有名な事実である。

(3) 相手が古いことを持ち出したので、こちらも古い因縁話で応酬する。ヒッピアスはアテナイの最後の僭主、その妻の名はミュルシネ Myrsine が本当であるが、革屋にひっかけるため、Byrsine（「革の鞭」の意）とした。

(4) アルゴスの帰趨は、アテナイ、スパルタ両国にとって、きわめて重大な意味があったので、両国ともアルゴスとの友好を得るため多大の努力を費した。そういうおりに、クレオンがスパルタと通ずる機会は、いくらでもあると感ぐったのである。

(5) このころ、ボイオティアの各都市に働きかけて、アテナイに都合のよいように、民主政体を樹立させようとする動きが活溌であった。将軍デモステネスも、その方向で努力していた一人である。なおボイオティア地方は、チーズの産地として聞えていた。

六二(1) 『雲』五一八行以下の章句に対する古註に、『騎士』以前の作品は、アリストパネスが自分名義では上演しなかったことが記されている。彼に代って演出した人物の名として、カリストラトス、ピロニデスの二人が知られている。

(2) 喜劇 komodia という語は女性であるので、女になぞらえたもの。
(3) マグネスは、前五〇〇年頃に生れたと推定される、アリストパネス以前の代表的古喜劇作家の一人。優勝十一回という記録があるが、ここに記されているように、晩年は振わなかったらしい。次に出てくる「琴弾き」とか「リュディア人」とかは、みな彼の作品の題名であるが、今日では「リュディア人」から僅かな断章が伝わるのみ。
(4) クラティノスのことは前にも出たが（六〇ページ註(2)参照）、アリストパネス、エウポリスとならんで、ギリシア古喜劇の代表的作家であった。生年は不明であるが、前四八四年頃かと推定され、そうだとすれば悲劇作家のエウリピデスと、ほぼ同年配ということになる。アリストパネスが彼のことを、すでに耄碌したようにいっているのは冗談で、現にこの年の競演でも『騎士』に一等賞をゆずったが、『サテュロイ』で二等賞を得ており、さらに翌年にはアリストパネスの『雲』が三等に落ちたのに、『徳利』で優勝している。
六三(1) これと次の「器用な……」とは、クラティノスの初期の作品中の歌節であろう。
(2) コンナスというのは、コンノスの蔑称形であるが、コンノスは笛の名手。ソクラテスが老年になってから、キタラを学んだというコンノス（プラトン『エウテュデモス』参照）と同一人物かどうかは判らない。
(3) クラテスはおそらくクラティノスよりもやや若い喜劇作家。器用で気の利いた作風の持主であったのであろう。
(4) ゲライストスは、エウボイア島南西端の岬。ここにポセイドンの神殿があった。
(5) アテナイの提督。ペロポネソス戦争のヒーローの一人、アリストパネスは彼を高く評価していた。
(6) クレアイネトスはクレオンの父。
六四(1) koman という語を、古註は「長髪を貯える」という意から転じて、「富裕にくらす」意としているが、アテナイの騎士が長髪を貯えていたことは、よく知られているので、本義の通りに解してよいのであろう。
(2) サンというのは、ギリシア文字シグマの別名。この文字を焼きつけてあるところから。

(3) 前年の秋、ニキアスの指揮下に行なったコリントス作戦のこと。この戦闘で騎兵隊の活躍が目覚しかったことは、ツキュディデス第四巻に見える。
(4) テオロスは、クレオンの取り巻きの一人。
六五(1) この辺の言葉は、俗語や新造語をとりまぜて、口から出まかせに、並べ立てているものらしい。訳語も従って正確ではない。
(2) 右手は吉兆とされたので。
六六(1) 国家に特別の功労のあった者には、劇場で最前列の特別席を与えられた。この劇上演のときも、クレオンは果してこの特別席で観劇していたのであろうか。
(2) エイレシオネというのは、オリーヴの枝に羊毛を捲きつけ、これに無花果、菓子、さらに蜜、オリーヴ油、葡萄酒などを入れた器を結びつけたもの。豊穣のシンボルとして、十月末の豊年祭に持ち廻り、その後は戸口のところに吊してあった。
六七(1) デマゴーグの一人、ヒュペルボロスのこと。あとのはどれも革に関係がある職業であるから、みなクレオンのことを指すのであろうか。
(2) プニュクスは民会の正規会場である丘の名。
(3) 乾無花果を投げ上げて、口を開けてそれを受けとめる子供の遊戯からか。
(4) 海豚形の鉄または鉛の塊。軍船に積んでいて、近接戦のとき、敵船に投げ込んで圧しつぶす目的の兵器。
(5) リュシクレスは前出（五四ページ註(3)参照）、キュンナとサラバッコとは、いずれも娼婦の名。その名は他の作品にも出てくる。もちろん、この言葉は冗談で、単にクレオンを冷かしているだけである。
(6) アテナイには、ケラメイコスと呼ばれる場所が、城壁内城壁外と二つあった。ここにいうのは城壁外の方であろう。古註によると、この辺には私娼窟もあったと。
六八(1) 三段橈船の漕手が、サラミス海戦のとき、懸命に漕いで尻の皮をむいた、という冗談。
(2) ハルモディオスは、前六世紀末友人アリストゲイトンと謀り、僭主のヒッパルコスとヒッピアスを討ち、アテナイの自由を回復しようとした。ことは中途で挫折したが、以来この二人は、アテナイの代表的な愛国者として、後々まで尊敬された。

（3）ペロポネソス戦争勃発以来、地方の住民が続々と市中に避難してきて、アテナイ市が住宅難に悩んだことは、ツキュディデス第二巻によってもよくわかる。

（4）前出（五八ページ註（3）参照）。

（5）ペロポネソス戦争に勝って、ペロポネソスを席捲すれば、アルカディア（ペロポネソス中部）で、アテナイよりもよい日当で、大好きな裁判ができる、という意味。

（6）この句、古註によれば、前半はエウリピデスの悲劇『テレポス』から、後半は『メデイア』からの引用であると。

六九（1）アテナイとその外港のペイライエウスとに城壁をめぐらし、これを長城で結ぶ構想はペリクレスによる。

（2）「アキレス麦」というのは、最も上等の麦である。「指拭きパン」のことは、六〇ページ註（5）参照。

（3）ミュティレネはレスボス島の主邑。前四二八年にデロス同盟を脱退、アテナイに占領された。クレオンはミュティレネに対して苛酷な政策をとったが、ここにいう収賄は、そのことに関連しているのであろう。

（4）戦利品は故国の神殿に奉納する習慣があったが、ピュロスで鹵獲したスパルタ軍の楯は、アテナイのストア・ポイキレーに保存され、永く後世まで伝えられた。

（5）スパルタでは、農奴（ヘイロテス）の反乱を怖れて、平時は楯の把手をとりはずしておく習慣であった。従って把手をつけておくのは、何か企らみがあるのだと感ぐったのである。

（6）ostrakinda (paidia) は子供の遊戯で、ostrakon「陶片、貝殻」を使うからその名があるが、ここではもちろん、「陶片追放 ostrakismos」にかけている。

七〇（1）グリュットスは、当時名代の放蕩児であった。

（2）植物の名で、調味料または薬用にあてられた。下剤として用いられ、放屁を促す作用があったところから。アフリカのキュレナイカなどから輸入されたものらしい。

（3）Kopreioi というのは、現実にあった区名であるらしい。

（4）ピュランドロスという別の男を指すのではなく、クレオンのことをいうのであろう。そうすると、クレオンは赤毛であったことになる。

七一（1）アテナイの富裕な市民は、さまざまな賦役を負担させられたが、三段橈船を艤装したり、修繕したりするトリエラルコス（ここに「造船委員長」と訳したもの）の役も重い負担であったに相違ない。

（2）ミレトス市の負担すべき貢租額引上げに関連する、収賄のことを暗示しているらしい。

（3）demos はアクセントが違うだけで、「国家、国民」の意味になったり、「脂身」の意味になったりした。

（4）クレオニュモスは、アリストパネスではしきりに出てくる人物で、卑怯者また大食漢として揶揄される。前に海猫と訳したのは、鷗の類の海鳥であるが、ここではクレオニュモスの貪食を象徴しているわけである。

七二（1）ここの句のポイントは、diokein という動詞が「追う、狩る」と「告訴する」の両義をもつところから、堂々と王者のごとく車駕に乗り、狩猟に出かける、という風に運ぶものと予想させておいて、「告訴する」意に切り換えるおかし味をねらったもの。スミキュテというのは、おそらくスミキュテスまたはスミキュトスという放蕩児の名を、女性形にしたものであろう。

（2）クレオンが、まるですりこ木と杓子で、ギリシアあるいはアテナイを攪乱しているようだ、というところから。

（3）ギリシア音楽の音階には、リュディア調とかプリュギア調とか、いろいろあったが、ドーリス調というのは荘重で男性的な趣きをもつものとされた。しかしここでは、次のドロドキスティと語呂を合すために、あげたにすぎない。

（4）バキスのことは前出（五四ページ註（1）参照）。グラニスというのは、口から出まかせで、バキスの兄というのも、もちろんでたらめであろう。グラニスというのは小魚の名である。

七三（1）エレクテウスは、アテナイ古代の伝説的な王の名。エレクテウスの子というのは、アテナイ人の意。

（2）古註に、アンティレオンは性悪でうるさい男、とあるが詳細は不明。

七四（1）ケクロポスも古代アテナイの王。この句の意味は前の「エレクテウスの子」に同じ。

（2）ペロポネソス半島西岸には、ピュロスという名の町が三つもあった。そ

こからこの諺が出たらしい。ここでは、クレオンがピュロスの戦功を誇って、ことあるごとに、ピュロスというのを、諷したのである。

(3) これは単に音の相似にひっかけた、あまりうまくない駄洒落である。

(4) 前出の「エレクテウスの子」「ケクロポスの子」と同じ。

(5) ピロストラトスは、当時悪名高き娼家の主人で、「犬狐」とあだ名された（『女の平和』九五七行にも出てくる）。

(6) ここにキュレネというのは、いちおうペロポネソス半島のエリス地方の海港キュレネを指し、このころポルミオン提督のあげた、海戦の勝利と関連させたものと考えられるが、もちろんポイントはそこにはなく、kyllos「凹んだ」という語と語呂を合せるのが主たる目的である。

(7) ディオペイテスというのは、当時のいかさま予言者で、おそらく畸型の手の持主であったのであろう。

七五(1) 今日の紅海よりもはるかに広義で、ペルシア湾、インド洋をも含めた意味。

(2) エクバタナは東方メディアの首都。

(3) pluthygieia は plutos「富」と hygieia「健康」との合成語。もちろんアリストパネスの新造語であろう。

(4) クレオンの取巻きの一人であろう。

七六(1) 匙状の型をしたパンで、スープをこれですくって食べた。

(2) 「プロマコスのアテナ」をもじっていったもので、例によってピュロスに語呂を合せている。

七七(1)(2) Phobesistrate, Obrimopatra はともにアテナの添え言葉。後者はホメロス以来の枕言葉であるが、前者は新造語であろう。

(3) elater は平たい煎餅様の菓子。elaunein「船や車を進める」にかけている。

(4) 葡萄酒は水を割って飲むのが作法であったが、その割合は必ずしも一定せず、ここにあるように水三―酒二のほか、水三―酒一もあり、要するにときに応じ、また各人の酒量に応じて適当に按配された。

(5) Tritogenes, Tritogeneia はアテナの異称。その本義についても疑問があるが、ここでは tri- という部分で「三」にかけたのである。

(6 これはなにか有名な（悲劇）作品のもじりらしいが、詳細は不明。

七八(1) ドーリス方言が入っているので、誰かドーリス系詩人の作品からの、引用乃至もじりかと推察される。

(2) 出典不明ながら、悲劇調。

(3) 古註によれば、エウリピデス『テレポス』より。

(4) エウリピデス『ベレロポン』からの借用であると。

(5) 「……やがてまた……」以下の句は、明らかにエウリピデスの『アルケスティス』の句のパロディーである。同作品の一八一―二の二行で、死にゆくアルケスティスが、夫婦の臥床に別れを告げる言葉。原句では、「たれか別の女が、そなたを自分のものとするでしょう、心ばえ（貞淑）ではわたしに及ばぬとしても、きっとわたしより仕合せなひとが」とある。

七九(1) クレオンの徒党で、クレオンの反対者を訴えては、クレオンに尽していたものらしい。

(2) Kekhenaioi「口をぽかんとあけた連中」と Athenaioi「アテナイ国民」と語呂を合せた。

(3) この歌節の冒頭の部分は、古註によれば、ピンダロスの詩のもじりであると。この歌の意味は、騎士たちとしては、やくざのとるに足らぬ人間を嘲弄するのは本意ではなく、もっと大物の悪人を糺弾するのだ、というほどのことらしい。

(4)(5) この二人とも、当時の代表的な浮浪者。後者はことに、身体の異常に痩せていることで有名だったらしい。

(6) ピュトーはデルポイの異称。「ピュトーの宮の君」は、従ってアポロンのこと。

(7) 当時著名な竪琴の名手であった。

(8)(9) コロポン生れのポリュムネストスという音楽家は、おそらくここに挙げられた人物とは別で、ここの二人はどちらも当時の三文音楽家であったのであろう。

(10) 古註が指摘しているように、この辺の発想法はエウリピデス『ヒッポリュトス』三七七行以下に相似している。措辞は大分違っている。

(11) クレオニュモスのことは九五八行にもでている（七一ページ註(4)参照）。

八〇(1) ヒュペルボロスのことは、七三九行にもでている（六七ページ註(1)

参照)。クレオンに勝るとも劣らぬ、悪質なデマゴーグとして知られ、従って喜劇作家たちの攻撃の的であった。

(2) 船には女の名がつけられるのが習慣であった。ナウソンもナウパンテも、naus「船」から造られた言葉。とくに父親の名を挙げたのは、一種の切口上の趣を出すためである。

(3) 怨霊廟と訳したのは、アイスキュロスの『慈みの女神たち』で知られる、本来復讐の女神の鎮座する社。

(4) これは明らかに、魔女メデイアが夫イアソンの父アエソンを、若返らせた伝説にもとづいている。

(5) 八〇ページ註(8)を見よ。

(6)(7) ともに第一次ペルシア戦役、ことにマラトンの戦闘におけるヒーローである。

(8) この句は、ピンダロスの名高いアテナイ讃歌にもとづいていることは確実である。ピンダロスの句は、「おお、艶やかに匂い耀い、菫を挿し、歌に名高きヘラスの守り、名にし負うアテナイよ」とある。一三二三行も、恐らく同じ句を踏まえたものであろう。

(9) 古代アテナイの富裕な市民は、髪を巻いて、蟬の形をした金のブローチで髪を留めていたという。蟬は、アテナイ人が他国からの移民でなく、土地から生じたきっすいの種族である、という国民的誇りを象徴するものであった。もちろんアリストパネスの時代には、それらの風習はすたれていたわけである。

八一(1) 水兵たちの給料は、就役中は一日一ドラクマであったという。しかし毎日全額が払われるのでなく、半額の三オボロスだけずつ払い、残りは航海終了後にまとめて払う仕組になっていたらしい。しかしその残額の支払いもとかく遅れ勝ちで、国民の不満を買っていたのであろう。

(2) クレオニュモスのことは再三出たが、彼は大食漢であるとともに臆病者で、この『騎士』の上演後間もなく起ったデリオンの戦闘で、楯を捨てて逃げ出したというので、『雲』(三五三行)のなかで痛烈に罵倒されている。

(3)(4) ともに当時札つきの不良少年。

(5) パイアクスは、当時かなり有力な政治家の一人であったらしい。なにか訴訟事件にひっかかって、弁説巧みに逃れたことがあったのかも知れない。

(6) 「……的」というのは、-ikos という語尾を無暗に使いたがる当時の風潮を皮肉ったもの。ソフィスト的教育を生かじりした青年たちが、しきりにいやみな言葉使いをするのが保守的な人々には不快で耐えられなかったのである。

(7) 前述の蟬型の髪留めなどとともに、昔ふうな慣習の一つに、折畳み椅子をボーイにもたせて歩くことがあった。そのボーイも去勢されていない、と断っているのは、東方諸国では、そういう場合に去勢した少年を使う習慣だったからと古註は記している。「椅子代りにしろ」というのは、むろん猥褻な意味であろう。

(8) Spondai「媾和」という語は、女性複数形であるから、この場合も多数の人物が出てくると考える人もあるが、文法的には複数形でも、概念としては単数であるから、娘(といっても、むしろ商売女の姿なのであろうが)一人と考えてよかろうと思う。

雲

登場人物

ストレプシアデス　田舎出の市民。
ペイディピデス　ストレプシアデスの息子。
召使　クサンティアス。
弟子たち
ソクラテス
コロス　雲の精たちより成る。
正論と邪論
パシアス　債権者。
アミュニアス　債権者。
証人
カイレポン
ヘルメス

ストレプシアデス　やれ、やれ、なむゼウス明王さま、この夜ってやつは、いつまで続くんですかい。きりがありはしない。いつまでたっても夜が明けんのかいな。たしかだいぶ前に、にわとりの鳴くのをわしは聞いたのになあ。それでも奉公人どもは高いびきだ。以前だったなら、こんなことはなかったになあ。全くはや、いまいましいのが、戦争ってやつさ、千も万もいまいましいね。奉公人を叱ることさえできないときてはね。（七）

　いや、それに家のこの有難い若様にしてからが、夜、目をさますところか、五枚の毛布にくるまって、屁をひってござるて。しかしそうするのがきまりとあれば、引っかぶって、いびきをかかずばなるまい。

〔しばらくして、やはり眠られず〕

いや、どうも情けないこっちゃ、さっぱり眠られん。わしはこの息子のおかげで、飼馬槽やら何やら無駄遣いと借金に攻め立てられるのでなあ。それをこ奴めは、髪を長くして、馬は乗りまわすやら、二頭立は飛ばすやら、夢にまで馬のことを見ているという始末。ところがこのおのれは、もう気が気ではないのだ、お月さまが二十を過ぎるのを見ているとな。利子が上って来るからさ。

〔召使に〕おい、明りをつけてくれ。それから帳面を持って来てくれ。ひとつ手に取って、誰と誰に借りになっているか、読んで確かめることにしよう。それに利子の計算もある。〔召使、明りをつけ、帳面を渡す〕　（一〇）

　さてと、借金は？　パシアスに十二ムナか。はて、パシアスの十二ムナは、何の代だ。何に使ったのかな。そうだ、コッパ印の（コリントス）馬を買った時だ。しまったわい。こんなことになるくらいなら、わしの目玉を石でコッパ微塵にしてもらった方がよかった。

ペイディピデス　〔寝言で〕反則だぞ、ピロン、自分のコースを走れよ。

ストレプシアデス　これだ、これがわしを破滅させてしまう禍なのだ。

眠っていても、まだ夢で馬術をやっている。

ペイディピデス　〔また寝言で〕戦車はコースを何回走らせるんだい。（二七）

ストレプシアデス　何回も何回も走らせているよ、おやじのおれをお前はな。しかしそれはそうと、パシアスの次は、何の借金がご入来になるのかな。ええと、アミュニアスに車体に車輪の代金が三ムナか。

ペイディピデス　〔なおも寝言で〕馬を家へ引いて行ってくれ、砂場でころがり廻らせてから。

ストレプシアデス　いや、ころがり廻るなら、お前のおかげで、ほれ、わしの方がころがり出して、財産をなくしてしまっているわい。方々の訴訟には敗けるし、利子を払わなけりゃあ差押えをすると言っている奴まであるんだからな。

ペイディピデス　〔目をさまして〕ほんとうに、お父さん、何だっているんです、こらえ性もなく、一晩中、のつのつしているなんて。（三六）

ストレプシアデス　わしは執達吏虫に食われるんでなあ、ふとんの中から出て来るんだ。

ペイディピデス　お願いだから、すこし眠らせておいてくださいよ。

ストレプシアデス　ふん、それなら、勝手に眠っているがいいさ。だが、覚えておけよ、この借金はみんなお前の頭に落ちて来ることになるんだぞ。（四〇）

　ああ、あ、あの仲人婆め、ろくな死にざまをさせてなるものか、このおれをお前のお袋と結婚するように仕向けやがって。おれには田舎の至極愉快な暮しがあったのだからな。ろくに掃除もしない、いい加減なやり方で、蛆も涌こうというものだが、蜜蜂、羊、乾オリーヴはうなるほどあったからなあ。それだのに、おれが結婚したのは、親子ともメガクレスを名のる家柄のお仁が姪で、田舎者が町者と縁組みしたわけだ。乙にすました贅沢屋のコイシュラ姫という筋さ。あれと結婚した頃は、いっしょに寝るのに、わしの方は酒の糟だの、無花果を乾す台だの、羊毛だのの、ありあまるもののにおいがしているのに、女の方はといえば、香料にサフラン、舌をつかうキッス、無駄遣いに甘いもの食い、女であることのしるしも受けこたえもあるというわけさ。だが、あれが仕事をしなかったと言うつもりはない。張りもの仕事に精を出していたからな。それでわしもこの（すり切れたぼろの）上着をあれに見せてな、うまく言ってやったものさ、（五五）

「お前、あんまり張りすぎるぜ」ってね。

召使　旦那、明りの油が切れましたぜ。

ストレプシアデス　けしからん、お前がむやみに油を吸う明りをつけたからだ。なぜそんなことをした。ここへ来い、泣かしてやるから。

召使　いったい何で泣かにゃあならんのですかい。

ストレプシアデス　太い灯心つっこんだからよ。（五九）

〔また独語をつづける〕その後、二人の間にこの息子が生れた、おれとあの結構な奥さまとの間にな。そうしたら今度は、名前のことで悶着ひとしきりということになった。あれは名前に「馬」（ヒッポス）の字を入れようとしたのだ。金馬之助（クサンチッポス）とか、祝馬之丞（カリッポス）とか、美馬之介（カリピデス）とかいうやつだ。しかしおれは、じい（祖父）さんの名前をもらって、倹助（ペイドニデス）にしようというわけだ。そんなことで、しばらくはもめていたが、それからだんだん時がたって、両方が歩み寄り、倹馬之助（ペイディピデス）という名前にしたのだ。（六七）

　あれはこの息子を抱いて、あやしながら、「坊やは今に大きくなったら、お役所（アクロポリス）へお車に乗って行くのね、メガクレスおじさまのように、立派なおべべを着て。ね、そうなったら、どんなにいいでしょう」と言い聞かせていたが、しかしおれは言ってやったよ、（七〇）

「いや、そうじゃないよ、お前はお父さんのように、皮のジャンパーを着て、岩山から山羊をつれて来るようになればいいんだ」ってね。

しかしおれの言うことには、ちっとも耳をかそうとしないで、馬きちがいのために、わしの身代をすりへらす始末になったのだ。（七四）

　それで今、こうやって一晩中思案しながら、みちを求めていたのだ

が、一つ見つかったぞ、とてもすばらしい早道が。もしこのみちを行くように、息子を説きふせることができれば、おれは救われるだろう。とにかく、これをまず起したいものだ。いったいどういうふうに起したら、ご機嫌いともうるわしということになるのだろうか。さて、どうするか。ペイディピデス、ペイディちゃんよ。

ペイディピデス　何です、お父さん。

ストレプシアデス　キッスをしておくれ。それから右手をかしておくれ。

ペイディピデス　〔言われる通りにして〕はい、これでいいでしょう。で、御用は？

ストレプシアデス　どうか、言ってくれ、お前はわしを愛しているかね。

ペイディピデス　ええ、愛してますとも、これなる馬の神さま、ポセイドンさまに誓いますよ。

ストレプシアデス　めっそうもない、あんな馬の神さまなんて真平だよ、あの神さまのお蔭で、わしはこんなひどい目にあっているのだからね。まあしかし、それはとにかくとして、もしお前が本当に、心の底からわしを愛していてくれるのなら、どうかお前、わしの言うことをきいておくれ。

ペイディピデス　しかしいったい、何をきけっていうんですか。

ストレプシアデス　大至急お前の行状を改めるのだ。そしてわしがお前に覚えてほしいと思うものを、まあ何でもいいから、覚えて来てほしいのだ。

〔この間、両人は寝室を離れて、家の外へ出て来る。右手にソクラテスの家が見える〕

ペイディピデス　いったい何をしろって言うんです？

ストレプシアデス　大丈夫きいてくれるだろうな。

ペイディピデス　ええ、ききますよ、ディオニュソスさまに誓って。

ストレプシアデス　それなら、ここへ来て、ほら見てごらん。〔ソクラテスの家を指す〕見えるだろう、あの戸口が、あの小屋が。

ペイディピデス　ええ、見えますがね、それでいったい全体あれが何だというんですか、お父さん。

ストレプシアデス　あれが賢い御霊（みたま）の思案（思索）所なのさ。あそこには天地を火消壺であると唱え、われわれ人間はこれに周囲を取りかこまれている炭なのだということを、うまく説いて聞かせてくれる人たちが住んでいるのだ。その人たちは、正邪にかかわらず、議論に勝てる法を、金さえ出せば、教えてくれるのだ。

ペイディピデス　それはしかし何者ですか。

ストレプシアデス　くわしい名前は知らないが、思索思案に苦心している、りっぱな人たちだ。

ペイディピデス　ちえー、あんな下らない連中がですか？　わかりましたよ、お父さんの言うのは、あのほら吹きの、蒼白い顔をして、履物（はきもの）もはかないでいる連中のことでしょう、悪いダイモンに憑（つ）かれているソクラテスだの、カイレポンだのの一味の。

ストレプシアデス　これ、これ、黙んなさい。愚なことを言ってはならん。それよりは、少しでもお父さんの暮しむきのことを考えるなら、馬術のことはいい加減にして、どうか、あの人たちの仲間へ入ってくれ。

ペイディピデス　そんなことは、ディオニュソスさまに誓って、とても出来はしません。レオゴラスさんの飼っている孔雀[1]をやると言われたって駄目です。

ストレプシアデス　頼む、この通りだ〔と歎願の形をする〕、世界中でいちばん可愛いお前、どうかあそこで習って来ておくれ。

ペイディピデス　それで何を習えっていうんですか。

ストレプシアデス　あの人たちのところにはなあ、二種類の論があるという話だ。内容はとにかくとして、強い論と弱い論だ。そしてこの両論のうち、弱い論の方が、不正を主張する立場なのだけれども、議論の上では勝つという話だ。だから、お前がこの不正の論を習って来てくれれば、今わしがお前のお蔭で背負わされている借金は、返さないでいいことになるだろう、一文も、誰にもだ。

ペイディピデス　いやです。だって、すっかり色のさめた顔をして、仲間の騎士たちに会うなんて、とても我慢できないことです。（一三〇）

ストレプシアデス　それなら、母なる大地の神に誓って、うちの飯は食わさないからな、お前にしろ、お前の馬車馬にしろ、またシグマ印の馬にしろだ。家から追い出してやるから、烏に食われてしまえ。

ペイディピデス　でも、メガクレスおじさんは、ぼくが馬なしにいるのを放っておきはしないでしょう。じゃあ、ぼくは入りますから。お父さんのことはもう知らない。（一三五）

〔ペイディピデス家の戸ロへ入り、退場〕

ストレプシアデス　すっかり背負い投げをくってしまったわい。だが、このままのびてしまうようなおれさまではないぞ。まあいい、神さまがたのお慈悲にすがり、わし自身が思案所へ出掛けて行って、教育を受けるとしよう。そうすると、どうだろうな、のろまのこのおれが、年をとって、もの忘れもひどいというのに、精密論理の細かい点が覚えられるだろうか。まあ、行ってみるほかはない。〔もう一つの家の戸ロのところへ行く〕（一三）

これはどうしたことだ、こんなにのろくさしているというのは？　戸もたたけないのか。〔思い切って戸をたたく〕もし、もし誰か、これ誰かさん。

弟子　〔家の内で〕烏に食われろ。誰だ戸をたたく奴は。

ストレプシアデス　ペイドンの子、ストレプシアデス、キキュンナの者です。

弟子　〔戸を開けて出て来る〕本当に無学な奴はこれだから困る。そんなにひどく、思想性を無視して、お前が戸を蹴とばすもんだから、お蔭でせっかく発見した思案を流産させられてしまったではないか。

ストレプシアデス　これはごめんなさいよ。なにしろ遠い田舎から出て来たもんだからね。それはそうと、いまのその流産させられたってものを、ひとつ聞かせておくんなさいよ。

弟子　それはならん。同門の弟子以外には話せないのだ。

ストレプシアデス　それなら安心して、わしに聞かせなさい。このわしはな、この思案所へ弟子入りにやって来たのだから。（一四〇）

弟子　よろしい、聞かして上げよう。しかしよく心得ていてもらわにゃあならんのだ、これは学内の秘事だからね。

今さっきカイレポンに、ソクラテスが問いを掛けられたのだ、蚤(のみ)は自分の足の何倍を飛ぶのかということをな。というのはカイレポンのもじゃもじゃした眉を噛(か)った蚤が、ソクラテスのはげ頭に飛びうつったからだ。

ストレプシアデス　へえー、それをいったいどういうふうに計ったのですかい。

弟子　至極巧妙なやり方なのだ。まず蠟を溶かす。それから蚤をつかまえて来て、その両足を蠟の中へひたすのだ。またそれからこれを冷すのだ。そうすれば、蚤の足のまわりにペルシア風の靴が発生するという寸法だ。それを脱がせて、所定の距離を計っていたところなのだ。

ストレプシアデス　おお、ゼウス大王さま、何という頭の鋭さでしょう。

弟子　それならソクラテスのもう一つの思案を、あんたに聞かせたら、いったい何と言うだろうね。

ストレプシアデス　それはどんなです。お願いだ、すっかり話してくださいよ。

弟子　今度はカイレポンが、いかにもスペトス者(もん)らしいがさつさで、ソクラテスに質問したわけだ。ぶよは口で鳴くのか、尻で鳴くのか、先生の意見はどっちだというのでね。

ストレプシアデス　すると、先生はぶよについて、いったい何と答えたんですかい。（一五九）

弟子　先生の言われるには、ぶよの腹の中は狭い。だから、この細いところを通るのに、息は無理押しして、しゃにむに尻へと直行することになる。ところが、この狭い通り路にとりつけられている肛門は、空洞になっているから、その空気の圧力で音響を発することになるとい

うのだ。

ストレプシアデス　なーるほどね、ぶよの肛門がラッパというわけか。全く何層倍も並の人間とは違っているんだね、腹の中のことまでよく見ているとはねえ。きっとこれなら、裁判で訴えられても、わけなく勝てるだろう、ぶよの腹の中まで見通しという人なんだから。

弟子　でも、つい最近は、せっかくの一大思想を、青とかげのために、取り逃がしてしまうようなこともあったのだ。

ストレプシアデス　どんなふうにしてですかい。どうぞ、くわしい話をしておくんなさい。

弟子　月の軌道と回転のさまを調べておられたのだ。ところが、上を向いて口をあけておられたので、屋根の上から、夜陰に乗じて、青とかげが小便をしかけたというわけだ。

ストレプシアデス　これは愉快だ、とかげがソクラテスに小便とは。

弟子　また昨日は、晩になっても、われわれの食べるものがないという始末だった。

ストレプシアデス　よし来た、それで、何の工夫をして夕飯にありついたというんですかい。

弟子　まずテーブルの上に細かい砂を撒く、それから焼串をとって、これを曲げる。さて、それから、これをコンパス代りにして、（幾何の円形を描くのかと見ていると）相撲場に脱ぎすてられた衣類をこっそり失敬したという次第なのさ。

ストレプシアデス　それなら、いったい何で昔のタレスなんて人に感心していることがありますかい。さあ、さあ、大急ぎで、開けたり、開けたり、この思案所の内を。そして大至急、わしにソクラテスをおがませておくんなさい。わしは弟子入りしたいんだから。まあ、とにかくこの戸を開けておくんなさい。

〔この時、前景の被いが取り除かれ、思案所内部の全景が示される〕

ひゃあー、これは驚いた、何ですこの動物は？

弟子　何に驚いたのかね。ああ、あれは何に似ていると思うね。

ストレプシアデス　ピュロスからつれて来られたスパルタ人捕虜というところだね。しかしあの人たちは、いったい何のために地面を眺めているんですかい。

弟子　あれは地下のことを探求しているのだ。

ストレプシアデス　ははあ、茸を探しているんだね。それなら、思案することはないぜ、お前さんがたは。わしが知っているからな、どこに大きな見事な奴があるかってことを。〔また他の一群を見つけて驚く〕この連中はまたいったい何をしているんですかい、えらくかがみこんでいるけれど。

弟子　地の底（タルタロス）深く闇の世界をさぐっているのだ。

ストレプシアデス　それなら、尻が天を眺めているのは、いったいどうしたんですかい。

弟子　それは尻が天文学を独学自修しているわけだ。さあ、とにかく先へ行くんだ。うっかり先生に見つかっては困るからなあ。

ストレプシアデス　いや、まだいけませんや、まだ。あの人たちを待たせておいてください。わしの心配事をあの人たちに聞いてもらいたいのだ。

弟子　いや、あの人たちは、外へ出て来て、あまり永いこと空気にさらされていることはできないのだ。

〔それらの人たちの姿は消えて行く〕

ストレプシアデス　おお神さま、いったいこりゃあ何です。教えてください。〔二つの立像を指す〕

弟子　これは天文学。

ストレプシアデス　あれはいったい何です。

弟子　幾何学（測地学）さ。

ストレプシアデス　それで、何の役に立つんですかい。

弟子　地面を間違いなく測るのにさ。

ストレプシアデス　それは配給の土地のことですかい。

弟子　ちがう。地面全体だ。

ストレプシアデス　うへえ！　うへえ！　気のきいた話ですね、そういう工夫なら、大衆の気にも入るし、役にも立つでしょうからね。

弟子　〔地図を示しながら〕そしてこれが、地面全体の見取図だ。わかるかね。これがアテナイ。

ストレプシアデス　ええ？　何の話ですかい。わしは納得できませんわい。陪審員の坐っているのが見えないからね。

弟子　いや、本当にここのところがアッチカなんだよ。

ストレプシアデス　そうすると、キキュンナのわしが区の連中は、どこにいるんですかい。

弟子　こん中に入っているんだよ。またそれからエウボイア島は、ほら見えるだろう、ここにこう大陸沿いに、長くずーっとのびているのが。

ストレプシアデス　それはそのはずさ、ペリクレスのお蔭で、わしらにのされてしまったのだからね。それはそうと、スパルタはどこですかい。

弟子　ええと、どこだっけな。ああこれだ。

ストレプシアデス　ばかに近いね、わしらのところからさ。ひとつうんと思案してもらって、スパルタはわしらのところから、うんと遠くの方へ引き離してもらいたいね。

弟子　いや、それはとても出来ない。

ストレプシアデス　見てなさい、泣くことになるから。

〔ここで高みに浮んでいるソクラテスに気づく〕

あれ、まあ、誰だね、こりゃあいったい、あの釣りかごの上にいる人は。

弟子　あっ、あの方だ。

ストレプシアデス　あの方って、誰ですかい。

弟子　〔低声（こごえ）で〕ソクラテス。

ストレプシアデス　ええ！　ソクラテスだって！　さあ、お前さん、あの人を呼んでくだされ、大声で。

弟子　いや、それより、あんたが自分で呼んだ方がいいよ。ぼくは用事があるから。〔弟子は早々に退場する〕

ストレプシアデス　ソクラテス、いやさ、ソクラテスはん。

ソクラテス　これ、何でわしを呼ぶ、露の命の分際で。

ストレプシアデス　まず第一に、お前さま何をしてござらっしゃるのか、お願いだ、わしに教えてくだされ。

ソクラテス　これなん、空気（アエール）をふみ、思いを太陽のまわりに馳せているところだ。

ストレプシアデス　するってえと、釣りかごの上から、神さまを尻目に、思案をねってござるというわけですかい。何しても、地上からでは、そうはいかないというんで。

ソクラテス　さよう、天空のことというものは、思想を宙に釣るし、思索を思索そのものと同類の、空気によくまぜるのでなければ、科学的に正しい仕方で発見することは出来なかろうというわけなのだ。これをもし地上におって、下から上を眺めていたのでは、わしの発見は決して出来なかっただろう。何はともあれ、地というものは、思索の汁を自分の方へ無理無体に引きよせるものだからなあ。それはみずたがらしの種が水分を吸収する場合と同じことだ。

ストレプシアデス　何と言わっしゃる？　思案が汁を吸うんだって、みずたがらしの中へ？　さあそれなら、このわしのところまで降りて来ておくんなさい。わしはお前さまに教えてもらわにゃあならんことがあって、そのためにここへやって来た者（もん）だ。

〔ソクラテス釣りかごから降りて来る。思案所の内部は再度また幕にかくされ、二人だけ前面に立つ〕

ソクラテス　で、お前がやって来たのは、何のためだ。

ストレプシアデス　弁論の仕方を習いたいと思ってですわい。何しろ利払いだの、借金取りだのと、因業（いんごう）に取り立てられ、荒し廻られていて、家財も差押えを食っている始末だからね。

ソクラテス　なんで借金がそんなに積るのを、知らずに放っておいたのだ。

ストレプシアデス　いや、馬ぐるいの病気で、身代を磨り潰されたんでさあ、ひどく金を食うもんでしてねえ。まあ、それより、わしに一つ伝授しておくんなされ。お前さまの持ってござる二つの論のうち、借金をまるまる返さないですむ方の奴をさ。お礼のところは何とでも請求通りに支払いますからね、神さまに誓いを立ててもいい。

ソクラテス　神さまに誓うんだって？　どんな神さまのことかね。最初に断わっておくが、われわれのところでは、神さまなんてものは通用しないのだ。

ストレプシアデス　へえ？　じゃあ、誓いの時に通用するのは何ですかい。あるいはビュザンティオン[1]と同じように、鉄の銭ですかい。

ソクラテス　お前は確実なところを知りたいと思うかね。神事というものは、科学上正しくは、どういうものであるかということを。

ストレプシアデス　ぜひともね、なろうことなら。

ソクラテス　そしてわれわれのあがめまつる雲ひめさまと、言論の交わりをすることも。

ストレプシアデス　はい、はい、どうぞそういうことにお願いします。

ソクラテス　それなら、さあ、この聖なる床の上に坐りたまえ。［これから入門入信の儀式が行なわれる］

ストレプシアデス　はい、坐りましたよ。

ソクラテス　それから今度は、この頭飾りをつける。

ストレプシアデス　何のために頭飾りを？　いやですよ、ソクラテス、あのアタマス[2]の話みたいに、わしが生贄(いけにえ)にされたりしては。

ソクラテス　そんなことはしない。これはみんなわれわれのところで、入門者に対して行なう仕来りなのだ。

ストレプシアデス　そうすると、いったい、何のご利益があるんですかい。

ソクラテス　弁論に関しては、お前は、

［と言いながら、軽石を取り上げて、こすり合わせ］

このように練磨されるだろう。

［ついで、その軽石を打ち合わせる］

はっしはっしと音いさましく、

［つづいて、その破片屑を拾い集めて］

その出来上りは、さらさらの上粉となる。

［と言いながら、これをストレプシアデスの頭の上に振りかけるので、ストレプシアデスは、もがき動く］

これ、じっとしているのだ。

ストレプシアデス　いや、全くね、わしのことでは、お前さまの言うことは、嘘にはなるまい。こう振りかけられては、粉だらけになるだろう。

［ソクラテスは改まった態度で祈りをささげる］

ソクラテス　そこな老人は、しずかに口をつつしみ、わが祈りを心してうけたまわれ。

ああ主なる、わが君、大地を宙にささえたもう、無量のアエール（空気）よ、ひかりかがやくアイテール（エーテル）よ、稲光と雷鳴をもたらす、おそろしの女神、雲ひめたちよ、いざ立たせたまえ、これなる思案所の空高く、おん姿をあらわしたまえ。

ストレプシアデス　いや、まだいけない、まだいけない、これをひっかぶるまではね、びしょ濡れになってはたまらん。それにしても、犬皮の頭巾(ずきん)[3]ももたずに家を出て来るとは、おれも間抜けだ。

ソクラテス　さらばいざ、来ませや、あやに尊き雲の精、

この者のため、姿あらわし。

きみはいまオリュムポスの、雪に打たれし聖なる峰に鎮まりたもうか、

あるはまた、父オケアノスの園に、ニンフらのため、聖なる歌舞を主催したもうか。

はたまた、ナイルの河口に、黄金の水さしもて水くみたもうか、

はてはまた、マイオティスの入江、ミマス(1)の雪をいただく見はらし
など に足とどめたもうか、
いずれにせよ、われらが捧物を受け、これなる祭式を嘉納したまい
て感応をこそたれたまえ。
〔これから雲のコロスの入場となるが、はじめは歌声だけで、姿は見えない。またこの間に、夜は次第にあけて、明るくなる〕

コロスの声　われらは雲、不断に流れ行くもの
さあ立ち上ろうよ、露に光る姿あらわに、
底鳴りする父オケアノス（大洋）の許を離れて
高くそびえる山々の、樹々に蔽われた頂上へ、
ああ、かしこからは、さあ見ようよ、
遠くにそれと見える山々、
水をふくんで、みのりはぐくむ聖なる大地
神やどる河の淙々(そうそう)のひびき、
滔々(とうとう)と浪をとどろかす海など。
いまや青雲(アイテール)の疲れ知らぬ眠りは、
燦とした光のうちに
照りかがやいているのだから。
何はともあれ雨雲は、われらが不滅の
形相から振りすてて
地上をしかと見ようよ、
遠く見る目をもって。

ソクラテス　ああ、あやかにかしこし雲の精、わが願いのほどを、聞きとどけてくださいましたことは明々白々。〔ストレプシアデスに〕お前も聞いたか、あの声といっしょに、雷鳴のとどろいたのを。あれこそ神ひとともにおそれるところのものなのだ。

ストレプシアデス　いや、おそろしいの何のって、おお、あやに尊し、わしも雷鳴に合わせて一発やりたくなった。
〔放屁の形をする〕
全くはやおそろしくて、ふるえ上ってしまった。今はもうたまらん、礼儀作法はどうあれ、さあ、便所へ行かせてくだされ。

ソクラテス　ばか、悪ふざけはよせ、そこらのへっぽこ役者の、なさけない真似なんぞするな。それよりは、さあ静かにしているのだ。われらの神々の一団は、いまや歌おうとするさかんな気勢を見せておられるのだからな。

コロスの声　われらは乙女、雨をもたらすもの
さあ行こうよ、パラス（アテナ）のうまし国へ
よき人多き土地、ケクロプスの
いともめでたき国を見ようよ。
かしこには、あやにかしこし、聖なる
秘儀のあまたあって、
入信者のための堂宇は、
尊い儀式に開かれるのだ。
また天つ神々にも、数々のささげもの、
高くそびえる御社(みやしろ)に、そのご尊像、
善男善女の聖なる行列も度々、
花のかんむり美しき、犠牲の式や
お祭りも、四季をわかたず、
とりわけ春来る時は、ブロミオス（ディオニュソス）のめぐみなる、
声うるわしき歌舞合唱(コロス)の技(わざ)くらべ、
笛の音も高らかに。

ストレプシアデス　ゼウスの神かけて、お願いだ、ソクラテス、教えてくだされ、これはどなたですかい。このおごそかな声を聞かせたのは。あの世からの精霊ですかい。

ソクラテス　いや、ちがう。これは天の方から下られた雲の精だ。働かないでぶらぶらしている連中から、大へんな信仰を受けている女神たちだ。気のきいた意見、たくみな討論、知性のひらめき、奇抜な言葉、遠廻しの言い方、たたきつけるような弁舌、要領のいい把握などをさずけて下さるものだからな。

ストレプシアデス　なるほど、それであの声を聞いた時、わしの心もすっかり戸惑いしてしまったのですわい。そして今度は、こまかい議論がしたくなり、煙のようなたわいもないことで、些細（ささい）のせんさくをしたり、ひとが何か意見を出せば、これをチクリとさすような別の意見を出して、反対のための別の説を立てたりしたくなってくるというわけですわい。だから、何とか出来るものなら、さあこれから、直接はっきりと姿を見たいものだ。

ソクラテス　ほら、ここへ来て、パルネス山（やま）の方を見てごらん。ほら、もう見えるぞ、しずしずと降下して来られるところだ。

ストレプシアデス　どれ、どこです、教えてください。

ソクラテス　来るわ、来るわ、これは大へんな数だ、あるいは窪みを横切り、あるいは繁みを渡って、斜めにかかっている。

ストレプシアデス　それが何だっていうんですかい。さっぱり見えはしないのに。

ソクラテス　ほれ、そこの入口のところを見たまえ。

〔ここでようやくコロスが入場し始める〕

ストレプシアデス　なるほど、やっと今、どうやら見えてきましたわい。

ソクラテス　まあとにかく、今となれば、よく見えるはずだ、お前がかぼちゃめくらでもなければ。

ストレプシアデス　たしかによく見える。大したものだ。もうすっかりそこら一面に入りこんでいるからなあ。

ソクラテス　ところで、どうだね、これをお前は神とは知らなかったし、また信じもしなかっただろうね？

ストレプシアデス　むろんのことでさあ。靄（もや）や露、または煙だと考えていましたわい。

ソクラテス　それはお前が、これこそ学者先生たちの大多数に飯を食わせてくださる神さまなのだということを、まるで知らないからなのだ。ほら、いるだろう、都市建設の占いごとを引き受ける先生たちや、いかさま医学の先生たちが。また髪の毛を長くして指輪をはめ、爪を磨き立てている連中や、あるいは円形合唱舞踏の歌曲をひねくりまわしたり、うそ八百の天文学をふりまわしたりしている先生たちなどを、何もしないで怠けていても、この雲のことさえ歌にしていれば、みな養って下さるというわけなのだ。

ストレプシアデス　ははあ、すると、あの文句もこの先生たちが作ったというわけですかい。「水ふくむ雲のすさまじい突進はそれをねじまげて」とか、「百の頭の台風（タイポン）が髪ふり乱して」とか、「吹き狂うあらし」とか、「空行き、水行く猛禽の、空気に泳ぎ」とか、「露けき雲の水の雨」とかいう奴をね。そしてさて、その代りには、鰈（かれい）の大きな切身やつぐみの肉を、[1]（上演担当の旦那衆のふるまいで）あわてて呑みこんだりするという寸法ですかい。

ソクラテス　いや、それも雲をあがめる当然の報酬というものではないかね。

ストレプシアデス　さあ、それではどうぞ言ってもらいましょうかい。これがもし本当に雲だとしたら、人間の女に似た姿をしているのは、いったいどういう事情（わけ）なんですかい。とにかく空の上の雲は、こんな姿はしていないからね。

ソクラテス　というと、いったいどんな姿をしているというのかね。

ストレプシアデス　確かなことは知りませんや。しかしとにかく、羊毛をひろげたような格好はしてますが、女になんかちっとも似てないことは、断言できますさあ。それだのに、ここにいなさるのは、みんな鼻をもってらあ。

ソクラテス　それなら、さあ、わしの質問にひとつ答えてもらおう。[2]

ストレプシアデス　何でも聞きたいと思うことを、早く言っておくんな

さい。

ソクラテス　これまでにお前は、空を眺めて、ケンタウロス（半人半馬）に似ている雲とか、あるいは豹、狼、牛などに似ている雲を見たことが、いつかありはしなかったかね。

ストレプシアデス　そりゃあ、たしかにありますさあ。そうするていと、それがどういうことになるんですかい。

ソクラテス　なろうと思えば、雲は何にでもなれるのだ。だから、髪を長くした、あの毛むくじゃらの野卑な男、例えばクセノパントスのところの息子みたいなのを見ると、その気違いじみた情欲をからかって、自分の姿をケンタウロスに似せたりするのだ。（三五〇）

ストレプシアデス　おや、まあ、それじゃあ公金をちょろまかしたシモンみたいな奴を見たら、どうするんですかい。

ソクラテス　あいつの本性を暴露する意味で、たちまち狼となる。

ストレプシアデス　してみると、あれはこのせいだったんだね。昨日は雲が鹿になったが、あれはクレオニュモスみたいな、楯をすてて逃げて来た男を見たからなんだね、ここに臆病この上なしの男を見たというわけで。

ソクラテス　そして今は、クレイステネスを見たもんだから、それでごらんの通り、女になったというわけだ。

〔そこでストレプシアデスはコロスに向って呼びかける〕

ストレプシアデス　そんなら、おお、わしらの御あるじの皆々さまよ、ようこそ、おいで下せいました。つきましては、ひとつお願いがごぜいます。このわしのためにも、もし出来ることなら、他の者同様、天にも響くその御声を、今お聞かせくださいませ。お願いしますさあ。万物の女王さまがた。

コロスの長　これはご機嫌よう、むかし生れのご老体、優雅の理法を追い求める者よ。

〔ついでソクラテスに向い〕また、なんじ繊細のおしゃべりに奉仕する祭司よ、何でも入用のものを、遠慮なくわたしたちに言うがよい。当今の空理空論をもてあそぶ学者先生たちでは、ほかにわたしたちが耳を傾けることのできるような者はいないからだ。ただプロディコスだけがその例外になるけれど、これは知恵もあり、識見もあるからね。それからお前だが、お前は昂然として往来を歩き、眼玉をそっぽに向け、靴もはかないで、もろもろの艱難に堪え、わたしたちの故に、むずかしい顔をしているからだ。（三六三）

ストレプシアデス　おお大地よ、この御声は、何という神々しさだ、おごそかで、霊験もあらたからしいぞ。

ソクラテス　それはそのはず、いいかね、この方々だけが神なのであって、これ以外のものはすべて空しい言葉に過ぎないのだからね。

ストレプシアデス　しかしわしらのゼウスは、さあ、大地にかけて、どうなのかね、オリュムポスにいなさるのは、神さまでないというのかね。

ソクラテス　ふふん、ゼウスがどんなものか、お目にかかりたいくらいだ。下らないことは言わんことだな。ゼウスなんてものはいないのだ。

ストレプシアデス　それはお前さん、何ということを言うのだ。ゼウスがいないとしたら、誰が雨を降らせるんですかい。まずは第一に、このことの説明から、わしは聞かしてもらわにゃあなりませんわい。

ソクラテス　そりゃあ無論、この雲の精が降らせるのだと思うね。しかし大きな証拠があるから、それを使ってわしはお前に、そのことを教えてやろう。いいかな、お前はいったいこれまでに、雲がなくて雨が降っているような場合を、どこかで見たことがあるかね。しかしゼウスが雨を降らせるのなら、晴天でも独力で雨を降らせることができたはずで、雲はなくてもよかったはずだ。（三七一）

ストレプシアデス　なるほど、これはアポロンの神かけて、その点はとにかく、いま議論でうまく辻褄を合わせたことになりますわい。しかし今までは、ゼウスが本当に篩越しの小便をするのだと思っていたんだがね。しかしそれなら、どうか教えておくんなさい、雷を鳴らして、わしをすっかり震え上らせるのは、ありゃあいったい誰ですかい。

ソクラテス　それはこの雲が、ころがり廻って、雷鳴となるのだ。
ストレプシアデス　どんなふうにですかい。いま、お前さまは、何でもはや言ってのける人だが。
ソクラテス　それは雲が、多量の水にみたされて、必然に運動するようになると、雨をいっぱいに含んで、垂れ下がることは必然で、それからその重くなった雲が、相互にぶつかり合って、破裂し、ひどい音を出すわけだ。
ストレプシアデス　でも、必然にそういう運動を雲にさせるのは、誰なんですかい。やっぱりゼウスじゃあないんですかい。
ソクラテス　とんでもない。それはむしろ青雲（アイテール）のディーノス（渦巻）[1]なのだ。
ストレプシアデス　ディーノス？　それは気がつかなかった。ゼウス（三八〇）(Dios)なんてものはいないので、その代りに今は、ディーノス(Dinos)が支配しているとはね。だが、待てよ、なぜ音を出すのかという、雷鳴の説明は、まだ何も聞いてませんぜ。
ソクラテス　聞かなかったって？　いま言っておいたじゃないか。雲が水をいっぱいに含んで、相互にぶつかり合うと、それの密度が厚くなっているので、ひどい音を出すのだということを。
ストレプシアデス　それでさあ、何を証拠にそんなことを信じにゃあならんのですかい。
ソクラテス　お前自身のことをもとにして、わしはお前に教えてやろう。すでにこれまで、パンアテナイアのお祭りなどに、スープをいっぱい取り過ぎて、そのために腹の具合を悪くしたことはなかったかね。そして変調のために、腹が突然ごろごろ鳴りだしたことはなかったかね。
ストレプシアデス　違いない、アポロンに誓って。それがまたすぐにひどくこたえるんでね。すっかり変になってしまうんでさあ。まるで雷みたいに、ちょっとしたスープがひどい音を立てて、どえらい騒ぎになる。はじめはおだやかに、パパックス、パパックスくらいだが、後ではパパパパックスと、追撃も急になる。それで便所へかけ込めば、まさに雷神はパパパックスと、雲の神さまそのままだ。
ソクラテス　ほれ、見な、こんな小さな腹からでも、お前はあんな音を（三九一）破裂させたのだ。ところが、この大気（アエール）というのは、際限もないものなんだから、雷鳴の大きいくらいは、何の不思議もないわけじゃあないか。
ストレプシアデス　なるほど、それで名前もお互いに似ているんだな、ブロンテー（放電）とポルデー（放屁）とでね。しかしそれなら今度は、稲妻の方はどこから出て来るんですかい。火の光を明々と照してますぜ。こいつをひとつ教えておくんなさい。あれに当ればわしらは灰になってしまうし、生命の助かった者でも、焼け焦げになりますわい。これはつまりゼウスが、いつわりの誓いをした者に投げつけるか（三九七）らでさあ、わかりきったことだ。
ソクラテス　してどうして——いや、お前は何という愚か者だ、（ゼウス以前の）クロノス時代のにおいがするぞ、原始時代の感覚だ——どうしていったい、もしうその誓いをする者がやられるのなら、シモンは焼き殺されなかったのだ。またクレオニュモスもテオロスも、どうしてやられなかったのだ。とにかく奴らのうその誓いときたら、ひどいものだったのに。それどころかむしろ、自分の社に雷を落し、「アテナイの先端」スウニオンや樫の大木をやっているのだ。それはどうした了見だね。樫がうその誓いを立てるわけにもいかないからね。
ストレプシアデス　それはわかりませんね。しかしとにかく、お前さまの言うことは、うまい理屈のようだ。よしそれなら、いったい稲妻は（四〇三）何ですかい。
ソクラテス　乾いた風が上昇して、雲の中へ入って閉じこめられる場合、それは内部から雲を、ちょうど膀胱のようにふくらます。そうすると必然に、それは雲を破って外へ出ることになるのだが、密度が厚いために、その勢いが激しくなる。そしてその運動の激烈さ猛烈さから、自分で自分を燃焼することになるのだ。
ストレプシアデス　それは本当だ。とにかくわしも、いつかディアシア[2]

の祭に、ちょうどそんな目にあったからね。あれは腸を家の者たちのために焼いていた時だが、うっかりして切れ目を開けないでおいたのだ。だもんで、これがふくれてきて、それから突然破裂したのだ。わしの両方の眼玉へじかにぶつかって来てさ、わしの顔は糞でよごされ、火傷をするという始末だった。（四二一）

コロスの長　おお、大いなる知恵をわれらより求めること切なる者、なんじ人間よ、なんじはアテナイ人のうちにありても、また全ギリシア人のうちにありても、いかばかりか幸福な者となろうぞ。

もしよく記憶力を保ち、思索思案を事とし、心に剛毅の性を養うならば。またとどまるにも行くにも懈怠なく、寒さをはなはだしく苦にせず、昼食をみだりに求めることなく、飲酒や体育場その他における情痴を遠ざけるならば。しかして然るべき人の当然認めるがごとく実行においても、謀議においても、はたまた弁舌の戦いにおいても、勝利を占めるということこそ、最上なりと認めるならば。（四二九）

ストレプシアデス　いや、心を堅固にして、夜も眠らずに思案することや、腹の虫を痛めつけて、まずしい野菜食で倹約を教えたりすることなら、心配はご無用、わしは勇躍して、わが身をそれらで鍛錬してもらうために、鉄床の上にのぼる覚悟ができておりますわい。

ソクラテス　それでは、もうわれわれの認めるもの以外に、いかなる神も認めることはないだろうな。われわれの認めるのは、かの「混沌」と、この「雲」と、それから「弁舌」の、この三体なのだ。

ストレプシアデス　それ以外のものは、たとえ面と行き会うことがあっても、言葉を交えることさえ絶対にしはしませんや。犠牲や神酒も香料も上げることはありますまいよ。

コロスの長　さあ、それなら、わたしたちに何をしてもらいたいのか、言ってごらん。遠慮はいらない。わたしたちを尊び、敬って、わたしたちの意にかなう人間になろうと努めている限り、お前の望みはかなえられるだろうからね。

ストレプシアデス　わしらの御あるじよ、あなた方にわしがお願いするのは、ごくわずかの、これだけのことでござります。どうかギリシア人のうちで飛び切り第一等の弁論家になれますように。（四三〇）

コロスの長　いや、そのことならわたしたちから、お前に授けてやりましょう。将来これからは、民衆の集りで、お前よりも多く動議を採決にもちこめる者は一人もいないことになるだろう。

ストレプシアデス　いや、いや、重大動議を出すなんてことは言わないでおくんなさい。そんなものはわしの望みじゃないんだから。わしのは自分ひとりのために、裁判を曲げて、債権者をすっぽかすだけのことなんだから。

コロスの長　それなら、そのお前の希うものを取らせよう。大した望みではないのだから。いずれにしても、わたしたちに仕えるこれらの者に、思い切って身をまかせることだ。

ストレプシアデス　そういたしましょう、あなた方を信頼して。どうしてもコッパ印の馬と、わが身をいためつけられた結婚のおかげで、こうなるは必定のところに追いつめられているのだから。

〔ストレプシアデス身ぶりおかしく、おどり歌う〕

さあ、さあ、この男
お好きなようになさいませ
これはわたしの身体だが
この人たちに任せたよ　（四四〇）
打つもよし、食物飲物絶つもよし
涸らびようが、凍えようが、ままよ
生き身で皮をはがれても
ただ借金を払わずに、言いのがれさえできたなら
そして世間の評判で
鉄面皮、口先上手、臆面なし、向う見ず、がさつ、うそ八百のこね
　まわし、言いわけ上手、裁判ごとのすれっからし、法律のお化け、
騒々しい奴、狐、錐、ひょうたんなまず、空とぼけ、ぬらりくら

り、大法螺吹き、極印つきの悪党、けしからぬ奴、当てにならないお天気屋、ひと泣かせ、ご馳走ねだり、などと、
これが会う人ごとに、このおれが
もし呼ばれたらと、願う名だ。
この願いさえかなうなら、あとは
この人たちの好き勝手
何とでもしておくれ
もしお望みとあるならば、
大地の母の神かけて、どうぞこの
おれを、腸詰めにでもしておくれ
思案所ずまいの先生がたに
食べてもらえば本望さ。

コロスの長　覚悟はよし、この男、迷いはあらじ
　いまは疑いなし、われよりなんじこれを学ぶ時
　ほまれは高く天までも、衆生のうちに保つべし。

ストレプシアデス　それはどういうことになりますんで。

コロスの長　およそ時間のある限り、わたしといっしょにお前は、世のひとに羨まれることの最も多い生を送ることになるだろう。

ストレプシアデス　本当にそれじゃあ、いつかわしの眼でそれが見られるんですかい。

コロスの長　その結果、お前の家の門口には、たくさんの人が、相談にのってもらいたい、話をしたいというので、坐りこんでいることになるだろう。お前のためには何タラントンのもうけになるような、事件や申立書のことを、お前にいっしょに考えてもらおうというのでな。
［ソクラテスに向って］まあとにかく、この老人に、あらかじめ教えておかねばならないことがあるなら、何でもやってみておくれ。そしてこれの精神を根底からゆり動かして、これの気魂を試してみるがよい。

ソクラテス　さあ、それではお前にわしはすっかりぶちまけてもらわにゃあならんのだ。お前の根性を丸出しにね。それがどんなものであるかってことがわかれば、今度はその上で道具立てを新たにして、お前に向うという寸法なのだ。

ストレプシアデス　何だって、道具立てだって、それはまたわたしを城攻めにするというつもりですかい、滅相な。

ソクラテス　いや違う。少しばかりお前に聞いてみたいというだけのことだ。どうだ、記憶能力はたしかかね。

ストレプシアデス　一概には言えませんわい、正直のところ。何か貸しがある時は、物覚えも万全というわけだが、借りの方は、情けないかな、物忘れが万全という次第でね。

ソクラテス　それでは、どうだ、生れつき話す方は得意かね。

ストレプシアデス　話す方は駄目だが、ひっぱがす方は得意ですわい。

ソクラテス　そんなことで、どうして学問ができるだろう。

ストレプシアデス　いや、心配ご無用、これで結構できまさあ。

ソクラテス　さあ。それなら、あの空の遠くにあることがらで、知恵の足しになるものを何か出してやるから、すぐにくわえて取る用意をするんだ。

ストレプシアデス　ええ？　何だって、その知恵ってやつは、犬みたいな流儀で食べるものなんですかい。

ソクラテス　［半ば独白調で］こいつの無学なことときたら、ギリシア人ばなれがしている。これじいさん、お前は気の毒ながら、鞭がいるかも知れんて。さあ、どうするか見せてくれ、もし誰かがお前をなぐるとしたらだ。

ストレプシアデス　なぐらせておきまさあ。そしてそれから少したったら、証人になる人を頼んでくる。それからまた少し間をおいて、訴訟にもちこむとしまさあ。

ソクラテス　よし、それなら、上衣を脱ぐんだ。

ストレプシアデス　ええ？　何か悪いことをしたんですかい。

ソクラテス　いや、裸になって入るのがしきたりになっているんだ。
ストレプシアデス　でも、わしは家宅捜索に入るんじゃあないんですぜ。[1]
ソクラテス　脱ぐんだ。ぐずぐず言うんじゃない。
ストレプシアデス〔上衣を脱ぎながら〕それじゃあ、さあ、言っておくんなさい。
ソクラテス　何をだ。
ストレプシアデス　一生懸命になって、熱心に学習するとしたら、わしはお弟子さんの中の誰くらいになりますかい。
ソクラテス　カイレポンにちっとも負けないような者になるだろう、生れつきから言えば。
ストレプシアデス　やれやれ、情けなや、半死半生の人間になるんですかい。
ソクラテス　馬鹿げたことを言っちゃあならん。それよりは、さあ、ちっとも早く大急ぎでわしの後についてくるんだ。
ストレプシアデス　どうか、その前に、わしの両手に蜜パンを持たしてくだされ。中へ降りて行くのは、トロポニオスの洞[2]へ入って行くのみたいで、蛇が出て来やしないかと、わしはこわいのだ。
ソクラテス　さあ、入るのだ。何でいつまでも戸口のところで、びくついているのだ。〔両人戸口から退場〕
コロス　さあ、行っておいで、機嫌よく、ね
その勇気があれば心配はない。
この人の上に、仕合せあれ、
老の旅路の夕まぐれ
若さをきそう仕事ぶり
おのが性根の色あげして
知恵にみがきをかけるという
この人の上に仕合せあれ。
〔コロスは両人を見送ってから、観客たちに正面をむける地位にうつり、コロスの長が口上をのべる〕
コロスの長　さてご見物のみなさま。あなた方には、ざっくばらん本当のことを、これなる育ての親デイオニュソスさまに誓って、すっかり打ち明けて申し上げましょう。わたくしは賞が得たいのでございます。それはあなた方こそ理想の見物衆、この作こそわたしの喜劇作品中の傑作と考えたからで、まず誰よりも先にあなた方に、わたしのこの一大苦心の作を味わっていただきたいと思った次第でございます。ところが（前回は）不当にも、わたしは下らない連中に賞を先取りされて、引き下がることになった[3]のでございます。だから、これは見巧者のあなた方としては、落度になると申したいところで、わたしはただ見巧者のあなた方のために、この作をものした次第なのでございます。しかし、あのようなことがあったにしても、わたしはあなた方のうち、まともに芝居を見てくださる方々を、われから裏切るようなことは決していたしますまい。と申しますのは、行儀のよい男と尻くせの悪い男を取扱いました拙作[4]が、この場所において、話しかけるもうれしい方々から、ご好評の一等賞をいただき、わたくし奴は、当時まだ生娘の身の上、作品をうむことはまだ許されておりませぬところから、捨児のようにいたしましたところ、よそのさるお娘子が拾い上げてくだされ、みなさま方のお情けにより、立派に養育も教育もしていただきました、あの時このかた、わたくし奴にはあなたさま方からご理解いただけるという、神かけて間違いのない保証の品をおあずかりしている次第でござりまする。さすればこのたび、かのエレクトラの芝居[5]をそのまま、この喜劇の一作、もしや然るべき見巧者のご見物衆にお会いいたしはせぬかと、たずねて参りましたる次第、エレクトラなら、一目みて、弟の捲毛とさとっていただけましょう。
また生れつき行儀のよいところは、とくとごらんいただきたく、この作はまず第一に、革でつくった妙なものを縫いつけて、ぶら下げるようなことはいたしておりません、例の真赤な太物で、子供衆を笑

わせようなどとはいたしておりません。また禿頭をからかったり、コルダクス(1)おどりに時間をかけたりもいたしません。また主役の老人に杖でその場に居合わす誰彼をなぐらせて、へたな洒落(しゃれ)をごまかしたりするようなこともいたしません。また松明(たいまつ)をもって突進して来たり、ただ「ああ、ああ」とわめいたりもいたしません。頼むところは作品そのもの、詩歌の力だけで、ここへ出て参りました。 (五四四)

　またわたくしも、これだけの作家でありながら、［禿を見せるしぐさ］長髪を見せびらかしたりすることはいたしませず、同じものの焼き直しを二度も三度も持ち出して、あなた方をあざむく算段もいたしません。いつも新しい様式を入れるのに知恵をしぼり、どれも似たものばかりというようなことがなく、みんなそれぞれに面白いものばかりでございます。またクレオン(2)の威勢が一番大きかった時に、どてっ腹に一発くらわせたのは、このわたしでしたが、あの男が倒れているところを、もう一度ふみつけたりするような真似はあえてしませんでした。ところが、あの連中ときたら、ヒュペルボロス(3)が一度攻撃を許したとなると、この人物を気の毒にもいつもふみつけにし、その母親まで槍玉にあげるという始末。エウポリス(4)君が無理算段の作品『マリカ』は、その先鞭をつけたものですが、わたしの『騎士』を下手にまげた下司(げす)作者相当の代物で、酔っ払いの婆さんにコルダクスおどりをさせるための蛇足を加えただけのものです。こういう婆さんは、もうプリュニコス(5)君の古い作品にも登場していますが、そこでは「おろち退治」どころか、逆に食われてしまう役なのです。さて、エウポリスの次には、今度はまたヘルミッポス(6)君が、ヒュペルボロスをやっつける作品を出すと、ほかの者までが今やよしと、みんなでヒュペルボロスをやっつける始末で、それの趣好がまたわたしの『鰻』(7)の比喩の真似に過ぎないのでございます。されば、こんな愚作で笑わされるような御仁には、はばかりながらわたくしの作品はよろこんでいただきたくはありません。ただわたくしとわたくしの作品の創意工夫をこころよく思ってくださるみなさま方だけが、来年の上演季節までは、その趣味のよさを評判されることでしょう。 (五六二)

［コロスの合唱にうつる。半数が歌い、半数がおどるという形であろうと想像される。

　ここの口上は、劇の内容や劇の進行には直接関係するところがなく、むしろ作者の立場が表明されるので、コロスも雲のコロスという役柄にとらわれないところがある］

コロス　高みくらしろしめす、神々の主宰(つかさ)
大いなるゼウスの君を
まずはわれらが歌舞(うたまい)の中へと呼びたてまつる、
多力男、三叉戟の主、
大地をも、しお海をも
手あらくもたげたもう君もいざ来(こ)らせたまえ。
また大いなる名をなす、われらが父、
あやにかしこしアイテール、
ものみなの命を養いたもう君も来りたまえや。
また駒はしらせて、大地原
光明あふるるばかり、隈(くま)なく照し、
神々と人間とのうちにありて
大いなるダイモンよ、君もまた。 (五七〇)

コロスの長　さて、賢明この上もないご見物の皆さま方、ここで特にご注意申しあげたいことがございます。それはあなた方のわれわれに対する仕打ちが、ひどいものだということを、ここで面と向って、はっきり申しあげたいのです。およそ神々のうちで、われわれほどお国のお役に立つものはないのに、われわれだけが神々のうちで、供物も神酒(みき)も供えてはもらえないのです。あなた方のことをいつも見守ってあげているのにです。というのは、外国へ軍隊を出すような場合、それが正気の沙汰ではないとすれば、雷を鳴らすとか、雨を降らすとかい

うことをわれわれはするのです。それから、あの神々にもにくまれているる革屋のパプラゴニア出身者（クレオン）を、あなた方が将軍に選挙しようとした時には、われわれは眉をひそめて、不気味のしるしを見せたわけです。それは「雷鳴が電光を貫いて裂け」、月もその軌道を離れんばかり、日輪は灯心をおのがふところにまっすぐ引っこめて、クレオン将軍になるようなら、あなた方にはもうお目にかけませんぞと言わんばかりでした。それでもなおあなた方はあの男を選挙したのです。それというのも、国のためを計ることの下手なのは、もうこの国のつきものなのだということになっているからです。しかしそれでも神さま方が、あなた方のどんな間違いでも、これを福の方へ転じてくださるのだという言い伝えがあるからなのです。そして今回の間違いも、どうしたらいい結果になるだろうかということは、わけのない話、お教えしましょう。あの欲ばり鳥のクレオン奴を、収賄と窃盗の罪で捕えて、それから首ねっこを木の枷(かせ)にはめこみさえすれば、また昔の通り、あなた方に何の間違いがあったとしても、万事はお国のために、めでたしめでたしの結果となりましょうぞ。

〔また前のような半数ずつの合唱とおどりにうつる〕

コロス　われに来ませや、いまひとたび、
ああポイボスの君よ、
デロスの島のアポロンよ。
高くそびゆるキュントスの岩山に君はましませど、
来ませよまた、エペソスのアルテミス、
君こそは幸多き君、
黄金なす宮居にましまして
リュディアの乙女たちより
大いなる尊崇を受けたもう。
またこの地にいます、われらが神の、
御楯あやつり、城をぞ守りたもうアテナの神も。
またパルナッソスの岩山にいます君、
松明の光にかがやきたまいて、
デルポイはディオニュソスを祭る女たちの、
そのうちにもひときわ目立ちたもう
狂乱の神ディオニュソスも。

コロスの長　わたしたちがこちらへ出かける支度をしてしまった時、月の神に出会って、伝言を頼まれました。まず第一に、アテナイ人諸君ならびに同盟国の諸君に対して、ご機嫌ようとのことです。次には、腸(はらわた)が煮えくりかえる思いだという言葉です。つまりひどい目にあわされたというわけです、あなた方すべてに利益(りやく)をさずけているのにというのです。それは言葉の上だけの利益ではなくって、誰の目にも明らかなことだったというのです、まず第一には、一月に一ドラクマは下らないだけの、松明代を助けてあげている。だからまた、誰でも夕方の外出には、「月の光がとてもきれいだから、松明を買うのはおよし」と言うことになるのです。そのほか、あなた方にしてあげた親切はいろいろあるとも言いました。それだのに、あなた方は日どりを一つも正しく守らず、後先(あとさき)をめちゃめちゃにしているというのです。(1)だから、神々はきめられた通りの日に、お祭式をしてもらえないで、ご馳走をすっぽかされて家へ戻り、そのたびに月のところへ文句を言いに押しかけて来るというのです。またそれから、犠牲を捧げなければならない時に、あなた方は法廷を開き、奴隷を拷問にかけているという始末。われわれ神々が（曙の神の子）メムノンや（ゼウスの子）サルペドンの戦死をいたんでいる時、われわれの断食をよそに、あなた方は酒をそそいで、笑い興じているということも一度や二度ではない。だから、これの仕返しに、今年ヒュペルボロスが当番で（デルポイのアンピクテュオン会へ）宗教使節に行くことになった時には、われわれ神々のために、冠を落されるようなことになったのです。こうすれば、生活の日づけは、お月さまを標準にしてゆかねばならないのだと

いうことを、少しはよくわかるだろうというわけなのです。（六二六）

〔ソクラテスが思案所の内から出て来る〕

ソクラテス　「呼吸」にちかって、「渾沌」にちかって、「黒雲」（アエール）にちかって、こんな男って、一人も見たことない。粗野で、ゆうずうがきかず、ぶきっちょで、忘れっぽいときている。幼稚園程度のことを覚えるのにも、覚えるより先に忘れてしまう男なんて。しかしまあ仕方がない。本人をこの明るい戸外へ呼び出すとしよう。これストレプシアデスは、どこじゃ。出て来るのだ、敷蒲団をもって。

〔ストレプシアデス、はじめは声だけで、のろのろと出て来る〕

ストレプシアデス　でも、南京虫のお許しが出ないので、なかなか持ち出せませんや。（六三四）

ソクラテス　早くして、そこへ置く。さあ、気をつけ。

ストレプシアデス　はい、この通り。

ソクラテス　さあ、いいかな、お前がこれまでに一つも教わらなかったことで、いま一番に習いたいと思っているのは何だね。さあ、言ってごらん、韻律をはかる単位（メトロン）のことかね、リズムのことかね、言葉づかいかね。

ストレプシアデス　わしゃあ、はかる方がいいね。せんだっても麦をついてもらって、コイニクスの二つ分がところをごまかされたからね。

ソクラテス　お前に聞いているのは、そんなことではない。メトロン（韻律単位）はどうするのが一番いいと思うかってことなんだ。三メトロン（trimetron）がいいか、四メトロン（tetrametron）がいいかってことだ。（六四二）

ストレプシアデス　そりゃあメトロン（一日分）は、半ヘクテウス（四コイニクス）に越したことあねえ。三コイニクスじゃあ足りねえ。

ソクラテス　これ、なんという馬鹿なことを言うのだ。

ストレプシアデス　そんなら賭けをしてもいい、四メトロンというのは、半ヘクテウスじゃあないかどうか。

ソクラテス　烏に食われてしまえ。何というお前はがさつ者だ、学問なんていう頭ではない。これだと、リズムのことなら、さぞかし早わかりができるだろうよ。

ストレプシアデス　でも、そのリズムって奴は、わしがおまんまを食べてゆくのに、何の役に立つっていうんですかい。

ソクラテス　それはだ、どういうリズムが行進曲調で、どういうリズムが指（dactylos）調かということがよくわかれば、人づき合いをするのにも、気のきいたところが見せられるというわけだ。（六五一）

ストレプシアデス　指のだって？　いや、それなら知っている、ゼウスさまに誓ってもいい。

ソクラテス　それなら言ってごらん。

〔ストレプシアデスは、中指だけを突き立て、他の指をにぎったままで、身ぶりをする〕

ストレプシアデス　ほら、これでさあ。ほかに何がありますかい。以前、わしがまだ若かった頃は、これがね……。

ソクラテス　えい、土百姓め、左まきのとんちきめ。

ストレプシアデス　だって、情けなやお前さん、わしはそんなもの何も習いたくはないんだ。

ソクラテス　じゃあ、いったい何が習いたいんだ。

ストレプシアデス　あれですよ、あれですよ、邪論の極意という奴ですよ。

ソクラテス　いや、それを習うには、まだ先に教わらにゃあならんことが、他にあるのだ。四つ足の男性は、正しい言葉づかいでは、何と何がそれかということなんかね。（六五九）

ストレプシアデス　よしてくださいよ、男性くらい知ってまさあ。知らなかったら、気違いだ。ほら、牡羊、牡山羊、牡牛、いぬ、にわとり。

〔ここに二行の欠文があると推定される、ソクラテスは今度は女性を問い、ストレプシアデスはまた別の名をあげるが、最後のところは「にわとり」で、男性の場合と同じ言い方になる〕

ソクラテス　それ見ろ、めすもおすも同じように、「にわとり」と呼ん

でるじゃあないか。

ストレプシアデス　はて、どうしてですかい。

ソクラテス　どうしてだって。どっちも「にわとり」に、「にわとり」じゃないか。

ストレプシアデス　あれまあ、ポセイドンさまよ。それなら、これからはどう呼んだらいいんですかい。

ソクラテス　にわめんどりと、にわおんどりさ。

ストレプシアデス　にわめんどりかい。こいつあ、うめい。黒雲（アエール）さまに誓ってもいい。それなら、このことを教えてもらっただけでも、お礼にあんたさんの捏桶(こねおけ)いっぱいに麦を入れてあげましょうぜ。

ソクラテス　ほれ、それがまたもう一つ間違っている。「捏桶」（カルドポス）は女性名詞だのに、男性語尾（カルドプおす）[1]で呼んでいる。

ストレプシアデス　そりゃあ、わしが捏桶を男性で呼んでいるなんて、どんな具合になんですかい。

ソクラテス　正に正にそう呼んでいるんだよ。ちょうど、あのにやけたクレオニュモスみたいな者までも、男のなかに数えて呼ぶような具合にな。

ストレプシアデス　そりゃ、いったいどうしてですかい。はっきり言っておくんなさい。

ソクラテス　お前の言い方では、コルドポス（捏桶）が、クレオニュモスと同じ語尾をもっていることになるのだ。

ストレプシアデス　そんなこと言ったって、お前さん、クレオニュモスは捏桶だってもってやしませんぜ。あれは丸い乳鉢でこねてましたぜ。だが、それはそれとして、これからは何と言ったらいいんですかい。

ソクラテス　何と言ったらいいかって、コルドペー（こねめけ）さ。ソーストラテー（軍備万全）と言うのと同じことさ。

ストレプシアデス　コルドペーと言えば、女性で呼んだことになるんですかい。

ソクラテス　うん、それで正確な言い方になるからな。

ストレプシアデス　するていと、あれはコルドペー（こねめけ）に、クレオニューメーだったんですかい。

ソクラテス　さあ、それなら、もう一つ人名について、どれが男性で、どれが女性かを学ばにゃあならん。

ストレプシアデス　いや、もう知ってますよ、どれが女性かなんてことは。

ソクラテス　じゃあ、言ってごらん。

ストレプシアデス　リュシラ、ピリナ、クレイタゴラ、デメトアってところでさあ（どれもア音で終っている）。

ソクラテス　それなら、男性はどんな名前かね。

ストレプシアデス　いくらでもありまさあ。ピロクセノス、メレシアス、アミュニアスなんて。

ソクラテス　いや、駄目だ。そんなのは男性じゃない。

ストレプシアデス　あんたのところじゃあ、これは男性じゃあないんですかい。

ソクラテス　いや、断じて男性じゃあない。なぜって、もしお前がアミュニアスに会うとしたら、どう呼ぶかね。

ストレプシアデス　どう呼ぶだろうかって、こうでさあ、「よお、アミュニア（呼格）[2]」ってね。

ソクラテス　それ見ろ、アで終るから、アミュニアスを女性として呼んでいることになる。

ストレプシアデス　それなら、当り前のこっちゃあないかね。あいつは兵隊に行かないんだから。だが、それはそうと、何でこんなことを習うんですかい。みんな誰でも知ってるこっちゃあないかね。

ソクラテス　別に何でもないのさ、ゼウスに誓って。しかしまあ何でもいいから、ここへ来て横になりたまえ。

〔ソクラテスさっきの敷蒲団を指す〕

ストレプシアデス　それで、何をするんで。

ソクラテス　お前自身のことについて、何か思案し出すのだ。
ストレプシアデス　どうか、それなら、お願いだ、そこへ寝るのは勘弁しておくんなさい。しかし、どうしてもってなら、せめて地面の上で、その問題を思案し抜くことを許しておくんなさい。
ソクラテス　いや、そういう変則は認められんのだ。
ストレプシアデス　ああ、情けないことになった。今日は南京虫から、どんな仕置きを受けることになるのやら。
〔ストレプシアデスは敷蒲団の中へ横たわり、ソクラテスは瞑想のうちに沈む〕
コロス　さあ思案するのだ、考察するのだ、
自分を四方八方、あっちへひねりこっちへひねりするのだ、
ひとつに凝り固まって。
それでもし、窮地に落ちてどうにもならんという時は、
大急ぎ、ほかの考えへ一足とびするのだ、
お前の心の中をどこか探して。
だがしかし、目に心地よい眠りは、
これを遠ざけるようにしなければならん。
ストレプシアデス　あたたた、あたたた。
コロスの長　どうした。何を苦しんでいるのだ。
ストレプシアデス　ああ、もう破滅じゃ、情けない、
床のなかからは、這い出して来て、
コリントス虫め、わしを噛んでござる。
わきっ腹はぼりぼりやる、
命の水（血）は吸い出す、
きんのたまは引っぱり出す、
尻のあなはほじくる、
これじゃあ、わしは消えてなくなるわい。
コロスの長　いや、そう深刻に苦しみすぎてはいかん。
ストレプシアデス　またどうしてですかい。
わしの財産がなくなるというのに、
血の気も失せ、命の水もなくなるというのに、
そして履物まで取られてしまったというのに。
それからまた、災難はこれだけではない、
不寝番、ねむけざましの歌を歌っているその暇に
もう少しで、わし自身が消えてなくなるというのに。
〔ソクラテスは沈思からさめる〕
ソクラテス　これ、何をしている。思案思索はしないのか。
ストレプシアデス　わしですかい。してまさあ、ポセイドンさまに誓って。
ソクラテス　して、いったい何を思案したのだ。
ストレプシアデス　南京虫に食われて、わしに何か残るだろうかとね。
ソクラテス　うせろ、ろくな死にざまはできないぞ。
ストレプシアデス　でも、先生、ちょうどもう失せてしまったところですわい。
ソクラテス　いや、そういう弱気が禁物じゃ。とにかく蒲団にくるまるのだ。
〔と言いながら、ソクラテスはストレプシアデスの上に、羊皮の掛蒲団を積み重ねる〕
これから、はぐらかし法的理性と、瞞着法を発見しなければならんのだからな。
ストレプシアデス　やれ、やれ、誰かないもんだろうか、こういうひねた蒲団をかけると、そこからちょろまかし性の思いつきをひねり出させてもらえるような人は？
〔ストレプシアデスは蒲団のなかにもぐり、ソクラテスは沈思し、あるいは逍遥する。しばらくの間あり〕

ソクラテス　さてと、この男、何をしているか、よく見るのが先だ。これ、ねむっているのか。
ストレプシアデス　いいえ、アポロンさまに誓って。
ソクラテス　何かにぎったものがあるのか。
ストレプシアデス　いや、ゼウスに誓って、さっぱりでさあ。
ソクラテス　全く何もないのか。
ストレプシアデス　ええ、何もありませんや、右手ににぎってる一物のほかはね。
ソクラテス　そんなことより、早く蒲団をかぶって、思案するようにしないのか。
ストレプシアデス　問題は何がいいでしょうかね。わしはあんたに教えてもらいたいんだ。ソクラテス。
ソクラテス　自分で、ほしいものをまず見つけ出して、言ってみるがいい。
ストレプシアデス　もう何度も何度も、わしの欲しいものは聞いたはずだ。借金の利息のことさ、どうしたら誰にも払わずにすむかってことさ。
ソクラテス　さあ、蒲団をかぶって！　それから思索力を自由に游(およ)がせるのだ。そうすると繊細度がますから、そこで少しずつ、問題のまわりをめぐって、思案をこらすのだ。その場合、科学的に正しい分類と観察を忘れてはならんぞ。(七二)
ストレプシアデス　ああ、あ、とてもやりきれたもんじゃない。
ソクラテス　これ、しずかにするのだ。それでだ、もし何か思想上ゆきづまることがあったなら、それはそのまま放って、そこから離れるのだ。そしてそれからまた後で、もう一度それを思いついたことで動かしてみるのだ。そしてこれをうまく制御するんだな。
［ここでまたしばらくの間がある］
ストレプシアデス　おお、しめたぞ、ソクラテスはん。
ソクラテス　どうした、じいさん。
ストレプシアデス　思いつきましたわい、利息払いのはぐらかし法を。
ソクラテス　どれ、見せてごらん、それを。
ストレプシアデス　へえ、それじゃあ、ひと言御批評をうけたまわることにしましょうかい。
ソクラテス　何のだ。
ストレプシアデス　テッサリアの魔女(1)をやとってさ、夜のうちに、お月さんをはずして、取ってしまうことにしたら、どうだろうね。そしてちょうど鏡を入れるように、お月さんをかぶと入れの丸い奴に閉じこめてしまうのさ。そしてその後は、それをそのまま見張っていることにしたら。(七三)
ソクラテス　いったいそれが、何の役に立つというのだ。
ストレプシアデス　何の役に立つだって？　もう月がどこへも上らないとなれば、利息を払うこともいらないだろう。
ソクラテス　ふん、それはいったいなぜだね、どうしてだね。
ストレプシアデス　そりゃあ、銭を借りるのは月ぎめだからさ。
ソクラテス　よろしい。だが、もう一つまたうまい問題を出してやろう。いまお前に五タラントンの弁償を求める訴訟が、裁判所の蠟板の予定表に書きこまれるとしたら、どうやってそれを消せるか、言ってごらん。
ストレプシアデス　どうやって消すというのかね。どうやって、ね。わかりませんわい。だがしかし見つけ出す工夫はしなければならん、と。
ソクラテス　いいかね、思いつきをいつも自分のまわりへ押えつけておいては、いかんのだよ。思索力というものは、これを空気中に放してやらなければいけないのだ。黄金虫(こがねむし)のように足に紐をつけてね。(七四)［またしばらくの間］
ストレプシアデス　見つけたぞ、訴訟を消してしまう賢明この上ない方法を。それはあんたも、なるほどと言うにちがいない奴だ。
ソクラテス　どんな方法だね。
ストレプシアデス　ほら薬種屋にある、あの石をもう見たことがあるで

しょう。きれいな、すきとおってる石で、あれから火をつけたりする奴さ。

ソクラテス　ああ、水晶玉のことだね。

ストレプシアデス　はあ、それでさあ。が、さて、どうですかい。その石を手に入れて、いつも裁判所の書記が書きこみをする時には、そこから離れたところにいて、こういうふうにお日さまに当てるのさ、そしてわしの訴訟ごとが記されているところを、溶かして消してしまうとしたら。

ソクラテス　なるほど賢いやり方だ、およそ妙なるものに誓って。

ストレプシアデス　ああ、どんなにうれしいだろうな。五タラントンもの訴訟が棒びきになるなんて。

ソクラテス　さあ、それでは、早いところ、次の問題を片づけるのだ。

ストレプシアデス　何ですかい。

ソクラテス　どうやって反対側の訴訟をはぐらかすかってことだ、証人がいないで、こっちが敗けそうだという時にさ。

ストレプシアデス　下らない、そんなことはわけなしの、ちょんちょんだ。

ソクラテス　じゃあ、言ってみろ。

ストレプシアデス　ああ、言いますとも。まだ先番の訴訟事件が掛かっていて、わしの番の呼び出しが来ないうちに、走ってって、首をくくるのは、どうですかい。

ソクラテス　馬鹿らしい。

ストレプシアデス　いや、そんなことはない。神々に誓ってもいい。だって、わしが死んでしまったら、誰も訴えようがあるまい。

ソクラテス　愚劣だ。もうお前には教えてやらん。とっとと出てうせろ。

ストレプシアデス　そりゃあまたなぜですかい。どうしてですかい。おおソクラテス、お願いだ、神々に誓うから。

ソクラテス　いや、駄目だ。お前は何を教えてもらっても、すぐ忘れてしまうのだ。うそだと思うなら、いま最初に何を教わったのか、言ってみろ。

ストレプシアデス　ええと、はてな、最初は何だっけ、最初は、と、何だっけ。麦を入れて捏ねていたんだが、あれは何だっけ。こりゃあいけねえ、出て来ない。ええと、何だっけ。

ソクラテス　烏に食われて、くたばってしまえ。物忘れはひどい、へまばかりやる、お前みたいな奴はいない、この老ぼれめ。

ストレプシアデス　ああ、こりゃあ情けない、わしはいったいどうなるだろう。舌先をうまく使う術を習わなかった日には、この身は破滅じゃ。何はともあれ、雲ひめさま、何かよい知恵をお借しくださいませ。

コロスの長　わたしたちでよければ、ご老人、知恵を貸して上げます。もしお前さんに大きくなった息子があるのなら、それをお前さんの代りに、習いによこすのです。

ストレプシアデス　いや、息子なら、もう一人前の紳士になったのがいるんですが、しかし駄目ですわい。こういうことを習うつもりがないんだから、わしはどうしていいのか、困ってしまう。

コロスの長　お前さんはそれで黙ってすっこんでいるのかね。

ストレプシアデス　なにしろ、いい身体はしているし、はち切れそうな勢いなんでしてね。それにさ、お姫さま育ちの、むやみと気位の高い女たちを身内にもっているもんですからね。しかし今度は決心して、あれを呼んで来ましょう。いやだなんて言ったら、もうどうしたって家におくもんか。

［ソクラテスに向って］まあとにかく、ちょっとの間、待っていておくんなさい、家へ入って。

［ストレプシアデスとソクラテスは、各自の家へそれぞれ退場。コロスはソクラテスのために合唱する］

コロス　わかるか、お前、もうじきだ
とても多くの儲けをば
手に入れるのだということを、

――これぞわれらのめぐみ、
われらなればこそのめぐみぞ。
なにせ、この男、何でもやるつもり、
お前の言いつけなら、何でも。
だからお前も、この男の、高みに
つるされて、目をまわすのを
それとはっきり認めたら、
ペロリと失敬するがいい、
出来るだけ、うんとこさだ、それも素早くな、
えてして、こういうことは
風向きの変りやすいものだからね。

〔ストレプシアデスの家の戸が開いて、父子二人が出て来る〕

ストレプシアデス　いいか、もうとにかく、「霧」に誓って、お前をここへおいておくことはならんのだ。とっとと出て行って、メガクレスの家の柱でもかじったらいい。

ペイディピデス　しっかりしてくださいよ、お父さん、いったいどうしたんです、こりゃあ正気の沙汰じゃありませんよ、オリュムポスのゼウスさまに誓って。

ストレプシアデス　それ見ろ、それ見ろ、オリュムポスのゼウスなどと、馬鹿な、その年でゼウスを信じているなんて。

ペイディピデス　でも、本当のところ、それがいったい何でおかしいんですか。

ストレプシアデス　まだまだ若いくせに、古くさい考えをもっているのだと思うとな。まあ、いいから、ここへおいで。お前はもっと知らなきゃあならんことがあるんだ。いま話してやるから、それを聞いて大人になるんだな。だがしかし、これはほかの者には誰にも教えちゃあいかんぞ。

〔ペイディピデスは父親に身体を近づける〕

ペイディピデス　さあ、何ですか、その話ってのは。

ストレプシアデス　今お前はゼウスに誓ったな。

ペイディピデス　ええ。

ストレプシアデス　それなら、どうだ、学問というものがどんなにいいものかいまわからせてやるぞ。いいか、ペイディピデス、ゼウスなんてものは存在しないのだ。

ペイディピデス　しかしそれなら、何が存在することになるんですか。

ストレプシアデス　ディーノス（渦）さ。いまの支配者はこれなんだ。ゼウスは追い出されてしまったんだ。

ペイディピデス　ちえー、下らない、何のたわ言です。

ストレプシアデス　いや、たしかに、いま言った通りなんだ。

ペイディピデス　誰からそんなことを聞かされたんです。

ストレプシアデス　ソクラテスさ、無神論の本場（メロス島）[1]仕込みなのさ。それからカイレポンもそう言っていたのだ、あれは蚤の足跡まで知っている人だからなあ。

ペイディピデス　あんな、いかれた連中の言うことを真にうけるなんて、気違い沙汰もひどすぎますよ。

ストレプシアデス　これ、言葉をつつしみなさい。あんな、きちんとした、理性のある人たちのことを、ちょっとでも悪く言ってはならん。あの人たちが誰も髪を刈ったり、油を塗ったりしないのは、不精や貧乏のためではなくって、倹約のためだったのだ。そしてそのために、浴場へ行って、身体を洗うようなこともしなかったのだ。ところが、お前はどうだ、まるでわしが死んでしまって、その湯灌をするみたいに、わしの身代を洗い流してしまうところだ。さあ、大急ぎだ、あそこへ行って、わしの代りに勉強してみてくれ。

ペイディピデス　だって、あんな連中から、いったい何の役に立つことが習えるんですか。

ストレプシアデス　本気でそんなことを言うのか。およそ世に賢いと言われるものは、何でも習えるんだ。しかしそんなことより、自分自身

を知るんだな、どれほど無学で、鈍な自分かということをな。まあしかし、ちょっとの間、ここで待っていてくれ。

〔ストレプシアデス、急ぎ足で家の中へ入って行く〕

ペイディピデス　ああ、どうしたんだろう、親父は気が違っている。裁判所へ訴え出て、精神異常の確認をしてもらおうか、それとも棺桶屋に親父の気が変になっていることを話しておく方が、いいか知らん。

〔ストレプシアデスが、二羽のにわとりをかかえて、家の中から出て来る。まず一羽のにわとりを、ペイディピデスに見せながら〕

ストレプシアデス　さあ、どうだ、お前はこれを何と見るか、言ってごらん。

ペイディピデス　にわとりでさあ。

ストレプシアデス　よろしい。では、これは何だね。

〔もう一羽のにわとりを見せる〕

ペイディピデス　にわとりでさあ。

ストレプシアデス　両方とも同じじか。そんなことでは笑われるぞ。いいか、これからはそんな言い方はしてはいかんぞ。これはにわめんどりと呼び、それはにわおんどりと呼ぶんだ。

ペイディピデス　にわめんどり？　それが今あの家の中へ入って、教わってきたばかりの有難い学問なんですか、あの土色をした連中から。

ストレプシアデス　うん、ほかにもたくさんあるんだ。しかしわしは、何を教わっても、毎度すぐに忘れてしまうんだ。年のせいでな。

ペイディピデス　はは あ、それで上衣までなくしてきたんですね。

ストレプシアデス　いや、それは違う。ただなくしたんではなくって、思案のあげくだ。

ペイディピデス　じゃあ履物（はきもの）は、どこへやったんです、馬鹿らしい。

ストレプシアデス　ペリクレスの言ったのと同じことさ。[1]「然るべき方面へ向けてやった」んだ。まあ、とにかく、さあ、歩くんだ。行こう。自分勝手のでたらめをやるのは、まずお父さんの言うことをきいてからのことにしてくれ。わしは覚えているが、まだ六つのお前に、よくまわらない舌で頼まれて、その通りに、わしが陪審員の務めでもらった最初の銅銭をはたいて、ディアシアの祭礼[2]に、お前のために山車（だし）を形どった粉菓子を買ってやったことがあったけなあ。

ペイディピデス　ええ、もう仕方がありません。こんなことをして、後でいつか困ることになりますよ。

ストレプシアデス　ああ、有難う、やっと言うことをきいてくれたか。

〔ソクラテスの住家、思案所の前へ行って、ソクラテスを呼び出す〕

さあ、ソクラテス、出て来てください。息子をつれて来ましたよ、これです。なかなか来たがらなかったのを、やっと説き伏せたんですよ。

〔その間にソクラテスが出て来る〕

ソクラテス　そりゃあそうだろう。まだほんの小僧っ子だからな。天上につるされていることについても、まだ練磨されてはおらんしな。

ペイディピデス　つるしものだって、お前さんこそ、もみくちゃの、つるし半天（ばんてん）みたいなくせに。

ストレプシアデス　これ、烏に食わせるぞ、先生に悪態なんぞついて。

ソクラテス　見ろ、その「つるし」の発音が、なっていない、唇までぽかんと開けてさ。こんな者がどうして、訴訟を防いだり、あるいは逆に訴訟を提起したり、あるいは相手の議論をひっくりかえして、これを無効にしたりするような術を覚えられるというのだ。まあ、しかしヒュペルボロスみたいな男でも、一タラントンの金を積んで、これを覚えた例もないことはないんだがね。

ストレプシアデス　いや、心配はいりませんや。教えてやっておくんなさい。生れつきは、心（しん）から利口なたちなんで、早くももうこれっぽっちの、ちいちゃな子供の頃に、内にいて家を造ったり、船を彫ったり、いちじく材の小さな車をこしらえたり、あるいはざくろの皮から蛙を作ったりしたんですからね。それもあんたには想像できんくらいに上

手にだ。どうか何とかして、あの二つの論を習わせておくんなさい。内容はともかくとして、強い方の論と弱い方の論でさあ。しかし両方は駄目というのなら、邪論の方だけでも、万難を排してさ。

ソクラテス　それは本人に、直接二つの論について学ばせたらいいだろう。わしは失敬したいね。

〔ソクラテスは退場する。ストレプシアデスこれを追うようにして、呼びかけながら〕

ストレプシアデス　まあ、これだけは忘れずにお願いしますぜ。何とかして、どんな正論にも反論できるようにしてやっておくんなさい。

〔退場〕

〔ここにコロスが入ると思われるが、その部分は現存のテクストに欠けている〕

〔正論と邪論に扮した二人物登場、古註には、これが闘鶏の趣好で、鶏籠に入れられて出て来るとも記されているが、確かなことはわからない〕

正論　さあ、こっちへ来て、お前の本性を、ここにおいでの見物の皆さんにお目にかけるのだ。鉄面皮なお前のことながら。

邪論　おお、いいとも、「どこへなりとも御意のまま」だ。大勢さんがいらっしゃるところで、おしゃべりする方が、お前さんをやっつけるのに、一層やりがいがあるというものさ。

正論　お前がやっつけてくれるというのかい。へえ、そう言うお前は、何だね。

邪論　論というものさ。

正論　論は論でも、弱論のくせにかい。

邪論　しかしそのおれの方が勝つのさ。おれよりも強いなどと公言しているお前の方は負けさ。

正論　どんな利口なやり方があるというのだ。

邪論　新発見の新思想でさ。

正論　そういうのが大流行だからね、ここにいるお頭の弱い連中〔見物席を指す〕のおかげでね。

邪論　とんでもない、お頭のいい方ばかりだ。

正論　お前こそ、ひどくやっつけてやるぞ。

邪論　何をするのか、言ってみろ。

正論　正論をはくのさ。

邪論　問題にならん。そんなのは反論して、ひっくりかえしてやるわい。正義があるなんてことからして、おれは認めないのだ。

正論　つまり存在しないと主張するのか。

邪論　そうさ。でなきゃあ、さあ、どこにそんなものがある。

正論　神さまがたのところにある。[1]

邪論　へえー、いったいそれなら、正義があるというのに、自分の父親を縛ったゼウス[2]は、どうして亡びないのだ。

正論　ちえー、もうまたそんな（ところへ）悪が出て来ているのかい。へどが出るわい。

邪論　お前がもうろく爺で、時代に合わなくなっているのだ。

正論　何を言う、尻ぐせの悪い、恥知らずのくせに。

邪論　ふん、そんなふうに言ってもらうと、バラの花かざりをつけてもらった気持になるわい。

正論　祭壇泥棒めが。

邪論　光栄だね、百合の冠を頂戴して。

正論　親殺しもしかねない奴だ。

邪論　そんなことを言えば、おれに金箔をふりかけていることになるのを、ご存じなしとはね。

正論　いや、そんなことには断じてならないのだ、とにかく以前ならな。むしろ鉛の粉を浴びせかけられたことになるわい。

邪論　しかし当今じゃあ、それがおれの器量を引き立てるかざりになるんだぞ。

正論　全くはや、大した面の皮だ。

邪論　だが、お前の古くさいこともな。

正論　とにかく、いまの若い者が誰も勉強に行きたがらないのは、お前のせいだぞ。今に見ろ、お前が脳の弱い連中にどんなことを教えているのか、アテナイ一般にわかるようになるから。

邪論　それにしても、尾羽うち枯らした、みっともない格好じゃないか。

正論　なるほど、お前は景気がいいさ。以前は乞食同様にしていたのになあ。エウリピデスの芝居もどきに、「ミュシアの王テレポス(1)でござる」などと名のりながら、頭陀袋のなかから、パンデレオス(2)に施してもらった思いつきをかじっていたのだ。

邪論　やれやれ、知恵がおありだね。

正論　やれやれ、お頭がいかれているとはねえ。

邪論　そりゃあお前の話……。

正論　いや、お前のさ。それからお前みたいな奴に飯を食わせて、若い者を片輪にしてもらっている、この国全体のことさ。

邪論　いや、この青年は［と、ペイディッピデスを指す］お前みたいな、前世紀の遺物に教育させてはならないのだ。

正論　うんにゃあ、この男が健全な人間になり、無駄なおしゃべりばかり習うのではないとしたら、このおれが……。

邪論　［ペイディッピデスに向って］さあ、こっちへおいで。こんな気違いには構わないで。

正論　これ、泣かしてやるぞ、この男にちょっとでも手をかけてみろ。

コロスの長　これ、腕力沙汰はやめにしなさい。悪口を言うだけでは仕方がない。それよりは、お前さんは昔の人の教育がどんなものだったかという、その模範を見せるがよい、またお前さんは、新教育の模範を見せるんだね。そうすれば、この男もお前さん方の反対弁論を聞いた上で、自分で判断して、どっちを勉強するかがきめられるというものさ。

正論　おお、それはわしの望むところだ。

邪論　わたしだって望むところだ。

コロスの長　さあ、それなら、どっちに先にしゃべってもらうことにしようか。

邪論　この男に先番を譲りましょう。そして後からこの男が何を言うにしても、そこから新しい言いまわしや考え方で、この男を射立てて参らせてやりますわい。しまいには、この男がひと言つぶやいただけでも、顔いっぱい、両の眼まで、ちくりちくりと、くまん蜂にやられたように、わたしの名文句にさされて、参ってしまうでしょう。

コロス　さあ、ご両人、見せてもらおうかい、
あんたらの頼むところは
超特級の論理と思弁、それに
苦心惨憺、ほやほやの新造語。
このおしゃべりくらべ
どちらが勝ちと、判明するのやら。
ごらんの通り、知恵の冒険
何でも勝手次第というところ、
今やこの大試合、知恵をあらそうは
われらが友の前。

コロスの長　さあ、とにかく、お前さんの番だ、年老いた世代に、数々の立派な品性の冠をいただかせたお人、何でも好きなように声をはじき出して、お前さんの生地のままを言っておくんなさい。

正論　しからば、いにしえの躾けのほどが、いかなるものであったか、お話し申そう。それはこのわしが、正論をはいて、いや栄えに栄え、節度というものが重んじられた頃のことだ。まず第一に、子供は口の中でもぐもぐ言うような話し方を、人前ですることは決して許されなかったのだ。また次には、音楽を習いに行くのに、同地区の者は集団で、雪が粉のように降って来る時でも、外套は着ないで、秩序整然と往来を歩いて行かなければならなかった。それからまた、両膝をくっ

つけて、前をかくすようなことはしないで、堂々と「城をこぼつ恐しきパラス」とか、「雄たけび遠くひびき」とかいう歌を、父祖の代から伝えられた音律に合わせて歌うことを、早くから覚えるように仕込まれたのだ。そしてかれらの誰かが、ふざけた真似をしたり、あるいは現今プリュニス[1]の後を追う新しがり屋の音楽家がやっているような、とても満足に曲げることの出来ない、妙な曲げ方をしたりすれば、歌神を無にする者だというので、散々に打擲、折檻されたものだ。また体育の先生のところへ行って坐っている時には、子供は膝をぱちゃんと前へ出して、外部の人に不作法なところを見られることのないようにしなければならなかった。それからまた、逆に立ち上る時は、砂をならして、自分たちの若さの跡形を、好色の連中の眼にさらすことのないように気をつけなければならなかった。そして当時は、誰も子供は臍から下には油をぬらなかったので、かくしどころには露と薄毛が、まるで花梨を見るように、花咲いていたのだ。また声をやわらかにくねらせ、眼にものを言わせて、われから色好みの連中に近づくようなこともしなかった。また食卓では、二十日大根の根のところは、子供が取ってはいけないものとされ、ういきょうや芹を、年長者よりも先につかみ取りしたり、また甘いものばかり取って食べたり、くすくす笑いをしたり、足を組んでいたりすることも、許されなかったのだ。（九八三）

邪論　いやはや、古色蒼然、今はすたった昔の祭礼を思わせるものばかりだ。ちょんまげ留めのかざりやら、ケケイデス[2]みたいな時代おくれの詩人やら、牛殺しの儀式[3]やら、あるわ、あるわ。

正論　しかしとにかく、これがかのマラトン[4]の勇士をやしなった、わしの教育のよりどころなのだ。それをお前ときたら、いまの若い者にすぐ外套にくるまることを教えている。だから、パンアテナイアのお祭に剣舞をしなければならない時でも、軍神に恥ずるところもなく、睾丸に風を当てないようにと楯で防いでいる始末、わしは喉がつまる思いだわい。いいか、ここんところをよく考えて、これ、若いの、お前は狐疑するところなく、このわしを選ぶようにしなければならんのだ。わしが強い方の論だ。そうすれば、盛場をきらい、温浴を避け、恥を恥とし、誰かお前を嘲る者があれば、憤激するということを解するようになるだろう。また年長者が近づいて来た時には、座席から起立し、両親に対して無礼のふるまいをすることなく、ほかに何ひとつ恥ずべきことを行なわないようになるだろう。つまり慎しみというものの理想像を、お前があらためて建立しようとしていることになるからだ。また踊子の家へ急ぎ足で出かけて行って、見るものにうつつをぬかし、売女に林檎を投げてもらって、あたら名を傷つけられるようなこともないだろう。また父親に口答えをするようなことも決してないし、また廃人呼ばわりして、自分が大切に育てられて、そこから巣立ちした年月を、かえって逆うらみするようなこともないだろう。

邪論　これ、若い衆、もしお前がこの男の言う、こんなことを真にうけたりしたら、それこそディオニュソスに誓ってもいい、ヒッポクラテスの豚児どもに似ることになるだろう。そして「甘ったれ坊や」と呼ばれるだろう。（一〇〇一）

正論　いや、とにかく、決してそんなことはないのだ。むしろお前は、花やぐ毎日を体育場で、元気な顔をして過ごすことになるだろう。今時の人間のように、盛場（アゴラ）をうろついて、ひと泣かせの途方もないことを、口にまかせてしゃべりまくることもなく、またつまらない事件に引きこまれて、しつっこい反対弁論のやりとりに、心身を磨りつぶすようなこともなく、むしろアカデメイアの公園へでも行って、聖なるオリーヴの樹の下で、白蘆の冠をかぶって、同年輩の善良な仲間たちと走りっこをしていることだろう。お前の体からは、すいかずらや無憂華、または美しい葉を出す白ポプラの香りがして、すずかけの樹がにれの樹にささやきかける時、お前は春の季節に歓喜するだろう。

さて以上、わしの教えを、そのままに

もし行なうならば、そしてまた
これに注意を払うなら
お前の胸は、いつも元気いっぱい
色つやは輝くばかり、肩幅もひろく
舌短くて、尻は大きく、一物はちっちゃい。
これをもし、今時のやり方を
習いとするならば、まず第一に
お前の顔色は、蒼白（あおじろ）となる
肩幅は狭し、胸は薄し
舌ばかり長くて、尻は軽い
一物が大きくて、提出議案は長ったらしい。
また、お前を説き伏せて、
醜いことを、すべて美しいと思い
美をかえって醜とするように仕込むだろう。
またその上に、アンチマコスのような
尻ぐせのわるい真似をすることで
お前のすべてがつくされることになるだろう。

コロス　おお、高く美しくそびえ立つ知恵の
ほまれたぐいなきを修める者よ、
きみの言葉に宿るなる
節度の花のうるわしさ
今ぞ知る、きみが代に生ける、
昔の人ぞ、ああ、幸多かりき。

〔邪論に向って〕では、
おお、きらめく才知を信ずる者よ、
君は何か目新しいことを言わねばならぬ、
この人が、かくも面目をほどこしたからには。

コロスの長　だが、お前さんが、この人の上を越して、笑いものになるのを免れようというのなら、どうやらものすごい工夫をしなければならんようだね。

邪論　おお、百も合点だ。もうさっきから、腹がにえくりかえって、息がとまりそうだった。こ奴の言うことに、一つのこらず反対意見を出して、すっかり引っかき廻してやりたかったのだ。そもそもこのおれさまが、思弁家どもの間で、「弱論」の名を呼ばれるようになったのは、法律や習慣として認められているものだとか、正義の裁きなどに対して、はじめて反対の議論をすることを考えついたればこそなのだからなあ。そしてつまり、弱い立場の議論を取りながら、それでいて勝つという、このことこそ一万の金貨よりも値打ちがあるというものだ。まあ、見るがよい、こ奴が信じこんでいる教育法なるものを、おれがどうやっつけるかを、こ奴はお前さんに、温浴をまず第一に許さないだろうと言っているが、しかし何の考えがあって、温浴を悪く言うのだ。

正論　それは男を懦弱（だじゃく）にする、大へん悪いものだからだ。

邪論　待ったり。すぐに胴なかを締めこんで、ぐうの音も出ないようにしてやるからな。まあ、言ってみろ。ゼウスのお子たちのうちで、誰が一番気力のすぐれた男子であったか、さあ、言ってみてくれ。そして誰が一番たくさんの難業をやりとげたか。

正論　そりゃあ、ヘラクレスにまさる男は、誰もいないと、わしは判定する。

邪論　それなら、ヘラクレスにゆかりの温泉というものはあるけれども、いったいどこにヘラクレスゆかりの冷泉なんてものがあるか、お前は一度でも見たというのか。しかもヘラクレスより男らしい者は、誰もいないというのに。

正論　ああ、これだ。これがあれなのだ。若いもんに一日中いつもおしゃべりばかりさせて、風呂場を満員にし、角力（すもう）場を空にするものなの

だ。

邪論　それからまた、盛場(アゴラ)で暮すのを、お前は悪く言っているが、おれはいいことだと言いたい。もしそれがよくないことなら、ホメロスの詩のなかで、ネストルなど賢い人たちが、みなアゴラ師（アゴラで演説することの上手）と呼ばれるわけはなかっただろう。

　さて、それから今度は、弁舌のことを取り上げてみようなら、こ奴は若い者が弁舌を練るのは、よくないとぬかしくさってるが、わしは大いに練るべしという論だ。またさらに、慎しみを忘れるなということを説いているが、そんなことは両方とも害悪を及ぼすことの最大なるものだ。なぜなら、慎しみを忘れなかったからといって、何かいい目にあった者が誰かこれまでにいたかどうか、お前の見聞を話してみろ。そしてそういう実例をあげることで、おれの言うことを反駁してみろ。（一〇六一）

正論　おお、いくらでもあるわい。ペレウス(1)がそのおかげで短剣をさずかったというのも、その一例だ。

邪論　短剣だって。愉快なご利益をさずかったものさ、お気の毒に、ところが、ランプ屋出のヒュペルボロス(2)は、悪党だったおかげで、ちょっとやそっとでない金額を得(とく)したんですぜ。短剣なんて、ゼウスに誓って、ごめんこうむりたいね。

正論　それからまたペレウスが、テティスのような女神と結婚することになったのも、慎しみというものを忘れなかったからだ。

邪論　しかしそれからがよくない。テティスはあの男をすてて、行ってしまったじゃあないか。あんまり慎しみが過ぎて、蒲団の中で一晩中愉快にやるのに、少しもいい相手じゃあなかったからさ。女というものは、手荒にされるのをよろこぶものなのだ。しかしお前さんなんか、もう廃物になった馬みたいなもので、こんなことはまるでわかるまい。

　何しろ、よく見てごらん、おお、若い衆、慎しみを忘れないなんてことのうちに、何があるのか、すっかり見てみたまえ。どれだけたくさんの楽しみを取り上げられようとしているのか、わかるだろう。稚(ち)児(ご)さんも女も、乱痴気さわぎ（コッタボス遊び）も、うまい食べ物も飲み物も、また高笑いすることも、いけないことになるのだ。しかしこれらのものを取り上げられてしまったら、生きていることが君に、何の値打ちがあることになるだろうか。（一〇七四）

　さあ、いいかね、それなら今度は「自然の必然性」というものに、論点を移すことにしよう。いま君が過ちを犯すとするね。恋をして、ひとの女を取ったりするわけだ。そうすれば、次はつかまって、身を亡ぼすことになる。申し開きができないからね。ところが、このおれについていれば、自然のままに振舞って、はねるも笑うも勝手次第、どんなことでも恥ずかしいなどと思うことはないのだ。間男でつかまるようなことがあっても、相手にこう言って反論するだろう。何も悪いことをしたのではないと言ってね。そして、それからゼウスを引き合いに出すのさ。あんな神さまでさえ、恋と女には弱いのだ。それを君は、死すべき人間の身で、どうして神さまにも出来なかったようなことを、することが出来るだろうか。（一〇八二）

正論　しかしお前の言うそんなことを真に受けて、その結果、尻の孔に二十日大根を押しこまれ、毛をむしって、熱灰をふりかけられるような、間男の仕置きをされることになったらどうするのだ。色好みではないと言って申し開きをする、何か才覚があるだろうか。

邪論　しかし色好みだからといって、何の困ることがあるだろう。

正論　何の困ることがって、それ以上のものがまだあるだろうか。

邪論　よし、それなら、その点でもしお前が、わしに負かされるとしたら、お前の言い分としては、何がのこるかね。

正論　そうなったら、沈黙するさ。ほかに何ともしようがないじゃないか。

邪論　よし、それなら、言ってもらおう。公職弁護人になっている連中は、どういう人間だね。

正論　みんなおかま好きだ。

邪論　その通りだと思う。では、いったいどうだね。悲劇作家になって

いる連中は。
正論　みんなおかま好きだ。（一〇九〇）
邪論　よろしい。だが、大衆の指導者になっている連中は、どうだね。
正論　みんなおかま好きだ。
邪論　それ見ろ、お前の主張には何の意味もないことが、わかったろう。
ここにいる見物衆だって、おかま好きとそうでないのと、どっちが多いか、よく見てごらん。
正論　よし、見よう。
邪論　どうだ、お前の見たところでは。
正論　ずっと多いね、たしかに、おかま好きの方が。わしの知っている範囲でも、ほら、その男に、あの男。あそこにいる髪の長い男も、そうだ。（一一〇一）
邪論　すると、お前の言い分はいったい何だね。
正論　もう負けだ。（多数決だからね）さあ、どうか、わしの上衣を受けとってくれ。わしもあんた方の陣営に投降するのだから。
〔正論は邪論の後について、ソクラテスの思案所の内へ入って行く。正論はソクラテスの陣営に投降する形になる〕

〔今度はソクラテスとストレプシアデスが、それぞれ自分の家から出て来る〕
ソクラテス　さあ、いったいどうするんだね。ここにいる息子を、つれて帰る方が希望かね。それとも、わしに弁論の教育をしてくれというのかね。
ストレプシアデス　教えてやっておくんなさい、ぴしぴしとやっておくんなさい。そしてどうか忘れずに、これを上手に鍛えて、一方ではこまごました事件にも合うようにしておいて、もう一方の顎は、もっと重大な事件に向くように鍛えておくんなさい。（一一一〇）
ソクラテス　それは心配無用だ、これを立派なソフィストにして返してやろう。
ストレプシアデス　いや、ぜひとも蒼白い奴にしておくんなさい、悪いダイモンに憑かれている奴にしておくんなさい。
〔そこでソクラテスはペイディピデスを思案所へつれて行く。ストレプシアデスも自分の家へ入る〕
コロスの長　まあ、行くがよい。しかし、このことをお前は、後悔する時が来るだろうと思う。（一一一四）
〔ここでコロスは再度、観衆に正面を向けて、訴えをすることになる〕

審判役の人たちが、わたしたちのこの歌舞団に対して、当然の賞を与えてくれるなら、どういう利益をさずかることになるかということを、わたしたちはここではっきり言っておきたいと思います。まず第一に、あなた方が「気候もよし、さあ種播きに鋤を入れよう」と思えば、よそは後まわしにして、あなた方のところへ先に雨を降らせて上げましょう。それから、農作物やぶどうの樹も守って上げましょう。だから旱魃やひどい大雨にいためつけられることもありますまい。これをもし死すべき人間の分際で、わたしたち神の位にあるものを軽んずるような者があれば、わたしたちのために、どんな災いを受けることになるか、よく心にとめておいてもらいたいものだ。ぶどう酒でも何でも、この土地からは何もとれないことになるだろう。なぜなら、オリーヴやぶどうの樹が芽を出す頃に、それを打ち落されてしまうからだ。わたしたちはそれにちょうどいいような石投機をもっていて、それで打つだろう。また煉瓦積みをしているのを見れば、雨を降らし、屋根の瓦までも、円つぶの雹でめちゃめちゃにするでしょう。また本人にしろ、親類にしろ、あるいは友人にしても、誰かが結婚するような時は、夜っぴて雨をふらしてやる。だから、わたしたちに不利な審判を下すくらいなら、むしろ雨のないエジプトにでも行っている方が（一一三〇）
いいと、たぶん考えるようになるでしょう。

〔ストレプシアデスが出て来る〕

ストレプシアデス　逆に数えて五日、四日、三日、そしてその後が二日目、それからが、どんな日よりもおれが一番おそれ、ちぢみ上り、大きらいにしている日が、すぐに続いてやって来るのだ。新月が古い月に重なる日(1)（晦日）がやって来るのだ。何しろ誰もかれも、おれが借金している奴は、みんな誓いを立て、供託金をおさめて、おれをとことんまでやっつけてやると言ってやがるんだからね。おれが穏当なこと、当然のことを頼んでいるのにさ。「そう非道なことをしないで、どうか一部は今は取り立てないことにし、一部は期限をのばし、一部は帳消しにしてくれ」と頼むと、奴らはそんなことをしたら、借金は取れなくなると言い、おれを悪者呼ばわりして、裁判にかけると言いやがる。

　さあ、今度は、裁判にかけるなら、かけてみろ。そんなことは平気の平左だ。ペイディピデスが弁論術を覚えてしまえば、な。それもすぐわかるだろう、この思案所の戸をたたきさえすれば。

　これ、誰か、誰かいないか。

〔ソクラテスが出て来る〕

ソクラテス　ようこそ、ストレプシアデス。

ストレプシアデス　いや、こちらこそ。まずはともあれ、これをお納めください。先生というものは、何かそれだけの礼をつくさにゃあならんもんですわい。それで、どうですかい、わしの息子は、さっき内へ入れていただいたが、例の論を覚えてしまったかどうか、聞かしておくんなさい。

ソクラテス　うん、学んでしまった。

ストレプシアデス　有難や、瞞着女王さま。

ソクラテス　だから、お前はどんな訴訟でも逃げられるだろう。

ストレプシアデス　借りた時に、証人がいたとしてもですかい。

ソクラテス　たとい千人いたって、ますます弁ずるというところだ。

ストレプシアデス　「ああ、さらば、高く高くわれらが叫びをばあげんかな」というところですわい。見ろ、けちな金勘定ばかりしていやがる奴らに、吠え面かかせてやるぞ。奴らも、奴らの元金も、利息もだ。もう手前たちは、おれさまに対して、ふざけた真似は出来ねえんだからな。

　それ、どんな子が、わたしのために
　育てられてるかや、この家のなかで、
　両刃の舌を輝かし、
　わたしの前衛、わが家の守護者ともなり敵には大損害、
　親父の大きな不幸もこれが解いてくれるのだ。

さあ、走って行って、あれを家の中から、わしのところへ呼んで来てくだされ。

〔ソクラテスは家の内へ、ペイディピデスをつれに入って行く〕

　おお、わが子よ、わが子、
　家から出て来ておくれ
　ほら、聞いておくれ、お父さんの声だよ。

〔ソクラテスとペイディピデスの二人が出て来る〕

ソクラテス　それ、お前さんの呼んでいる男だ。

ストレプシアデス　おお、大事な、大事な。

ソクラテス　さあ、息子をつれて帰るがいい。

〔ソクラテス退場〕

ストレプシアデス　おお、でかしたぞ。まず、お前の顔色からして、わしは見て、ほんとにうれしいぞ。いまこそ始めて断乎たる否定と反対の色が見えるからだ。「何を言ってやがんだい」という、お国ぶりの調子が見事に色に出ているわい。自分が悪いことをして、ひとをひどい目にあわせておきながら、かえってひどい目にあわされているのは自分の方だというように思わせるのだよ、きっと。お前の面だましいには、アッティカ根性が宿っているわい。さあ、今度はおれを助けてくれよ、前にはお前のおかげで、さんざんな目にあわされたのだからな。

ペイディピデス　でも、いったい何がこわいんですか。

ストレプシアデス　晦日の新旧日さ。

ペイディピデス　すると、新にして旧なんて日があるんですか。

ストレプシアデス　あるとも、奴らがわしを訴えるために供託金を納めることにすると言っている日が、それなんだ。

ペイディピデス　それだと、そんなものを納める奴は、それを損するだけだ。一日が二日になるなんてことは、あり得ないですからねえ。

ストレプシアデス　あり得ないだって？

ペイディピデス　そうですとも、どうしてそんなことがあり得ましょう。でなかったら、同じ女のひとが、同時に若い女でもあれば、婆さんでもあるということがあり得たでしょう。

ストレプシアデス　そんなことを言っても、実際もう法律で認められているんだからねえ。

ペイディピデス　それは法律の意味を正しく理解していないからだと思うんです。

ストレプシアデス　だと、法律の意味は何だね。

ペイディピデス　この法律を遠い昔に定めたソロン[1]は、心（しん）から民衆のためを考えた人だったんです。

ストレプシアデス　そんなことは、新旧日（晦日）にまだ何の関係もないよ。

ペイディピデス　とにかくソロンは、起訴のために二日をおいたのです。古い月の晦日と新しい月の朔日（ついたち）をね。そして供託金がききめを見せるのは新しい月になってからということになっていたのです。

ストレプシアデス　それじゃあ、何のために古い月の晦日を加えたのかね。

ペイディピデス　それは、うまく出来てるじゃありませんか、訴えられた方が一日先に出頭して、自分の方から話をつけることができるようにしたんです。そしてそれをしないと、新しい月の朔日に早朝から油をしぼられるということになるんです。

ストレプシアデス　それなら、お役所が供託金を受けるのは、どうしていったい新しい月の朔日にしないで、古い月の晦日の新旧日にするのかね。

ペイディピデス　つまりお毒味の役をする人と同じことをしているのだと思うんです。供託金をくすねるのは、早いほどいいというわけで、一日早目に毒味をすることにしたんです。

ストレプシアデス　ああ、有難いことだ。

〔見物席に向って〕お気の毒ながら、皆の衆、何のためにそこに坐ってござるのか、さっぱり利口にはならないようだね。まあ、わしら利口な人間を儲けさせてくださるというわけかね。石ころ同然、数ばかり集めても、せいぜい家畜の群、空の徳利はいくら積み重ねても何の役にも立ちはしない。それを思えば、わしとわしのこの息子の運のよさ、これじゃ祝い歌の一つも出さずばなるまい。

ああ、めでたや、ストレプシアデス

まずはお前が、ずんとかしこい

それから息子も同様、かしこく育ててると、

知人も町内の者も言うにきまってる、

〔ペイディピデスに向って〕お前が弁論の力で裁判に勝つとなれば、うらやましがってさ。だが、まずはとにかく、家へ入って、お前にご馳走したいよ。

〔両人退場〕

〔債権者の一人パシアスという肥大漢登場、ストレプシアデスを裁判に呼び出すために、証人となる人間をつれている〕

パシアス　そんなら、人間は自分のもってるものを他人に用立てる義務があるというのか。断じてそんなことはないさ。こんなやっかいなことになるのなら、いっそあの時すぐ、気まずい思いをしても、断ってしまえばよかったのだ。自分の金だというのに、今こうやってその金のためにお前さんにまでついて来てもらって、裁判に呼び出す用意をしなければならんなんて。おまけにまた同じ町内に住んでいる人間を

敵にまわしてさ。しかし裁判ごとを名物にする祖国の名を恥ずかしめることは、生きている限り許されない。ストレプシアデスを裁判に呼び出すことにしよう。〔家の中からストレプシアデスの声〕

ストレプシアデス　はて、何者かな、あれは。

パシアス　新旧日にな。

〔ストレプシアデス家のなかから出て来て〕

ストレプシアデス　そら証人を呼ぶぞ、お前が二つの日を指定したということでな。いったい何のための呼び出しだ。

パシアス　十二ムナの件さ、お前があお馬を買うのに借りた金だ。

ストレプシアデス　馬だって？　聞いておくんなさい、皆の衆、わしは皆さんもご存じの通り、馬に乗ったりすることは大きらいだ。

パシアス　しかも、たしかに返すと、神々に誓ったはずだ。

ストレプシアデス　たしかにね、あの時はまだうちのペイディピデスが、不敗（まけっこなし）の論理というのを覚えてなかったからね。

パシアス　それで今度は、断るつもりだというのか。

ストレプシアデス　そりゃあそうさ、せっかく学問をさせたご利益だ、そうでもしなかったら、ほかに何がある。

パシアス　それでしかも、断るというつもりは、神々の前で誓うことになっても変らないというのだな。

ストレプシアデス　神々って、そりゃあどんな神々だ。

パシアス　ゼウスさまと、ヘルメスさまと、ポセイドンさまに誓うのだ。

ストレプシアデス　いいとも、その誓いを立てることで、三オボロス余計に取られることになってもいいさ。

パシアス　そんなら、いっそ不敬のばちで、くたばればいいのだ。

ストレプシアデス　このでぶの酒袋め、塩でもんでやったら、少しはましになるだろう。

パシアス　おお、こんなにまで馬鹿にされるのか。

ストレプシアデス　そうすれば六クウスの量は入るだろう。

パシアス　覚えてろ、そのままにはしておかないからな、ゼウスの大神、もろもろの神々に誓ってだ。

ストレプシアデス　いやはや、あきれたね、神々とは愉快だ。ゼウスに誓うなんて、われわれインテリには、噴飯ものだよ。

パシアス　きっと、きっと、そのうちにこれの片はつけさせるからな。しかし今は、前の借金を返すのか、返さないのか。その返事をもらって帰りたいね。

ストレプシアデス　まあ、そう騒がないでいてくれ、今すぐにはっきりした返事を聞かせてやるから。

〔ストレプシアデス大急ぎで家の中へ入る〕

パシアス　〔証人になる男に〕あいつ、どうするだろうとお前さん思うかね。

証人　返すだろうと思うよ、お前さんに。

〔ストレプシアデス捏桶を持って出て来る〕

ストレプシアデス　さあ、奴はどこにいる、銭を返せなんていって。さあ、これが何だか言ってみろ。

パシアス　これを、何だか言えってのかい。これおけさ。

ストレプシアデス　それ、そんなことで、銭を返せなんていってるのかい。一オボロスだって返してやるもんか、こねめけをこねおけなんて呼ぶ奴は、誰にだって返すもんか。

パシアス　そんなら、返さないんだな。

ストレプシアデス　ああ、おれの頭に狂いのない限りはな。だから、早いところ、さっさと戸口から飛んで出て行く方がいいぞ。

パシアス　うん、行くとも。だが、よく覚えておけ、訴えてやるからな、供託金を積んで。そうでなければ、もうおれは死んだ方がましだ。

ストレプシアデス　そんなことをすれば、もとの十二ムナに加えて、それだけ余計な失費となるぞ。しかしお前をそんな目にあわせたくないな。何しろこねめけを間の抜けた呼び方をするような御仁だからなあ。

〔パシアスと証人の二人は退場。やがてもう一人別の債権者アミュニアスの声が聞こえて来る〕

アミュニアス　やれ、悲しや、悲しや。

ストレプシアデス[1]　はて、こりゃあ誰だ、悲しみの声をあげているのは。まさかカルキノス先生のところの三天才の一人じゃあるまいなあ、こんな声を出したのは。

〔アミュニアスは車から落ちて、負傷したていで登場〕

アミュニアス　何と、わしが何者か、それが知りたいとの思召しか、まことに不幸な者でござる。

ストレプシアデス　まあ、勝手にやりな。

アミュニアス　おお、つれなきものはダイモン、わが馬車の桟を折りし運命よ。おお、パラス（アテナの神）よ、いかなればわれを亡ぼしたもうぞ。

ストレプシアデス　いったいトレポレモス[2]がお前さんに、どういうひどい仕うちをしたというのかね。

アミュニアス　からかっちゃあ、いけませんよ、旦那、それよりは、どうかお前さんの息子に、借りた金を返すように言っておくんなさい。それに全くのところ、こういう災難にあったわしの事情も特別に考えてもらいたいもんだ。

ストレプシアデス　その金というのは、どういう金だね。

アミュニアス　息子さんが借りた金さ。

ストレプシアデス　なるほど災難だね、お前さんの調子は本当によくないようだよ、おれの見るところではな。

アミュニアス　馬を走らせて来て、落っこったんだよ、神かけていつわりのない話が。

ストレプシアデス　いったい何のたわ言だね。馬から落っこったんじゃなくて、驢馬から落っこって、正気をなくしたみたいだぜ。

アミュニアス　たわ言だって？　金を返してもらおうと思うだけなのに。

ストレプシアデス　そうさ、いかれているのは、馬車だけでなくて、お前自身だというのが、どうも間違いのないところだな。

アミュニアス　な、な、なんだって？

ストレプシアデス　脳震盪らしいというのさ。

アミュニアス　お前さんこそ、ヘルメスさまに誓って、もう裁判に呼び出されるにきまったと思うよ、銭を返さないなんてことが、もしもあるとしてみろっていうんだ。

ストレプシアデス　まあ、いいから、言ってごらん。お前の考えはどっちだね。ゼウスが降らせる雨は、毎度いつも新しい水を落すのだとするか、それともあれは太陽が、下界から何度もくりかえし吸い上げるので、水は同じものだとするかね。

アミュニアス　そんなことは、どっちか知るもんか。どっちだってかまいはしない。

ストレプシアデス　それみろ、天上のことを何も知らないくせに、銭を返せなんて、どこを押せばそんな音が出るのだ。

アミュニアス　まあ、いい。銭に困っているのなら、本金はあずかりにして、利子だけでも返してくれ。

ストレプシアデス　利子って、そりゃあ何だ、何の子だ。

アミュニアス　知れたことよ、毎日毎月、銭金が絶えずだんだんに大きく育ってゆくのさ、少しずつでも時がたちさえすれば、な。

ストレプシアデス　いや、よくわかった。それなら、どうだ。海というものは、以前にくらべて今の方が大きいなんて考えられるかね。

アミュニアス　まあ、ね、同じだろうよ。今の方が大きいって法はないからね。

ストレプシアデス　それならば、だ。海はたくさんの河が流れこんでいても、ちっとも大きくならないというのに、これ、お前は悪いダイモンにでも憑かれたのか、自分の銭を肥らせようなんて、どうしたわけだ。追い立てなら自分を追い立てて、ここから出て行った方が早いぞ。〔下男に〕おい、突棒をもって来い。

〔下男から突棒を受け取って、これでアミュニアスを追い立てようとする〕

アミュニアス　こんなことをして、おれは証人を呼ぶぞ。

ストレプシアデス　とっとと失せろ。何をぐずぐずしている。走らんのか、シグマ印の馬めが。
アミュニアス　こりゃあひどい。暴力行為じゃあないか。
ストレプシアデス　さあ、とっとと走らんか。尻のあなに突棒を立てて、追い立ててやるぞ。この助馬めが。〔アミュニアス逃げ去る〕
逃げるか、これなら、手前も、手前の車も二頭立ての馬も、もろともたたきつけてやればよかったのだ。
〔ストレプシアデスは家へ入り、中断した食事をつづける〕

コロス　よからぬことに迷うとは、こんなものでしょうか。
ごらん
この爺さんは、ただ借金を
ごまかそうとするばかりで、
心の闇をさ迷ってます。
そして今日のうちに、どうしても
とんだ結果を招くことになるのです。
それはこの老ソフィストが
やり始めたばかりの悪事の報いで
たちまちとんだひどい目にあわされるということなのです。
つまりです
この男は、もうすぐ発見するだろうと思います。
前々から求めていたものをです。
自分の息子が、正義の人たちに逆らって
正反対の意見をのべる上手になるのです。
そしてどんな人と出会っても
またどんなに邪悪な主張をするにしても、
誰にも負けないということになるのです。
しかし、たぶん、たぶん
いっそ息子の口がきかなくなることを
ねがうようになるでしょう。

〔ストレプシアデスが家から飛び出して来る。つづいてペイディピデスも、これを追うようにして登場〕

ストレプシアデス　あ、たた、た。あ、たた、た。
おおい、近所の衆、うちの部族の衆、町内の衆、わしを何とでもして助けておくんなさい。なぐられるんだ。ああ、情けない、頭をやられ、顎をやられたんだ。このろくでなしめ。親をなぐるのか。
ペイディピデス　そうともさ、とっつぁん。
ストレプシアデス　ごらんの通り、こいつはわしをなぐったと白状していやがるんで。
ペイディピデス　まさにその通り。
ストレプシアデス　ろくでなし、親殺し、押込み強盗め。
ペイディピデス　もういっぺん、そいつをやっておくんなさい。同じやつでもいい。またもっとたくさんならべてもらってもいい。どうだい、わかったろう、ぼくは悪い名をたくさんつけてもらうのが、愉快なんだ。
ストレプシアデス　尻のしまりもしないくせに。
ペイディピデス　せいぜいバラの花を、たくさんに振りかけておくんなさいよ。
ストレプシアデス　お前は自分の父親をなぐるのか。
ペイディピデス　いや、それどころか、なぐったのは正当だということもはっきり言っておきたいんだ。
ストレプシアデス　けしからん奴だ。何で親をなぐるのが正当だなんてことになる。
ペイディピデス　さあ、それをぼくが証明しましょう。そして弁論の力で、ぼくはあんたに勝つことになるんです。
ストレプシアデス　そんな主張で、お前の方が勝つんだって？
ペイディピデス　そうですとも、大勝し楽勝するでしょう。まあ、二つ

の論のうちで、どっちでも主張したいと思う方を取ったらいい。

ストレプシアデス　いまさら二つの論とは何だ。

ペイディピデス　弱論を取るか、強論を取るかってことさ。

ストレプシアデス　なるほど、こりゃあお前に勉強させた効があったというものさ。ゼウスに誓って大したもんだ。父親は息子になぐられるのが正当で、りっぱなことだなんて、そんなことをお前が説得しようとしているのなら、正義に逆らう論を立てるための教育も完璧というものさ。

ペイディピデス　心配無用、ぼくがあんたを説得することになるのは、きまったことだと思っている。そうともさ、自分でも一席聞いてみれば、一言も反論はできなくなるはずだ。

ストレプシアデス　よしきた、いったいどんな議論をしようとするのか、聞いてみたいもんだ。

コロス　老人よ、お前の仕事は、どうやって
この男に勝つかを、思案することだ。
なぜなら、
この男、何か頼むところがないならば、
こうまで無茶なわけはない。
自信のもとには、何かがある。
ほれ、はっきり出ているぞ、
これなる者の、覚悟のほどが。

コロスの長　しかし何がもとで、まずこの争いが起ったのか、あらかじめコロスの者に話してもらわなければならない。何にしてもお前さんに、そうしてもらいましょう。

ストレプシアデス　いいですとも。最初何がもとで、悪口の言い合いを始めたかを、わしからお話ししましょう。つまりわしらは酒盛りの最中だったことは、あなた方もご存じの通りだが、まず始めにわしは、これにリュラ琴を取って、シモニデスの歌の一節、クリオス[1]（羊）がどうして毛を刈り取られたかというやつを、歌ってくれと頼んだのです。そうしたら、こ奴はすぐに、粉挽女じゃあるまいし、飲むのに琴をひいたり、歌ったりするのは、もう古いとぬかしやがった。

ペイディピデス　そうとも、あん時すぐにお前さんをなぐって、ふんづけてやればよかったんだと、今になって悔んでいるくらいだ。蟬のお客じゃあるまいし、歌を歌えなんて。

ストレプシアデス　そうだ、そんなことをあん時も、家の内で言いやがった。今のと同じような文句だ。そしてシモニデスなんか、へっぽこ詩人だって吐かしやがったんです。わしもやっとのことで、とにかく初めは我慢したんです。ところが、それから後で、天人花の枝[2]を一つ渡すようにして、まあ、いいから、これで一つアイスキュロスの芝居の科白を何かやってみてくれと頼みますと、こ奴はすぐに吐かしやがった。アイスキュロスなんて、詩人のなかでも、ただやかましいばかりで、実のない言葉をならべ、何を言っているのか意味もわからぬ支離滅裂の文章を書くことの第一人者で、ただ大口をあけて怒鳴りちらすばかり、絶句するのがせいいっぱいという先生だから、いやだと、な。そしてその時、わしの心臓が、どんなにひどく鼓動したか、あんた方に想像がつきますかい。しかしそれでもわしは、煮えくりかえる胸の中を、きゅっと抑えて、まあ、そう言わないで、それならお前の方で、何か新式のやつを、何でもいい、これこそインテリ好みだというやつを聞かしてくれと言ったのです。そうすると、こ奴がすぐに歌ったのは、エウリピデス劇の一くさり、滅相もないことに、兄貴が同腹の妹に言い寄るくだりだったのです。そこまで来ては、わしももう我慢はできなんだ。すぐに怒鳴りつけて、悪口雑言をうんとこ浴びせてやりました。そこから、まあ当然の成行きで、売り言葉に買い言葉の応酬となりました。そしてこ奴はとうとうわしに飛びかかって来て、それからはひっぱたくやら、ぶんなぐるやら、首をしめるやら、ふんづけるやらの乱暴です。

ペイディピデス　そりゃ当り前じゃないか、あの第一等の知識人エウリピデス先生を尊敬しないからにはね。

ストレプシアデス　あれが第一等の知識人だって。やれ、やれ、貴様を何と呼んだら、いいだろうか、だが、それを言ったら、また、またなぐられるだろう。

ペイディピデス　そうともさ。ゼウスに誓って、それが正当なんだから。

ストレプシアデス　また何でそれが正当なんだ。この恥知らずが、おれはお前を育ててやったんだぞ。お前の舌足らずの言葉から、何でもすべて、お前の思っていることを聞き分けてやったのだ。いいかな、お前が「ブー、ブー」と言えば、おれはそれと知って、飲むものをあてがってやるのが、いつものことだったのだ。「ウマ、ウマ」をほしがれば、パンをもって来てやったし、「カッカーン」と言うより早く、お前を抱き上げて、外へ連れ出し、あれをさせてやったものだ。それを貴様はどうだ、おれをしめつけておきながら、

うんこが出ると、泣いても、わめいても
一向かまわず、このろくでなし、
外へおれを連れ出してもくれなかった。
そこでおれは、息がとまりそう、
その場に「カッカーン」するより
ほかはなかったわい。

コロス　思うに若者どもは、
他方の言い分やいかにと
胸おどらせているであろう。
その故は、この男、
これほどのことを仕でかしておきながら、
駄弁よく説得に成功するとなれば、
老人どもは、身の皮まで剝がれて
豆（ちんぼこ）の莢さえ
容赦されないことになるだろう。[1]

コロスの長　〔ペイディピデスに〕さあ、お前の仕事は何だ。新しい言葉を見つけては、ひっぱり上げる者よ。何か説得の途を探して、自分の主張が正しいと認められるようにするんだな。

ペイディピデス　気のきいた新しい風潮に親しんで、現存の法律や習慣を軽蔑することができるというのは、何と愉快なことだろう。ぼくが乗馬にばかり気を取られていた時には、間違いなしに三言としゃべることはできなかったものだ。しかし今では、この親父のおかげで、馬術関係のことはやめさせられて、思想や論理や思索などの精妙なものに取り組んでいるので、親父を折檻することの正当さくらいは教えてやれるだろうと思うんです。

ストレプシアデス　そんなことなら、どうか馬の方をやってくれ。なぐられて身を損ねるよりは、四頭立ての馬を飼って、身代をなくす方が、おれはましだ。

ペイディピデス　まあしかし、さっきあんたがぼくの話の腰を折ったところへ、引き返すことにしよう。そしてまず質問したいのは、ぼくが子供の時に、あんたがなぐったか、どうかということだ。

ストレプシアデス　そりゃあそうしたけれど、それはおれがお前のことを心配し、お前のためを思ったからなのだ。

ペイディピデス　じゃあ、言っておくんなさい。ぼくだって同じような正当さをもって、あんたのためを思い、そしてなぐるということができるんじゃあないですか。とにかく、そのなぐるってことが、ためを思うことだとすれば、ね。だって、あんたの身体は打擲から免除されているけれども、ぼくの身体はそうでないなんてことが、どうしてあり得るんですかい。ぼくだって、いいですかい、奴隷に生まれちゃあいないんです。それとも「子供は泣かせても、親父は泣かされないとでも思召してか[2]」というところでさあ。つまりあんたの主張では、それが子供の役だということは、一般に法として認められているという

のでしょう。しかしぼくは、その反対だと言いたい。老人は二倍も子供なのだし、またかれらが誤りをおかすということは、子供の場合よりも許しがたい点が多いから、それだけ泣かされるのは、若い者より老人の方が至当なのです。

ストレプシアデス　しかしどこへ行ったって、父親がそんな目にあうことを認めるような法律はないぞ。

ペイディピデス　それでも、そういう法律は、それを定めた人間が最初にいたわけじゃないですか。あんたやぼくと同じような人間がね。そして昔の人間を、弁論で説得するようにしたんじゃないですか。そんならぼくだって、これから先、息子に有利な新しい法律を、あらためて制定して、親父をなぐり返せというようにすることだって、同様に許されていいんじゃないですか。ただし、こういう新しい法律がきまる前に、ぼくたちがなぐられた分は、勘弁することにして、何も要求せずに、帳消しにしてやりますがね。それにまた、よく見てごらんなさいよ、そこらにいる鶏だって、ほかの動物だって、父親に仕返しをしてますぜ。しかも、あいつらとぼくたちの違いは、動物は法案を出して、投票を求めたりしないというだけのことで、それ以外に何がありますかい。

ストレプシアデス　そんなに鶏の真似がいいんなら、いったいどうして糞を食べたり、とまり木の上に眠ったりするところまで行かないのだ。

ペイディピデス　いや、それは同一律にはいかないんです。そう簡単じゃあない。ソクラテス先生のお考えも、そういうこっちゃあないでしょう。

ストレプシアデス　そらみろ。だから、なぐるなんてことは止めにしろ。そうでないと、いつか自分で悔むことになるぞ。

ペイディピデス　また、どうして。

ストレプシアデス　お前をなぐることは、当然おれに許されている代りに、お前も自分の息子が出来たら、息子をなぐってもいいことになるからだ。

ペイディピデス　しかし出来なかったら、ぼくは全くの泣き損で、あんたは大笑いに笑って、死んで行ってしまうでしょう。

ストレプシアデス　〔見物席の方に向って〕どうやら、わしには、同年輩の皆の衆、これの言うことは正しいように思われる。そして妥当な点は、かれら若い者に譲る方がいいと、わたしは思う。つまり、わしらの行ないが正しくない場合は、泣かされても仕方がないということになる。

ペイディピデス　ところで、もう一つ考えがあるんですが、これも検討してみてください。

ストレプシアデス　もうたくさんだよ。今度はおれの生命がもたないだろうからな。

ペイディピデス　いや、それよりも、今があったような目にあっても、たぶんあまりもう苦にしなくなるでしょう、きっと。

ストレプシアデス　いったい、どうしてだね。だって、そこんところから、いったい何のいいことを、おれのためにしてくれることになるのか、知りたいもんだ。

ペイディピデス　あんただけでなく、おふくろもなぐることにしようというんです。

ストレプシアデス　何を言うのか。何を言うのか、お前は、それじゃあ前より悪いのが、もう一つ新たに加わるだけじゃあないか。

ペイディピデス　でも、その悪い立場の議論を引き受けて、母親をなぐることの正当性を論ずることで、ぼくがあなたを負かすとしたら、どうです。

ストレプシアデス　どうもこうもあるもんか。
　きまってらあ、
　そんなことをすれば、お前は死刑、
　ソクラテスもいっしょに
　罪人棄場へ投げ棄てられる
　邪悪の主張もろともに。

さあ、雲の皆さん、わしがこんな目にあったのは、あんた方のせいだ。万事わしのことはあんた方におあずけしたのがもとだ。

コロス　いや、むしろそれは、お前が自分で自分に招いたことなのだ。自分で横道にそれて、よからぬことを企んだからだ。

ストレプシアデス　そんなら、なぜあの時にそれをわしに言ってくれなかったのだ。かえって田舎者の年寄りを、あんた方はそそのかしたりして。

コロス　われらはいつもこうするのだ、誰かがよからぬことに夢中になっていると知った時にはね。最後にはその者を災悪のうちに投じ、神神を恐れることを思い知らせてやるのだ。

ストレプシアデス　ああ、それは痛い言葉だ、雲の皆さん、しかし言われてることは正しいことだ。わしは借りた金をごまかそうなどとすべきではなかったからだ。今はとにかく、こうなったからには、これ、わしの大切な息子よ、お前はわしといっしょに来て、あのけしからんカイレポンやソクラテスをやっつけてしまってくれ。お前もわしも奴らに騙(だま)されかけたんだからな。

ペイディピデス　でも、ぼくは先生方に危害を加えたりするつもりはありませんね。

ストレプシアデス　よし、よし、それなら父親の権威を守りたもうゼウスさまを敬うようにしろよ。

ペイディピデス　へえ、父親の権威を守るゼウスですかい。何という旧弊なんです。だって、ゼウスなんてものが、いったいあるんですか。

ストレプシアデス　あるとも。

ペイディピデス　ありゃあしませんよ。あるもんですか。ディーノス（渦巻）が、ゼウスを追い出して、いまは支配しているんですからね。

ストレプシアデス　いや、追い出されはしなかったんだ。それだのにおれは、〔ソクラテスの家の前におかれている渦巻と同名の土器（ディーノス）を指して〕このディーノスのせいで、そんなことを考えていたのだ。ああ、情けないことだ、あの時は、これ、貴様みたいな土の焼物までも、神さまだと思いこんだのだからなあ。

ペイディピデス　まあ、そこで自分だけの気違い沙汰、おしゃべりをしていたらいいでしょう。

〔土器との応待をストレプシアデスにまかせて、退場する〕

ストレプシアデス　おお、そうだ、気違い沙汰だ。今にして思えば、おれは本当に気が狂っていたのだ。ソクラテスのせいで、神々さまをお払い箱にしたのだからな。

〔今度は自分の家の前に置かれていたヘルメスの像に向って〕

何はともあれ、大事なヘルメスさま、どうかわたしに腹を立てて、この上ひどい目にあわせたりしないでください。わたしの気違い沙汰は、空論を聞かされたおかげなのですから、どうか大目に見てください。そしてわたしの相談相手になっておくんなさい。奴らを告発してやりましょうか。それとも何かお考えがありましょうか。

〔ヘルメス像の口許に耳を寄せて〕

ふむ、なるほど、ごもっともで、裁判沙汰はならぬという仰せ、それよりは大急ぎで、あの空論家どもの家に火をかけるのですかい。

〔家のなかから召使を呼び出す〕

おおい、クサンティアス、ここへ出て来てくれ、梯子(はしご)をもってな。それから鶴嘴(つるはし)ももって来るんだ。

〔召使登場〕

さあ、今度は思案所の上へ登って、屋根を掘り返せ、それが主人への忠義というものだ。そして奴らの上へ家がひっくり返って落ちるようにするのだ。それから誰かに、おれのところへ火のついた松明(たいまつ)をもって来させてくれ。おれだって奴らの誰でもいいから、今日こそ勘定を払わせてやるぞ。いくらほらを吹いたって駄目だ。

弟子A　〔家から飛び出して来て〕うああ、大変だ。

ストレプシアデス　〔屋根に登って〕さあ、松明よ、頼んだぞ、うんと炎を上げるのだ。

弟子A　こ奴、何をする。

ストレプシアデス　何をするって、知れたことよ。この家の屋根と繊細

の論理をとり交わしているのさ。

弟子B　これはひどい。誰だ、われわれの家に火をつけている奴は。

ストレプシアデス　手前らに上衣を盗まれたお方だ。

弟子C　人殺し、人殺し。

ストレプシアデス　そうさ、それこそおれの望みだ、もしもこの鶴嘴がおれの期待を裏切るとか、あるいはおれの方が一足先に、屋根から落っこって、首の骨を折るとかするようなことがなければ、な。

〔ソクラテス家から顔を出す〕

ソクラテス　これ、そこな奴、いったい何をしておるのだ。屋根の上へあがったりして。

ストレプシアデス　えへん、これなん、空気(アエール)をふみ、思いを太陽のまわりに馳せているところじゃ[1]。

〔ソクラテスも間もなく家から飛び出して来る〕

ソクラテス　ああ、これはたまらん、息がつまる。

カイレポン　わたしは、お助けください、焼け死にそうです。

ストレプシアデス　それなら、どんな気がして神々に非礼をはたらき、月の御座(みざ)を窺うようなことをお前さんたちはしたのだ。

ヘルメス　〔ストレプシアデスに〕[2]追いかけろ、ぶつけてやれ、打ってやれ、わけは山ほどあるが、神々に仇をしたというのが、第一の罪だと知れ。

コロス　さあ、ご順に外へ。今日のわたしたちの歌舞も、これでめでたし、めでたし。

訳　註

九一(1)　あるいは馬とする解釈もある。

九五(1)　鉄の銭はあまり用いられず、一般に通用しない。スパルタやビュザンティオンが鉄銭を用いた例外地。

(2)　テーバイの王アタマスは、先妻ネペレ（雲）の子を後妻のすすめで、生贄(いけにえ)にしようとするが、かえって自分が頭飾りをつけて、犠牲の座につかせられ、ヘラクレスのために辛うじて救われる。

(3)　野良仕事にかぶって働く帽子。

九六(1)　マイオティスは今日のアゾフ海のことと見られる。ミマスはイオニアの山、エリュトライ半島を南北に走り、スミュルナ、クラゾメナイ、サモス、キオスなどから、雄大の景観が望見された。

九七(1)　鰈やつぐみはぜいたくな食物の代表的なものと考えられていた。

(2)　ソクラテスの問答法、あるいは帰納的方法を思い出させるもの。

九九(1)　物質の渦巻運動から宇宙の成立を説明するのは、アナクサゴラスの学説以来一般化されてきたものと考えられる。ストレプシアデスの理解は、全くの一知半解で、見当違いのものであることが、劇の最後において暴露される。

(2)　ディアシアは三月頃行なわれるゼウスの大祭。

一〇三(1)　他人を窃盗の罪で訴えて、その証拠がために家宅捜索をする時は、盗まれたと称する物品を持ちこんだりしないために、家宅捜索者は上衣を脱いで、家へ入る定めであったと言われる。

(2)　トロポニオスの洞窟は、神託をもって有名であるが、これの伺いを立てる者は、洞窟の中に住んでいる蛇をなだめるために、蜜パンを手にして中へ入ったと言われる。

(3)　『雲』の最初の上演において、一等賞二等賞などは、クラティノスとアメイプシアスに取られてしまった。

(4)　アリストパネスの処女作『宴の人々』を指す。一等賞であったかどうかは疑問であるが、内容は『雲』と同じような、新旧教育の対立を取り扱ったものと考えられる。この作は他人名義で上演されたらしい。

(5)　アイスキュロス『供養する女たち』一六四―二四五行参照。

一〇三(1) コルダクスは喜劇に特有の卑猥なおどり。正気ではおどれぬとされる。
(2) クレオンはペリクレス死後のアテナイ政界を動かした有力者で、主戦派として行動し、前四二五年のスパクテリア占領は、かれの勢力の絶頂をなすと考えられるが、アンピポリスの作戦に成功せず、戦死する。そしてかれの好敵手であったブラシダスの戦死がこれにつづき、ペロポンネソス戦争は一時休止する。前四二二年のことである。『雲』の最初の上演は前四二三年で、その死に先立つこと一年であるが、改訂版はその後であろうと想像される。
(3) ヒュペルボロスはクレオンの死後、やはり民主派の闘士となって活躍し、前四一七年に国外追放、前四一一年に暗殺された。
(4) エウポリスは前四四六年から前四一一年まで生き、『マリカ』は前四二一年に上演された。アリストパネスの『雲』改訂版は当然それ以後という勘定になる。
(5) プリュニコスも同時代の作家。アンドロメダの伝説をもじって、逆に怪物に食べられてしまう酔っぱらいの老婆を登場させたらしい。
(6) ヘルミッポスも同時代の作家。『女のパン売り』で、ヒュペルボロスの母親を笑いものにしたらしい。
(7) 『鰻』(散佚)のなかでアリストパネスは、戦争や闘争のごたごたで市民をなやますデマゴークを槍玉にあげ、水が清くては、何の獲物も得られないので、これを攪乱することばかり考えている鰻取りに比している。
一〇四(1) アテナイは古くは太陰暦を用いていたが、それでは一年が短くなるので、いろいろ不都合が生じ、ソロンの時代から改良が試みられていたが、調整がうまく行かずに、混乱が生じていたらしい。あるいはメトンの暦法改正のことが言われているかも知れない。
一〇六(1) ギリシア語では、..os 語尾の名詞は大部分男性名詞であるが、若干 os 語尾で女性という名詞がある。kardopos(捏桶)がその一例で、これを合理化のつもりで、女性名詞の多い ē もしくは ā 語尾に変えようというわけ。
(2) **Amynias** は **Amynia** に **s** を加えて、主格をつくっているが、呼格の時には **s** はつかないから、**Amynia** となる。**a** 語尾の名詞はしかし、女性名詞であるのが常例である。しかしちょうど os 語尾でも女性名詞があるように、**a** 語尾で男性の名詞が若干あるわけで、それに難くせをつけたわけ。実質的にも、アミュニアスは女性的な男性だという嘲笑が含められている。
一〇八(1) テッサリアの魔女が、特殊の秘法を用いて、月を天上から下へ引き下すということが一般に言われていた。プラトン『ゴルギアス』五一三A参照。
一一〇(1) ディアゴラスという者が、神に抗う者と非難されたが、かれの出身地がメロスであるため、ソクラテスも同類として、メロス者と呼ばれたのであろう。
一一一(1) ペリクレスが戦時に機密費として使用した金額について、詳しいことを言わずに、ただ「然るべき方面の費用に当てた」と言明したことを言う。
(2) ディアシアの祭については、九九ページ註(2)を見よ。
一一三(1) 正義(Dike)は、ヘシオドスの『仕事と日々』二五六—二六二行では、ゼウスの娘として、オリュンポスに住む神々から尊敬されていると語られている。
(2) ゼウスが父クロノスと世界の支配権を争った話は、ギリシア神話の常識である。
一一三(1) テレポスはヘラクレスの子、ミュシアがトロイアからの帰途にあったギリシア軍の侵入を受けた時、アキレウスと戦って負傷する。その傷を癒やすためにデルポイの神託にいう「傷つけた者が癒やすであろう」の謎を解いて、アキレウスの槍を探し、その錆によって傷を癒やしたと言われる。エウリピデスの劇は、その途中のテレポスを、乞食姿で登場させたのであろう。作品は今日に伝えられてはいない。
(2) パンデレオスは三百代言式の弁論家。エウリピデス劇の科白が、パンデレオス流の下等な法廷弁論の借物に過ぎないことを言うのであろう。
一一四(1) プリュニスはミテュレネ出身の音楽家で、パンアテナイアの音楽コンクールに一等賞を得たことがあると言う。高度の技巧を要求する難曲をつくったところから、いろいろの批判を受けたらしい。
(2) ケケイデスはディテュラムボス作家。旧式な同時代の作家の名を突然に出したのだとも解される。
(3) 「牛殺し」の儀式は、失史時代の名残りをとどめた旧式な犠牲の仕方で、この時代はもうすたっていたと考えられる。
(4) ペルシア戦争の時の有名なマラトンの戦い。保守派の人たちはサラミスの海戦よりも、マラトンの陸戦の意義を高く評価する。プラトン『法律』四

巻（七〇七c）参照。

一二六(1) ペレウスは後にアキレウスの父となる人物。ここで言われている話は、かれがアカストス王の家に身を寄せていた時、その妻ヒッポリュテから道ならぬ恋をしかけられたが、その誘惑に応じなかったことにかかる。この王妃は誘惑に失敗したので、逆にペレウスを夫の王にざん訴して、ペレウスにいやなことをされようとしたと言ったので、王はペレウスを捕えて、山中に何の武器もなく放置し、もし潔白なら、助かるはずだと言った。かれが野獣に襲われて危くなった時、神々はヘルメスを通じて、これに短剣を与えたので、これによって危機を脱したという話。ペレウスは後に女神テティスと結婚し、アキレウスの父となるが、かの女がアキレウスを不死身にしようとして火に入れるのを見て、これを妨げたところから、不和になって、夫婦別れする。

(2) 一〇三ページ註（3）を見よ。

一二八(1) 太陰暦では、毎月の晦日は三十日か、二十九日であるが、月齢は二十九日二分の一で、新月は晦日と重なる。つまり晦日のはじめには、月はなお欠けているが、同じ日の後の時刻では、月はまた満ち始めるわけで、そこから同一日が新旧日と呼ばれるようになった。そしてこの呼称は、太陰暦が用いられなくなっても、晦日に対して用いられた模様である。

一二九(1) プルタルコス『ソロン伝』二五章三節には、前註に言われた新旧日の呼称がソロンに始まるように言われている。

一三一(1) カルキノスに三人の息子があって、一人は悲劇作家で、他の二人は役者、そのかん高い声に特色があったらしい。借金取りのアミュニアスの大げさな叫び声に、この役者と作品を真似たのであろう。

(2) 前註カルキノスの息子の悲劇作家クセノクレスの作品にかけて言われる言葉。トレポレモスは、誤って叔父を殺す伝説の人。前記作品のなかで取り扱われていたと考えられる。

一三三(1) クリオス（羊）という名のレスリング選手が、オリンピックの競技で、立派な負け方をしたことを、シモニデスが歌った詩。

(2) 酒席で歌を歌う時には、天人花の枝などを手に取って歌う習慣である。

一三四(1) 別の古註によって、他の訳者とは違う解釈を試みた。

(2) エウリピデスの『アルケスティス』六九一行の文句をもじったもの。

一三七(1) 二二五行のソクラテスの台詞を今度はストレプシアデスがしっぺ返しする。

(2) この台詞は、ストレプシアデスが召使に言う言葉とも解される。ただ「第一の罪だと知れ」ということが召使への呼びかけに適当かどうか疑問なので、フォーマンの案に従ってみた。コロスに割り当てる案もあるが、雲のコロスが、ソクラテスに敵意を示す理由はないように思う。

蜂

登場人物

ソシアス
クサンティアス　奴隷
ブデリュクレオン
ピロクレオン
コロス　蜂形の老人の群
男の子
犬
相客の一人
パン焼の女
告訴人

〔ブデリュクレオンの家の前。夜明前の時刻。家は全体網で蔽われている。ブデリュクレオンが屋根の上で眠っている。二人の奴隷の対話で劇がはじまる〕

ソシアス　おいおい、運の悪いクサンティアスめ、いったいどうしたというんだ。

クサンティアス　夜番の役目を解消する法を研究しているのさ。

ソシアス　そんなことをした日には肋骨(あばらぼね)にとんだお見舞が来るぜ。おれたちが張番しているのが、どんな怪物か知らないのかい。

クサンティアス　知っているとも。だがちょっとの間でいいから眠って気を休めたいもんだな。

ソシアス　それじゃ思い切ってやって見るさ。おれにだってご同様、気持よい眠気が両の眼にやって来たからな。

クサンティアス　冗談じゃない。まさか気が狂ったか、それともコリュバンテス[1]になったんじゃあるまいね。

ソシアス　〔酒瓶を出して見せて〕そうじゃない。サバジオス[2]さまが寄こした眠りがおれを捉えているのさ。

クサンティアス　〔同じく酒瓶を見せながら〕お前もやはりサバジオスさまを持っているんだな。ちょうどいまおれさまのまぶたにもメディア人[3]の居眠りの軍勢が襲って来た。そしたら妙な夢を見た。全く妙な夢だ。

ソシアス　おれさまもご同様、いままで見たこともないような妙な夢を見た。だがお前のほうからまず話して見るがよい。

クサンティアス　すごく大きな鷲が中央市場に飛んで来て、銅の楯[4]を爪で引掴んで、空高くさらって行ったと見るとクレオニュモス[5]が楯を投げ出したという夢さ。

ソシアス　それじゃクレオニュモスは謎々とちっとも違わないじゃないか。

クサンティアス　どうして。

ソシアス　ある男が呑(のみ)仲間に尋ねるだろう。「[1]地上でも空中でも海中でも楯を投げ出す獣はなんだ」とね。

クサンティアス　ああ、これじゃどんな兇事に見舞われるか知れやしない、こんなに夢見が悪くっちゃ。

ソシアス　心配することはないさ。神々もご照覧あれ、ほんとうに何にも害はない話だ。

クサンティアス　だって人間が武器を投げ出すなんて縁起でもない。ま、しかし、今度はお前の番だ。

ソシアス　ところがおれの夢は大きな夢だよ。国家という船全体をひっくるめたほどの大事件さ。

クサンティアス　それじゃすぐさま話の竜骨（本筋）を話してくれ。

ソシアス　眠ったかと思うとね、プニュクスの岡に羊の群[2]がぎっしり集って会議を開いているのさ、杖を持って、短いマントを着てね。ところでこの羊どもに演説をやっている奴がある、食いしん坊で何にでも見境なしに飛びつく鯨[3]さ。そうおれには思われた。そいつは火傷をした豚のような声をしているのさ。

クサンティアス　こん畜生。

ソシアス　どうした。

クサンティアス　やめろやめろ、もうそのうえ言わないでくれ。お前の夢は腐った革の臭い[4]がぷんぷんするぜ。

ソシアス　そしたら今度はその汚ならしい鯨の奴が秤を手にして牛のロースを量(はか)っている。

クサンティアス　ああ何ということだ。あいつはおれさまたちの国[5]を（牛肉のように）細切(こまぎ)りにするつもりでいやがる。

ソシアス　そいつの側にはテオロス[6]が地面に坐っているように見えた。こいつは烏の頭を持ってやがる。そしたらアルキビアデス[7]がまわらぬ舌でおれに言うじゃねえか。「おい、見たかね。テオロスは太鼓頭の烏だぜ」とね。

クサンティアス　全くだ。アルキビアデスはうまい囈言(たわごと)を言ったもんだ。[8]

ソシアス　だがこれは悪い夢占じゃないだろうか。テオロスが烏になるというのは。

クサンティアス　どういたしまして、飛び切り上等だよ。

ソシアス　どうして。

クサンティアス　どうしてだって。あいつは人間であったのがとつぜん烏になった、その意味は一目瞭然察し[9]がつくじゃないか。あいつがおれたちから離れて、地獄に落ちるということさ。

ソシアス　それじゃおれは二オボロス払って、こんな素敵な夢占師をやとってやらなくっちゃなるまいな。

クサンティアス　さあ見物の皆さんに前口上としてまずほんの少し次のようなことをお話しして筋をお知らせ申しましょう。あまり大したことを私どもから期待されないように、またメガラの市(まち)[10]からくすねて来た（下品な）笑いをお求めにならないように。

私たちには籠から栗[11]を見物にまき散らす二人の奴隷も、ご馳走にありつき損ったヘラクレスも、また散々悪ふざけの矢面に立つエウリピデスも用意してありませんし、クレオンが悪運強く[12]（世の中に）照り映えても、私たちがまたもあいつを細切りにきざんでやるようなこともない。私たちのはごくちょっとした小さなお話で、意味もあり、しかもあなたがたにとってあまり微妙で（むずかしすぎる）ということもなく、下品な茶番よりは気がきいているというものです。

ほら、あそこに主人がいる、屋根の上で眠っている大きな男ですよ。主人は私ども二人に自分の親父を見張って、外へ出ないように、家の中に閉じ籠めておけと言いつけました。というのは、主人の親父が何とも妙な病気にかかっているからです。こいつはちょっと何の病か、誰にもわからず察しもつきますまい、私どもからきかねばね。嘘だと思うならあててごらんなさい。そこにいるプロナペスの息子さんのアミュニアス[13]さんはそれは骰子(さい)気違いだとおっしゃるが、とんだ囈言ですよ。

ソシアス　おやおや、自分の病気で他人を量っているんだな。

クサンティアス　いやいや、確かにこの病は「気違い」で終っている。ここにいるソシアスさんはデルキュロスさんにあいつは酒気違いだといっている。

ソシアス　どういたしまして。そいつは立派な紳士がたのかかられる病気ですよ。

クサンティアス　次にスカムボンのニコストラトスさんはあいつは供物気違いか、お客気違いだとおっしゃる。

ソシアス　ニコストラトスさん、とんでもない。お客気違いじゃありませんよ。ピロクセノス(1)という男は、こいつは色気違いですよ。

クサンティアス　無駄な囈言ばかりだ。わかりっこありませんや。知りたければ、さあ黙って黙って。私が主人の病気を教えてあげますから。

　この世に二人とないほどの裁判気違いで、この裁判が好きで好きで、裁判所のベンチの最前列に坐れないとなると、溜息をついてうなりだす。夜には少しも眠れない、とてもほんの一粒ほども。少しでも目を閉じるときがあれば、心は夜中夢のなかであそこ（裁判所）の水時計(2)のまわりを飛んでいる。あんまり投票の小石を持ち慣れているものだから、起きるときには指を三本(3)しっかりと合わせている、まるで新月の祭に香を焚くときのように。ほんとうですよ。門の扉に「恋しいピュリラムペスの息子デモス(4)」と書いてあるのを見たならば、やって来て、その横に「恋しい投票箱の投入口」と書いたものだ。夕方からときを告げる鶏でも、始末書(5)を取られている役人から金をもらって、自分をわざと遅く起したのだと言いはる始末だ。夕飯がすむかすまぬに靴だ靴だとどなりちらして、夜が明けるか明けないに、あそこ（裁判所）に行って、まるで陣笠貝のように柱にへばりついて眠っている。気むずかし屋だもんだから、誰に対しても（重罪の判決の印の）長い方の線(6)を引いて、蜜蜂か花蜂かなんぞのように、爪のなかに蠟をためて帰って来る。投票用の小石がなくなりはしないかと心配で、家のなかに浜辺（のように砂利）を蓄えて持っている。こんなぐあいに気が狂って、意見をされれば、なおのこと裁判をする。こんな男を私どもは見張っているのです。閂（かんぬき）をかけて、家から外に出ないように。

　というのは、息子のほうは親父の病気に困っているのです。はじめのうちは甘い言葉で意見して、短かマントを着たり、他に出たりしないように、説き伏せようとしたのだが、なかなかうんとは言わない。そこで親父を洗って潔めて見たが、さっぱりききめがなかった。次にはコリュバンテスにして見たところが、太鼓もろとも、新裁判所におどりこんで裁判をしてござる。こんなお呪（まじない）がみんなだめとなったとなると、今度は海を渡ってアイギナ島(7)に送って、とっつかまえて、夜中にアスクレピオス(8)さまのご神域に寝かしたものだ。ところがどうして、夜が明けるか明けないに裁判所のてすりの側に現れた。それからというものは、もう外へは出さないようにした。ところが溝や煙だしを通り抜けて外へかけ出した。そこで穴という穴に襤褸（ぼろ）をつめてふさいでしまったが、親父はまるでかけすのように壁にくさびをうちこんで外へ飛び出した。そこで今度は家全体に網を引きまわして、番をしている次第です。

　老人の名はピロクレオン（クレオンびいき）、いやほんとうですよ。それからあの息子の名前はブデリュクレオン（クレオンぎらい）、恐ろしく気位の高い、高慢ちきな男です。

ブデリュクレオン　おい、クサンティアスにソシアス。眠っているな。

クサンティアス　おやおや。

ソシアス　どうした。

クサンティアス　ブデリュクレオンが起きたよ。

ブデリュクレオン　誰か一人すぐここへ走って来い。親父が台所にはいってこそこそと鼠のように走りまわっている。流しの穴から抜け出さないように注意しろ。〔いま一人のほうに向って〕それからお前は扉に身体をつけて押しているんだ。

ソシアス　がってんだ。旦那。

ブデリュクレオン　こりゃ何ごとだ。どうして煙突ががたがた鳴るのだ。

おい、いったいお前は誰だ。

ピロクレオン　私は出て行く煙ですよ。

ブデリュクレオン　煙だって。さて何の木の煙か見たいものだね。

ピロクレオン　無花果(いちじく)のですよ。

ブデリュクレオン　全くこれは煙のなかでいちばんいがらっぽい奴だ。さあ、もとにもどったもどった。ふたはどこへ行った。ひっこんでしまえ。この木（の板）を頭の上においてやろう。これでよしと。今度は別の方法を考えるがよい。しかしおれは全くこの世に二人とないほどみじめな男だな。いまにおれは「煙の息子」[1]といわれるようになるだろう。

ソシアス　今度は扉を押していますよ。

ブデリュクレオン　そんならうんと強く押し返してやれ、力いっぱい勇敢に。そこへ行こう。錠前と閂に注意しろ。それから閂の栓[2]を噛み切らないように見張っているんだ。

ピロクレオン　何をするんだ、悪党め、わしを出して、裁判に行かしてくれ。ドラコンティデス[3]がうまうま無罪でのがれるじゃないか。

ブデリュクレオン　それがどうしたというのです。

ピロクレオン　ところが神様からおれが昔デルポイでご神託をうけたときに、誰かおれの手をのがれる者のあったときには、このおれがしぼんでしまうとお告げがあったのだ。[4]

ブデリュクレオン　おお、アポロンさま、厄よけの神様、何というご神託だ。

ピロクレオン　さあ、頼むから出してくれ。でなきゃおれは破裂してしまうぞ。

ブデリュクレオン　否々、ポセイドン[5]の御名にかけて、ピロクレオン、決して決して。

ピロクレオン　それじゃ歯で網を噛み破ってやろう。

ブデリュクレオン　ところがどっこい。あなたには歯がありはしませんよ。

ピロクレオン　何たる情けないことだ。どうしてきさまを殺してくれよう。どうして。刀をよこせ、早く早く。でなきゃ判決用の木板を。

ブデリュクレオン　こいつはとんでもない悪事をたくらんでいるな。

ピロクレオン　そうじゃない、誓ってそうじゃない。おれは驢馬(ろば)[6]をひいて行って、駄籃といっしょに売りたいんだよ。今日は新月の日だからね。

ブデリュクレオン　それがどうしたというんです。私にだって売れないわけじゃなし。

ピロクレオン　いや、おれのようにうまくは行かないよ。

ブデリュクレオン　どういたしまして、私の方が上手ですよ。驢馬を引き出せ。

クサンティアス　あなたが外に出してくださるように何て甘い餌でつるんだろう。何というずるさだ。

ブデリュクレオン　しかし何にもつれなかったさ、こんなことでは。おれはちゃんとからくりを見破ったからね。だがおれは内にはいって驢馬を引き出して来よう。老人が二度とふたたび身体をねじまげて、変なまねをしないようにな。

〔驢馬をつれて家のなかから出て来る〕驢馬よ、どうして泣いているのだ。今日売られるからかね。さあ、とっとと歩いた。どうして溜息をつくんだ、別にオデュッセウス[7]を運んでもいないのに。

クサンティアス　これは驚いた。誰だか知らないが腹の下にぶら下っているこんな奴を運んでいますよ。

ブデリュクレオン　どんな奴だ。どれどれ。

クサンティアス　こいつです。

ブデリュクレオン　こりゃいったい何だ。人間よ、お前は誰だ。

ピロクレオン　神様に誓って、「誰でもない」です。

ブデリュクレオン　「誰でもない」だと。どこの男だ。

ピロクレオン　アポドラシヒッピデス（逃げ出した馬の意）の息子でイタカ[8]の者です。

ブデリュクレオン　神様に誓って、「誰でもない」お前はろくなめに会えないぞ。そいつをすぐさま引っぱり出せ。ごくつぶしめ、何というところ[1]にはいこんでいるのだ。そっくりそのままあの妙な声を出す驢馬の子供だ。

ピロクレオン　おれをそっとしておかぬと、格闘になるぞ。（一九〇）

ブデリュクレオン　何のために格闘するのですか。

ピロクレオン　驢馬の蔭[2]のためにさ。

ブデリュクレオン　全く悪い[3]な。しかも向う見ずと来ている。

ピロクレオン　おれが悪いって。それじゃ知らないんだな、おれがとびきりの上物だということを。だがこの老裁判役の下腹の肉を食べてごろうじろってんだ。

ブデリュクレオン　驢馬もろとも家のなかへひっこんでしまえ。

ピロクレオン　裁判のご同役のかたがた、クレオン殿、助けてくだされ。

ブデリュクレオン　しまった扉のなかでどうなったらいいでしょう。扉に石をたくさんつみ重ねて、閂にはまた栓をして横木をその上に置いて、大臼を大急ぎで引っぱりころがして来い。

ソシアス　ああ、何という厄日だ。いったいどこからこんな土くれが頭の上に落ちて来やがったんだろう。（二〇三）

クサンティアス　たぶん鼠が上の方から落したのさ。

ソシアス　鼠だって。どうしてどうして、屋根裏にすくって、瓦の下にもぐり込んでござるどこかの裁判役殿だよ。

ブデリュクレオン　情けないことになったぞ。あいつは雀に早変りだ。いまに飛び出すだろう。手投網はどこだどこだ。シイ、シイ、シイ、ゼウスの大神に誓って、こんな親父よりはスキオネ[4]の市を包囲しているほうがましだ。（二一〇）

ソシアス　さあ、これであいつを嚇して追っぱらったし、もうこっそりとおれたちの知らぬ間に逃げ出すこともできないから、ここいらでほんのほんのちょっぴり眠らない法はない。

ブデリュクレオン　いやいや、悪党め、そうは行かないぞ、少したてば仲間の裁判役どもが親父を誘いにやって来る。

ソシアス　何とおっしゃる。まだ薄暗いほんの夜明けですぜ。

ブデリュクレオン　全くだ。それじゃあいつらは今日は寝坊をしたのだ。いつもは真夜中がすぎたと思う[5]と誘いに来る、提灯を持って、古くさいお気に入りのプリュニコスのシドンの歌を唄いながら、こいつで親父を呼び出すという寸法だよ。

ソシアス　それじゃ仕方がなければ、一つあいつらに石を投げつけてやろうじゃありませんか。（二二二）

ブデリュクレオン　何だって、悪党め、あの老いぼれどもを怒らした日には、まるで胡蜂の巣をつつくも同然だ。腰には恐ろしく尖った針を持っていて、それでつつく、そのうえ大きな声で喚き立て、飛び跳ねたり擲りかかったりする。まるでぱちぱちとはねる火の子さ。

ソシアス　心配はご無用ですよ。石さえあれば、大勢の裁判役どもの蜂の巣を散々に打ち砕いて見せますよ。

〔全部が開幕の位置に退いている間に、コロス登場[6]〕

コロス　威勢よく進めや進め。コミアス遅いじゃないか。全く昔はこうではなかったのだが。（強いことは）まるで犬の革紐のようだった。ところがいまではカリナデスの方がお前よりはさっさと歩ける。コンテュレス[7]のストリュモドロス、裁判役の華、エウエルギデスはどこにいるのだ。それからプリュアのカベスは。ああ、ああ情けないが、残っている仲間はこれだけだ。あの若かりし日を思い出すなあ。そのころお前とおれとがビュザンティオン[8]でいっしょに夜の歩哨に立ったとき、夜中に歩きまわって、パン屋の捏板をそっと盗み、そいつを割って（火を起し）、はこべを料理したものだ。（二三九）

急げ急げ皆の衆、今日はラケス[9]の番だ。あいつはしこたま金を持っているという評判だ。昨日はわしらの保護者のクレオン殿が充分時間[10]に間に合うように、あいつに対するにがい憤りの兵糧を三日分用意して、あいつの不正をこらしめに、やって来るように命令なすったのだ。

　だが、仲間たち、夜が明けない前に、急いで行こう。提灯でくまなく照らして、気をつけよう、石ころが路にあって、怪我なんかしないように。

子供　お父さん、お父さん、泥がありますよ。気をつけて。

コロス　地面から木片を拾って、（芯を出して）提灯の火を明るくしろ。

子供　いいや。それよりほらこのように、自分の指で芯を引き出した方がいいですよ。

コロス　［子供の頭に一つ食らわせて］芯を指で押し出すとは何ということだ。しかもこの油の少ないときに。馬鹿者め。高い油を買わなくっちゃならないときでも、お前は平気だからな。

子供　なんだい、もういちど拳固で打って僕を叱ってごらん、提灯を消して家へ帰ってやるから。そしたら真暗ななかで提灯がなくなって、まるで鷓鴣のように泥のなかでじたばたするから。

コロス　わしはなお前なんかよりずっと偉い人をこらしつけているんだぞ。こいつはいけない。汚物のなかに踏み込んでしまったようだぞ。しかもいちばん長くもっても四日のうちには、お天道さまが雨を降らすにきまっている。芯に丁字頭がうんとついているんだから。こんなときにはきまって雨が無暗と降るものだ。だが早く熟さない果実の樹には雨が降ってくれないと困るし、北風も吹いてくれなければ困る。

　だがこの家のご同役の判官殿はいったいどうしたというのだろう。わしらのところへ現れないとは。いままでにぐずぐずしていた例はなかったのだが。それどころかいつでもまっさきに立って、プリュニコスの歌を唱った。あいつは歌が大好きだからな。だが皆の衆、ここに立って、歌を唱ってあいつを呼び出そうじゃないか。わしの歌を聞いて、嬉しくなって戸口に這い出して来るかどうか。

コロス　あの年寄が戸の前に出て来ない、そのうえ何の返事もないとはどうしたことだ。

　あいつは靴を失くしたのか、
それとも（大事な）足指を
暗がりの中でぶっつけて
年寄なもんだから、足の首をば腫れ上らせたのか。
それとも大方腰骨が痛んでたまらないのだろう。
ほんとにあいつは仲間の中でいちばんきつい奴なのさ。
あいつ一人がうんと言わない。
誰が憐み乞いに来ようと、
こんな具合に頭を下げて、
「石でも料理した方がましだ」と。
おおかた昨日の
男の所為か、そいつはぬけぬけ
人をだまして、おれさまたちの手をすりぬけた、
アテナイびいきだ、サモスの騒ぎ[1]は、
自分が最初に報告したといい張って。
これですっかり気を悪くして、
熱をば出して寝ているのだろう。
あいつはそんな男だからな。
だがしかし、さあ、起きて来い、そしてまた
そんなにくよくよすることも、気にかけるのもやめたがよい。
トラキア事件[2]の裏切者の
金持ち野郎が網にかかった。
そいつを、さあさあ、とっちめろ。
進め、子供よ、進めや進め。

子供　お父さん、何か私がねだったら
　うんと言ってくれますか。

コロス　やるともやるとも、可愛い息子、
　だがいったい何が買って欲しいのか、

いってごらん。きっと
おはじき[1]に違いない。
子供　ううん、干無花果[2]だよ、お父ちゃん、
うまいんだもの。
コロス　とんでもない、
とんでもない。首でもくくって死んでしまえ。
子供　それじゃいいや。もう送って行ってやらないから。
コロス　こんな僅かの日給で、わしは
三人分のパンとたきぎとおかずとを
買わねばならない。
しかもお前は無花果をねだるのだ。
子供　だがお父さん、
もしもアルコン[3]が今日は
裁判をしなかったら、どこから朝飯が
買えますか。それとも
「聖きヘレーの瀬戸[4]」より
他によい知恵がありますか。プュー、
コロス　ああ情けない。
まったくどうして飯にありつけるか、
さっぱりわしには見当がつかない。
子供　「お気の毒な母上[5]、どうしてこの私を生んでくださったのです」
コロス　お前を養うために、わしに苦労をかけるようにだ。
子供　私はお前を運んでいる。袋よ。
「全く無益な飾物にすぎませんでした」
「おお、
私どもには嘆きあるのみだ」
ピロクレオン　〔上の方の窓から〕友だちよ。わしは前からみんなの歌
声を
壁の隙間から漏れきいて、
身も心も憔れる思いだ。
だがわしは唱うことさえできないわい。
何としたらばよかろうか。
こいつらが見張っている。
前からみんなと行きたいのだが。
審判瓶のあるところへ、
何か悪さをしてやろうと。
鳴り渡る雷[6]の大神、ゼウスさま、
すぐにもわしを煙にしてくだされ。
それでなければプロクセニデス[7]に
それでなければセロスの息子[8]に、
あのにせ物の木葡萄[9]に。
わしの望みをかなえてくだされ、大神様、
わしの悩みを憐みたまえ。
それともすぐさま火花（ひばな）する
[10]稲妻でもって焼いてくれ、
それからわしを持ち上げて、一口ぷっと吹いてから、
あつくてお酢のよくきいた塩のソースにほうり込め。
でなければ、このわしを、そのうえで、
投票を数える石にしろ。
コロス　このようにお前の邪魔をして、
家のなかに閉じ込める男は誰だ。いってくれ、
聞き手はお前の味方だよ。
ピロクレオン　わしの息子だ。だがあまり大きな声は出さないでくれ。
そいつは皆の衆のすぐ前で寝ている。もっと小さい声で頼む。

コロス　何のためにお前をこんな目に合わせるのだろうな、ごくつぶしめ。いったいどんなわけなのだ。

ピロクレオン　皆の衆、あいつはわしに裁判することも、いじめることも許さぬのだ。わしに気楽にご馳走を食って暮せと言うのだが、わしはそんなことはまっぴらだ。(三四一)

コロス　この悪党のデマゴーグクレオン[1]
とんでもないことをしでかしやがった。
お前がちょっと軍艦[2]について
ほんとうのことをしゃべったばかりに。
もしもほんとうに一味でなければ、こんなことをば
あいつはまさか言うことなんか怖くてできまい。

だがもうそろそろあいつらに知られずに、ここに下りて来る新名案を考え出さねばならぬ時刻だ。

ピロクレオン　どうするかな、考え出してくれ。わしはどんなことでもするから。投票札を手に持って、裁判所の掲示板をぐるぐる見てまわりたくって、むずむずしているんだ。(三四九)

コロス　どこかに穴がないものかね。そいつをお前がほじくって、まるであの知恵者オデュッセウスのように襤褸(ぼろ)[3]で身をやつして抜け出る穴が。

ピロクレオン　みんな塞がっている。蟻のはいでる隙間もない。何か他の名案を頼む。穴[4]はひとりで開きはしないよ。

コロス　覚えているかい。陣中で、ほら、焼肉の串を盗んで、すばやく壁を飛び下りたことを。ナクソス[5]を陥落させたときだ。

ピロクレオン　覚えているとも。だがそれがどうしたというのだ。これとあれとは全く別物だ。
あのときはわしも若かったし、盗みもできた。身体が思うように動いた。
しかもそのうえ見張りはいなくて、怖い者なしに
逃げられた。ところが今度は
者どもが鎧甲(よろいかぶと)に身をかためて
出口入口かためている。
そのうち二人のこいつらは棒串手にして
門口で、肉を盗んだ猫のように、
わしを見張っているのだよ。(三六〇)

コロス　だがしかし早くなんとかいまの間に
工夫をしなくちゃかなわない。
可愛い可愛い蜜蜂さん。東が白んで来たからね。

ピロクレオン　それじゃ網を噛み切るのがいちばんらしい。ディクテュンナ[6]、猟網の女神様、網を破ることを許してくだされ。

コロス　自由を得るために努力している男の立派な言葉だ。さあ顎をつかった、つかった。(三七〇)

ピロクレオン　そら、噛み破ってしまった。だが大声は禁物だ、ブデュクレオンが気づかぬように注意しなくっちゃ。

コロス　怖がることはちっともない。ちっともないよ。
あいつがほんのちょっとでも何かしゃべれば、
わしはあいつが傷心して
命(いのち)のために逃げまわり
両の女神の掟[7]をば
馬鹿にせぬようにしてやろう。
さあ窓に縄を結びつけて、そいつで身体をしっかと縛って
下ろすんだ。心をディオペイテス[8]で一杯にして。(三八〇)

ピロクレオン　だがね、こいつら二人が気がついて、魚のようにわしを釣り上げ、家のなかに引き込もうとしたらば、どうするね、一つ教えて貰いたい。

コロス　みんなで樫の木のような強毅な心を呼び起して、邪魔のできないように防いでやる。ほんとうにそうするよ。

ピロクレオン　それじゃお前たちを信用して、やって見よう。だがもしものことがあれば、骨を拾って涙を流して、裁判所のてすりの下に埋めてくれ。きっと頼むぞ。

コロス　大丈夫だよ。怖がることはない。さあ勇気を奮い起して、先祖の神々にお祈りして、思い切って下りるんだ。（三八八）

ピロクレオン　おおリュコス[1]さま、隣の氏神さま、あなたは私と同じものが、被告の涙と嘆きの声がいつでもお好きだ。これを聞きにわざわざここへ来て住まわれた。氏神のなかであなただけは嘆いている者の側に座を占めることを望まれる。あなたの仲間の隣人を憐んで助けてくだされ。そしたらわしは二度とふたたびお宮の柵に向って小用を足したり、屁をひったりしませんから。（三九四）

ブデリュクレオン　これこれ起きろ。

ソシアス　何ごとですか。

ブデリュクレオン　なんだかまわりで人声がする。

ソシアス　さては老人がそっと抜け出たか。

ブデリュクレオン　そうじゃない。縄で身体を縛って、下りようとしているんだ。

ソシアス　こん畜生、何をしているんだ。さあ下りて来ないか。

ブデリュクレオン　すぐさまも一つの方からよじ登って、木の枝でひっぱたくんだ。豊年祝の花環[2]でぶたれて、奴はさっさと逆もどりするだろう。

ピロクレオン　助けてくれ。今年の当番の裁判役がた。スミキュティオン、ティシアデス、クレモンにペレデイプノス、わしが中に連れこまれぬうちに、いまだいまだ、助けてくれ。

コロス　どうしてあの憤りを惹き起すのをためらうのか、
　わしらの蜂の巣をつついたときに起るあの憤りを。
　いまだ、いまだ、
こらしめ道具の鋭い針が、
怒りの針が出て来た、延びた。
この上着を持っていてくれ、子供たち。それから大急ぎで
走って行って、大声で、クレオン殿にこのことを知らせろ。
そしてすぐさま来るように、
市を憎んでその末は
死罪になるような男にむかって。
それというのも裁判なんかは
いらないものだとこいつは言うのだ。（四一〇）

ブデリュクレオン　皆さんがた、まあわけを聞いてください。大声で喚くのはよして。

コロス　駄目だよ天にとどくほど大声で叫んでやる。

ブデリュクレオン　だがおれはこいつを放してはやらないぞ。

コロス　これは全く怖いことじゃないか。まさしく専制政治だ。
おい市の衆、神様の憎まれ者のテオロス、
それから誰だってかまわない、皆さんがたの親分[3]の追従者（そうは
　思いませんか）。

クサンティアス　桑原桑原、こいつらは針を持っていますぜ、ねえ、旦那。（四二〇）

ブデリュクレオン　そいつでもってこいつらはゴルギアスの息子のピリッポス[4]を死刑にしたのだ。

コロス　いまにお前も殺してやるぞ。さあみんな、こっちの方に向きを変えて、針を出して、あいつに襲いかかれ、がっちりと組んで、陣立よく、憤りに満ちて、あいつがどんな蜂の巣をつついたか思い知らせてやる。

クサンティアス　こんな奴らと闘うんじゃ、これはなかなかおおごとだぞ。あの針を見ただけでぞっとしてきた。

コロス　さあ、その男を放せ、でなきゃきっと
　亀の甲羅を羨むようになるぞ。

ピロクレオン　エイヤ、エイヤ、ご同役がた、毅い心の胡蜂ども、〔二手に別れて〕一組はブンブン怒って、こいつらの尻べたに突撃しろ、一組は輪になって両の眼や指を刺してやれ、

ブデリュクレオン　おい、ミダス、プリュクス[1]、それからマスュンティアス、助けに来てくれ。こいつをつかまえていて、誰にも渡さぬようにしろ。でなきゃ、頑丈な足枷をして、飯もやらないぞ。どうやらパチパチと燃える音が聞えるな。何だかおれにはよくわかっているぞ。たくさんの無花果の葉[2]だ。

コロス　その男を放さなければ、何だか知らないがお前の身体に突き刺さるぞ。

ピロクレオン　ケクロップス[3]王様、先祖の御霊、足の先までも竜の形のドラコンティデスさま、わしがこんな野蕃人どもに手玉にとられているのを黙って見ておられるのか。こいつらは昔は、升で量る[4]ほど涙をこぼすようにこらしめてやった奴らだ。

コロス　ほんとうに年をとるといろんな不都合が起って来る。てきめんだ。ここでもこいつら二人は昔の主人を力ずくでとっつかまえて、昔買って貰った革の上着や胴着、それから鍔なしの帽子のことなんかすっかり忘れてしまっている。冬には寒くないように足のことまで面倒を見て貰ったのだ。昔の靴に対しても恥を知らねばならないのに、こいつらの眼にはそんなものは薬にしたくてもありゃしない。

ピロクレオン　どうしてもわしを放さないのか。いまいましい出来損いめ。葡萄の総を盗んでいるところをわしが見つけて、オリーヴの樹の下へ引っぱってうんと男らしく皮がむけるほどぶんなぐってやった、それでみんなが羨しがったのを忘れたのか。だがお前は恩知らずだ。さあ、こん畜生、こん畜生、放せ。せがれが飛び出して来ないうちに。

コロス　だがお前らはいまにこの悪業の罰をうけるぞ。それも遠からずだ。怒りっぽい真正直な、芥子のようにぴりぴりする男のご機嫌がどんなものか思い知らしてやる。

ブデリュクレオン　おい、クサンティアス、家から蜂どもをなぐり散らしてしまえ。

クサンティアス　合点です。

ブデリュクレオン　〔ソシアスに〕それから貴様はうんと煙を吹いていぶすのだ。シュウ、シュウ。地獄へ落ちろ。さっさと失せろ。棒でなぐれ。それから貴様はセラルティオスの息子のアイスキネス[5]を混ぜ合わせて煙を吹きかけろ。

ソシアス　やっとのことで追っぱらうことができそうだぞ。

ブデリュクレオン　どうしてどうして、そうたやすくは追っぱらえなかったところだ、ピロクレスの[6]歌をあいつらが食っていた日には。

コロス　貧乏人にはよくわかる、
　わかるじゃないか。専制政治が
こっそりと、こっそりとやって来た、
悪党め、長髪のアミュニアス[7]め
もしもお前がこの市が定めた法を
わしらから奪ってしまうようならば、
何の気のきいたいいわけも
口実もなしに
お前が唯一人で独裁者となって。

ブデリュクレオン　つかみ合ったり、きいきい声を立てたりしないで、お互に談判して仲直りする法がないものかな。

コロス　お前と談判。[8]民衆の敵で独裁政治の恋人め、
そのうえブラシダスの内通者で、スパルタ風に毛の縁取りの着物を
　着て、
鬚を刈らずに生やしている奴め。

ブデリュクレオン　ゼウスの神様、こんなしようのない奴らと毎日戦っているよりは、親父のことからさっぱりと手をひいた方がよほどましだ。

コロス　何だと、まだ序の口にも入っていないぞ。[9]これはちょっとわし

どもの意味深長で気のきいた表現の見本さ。いまのところは心配しないでおさまっているがいい。だがいまに見ろ、検事が同じ論告を船底の溜水のように汲み出して、貴様の頭からあびせかけ、陰謀の一味だと論告するから。

ブデリュクレオン　いったいあなたたちは私にくっついて離れないつもりなのか。それとも一日中なぐったりなぐられたりしているつもりなんですか。

コロス　そうだとも、命のあるかぎり決してやめないぞ。
　お前はわしどもに専制政治をしくつもりだからな。

ブデリュクレオン　あなたがたは何でもかまわず専制政治で候の謀叛で候のとばかり言っている。大小かまわず何でもかでも。私はそんな名をこの五十年というものは聞いたこともなかったのだが、いまは塩鮭よりもずっと安物と来ている。だもんだから、その名は市場にごろごろしている始末だ。
　鱸[1]が買いたくて、鯡が欲しくないときには、近くの鯡を売っている男はすぐさま「こいつは専制政治が目的で買物をしているようだぞ」と言う。またもしアンチョヴィの味付けに韮を別に註文すれば、八百屋の女は横目でじろりと眺めて、「おやおや、韮が欲しいんだって、この人は。おまえさんは専制政治をもくろんでいるのかい、それともアテナイの市がおまえさんにうまい物を食わせるように税金でも払うと思ってでもいるのか聞かせて欲しいもんだね」とその男に言うのだ。

クサンティアス　そう言えば私も、昨日のお昼ごろ、ちゃぶ屋に入って行ったところが、そこにいる女郎[2]が、私が馬に乗ってごらんと言ったものだから怒って、ヒッピアスの圧政をまたよりもどす気だねと言いましたぜ。

ブデリュクレオン　そうさ、こんなことが奴らには天来の妙音と聞えるのだ。そしておれがいま親父に朝早くからうろうろして、牽強附会の罪をならす、裁判気違いの憐れな生活から離れて、モリュコス[3]のように立派な暮しをさせようと思っているというので、おれは陰謀の一味だとか、圧政を企てているとか言われるのだ。

ピロクレオン　そうだとも、ほんとうだ。わしは鳥の乳[4]とだっていまお前がわしから奪おうとしている暮しとは取り換えないぞ。がんぎえび[5]だの鰻だの欲しくもない。それよりも小さい可愛い、シチュウ鍋のなかで蒸焼にした訴訟の方がよっぽどうまいというものだ。

ブデリュクレオン　ほんとうにあなたはそんな物が好きでしたよ。だがちょっと舌を休めて、私の言うことを聞いてくだされば、すべてあなたが間違っているということを教えてあげられると思います。

ピロクレオン　裁判役になってることが間違いだって。

ブデリュクレオン　笑い物になっているのに気づかないのですか。あなたが犬のように匍いつくばって尊敬するだけでなく、知らずにそいつらの奴隷になっている人々の。

ピロクレオン　奴隷呼ばわりはやめろ、すべてのものの支配者たるこのわしを。

ブデリュクレオン　とんでもない。間違いだ。あなたは支配していると勘違いして、実は頤でつかわれている。さあそれじゃお父さん、ギリシアの土地の粒択りの果実を享受しているというあなたがどんな利益を得ているか教えてください。

ピロクレオン　いいとも。このかたがたに審判役をお願いしよう。

ブデリュクレオン　私も賛成だ。よしきた。みんな、親父を放せ。

ピロクレオン　それから[6]わしに刀をよこせ。お前に言い負かされたときには、この刀に折り重なって死んでしまおう。

ブデリュクレオン　だが、もしもあなたが、ええと何という言葉だったっけ、そうだ、評決に服さなかったら、どうなります。

ピロクレオン　饗宴の最後を飾る幸運の祝盃の水のまじらぬ純な酒[7]、いやさ裁判役の日給が二度とふたたびおれには呑めぬように。

コロス　いまこそわれらの道場の選手は、
何か目新しいことを言わねばならないぞ、
（お前がどんなに立派な人間だかを）示すのだ。

ブデリュクレオン　誰かおれの書物机を大急ぎでここへ持って来い。お望みなら、あなたがどんな人間かを教えてあげましょう。

コロス　こんな若僧と全く違った
弁論をして見せろ。この争いは
ただごとではなく、すべてがこれに
かかっているぞ、もしもこいつが
ほんとうにお前に勝つ気でいるのなら。
だがこんな兇事は桑原桑原。

ブデリュクレオン　あなたの言うことはみんなそのまま筆記しましょう。

ピロクレオン　こいつがわしを言い敗かしたら、皆の衆は何と言うかな。

コロス　そのうえは年寄どもの軍勢は
これっぱかりの値打もなくなる。
道ではみんなに馬鹿にされ、
オリーヴ担ぎのもうろく爺(1)
反故(ほご)証文(2)と言われるだろう。
われらの全権力はお前の弁護のいかんにかかっているのだ。さあいまこそ勇気を出して、舌先三寸によりをかけて富婁那(ふるな)の弁を振ってくれ。

ピロクレオン　まずスタートからすぐさま、われわれの持っている職権は、いかなるこの世の主権者のものにも劣らぬことを証明して見せよう。裁判役よりももっと幸福で、もっと祝福され、もっとちやほやされ、もっと怖がられているものがこの世にあろうか。しかも老人であってもだ。

寝床からはい出すか出さないうちに、裁判所のてすりの側では、大の六尺男がわしの来るのを待ちうけている。わしがやって来るや否や、柔かい手をさし出して握手する。それは公金を横領した手だ。それから腰をかがめて、哀れっぽい声で哀訴する。「ご老人、私に憐みをおかけください。お願いです。ご自身も昔、役付のときや、戦さに出て糧食の購買にあたって、うまい汁を吸われた経験がおありでしたら。」そいつは前の裁判で言い逃がれたことがなければ、わしが生きているか死んでいるかも知らない奴だ。

ブデリュクレオン　〔筆記しながら〕これは歎願者に関する点ですね。覚えのために控えておきましょう。

ピロクレオン　そこでわしは哀訴せられて悪いご機嫌をさらりと拭い去られてから、内に入って、わしがいろいろと言ったことの一つだってしやしない。逃がれたい一心で奴らが喚くありとあらゆることを聞くという寸法だ。全く裁判役がここで聞かされたことのないようなお阿諛がこの世にあるものなら承りたいものだ。

ある奴は自分の貧乏を売物にして、あることないことつきまぜて、段々と大袈裟に申立て(3)、不幸を嘆き、しまいにはわしのと同じ位にしてしまう。ある奴は昔話やイソップ(4)の面白い奴を聞かせる。また他の奴は面白いことを言ってわしを笑わせ、わしのご機嫌を直そうとする。こんなことではわしどもの心が動かぬとなると、子わっぱども(5)の手をひいて連れて来る、餓鬼も女郎も。そこでわしが聞いてやるという段取りだ。子わっぱどもはひとところに小さくなって、羊みたいにベーベーと泣声を立てる。それから親父は震えながら、子わっぱどものために、このわしにまるで神様でも拝むように、自分の始末書が首尾よく審査(6)を通るように頼むのだ。「もしも牡羊の鳴声がお好きなら、男の子の泣声を哀れと思ってくださいまし。」またもし小豚がお好きなら、娘の声に耳をかしてくれ、とね。そこでそいつに対してほんのちょっぴり怒りの心棒をゆるめるとくる。これは大した権力、富の軽蔑というものじゃないかね。

ブデリュクレオン　あなたの論点の第二として、これを書留めて置きましょう。富の軽蔑と。つづいてあなたがおっしゃるようにギリシアの支配者としての利益を教えて貰いましょう。

ピロクレオン　少年たちが壮丁の審査をうけるときに[1]一人前の男かどうかを検査する。それからもしもオイアグロス[2]が被告になって来ようものなら、『ニオベ[3]』のなかのいちばんの聞きどころをわしどもにやって聞かせないうちは放免してやらない。またもし笛吹きが訴訟に勝つようなことがあれば、そのお礼に、裁判役どもの退場につれて、頬あてをつけて[4]力いっぱい笛を吹いてくれる。それからもしも臨終の親父が、（息子がないので）娘を相続人にして[5]、誰かに嫁(とつ)げるように遺言すれば、遺言や、恐ろしく業々しく大事そうに封印の上に乗せてある蓋[6]なんかは糞でもくらえと、誰だろうがかまわず、わしどもに取入って口説きおとした奴に娘をくれてやる。しかもわしどもは、こんなことをしたって、始末書なんかは取られやしないが[7]、他の役目は一つだってこうは行かない。　（五七六）

ブデリュクレオン　これだけがあなたの言ったことのなかでのたった一つの幸いだとお祝いしますよ。だが跡取り娘の遺言の封印を破るのは感心しませんな。

ピロクレオン　評議会や民会[8]が大事件の判決がつかなくて困るときには、裁判役のところへ被告どもをまわすように決定する。そこでエウアトロス[9]やあの図体ばかり大きいくせに楯を投げ出して逃げ出すコラコニュモスはわしどもをば裏切りの心配のない民衆の闘士だと言う。民会では誰だってその主張を通すことができない、もしもたった一つの訴訟に判決をくだすや否やすぐさま閉廷にしなければね[10]。あの大声で喚き立て、人をおどすクレオンだって、わしどもだけはちょろまかすことはしない。それどころか、大事に掌のなかに守護していて、うるさい蝿を追い払ってくれる。お前は自分の親父にだってこんなことは一つでもしてくれたことはない。ところがエウプーミオス[11]にも劣らず（立派な）テオロスは、壺のなかから海綿を取り出して、わしどもの靴に墨を塗って磨いてくれる。お前がどんなにいいことからわしを引きとめたり邪魔をしようとしたりしているかわかったろう。それをお前は奴隷の仕事だ、いや苦役だとか言って、証明して見せようと主張したのだぞ。　（六〇三）

ブデリュクレオン　思う存分にしゃべるがよいでしょう。だがいまに黙ってしまって、あなたの言う権力なんかは、まるで洗っても洗ってもまた汚くなる尻[12]も同然、無益なものだということがわかりますよ。

ピロクレオン　ところでわしは忘れていたが、何にもまして愉快なことは、給料を貰って家に帰ると、中に入るか入らぬにみんなはわしを金のゆえでの大歓迎だ。まず最初に娘がわしの足を洗って油を塗ってくれる、それから屈(かが)んで足にキッスして、大好きなパパとか何とか言って、その舌でもって三オボロスをうまうまと釣ってしまう。また可愛い女房は猫なで声でスフレー菓子を持って来る。それからわしの側に坐って、「これを召し上れ、これをお口にしてごらんなさい」てなことを言って無理にでも食べさせる。これがわしには嬉しいのだ。　（六二二）
お前やお前の執事なんかの目の色をうかがうのはまっぴらだ。あいつは朝飯の用意をするときには、不平を言ったりぶつぶつ言ったりしやがる。ところがあいつがさっさとパンの用意をしないと、見てみろ、ちゃんとわしには禍に対する防備があり、矢玉を防ぐ用意があるんだ。またお前がわしに酒を注いでくれなくったって、わしはここにいっぱい酒の入った奴を持っている。こいつを傾けて注ぐという段取りだ。こいつが大口を開けて、お前の盃めがけてぶうぶうと大きなすごい奴をぶうっと一つやらかすのだ。どうだ、これでもわしは大きな権力、ゼウスの神様にも劣らぬものを持っていないと言うのかね。　（六三〇）

みんなはわしのことをゼウスの神と同じだと言う。
わしらが喚いているときには、
側をば通る人々は口を揃えてこう言うのだ、
「なんと大きな音を立てて役所がゴロゴロと鳴るんだろう、
おおゼウスの大神様[13]」とね。
わしがピカピカするときには、偉い奴らで金持ちでも
桑原桑原とお祈りして、
わしが怖さに尻もまくらず糞をする。

お前もわしが怖くて怖くてたまらないのだ。
デメテルの女神に誓って、おれさまは、
もしもお前が怖いようなら、死んだ方がよほどましだわい。

コロス　いままでにこんな理路整然と
理窟の通った弁論を
誰もしたのを聞いたことがない。

ピロクレオン　そうだとも。あいつはわしの葡萄が、見張番もつけてないので、やすやすと盗めると思っていたのだ。あいつはこういうことはわしの得手だということをよく知っていたんだからな。

コロス　なんと見事だ。どんな点にも
何にももらさず説きおよぼした。
おかげでわしも聴いていて、
身体がだんだん大きくなって、
まるで天国で
裁判をしている気になった。
あまり話に聞きほれて。

ピロクレオン　こいつめ、もうもじもじしだして、のぼせている。そうだ。きっと今日のうちになぐられた犬みたいにしてやるぞ。

コロス　お前は（今度は）弁護のために
あらゆるたくらみをつかわにゃならぬ。
わしをば敵にさしまわし
反対演説をする若僧には、なかなかのことでは
わしの機嫌をなだめる法はない。
それだから、うまい弁論ができないようならば、
わしの怒りを打ち砕くことのできるほど上等の新造の臼を一つ探すべきときだよ。

ブデリュクレオン　この市(まち)に古くから植えつけられた病を癒すことは、むずかしい仕事だ、鋭い考えが必要だし、喜劇作者にはちと荷が重すぎるて。とはいえ、おお、クロノスの御子、われらの父のゼウスさま。

ピロクレオン　やめてくれ。わしをお父さん呼ばわりするな。わしがどうして奴隷なのか、こいつをさっさと教えてくれなければ、お前は死を逃れる方法がないぞ。たとえわしがお供えの獣の腸(はらわた)[1]を断たなけりゃならないとしてもな。

ブデリュクレオン　それじゃ少しはしかめつらを直して、耳をかしてください、パパさん。そしてまず諸都市がわれわれに払う貢税が全体でいかほどになるかを別にめんどうな計算はしないで、ざっと指で勘定してみてください。この他に諸種の税金と一分税、裁判手数料、鉱山・市場・港湾よりの税収入、貸地料と没収財産をも計算して。これらを加えると全体で略二千タラントンに達します、それから毎年裁判役に支払われる日給を数えてごらんなさい。彼らは六千人で、それ以上はこの地にはいません、そうすればおよそ百五十タラントン[2]になるでしょう。

ピロクレオン　それでは裁判役の給料はわしらの国の収入の十分の一にもならないな。

ブデリュクレオン　そうですとも、確かにそうです。

ピロクレオン　それじゃ残りの金はどこへ行くのだ。

ブデリュクレオン　あいつらですよ、「アテナイ人の屑どもを決して売ったりなぞはしない、つねに大衆のために戦うのだ」という奴らに。お父さん、あなたはこんなけちな言葉にだまされて、われとわが身をあいつらの支配にまかせるようにしているのです。そうしておいてこいつらは五十タラントンもの賄賂を同盟の諸都市から受け取るのだ、おどかしたり脅迫したりして、「貢物を払え、でなきゃおれは雷でもってお前らの市(まち)を破壊してしまうぞ」とね。ところがあなたはご自身の権力の残肴をなめて喜んでいる。
　そこで味方の諸都市はデマゴーグ以外の社会の屑の大衆は投票箱をあてがわれているだけで、痩せ細り、何の食にもありつけないでいることを知って、あなたなんかは物の数にも入らぬと考え、デマゴーグ

どもには、塩漬の瓶詰、葡萄酒、敷物、チーズ、蜜、胡麻、クッション、皿、マント、冠物、頸飾り、コップ、その他富と健康とを贈物にする。

　ところがあなたに対しては、陸に海に苦労して、やっとあなたの支配するようになった多くの者の唯の一人も、煮物の味付料に大蒜（にんにく）の頭さえくれやしない。

ピロクレオン　全くだ。ちょうどいまおれさま自身が八百屋のエウカリデスから大蒜の頭を三本買わせたところだ。だがしかし、かんじんのわしが奴隷だということを証明しないので、お前はわしをじりじりさせるよ。（六八二）

ブデリュクレオン　これがひどい圧制でないと言うのですか、こんな奴らがみんな高位高官になっているばかりか、きゃつらの取巻き連中も給料を貰っている、ところがあなたは三オボロスの捨扶持を貰って喜んでいるのです。その三オボロスはあなたが軍船の櫂を取り、歩兵として戦い、あるいは包囲攻撃したりして、大変な苦労をして勝ち得たものですよ。（六八五）

　そして私がいちばん首を締めつけられるように思うことは、次のことですよ。あなたが命令をうけてこんなことに出席する[1]、それに反して、小僧っ子のまだ毛も生えていないカイレアスの息子とかいう奴が入って来て、こんな具合に両脚を拡げて、腰をふりながら、女の腐ったみたいにしなをつくり、明朝早く間に合うように裁判にやって来い、誰でもお前たちのうち、合図に遅れてやって来た者は三オボロスは貰えないんだからと命令する。そいつ自身は遅くやって来ても、ちゃんと検事[2]の給料として、一ドラクマを受け取るのです。被告の誰かが賄賂をやれば、同役の仲間と分けあって、まるで二人で鋸でも引くように、一方ではひっぱり、一方では手をゆるめて[3]、訴訟をうまくまるめるように苦労する。ところがあなたは会計官の顔をぽかんと口を開けて眺めている、そのうえこっそりちょろまかされて知らぬが仏だ。（六九五）

ピロクレオン　そんなことをあいつらはわしにしているって。情けない、何を言うのだ。お前はわしの心を底から乱して、強い力で惹きつけた。何がなんだかわからなくなってしまったぞ。

ブデリュクレオン　まあ考えてごらんなさい。どんなぐあいに、ここにいるみんなの者が金持ちになることができるはずのところを、しょっちゅう民衆のためだとばかりふれている煽動者どもに、どこへか知らないが、うまうまと丸め込められているかを。（六九九）

　そのあなたはポントスからサルディニアの島まで[4]の数知れぬ多くの市々（まちまち）の支配者ですよ。それがこんな目くされ金しか貰えないで、しかもそれも、まるで油か何ぞのように、あいつらはいつでもほんの少しずつ毛糸にしみこませて滴（た）らすんです。かつかつに生かしておくためにですよ。奴らはあなたを貧乏にしておきたいのですから。しかも何のためにですか、私が言ってあげましょう。あなたに飼主が誰だか知らせるためにですよ。そうしておけばあいつがシッシッとかウウウとか自分の敵の誰かに犬にでもするようにけしかければ、あなたは牙をむいて彼らに飛びかかるのです。大衆を立派に暮せるようにしようと思えば、たやすいことなのに。われわれに現在進貢している市々は千にも達するのです。その一つ一つに二十人の人を養うように命じれば、二万の市民は全くの兎の肉のご馳走と、花の冠に埋まって、とびきり上等のミルクやクリームを飲んで、それこそご馳走ずくめの贅沢三昧、わが国土とマラトン[5]の戦勝記念碑にふさわしい生活ができるというものなのに。ところが事実は大反対で、いまではあなたがたはまるで日雇の葡萄摘み[6]のように、会計官の尻にくっついて歩いている。

ピロクレオン　ああ情けない、まるで痺れのようにわしの手に伝って下りて来るのはいったいなんだ。わしは刀を持っていることができないぞ、まるで女のようにぐにゃぐにゃになってしまった。

ブデリュクレオン　ところが臆病風[7]にとりつかれたとなると、奴らはあなたがたにエウボウイアをあたえようとする。それからみんなに五十メディムノスずつの穀物を供給すると約束する。ところが実際にはまず大麦の五メディムノス以外には何にもあなたに渡さない。それもほ

んの一コイニクスずつ惜しそうにだ、やっとのことであなたが外人居
留法の検査に通って[1]からですよ。
これだから私はあなたを閉じ込めたのだ。
あなたを養いたいのです。こんな奴らが大口を開けて
大言壮語の法螺吹き貝の犠牲にあなたをさせたくない。
いまこそ私は何でもござれ
望みのものを条件なしに差し上げましょう、
ただ会計官のミルクをば飲むことだけは別ですが。

コロス [2]「両方の言い分を聞かないうちは判断を下してはならない」と
言った男はほんとうに賢者だ。というのもお前さんが確かに勝ったと
わしには見えたからだ。だからわしはもう怒りを解いて、裁判役のし
るしの杖を投げ捨てよう。さあわしらと同年輩の仲間よ。

あの言葉に従って、うっつけ者とならないようにしよう。
あまり片意地で強情者となるな。
わしにもこのような諫言をしてくれる
友や縁者が欲しいものだ。
神様が目の前に立ち現れて
お前に病を癒す手をさし延べてくださるのだ、
明らかにお前を援けようとして。
さあ、いそいそと立ち出でておうけするがよい。

ブデリュクレオン そして私は何なりと老人のためになるものは
差し上げて、お父さんを養いましょう。燕麦の粥でも
柔かい上着でも、よい毛布でも、
それからあそこや腰のまわりを
揉んでくれる女でも。
だがお父さんは黙っていて、声も出さない、
これはどうも感心しませんね。

コロス なあに、狂気のように心を迷わしていた
あのことを考えて反省しているのだ。
やっといまごろ気がついて、あれはみんな過りだと
考えているのだ。
お前が勧めたのだが、ちっとも言うことをきかなかったのだとね。
だが今度は多分お前の
言うことに従うだろう。
そしてお前の言う通りに、
これからは身を入れかえて、
利口な男となるだろう。

ピロクレオン ああ、こいつはいけない。

ブデリュクレオン お父さん、どうしてそんなに大きな声を出すのです
か。

ピロクレオン わしにそんな約束をしないでくれ。
[3]あれこそわが愛するもの、あそここそがわが身の置きどころだ。
そこでは布告使が「まだ投票せぬ者があるか、
その者は起立してください」とふれる。
それからわしは投票箱の投入口の側に立つのだ、
[4]投票者の中でいちばん最後に。
急げ、わが魂よ——どこへ行ったんだ。
おお、許せよ、影のごときものよ。こん畜生、
法廷でクレオンが二度と泥棒をしているところを
つかまえたらば、どうするか見ていろ。

ブデリュクレオン さあお父さん、どうかお願いだから私の言うことを
きいてください。

ピロクレオン どんなことだ。何でも言って見るがよい、が一つだけは
別だよ。

ブデリュクレオン それは何ですか、さあ聞かしてもらいましょう。

ピロクレオン　裁判をしないということだ。わしがお前の言うことを聞く前に、地獄の王のハデスが始末をつけてくれるだろう。

ブデリュクレオン　それでは、そんなことがそれほどしたいのなら、あんなところへはもう行かないで、この家に、ここにじっとして、家族のなかで裁判をなさるがよいでしょう。（七六六）

ピロクレオン　どんな事件をだ。馬鹿なことを言いなさんな。

ブデリュクレオン　あそこでやるのと同じことを。女中がこっそりと戸を開けたというので、一ドラクマの罰金を科すてなことです。あなたがあそこでいつもやっていたことはこれと全く同じものだ。しかも、それをずっと[1]気が利いているようにですよ。朝早く日が照れば、ひなたぼっこをしながら、雪が降れば、火の側に座をしめて、雨天のときにも、裁判ができるというものです。お昼になるまで寝ていても、司法官があなたを裁判所から締め出したりなんぞしやしない。（七七五）

ピロクレオン　こいつは気に入ったな。

ブデリュクレオン　そのうえ誰かが長広舌をふるっても、飯も食わずに待っている必要もない、あなた自身も被告もじりじりしながら。

ピロクレオン　だがむしゃむしゃと物をかじりながら前のようにうまく判断ができるだろうか。（七八〇）

ブデリュクレオン　ずっとうまく。よく言うじゃありませんか。「証人が偽証をしているときには裁判官はよく噛みしめて後にようやく事件の真相を知る」と。

ピロクレオン　わしは参ったよ。だがまだお前はどこから日給が貰えるか言わないぞ。

ブデリュクレオン　この私から。

ピロクレオン　よし、それじゃわしは自分だけで、他の奴といっしょに貰わなくてもすむ。それというのもあのいたずら者のリュシストラトス[2]がわしにひどいことをしたことがあるのだ。最近の話だが、一ドラクマを二人で貰って、魚市場に行って小銭に換えた。そしたら奴めぼらの鱗を三枚わしの掌のなかに置きやがった。そこでわしはそいつをぽいと口のなかに入れた[3]。オボロスだとばかり思って受け取ったのだからな。そしたらどうもその臭いと来たら、胸が悪くなって、鱗を吐き出したのさ。そしてあいつをひっ捕まえたのさ。

ブデリュクレオン　あいつは何と言いました。

ピロクレオン　何とだって。わしが雄鶏の胃の腑を持っている[4]と言やがった。「すぐに銀貨を消化するぜ」とぬかした。（七九五）

ブデリュクレオン　それじゃその点でもどんなに得するかおわかりでしょう。

ピロクレオン　うう。ちょっとやそっとではないな。さあお前のやりたいことをさっさとやってくれ。

ブデリュクレオン　ちょっと待ってください。道具を持って来ますから。

ピロクレオン　見てくれ、ご神託がどういうぐあいに実現したかをね。アテナイの人々はいつかは、自分の家で裁判するようになるだろうということをわしは聞いたことがあるのだ。それからみんなめいめいの家の戸口にほんとうに小さいこれっぱかりの裁判所を自分用に建てるだろう、ヘカテ[5]の神棚のようにいたるところの戸口の前にね。（八〇四）

ブデリュクレオン　さあ、もうこれ以上言うことはないでしょう。私が約束したものみんなと、そのうえたくさんのものを運んで来ましたよ。あなたが小用をもよおしたときの用意に、小便壺をあなたの側近く、釘にかけておきましょう。

ピロクレオン　全くこれは気がきいている。老人には役に立つというものだ。小用のためには、ほんとにいい物を見つけてくれた。（八一〇）

ブデリュクレオン　それからここに火があります。そのうえに豆粥をと、欲しいときにすすれるように。

ピロクレオン　こりゃまた素敵だ。これなら熱のあるときでも、給料が貰える。わしはここにじっとしていて、粥をすすろうというのだからな。だが何だってまた雄鶏なんかをわしに持って来るのだ。

ブデリュクレオン　なに、誰かが弁護の演説をしている間にあなたが眠ったりすれば、頭の上で叫びの声をあげて、こいつがあなたをさます

ためですよ。

ピロクレオン　たった一つまだ欲しいものがあるんだがね、他のことはいいんだが。

ブデリュクレオン　何ですか。

ピロクレオン　リュコスさまの神棚をなんとかならないものかな。

ブデリュクレオン　ちゃんとここにあります。それから、ほら、リュコス王様もね。

ピロクレオン　おお、支配者、尊さま。何て怖い顔をしていなさるんだ。

ブデリュクレオン　まるであいつ[1]みたいだ。クレオニュモスですよ。

クサンティアス　そうですよ。英雄だもんだから、鎧冑をつけていませんよ。

ブデリュクレオン　もっと早く座をお占めになれば、もっと早く裁判をはじめることができたのに。

ピロクレオン　それじゃはじめろ。わしはとっくの昔から坐っている。

ブデリュクレオン　それではと。どういう訴訟[2]をまず持ち出すかな。家内の誰がどんな悪事をやったっけ。トラッタはついこのあいだ壺を焦がした。

ピロクレオン　おい、待て待て。もう少しでわしを殺すところだったぞ。お前はてすり[3]なしで裁判をはじめる気かね。てすりはわしらにとってはいちばん神聖なものだよ。

ブデリュクレオン　全くこいつはありませんでしたね。

ピロクレオン　わしが一走りして、自分の家のなかから何か代りの物を急場の間に合わせに持ってこよう。

ブデリュクレオン　全く驚いたな。場所に対する愛着というものはなんて不思議なものなんだろう。

クサンティアス　犬にでも食われてしまえ。こんな犬を飼っているとは。

ブデリュクレオン　どうした。

クサンティアス　たったいま、あのラベス[4]の犬めが台所に飛び込んで、シシリー[5]製の上等のチーズをかっぱらって、食ってしまったじゃありませんか。

ブデリュクレオン　それだ、それだ。まず第一に親父の前に持ち出してやろう。お前はそこにいて告訴人になるんだ。

クサンティアス　どういたしまして、私はごめんこうむります。だがここにいるもう一匹の犬が訴人になると言っています、もし誰かが事件を法廷に持ち出してくれれば。

ブデリュクレオン　さあ、二人を引き出せ。

クサンティアス　かしこまりました。

ブデリュクレオン　こりゃまた何ですか。

ピロクレオン　竈の女神さまのそばの豚入れの囲いだよ。

ブデリュクレオン　神様のものを盗んで来たのですか。

ピロクレオン　そうじゃない。何から何まで、竈の下の灰までもあますことなく完全に、誰かをやっつけようためにさ。だがさっさと呼び出してくれ。わしは宣告がくだしたくってむずむずするわい。

ブデリュクレオン　さてと。それじゃ布告板と原被告申立書その他の調書を持って来よう。

ピロクレオン　何をぐずぐずしているんだ。お前はわしをいらいらさせて疲らせて殺してしまうぞ。わしはもう早くあいつに畦がひきたくって[6]たまらない。

ブデリュクレオン　さあ。

ピロクレオン　呼べ。

ブデリュクレオン　承知しました。

ピロクレオン　最初のこいつは誰だ。

ブデリュクレオン　こん畜生、なんてめんどうな。投票入れの壺を忘れていた。

ピロクレオン　おいおい。お前はどこへ走って行くんだ。

ブデリュクレオン　壺を探しに。

ピロクレオン　そんな必要はない。わしがここにひしゃく用の小っちゃな茶碗を持っているから。

ブデリュクレオン　そりゃ結構です。みんな入用の物はそろいましたが、水時計が。

ピロクレオン　〔小便壺を指しながら〕こりゃ何かね。水時計じゃないか。

ブデリュクレオン　こりゃすてきな思いつきだ。土地柄にあった気転ですよ。誰か大急ぎで家のなかから火と桃金嬢(てんにんか)の枝と乳香とを持って来い。まず神々にお祈りしようというのだ。　（八六三）

コロス　わしどももまたお前がたが酒を灌(そそ)ぎ
お祈りするのに
心を合わせて願望成就をお願いしよう。
みごとに戦いと
争いから抜け出でて、仲直りしたのだから。

ブデリュクレオン　さあまず神々に敬意を表して静まりましょう。

コロス　おお、ポイボス・アポロン、ピュトーの大神[1]、
この男のこの門前での企てが
首尾よく成就されますように、
迷いより醒めた私ども皆の者に　（八七〇）
この企てがうまく進みますように、
[2]エイヤ、エイヤ、ワァー、ワァー。

ブデリュクレオン　おお、支配者、王よ、アギュイエウス[3]さま、隣人(となりびと)よ、
私の門前に住みたもう神様、
父のために新たに設けました新祭儀をおうけくださいまし、神様。
[4]父のあまりに頑固で厳しい気性をお癒しください、
葡萄酒のシロップのかわりにその辛辣な心にほんの少しの蜜を加えて。
今後は人々に対して
心もやさしく
訴える者よりは
裁かれる者に憐みをかけ、
乞い願う者には涙を注ぎ、
気むずかしい気性が癒りますように。　（八八〇）
怒りから
蕁麻(いらぐさ)を取ってくださるように。

コロス　わしらもともどもお祈りして、
新しい支配に従うのだ。前に話したような理由で。
わしらはお前が
若者たちの誰にもまして
民衆を愛していることを知ってから、
お前の味方となったのだ。
〔祈禱を終える〕　（八九〇）

ブデリュクレオン　〔法廷の布告人の真似をして〕裁判役のかたで誰か外にいられるなら、入廷してください。弁論がはじまってからは入廷禁止です。

ピロクレオン　この被告はいったい誰だ。ひどい目に会わしてやるぞ。

ブデリュクレオン　さあ、訴状を聞いてください。「原告、キュダテナイオン[5]の犬。被告、アイクソネのラベス。告訴の理由は法に反してひとりでシシリー製[6]チーズを食べてしまった科(とが)によってである。求刑、無花果木製の首枷」

ピロクレオン　いや、犬の死刑だよ、そいつが有罪と決したら。

ブデリュクレオン　ここにいるのが被告のラベス。

ピロクレオン　おお、卑劣漢め。なんて泥棒面をしてやがるんだ。お世辞笑いなんかしてわしをだませると思っていやがる。どこに訴人のキュダテナイオンの犬がいるのだ。　（九〇三）

犬　ワンワン。

ブデリュクレオン　ここにいます。

クサンティアス　もう一人ここにラベスも。ほえることが上手で、皿を綺麗になめます。

ブデリュクレオン　静粛。着席。〔犬にむかって〕壇に登って告訴するんだ。

ピロクレオン　さてと、その間に粥をすくってちびちびやろう。

クサンティアス　裁判官諸君、諸君は私のこの者に対する訴えをお聴きになった。言語道断なことを彼は私および船子どもに対してなしたのであります。なんとなれば彼は片隅に逃げて行って多量のチーズをシシリー[1]風にこしらえて、暗闇のなかで腹いっぱい詰め込んだからであります。

ピロクレオン　こりゃもう明々白々、間違いはない。たったいまわしの顔にひどくチーズ臭い息を吹きかけおった。この悪漢め。

クサンティアス　そして私の要求にもかかわらず割前をよこさなかった。しかも犬[2]であるこの私にさえ何物もあたえないような男がいかにして諸君に対して善行をなしえましょうか。

ピロクレオン　何にも分けてくれなかったって。そうだ、国家たるこのわし[3]にも同然だ。〔口を粥で焼いて〕そいつはこの粥にも劣らず手を焼かせる男だな。

ブデリュクレオン　お父さん、お願いですから、両方の言い分を聞かない前に有罪の宣告をすることだけはやめてください。

ピロクレオン　だがな、伜や、ちゃんと事件は明白だよ。自分で罪を怒鳴り立てているじゃないか。

クサンティアス　あいつを逃がしちゃいけませんぜ。あいつは犬中でいちばん独占的大食漢ですからな。あいつは乳鉢のまわりをぐるぐると歩きまわって、市々からチーズのかけらを盗みとって食っちまったんです。

ピロクレオン　ところがわしには水瓶修繕用のセメント材料にする石のかけら[4]さえないのだ。

クサンティアス　だからこいつを罰してください。「一つ[5]の草むらは二人の盗賊を隠すことはできない」と諺にもあるじゃありませんか。せっかく私がほえ立てても、何とも無駄だったてなことがないようにね。でなきゃあ、二度とほえませんぜ。

ピロクレオン　ふふん。なんという罪悪の山だ。泥棒の見本だな、あいつは。そうじゃないか、そこの鶏さん。全くだ、こいつはそうだと言ってまたたいているぞ。司法官殿、おいどこにいるんだ。わしに小便壺をよこしてくれ。

ブデリュクレオン　自分でとればよいでしょう。私は証人を呼び入れますから。ラベス側の証人は出廷すべし、お椀、擂木、チーズかき、火鉢、水瓶、それから他のすべての焦げた道具類[6]。〔ピロクレオンに〕おやおや、まだ小用を足しているのですか。いつになったら坐るつもりか。

ピロクレオン　こいつは今日は糞をたれるに違いないぞ。

ブデリュクレオン　さあ、無慈悲でひどいご機嫌を直しませんか。それも被告に対して。そのうえまだ牙をむいているのですか。〔ラベスに〕登壇して弁明しろ。どうして黙っているんだ。話をはじめろ。

ピロクレオン　だがこいつは何にも言うことがないらしいぞ。

ブデリュクレオン　そうじゃない。こいつはツキュディデス[7]がかつて法廷に立たされたときと同じありさまになっているのです。とつぜん両の顎が発作的に麻痺して動かなくなったのですよ。〔ラベスに〕さあ、どけ。おれが弁明してやるから。諸君、中傷されたる犬の弁護は困難な仕事ではありますが、あえて私は弁じようとする者であります。なんとなれば彼は善良であり、かつ狼を追いはらうからであります。

ピロクレオン　こいつは確かに泥棒で、そのうえ陰謀の一味だ。

ブデリュクレオン　どういたしまして、それとは反対に現代の犬中最善のものであり、多くの羊を張番するに役立つものです。

ピロクレオン　だがチーズを食ってしまうようでは、何の役に立つかね。

ブデリュクレオン　あなたのために戦ったり、戸口の番をしたり、その他のことでもいちばんよく努めるじゃありませんか。ちょろまかした

ぐらいのことは許しておやりなさい。竪琴[1]の弾きかたなどは知らない武骨者ですから。

ピロクレオン　わしはあいつが字も習わなかったらよかったと思うよ。そうすりゃあいつはこんな弁明書[2]を書いて、わしどもを悩ましたりなんかしなかったろうに。

ブデリュクレオン　はてさて、さあ私の証人どもに耳をかしてください。チーズかき、登壇してうんと弁じろ。お前は経理だったからな。明白に答弁するんだ。分捕り品を兵士どもに摺り分けてやったかどうかを。摺ってやったと言っています。

ピロクレオン　確かに。だが嘘をついているんだ。

ブデリュクレオン　はてさて、さあ困窮に陥っている者どもに憐みをかけてやってください。ここにいるラベスは残り物の肉や魚の骨を貰って食べている、そしていつだって一つところにいることがないのです。も一人の奴はただ家にごろごろしているだけだ。同じところにじっとしていて、誰かが何かを持って来れば、その割前を要求する。何にも貰えないと、噛みつくのです。

ピロクレオン　こりゃどうしたことだ。何の病にかかったのかな。わしがこんなに気が弱くなるとは。何だか病気が起ったな。わしもうんと言いそうだ。

ブデリュクレオン　さあ、お父さん、お願いですからあいつを憐んで、ひどくやっつけることはよしてください。どこにあいつの小さい子供たちはいるんだ。さあ、餓鬼ども、壇に登って、クンクンないて、お願いしろ、お情けを乞うて、涙を流すんだ。

ピロクレオン　下りろ、下りろ、下りろ、下りろ。

ブデリュクレオン　下りますよ。だがこの「下りろ」はずいぶんとたくさんの人をだましましたね。だがとにかく私は下りましょう。

ピロクレオン　こん畜生。粥をすするってのはなんてひどいことなんだろう。わしはいま涙をこぼしたが、そりゃわしの考えじゃ、どうやら粥を口いっぱいに頬張りすぎたためらしいて。

ブデリュクレオン　それじゃあいつは無罪放免とはならないのですか。

ピロクレオン　そいつは予測を許さないて。[3]

ブデリュクレオン　さあ、お父さん、親切気を出してください。この投票を取って、目をつむって、後の方にある投票入れ[4]に走って行ってください。あいつを放免してください。お父さん。

ピロクレオン　いやだよ。わしは竪琴の弾きかたを知らないからな。

ブデリュクレオン　さあ、私がいちばん近道を通って連れて行ってあげましょう。〔後の方の壺に連れて行く〕

ピロクレオン　これが前の方のかね。

ブデリュクレオン　これです。

ピロクレオン　そうら、入った。

ブデリュクレオン　〔傍白〕うまくだまされたな。思わず間違って放免した。〔聞えるように〕さあ、開票しましょう。

ピロクレオン　戦況はどういうぐあいかね。

ブデリュクレオン　いますぐにわかりますよ。ラベス、お前は無罪放免だ。お父さん、お父さん、どうなすったのですか。

ピロクレオン　こりゃいけない。水をくれ。

ブデリュクレオン　しゃんとしてください。

ピロクレオン　これだけわしに聞かしてくれ。あいつはほんとうに放免されたのか。

ブデリュクレオン　そうです。

ピロクレオン　わしはもう駄目だ。

ブデリュクレオン　何を言っているんです。心配しないで、立ち上ってください。

ピロクレオン　どうしてわしがこのことを知っていながら、平気でいられよう、被告を放免してしまって。わしはどうなるだろう。だが尊い神々様、お許しください。これは好んでやったのでもなく、またわしの性にかなってもいないのですから。

ブデリュクレオン　気に病むことはありませんよ。お父さん。私はあな

たによく孝養をつくしましょう。どこへでもお伴して、晩餐にも、宴会にも、またお祭や芝居の見物にも。[1]だから今後はたのしくお暮しになれるでしょう。またヒュペルボロスなどがあなたをかたって嘲笑(あざわら)うこともなくなるでしょう。だが、中に入りましょう。

ピロクレオン　うん、うん。いまとなってはお前の言う通りに。

〔コロスを除いてすべて退場〕

コロス　[2]さあ、喜び勇んで望みのところへ行くがよい。

〔見物に向って〕だがその間に、幾千とも知れぬ
見物の皆さん方、
これから私が話そうとしている
名言が虚(むな)しく地に落ちないように
注意してください。
というのは、そんなことは頭の悪い見物のすることで、
あなたがたとは縁の遠いことですから。

さて皆さんがた、もしも率直な真の言葉がお好きなら、もういちど耳をかしてください。いまこそ作者は見物の皆さまに苦情を言いたいと思っているのですから。

彼の言うには、自分は皆さん方にご奉公[3]していながら、ひどい目にあわされた。もっとも、そのご奉公の一部分は表向きではなく、[4]他の作者に秘かに助けを与えてですが。エウリュクレスの占いの方法を真似て、他人の腹のなかに入り込んで、[5]たくさんの滑稽なことを注ぎ出したのです。それから後には正体を現して、自分ひとりで危険を冒した、他人のではなく自らの詩(うた)の女神の轡(くつわ)を取って。それから高名をえて偉くなり、いままでかつてないほどに尊ばれるようになったが、慢心したり尊大ぶったりはちっともせず、運動場を歩きまわって、若者どもを誘惑したりなぞ[6]もしなかった。恋人が自分の少年が諷刺の的になるのを嫌って、彼のところへあたふたと飛んで来て熱心に頼み込んでも、誰にだって決して応じたことがなく、自分の立派な考えをしっかと保っていた、自分に仕える詩の女神を遣手婆としないために。

はじめて喜劇を上演したときにも、[7]くだらぬ人間どもにはかかって行かずに、ヘラクレス[8]のそれにも似た気性をもって、もっとも逞しいものと戦う決心をして、最初から鋸のような牙を持った怪物と勇ましく取り組んだ。そいつの目からはキュンナ[9]の（それのような）恐ろしい閃光を発し、追従者の百の（舌）頭[10]はその頭のまわりにいまにも唸り声を発しようと舌なめずりをし、そいつは破滅をたったいま惹き起した渓谷の激流にも似た喚声[11]を持っている、そのうえ海豹(あざらし)[12]の臭気、ラミアのかつて洗ったことのない睾丸、駱駝の尻を。こんな怪物を見ても彼は怖れて賄を貰ったりはせずに、昔もいまも皆さん方のために戦いつづけている。彼はまた怪物と戦う一方、去年[13]は悪寒とか熱病とかに手をつけた。そいつらは夜の間に父をくびり殺し、祖父を窒息させたものだ、寝床の上に転々と反側させて。[14]そして皆さんがたのおとなしい何にもしない民衆に対してやれ宣誓書だ、やれ召喚状だ、やれ証拠だと捏ね合わせた。そのために多くの人々をびっくり仰天して飛び上らせ、ポレマルコスのところへと飛んで行かせた。

皆さんがたはこんな闘士、国家の刷新者を見つけながら、去年[15]は作者が斬新な考案を携げて現れたときに、（その収穫をうけようとはせずに）作者を裏切った。そしてその考えの真意を理解できなくて、枯らしてしまった。それにもかかわらず作者は数多くの供えの酒を灌(そそ)いで、ディオニュソス[16]の御名にかけて、これよりももっと気の利いた喜劇をいまだかつて見たことがないと誓うのです。すぐさまこの喜劇の優れた点に気がつかなかったのは皆さんがたにとって恥であるが、[17]賢者たちの目には作者は少しもその価値を失わなかった、彼はあまりに相手を抜き進みすぎて、かえって自己の（詩の）車を覆してしまったけれども。

だがこれからは、皆さんがた、
斬新奇抜の言を吐き、趣向をこらすに
力を注ぐ作者どもに
もっと心を傾け傅(かしず)いて

その考えを大事にして、
衣裳長持に入れてください、
虫除けのシトロン(1)といっしょに。
このようにしてくだされば、皆さんがたの衣裳は
年中機知の香がするでしょう。

おお、かつては合唱の詠にも踊りにも力強かったわれら、
戦いのさなかの勇者、
〔尾の針をさして〕しかも、ただこれだけでもっても男のなかの男であるが
それ(2)はもう昔の夢となった、昔のことだ。いまでは過ぎ去ってしまった。この髪は白鳥よりもさらに真白に
顔を飾っている。
だがしかし、この燃えがらから
若々しい力が燃え上らなければならない。
わしは自分の老年が
数多くの青年どもの巻毛や
気取った姿や大きな尻よりは
ずっとすぐれたものだと思っているのだから。

わしのこの態を見て、見物の衆、腰が胡蜂のように細いのを不思議に思うなら、わしどもの針がどういう意味を持っているのか、そいつをたやすく教えましょう、
「(3)たとえ以前は歌心のない者であっても」
尻にこんな道具のついているわしどもはアッティカ人、唯一の正真正銘この地に生れた者、男のなかの男の族だ。戦さの庭(4)で外国人が煙を吐いて全市を包み焼き払い、われらの巣をば力ずくで破壊しようと攻めよせたとき、御国のために最高の勲を立てたのだ。槍と楯をばひっさげて、すぐさま外に押し出でて、きつい怒りの心を呑んで、ひしめきあい、憤怒のあまりに下唇をかみしめて渡り合った。矢数があまり多かったので、天日はために暗かった。それにもひるまず神助を得て、夕方近くなって敵の陣列を押しもどした。戦さの前にわれらの女神の梟(5)が陣中を飛びまわったのだ。そこでわれらは逃げる彼らを追うて、そのおかしなだん袋に銛を投げつけ、きゃつらは頤や眉を刺されて逃げ出した。だからいまでも外国では、どこでもここでもアッティカの胡蜂ほど勇敢なものはないといわれているのだ。

そうだよ、わしはその当時は凄かった。何にも恐れるものがなく、
敵という敵は片端から
倒してしまった。三重櫓の船に乗って敵国に向って海を渡って。
そのころ、わしらには
雄弁術とか法廷で嘘八百を並べ立てる法とかは
念頭になく、
誰がいちばんの漕手か(6)が問題だった。
だから多くのメディア人の
市を破って
わしらが獲得するにいちばん功のあった、
その貢物をばいまどきの(7)
若い奴輩はくすねているのだ。

皆さんがたは、ようく注意してみるならば、わしどものやり口や生活が胡蜂によく似ていることを発見されるだろう。まず第一に癪にさわればわしどもほど怒りっぽくて扱いにくいものはない。その他何でもかんでも胡蜂のようにやってのける。群がり集まり、まるで蜂の巣のように、我ら(8)のうちのある者はアルコンのところで、ある者は十一人衆の下で、ある者はオデイオン、ある者は城壁の下で裁判する、ぎっしりとひしめきあって、腰を低くかがめて、まるで蜂の巣の房のなかの幼虫そっくりほとんど動かない。その他何ごとにも手ぎわがよく

って、誰だろうが突き刺して生計を得る。

　ところがわしどものうちには雌蜂がいる、働かずに坐って、針を持っていない奴だ。家にじっとしていて、わしどもが苦労してえた結果の貢物を食ってしまう。だがわしどもをいちばん憤らせるのは次のことだ。戦いにも出ないでこの国のために櫂を握ったことも、手に豆をこしらえたこともない奴が、われわれのうくべき物をかすめとっていることだ。ちょっと簡単にこれからは市民のなかで「針のない者は三オボロスは貰えない」ということにしたらばよいな。

〔ピロクレオンとブデリュクレオン登場〕

ピロクレオン　いやいや、わしの命のあるうちはこれ[1]を脱ぐのは金輪際いやだよ。北風の大王が攻め寄せて来たときに、戦列のなかにあったわしを守ってくれたのはこれだけだからな。

ブデリュクレオン　まるであなたはいい目にあうのがいやなようですね。

ピロクレオン　全く、そいつはわしにはちっともありがたくないしろ物だよ。ついこの間は小魚のフライ[2]を腹いっぱいに詰めこんで、おかげで洗張屋に三オボロスを払わせられたからな。

ブデリュクレオン　まあとにかく試してごらんなさい。今度こそは、あなたの面倒を見ることを私にお委せになったんですから。

ピロクレオン　わしに何をしろと言うんだ。

ブデリュクレオン　その田舎くさい短かマントを脱いで、このマントを同じぐあいにひきまわすのです。

ピロクレオン　わしの息子が現在わしを絞め殺そうとしているのに、それでも子供を生んだり育てたりしなけりゃならないのかね。

ブデリュクレオン　まあまあ、これを取って肩にひっかけてと。おしゃべりはやめにしてください。

ピロクレオン　言語道断。[3]このひどいものはいったい何だ。

ブデリュクレオン　ペルシスとかカウナケスとかいう物ですよ。

ピロクレオン　わしはまたテュマイタダイ[4]製のものかと思ったよ。

ブデリュクレオン　無理もない。あなたはまだサルデイス[5]に行ったことがありませんからね。それでなければ知っていらっしゃるはずだ。だからご存じない。

ピロクレオン　わしが。知らないとも、そいつはわしにはモリュコスの着ていた毛のマントにいちばんよく似ているように思えるな。

ブデリュクレオン　そうじゃありませんよ。これはエクバタナ[6]で織られるんです。

ピロクレオン　エクバタナでは牛の腸（はらわた）のような毛糸ができるのかね。

ブデリュクレオン　何ですって。どうしてそんなことが。これは異人どもがうんと金をかけて織るんです。これだって一タラントン位の羊毛をたやすく呑み込んでしまっているんですよ。

ピロクレオン　それじゃカウナケスなどとは言わないで、そいつを「羊毛食い[7]」とでも呼ぶべきだな。

ブデリュクレオン　さあ、そんな話はやめにして、着物を着る間はじっと立っていてください。

ピロクレオン　なんと情けないことだ。何という熱い息をこん畜生め人に吹きかけやがるんだ。

ブデリュクレオン　さあ、着ませんか。

ピロクレオン　ほんとうにいやだよ。だがね、どうしてもそうしなけりゃならないんだったら、ストーヴで包んでくれた方がましだよ。

ブデリュクレオン　さあ、それじゃ私が着せて上げましょう。〔老人の着ていた短かマントに向って〕さあ、お前は出てうせろ。

ピロクレオン　手もとに肉叉（フォーク）を置いておいて貰いたいね。

ブデリュクレオン　何のために。

ピロクレオン　わしが溶けてしまわぬうちに引っ張り出して貰うためにさ。

ブデリュクレオン　さ、今度はそのとんでもない変ちきりんな靴を脱いで、このラコニア風[8]のをさっそくお履きなさい。

ピロクレオン　何だと[1]。わしは敵（かたき）のやつばらの悪意にみちた靴底を履かねばならぬ運命なのか。

ブデリュクレオン　両足を入れて、さあ、颯爽と歩いてごらんなさい、ラコニア靴で。

ピロクレオン　これは罪悪じゃよ。わしの足を敵国に踏み出させるとは。

ブデリュクレオン　さあ、もう一つの足を。

ピロクレオン　いや、そいつはいけない。その足の一本の足指はひどいラコニア嫌いだからね。

ブデリュクレオン　こうするより他に仕方がない。

ピロクレオン　なんと悪い星の下に生れて来たんだろう。この年になって凍瘡一つできそうにもないとは。

ブデリュクレオン　さっさと履いた履いた。それからいかにも金のありそうに、こんなぐあいに通人ぶって、威張って[2]歩くんですよ。

ピロクレオン　見ろ、わしの恰好を見てくれ。一つ見て貰いたいね、お前の言う金持ち連の誰にいちばん歩き振りが似ているかを。

ブデリュクレオン　誰にですって。大蒜（にんにく）の着物を着た腫出物（できもの）に似てまさあね。

ピロクレオン　そうだよ、確かにわしは尻をゆらりゆらり振って歩くようにしているんだ。

ブデリュクレオン　さて今度はと。学問のある気のきいた男たちのいるところで、もったいぶった話をする術を心得ていますか。

ピロクレオン　知っているとも。

ブデリュクレオン　それじゃどんな話をしますか。

ピロクレオン　うんとこさあるよ。まず第一にラミア[3]が捕えられたときに屁をひった話だとか、お次にはカルドピオン[4]が母親をなぐった話だとか。

ブデリュクレオン　私の言うのはそんな昔噺（むかしばなし）じゃなくて、人間社会のほら人のよく言う家庭内の日常茶飯事という奴ですよ。

ピロクレオン　わしは、家庭の話ときたら、あの「昔々鼠と猫がありました」って奴を知っているぞ。

ブデリュクレオン　「間抜けの無教育な奴め」とテアゲネス[5]が汚穢屋（おわいや）に言ったとさ。それも悪口雑言として、「お前は紳士がたの前で鼠と猫の話をしようってのか」

ピロクレオン　それじゃどんなことを言わなくっちゃいけないんだ。

ブデリュクレオン　素晴らしいことをですよ。例えばあなたがアンドロクレス[6]とクレイステネスといっしょに神祭に使者となって行った話というような。

ピロクレオン　だがおれは一度だってそんな役にありついたことがない。パロスに行ったときは別だがね。もっともそいつは二オボロス[7]の日当でだ。

ブデリュクレオン　それでも例えばエプディオン[8]がパンクラティオン[9]の競技でアスコンダスといかにみごとに闘ったか、エプディオンはもう老人で半白であったが、しかも胸は深く、手も腹も胸も実にみごとであったというようなことを話さなくっちゃだめですよ。

ピロクレオン　やめろ、やめろ。馬鹿げた話だ。パンクラティオン競技を胸当て[10]なんかをしてどうしてやるんだ。

ブデリュクレオン　気のきいた連中はこんな風に話をすることになっているんですよ。だが何かもう一つ他のことを話してごらんなさい。よその男たちと飲んでいるときに、どんな風な若いころのいちばんの武勇伝を話しますかね。

ピロクレオン　そりゃあのことさ[11]。おれのやったことのなかで、いちばん勇ましかったのはエルガシオンの葡萄の樹の支え棒を失敬したときだよ。

ブデリュクレオン　情けないな、全く。支え棒ですって。そんなことじゃなくって、猪を狩った話だとか、兎狩、炬火（たいまつ）競争[12]の話とかですよ。あなたのいちばんの年少気鋭の手柄話ですよ。

ピロクレオン　わしのいちばん年少のときの話だって、わかったよ。そいつはわしがまだ小僧っ子のときさ、あの逃げ足の速いパユロス[13]を誹

誹罪で追求して、二票の差でとっちめてやったときのだ。
ブデリュクレオン　もう結構です。だがここに横になって飲み仲間となり、人づき合いをよくすることを習ってください。
ピロクレオン　どういう風にだね。さっそく話して貰おう。
ブデリュクレオン　体裁よくですよ。
ピロクレオン　こういうぐあい[1]に横になるのかね。
ブデリュクレオン　とんでもない。
ピロクレオン　じゃどうするんだ。
ブデリュクレオン　膝を延ばしていかにも慣れきったように楽々とクッションのなかに沈みこむ。それから、まあ食器を褒める。天井を観る、ホールにかかっている織物をみごとですなと言う、ところへ手洗の水。食卓が運びこまれる。食事をする。食後の潔めの水。さあ今度は神々への捧物と来る。
ピロクレオン　こりゃ驚いた。夢のなかで宴会をやっているのか。
ブデリュクレオン　笛吹きの妓[2]が演奏をした。集った連中[3]は、テオロス、アイスキネス、パノス、クレオン、アケストル[4]の頭のところに、も一人外国のお客。こんな連中とスコリオンをうまくつけられますかね[5]。
ピロクレオン　本気でそんなことを言うのか。わしはディアクリオイ中で並ぶ者のない男だぞ。
ブデリュクレオン　一つ試験をして見ましょう。私がクレオンになって、ハルモディオス[6]という題ではじめますから、あなたがうけるのですよ。
〔歌って〕「アテナイの市にはいまだかつて」
ピロクレオン　「汝のごとき悪徳の盗賊はなかりき」
ブデリュクレオン　そんなことをするつもりですか。あまり銅羅声をあげると酷い目にあいますよ。あいつはあなたをやっつけて破滅させ、この国から追い払ってやると言うでしょう。
ピロクレオン　おれはな、そうだとも、奴が脅迫なんかしやがったら、もう一つ他の歌をうたってやる。
「やい、奴郎、権力気違いめ、
いまに市までひっくら返してしまうだろう。もう大分危いんだよ」
とね。
ブデリュクレオン　それじゃテオロスがあいつの次の席に横になっていて、クレオンの右手を取って
「友よ、アドメトスの譚[7]より、よき人々を愛するを学べ」
と歌ったら、なんと後をつけますか。
ピロクレオン　おれはな、まあ抒情詩風に
「狐の真似ごと役には立たぬ。
二股がけの日和見もまた」ってね。
ブデリュクレオン　その次はセロスの息子のアイスキネスがうける。才のある風流人ですよ、そして歌うでしょう。
「金と力を
クレイタゴラ[8]と私に
テッサリア人とともどもに」
ピロクレオン　「お前とおれとは大法螺ふいた」
ブデリュクレオン　あなたはこの点じゃ及第ですよ。だからピロクテモン[9]の宴会に出かけましょう。おいおい、クリュソス[10]、おれたちの弁当を用意しろ、久しぶりで酔っぱらうんだ。
ピロクレオン　飛んでもない。飲むのは悪いことだ。酒からだよ、戸を破ったり、なぐったり、投げつけたり、挙句の果ては気持が悪くなり、酔ざめには罰金を払わせられたりするのは。
ブデリュクレオン　立派な紳士がたといっしょならば、そんなことはありませんよ。その連中が被害者からあなたを乞いうけて[11]くれるか、それともあなた自身が何か洒落た話をする、イソップの面白い話とか、シュバリスのとか、宴会で教わったもののなかから。そして事件を笑談にしてしまう。そこで男はあなたを許して立ち去る。
ピロクレオン　ふふん。そんな話はうんと教わる必要があるな、悪いことをしておいて、何にも食らわなくてよいとなればね。さあ出かけよう。何ごとだっておれさまたちを引き留めることはできないぞ

〔両人退場〕

コロス　おれは何度も思ったことがある、（素敵に）利口だとね、だが一度だって頓馬だなんて夢にも考えたことがない。ところがセロスの息子の、あの丁髷連中の仲間のアミュニアス(1)ときたら、いまじゃ林檎や石榴でやっとこさ露命をつないでいる始末さ、おれはかつてはあの男がレオゴラスと食卓をともにしているのを見たことさえあるのだがね、まるでアンティポンのようにかつえているんだから。あいつがパルサロス(2)へ大使になって行ったのさ。そしてそこでたった一人でテッサリアのペネスタイ(3)どもとばかりいっしょに暮していたのさ、あいつ自身が誰にもまけず貧乏だからね。（一二七四）

　幸福なアウトメネス(4)、なんと運のいい男だ、素敵もない達人の息子たちを生んで。まず第一に誰にも彼にも人気があって素晴らしいあのハーピスト中のハーピスト。あいつには優雅がお供をしている。次にはあの俳優だ。あまり素晴らしくって困るほどの。それからアリプラデスだ。全くの天才で、誰にも一度だって習ったことがないのだが、天性の聡明で、ひとりでに女郎屋に行くたびに新発明をしたってね。

　(5)おれが仲直りをしたって言う奴がある。クレオンが襲って来て、おれをちょっぴり困らせ、おれをもういろんな悪事でうんざりさせたときに。おれが酷くやられて皮をひんむかれている間、関係のない奴らは苦しまぎれに大声で喚いているこのおれを眺めて笑ってやがった。涼しい顔で、おれがぎゅうぎゅうとやられたあまりに、何かおどけたことでもひねり出しゃしないかと思って。これを見てとって、おれはちょっと猿の真似をしてやった。そこでやっぱりあいつは飼犬に手を噛まれたというわけさ。（一二九一）

クサンティアス　亀の奴め、なんと運がいいんだ、こんな皮を持っているとは、しかも胸のまわりに屋根があるとは全くうまくしていやがる。なんとうまくしかも頭のよいやりかたで身体防禦用の瓦で背を葺いているんだ。ところがおれさまと来た日には杖でなぐられて痣になり、すんでに参ってしまうところだ。

コロス　どうした、ボーイさん。年寄りでもなぐられるような奴はみんなボーイと呼んでいいんだからな。（一二九八）

クサンティアス　あの爺さんと来たらいっしょにいた連中のうちでいちばん始末の悪い奴で、そのうえいちばんの虎になる方じゃありませんか。しかもヒプュロス(6)、アンティポン、リュコン、リュシストラトス、トゥプラストスといったプリュニコスの仲間がそこにいたんですよ。こんな連中なんかみんな無茶な点ではとても敵やしない。うんとこさとうまい物を腹一杯に詰め込んだとたんに、跳り上る、飛び跳ねる、屁をひる、げらげら笑う、まるで大麦の大盤振舞いにありついた驢馬だ。それから若い者のするように私の背中をぽんと叩いて、ボーイ、ボーイって呼ぶんです。（一三〇七）

　そこでリュシストラトスが爺さんを諷して言うには「お年寄り、あなたは成金のプリュギア人(7)か、麦桶に走って行く大声で喚く驢馬のようですな。」ところが爺さんは銅羅声を張り上げて、リュシストラトスを翅をなくした蝗のようだ、マントの垂れがありゃしない、まるで商売道具をなくしたステネロス(8)だと言い返したんです。そこで拍手喝采だが、トゥプラストスだけは別口でしたよ。こいつは粋人で、ウィット気取りだから、口をへの字にして苦虫をつぶしたような顔をしていた。爺さんはそこでトゥプラストスに尋ねた。「一つお教え願いたいが、いったいなんでそう乙に澄まして威張っているのかね。金持ちの太鼓持ちめ」（一三一八）

　こんなぐあいに一人一人を順々にからかった。柄の悪い洒落を飛ばし、そのうえくだらない見当はずれのことを言って。あげくの果てが酔っぱらって、誰でも彼でも手あたり次第に片っぱしからぶんなぐりながら、ご帰館のところでさあ。やあ、来た来た。全くの千鳥あしだ。痛いお見舞いをうけないうちに、消えてしまいましょう。（一三二五）

ピロクレオン　〔炬火を振りまわしながら、笛吹女のダルダニスを連れて〕[1]
　高く挙げろ、手渡せ手渡せ。
　いまに後からついて来る奴らは
　泣声をあげるようになるぞ。
　とっとと失せてしまわなければ、
　悪漢どもめ、この炬火で手前どもを
　素敵なフライにしてやるぞ。（二三〇）

お客の一人　明日はおれたちみんなに対して、お前の仕業の弁償をさせてやるぞ。お前がどんなにお若くってもね。おれたちがいっしょにやって来て、お前を召喚してやるから。

ピロクレオン　ウエヘッヘ、召喚する、
　時代遅れだよ、そんなのは。
　おれがもう訴訟なんかは聞くのもいやになったってことを知らないのか。ウッフ、ヘン。
　これがおれさまのお気に入りだ。投票箱なんて糞くらえ。
　あいつは失せてしまわないんだって。裁判役はどこにいるんだ。とっとと失せろ。（二四一）

〔笛吹女に〕小さい可愛い黄金虫さん、ここへおいで、この縄を手に取ってね。さあ持ってごらん。おっと気をつけて、縄が腐っているからな。だがね、やはりこすられることはいやじゃない。見ろ、なんてうまくお前をこっそり連れ出してやったんだ。お前はいまにもお客どもにレスボス女の真似をするところだったな。だからお前はこいつにそのお礼をするんだよ。だがお礼なんかするどころか、たぶらかして、うんとこいつを嘲笑うつもりだろう。お前は他の大勢の奴らにも同じことをしたんだからな。さあ、いい子になれば、おれさまが、息子が死んだら、お前を身受けして妾にしてやるよ、小っちゃな豚さん。[2]いまじゃおれは自分の財産も自由にならない。おれは若くって、恐ろしく厳重に監督されているからね。息子がおれを見張っているのさ。奴は苦虫の方でな、そのうえ爪の先に灯をつけたり、茶碗のなかに米を浮かしたりする手合さ。おれが不良になりはしないかと心配していやがる。というのもおれさま以外には奴には父親と名のつくものがいないからさ。や、奴が来たぞ。おれを探して走って来るようだ。大急ぎでこの炬火を持って、じっと立っているんだ、このおれさまが若い者のするようにからかってやれるようにな、ちょうど奴がミステリの入門式[3]のときにおれにやったと同じぐあいにだ。（二六三）

ブデリュクレオン　やいやい、あんぽんたんの色気違いめ、恋をした、しかもぞっこん惚れこんだようですな、妙齢の——棺桶[4]に。アポロンの神様に誓って、こんなことをしでかしちゃ、ただごとではすみませんぜ。

ピロクレオン　これはこれは、なんてお前は酢あえの裁判が好きなんだ。

ブデリュクレオン　戯談（じょうだん）じゃありませんよ。笛吹女を飲み仲間から盗み出すなんて。

ピロクレオン　どんな笛吹女だ。なんという囈言（たわごと）だ、まるで墓の中からでもころがり出た[5]ようだな。（二七〇）

ブデリュクレオン　何ですって、ほらそこにダルダニスがあなたの側にいるじゃありませんか。

ピロクレオン　うんにゃ、それは市場の神様用の炬火さ。

ブデリュクレオン　炬火ですって。

ピロクレオン　そうだよ。焼印が見えないのかい。

ブデリュクレオン　それじゃその真中にある黒いものは何ですか。

ピロクレオン　燃えている間に松脂が流れ出たんだ。

ブデリュクレオン　後ろの方にあるのは、こりゃお尻じゃありませんか。

ピロクレオン　それは炬火から新芽が出ているんだよ。

ブデリュクレオン　何を馬鹿げた。新芽ですって。〔女に〕さあこっちへ来ないか。（二七六）

ピロクレオン　ハッハッ、何をしよってんだ。

ブデリュクレオン　こいつをつかまえて、しょっぴくんです。あなたか

ら奪ってね。私の見たところでは、あなたは腐った無能力者ですよ。

ピロクレオン　まあおれの言うことを聞け。おれがオリムピアの競技を見ていた間にな、エプディオンがアスコンダスと闘ったのだ。勇敢だったね、もう奴は老人だったが。さあそこで若者を拳で打ってのばしてしまったんだ、年寄りの方がだよ。だからお前も顔の真中にお見舞いをうけないように用心しろ。（一三八八）

ブデリュクレオン　全くオリムピアをうまくお手のものにしたもんだな。

〔ピロクレオンが途中で暴行を働いた大勢の人々が、各々召喚立合い人を連れて登場〕

パン焼の女　さあ加勢しておくれ。神様が証人だ。ここにいるこの男だよ、妾を死ぬほど酷い目にあわせたのは、炬火(1)でなぐってさ、そのうえこの籠からパンを十オボロスがとこと、別に四オボロス分を投げ出したんだよ。（一三九一）

ブデリュクレオン　どんなことを仕出かしたかわかったでしょう。あなたの酒乱のおかげでまたまた事件だ。裁判ですよ。

ピロクレオン　どういたしまして。気のきいた話を二つ三つすれば、まるく治まるからな。だからすぐにこの女と仲直りして見せるよ。

パン焼の女　二柱の女神さま(2)に誓って、アンキュリオンの娘でソストラテを母に持つこのミュルティアに害を加えては、ただごとではすまないよ。こんなに妾の商いを台なしにしてさ。

ピロクレオン　まあ耳をかしな、お嬢さん。いい話をしてやろう。

パン焼の女　ゼウスさまに誓って、いやだよ、この唐変木め。（一四〇〇）

ピロクレオン　ある晩イソップが夕飯から帰る途中でお転婆で酔っぱらいの牝犬がほえついた。そこでイソップが言うには、「牝犬よ、牝犬よ、ほんにお前がその悪性の舌の代りに、小麦を買い入れたらば、わしはお前が利口だと思うんだがね」

パン焼の女　妾を嘲弄するんだね。おまえさんが誰だろうとかまやしない。市場のお役人さんのところへ商品破毀罪で召喚してやる、妾の召喚立会い人はここにいるカイレポン(3)さんだよ。

ピロクレオン　まあまあおれの言うことに理があるかどうか聞きなさい。ラソス(4)とシモニデスが昔々お互に競争相手だったことがある。そのときラソスが「おれは屁とも思ってやしない」と言ったんだよ。（一四二）

パン焼の女　そりゃ本気かい、こん畜生。

ピロクレオン　やい、カイレポン、お前はあの女の召喚立会い人か、エウリピデス(5)の脚に抱きついて、ぶらさがっている黄いろい顔のイーノーみたような野郎だな。

ブデリュクレオン　また誰か他の奴があなたを召喚しにやって来たようですぜ。こいつもとにかく召喚立会い人を連れているな。

〔告訴人が立会い人を連れて登場〕

告訴人　なんて酷い目にあったんだ。老人、お前さんを暴行罪で訴える。

ブデリュクレオン　暴行だって。そいつは断じてやめにしてください。私が父のためにあなたに損害賠償をしますから。お望み次第。そしたらお礼を言いますよ。（一四一〇）

ピロクレオン　おれはあいつと仲直りしよう、喜んで。なぐったりぶったりしたことは認めるよ。だがこっちへ来い。おれに仲直りのための賠償金額の決定を委せるか、それともお前さんが決めるかね。

告訴人　あなたから言ってください。私は裁判や事件には用がないんだから。

ピロクレオン　シュバリスの男が車から落ちて、頭をうんとひどく割ったとさ。その男が馬を御する術を知らなかったからだ。そこへ友だちが助けにやって来て、言うには「めいめい自分のよく知っている技をするがよい。」だからお前もピッタロス(6)のところへとんで行け。

ブデリュクレオン　全くこりゃあなたの他の遣り口と同じですよ。

告訴人　〔ブデリュクレオンに〕やい、お前さん自身であいつがした返答をよく覚えておくんだぞ。（一四一四）

ピロクレオン　まあ聞け、遁げるな。昔々シュバリスである女が壺を割ったとさ。

告訴人　さあ、この証人になって貰うぞ。

ピロクレオン　その通り、壺は誰か知らないが証人をつれて来た。そこでシュバリスの女が言うには、「コレー[1]さまに誓って、こんな証言なんかはやめにして、大急ぎで修繕用の金具を買えば、お前さんはよっぽど利口なんだがね」

告訴人　いくらでも嘲弄するがいい。お役人が裁判に附するまではね。

ブデリュクレオン　デメテルに誓って、もうここにぐずついていてはだめですよ。私が抱えて連れて行こう。

ピロクレオン　何をするんだ。

ブデリュクレオン　何をですって。ここからあなたを家のなかに抱え込むんですよ。さもなきゃいまにもう告訴人が多すぎて、召喚立会い人が足りなくなってしまいますよ。

ピロクレオン　デルポイの人々があるときイソップを。

ブデリュクレオン　そんなことはどうでもいいや。

ピロクレオン　神様の器を盗んだ[2]と咎めたとさ。しかしイソップが彼らに言うには、昔々かぶと虫が。

ブデリュクレオン　こん畜生、あなたもかぶと虫もみんないっしょに消えてなくなれ。

〔家の中に入る〕

コロス　老人の幸福が羨ましい。
無味乾燥な習慣と
生活とを変えてしまった。
今度こそは他の遣りかたを習って
贅沢(ぜいたく)三昧、長袖流に
変って行くことだろう。
だがやはり気にくわぬかも知れない。
むずかしいことだよ、長い間の
習慣を変えることはね。
だが大勢の人がこいつをやった。
他の人の意見に従って
暮しかたを変えたんだ。
ピロクレオンの息子は
わしやまた好意を持っている人々に
大いに賞讃された、
父に対する愛情と賢明のゆえに。
こんなやさしい心根には
会ったこともなければ、
こんな激しい感情で
心が浪立ち溢れたこともない。
どんなことでも論議にかけては
あいつは負けたことがない、
父親にもっと立派な暮しを
させようと思って。

〔クサンティアス登場〕

クサンティアス　ディオニュソスさま、何だか知らないが魔性のものが、とんだ大騒ぎを家のなかにどっと吹き込みやがった。爺さんめ長い間やったことのない酒を飲んだり、笛の音を耳にしたりしたと思ったら、すっかり有頂天になっちまって、一晩中踊りまわって、あの古くさいテスピス[3]の踊りをやめやしない。そしていまどきの悲劇作者は老いぼれの馬鹿者だということを証明して見せてやると言っている、すぐさま奴らとダンスの競技をして。

ピロクレオン　門[4]前に候うは誰じゃ。

クサンティアス　さあ、いよいよ禍神(わざわいがみ)のご入来だ。

ピロクレオン　門をはずすがよい。これこそ舞踊のはじまりじゃ。

クサンティアス　それよりか気違いのはじまりですよ、どうもね。

ピロクレオン　〔ダンスをはじめて〕勢いあまって胴はねじまがり

鼻息あらく
背骨の番(つがい)は犇(ひし)めき合う。

クサンティアス　ヘレボロス[1]をお呑みなさい。

ピロクレオン　闘鶏のごとくにプリュニコスは身をかがめる。

クサンティアス　いまに打ちかかるだろう。

ピロクレオン　天にもとどけと脚をば蹴りあげ、
お尻の穴がぱくっと開く。

クサンティアス　危ない危ない、気をつけて。

ピロクレオン　いまやわれらの関節中で
お椀のようなソケットがぐるぐるまわるわ。

ブデリュクレオン　こりゃいけない、神様。こいつは気違い沙汰だ。

ピロクレオン　さあ来い、誰でもよいから相手にしてやる。われこそは舞踊の名人と思う者は、わしと競技をしに、ここへやって来い。誰かあるかね、それともないのか。

ブデリュクレオン　たった一人あそこにいますよ。

ピロクレオン　どいつだ、その運の悪い野郎は。

ブデリュクレオン　カルキノス[2]の息子のまん中の奴ですよ。

ピロクレオン　こんな野郎はただの一呑みだ。指[3]の関節だけのダンスであいつなんかは粉微塵にしてやる。あいつはリズムの観念が零だからな。

ブデリュクレオン　哀れな奴め、も一人悲劇作者のカルキノスの息子がやって来ましたよ。前の奴の兄弟です。

ピロクレオン　全くこりゃご馳走だね。

ブデリュクレオン　とんでもない、蟹ばかりですよ。またもう一人のカルキノスの息子がやって来ましたぜ。

ピロクレオン　ここにはって来る奴は何だ。酢入れかね、それとも蜘蛛かな。

ブデリュクレオン　こいつは寄居蟹(やどかり)ですよ。一族中でのいちばん小さいので、しかも悲劇の作者ですよ。

ピロクレオン　おお、カルキノス、子供運のよい男だ。なんというたくさんな鷦鷯(みそさざい)の群が飛び降りて来たんだ。よしきた。わしは奴らに対抗して競技に加わらねばならん。お前はこの蟹どもをあえる塩漬をこしらえてくれ、わしの勝利の暁にはね。

コロス　さあさあ、わしらはみんな少々退(さが)って、この連中に場所を明けてやろう。わしらの邪魔をせずに、目の前で、ぐるぐるぐるぐる踊りまわれるように。

海神の高名な息子ども、
小海老の兄弟たち、さあ、
実(みの)なき海の砂上に、波打ちぎわに踊るがよい。
すばやく脚をぐるぐるまわして、
プリュニコス風の手を一蹴りぽんと蹴り上げろ、
見物がたが空高く上がった脚を眺めては、拍手喝采なされるように。

まわれまわれ、輪になって、そして腹をば蹴り上げて
天までとどけと脚をば上げろ。独楽(こま)のようにぐるぐるまわれ。
そしたら親父の海神さまもはいよって来る、
自分の息子の三羽の蒼鷹[4]の踊りに気をよくして。
さあ、踊りながらわしどもを戸口の方へ
先だちしてくれ。いままで誰も踊りながら
コロスを芝居の幕で退場させたことはないのだから。

訳註

一二(1) プリュギアの大地母神キュベレの祭官であって、神を祭るに際し、狂気のように踊り狂うために、気が狂う意味にも使用せられる。

(2) プリュギアのバッコス（酒神）の名であって、酒と同じ意味にここでは使用せられている。

(3) メディア人はペルシア人とともにギリシア本土に侵入したイラン民族の名。

(4) 「楯」の意味を持っているギリシア語のこの語は、また「蛇」の意味をも持っているので、一二行以下の謎に関係があることになる。

(5) 彼は非常な大男であったので、戦場で楯を投げ出して逃げたときに、とくに目立ったものとみえて、アリストパネスはしばしば彼を皮肉っている。

一三(1) これはアテナイオス、第十巻・七八にも見えている「空中にも、地上にも、また海中にも存在する物は何か」という謎をもじったもので、その答えは蛇のごとく、地面、空中および天空（星座の一として）にも存する動物である。

(2) これはアテナイの市民を指す。彼らは集会（ヘリアイア）の一員として、杖を手にし、短いマント風の上衣を着ているのである。

(3) 鯨とは当時の政治家クレオンを指す。彼の貪欲を諷したものである。クレオンはペロポネソス戦役における主戦論者であり、従って詩人のもっとも嫌うところのデマゴーグであった。彼は革商を業とし、権力のためには手段を択ばぬ男であったらしい。前四二七年のミュティレネの反乱に際して、その住民を奴隷としまた虐殺することを主張したのも彼であった。が、クレオンは一面アリストパネスの言うような臆病者ではなく、反対に自ら戦いに加わることを怖れなかった実行主義者であった。前四二九年ペリクレスの死後、次第に勢力を得、スパクテリアにおいてスパルタ軍を敗ったことによって名声を高めたが、スパルタの将軍ブラシダスがアムピポリスを自己の手中に収めたときに、彼は同市奪還のため派遣せられたアテナイ軍の将として出征し、遂に前四二二年に戦死した。アリストパネスは終始クレオンを攻撃した。

(4) 「革の臭い」 クレオンは革屋であった。

(5) ここで「国」と訳したのは、ギリシア語で「デーモス」であって、この語はアクセントの差でもってまた「あぶら肉」の意味にもなる。その両方にかけての地口である。

(6) クレオンの取巻き連中の一人。

(7) 前四五〇年よりやや前に生れ、四〇四年に暗殺せられたアテナイの有名な政治家。彼の舌たらずの物の言いかたは、はなはだ魅力があったそうである。「追従者」と「鳥」という語はギリシア語ではlとrの一音の差で他は同じ形を持っているので、それをもじって洒落たもの。

(8) 人間が鳥になるがごとき不自然な変化は兇事の前兆とされていた。

(9) 原文「鳥の群に云々」は「地獄に落ちる」という意味を持っている。「犬にでも食われてしまえ」と言うところを、ギリシア語では「鳥のところへ」と言ったのである。

(10) メガラ市はアテナイよりコリント地峡にいたる途中にある。この市の喜劇ははなはだ下品な悪ふざけが多かった。

(11) 籠から栗を見物に投げたり、ヘラクレスが飯にありつかれなくて憤り、いろいろと下品な真似をするのはともにメガラのポルトスと称せられる笑劇の常套手段であった。

(12) クレオンはこの喜劇の上演せられた当時スパクテリアにおいて勝利をえて、さらに新たに遠征軍を組織せんとしていた。このことを詩人は指しているらしい。

(13) アミュニアス以下の名前はすべて実際にその当時アテナイにいた市民の名であって、各々がかかっている病癖を詩人は挙げているのである。これはアリストパネス一流の皮肉であり、アミュニアスは賭博気違い、デルキュロスは酒乱、ニコストラトスはかつぎ屋の問屋であった。

一四(1) 有名な少年気違いで、色好みであった。彼の名前は「お客好き」という意味を持っている。それで八二行の「お客気違い」とかけて洒落たものである。

(2) 水時計は裁判所で弁論の時間を計るに使用せられた。

(3) 投票用の小石は親指、人差指、中指の三本の指で持つ習慣であったから、それが癖になったことを言っているのである。

(4) デモスは当時の美男であって、アテナイ市民の渇仰の的であった。当時の恋人は門といわず壁といわず、自分の恋しい人の名に「美しい」という形容詞を附して書き散らしたものらしい。(ただし本文では「恋しい」と訳した)。またこれはデモスとケモス(投票箱についている、何かで編んだ籠のような物で、このなかに手を差し込んで票を投げ入れたもの)との洒落でもある。

(5) アッティカでは役人はその任期が終ると、自分の任期中の報告書を提出する義務があった。これの審査においては、はなはだ不公平なことが多く、ために酷い目にあった市民がしばしばあった。

(6) 裁判の宣告のとき、原告と被告との両方がそのうくべき罰を申し立てることが多くの場合に許された。かかる場合に裁判にあたる人々は蠟をひいた板を持っていて、そのうえに重い方の罰に賛成の者は長い線を、軽い方のは短い線を引いたものである、ゆえに次の行にあるように爪に蠟をいっぱいに溜めて帰って来ることとなる。

(7) アッティカの附近の島の名。

(8) アスクレピオスは病の神で、医者の始祖である。病人は彼の社のなかで眠り、夢のなかで病を癒してもらうのである。アイギナ島には有名なこの神の神殿があった。

一三四(1) 「煙の息子」がなぜに悪い意味を持っているのか不明であるが、古註によれば悪い酒の名であるらしい。

(2) 「門の栓」はまた「胡桃（くるみ）」の意味にもなり、ピロクレオンが鼠のように胡桃をかじらないように注意しろという意味の洒落が含まれている。

(3) 古註によれば当時ひじょうに多くの訴訟にひっかかっていた男の名前だそうであるが、誰であるかは未詳。

(4) アポロンはデルポイの主神であり、文芸、光明の神。またその神託は古代ギリシアのみならず、遠く東部地中海、小アジアでも有名であった。

(5) ポセイドンは海神の名。

(6) 新月の日に売買するのはアテナイの習慣であった。

(7) オデュッセウスの冒険の一つを、以下にアリストパネスは利用している。ポリュペモスと称する一つ目の巨人の棲家より逃げ出した時、彼は巨人を酔わせて後、盲目となし、部下とともに巨人の飼っていた羊の腹の下にぶらさがって、巨人に知られないように岩屋から出ることを得た。そのとき巨人に自分の名は「誰でもない」であると教えて、他の巨人の仲間がポリュペモスに彼の敵の名を尋ねたときに、「誰でもない」と言わせ、仲間が彼に加勢しないように、あらかじめ用心したのである。『オデュッセイア』第九巻、四二五行以下参照。

(8) イタカはギリシアの西部、アドリア海に面した島。オデュッセウスがその王であった。

一三五(1) 原文の「驢馬」なる語はまた「召喚立会い人」の意味にもとれる。立会い人というのは出頭命令が来たときに、その証人として、告訴人とともに被告を召喚する役目を持っていた。一四〇八行以下を参照。

(2) 「驢馬の蔭のため」とは全くとるに足らぬつまらぬことに関して争うことを意味する。この出所は、あるアテナイ人が驢馬を傭ってメガラ(一説にはデルポイ)に行く途中で、日中の暑気を避けるために、驢馬の蔭で休もうとしたところが、驢馬の持主が、蔭まではかさないと主張して、口論となり、遂には裁判沙汰になったという話である。

(3) ピロクレオンはまだ驢馬の話だと思って肉が悪いという意味にブデリュクレオンの言葉を解しているのである。驢馬の下腹の肉はご馳走の一つとなっていた。

(4) パレネ半島にある町の名。アテナイ軍に包囲せられて、二年後にやっと落城したので、当時有名であった。

(5) 前六世紀より前五世紀のはじめの時代に属する初期の悲劇詩人で、その劇はまだ抒情詩を中心として、コロスを主としており、俳優の実際の活動は少なかった。彼の劇中に歌われる歌曲は有名で、人々の好んで口ずさむところであった。シドンの歌とは彼の『フェニキアの女たち』という悲劇中の合唱歌であり、この劇のコロスはシドン(フェニキアの市の名)の女たちより成っていたので、アリストパネスは「シドンの歌」と言ったのである。この歌を喜んで歌うことは、ピロクレオンの仲間がすでに時代おくれの老人であることを意味している。

(6) コロスは胡蜂（きばち）の扮装である。彼らはかつてアテナイのためにペルシア侵入軍と戦った勇士であるが、いまでは年をとり、裁判所の陪審人として、僅かな金をもらってその日暮しをしているピロクレオンのような人たちである。

(7) コンテュレスと次行のプリュアはアッティカの部族名。
(8) 現今のイスタンブールの古名。
(9) アテナイの将軍。前四二九年に二十艘の艦隊の提督としてシシリーに遠征したが、二年後に召還せられ、ピュトドロスがその後継者となった。彼は或いは実際に職務に対する不忠実の件により裁判に附せられたのかも知れない。アリストパネスは恐らくそのことに言及しているのであろう。後出(八九五行)のラベスに対する告訴状を参照。
(10) 普通の召集の場合には市民は三日分の糧食を用意して応召した。
一三六(1) 「サモスの騒ぎ」とは前四四〇年にサモス人とミレトス人との間に紛争が起こったときミレトスはアテナイに援助を乞うた。サモスはペリクレスの攻撃するところとなり、彼は寡頭政府を廃してサモスにデモクラシーの政府を建てて、サモス人中の有力者数名を人質としてレムノスに移した。ペリクレスの去った後に寡頭政府はふたたび力をえて、人質を奪還し、アテナイに公然と反抗した。ペリクレスとソポクレスは六十艘の艦船を率いてサモス市を包囲し、九カ月の後にこれを降した。ここにアリストパネスが指しているのはこの事件であると思われるが、これはこの劇の発表より十八年も前のことである。
(2) アテナイの敵国スパルタの将ブラシダスは、この劇の発表当時、ギリシアの東北にあるトラキア地方において盛んに策動しつつあり、その地の重要都市たるポティダイアを奇襲せんと（またはすでにした後であったかも知れないが）試みていた。この地方の有力者である富裕な人々はアテナイの施政に不服であって、敵に内通していたらしい。
一三七(1) 羊などの動物の四肢の関節にある小さな骨でつくったものであって、日本のおはじきや骰子のように子供の遊戯に使用せられたもの。
(2) 古註によればこれはぜいたくをするということを表現する常套の句であった。
(3) 裁判役は毎日裁判をしたわけでなく、アルコンが彼らの裁判すべき日および場所のふり当てをしたものらしい。
(4) ピンダロスの句。詩人はクセルクセスの遠征軍がヘレスポントスの海峡を渡ったことに言及して、この句をつかっているのである。「瀬戸」を意味するギリシア語はまた「手段」を意味するから、子供は「手段」と言いかけて、とつぜん人口に膾炙しているピンダロスの句を持ち出したのである。
(5) これ以下の数行はアテナイの悲劇詩人エウリピデスの失われた悲劇『テセウス』の真似であって、古註によれば、怪物ミノタウロスの犠牲にならんとするアテナイの少年が自分の運命を嘆いて発する言葉である。すなわち「気の毒な母上、どうして私を生んでくださったのです。ミノタウロスの餌食にあたえられるためにでしょうか」というのをもじって、アリストパネスがここに用いたのである。この箇所は原典の解釈上いろいろな難点があるが、コベットの説によった。このもじりはさらにつづいて、「父上、せっかく私を生んでくださってもそれは無益な飾り物にすぎませんでした。おお、私たちには嘆きあるのみだ」というのを、子供は袋（食料品入れの）にかけて洒落たのである。
(6) ゼウスは雷霆をもって敵を撃つと言われる。
(7) プロクセニデスは大法螺吹きであった。煙のように実のないものの形容に使用せられている。
(8) 「セロスの息子」とはアイスキネスのことである。やはり法螺吹きで有名であった。
(9) 「にせ物の木葡萄」とはアリストパネスの新造語である。この木は燃えるときに途方もない大きな音を立てるのが、アイスキネスの大法螺の演説に似ているというのである。
(10) この行と三三〇行はエパントラキデスと呼ばれた小魚の料理のことをもじったもので、これはまず灰のなかでよく焼いてから、灰を吹き払い、あつい酢と塩水でつくったソースのなかに入れてのち食べる。
一三八(1) デマゴーグクレオンとはブデリュクレオンをもじったものである。コロスの老人連は憤慨のあまり興奮して「デマゴーグのクレオンめ」と自分たちの親分の悪口を言ってしまった。
(2) 「軍艦云々」というのは、アテナイの金持ちは三重櫓のトリエレスという型の軍艦を自費にて維持する義務があり、彼らがこの役目を遁れようとして策動しているのをピロクレオンが知っているので、それでブデリュクレオンが秘密の発見を怖れて父を監禁しているのだというのである。いつもの手で、老人連はでたらめな言いがかりをつけている。またこの「船」を意味する語は同じ形で「若者」をも意味しうるから、この両方にかけての地口でも

ある。

(3) オデュッセウスは身をやつしてトロイア城内に潜入したことがある。また彼が乞食に扮装して自分の故郷イタカに帰った話もある。

(4) 原文には opian（チーズの一種）という字が使用されていて、これは穴（ope）の縮小形と通ずるものだから、それで洒落のめしたものである。

(5) エーゲ海上の島の名。ナクソスの陥落は前四六六年のことで、キモンが将軍であった。この劇上演の約五十年前の話である。

(6) アルテミスの別名。狩猟の女神である。

(7) 「両の女神」とは穀物の女神デメテルとその娘で地獄の王ハデスの妃ペルセポネのこと。コロスはこの両女神を主神とする有名なエレウシスのミステリア（一種の神秘宗教の名）と言いかけて、とつぜん「錠」と言ったのである。この両女神のミステリアを潰す罪に対する罰ははなはだ重いものであった。

(8) ディオペイテスは有名な占師の名。彼の狂気のような神憑はよく当時の喜劇作者の諷刺の的となった。

一三九 (1) リュコスはアテナイ王パンディオンの子で、すべての裁判所に祭られていた。

(2) 「豊年祝の花環」とはアテナイでタルゲリアとピュアネプシアの祭に使用せられる、オリーヴの枝でつくったものであって、祭日の後では家の戸口にかけられるをつねとした。

(3) 「皆さんがたの親分」とはクレオンを指す。

(4) 「ゴルギアスの息子のピリッポス」は何人であるか不明。

一四〇 (1) ミダス以下の三名は奴隷の名前。

(2) 無花果の葉の燃えるときにパチパチと大きな音を立てることは諺となっていて、むやみと人を嚇す者の形容となっていた。

(3) ケクロップスはアッティカの最初の王。彼は竜の歯より生れたと伝えられる。彼はまたよく腰以下が蛇形の形で表わされている。ゆえにここではドラコンティデス（竜の息子）と呼ばれているのである。

(4) 原文には「一コイニックスに四つできるパンの棒」とあって、古註によれば、これは正しい一つのパンの棒の分量であり、多分これは一種の諺であって、「充分に」の意味を持っていたらしい。さらに「コイニックス」は奴隷を懲しめるに用いた一種の枷をも意味するから、その両方に意味を通わせたものらしい。

(5) 「セラルティオスの息子のアイスキネス」は前出の「セロスの息子」と同人で、ここでもアイスキネスの法螺が煙にたとえられている。

(6) 彼らはプリュニコスの甘い歌で養われていたからよかったが、苦虫をつぶしたようなピロクレス（アイスキュロスの甥で、有名な気むずかし屋で、にがり虫であった悲劇詩人）のつくった歌を食べていた日には、なかなかそうは問屋が卸さなかったところだという意味。

(7) 長髪は丁年に達して以後は、貴族趣味であり傲慢の徴しとみられた。アミュニアスに関しては一三二ページ註(13)および一五七ページ註(1)参照。

(8) スパルタの将軍。ペロポネソス戦役で大いにアテナイ軍を苦しめた。ことにそのアムピポリスの攻略は有名。彼は前四二二年にこの市を攻めたクレオンと対陣中戦死した。

(9) 原文は「パセリと芸香にも入っていない」とあり、これらはアテナイの花壇の縁取りにつかわれた草であって、「まだ話の本筋に入っていない」という意味である。

一四一 (1) 鯡のような安物の魚ではなく、うまい鱸を買おうとすると、自分の店のものを買って貰えなかった鯡売りが貴族趣味で専制政治の味方のアリストクラシー好きだと言うし、その反対に安物のアンチョヴィを買って、味付けに韮を買おうとすると、やっぱりこいつはぜいたくな貴族趣味の奴だと言われる。どちらにしてもたすからないという意味である。

(2) ヒッピアスは「騎士」の意に通じるところから、五〇一行の「馬」という語にかけて洒落たのである。ヒッピアスはアテナイの僭主でペイシストラトスの息子である。

(3) 有名なぜいたくな暮しをした男である。

(4) 「鳥の乳」とは、とてもできない相談のぜいたくな生活を意味する。

(5) ボイオティアのコパイス湖の鰻はモリュコスの好むところのぜいたくな食物の一つ。がんぎえびも同様。

(6) これ以下五二三行までは、以前はブデリュクレオンの言葉とされていたが、ベルグラー以下の最近の校訂者はほとんどすべてピロクレオンの言葉としている。剣に折り重なって死ぬというのはトロイア戦争の英雄アイアスが

したと同じ自尽の方法であり、昔風なピロクレオンにふさわしい。

(7) 古代のギリシア人は通常は葡萄酒に水を割って飲んだ。しかし宴会の終りの幸運を祈る祝盃には水を割らないで純粋の葡萄酒をもってした。ピロクレオンにとっては酒よりも裁判役の日当の方が大切であったので、「酒」といいかけて、とつぜん「日給」と言ったのである。

一四二(1) パンアテナイア祭で、老人がオリーヴの枝を担いで列に加わるところから、オリーヴを担ぐ以外には何も役に立たないもうろく爺と言う意味となる。

(2) 原文では「裁判における反対宣誓のぬけ殻」となっている。アテナイにおいては原告がその訴えの真なることを宣誓するに対して、被告もまた自己の無罪を誓い、ともにその主張の正しいことを神明に誓って後、はじめて訴訟が成立する。このことにアリストパネスは言及しているのである。

(3) これはまた異読によれば「われわれを悩まして」ともとれる。

(4) ギリシア語では「アイソポス」であるが、日本で一般に通用している呼名に従って「イソップ」とした。

(5) 子供を法廷に立てて、憐みを乞う手段はこの当時許されていた。

(6) すべてのアテナイの役人はその職務期間の終った後に、期間中に自己のなした事柄を報告する義務があった。これは最初に公開の審査会に附せられ、それを無事に通過した場合にはよいが、通過しなかった場合には、陪審廷に送付せられて、ここで裁かれることとなる。

一四三(1) アテナイでは少年が十八歳に達すると、その年齢および自由なる市民の資格を有する両親の嫡出子か否かを審査する。この審査を通過すれば、少年たちは壮丁として登録せられる。この際に陪審員は第二の資格に関して、その嫡出なりや否やを決定する権利を持っていた。これはアリストテレスの言うところであるが、たぶん彼らは第一の資格たる年齢に関しても容喙することができたのではあるまいかと考えられる。なおこの註でいう陪審員とは本文の裁判役のことである。

(2) アテナイ市の人気俳優の名。

(3) 『ニオベ』は多分アイスキュロスかソポクレスの作にかかる悲劇を指すらしい。両詩人が同名の悲劇をつくったことが判明している。ニオベはギリシア神話中の女の名である。

(4) 笛吹きはよりよく笛の音を出すために、両頰にぴったりと合うような革の頰あてをつけて笛を吹いた。ゆえに「頰あてをつけて」とは力いっぱいに笛を吹くという意味になる。

(5) アテナイにおいては、息子がない場合には娘が相続人となりうるが、現今の意味とは異なり、その娘は「財産とともに処分される者」である。すなわち父は遺言により娘の夫を定めることができる。この場合には彼女を娶った男にその財産は帰する。かかる遺言のない場合には、もっとも近い血縁の者が彼女と結婚することができる。しかし二人以上のこの権利を持っていると主張する者が現われた場合には、訴訟が起こることがあり得るのである。

(6) 「蓋」とは遺言の封印が破損されないように、そのうえにかぶせるものである。

(7) 他の役人はすべて役の終りに執務報告をして、取調べをうけ、もし汚職があれば罰せられるが、裁判役は取調べるだけであって、彼ら自身は誰に対しても責任をとる必要がない。

(8) 評議会（ブーレー）や民会（エクレシア）はしばしば陪審廷（ヘリアイア）に種々の事件を送付して諮問した。陪審廷はすなわち裁判役より成っている。

(9) エウアトロスは大法螺吹きの雄弁家、弁護士。コラコニュモスは前出のクレオニュモスのこと。「クレオ」(名誉)のかわりに「コラコ」(追従者)なる語をもって新しい名をつくり、皮肉ったものである。

(10) デマゴーグどもは民会の好意をうるために、裁判役の者どもがたった一つの訴訟に判決を下すや否や、直ちに閉廷して、しかも一日分の給料をあたえるようにした。

(11) 何人であるか不明であるが、とにかくテオロスと同じような、三百代言的人物であったことは確かである。

(12) これは諺の一つであって、ひじょうに苦労してやっと洗っても、けっきょくはだめである尻のように、苦労して勝利をえても、それはけっきょくむだなものであるという意味。

(13) 雷霆はゼウスの支配するところだと考えられていた。

一四四(1) すべての殺人の罪を犯した者は穢れたる者であって、規定の祓いをうけない間は、あらゆる社会的の交りをすることを禁ぜられた。ゆえに当然犠牲の供物たる獣の内臓などは断たなければならないのである。

(2) 各裁判役の日給は三オボロスで、六〇〇〇人で一日に一八〇〇〇オボロ

ス、すなわち三〇〇〇ドラクマ＝三〇ムナ＝二分の一タラントンに相当する。祭日で裁判所が休む日を除くと、裁判役は一年のうちで約三〇〇日働くこととなるから、ちょうど一五〇タラントンぐらいが年々彼らに支払われる勘定となる。

一四五（1）古註に「カイレアスはエウポリスが異国人（すなわち正当なアテナイの市民でない者）として嘲った」とある以外には詳細なことはわからない。

（2）この職には十人の定員があって、一ドラクマがその給料であった。

（3）コラクレテスと呼ばれた会計官は閉廷とともに裁判役に日給を支給する。この役は公けの饗応（プリュタネイオンの）や宗教上の儀式の費用などをも司る財務官の下役である。

（4）すなわち黒海よりサルディニア島までとは東北地中海全体、すなわち当時の全ギリシアを意味する。

（5）マラトンは北部アッティカにあるペルシア戦役の古戦場の一つである。ここでアテナイの軍隊はミルティアデスの下にペルシアの第一回遠征軍を敗北せしめた（前四九〇年）。マラトンの平野はアリストパネスの時代にはあまたの戦勝記念物で埋まっていた。アテナイの市民のための記念碑はいまもなお存在している。

（6）葡萄拾いははなはだ僅少の給料しか貰えなかったと古註は伝えている。おそらく貧民階級の多くのものがこれに傭われたものであろう。

（7）エウボイアはアッティカの北にあるかなり大きな島である。古註はピロコロスによって、この喜劇の上演の前年のころ、この島に対して軍が派遣せられたと伝えている。そして多分そのときにあたって政治家どもは人心収攬の目的で人民にこの島を占領した暁には、その土地を分け与える約束をしたものであるらしい。穀物の分配の約束もまた同じように人気取り政策の一つであった。

一四六（1）外国人は上述のごとき穀物の分配はうけられない、ゆえに分配をうけるには正当のアテナイ市民たることを証明しなければならないので、これで厳しく調べられて、やっとのことでこの試験を通過して、分配して貰うことになる。

（2）この言葉はしばしば古代の作家の引用するところであるが、通常はポキュリデス（ソロン時代のミレトスの詩人）の言葉であるとされている。

（3）エウリピデスの『ヒッポリュトス』一二三〇行と『アルケスティス』八六六行とをもじったもの。

（4）ピロクレオンはここで感動のあまり悲劇の口調となり、次の行ではエウリピデスの失われた『ベレロポン』から一句を借用してもじっているのである。『ベレロポン』の原文では「許せ、蔭多き木立よ、云々」となっている。

一四七（1）「日向ぼっこをする」を意味するギリシア語（hēliasei）はまた集会などを意味する語と通じるがゆえに、この両者にかけて「裁判所に集まる」（hēliazomai）という意味をも含ませたのである。

（2）一ドラクマは六オボロスであるから、ピロクレオンはリュシストラトスと二人で一ドラクマ銀貨を貰ったのである。

（3）貨幣を口中に入れて持ち歩くのはギリシアにおいてはごく普通のことであった。

（4）古註によれば「雞ははなはだ熱い胃を有するがゆえに」とある。

（5）ヘカテは女神の名。この神の小さな像や神棚はアテナイの街にはごく普通に見られたものであったらしい。また富裕な市民は月の女神としてのヘカテが夜の間自己の家を守護してくれるように、その戸口に彼女の神棚を祭った。

一四八（1）クレオニュモスは楯を投げ出して逃げたが、その楯のないこと、すなわち武具のないことが彼とリュコスとの唯一の共通点である。これを皮肉ったもの。

（2）「トラッタ」は下女の名。アテナイにおいては、わが国の「おさんどん」のごとく、よくこの名が下女の名として使用せられていたらしい。本来の意味は「トラキアの女」であって、おそらくトラキア出の下女が多かったのでこの名が出たのであろう。

（3）裁判役たちが坐っている場所をかこむてすりのこと。

（4）犬の名であるが、「摑み屋」をも意味しうる。これは前出のラケス（一四〇―二行参照）に対するクレオンの弾劾を滑稽化したものである。

（5）シシリーは有名な牧畜の島であり、そのチーズは全ギリシアに聞えていた。ラケスはシシリー島への遠征に将として赴き、そこで公けの財宝を着服した罪によって訴えられたがゆえに犬のラベスもまたシシリー製の上等のチーズを食べたことによって訴えられるのである。

(6) すなわち蠟びきの板に棒を引いて、罰の軽重を決すること。

一四九(1) ポイボスはアポロンの一呼称である。「ピュトーの大神」とはデルポイに祭られたアポロンを指す。ギリシアの神々はその支配する範囲に応じて種種の特別の呼称を持っていた。

(2) この行の掛声は原文では「イエーイエ、パイアーン」であって、勝利の場合に使用されるものである。これはキリスト教のアーメンのごとく、アポロンに祈るときにつかわれる。

(3) アギュイエウスは門前に立てられたオベリスク形のアポロンをかたどった柱のこと。八〇四行のヘカテと同じく、門口に置かれ、ヘカテとは反対に、昼間家を守護する役目を持っていた。その名称は「道」を意味する「アギュイア」なる語より来ている。

(4) このところ意味が明瞭でない。多くの学者の意見に相違があり、古註もまた曖昧であって、まだ満足な解釈は得られていない。「葡萄酒のシロップ」とここに訳した語は「シライオン」とギリシア語では呼ばれたものであって、これは甘味を加えられた新酒を熱したものであり、古代のすべての辞典はこれをはなはだ甘いものとしている。しかるにこの行の前後の関係は明らかにこれが苦いとか辛いとかの意味を持っていることを要求する。ゆえにアリストパネスの心はおそらく「ピロクレオンのにがい心に蜜を加えて甘くしてください」と言うつもりであろう。

(5) キュダテナイオンとアイクソネはアッティカの区の名前である。この行以下はクレオン対ラケスの訴訟のもじりである。

(6) 無花果(いちじく)はギリシア語でシュコンであり、これは三百代言的人間を意味するシュコパンテスと音が似ているところからの洒落。

一五〇(1) 「シシリー風にする」とはすなわちラケスが人の目のとどかぬシシリーの地で公金を横領したことを意味する。

(2) 「犬」とはクレオンが自分のことを国家の番犬とつねに呼んでいたことに由来している。アリストパネス『騎士』一〇一七行でもクレオンは自己をその主人である民衆のためにつねに忠実に番をする犬に比している。

(3) ピロクレオンは裁判役として、国家の代表者として話しているのである。

(4) 「水瓶修繕用のセメント材料にする石のかけら」を意味する「スキーロン」という語はまた「チーズの外側の堅いところ」をも意味するから、クサンティアスが後者の意味で言っているのを、ピロクレオンは前者の意に取っているのである。

(5) 本来は駒鳥に関して言われた諺であるのを、クサンティアスが盗賊に転用したものである。

(6) 「焦げた道具類」(proskekaumena) と「召喚せられたもの」(proskeklēmena) との洒落。

(7) このツキュディデスはメレシアスの息子で、ペリクレスの政治上の競争者であった男である。彼はキモンの死後前四四九年に貴族の党派の首領となったが、ペリクレスの敵ではなく、前四四三年に貝殻追放せられて亡命した。有名なペロポネソス戦役の歴史家ツキュディデスとは全く別人である。彼が法廷に立たされたときに、茫然自失して、ものが言えなかった有様は『アカルナイの人々』七〇二行以下にも見えている。

一五一(1) 「竪琴云々」は諺であるらしい。すなわちラケスが武骨一遍の者であって、戦争のこと以外は何にも知らないという意味。この彼の武骨な性格はまたプラトンのその名を冠せられた対話に現われる彼の性格とよく一致している。

(2) 弁明を書くことは当時普通のことであった。ただし弁明は通常これを書くことを職業としている弁護士が製作したものを法廷で被告が読んだ。ゆえにピロクレオンの言は特別の場合にのみあてはまる。

(3) ピロクレオンは本当の法廷にいるつもりで、投票の結果がどうなるか予測を許さないと言ったのである。実際にはこの法廷に彼一人しか裁判役はいないのであるが。

(4) 「後の方にある投票入れ」すなわちここには二つの入れ物があり、前の方のは有罪、後の方のは無罪の投票を入れるようになっている。実際の法廷でも同様であったらしく、裁判役は唯一つの票を持っていて、このどちらかの入れ物に札を入れたものであり、後にこれを開票して、多数決によって判決を下したのである。

一五二(1) デマゴーグの一人。彼は下賤の生れであり、悪党であり、見栄坊で野心家であったとアリストパネスは悪口を言っている。

(2) これ以下においてアリストパネスは見物に対して、コロスの口をかりて、自己の考えを述べているのである。ことに詩人が自己の最大傑作と考えてい

る『雲』が一等賞どころか、二等賞にもありつけなかったことに対する不平を言っている。

(3)「ご奉公」とは詩人が民衆の敵であるデマゴーグやその他の者に対して諷刺の戟を向けて戦ったことを指す。アリストパネスはその初期の喜劇を他人の名義で発表した。古註によれば『騎士』以前の作はすべてピロニデスまたはカリストラトスの名の下に上演した。

(4) 腹話術の大家で、魔法使と考えられ、占師として名を得ていた。彼は占をするにあたって、腹話術を利用してあたかも相談した人が自ら話しているがごとき感をあたえたと伝えられている。

(5) 詩人はクレオンに対する攻撃である『騎士』において、はじめて自己の名を現わした。これは当時にあってはひじょうに危険なことであったに相違ない。

(6) これは古註によれば喜劇詩人エウポリスに対する皮肉である。彼は自己の名声を利用してこのようなことをやったらしい。

(7) これははじめて自己の名においてコロスの割当を乞うて、上演したことを意味し、この意味での最初の劇はクレオンを攻撃した『騎士』であった。この劇の上演は前四二四年のことであり、『蜂』の上演の二年前である。

(8) ギリシア神話中の最大の英雄。彼はさまざまの怪物を退治した。アリストパネスは自己をヘラクレスに擬し、クレオンを怪物として表現しているのである。

(9) これはアテナイの破廉恥な淫売の名前であって、『騎士』においてクレオンはこの売女と比較せられている。

(10) 詩人はヘラクレスの武勇伝の考えをここにも入れて、クレオンをヘラクレスに退治せられた百頭の蛇に擬しているのである。

(11) クレオンの声はアリストパネスがしばしば皮肉るところである。

(12) 海豹は悪臭をもってホメロス以来知られていた（『オデュッセイア』第四巻四四二行）。これはまた註釈家によればクレオンが革屋であったことに対する悪口でもある。ラミアはギリシアの化物の一つで、ほんとうは女のお化けであるが、ここでは明らかに男として取り扱われている。駱駝は淫乱の代表として使用せられているのであるらしい。

(13) これは詭弁学者ども並びにソクラテスの一派に対する諷刺である『雲』を指すらしい。「悪寒」とか「熱病」とかはこれらの哲学者を意味している。一〇三九行の言葉は詭弁学派が古い考えかたをすべて攻撃して、はなはだ破壊的な批判をやったことを皮肉ったもの。

(14) この行および次の行は、この新学問がいままではおとなしかった人々を裁判好きな三百代言的人間と化したことを言っているのである。ことにこのことは市民の資格に関して激しかったらしい。ゆえに外国人を監督する役を持っていたポレマルコスがここに挙げられているのである。この役はアテナイの執政官（アルコン）中の第三番目のものである。

(15)『雲』が上演せられたときにうけた冷遇を意味している。

(16) ディオニュソスはギリシアの酒の神であり、また劇の守護神であった。

(17) アリストパネスは戦車競争になぞらえて言っているのである。

一五三 (1) 古代においてはシトロンはよく虫除けにつかわれた。

(2) 古註によれば、この句はロドス島のティモクレオンのものである。一〇六四・五行の句も同じ。

(3) これはエウリピデスの失われた『ステネボイア』からの引用。原文は「恋はそれまでは歌心のないものにも歌心あらしめる」というのである。

(4) これはペルシア戦役を指す。そのときペルシアの軍勢はダティスの指揮の下にアテナイを目指して殺到した。以下一〇九〇行まではマラトンにおけるペルシア軍との戦いの描写である。

(5)「女神の梟」とはアテナイ市の守護の女神アテナイのお使であるところの梟のこと。この鳥が飛んだことはアテナイ人にとっては勝利の前兆と思われたのである。

(6) アリストパネスは「メディア人」という語を、一般的にペルシア帝国の人民並びにその味方を現わすに用いている。アテナイ人はペルシアの侵入軍を敗った後、敵に息もつかせず次々にペルシアの支配下になっているギリシア諸都市（例えばビュザンティオン、キュプロス島など）を取りもどした。しかしながら、この活動はキモンの死後はとつぜん休止して、その後アテナイ人は国内で互に相争いはじめたのである。

(7) アテナイの官吏の腐敗は有名であった。

(8) ここでは種々の法律機関、ことに法廷の開かれる場所を列挙したものらしい。ただし、「アルコンのところで」は別に一定の場所を指すのではなく、

三〇四行に見えるように、九人のアルコンのなかの誰かが裁判長となる法廷を意味するらしい。「十一人衆」とはアテナイのすべての法律上の判決を執行する役人であって、アテナイの十部族より各一人ずつが選出せられ、これに書記が加わったものをもって成っている。彼らはまた刑務所をもその監督下に有し、ここではその近傍にあった法廷を指しているらしい。また彼らはパラビュストンと呼ばれる小さな法廷を持ち、ここでも裁判役を集めて裁判をした。「オデイオン」はアクロポリスの東角にある、ペリクレスによって建てられたコンサート・ホールであるが、また裁判所としても使用せられた。「城壁の下」には何の裁判所があったかは不明である。

一五四(1) 「これ」というのはピロクレオンの着ている短かマントのこと。

(2) 小魚につける汁をマントにこぼして、その洗濯代に三オボロス（裁判役の一日の給料）を払わなければならなかったから、もっと立派な着物を着た日には、とても追いつかないという意味である。

(3) これはペルシアでできる柔かい暖かな被いの一種で、着物や、敷布、蒲団などに使用せられたもの。ぜいたくなものと当時は思われていた。その一方の側は総のようになっていた。

(4) 海岸地方にあったアッティカの一地方で、ペイライエウス港の近傍であったらしい。この地方特産の織物に関しては今日何も伝わるところがない。

(5) 小アジアにあるペルシア有数の都市。おそらくここではカウナケスのごとき織物がごく普通に見られたのであろう。

(6) ペルシアの都の名。

(7) このところに使用されている語は本当は「暴風」を意味するのであるが、その形がいかにも「羊毛食い」という意味を持っているかのごとく見えるので、ピロクレオンが洒落て言ったのである。

(8) ハイカラな流行の赤い靴のこと。

一五五(1) エウリピデス『ヘラクレスの子供たち』一〇〇六行のもじり。

(2) diasa-lakōni-son と Lakōn-ia の洒落。

(3) この怪物が屁をひった話とは何を指すか不明。

(4) カルドピオンが何人であるかは不明である。

(5) テアゲネス自身が豚のような男であった。

(6) アンドロクレスは女の腐ったような男、クレイステネスは奴隷、乞食、掴布切りなどとアリストパネスの喜劇中でしばしば嘲笑されている。こんな二人の男がオリムピアとかデロス島とかの神祭に国家の使者として行くはずがないのに、詩人はこのように言って、二人を嘲っているのである。というのは、神祭への使者はひじょうに重要な役目であったからである。使者はもっとも富裕なもっとも高貴な市民より選ばれ、彼らは、オリムピアのごとき、全ギリシアより各都市の代表の集まる祝典において、他に見劣りのせぬように、ひじょうな苦心をしたものであった。

(7) 一日に二オボロスは兵卒の日給である。ピロクレオンは神祭への使者としてではなく、ただの兵卒としてパロス島に赴いたことを言っているのである。

(8) エプディオンとアスコンダスが何人かは不明である。

(9) これは拳闘とレスリングを混合した競技の一種であって、相手をたおすためにはいかなる手段をも許されていた。

(10) ピロクレオンはブデリュクレオンが一一九三行で「胸」(thōrax)と言ったのを、この語がまた「胸当て」をも意味するところから、誤解をしているのである。

(11) 何人か不明。古註にはただ「農夫」とあるのみである。

(12) 炬火競走とはアテナイのケラメイコスにおいて行なわれたもので、炬火を消さないようにして、順々に継走する競技である。

(13) 有名な競走および跳躍の選手であった。

一五六(1) ピロクレオンは頤を膝につけて横になっているのである。

(2) クレオンの取巻きの一人。

(3) アケストルはその出が外国人であるので、ここでも「も一人外国人のお客」が彼の近くに座を占めていると言って、暗々裡に皮肉っているのである。「頭のところ」というのは、昔のギリシアの宴会では、お客はみんなソファと寝台とをかねたような台の上に横になったからである。そして二人ずつで一つの台を占める。この場合ではクレオンとテオロス、アイスキネスとパノス、アケストルとも一人のお客、それからピロクレオンとブデリュクレオンが各々一つの台に横になっているのである。

(4) 「スコリオン」とは連歌に似たものであって、最初にある題について一人が歌うと、次の男はそれにうまく合わせて次の歌をつくる。このようにし

て次々にまわして、全体がある種の関連を持っているようにつくられる。

(5)　アッティカの高地に住むいちばん貧乏な人々の名称。ソロンおよびペイシストラトスの時代にアッティカは三派に別れていた。その第一は富める平原に住む人々（ペディエイス）、第二は海岸地方に居をかまえている人々（パラロイ）であって、ディアクリオイはその第三であった。古註はパンディオンがその三人の息子にアッティカを分けあたえたときに、ディアクリア地方を、ピロクレオンの崇拝する英雄リュコスにあたえたと伝えている。ピロクレオンが自身をディアクリオイの一人に擬したのはこの故事によっているのかも知れない。

(6)　アリストゲイトンとともにアテナイの僭主ヒッパルコスを暗殺して、市民を救ったアテナイの国民的英雄である。

(7)　アドメトスはギリシア神話中の英雄の一人。その死にあたって、彼にかわる者があれば、死をのがれうるということになったとき、平素彼が親切を示し恩をかけた者は誰一人としてそのかわりになるという者がなく、遂に彼の妻アルケスティスが、彼のかわりとなることを申し出た。おそらくこの文はこの話に関する詩からの引用であろう。

(8)　クレイタゴラはテッサリアの女詩人。一説には彼女をラコニアの詩人としている。クレイタゴラの歌と言われてよく知られている歌があったらしいが、これに関しては遺憾ながらわれわれは何も知るところがない。従ってこの歌の意味も不明である。アイスキネスはつねに金のあることを自慢している男であったから、一二四八行の言葉をピロクレオンに言わして、ひやかしたのである。

(9)　この男についても何ごとも不明。古註は彼がつねに宴会を開いていたと伝えている。

(10)　クリュソスは召使の名。古註によればこのような宴会では、客人は各々自分の食事を持参する習慣であった。

(11)　寓話にはいろいろな名前がその種類に応じてつけられていた。例えばイソップ物語、キュプロス物語、リビア物語、シュバリス物語などである。古註によれば、イソップ物語は動物に関する話、シュバリス物語は人間に関する話を意味したそうである。シュバリスはその富裕とぜいたくとで有名であった南イタリアの市である。

一二七(1)　アミュニアスは以前は金持ちで、エピキュリアンの生活をなし、雄弁家アンドキデスの父であり有名な享楽主義者であったレオゴラスと食卓をともにしたことさえあったが、湯水のごとくに金銭を乱費して、遂にはアンティポンのように貧乏してしまった。アンティポンに関しては全然不明である。ちょんまげと訳したのは「クロビュロス」と呼ばれる結髪の一種であって、アミュニアスが毛を長くのばしていることを意味したものである。彼はセロスの息子ではなく、プロナペスの息子であるが、セロスの息子のアイスキネスが貧乏であるところから、セロスの息子と言って嘲笑したのである。

(2)　パルサロスは後年ポムペイウスとシーザーとがローマ帝国の覇権を賭して戦ったので有名なテッサリアの重要都市である。

(3)　ペネスタイはラコニアのヘイロタイと同じようなテッサリアの農奴の階級である。この語は「貧乏人」を意味するので、詩人はこの両方にかけて、アミュニアスを嘲笑したのである。

(4)　アウトメネス自身に関しては何ら伝わるところがないが、彼の三人の息子は有名であった。長男は有名なハーピストのアリグノトスであり、衆人に尊敬せられていた。次男の名優の名は不明である。三男のアリプラデスはその新発見のけしからぬ方法で知られていた。

(5)　一二八四―九一行に関しては解釈に種々の説があって一定していない。その難点はアリストパネスとクレオンとの間にいかなる経緯があったかをわれわれが確実に知りえないことにある。

(6)　この連中はプリュニコスの仲間として、酔っては乱暴を働くので有名であったらしい。ヒッピュロスに関しては未詳。リュコンは二十年後にソクラテスを訴えた男どものなかの一人である。トゥプラストスは何人か不明。プリュニコスは有名な将軍であり政治家であった人とは別人であるらしい。

(7)　写本によれば「成金の葡萄酒の滓」とあり、これでは意味をなさないから、コックの訂正にかかる「プリュギア人」を取った。

(8)　ステネロスは貧乏のために舞台用の諸道具を売ってしまわなければならなかった悲劇役者。

一二八(1)　このところ意味不明。おそらく炬火競走で走者に対してよく叫ばれた言葉らしい。すなわち炬火の火を消さないようにして、次の走者に渡せという意味である。またこの行は「高く炬火を挙げて光を見せよ」の意味にもとれ

る。また群衆に対して「どいた、どいた。路を開けろ」の意味にも解し得る。
(2) ピロクレオンは事実と反対に自分を若い放蕩息子に、ブデリュクレオンをその父に擬しているのである。
(3) これは古代ギリシアのほうぼうにあった神秘宗教であって、それへの入門式のときにはすでに入門している先輩が新入りをからかうをつねとしたらしい。
(4) 妙齢の「娘」と言いかけて、急に「棺桶」と変えて、ピロクレオンのいまにも死にそうな老年を嘲笑したもの。
(5) 「驢馬から落ちたように」という文がまた「馬鹿な」という意味にもとれるところから出たよく知られた洒落のあるのを、もじって言った言葉であって、ブデリュクレオンをいまにも死にそうな老人の父親としてひやかしているのである。

一五九(1) このところは写本に対し種々の訂正説があり、確実な意味は不明である。
(2) 二柱の女神とはデメテルとその娘ペルセポネのこと。女はよくこの二女神にかけて誓ったものである。
(3) カイレポンはソクラテスの弟子であって、その蒼白な死人のような顔色はアテナイ市民の嘲笑するところであった。古註によれば彼の性格はあまり感心のできないもので、三百代言式の男であったらしい。
(4) ラソスはヘルミオネの詩人であり、ピンダロスの師として有名。アテナイに前五〇八年頃住んでいた。ケオスの大抒情詩人シモニデスはラソスの同時代人であり、その詩はラソスなどのものとは比較にならぬみごとなものであるが、その当時は互に競争相手であった。
(5) イーノーはカドモスの娘であり、アタマスの妻。家庭内の不幸のために身を投げた。これはエウリピデスの悲劇の題材であって、アリストパネスはここで、誰か悲劇中の人物または神様の名のかわりに、とつぜん悲劇詩人を持ち出して、彼を揶揄しているのである。
(6) アテナイの有名な医者。

一六〇(1) コレーは「娘」の意で、ペルセポネのこと。デメテルの娘で、冥府の王ハデスの后。婦人はよくこの女神を誓いに用いた。
(2) イソップの話とは、彼がデルポイの神域を訪れたとき、イソップの皮肉な言葉に怒って、デルポイの人々は彼の袋に神器を入れ、彼が知らずにその袋を持って立ち去るや、彼の後を追ってその器を証拠に彼に対して死刑の宣告をした。彼は刑場にひかれる途上で、鷲と甲虫の話をした。そして自分が甲虫のようにいやしく、彼らが鷲のように威張っていても、かつて鷲が甲虫の子供を攫ったことに対して、甲虫が復讐したと同じように、彼の死は遂には彼らに復讐するであろうと説いた、その話を指すのである。
(3) テスピスは六世紀の詩人であって、古代において悲劇の創始者とみなされていた。その当時は悲劇は俳優よりもダンスが主であって、コロスの歌と踊りとが重要な部分を占めていたらしい。ゆえにテスピス、プリュニコス、カルキノスのような古い劇詩人はまたダンスの先生でもあり、習いに来る者に踊りの教授をしたとアテナイオスは伝えている。ピロクレオンは老人であるからモダンなダンスは知らないで、このように古くさいのが好きなのである。
(4) ピロクレオンの言葉は悲劇の口調のまねであって、舞台裏でこの科白が言われると同時に、門がさっと開けられて、老人がその奥に立っているという趣向である。

一六一(1) ヘレボロスは気違いの薬。
(2) カルキノスは悲劇作者で、テスピス、プリュニコスなどとともにダンスの技で有名であった。彼の息子たちは不具で小人でアリストパネスの嘲笑の的となっている。カルキノスは「蟹」の意味であって、以下においてアリストパネスはこれをさかんに軽口の材料としている。
(3) すなわちぽんと一つ擲ればけし飛んでしまうという意味。
(4) これは **triorkhēs** (蒼鷹) と **treis orkhēstai** (三人のダンサー) との洒落である。

平　和

登場人物

トリュガイオスの下男・甲・乙
トリュガイオス　アッティカの農夫。
トリュガイオスの娘たち
ヘルメス
戦争（ポレモス）
物音（キュードイモス）　戦争の下男。
百姓のコロス
ヒエロクレス　占師。
鎌作り
兜の飾毛屋
胴鎧屋
ラッパ屋
兜屋
槍研ぎ師
ラマコスの息子
クレオニュモスの息子

〔オルケーストラの観客席と反対側に、左手にゼウスの宮殿、右手にトリュガイオスの家の入口。中央には洞穴があり、その入口が岩で塞がれている。二人の奴隷がトリュガイオスの家の前にある木製の囲いの前で、一人は糞を山と積んであるところから一所懸命に糞の団子をつくっており、一人はそれを立てつづけに囲いのなかに投げ入れている〕

下男甲　よこせ、よこせ、早いとこ黄金虫（こがねむし）[1]に団子をよこせ。

下男乙　そうら！　この下司下劣な野郎にやれ。これ以上のご馳走はありっこないぜ。

下男甲　も一つよこせ。驢馬（ろば）の糞製のやつだ。

下男乙　ほら来た、も一つ。だが、たった今お前がやったのは、どこへ行った。まさか食っちまったわけじゃあるめえ。

下男甲　うんにゃあ、あいつはかっぱらって、両の足でくるくるところがしたかと思うと、丸ごとぐっとひと呑みさ。さあ、大急ぎでうんとこさ捏（こ）ねろ、それも固いがっしりとしたのだ。

下男乙　わあ、おわい屋ども[2]、助けてくれ、おれが息がつまって死んじやうのを、見殺しにする気じゃなきゃあね。

下男甲　さあ、も一つ、も一つ、陰間の糞製のをだ。こいつぁ十分にすってあるのがご所望だとさ。

下男乙　ほら来た！　皆さん〔と、見物に向かい〕、これにはたった一つだけ救いがあるようですな。誰だって私がこの練り菓子をつまみ食いしたとは言いますまい[3]。

下男甲　うへえ！　も一つよこせ、も一つだ、ほら、も一つだよ。もっと捏ねろ。

下男乙　アポロンにかけて、いやだよ。この肥溜（こえだめ）にはもう我慢がならねえ。

下男甲　それじゃいっさいがっさいこいつに一時にくれてやろう。

下男乙　そうさ、地獄に落ちやがれ、お前も一緒にだ。

〔見物の方に向いて〕あんた方のなかで誰かご存じならば、教えて貰いたいね、いったいどこに孔のない鼻を売っていますかをね。糞虫に捏ねて食わせることよりも情けない仕事ってのはありませんぜ。豚や犬はね、誰かが糞をたれれば、つつくだけだ。ところがこの野郎と来た日にゃ、生意気に気取りやがって召し上がらねえ、おれさまが一日中すりつぶしてから差し上げねえとね。まるでご婦人方に差し上げる丸いねり菓子みたいにね。だが、もう食うのはやめたか見てみよう。ここからちょっとこの戸を開けて、あいつに見つからんようにな。

うえっ！　しっかりやれ、食って食って食いやがれ、気がついたときにゃあ、腹の皮がはち切れてるぞ。なんてこのごうつく野郎め、食ってやがあんだ、レスラーみたいに餌の上にかがみこみ、顎(あご)をぎしぎし、しかも頭と腕とを、ほらこういう風に、ねじ廻す、まるで船につけるあの太い縄をあんでいる連中みたいだ。けがらわしい、とんだにおいの大啖(おおぐら)いめ、いったいこいつは、なんという神のよこした厄なんだ。おれは知らねえよ。確かにアプロディテからじゃあねえな、雅の女神さまからでもねえ。

下男甲　それじゃ誰だい。

下男乙　こりゃ正しく山吹色なすいかずちのゼウスの尊(みこと)[1]のおしるしだぜ。

下男甲　どうやら見物のなかの誰やら生意気な若造が言ってるようだぜ、「こりゃなんだい、黄金虫てなあどういうことだい。」そこでそいつに側に坐ってるイオニアのおっさんが言う、「これなあ、クレオンのこと言うてんのらしゅうまっせ、こいつめ、ねっからえげつのう糞くってますがな」ってね。だが内に入って黄金虫に水を持って来てやろう。

下男乙　そこでおれは説明してやろう、小僧どもに、ちんぴらどもに、大供どもに、それからすごい大供どもに、いやさもっと威張りくさった大供どもにだ。おれの主人はな、新式の気違いだ。皆さん方のかかるようなんじゃねえ、全くの新式のでさあ。一日中天を仰ぎながら、ほうら、こういう風にゼウスにむかった悪口雑言、「おい、ゼウス、いったいどうしようってえんですね、箒木(ほうき)をしまえ。ギリシア中を掃いて、からっぽにしないでくれ。」いけねえ、黙った。誰かの声が聞こえるようだからな。

トリュガイオス　〔舞台裏で〕おお、ゼウスよ、あなたはいったいわしどもの国民をどうしようというのです。あなたは知らないうちに町々を骨抜きにしてしまいますぜ。

下男乙　これだ、これだ、これがおれの言ってた病気だ。あなた方は主人の狂気の見本を聞いてるってわけだ。だが逆上が来たときに最初に言ったその言葉はこうだ。こう独り言を繰り返していたんだ。「どうすればゼウスのところに行けるかな。」そこで貧弱な梯子(はしご)を造って、こいつで天によじ登ろうとした。ところが真っ逆さまに落っこちて、頭の鉢はこっぱみじんだ。そこで昨日はどこへか知らないが飛び出して行って、途方もなくでっかいアイトナ黄金虫[2]をつれて来た。そうして、まるで馬みたいに、こいつの世話をおれにさせ、自分はまるで仔馬にでもするように、こいつをなでて、「可愛いペガソスよ[3]」、気高い翼よ、おれを背にまっすぐゼウスのところに連れて行け。」さあて、ちょっとこう、奴が何しているかのぞいて見てやろう。

わあ！　みんな近所の人、来てくれ。ご主人が宙に浮いている[4]、あいつに馬乗りになって、空へ空へ！

〔トリュガイオス、黄金虫の形をしたものに跨(またが)り、機械仕掛けで空中に浮いている〕

トリュガイオス　〔歌う〕驢馬[5]よ、静かに静かに、そうっとだよ、
初めから、力にまかせて、いきなりに
あんまり威勢よく飛び出すな、
羽ばたきで手足の筋を
汗でぬらして、解きほごすまで。
お願いだ、くさい息を吹きかけるなよ。
もしもそうする気だったら、おれさまの
この家にじっとそのままいるがよい。

下男乙　ご主人、旦那！　正気の沙汰じゃありませんぜ。

トリュガイオス　黙れ、黙れ！

下男乙　いったい全体、どこへ行く気でこのばたばた。

トリュガイオス　ギリシア人みんなのためだ、おれが飛ぶのは。前代未聞の冒険だ。

下男乙　なんのために飛ぼうってんです、なんのためにこの無益な気違い沙汰なんです。

トリュガイオス　静かに、不吉なことは
ひと言も口にしてはならんのだ、万歳をとなえろ。
告げよ、人みなに、しずまれと。
雪隠と糞垂れ小路[1]を
新しい煉瓦で塞げよ、
尻の孔には栓をしろ。

下男乙　いやだよ、いやですぜ、どこへ飛んで行くつもりか教えてくれなきゃあ、いやですぜ。

トリュガイオス　ほかでもない、ゼウスのところへ、天に行くのだ。

下男乙　してその目的は。

トリュガイオス　ギリシア人をどうするつもりか尋ねるためにだ、一人残らずみんなをな。

下男乙　教えなかったら？

トリュガイオス　あいつをギリシアをペルシアに裏切ったと訴えてやる。

〔トリュガイオス飛び立とうとする〕

下男乙　ディオニュソス！　助けてくれ、やらぬぞ、おれの目玉の黒いうちは……。

トリュガイオス　このほかには手がないのだ。

下男乙　いけねえいけねえ小さい方たち、お父さんはあんたたちをほっといて、こっそり天に登ろうとしてますぜ。可哀そうに、お父さんにお頼みなさい。

〔トリュガイオスの小さい娘たち登場〕

娘の一人　お父上、お父上、「まことかや、
われらが屋形にとどきし言葉[2]」
わたしを棄てて馬と一緒に
鳥のところへ飛んで行こうとしている、とは。
本当なの、おとっつぁん、わたしが好きなら、教えて。

トリュガイオス　「姫たちよ、推量いたすがよい、されどまことは」おれはつらいよ、おれをお父っつぁんと呼びながら、おまんまを欲しがってるのに、家のなかには一かけらの銭もないんだからな。だが、おれが成功して帰ったその暁には、欲しいときにはいつだって大きなパイに、そのうえおまけにスフレーが食べられるぞ。

娘　「してこの旅をいかがしてなされまする」、船ではこの旅はできないわよ。

トリュガイオス　船ではない、翼ある若駒でじゃ。

娘　だけど、お父ちゃん、黄金虫に馬具をつけて、神様のところに乗って行こうというのはどういう気なの。

トリュガイオス　イソップの話[3]のなかにあるんだよ、翼あるもののなかでこいつだけが神様のところへ行けたんだってね。

娘　お父っつぁん、お父っつぁん、そりゃ嘘よ、こんなくさい虫が神様のところへ行けたなんて。

トリュガイオス　鷲に対して憤慨して、大昔行ったんだ。卵をころがし落として復讐したんだ。

娘　それじゃ翼のあるペガソスに馬具をつけなくちゃ。神様方にもっと悲劇風にみせるためにね。

トリュガイオス　いや、それじゃ二人分食糧がいる。ところが今の場合には、このわしの食う物はなんであろうと、そのまま こいつのまぐさになるのだ。

娘　「海原の深みに落ちればいかがなされまする」、飛び虫じゃどうしてもそこから抜け出せますまい。

トリュガイオス　なあに、手もとにはちゃんと舵[1]の用意があらあね。おれのはナクソス型の黄金虫舟だ。

娘「して、いずこの津に入るおつもりか」

トリュガイオス　なあに、ペイライエウスには黄金虫港[2]があるわい。

娘　滑って落っこちて、跛(ちんば)になって[3]、エウリピデスの題材になって、悲劇にならないように気をつけてね。

トリュガイオス　注意するよ、あばよ。〔見物に〕皆さん、そのためにわしが苦労している皆さん、三日の間は屁もひらず糞もたれずに我慢しろ、さもないと、こいつは空でにおいをかぎつけ、真っ逆さまにわしをほうり出し、ご馳走に飛びつきますからな。

〔歌う〕進めやペガソス、心も楽しく、
黄金造りのくつわの鎖の
音(ね)も高く、晴れやかに耳を振りつつ。
何をする、何をする、小便小路に
鼻の孔をむけるとは、こりゃどうしたことだ。
勇ましく陸をはなれて、
速やかな翼を拡げて、
まっすぐにゼウスの宮へ進めよや、
糞から鼻をそむけつつ、
よろずこの世の糧(かて)からも。
おい、そこの人、何をする、ペイライエウスの
淫売宿で糞をひってるその男、
おれを殺す気か、殺す気か。孔を掘れ、
うんとこさ土をおっかぶせ、
その上にじゃこう草を植えて、
没薬(もつやく)を撒け。おれがおっこちて
死んだなら、キオスの町[4]は
お前の尻のそのために殺人罪で
五タラントンの罰金刑になるんだぞ[5]。

えへへ、驚いた、もう冗談ごとはやめだ。道具方、注意してくれ。もう臍(へそ)のあたりがゴロゴロと鳴り出して、気をつけなきゃ、糞虫にご馳走することになるぜ。だが、どうやら神様の近所に来たらしいて。本当だ、ゼウスの家が見えるぞ。〔戸を叩く〕ゼウスの門番は誰だ、開けてくれ。

ヘルメス　〔内で〕どこから人間のにおいがするのかな。〔扉を開いて〕わあっ、ヘラクレス！　この怪物(ばけもの)はなんだ。

トリュガイオス　馬黄金虫[6]でさあ。

ヘルメス　このげすの、ずうずうしい、恥知らずめ、げすのげすのげす野郎め、どうしてここへやって来た、げすのなかのげす野郎。名前はなんてえんだ、返事しろ。

トリュガイオス　げす野郎でさあ。

ヘルメス　親父はなんてえんだ[7]。

トリュガイオス　わしの？　げす野郎でさあ。

ヘルメス　いったい全体、名前がなんてえんだか言わなきゃ、大地女神の御名にかけて、手前はお陀仏(だぶつ)だぞ。

トリュガイオス　アトモネ区[8]のトリュガイオス、上手な葡萄作りでさあ、密告者や事件好きの連中じゃありませんぜ。

ヘルメス　なんのために来たのだ。

トリュガイオス　この肉をあんたにあげようと思ってね。

〔と、肉を出して見せる〕

ヘルメス　〔急に調子を変えて〕うい奴め、どうして来た。

トリュガイオス　がつがつめ、それじゃ、わしはもうげす野郎じゃないんだな。さあ、ゼウスを呼んで来い。

ヘルメス　こりゃどうも、神々に近づくのはむつかしいな、昨日宿がえをしちゃったからな。

トリュガイオス　どこの土地へだ。

ヘルメス　土地だと。

トリュガイオス　それじゃどこへだ。

ヘルメス　ずっと遠く、全くの天のドームのいちばん奥へだよ。
トリュガイオス　それじゃ、どうしてお前さん一人おいてけぼりなんだ。
ヘルメス　神々の残った道具の番をしているのだ。小鍋やら板きれやら小鉢やらをさ。
トリュガイオス　どうして神々は宿がえしたのだ。
ヘルメス　ギリシア人に憤慨のあまりさ。それだから、彼らのいたここには「戦争」をすまわせた、お前たちを勝手気ままに料理するようにだ。だが自分らはできるだけ高いところに移転した、もうお前たちが戦争しているのが見えないように、またお前たちの願いも全く聞こえぬようにさ。
トリュガイオス　どうしておれたちにそうしたんだ、話してくれ。
ヘルメス　それはな、彼ら[1]が休戦をしようとするたびに、お前たちが戦争を選んだからさ。ラコニア人の方では、ちょっと旗色がいいと、こんな具合に言い言いした。「二柱の神[2]にかけて、今こそアッティカ人にひどい目にあわせてやるぞ。」ところで今度はお前たちが少々うまくやったとなると、アッティコニコス君[3]、そしてラコニア人どもが平和の使に来るとだ、お前たちはすぐさま言うのだ、「だまされるぞ、アテナの女神に誓って、ゼウスにかけて、同意するな。ピュロス[4]をおさえていれば、またやって来るよ」
トリュガイオス　なるほど、こりゃまさしくおれたちのお題目通りだ。
ヘルメス　それだから、お前たちが今後とも「平和[5]」にお目にかかれるかどうか疑問だよ。
トリュガイオス　ええ、どこへ行っちゃったんだ。
ヘルメス　戦争が女神を深い洞穴に投げこんじゃったというわけさ。
トリュガイオス　洞穴って？
ヘルメス　この下の洞穴だ。そのうえに、ほらどっさり石を積んであるのが見えるだろう。二度とふたたび女神をお前たちが手に入れないようにね。
トリュガイオス　いったいそれじゃ、おれたちをあいつはどう料理しようってえんですね。
ヘルメス　わかっているのはな、あいつは昨日の夕方、途方もなく大きな擂鉢(すりばち)を持ちこんで来たことだけだ。
トリュガイオス　いったい何に使う気なのかな。
ヘルメス　その中でもろもろの都市をすりつぶそうというのだ。だが、さよなら、おれの考えじゃ、どうやら奴(やっこ)さん出て来るぞ。家のなかで大きな音を立ててるからな。

〔ヘルメス退場〕

トリュガイオス　桑原桑原、三十六計のなんとかだ。どうやらおれにも戦争擂鉢の音が聞こえたようだ。

〔戦争、大きな擂鉢をもって登場〕

戦争　おお、人間よ、人間よ、禍にみてる人間よ、すぐさまお前らの顋(あご)はひどい目にあうぞ。
トリュガイオス　アポロンさま！　こりゃ大きな擂鉢だな。とんでもないしろものだ。戦争の様子ときたら！　おれたちがのがれようとしているのはこいつなのか、恐ろしい、無慈悲な、両足で立っている……。[6]
戦争　〔韮(にら)を鉢に投げ入れながら〕[7]ああ、プラシアイよ、三倍、五倍、何十倍も不幸なものよ、今日はお前の破滅の日だ。
トリュガイオス　〔見物に向かって〕皆さん、こりゃわれわれには関係ありませんぜ。この災いはラコニアのですからな。
戦争　〔にんにくを投げ入れながら〕メガラよ、メガラ[8]よ、今にすぐ、いっさいがっさいすりつぶして、ペーストにしてやるぞ。
トリュガイオス　うへえ！　メガラ人にはこれまたなんと大した苦い涙を投げ入れたもんだな。
戦争　〔チーズを投げ入れながら〕シシリア[9]よ、お前も破滅だ。
トリュガイオス　あの不幸な国も今にひどくすりつぶされるぞ。
戦争　さて、このアッティカの蜜[10]も入れるとしよう。
トリュガイオス　おい、ほかの蜜にするように忠告するぜ。こいつぁ四

オボロスだ。アッティカ製は倹約しろ。

戦争　おおい、「物音」よ。

物音　御用で？

戦争　ひどい目にあわせるぞ。ぼんやり立っているのか。この拳骨のお見舞いだ！

物音　痛いっ！　ひどいなあ、旦那。

トリュガイオス　あいつめ、拳骨のなかににんにくを入れやがったのかな。

戦争　大急ぎで擂粉木を持って来い。

物音　ですが、ねえ、うちにはありませんよ。昨日越して来たばかりだ。

戦争　それじゃ大急ぎで走って行ってアテナイから持って来い。

物音　承知の助だ。でなきゃあ、またも厄の神のご入来だ。〔退場〕

トリュガイオス　さあて、どうすればいいんだ、哀れなちんぴら人間どもめ、おれたちにのしかかっている危険がどんなに大きいか、見ろ！　あいつが擂粉木を持って来たら、戦争は裕々と坐ったままで、町々を混ぜ返すぞ。おお、ディオニュソスさま！　あいつめ、くたばっちまえ、持って来るな。〔物音、登場〕

物音　ねえ。

戦争　なんだ、持って来ないのか。

物音　あのね、ええと、アテナイ人の擂粉木はなくなっちまったんでさあ、あのギリシアをひっかき廻していた革屋[1]は。

トリュガイオス　おお、アテナイの女神さま！　あいつぁ町のためにうまいぐあいにちょうどいいときに死んだもんだ。ペーストをおれたちの頭の上からひっかける前にね。

戦争　それじゃ、早速も一つのをラケダイモンから持って来い。

物音　承知の助だ、旦那。〔物音　退場〕

戦争　すぐにだぞ。

トリュガイオス　〔見物に向かって〕皆さん、こりゃどうなることやら。今や大いなる危機だ。皆さんのなかにサモトラケの秘教[2]に入会している人がいたら、今こそ祈るべきときですぞ、帰って来るあいつの両の足を挫くように。

物音　〔帰ってくる〕いけねえ、いけねえ、いや全くいけねえ。

戦争　どうした。また持って来ないな。

物音　なくなっちまったんでさあ、ラケダイモン人の擂粉木[3]も。

戦争　どうしたというのだ、この野郎。

物音　トラキアの方面でほかの奴らに貸して、なくなっちまったんで。

トリュガイオス　うまい、うまい、双子の神様、うまく行くかも知れないぞ。元気を出せ、人間ども。

戦争　この道具を持って行け。おれはなかに入って、擂粉木を作ることにしよう。〔両人退場〕

トリュガイオス　さて今こそ、ダティス[4]があるとき真昼間こすりながら歌ったあの歌、「いや気持がよい、楽しくあるね、愉快だね。」ギリシア人諸君、今やほかの擂粉木が邪魔をしない間に、面倒な事件や戦争におさらばして、万人の喜びなる平和を引き出すべきときだ。さあ、百姓ども、商人ども、大工ども、職人どもに在留外人、異人ども、島の住人、すべての国の者どもよ、ここへ来い[5]。大急ぎでシャベルに挺に縄を持って。今こそ幸をつかむことができるのだぞ。

〔コロスの登場。登場とともに歌う〕

コロス　こっちへ、さあみんな、まっすぐに救いにむかって勇んで進め！
おお、全ギリシアの人々よ、援けに行こうよ、今こそそのとき、
戦列をすて、赤いマント[6]を脱ぎすてて。
これこそ反ラマコス[7]の日の輝きだ。
するべきことがあるならば、言ってくれ、計らってくれ、
今日こそやめはしないぞ、
挺と機械でこの世の光のそのなかに引き戻すまで、

神という神のなかでも最大の葡萄の友なるこの女神を。

トリュガイオス　黙れ黙れ、喜びすぎて騒ぎ立てるとなかにいる戦争にまたも火をつけてしまうぞ。

コロス　だが、こういう布告を耳にするのは、こりゃ愉快だ、こりゃ「三日分の食糧を持って応召」[1]とは違うからな。

トリュガイオス　地獄にいるあのケルベロス犬[2]に用心しろ。でないと、昔ここにいたときのように、ふうふうばたばたやって、女神さまを引き出す邪魔になるぞ。

コロス　いや、おれたちの手のなかにいちど入ってしまえば、奪うたって奪えるものじゃない。万歳！　万歳！

トリュガイオス　みんな、怒鳴るのはやめなきゃ、破滅だ。あいつは走って出て、両足でいっさいがっさい滅茶滅茶にするぞ！

コロス　なんでも混ぜかえせ！　踏みにじれ！　滅茶苦茶にしろ！　今日は愉快にやることがやめられないんだ。

トリュガイオス　どうした、みんな、気でも狂ったか。お願いだ、跳びはねて、この素晴らしい仕事をぶっつぶさないでくれ。

コロス　なあに、そうしたいとは思わないんだが、うれしくてうれしくて、両の足が勝手に踊っているのさ。

トリュガイオス　さあ、もうたくさんだ、踊りをやめろやめろ！

コロス　ほら、本当にやめたよ。

トリュガイオス　口じゃそう言ってるが、やめちゃあいないぞ。

コロス　これっきりだ、この一さしだけ舞わせてくれ。

トリュガイオス　よし、それだけだよ。もうそのうえ踊っちゃいけない。

コロス　お前のためなら、踊りはやめるよ。

トリュガイオス　だが、みろ、まだやめてやしないぞ。

コロス　もう本当にこれだけだ。右足をほんのいちど蹴上げるだけでやめるよ。

トリュガイオス　もううるさくしないように、それだけ許してやる。

コロス　やや！　左足があったぞ、こいつが言うことを聞かない［と、両脚で踊りはねる］。愉快だ、痛快だ、屁をひる、笑う、楯にもおさらば、年寄りの殻を脱ぎすてるよりもっとだ、もっとだ。

トリュガイオス　だが喜ぶのはまだ早い、まだ何ごともわからないのだ。
女神を手にしたそのときにこそ
叫べ、笑え、
そのときこそ船に乗ろうが家にいようが、
ゆさぶろうが、眠ろうが、
お祭りに出かけようが、
酒盛りしようが、コッタボス[3]をやろうが、
贅沢三昧に暮らそうが、
万歳しようが、お好きなようにだ。

コロス　この日こそ悲願の的だ、
苦労の数々、
わらぶとん[4]、
こいつはポルミオン[5]殿の運命さ。
もうこれからはおれさまは、不機嫌で酷い陪審員にはなるまいぞ。
そしてもう以前のようにかたくなな振舞いもせず、
厄介ごとをさらりと流して
気はやさしくて
若やぐのだ。
いやもう長いあいだ
殺し合い、疲れはてたよ、
リュケイオン[6]に槍と楯とに身を堅めて、出たり入ったりうろうろして。
さあ、何がいちばん
お望みか、さあ、
言ってごらん。幸運があんたを
わしらの絶対支配者に選んだのだから。

トリュガイオス　さて、どこへ石を引けばよいかな。

〔ヘルメス再び登場〕

ヘルメス　このげすの向こう見ずめ、何をしようってんだ。

トリュガイオス　悪いことじゃない、キリコン流[1]にでさあ。

ヘルメス　お前は死刑だ、不運な奴め。

トリュガイオス　おれの番[2]なら仕方がないよ。あなたはヘルメスだからね。籤（くじ）でやるってこたぁ承知の助だ。

ヘルメス　お前はもうだめだ、だめだぞ！

トリュガイオス　何日にですかい。

ヘルメス　すぐにだ。

トリュガイオス　だがまだ何も買ってないんでね。麦粉もチーズ[3]もね、死にに行くのにゃ用意が足りませんや。

ヘルメス　だがな、お前はもういかれてるぞ[4]。

トリュガイオス　そりゃ妙だな、そんな大したいい目にあっていながら気がつかないとは。

ヘルメス　この女神を掘り出しているところをつかまった奴には、ゼウスが死刑を宣告したのを知らないのか。

トリュガイオス　それじゃおれはどうしても死刑かね。

ヘルメス　まさにその通り。

トリュガイオス　それなら小豚を買うために三ドラクマ[5]貸しな、死ぬ前に秘教に入会しなくちゃ。

ヘルメス　おお雷の神ゼウスよ……。

トリュガイオス　待ってくれ、お願いだ、告訴はしないでくれ、旦那。

ヘルメス　いいや、黙らんぞ。

トリュガイオス　待ってくれ、私が持って来てあげたあの肉にかけて待ってくれ。

ヘルメス　だが、おい、おれの方がゼウスにお陀仏にされちゃうよ、金切り声の大声でこいつを言い立てなくっちゃ。

トリュガイオス　ヘルちゃん、頼むよ、怒鳴らないでくれよ。おいみんな、どうしたんだ、ぼんやり立ってるとは。野郎ども、黙りこくっているな。さもないと、あいつがやりだすぞ。

コロス　いけない、いけない、ヘルメスの旦那、いけませんよ、
わしの捧げた
仔豚をよろこんで
食べた覚えがあるならば、
今度のことでこのお供物を無下にされちゃあ困ります。

トリュガイオス　あの甘ったるい言葉が聞こえませんかい、旦那、大将。

コロス　わしの願いを
快く聞きとどけ、
女神が手に入る邪魔するな。
神々のなかでも
いちばん親切で
いちばん心の寛（ひろ）い方。
ペイサンドロス[6]の兜の羽根とまつげとがおきらいならば、
わしどもは聖なる
供物と、いとも盛んな
行列で、いつまでも、
御主よ、永劫（えいごう）変わらずあなたさまを崇めましょう。

トリュガイオス　さあ、お願いだ、彼らの声を憐れんでくれ。以前よりずっとあなたを崇めているんだから。〔傍白〕だが連中は前よりもずっと盗みが上手になったて[7]。ところが私は恐ろしい大事件をお知らせしましょう、それは神々全体に対する陰謀だ。

ヘルメス　よし、話せ。お前の言葉に耳をかすかも知れんぞ。

トリュガイオス　なあに、月（セレネ）とあの悪党の太陽（ヘリオス）とでさあ、ずっと前からあなた方に対して悪企み、ギリシアを夷狄（いてき）どもに裏切ろうとしているのだ。

ヘルメス　そりゃあどういうわけだ。

トリュガイオス　そいつぁね、私どもはあなたたちに供物を上げているのに、夷狄どもは彼らに捧げているからでさあ。[1] それだから、もちろんのことだが、私どもをみんな滅ぼしてしまいたいのですよ。自分たちで神様方のお祭りをひとり占めにしようというのだ。

ヘルメス　それで以前から日を〔暦から〕くすね取り、彼らの軌道の一部分を、やくざ者め、かじり取ったのだな。[2]

トリュガイオス　まさしくその通り。さあヘルメスさん、進んで私どもに協力し、この女神の引き出しに手伝いを願いますよ。そうすりゃ大パンアテナイア祭もその他のありったけの神様方のお祭りも、みんなあんたのためにやりますぜ。デメテル、ゼウス、アプロディテのお祭り[3]も、ヘルメスの祭りにする、禍から遁(のが)れた他の町々も厄除けの神[4]ヘルメスに、どこへ行っても至るところで供物をあげる。その他にうんといいことがありますよ。まず第一にこれを〔と、黄金の盃を出して〕お神酒(みき)用に差し上げます。

ヘルメス　いけねえ、おれは金のコップには気が弱くてなあ。おい、皆の者、これからはお前たちの仕事だ、なかにはいって大急ぎ、シャベルで石をひっかき出せ。

コロス　合点だ、神様の中でいっとう頭のいいあなたさまは、手なれた職人らしく、どうすればいいかお指図を願います。なあに、そうすりゃわしどもはお言葉通りに大いにやりますぜ。

トリュガイオス　〔ヘルメスに〕さあ、その盃をすぐさま差し出してください。神々に祈った後で、仕事にかかれるように。[5]

ヘルメス　お神酒(みき)だ、お神酒だ！
　しずまれ、しずまれ！
　酒を注いで今日のこの日もろもろの
　幸がいっさいのギリシアびとのために始まるようにと祈願する。
　何人であれ、この縄を引くのを助けた
　その者は今後ともに楯を手にすることなきようにと祈願する。

トリュガイオス　その通り、それどころか、一生を平和に暮らす、女を側に、かきながら[6]——ただし、火をだよ。

ヘルメス　何人であれ、戦さを選ぶ者は、永劫にやめることなしと申す、おおディオニュソスの君よ。

トリュガイオス　ひじから鏃(やじり)を抜き出すことを。

ヘルメス　また隊長になるを望んで、この世のなかにあなたが出て来るのを嫌う者は、おお女神よ、[7]戦さの庭で、

トリュガイオス　クレオニュモスと同じ目にあえ！

ヘルメス　また槍の製造業者や楯商人が商売繁昌の目的で、戦さを欲するなら、

トリュガイオス　賊につかまり、大麦だけを食っていろ。[8]

ヘルメス　大将になりたくて協力せず、または奴隷のように逃亡しようという奴は、

トリュガイオス　拷問の車にはりつけ、鞭でなぐれ。

ヘルメス　われわれには幸あれと申す、万歳、フレー、万歳！

トリュガイオス　振れはいけませんよ、万歳だけにしましょう。

ヘルメス　それじゃ万歳、万歳だけだ。

トリュガイオス　〔酒を注いで〕[9]ヘルメス、カリスたち、ホラたち、アプロディテ、[10]ポトスに捧げまつる。

ヘルメス　アレスはいけない。

トリュガイオス　いけない。

ヘルメス　エニュアリオスも、

トリュガイオス　いけない。

ヘルメス　さあ、みんなかかれ、綱で引き上げろ。

コロス　オー、エイヤー

ヘルメス　エイヤー、エイヤサ

コロス　オー、エイヤー

ヘルメス　エイヤー、も一つエイヤー

コロス　オー、エイヤー、オー、エイヤー。

トリュガイオス　駄目だ、気が合っていない。おい、ボイオティア人[1]！　野郎、吠面(ほえづら)かくぞ！　力んで見せてるだけじゃないか。
ヘルメス　さあ、エイヤー
トリュガイオス　エイヤー、オー。
コロス　〔二人に〕あんた方二人も一緒に引っ張れ。
トリュガイオス　それじゃおれが一所懸命に引っ張って、引っ張って、縄にすがりつき、武者ぶりついていないというのか。
コロス　それじゃどうして仕事がはかどらないのだろうな。
トリュガイオス　おい、ラマコス、そんなところに坐っていて邪魔をするな。お前のなあお化け[2]なんかにゃ用はないんだ。
ヘルメス　それにまた、このアルゴス人どももずっと前から引っ張らずに、ふうふうと人が苦労しているのを笑ってやがる。しかも、両方から食い扶持を貰っている[3]のだ。
トリュガイオス　だがこのラコニア人どもは勇[4]ましく引っ張ってますぜ。
ヘルメス　なあに、木にかじりついている連中だけが張り切っているのさ。鍛冶屋の方は邪魔をしている。
トリュガイオス[5]　メガラ人もだめだ。こいつらめ小犬みたいにがつがつして骨をしゃぶりながら引っ張っている。腹がへっていかれているのだ。
ヘルメス　みんな、これじゃ仕様がない。さあ一心同体われわれ一同、さ、もういちど仕事にかかろう。
コロス　オー、エイヤ
ヘルメス　エイヤー、エイヤー
コロス　オー、エイヤ
ヘルメス　エイヤー、そらエイヤー。
コロス　少々進んだな。
トリュガイオス　なんたる恥知らずのことだ、一方で引っ張り、一方じゃ反対の方に引っ張ってるとは！　アルゴス人ども、なぐるぞ！
ヘルメス　さあ、エイヤー
トリュガイオス　エイヤー、オー。
コロス　まだ妙なことをしている奴がいるぞ。
トリュガイオス　だが平和を欲するものは、さあ勇ましく引っ張れえ！
コロス　だが邪魔をする奴がいるんだ。
ヘルメス　メガラ人ども、くたばっちまえ。女神はようく覚えていて、お前たちを憎んでいる[6]。女神をいの一番ににんにくでこすり立てたのは、お前たちだ[7]。やめろ、アテナイ人ども、お前たちがいま引っ張っているところからじゃ駄目だ。裁判以外に何にもしてやしないじゃないか。ほんとに女神を引き出したいなら、海の方へちょっとばかり引きさがれ[8]。
コロス　さあ、みんな、われわれ百姓だけでやろうぞ。
ヘルメス　やあ、みなの者、ずっとうまく行ってるぞ。
コロス　うまく行ってるぞ、とさ。めいめい精を出せ。
トリュガイオス　百姓たちだけで仕事をやっちまおうとしているぞ。
コロス　さあ、よいとこ、みんな、よいとこだ。
やあ、もうほんの少しだ。
さあ、ひるむな、精出せ
勇ましく、かかれかかれ。
やあ、とうとう来たぞ。
オー、エイヤ、オー、エイヤ、みな引け、
オー、エイヤ、エイヤ、エイヤ
オー、エイヤ、エイヤ、エイヤ、みな引け。
〔平和の女神の像が、その侍女たる秋のみのりの姫と祭りのにぎわいの姫とを伴って、ゆっくりと引き出されて来る〕
トリュガイオス　おお、葡萄の房授けの姫、なんと申し上げましょう。あなたさまにご挨拶申し上げる一万の桶ほどもある言葉を、どこから求めて参ればよろしいやら。私どもの家にはございませんので。よう

こそ、秋のみのりの姫。それから祭りのにぎわいの姫。なんという美しいお顔で、祭りのにぎわいの姫さま、なんというかぐわしい、心たのしいあまい息、まるで兵役免除、香料みたいだ。

ヘルメス　それじゃ、兵隊袋とは違ったにおいらしいな。

トリュガイオス　「にっくき男のにっくき」[1]――袋、葱食いの腐ったにおいがするて。ところが彼女は果物、宴会、ディオニュシア祭、笛、悲劇、ソポクレスの歌につぐみ、エウリピデスの小唄[2]……。

ヘルメス　女神の悪口を言うと後悔するぞ。彼女は三百代言式の言葉の作者はお嫌いなのさ。

トリュガイオス　〔つづけて〕蔦、酒搾り、めえめえ小羊、田舎へと急ぐ女の胸、酔っ払い奴隷[3]、ひっくり返った酒の壺、そのほかの山のような素敵なことども。

ヘルメス　さあ、見ろ、町が和解してお互いに喋(しゃべ)くり合い喜ばし気に笑っているのを。

トリュガイオス　しかもそれが、みんながみんなひどく顔をはらして、吸い玉[4]をつけてだ。

ヘルメス　そうさ、見物たちの顔を見ろよ、顔つきで商売がわかるぞ[5]。

トリュガイオス　おやおや、お気の毒さま！

ヘルメス　あの兜の飾毛造りを見ろ、頭の毛をかきむしってらあね。

トリュガイオス　ところがあの鍬(くわ)つくりは、あそこの刀鍛冶に屁(へ)をひっかけたところだ。

ヘルメス　それからあの鎌屋を見ろ、喜んでいるぞ。

トリュガイオス　あいつめ、槍屋に真ん中の足を見せてやがる。

ヘルメス　さあ、百姓たちに立ち去ってよいと布告せよ。

トリュガイオス　〔大音でふれる〕皆の者、よっく聞け！　百姓たちは立ち去るがよい、農具を手に田舎へ大急ぎで、槍も剣も投槍も持参せず。今やこの地のすべての物は娯(たの)しい昔ながらの平和にみちている。さあ、各々の者は田舎へ、パイアーンを歌いつつ仕事に帰るがよい。

コロス　おお、正しい者と農夫たちの望みなる今日のよき日を目の前に、葡萄の木に挨拶し、若い日に植えた無花果(いちじく)を歓び迎えようと心は踊るわ、思えば長い年月であったな。

トリュガイオス　それでは皆の者、まず初めに女神さまにお祈りしよう。この女神こそ、兜の飾りとゴルゴン[6]を取り除いてくださったのだ。それから家へ、農場へと急ごう、田舎で役に立つ上等の塩魚をいくらか買って。

ヘルメス　おお、ポセイドン、彼らの列はみごとだな、まるで丸いビスケット、欠けることなき宴会のようにがっちりとすごいぞ。

トリュガイオス　その通りだ。鍬はよく研がれていれば素晴らしいものだし、三叉の鋤(すき)は陽(ひ)に輝くのだ。たしかに、葡萄畑の葡萄の木の列のあいだの空地は、これで綺麗になるだろう。それだからおれさまももう田舎へ行って、草取りの鍬で、こんなに長いあいだ放っておいた地所を耕したくなったわい。

さあ、みんな、思い出そうよ
この方が昔わしらに授けてくれた
以前の暮し。
あの無花果に
ほした無花果、ミルトに
あまいあまい酒、
泉の側にむらがるすみれ、
オリーヴの樹、
わしらが憧れ求めたものだよ、
このお恵みを感謝して、今こそ
女神さまに挨拶しようぞ。

コロス　ようこそ、女神よ、ご入来にわしらの歓喜は限りない。
田舎へ帰り行きたいと
思いあまって
あなたさまを恋いこがれた。

いとしい方よ、あなたさまはわしらにとってこよない利益
百姓の暮しをしている
者みなに。ご利益を
くださいますのは、わしどもだけにですからな。 (五九〇)
ただのうれしいご利益を
なんと昔は頂戴いたしたものでしょう。
あなたさまは百姓の常食、救いでござった。
それだから葡萄の樹も
若い無花果樹も
その他の木という木も
あなたさまをお迎えして喜んで、ほほえみかけるでございましょう。
だが、女神さまは、この長いあいだ、いったいどこにわしどもから
　隠れておいでになったのか、
これを一つ教えて貰いたいものですな。神々のなかでもいちばん親
　切なお方さま。 (六〇三)

ヘルメス　いとも賢明な農民諸君、私の言葉をようく理解して貰いたい。この女神が失われた理由を知りたいならばだ。災いの最初の原因は、ひどい目にあったペイディアスだ[1]。次にペリクレス。彼は同じ目にあいはしまいかと心配して、諸君の性質、諸君のすぐ人に食いつくやり口を恐れて、自分がひどい目にあう前に、メガラに関する議決というちょっとした火の粉を投入して、この市を燃え上がらせた[2]。大変な大戦争の火を煽ぎ立てたものだから、その煙であちらの人もこちらの人も、ギリシア人はみんな目から涙がぽろぽろ。いちど葡萄の木がいやおうなしにパチパチと言い始め、怒りのあまり壺が壺にぶっつかり出すと、もはやこの騒ぎを止める者はなく、女神は姿を消したのだ。(六一四)

トリュガイオス　こりゃ驚いたな、おれは誰からも聞いたことがなかった。女神さまがペイディアスと関係があることも初耳だね。

コロス　おれもそうだ、たった今聞いたばかりだ。だから美しいのだな、あの人の親類だからな、わしらの知らないことが多いものだね。

ヘルメス　それから諸君の支配下にある諸都市が、諸君が互いに憤激して、牙をむいているのを知って、貢税[3]を恐れて、諸君に対してあらゆる計略、次にラコニア人のお偉方を金で買収した。こいつらは卑しい欲張りで客人の裏切者だから[4]、この女神を恥知らずにも放り出し、戦争をひっつかんだ。そこで奴らの利益は農民の災いとなった。というのは、ここからは三重櫓の船がその復讐に出かけて行って、なんの罪もない人たちの無花果の木を食いつくしたからだ[5]。 (六二七)

トリュガイオス　なあに、そりゃ正当のことですよ。やつらはわしの黒無花果を切り倒したんだからな、わしが植え、大事に育てたやつをさ。

コロス　まさに正当だ。やつらめ、わしの六メディムノス入りの容れ物にも石を投げつけてだめにしやがったんだ。 (六三二)

ヘルメス　それから、働いている人々が田舎からここに集まって来たとき[6]に、彼らもまた同じやり口で売物にされていることを知らなかった。いや、葡萄の種をなくして、乾無花果が好きなものだから[7]、民会で演説する者どもに注意をむけた。そこでこの連中はこの貧困者どもが弱りはて、食物にことかいているのをよく知っていて、この女神をわいわいと怒鳴って追い立てた[8]、何度も女神はこの国をしたって現われたのだが。味方の者のなかのふとっちょの金持の人たちをブラシダスの味方だと訴えて[9]、彼らはいじめ抜いた。そして、諸君は犠牲者をまるで犬の群れのように引き裂いた。というのは、この町は恐怖のうちに蒼くなっているものだから、なんであろうが讒言があれば、そいつを大喜びで食ったのだ。そこで味方の外人どもはこの打撃を見てとって、金でもってこれをやっている者たちの口を封じた。その結果、奴らを金持にしたが、ギリシアの方は、諸君の知らぬ間に滅茶苦茶。その元兇は革屋だ[10]！

トリュガイオス　まった、まった、ヘルメスさん、言わぬが花、あの男が今いるところ、地下の国にそっとしておいとくがよろしい[11]。あいつぁもうわしどものじゃなくて、あなたのものですからな。 (六五〇)

あんたがあいつを何と言おうが、
また、あいつが生きているあいだは悪党で、
三百代言、密告者、
騒ぎ争いの源だっても、
今じゃこりゃみんな
あんたの人たちの悪口なんだよ。

〔平和の女神に〕ですが、どうして黙っておいでです、君さま、おっしゃってください。

ヘルメス　だが彼女は、見ている人々には口を開くまい。ひどい目にあって怒っているからね。

トリュガイオス　それじゃせめてあなただけに小声で言ってほしいものですが。

ヘルメス　ねえ君〔と、平和に向かって〕、彼らに対する気持を僕に話してくれたまえ。さあ、女のなかでいちばんの楯嫌いの君。〔女神の像の口のところへ耳をもって行って、聞く振りをしながら〕ふうむ、聞こえた。君の非難はこれだな、わかった。聞け、見物の者ども、女神の非難の理由を。彼女は言っている。ピュロスの事件の後で、私は自分で休戦の[1]いっぱい入った箱をこの町に持参したが、民会で三度否決されました。

トリュガイオス　これは私どもの間違いだった。許してください。その折には、わしどもの心は革のなかに[2]ありましたからな。

ヘルメス　さあ、今度は女神が私にたった今きいたことをよく聞け。誰が彼女に対していちばん敬意を抱いているか、誰が彼女の友で戦さがないように努力しているか。

トリュガイオス　なあに、いちばん好意をもってるのはクレオニュモスでさあね。

ヘルメス　いったい戦争に関してこのクレオニュモスはどういう男だ。

トリュガイオス　心は素晴らしいが、ただし、あいつが父だと言っている人の子供ではないだけでさ。兵隊になって出かけると、たちまちあいつは棄て子[3]になるからね――武器の。

ヘルメス　さあ、女神のこの新しい質問を聞け。目下プニュクス丘の石壇[4]を支配しているのは誰だ。

トリュガイオス　目下その場所を占めているのはヒュペルボロス[5]ですよ。〔平和に〕おやおや、どうしました。顔をそむけたりなすって。

ヘルメス　なあに、こんな悪党のパトロンを選んだので、怒ってみんなから顔をそむけているのだ。

トリュガイオス　いや、もうあいつは使いませんよ。だが今のところなにしろみんな指導者がなくて、裸だもんだから、こいつをしばらく帯にしたというわけで。

ヘルメス　彼女の言うには、それが市に何の役に立つか。

トリュガイオス　考えがうまくなる。

ヘルメス　どういう風にね。

トリュガイオス　あいつがランプ屋だからですよ。それ以前には、真暗ななかでごそごそ手探りしていたが、今やなんでも灯りをつけて協議する。

ヘルメス　〔耳を傾けて〕おやおや！　こりゃまた、なんという質問だ。

トリュガイオス　というのは？

ヘルメス　彼女が立ち去るときに残して来た昔のたくさんのことだ。第一に、ソポクレス[6]はどうしているかという問いだ。

トリュガイオス　達者ですよ。だが妙な目にあっている。

ヘルメス　というのは？

トリュガイオス　ソポクレスからシモニデス[7]になった。

ヘルメス　シモニデスだと、どうして。

トリュガイオス　老人でだめになったものだから、「金のためには簀（すのこ）にのってでも海に出るであろう[8]」

ヘルメス　それでは賢者クラティノス[9]は？　生きているか。

トリュガイオス　死んだ。ラコニア人が攻めこんだときに。

ヘルメス　どうしたのだ。

トリュガイオス　というのは、気絶しちゃったんでさ。とてもたまらなかったんですな、酒がいっぱい入っている壺がぶっこわされるのを見てね。その他、いやはや実にたくさんのひどい目に町はあいましたよ。ですから、もう決してあなたさまを放しませんよ。

ヘルメス　さあ、それでは、その条件でこの秋のみのりの姫と結婚するがよい。そして田舎でこの人と一緒に暮らして、つくるがよい――葡萄をだよ。

トリュガイオス　ねえ君、こっちへ来てキッスさせてくれ。ですがヘルメスさん、こう長い間たった後で秋のみのりとうまくやると、あたりはしませんかな。

ヘルメス　はっかの薬湯を飲んでりゃ大丈夫だ[1]。だが、急いでここにいるこの祭りのにぎわいの姫を、議会(ブーレー)へ連れて行け、この人の所属はあそこだ。

トリュガイオス　おお、祭りのにぎわいの姫とともにあるとは、幸いなるかな議会(ブーレー)よ、三日間というもの、どれだけのスープを啜(すす)り、どれだけの臓物煮と肉を食うことだろうな。だがヘルメスさん、さようなら。

ヘルメス　さようなら、人間よ、さようなら、私を忘れるな。

トリュガイオス　おおい黄金虫、家へ家へさあ飛んで行こう。

ヘルメス　君の虫はここにはいないよ。

トリュガイオス　どこへ行きましたかね。

ヘルメス　「ゼウスの戦車につながれて、雷を運んでいる」[2]

トリュガイオス　可哀そうに、あそこじゃどこから餌が取れますかね?

ヘルメス　なあに、ガニュメデス[3]のアムブロシアを食うさ。

トリュガイオス　だがどうすりゃわしは下界へ帰れるか。

ヘルメス　心配するな、おやすいことだ、そこに、女神の側に行け。

トリュガイオス　こっちだよ娘さんたち、急いでついて来るんだよ、大勢の者があんた方を待ちかねているんだ、おっ立ててね。

コロス　喜び勇んで行くがよい。おれたちはその間にこの道具類を保管してくれるように道具方に渡すとしよう。とくに楽屋のまわりには、大勢の盗人どもがいつも忍んでいて悪さをするからな。さあ、これを男らしく守るんだぞ。おれたちの方は見物の皆さん方に「わしどもの目的、またその心をお話ししよう[4]」

[5]打つ必要があるよ、劇場のお巡りは、もし誰か喜劇作者がアナパイスト調[6]で見物の方へ進み出て、自画自讃をやったなら。だがもし、ゼウスの娘[7]よ、人のなかでいちばん名高い人をほめるのがよろしいならば、おれたちの詩人こそまさに大いなる賞讃に価すると彼は言っている。というのは、まず彼はただ一人で、競争相手の作者どもがいつもいつもぼろ切れ[8]を嘲笑し、しらみに対して戦さをやるのをやめさせた。例のパンをこねたり、腹をへらしたり、逃げたりだましたり、あっさりとなぐられたりするヘラクレスどもを、みっともないとて、初めて舞台から追放し、例の奴隷どもを解放してやった。連中がいつも登場させる泣きみそどもだ、――その目的はといえばただ一つ、朋輩の奴隷にそいつがなぐられたのを笑ってから尋ねさせるためだけだ、「おい仲間、さんざんだな。おめえの皮はどうしたね。鞭が大軍勢でてめえの脇腹に攻めこんで、背中の皮を切りきざんだのかい。」こういう馬鹿なこと、つまらぬ洒落(しゃれ)、下等ないちびりを取り除き、大芸術を創り上げ、それをば偉大なる言葉[9]と思想、気のきいた洒落でもって築き、塔のように聳え立たせた[10]。くだらぬ小人どもや女どもを相手にすることなく、ヘラクレスのそれにも似た気性をもって最大の物に戦いを挑んだ、革の恐ろしい臭気と泥にまみれた威(おど)かしを冒して進んだ[11]。そしてまず最初に、まさにあの鋸(のこぎり)[12]のような牙の怪物と戦った、そいつの目からはキュンナ[13]の恐ろしい閃光を発し、憎むべき追従者の百の(舌)頭は彼の頭のまわりを舌なめずりし、破滅をたった今ひき起こした渓谷の激流[14]にも似た声をもっている、そして海豹(あざらし)の臭気、ラミアの洗ったことのない睾丸、駱駝(らくだ)の尻を。こんな怪物を見ても私は怖れず、皆さん方のために、また島のために戦いつつ、つねに負けずに抗争した。それだから皆さん方

は私にお礼をし、またよく覚えているべきなのだ。以前に私の望み通りに勝利を得ても、角力場[1]をうろついて、少年たちを誘惑したりはせず、さっさと荷物をもって立ち去ったものだ、わずかばかり困らせて、大いに喜ばせ、必要なことはすべて提供した後で。

それには私の味方に
大人も子供も必要だ、
また禿げ頭[2]どもにも勝利に
協力するように頼みましょう。
私が勝てば、めいめいは
食事や酒盛りで言うだろう
「あの禿げに持って行け、あの禿げにやれ
乾し果物、詩人のなかで
いちばん立派な顔をした
男から分け前を奪うな」と。

[3]ムーサよ、戦さを退け、
友なるわれらと
踊れよかし、
神々の結婚を、
人の子の饗宴を、また、
福者の賀宴をほめ歌いつつ。
これぞ汝が初めよりの務め。
だがしかし、カルキノス[4]がやって来て、
子供たちと一緒に踊ろうと頼んだら、
耳もかさず、彼らの
仲間にもならず、
やつらをみんな
飼いならして鶉、兵隊袋の頸をしたダンサー、
侏儒、山羊の糞屑、芝居の仕事探しと思え。

親父めは思いがけずもし出かした、
奴の芝居を夕方に猫め[5]が
締めて殺したとさ。

麗わしき髪の
優雅の神の歌をこそ
技にたけたる歌人の
謳うべきこと、夜鶯が静かに
とまって春の歌声を
あげしとき、ところが
モルシモス[6]はコロスが貰えない、
メランティオスも同じだ、こいつの
金切り声を私は聞いたことがある、
悲劇作者のコロスを
こいつと兄弟が
貰ったときに、二人とも
ご馳走喰いのゴルゴンだ、がんぎえび探しのハルピュイアだ、
婆さんの後を追いまわす卑劣漢、山羊のにおいの腋臭野郎、魚類の
仇だ。
こいつらに大いに、うんと唾をはきかけ、
ムーサの女神よ、私とともに
祝えや祭りを。

〔トリュガイオス、祭りのにぎわいの姫と秋のみのりの姫とを伴って登場〕

トリュガイオス 〔地上の自分の家の外で〕神様のところへ一直線に行くというのは、こりゃむつかしいことだな。両の脚がいやはや全く棒になったよ。

〔見物に向かって〕上から見ると、皆さん方はちっぽけな小人。天上

からじゃ皆さん方は全く悪者みてえだが、ここからじゃ、いやさ、ずっとそれ以上の悪者ですぜ。
奴隷　これは旦那、帰って来ましたね。
トリュガイオス　どうもそうらしいて。
下男　どうでした。
トリュガイオス　両脚が痛いよ、長い道中だったからな。
下男　さあ、教えてください。
トリュガイオス　何をさ。
下男　あなたのほかに空をうろついている男がありましたか。
トリュガイオス　なかったよ。ただし例外はだ、ディテュラムボス作者の魂が二つか三つ。
下男　何をしてましたかね。
トリュガイオス　飛びながら序歌をひろい集めていたのさ、「澄み渡る空に漂い浮ぶ」[1]式の奴さ。
下男　それじゃ、人が死んだら星になるという空の話は、こりゃ嘘っぱちですな。
トリュガイオス　いや本当だよ。
下男　それじゃ、あそこには目下どういう星がいますね。
トリュガイオス　キオスのイオン[2]。彼はずっと昔、この世で「明星」を作った。そこで彼が（天上に）来ると、たちまちみんなが彼を「明星」と呼んだんだよ。
下男　それじゃ、燃えながら走るあの流れ星はありゃなんです。
トリュガイオス　こりゃ宴会から帰りみちの金持ち星さ、提灯(ちょうちん)をもっていて、そのなかには灯がついている。それはそうと、大至急この女を家のなかにつれて行け。風呂桶に水をざあざあ入れて、湯をわかせ、おれとこの女(ひと)のために新床をのべろ。そうしてからここへまたやって来い。その間におれはこの祭りのにぎわいの姫を議会(ブーレー)に渡そう。
下男　どこからこの二人をつれて来たんですね。
トリュガイオス　どこからだって？　天上からさ。
下男　それじゃもう、神様の代金には三文だって出しませんぜ。われわれ人間同様、淫売宿をやってるんじゃ。
トリュガイオス　いや、そうじゃないよ。だが、あそこにもこれで食ってる奴があるのだ。
下男　〔秋のみのりの姫に〕さあ行きましょう。〔主人に〕ですがね、この女(ひと)に何か食物を出しましょうか。
トリュガイオス　いや、小麦パンも大麦パンも食べないよ。いつも天上で神々のところじゃ、アムブロシアをなめつけていたからな。
下男　それじゃ、ここでもなめるようにしてやらなくちゃ。

〔下男、女を伴って退場〕

コロス　幸いなるかな、老人は
うち見たところ
このところ、とんとん拍子だ。
トリュガイオス　それじゃ、わしが輝くばかりの花婿になったのを見たときにゃ、こりゃどうじゃ。
コロス　羨望(せんぼう)の的、老人よ、
若返って、
香料でプンプン香って。
トリュガイオス　その通り、それじゃ床を分かってお乳を握れば、こりゃどうじゃ。
コロス　いやはや、もっと幸多い者と思うだろうよ、カルキノスの――
回転[3]よりも。
トリュガイオス　だがこれは正しいことだよ、このわしは
黄金虫の乗物に打ち乗って
ギリシア人をば救済し、
そのおかげで、田舎で
みんながやすらかに日を送り、
やったり眠ったりできるようになったのだ。

〔下男、登場〕

下男　あの女はお湯をすませましたよ。いやはやみごとなお下で。プディングも、胡麻菓子もできました、その他万事万端　足りないのは一物だけだ。

トリュガイオス　それじゃ、さあこの祭りのにぎわいの姫をさっそく議会に引き渡すとしよう。

下男　この女を、誰ですって。

トリュガイオス　この女は祭りのにぎわいの姫だよ。わしどもは昔、大機嫌でブラウロン(1)へと太鼓を鳴らしつつ送ったものだ。全くだよ、やっとのことでこの女をつかまえたのだ。

下男　旦那、いやあ、大したお尻だ、五年に一度しか拝見できねえ。

トリュガイオス　〔見物に向かって〕さあて、皆さん方のなかのどなたが正直で、いったいどなたが、どなたがこの女を議会のためにあずかってくれますね。〔下男に〕おい、何の輪を書いてるんだ。

下男　いえ、なあに……イストモス祭に私の一物のためにテントを張る場所を予約しているんで(2)。

トリュガイオス　〔見物に〕誰があずかってくれるのか、まだ言いませんね。それじゃ〔と女に〕こっちへ。あんたを連れてって、自分でみんなのまん中に置きましょう。

下男　あの男が合点してますぜ。

トリュガイオス　誰だ。

下男　ほら、アリプラデス(3)ですよ、自分のところに連れて来るように頼んでますぜ。

トリュガイオス　いやあ、いけない、あいつぁ飛びかかって、この女の汁をなめちゃうよ。〔女に〕さあ、まずその衣装をすっぽり地面に落とせ。

〔女は着物を脱いで裸になる。トリュガイオスは彼女を連れて議員の席に近づく〕

ブーレーよ、プリュタネイス(4)よ、祭りのにぎわいの姫をごろうじあれ。いやさ、わしが差し上げることの数々をお考えあれ。すぐさまこの女の両の脚を空高く持ち上げて、お祭り(5)ができるというものだ。この素晴らしい台所(6)を見ていただきたい。なるほど煙で黒びかりしているわけだ、ここにゃ戦前には議会の鍋台がありましたからな。それからこの女を持っていれば、すぐさま明日にも全く素晴らしい競技ができますぜ、〔地面の上での角力、四足立ち〕、この女も横倒しにして、膝のあいだにかがませる、また身体にちょっと油を塗って、パンクラティオン競技(7)を元気に、打ったり、掘ったり、拳固とともに、また一物で。その後に三日目には競馬をやる、そこじゃ駿馬と駿馬が重なり合って、車は車の上にひっくり返り、フウフウ、ハアハア、ところが一方では御者どもはコーナーで車から落ちて、一物をひんむかれて転がっている。さあ、プリュタニスさん方、祭りのにぎわいの姫を受けたまえ。いやあ、プリュタニスさんの受取り方の素早いこと。だがちょっと待った、何か申請を無料でやることが必要な日には、あんたは袖の下に手をつっこんで、休日だと言うことだろうぜ(8)。

コロス　このような男は
　まことに、すべての者に
　大事な人だよ。

トリュガイオス　取入れのときにゃ、もっともっとわしがどんなに役立つかわかるぜ。

コロス　いや、もう今でもよくわかった。
　すべての者の
　救いの主だ。

トリュガイオス　新酒の盃を飲みほしたときに、そうだ、と言うことだろうよ。

コロス　神々の次には、いつもお前を第一番に崇めましょう。

トリュガイオス　このおれさま、アトモネのトリュガイオスは
　まことにお前方に役立つ男、

怖ろしい苦しみから
民衆と
農民とを救い出し
ヒュペルボロスをやっつけた。

下男　さてと、次のわれわれの仕事はなんですかな。
トリュガイオス　平和の女神を、野菜の煮つけの丼を捧げて安置することだ。これ以外にない。
下男　煮つけ丼ですって、まるであの意地の悪いちっぽけなヘルメス(1)みたいに？
トリュガイオス　それじゃどうする？　ふとった牛(ぎゅう)にしようってのか。
下男　牛ですって、とんでもない、ギューウッという目は、もうご免だ。
トリュガイオス　それじゃ、ふとった大きな豚は？
下男　いけませんよ。
トリュガイオス　どうしてね。
下男　テアゲネス(2)みたいに豚野郎になりますぜ。
トリュガイオス　それじゃほかにどういう犠牲があるね。
下男　羊(よう)。
トリュガイオス　よう？
下男　まさしく。
トリュガイオス　だが、そいつぁイオニア弁だ。
下男　ますますもって便利、民会で誰か開戦の要ありと説いたときに、坐っている連中は恐ろしいものだから、イオニア式に、「よういわんわ」
トリュガイオス　こいつぁ、いい。
下男　ほかの点でもやさしくなりますぜ。その結果、やり口が互いに小羊になって、味方の者にもずっとずっとおだやかになる。
トリュガイオス　さあ、それじゃ大急ぎで羊を連れてこい。わしの方は犠牲の祭壇を用意しよう。
〔両人退場〕

コロス　神々と運命の欲するところは、なべて御心(みこころ)のまま。
思いのままにそれは進み、一方はもう一方に
定めの場所でぴったりと出会うのだ。
〔トリュガイオス、小さな祭壇を持って登場〕
トリュガイオス　そりゃ明々白々だ。祭壇がちゃんと戸口にあったからな。
〔退場〕
コロス　さあ急げや急げ、神々の
戦さをさける激しい風が
吹いてる間に。今や神々の御心は
はっきり吉(きち)にむかっている。
トリュガイオス　〔登場して〕ここに大麦、頭飾り、小刀の入った籠が(3)ある。火も、ほら、ここに。足りないのは羊だけだ。
コロス　早くしないか、さもないと
カイリス(4)が見つければ
呼ばれないのに笛吹きに
やって来て、頬をふくらし大汗かいて、
君らはきっといやおうなしに
あいつに金を取られるぞ。
トリュガイオス　〔小羊をつれて登場した下男に〕さあ、お前は籠とお水とを手にもって、左から右に祭壇を廻れ(5)。
下男　そうら、それから？　もう廻りましたぜ。
トリュガイオス　それじゃ、この燃え木を取って水につけよう(6)。〔下男に〕おい、頭を急いで振れ、〔犠牲獣の頭に水をふりかけて〕おい、大麦をよこせ、お水をわしによこしてから、お前も手を浄(きよ)めろ、見物方に麦粒を投げろ。
下男　〔投げて〕ほうら。
トリュガイオス　もう済んだのか。
下男　ヘルメス(7)にかけて、まさしく。それだから、ここにおいでの見物方で、こいつを持っていない人は一人もなし。

トリュガイオス　だが、ご婦人方はまだだろう。
下男　心配無用だ、夜になりゃ旦那方が御用に立てやす。
トリュガイオス　よし、それじゃお祈りだ。ここにあるは何人（なにびと）か。善男善女の群れはどこへ行った。
下男　なあに、ここにいる人たちにやりましょう。善男善女の群れだ。
トリュガイオス　これが善男善女だと？
下男　そうじゃありませんがね、私どもがこんなに水をざあっとかぶせても、ここへやって来て、じっと動かずにいるんだから。
トリュガイオス　さあ、急いでお祈りしよう。
下男　お祈りしましょう。
トリュガイオス　おお、いとも厳かなる女王（にょおう）の君、
　平和の女神よ
　歌舞の司、結びの司よ、
　　われらが供物をうけたまえ。
下男　うけたまえよかし、いとも尊き姫よ、
　したもうことなかれ、
　みだらな女の行ないを。
　彼女らは戸口から
　身をのり出してのぞくのだ。
　誰かがそっちに目をむけると、
　身を引っこめる。
　立ち去ると、またのぞく。
　あなたはもう、そういうことをなすっちゃいけませんぜ(1)。
トリュガイオス　まさしく然りだ。いいや全身をすっかり現わし、
　われら恋人に立派な婦人にふさわしく
　せにゃならぬ。われわれはもう十と三年(2)
　あなたを恋いこがれている。
　戦さと騒動とを止めたまえ、
　あなたさまを戦さとどめの姫と呼べますように。
　われわれの手のこんだ
　互いに言い合う
　疑いにとどめをさしていただきたい。
　われわれギリシア人を
　今一度改め直して、
　友情の汁で混ぜかえし、
　心を穏やかな許しの気で味付けしたまえ。
　そうしてわれらの市場を素晴らしい
　品々でみたしたまえ、メガラのにんにく、
　はや手の胡瓜（きゅうり）、まるめろ、ざくろ、
　奴隷用の短いマント。
　ボイオティアからは家鴨（あひる）に鴨（かも）
　山鳩に千鳥が来るのが見たいもの。
　またコパイスの鰻（うなぎ）がついて、
　こいつを買おうと、われわれ一度にわっと
　押し寄せ、モリュコス、テレアス、グラウケテス(3)その他の
　大勢の食道楽連と押し合いへし合い、
　それからメランティオス(4)が
　おくればせに市場に来る。
　ところが鰻は売切れで、奴は歎きの声を挙げ、
　それからメデイアのソロ歌だ、
　「わが身は破滅じゃ、破滅じゃ、
　砂糖大根に横たわれるあの者たちを奪われて(5)」
　こいつに人々は大喜びだ。
　いとも尊き姫よ、このわれらが願いをかなえたまえ。
　〔下男に〕小刀を取れ、それからコックのように上手に羊を殺せ。
下男　いや、こりゃいけません。
トリュガイオス　どうして、どうしていけない。
下男　平和は、殺しはきっとお嫌いですぜ。また祭壇にも血を流さない。

トリュガイオス　それじゃ、なかに連れて行って、殺してから太腿をここへ持って来い。そうすりゃ、コレゴス[1]は羊を失わずに済むよ。
コロス　あんたはここに、戸の外にいて、祭りに入用なものをみんな揃えねばならん。
トリュガイオス　ほうら、たき木をまるで予言者みたいに上手に並べただろう。
コロス　その通り、賢者の知るべきすべてのことを、あんたは何も見逃がさず、賢い心と臨機応変の大胆な心の持主に必要なすべてのことを、あんたは心得ていなさるのだ。
トリュガイオス　いやあ、火のついた薪はスティルビデス[2]の息をつまらせるぞ。わしは机をもって来よう。下男はいるまい。〔退場〕
コロス　誰がほめずにいらりょうか、
　こんな男を、数知れぬ
　難苦をなめてこの
　聖なる都を救った男を。
　あんたはいつまでも
　みんなの羨望の的だよ。
トリュガイオス　〔登場して〕さあ、済んだ。〔下男に〕太腿を取って火にかけろ。わしは内臓と菓子を取って来る。
下男　承知の助だ。
トリュガイオス　だが、もっと前に来てなきゃだめじゃないか。
下男　ほら、ここにいますよ。ぐずぐずしちゃいませんぜ。
トリュガイオス　そいつを上手に焼け。おい、誰かあそこに来たぞ、頭に月桂樹の冠をのっけて。
下男　いったい誰ですかね。
トリュガイオス　いんちき師らしいな。
下男　予言者らしいですぜ。
トリュガイオス　いや、違う、ヒエロクレス[3]だ。こいつぁ、オレオスの占い師だよ。
下男　どういうつもりかな。
トリュガイオス　なあに、わかり切ってらあね、和睦に反対するつもりだよ。
下男　いや違いますよ、焼肉の香をかいで来たんですよ。
トリュガイオス　知らん顔をしていよう。
下男　合点だ。〔ヒエロクレス登場〕
ヒエロクレス　この犠牲はいったいなんですかな、どの神様へのものですかな。
トリュガイオス　〔下男に〕焼いてろ、黙ってろ、腰にさわるな[4]。
ヒエロクレス　どなたに犠牲を捧げていなさるのか、教えていただけぬかな。
トリュガイオス　尻尾はいいぞ。
下男　その通りだ、愛する平和の君よ。
ヒエロクレス　さあ、始めなさるがよい、お初穂をこちらへおよこしなさいませ。
トリュガイオス　先に焼いた方がいい。
ヒエロクレス　ですが、それはもう焼けていますぞ。
トリュガイオス　どこのおたんちんだか知らないが、余計なお世話だ。さあ切った。
ヒエロクレス　机はどこにございますか。
トリュガイオス　お神酒をもって来い。
ヒエロクレス　舌は別に切らねばならん[5]。
トリュガイオス　わかってるよ。だがお前の任務はわかってるかい。
ヒエロクレス　おっしゃっていただきたい。
トリュガイオス　わしらに何もしゃべるな。平和に犠牲を供えているんだから。
ヒエロクレス　おお、憐れむべき愚かなる人の子よ……。
トリュガイオス　そりゃお前のこったよ。
ヒエロクレス　愚かにも神々の心を知らず、汝らは人でありながら猛々

しき猿と条約を結びたり。

トリュガイオス　わあっ、はっはっ！

ヒエロクレス　どうしてお笑いかな。

トリュガイオス　猛々しき猿とはよかったな。

ヒエロクレス　しかして汝ら臆病なる海つばめは、小狐どもに気を許しぬ、心も魂にも二心ある。

トリュガイオス　お前の肺の臓も、山師め、この（肉）のように熱けりゃ結構だよ。

ヒエロクレス　神にも似たるニムフらがバキス[1]をあざむき、またもしバキスが人の子を、またもしニムフがバキスを……。

トリュガイオス　くたばりやがれ！　バキス呼ばわりはやめろ。

ヒエロクレス　平和の縛めを解くべきときはいまだ至らず、それよりもまず……。

トリュガイオス　これに塩をかけろ。

ヒエロクレス　こは幸多き神々の、まだ御心にかなわぬことぞ、狼が小羊と結ばれぬそのうちに、戦さのおたけびを止めるとは。

トリュガイオス　何をこの野郎、狼が羊と結ばれるなんてことがどうしてできる。

ヒエロクレス　屁っぴり甲虫が逃げ出すときにひどくぷんとやるように、また金切り声のこがねひわが、せいてむやみと子を生むように、平和をあわてて結ぶでないぞよ。

トリュガイオス　それじゃどうする。戦さをやめずにつづけるのか、どっちがもっと大声で泣くかを籤できめるのか、和を結べば共々にギリシアを支配することができるというときに。[2]

ヒエロクレス　決して蟹をまっすぐに歩ませることはできぬこと。

トリュガイオス　決してお前はこの後は市庁[3]で飯にありつくことはできぬこと、また平和が結ばれたその後は占いはもうできないぞ。

ヒエロクレス　決してお前は棘のある針鼠を滑らかにはできないぞ。

トリュガイオス　アテナイ人を欺すのはもうやめないか。

ヒエロクレス　いったいどういうご宣託で神々に太腿の肉を焼いてあげているのか？

トリュガイオス　それぞまさしくホメロスの世にも麗わしきこの言葉、[4]

「戦さの嫌うべき立ちこめたる塵を押し退けて
平和を選び、贄を捧げて確立す。
太腿を焼き、臓物を味わいて後に、
盃もて灌奠を行ないぬ。われはその先導ぞ、
予言者には、されど、輝く盃は何人も与えざりき」[5]

ヒエロクレス　こりゃ私には関係がない。シビュラはこんなことは言いませんでしたからな。

トリュガイオス　だが賢明なるホメロスはまことにいみじくも言ったね、

「怖るべき国のうちなる戦さを好める者、
その者は血縁も法も家もなき者ぞ」[6]

ヒエロクレス　注意なさい、うまくあなたを欺してとんびが攫わぬように。

トリュガイオス　〔下男に〕おい、よく注意しろ、この占いは臓物にはなかなか恐るべきことだ。お神酒を注いで、臓物をこっちへ持って来い。

ヒエロクレス　いや、それでは私もよろしくやるとしよう。

トリュガイオス　お神酒を注げ！

ヒエロクレス　私にも注いでくれ、臓物の分け前をお願い申す。

トリュガイオス　こは、幸多き神々の御心にまだかなわぬことぞ。いやその前にわしらは飲み、お前さんは立ち去るのさ、平和の君さま、一生のあいだわれわれのところに留まりたまえ。

ヒエロクレス　舌をよこせ！

トリュガイオス　お前はな、自分の舌をもって行け。

ヒエロクレス　お神酒だ！

トリュガイオス　これをお神酒といっしょにさっさと持って行け。[7]

ヒエロクレス　誰もわしに臓物をくれんのか。

トリュガイオス　やることはできないよ、狼が羊と結ばれるまではね。
ヒエロクレス　お願いだ、あなたの膝にすがって！
トリュガイオス　いいや、その願い聞きとどけられぬ、お前は棘のある針鼠を滑らかにすることはできないぞ、だからな。
　さあ皆さん方、わしども二人といっしょに臓物(もつ)を召し上がれ。
ヒエロクレス　それじゃ私は！
トリュガイオス　シュビラを食ってろ！
ヒエロクレス　大地にかけて、お前ら二人だけではこれは食わせぬぞ、おれがそいつをかっぱらってやる。そりゃみんなの物だ。
トリュガイオス　バキスをなぐれ、なぐれ。
ヒエロクレス　訴えてやるぞ。
トリュガイオス　おれもだ、お前が大食いのいかさま師だってね。〔下男に〕なぐれ、いかさま師を薪でどんどんぶんなぐれ。
下男　そりゃ、あなたがおやりなさい。わっちはこいつが人をだまして手に入れた(1)、羊の皮をひんむいてやりまさあ。羊の皮を脱ぎすてろ、まじない師め、わかったか。オレオスの烏め。さっさとエリュムニオン(2)へ飛んでうせやがれ。
〔ヒエロクレスを追いながら、トリュガイオスと下男退場〕
コロス　愉快だ、愉快だ、
かぶとをおっぽり投げ
チーズと玉葱(3)にゃおさらばだ。
戦さは嫌いだ、
仲のいい奴らといっしょに
火の側で酒を
汲む、こいつぁいいよ、
夏の日に
さらされ乾いた
たき木に火をつけ
豆をあぶったり
粟を焼いたり
その間にトラッタ(4)にキッスする、
お神さんが風呂に行ってるあいだにね。
これほど楽しいことはない、種はもう播かれて、神様は霧雨を降らせてくださる、近所の誰かがこういうのだ、「おい、コマルキデス、どうすりゃ愉快にやれるかな。」「神様がよろしくやってくださるからにゃ、飲むに限るな、おい、かかあ、隠元豆を一升五合ほど焼いてくれ、それに麦を混ぜ合わせ、無花果(いちじく)の上等の奴を選び出せ、シュラをやってマネスを畑から呼ばせろ。今日は全く葡萄の芽をつんだり、土を起こしたりする日じゃないよ、地面はしめっているのだからな。」誰か家からつぐみを一羽にひわを二羽もって来い。そのほか家には初乳と兎の肉が四切れある、いたちがそいつを昨日の夕方掠って行かなかったらばだ。なんだか知らんが、家のなかでごそごそがたがた音がしたからな。おいボーイ、そのなかの三つをわしらのところに、一つはとっつぁんにくれてやれ。アイスキナデスのところから実のついたミルト(5)の枝を貰って来い。それから途中でカリナデスを呼べ。
わしらといっしょに飲むように、
神様がお恵み深く
畑をうまくしてくださるから。
蟬があまい調べを
歌うころ
レムノス(6)の葡萄の木々を
もう熟したかと
見まわるのは楽しみだ。
こりゃ熟すのが早いからな。
それからあおい無花果が

うれるのを見るのは楽しみだ。
そうして、うれれば
食べるわ食べるわ、
「いい季節だな」とわしは言う。
たちじゃこう草をすって飲物をつくる。
そうしてわしは、夏の日に
太って肥えてまるまるだ。

こりゃ三重の飾り毛に、まぶしいばかりに真赤なマントの神々の敵なる隊長を見るよりゃましだ、そのマントをあいつはサルデイス染め(1)だとぬかしやがる。ところがこれなる赤マント、戦うという段となれば、そのときにゃあ着ている方はキュジコス染め(2)で（真青）だ。それからまるで飴色の馬鶏(3)みたいに、いちばんにとさかを振り振り一目散だ。ところがおれはぽかんと後に残される。ところが国にいるときには、とんでもないことをしてやがる。徴兵簿にわしらの名前を書きこんだり、消したり、二度も三度も上や下へとかきまわす(4)。明日は出陣だ。ところが誰かが携帯食糧を買ってない。自分の出征を知らなかったのだ。それからパンディオンの像の前に立って、自分の名を読み、この不幸に困りはて、渋い顔をして走って行く。奴らはわしども百姓にこういうことをしているのだ。町の者には少しはましだが、この神にも人にも楯投げの卑怯者め。いいや、神様の思召しにかなえば、やつらを今にとっちめてやる。

いやはや奴らは山ほどのひどいことをばおれにしおった、
内地じゃ獅子だが
戦さじゃ狐め。

トリュガイオス　おやおや、こりゃ驚いた、結婚式の宴会へ大変な人だぞ。さあ、この(5)（マント）でテーブルを綺麗にしろ。もうそいつぁ全くいらないからな。それから菓子とつぐみを上におけ、それからうんとこさ兎の肉にロールパンだ。

〔鎌作り、仲間とともに登場。彼は鎌を、仲間は壺をもっている〕

鎌作り　どこだ、トリュガイオスさんはどこだ。

トリュガイオス　おれさまはここでつぐみを焼いているよ。

鎌作り　やあ有難の旦那、平和の恵み手トリュガイオスさん。これまでは一文でも鎌を買う人はいなかったが、今じゃ私は五十ドラクマで売っている。ここにいるこの男は、田舎用に壺を三ドラクマでだ。さて、トリュガイオスさん、欲しいだけ、この鎌と壺とをただで取ってください。それからこれも〔と、金を渡して〕、私どもが売上げの儲けのなかから、これを結婚の贈物に持って来たのだ。

トリュガイオス　さあさあ、そいつはわしの側に置いて、なかに入った、大至急だ、宴会へだ。ふうん、こいつめ、武器商人め、怒ってやって来たな。

〔武具屋が次々に登場。兜の飾毛屋、胴鎧屋、槍研ぎ師、ラッパ屋、兜屋等〕

飾毛屋　おお！　トリュガイオス、お前のおかげでもう根こそぎにやられてしまった。

トリュガイオス　青びょうたんめ、どうした。飾毛病かね。

飾毛屋　お前のおかげでわたしの商売も暮しも駄目になったぞ、それからここのこの男、それからあの槍研ぎ師もだ。

トリュガイオス　この二つの飾毛にいくら払やいいんだ。

飾毛屋　あんたならいくら払うね。

トリュガイオス　いくらだって。困ったな。だがこの差しこみ(6)はなかなか手がこんでいるから、乾無花果を一升五合払おう、これはテーブルをはらうのにもってこいだ。

飾毛屋　それじゃなかにはいって、乾無花果をもってこい。あんた、ただよりはましですからな。

トリュガイオス　〔飾毛を手に取って眺め〕持って行け、この家から持って行け、犬に食わせろ、毛が抜けてらあ、この飾毛は一文の値打も

ないぞ。乾無花果一個とでもご免だ。

胴鎧屋　この十ムナー[1]の素晴らしい胴をどうしたらよいことやら、あたしゃもう運のつきだ。

トリュガイオス　なあに、そいつぁお前さんに損はかけないよ。さあ、それをお前の言った原価でわしによこしな。金隠し用にもってこいだよ。

胴鎧屋　おれの商品でおれを馬鹿にするのはよしてくれ。

トリュガイオス　こうやってな、石を三つおく。うまいじゃないか。

〔と、厠に上がる真似をする〕

胴鎧屋　しかし、どうやってふくんだ、無学のおたんちんめ。

トリュガイオス　ここから、腕をオールの孔[2]から入れて、それから、ここから。

胴鎧屋　なに、一時に両手でか。

トリュガイオス　そうだよ、わしはこうだ。船の孔をごま化して、つかまったりはしないようにね[3]。

胴鎧屋　それじゃ十ムナーの金隠しでうんことというわけか。

トリュガイオス　そうともさ、この野郎、それじゃお前は、おれさまが一千ドラクマで尻を売ると思っているのか。

胴鎧屋　さあ、それじゃ金を出せ。

トリュガイオス　だがねえ、君、こいつぁお尻をすりむいたよ。持って帰れ、買うのはやめた。

ラッパ屋　この六十ドラクマで買ったラッパをどうしたものだろう。

トリュガイオス　鉛をな、ほら、この凹みに流しこみ、それから長めの竿を上につける、そうすりゃ、ほうら、下がりコッタボス[4]になるぜ。

ラッパ屋　おれを嘲弄しているな。

トリュガイオス　いや、も一つ教えてやろう。わしが言ったようにな、鉛を流し込む。それからここに、細い紐で秤皿を結んでぶらさげるのさ。そうすりゃ田舎で召使どもが無花果を量る秤になるぜ。

兜屋　おお無慈悲な運命よ、私は破滅だ、この兜に一ムナー私は払った。これをどうすればよかろうか。誰がいったい買ってくれるだろう。

トリュガイオス　エジプト人に売りに行け、下剤の薬草を量るのにもってこいだからね[5]。

ラッパ屋　ああ、兜屋さん、私たちゃもう駄目だね。

トリュガイオス　だが、こいつは何も損害をうけていないぞ。

兜屋　だがいったい、兜にまだどういう使い道がありますかね。

トリュガイオス　なあに、こういう風な〔と、耳をひっぱり〕把手を造ることを習えば、今よりももっと高くたくさん売れるぜ[6]。

兜屋　さあ行こう、槍研ぎ師。

トリュガイオス　いや、いかん、わしはこいつの槍を買うつもりだからな。

槍研ぎ師　それじゃ、いくら出すね。

トリュガイオス　二つに鋸でひけば、葡萄の添木用に貰っとこう、百本で一ドラクマだ。

槍研ぎ師　馬鹿にしてやがる。さあ、行こう。

〔武具屋の連中、退場〕

トリュガイオス　ああ、そうしろ！　お客の子供らがはやもう小便をたれにここへ出て来たからな。どうやら歌うことになっているものの練習らしいな。

〔子供に〕おい坊や、いったい何を歌うつもりだね、わしの側に、ここに立って、先にやってごらん。

子供甲　「今ぞ歌い始めん若武者どもが……[7]」

トリュガイオス　やめろ、若武者どもを歌うのは。厄病神の申し子め。平和のときだというのに、これだ。お前はな、無学な呪われ小僧だ。

子供甲　「両の軍勢は進み寄って、間近に迫れるそのときに、革楯、打ち出しつけたる円楯は、はっしとばかり打ち合いぬ[8]」

トリュガイオス　楯だと。楯なんてことを言うのはやめにせんか。

子供甲　「たちまち起こるもののふの嘆きの声に鬨の声[9]」

トリュガイオス　もののふの嘆きの声だと。酒の神様にかけて、ひどい目に会わせるぞ、嘆きの声を歌ったりすると。しかも打出し付きをだ。

子供甲　それじゃ何を歌えばいいの。小父さん、好きなのを言ってよ。

トリュガイオス　「しかして牛の肉を啖いぬ」とか、そういうことをだ。「朝餉を供しぬ、そのほかの数々の珍味を」だ。

子供甲　「しかして牛の肉を啖いぬ。汗の流れる馬の頸より軛を解き放てり、はや戦さに飽きたれば」

トリュガイオス　よろしい。はや戦さに飽きて、それから食事だあね。こいつを歌ってくれ、こいつを、飽きて食事をしたというのを。

子供甲　「やがて啖い終わって、身をかためぬ」

トリュガイオス　一杯やってか。大喜びだな、きっと。

子供甲　「塔よりは打って出でたり、雄たけびは立ち上がりぬ」

トリュガイオス　小僧め、戦さもろともくたばっちまえ。戦争のほかには何も歌わない。いったい誰の子だ。

子供甲　僕？

トリュガイオス　そうとも、お前だ。

子供甲　ラマコスの子供だよ。

トリュガイオス　おやおや、わしはな、聞[1]いていて驚き呆れて考えていたよ、お前がブロマコスとかクラウシマコスとかいう男の子供じゃないかとね。

あっちへ行け、槍持ちどものところへ行って歌ってろ。クレオニュモスの息子はどこだ、入る前に何か歌え。お前が戦さのことを歌わないのはよくわかってる。思慮ある親父の子供だからな。

子供乙　「おれの楯に、サイオス人の誰かが今ごろは得意になっていることだろう。おれはいやだったが、素晴らしいその楯を繁みのなかに棄てて来たのだ[2]」

トリュガイオス　おい、大まら、そりゃお前の親父のことか。

子供乙　「だがおれの命は無事だ」

トリュガイオス　だがお前は両親の名折れになった。さあなかに入ろう。わしは確信をもっとる、たった今お前が楯について歌ったことを、決して忘れはしまいということをな。あの親父の息子だからな。

〔コロスに〕みんなのやるべき仕事はな、ここに残って、これをみんなガツガツ、バリバリ、からのオールは引かぬことだ。勇ましく詰めこみ、両の顎ですりつぶせ。野郎ども、白い歯も、噛み砕くのに使わなければ、なんの役に立つというのだ。

コロス　いや、心得た。よく言ってくれた。

トリュガイオス　さあ、今までかつえていた奴ら、兎の肉を詰めこめえ。こりゃいつもとはいかないぞ、主のない、ぶらぶらしている菓子に出会うということは。そのうえ、ぱくつけ、さもないと、言っとくがな、後悔するぞ。〔退場〕

コロス　静まれえ。花嫁を誰かここへ、外に連れて来い。
炬火をもて、みんなで喜びと歓呼とをわれらとともにせよ。
今こそ再び農具をみんな田舎にもって行かねばならぬ、
踊り終わってお神酒を注ぎ、ヒュペルボロスを追い払い、
神々に祈った後で、
ギリシア人に富をつかわし、
大量の麦、及ぶかぎりの
酒が、われらみなの者にできますように、
無花果をかじり、
嚊は子を生み、
われらがなくしたあらゆる富が
も一度すっかり集まるように、
輝く刀はなくなるように、と。

〔トリュガイオス花嫁とともに家のなかから登場。これから結婚の行進となる〕

トリュガイオス　こちらへ、わが妻よ、さあ鄙へ、
愛らしい女よ、わしとともに
愛らしく床に入ろうよ、

結び、結びの神よ、おお、
結び、結びの神よ、おお。
コロス　幸多き者よ、汝が幸を得しは
理（ことわり）なり、
結び、結びの神よ、おお、
結び、結びの神よ、おお。
セミ・コロスA　花嫁をどうしよう
花嫁をどうしよう。
セミ・コロスB　取り入れよう
取り入れよう。
コロス　さあ、先頭にいる者は
胴あげしてつれて行こうよ
花婿を、なあ、みんな。
結び、結びの神よ、おお、
結び、結びの神よ、おお。
トリュガイオス　みんな、それじゃ、無事息災で
無花果を集めて
暮らすだろう。
結び、結びの神よ、おお、
結び、結びの神よ、おお。
セミ・コロスA　男の方のは大きく太い、
セミ・コロスB　女の方のはうまい無花果。
トリュガイオス　食って大酒くらったときにゃあ、
そうだそうだと言うだろう。
コロス　結び、結びの神よ、おお。
トリュガイオス　〔見物に〕ご機嫌よう、ご機嫌よう、
皆さん方、わたしについていらっしゃれば、
お菓子を差し上げましょうわい。

訳註

一三三(1) 黄金虫中排泄物を食物としているもの。
(2) これは市の清掃屋で、汚物を市外に運び出して棄てる役目であった。
(3) こういう疑いはつねに奴隷にかけられがちであった。
一三四(1) 原文は Zeus Kataibates「雷となって天降る神ゼウス」と Zeus Skataibates「糞の神ゼウス」とのあいだにかけた洒落。両者は書けば s が一つ多いが、実際の発音では、Zeus k-: Zeus sk- で、Zeus が -s で終わっているから、全く同一である。
(2) シシリアのエトナ山近傍には実際に大黄金虫がいたということが物の本に見えているが、未詳。
(3) エウリピデスの失われた悲劇『ベレロポンテス』からのパロディー。ベレロポンテスまたはベレロポンは、有翼の天馬ペガソスを授けられて、これに乗って怪物を退治した英雄。アリストパネスは以下トリュガイオスをベレロポンテスに、黄金虫を天馬に擬して、エウリピデスのこの劇を茶化している。
(4) ここでトリュガイオスは黄金虫の形をした宙乗仕掛けに跨って登場。この仕掛けもまたエウリピデスの使用したものと同様であったに違いない。
(5) 「驢馬」kanthōn と「黄金虫」kantharos とにかけた洒落。
一三五(1) 昔のギリシアの町では、家と家とのあいだに路地があって、そこには汚物がいっぱい溜っていたらしい。
(2) エウリピデスの失われた悲劇『アイオロス』からの引用。以下同じ。
(3) 「鷲と黄金虫」の話。鷲が黄金虫をさらって行ったので、親黄金虫は鷲の巣に忍び入って、卵をつき落とした。鷲はゼウスのところに行って訴えたが、神は自分の膝に巣をつくるようにと言った。ところが黄金虫はゼウスの廻りをブンブンと飛び、神は追い払うために立ち上がった拍子に卵をみんな落として割ってしまった。
一三六(1) 「舵」とは男根のこと。ここでトリュガイオスは喜劇役者の扮装につきものの皮製の大きなのを見せる。
(2) ペイライエウスはアテナイの外港。ここに三つの港があり、その一つは

カンタロス（黄金虫）と呼ばれていた。

（3）　エウリピデスは跛の主人公を悲劇の主人公にしばしば用いたが、ここではペガソスから落ちたベレロポンテスを指す。

（4）「キオスの町」この洒落は不明。一説には、キオス人はよく馬鹿なことをしでかすので有名だったというが、一説には、これはキオス chios が chezō「糞をたれる」と音が似ていて、アテナイ人はどんなちょっとしたきっかけでも捕えて、同盟都市から金をまき上げようとしたことに対する皮肉であるとする。

（5）　ここで機械はゼウスの家の戸口にとまる。

（6）「馬黄金虫」hippo-kantharos は hippo-kentauros（腰から上が人間で、下が馬形の神話中の一族）や、アイスキュロスの後出一一七七行の「馬鶏」hippo-alektryon にかけた洒落。

（7）　正式の名乗りには、ギリシアには姓にあたるものがないから、父親の名と区とを言い、「誰々の子、何々区（デーモス）の誰々」と言った。

（8）　アトモネはケクロピス氏に属する一区（デーモス）。アテナイの北方九キロのところにあった。トリュガイオスは trygaō「葡萄を取り入れる」から作った人名で、この劇を通じて、この意味とのかけ合いがつねに用いられている。

一七七（1）「彼ら」とはラコニア人のことか。ラコニアはスパルタを首都とする国。ラコニア人は、ペロポネソス半島西南部のピュロス港内のスパクテリア島で前四二五年にアテナイ軍に破られ、多くの者が捕虜となったときに、和を申し入れたが、アテナイ人はこの戦いで幸運にも人気を得た指揮者の一人クレオンらに煽動されて、これを拒絶した。『騎士』七九四行。またアテナイ方でも戦争の二年目に疫病が起こり、ためにスパルタと和を講ぜんとしたが、成らなかった。

（2）　スパルタの守護神たるカストルとポリュデウケスの双生神を指す。

（3）　Attikōnikos は「ラコニア人」Lakōnikos に模して造った語。こういう語は実際にはない。なお -nikos は nikē「勝利」に通ずるから、ここに両者の戦争好きを諷したもの。

（4）　この言葉はクレオンがスパルタの使者が来たときに言った言葉（ツキュディデス第四巻二二行）とほぼ同じ意味である。

（5）　ここでは擬人化された平和の女神。

（6）『アカルナイの人々』九六四行に出て来るアテナイの将軍ラマコスの形容に同じ。

（7）　戦争は巨大な擂鉢のなかにもろもろのギリシアの都市を投げ入れて、すりつぶす気でいる。戦争が作ろうとするのはミュートートンという、チーズ、にんにく、卵、オリーヴ油、韮にたぶん蜜も入れて作る一種のペーストである。

プラシアイ Prasiai はラコニアの港町で、韮 prason と音が似ているところから、これにかけたもの。

（8）　アテナイの隣国メガラはにんにくの生産で有名であった。この都市はペロポネソス戦争でアテナイの敵方で、散々な目にあわされていた。

（9）　シシリアはチーズの名産地。

（10）　アッティカの、とくにヒュメトス山の蜂蜜は有名。

一七八（1）「革屋」とはクレオンのこと。彼はこの劇上演の前年、前四二二年にトラキアのアムピポリスの戦闘でスパルタの将ブラシダスに破れて、戦死したが、ブラシダス自身もまたこの戦いで死に、ここにこの二人の主戦論者が計らずも同時に除かれたために、和睦が容易になった。

（2）　エーゲ海の北部にある島。ここには古来有名な秘教があった。

（3）　これはブラシダスを指す。

（4）　古註によれば、マラトンの野でアテナイ人に前四九〇年に破られたペルシアの将軍であるという。彼は自分のギリシア語の知識を誇っていたが、本当は間違いだらけだったというので、次の彼の歌のなかの動詞の形には文法的な誤りがある。しかし一説にはこれは品行のよろしくないリュディア生れの奴隷だともいう。

（5）　トリュガイオスは広くあらゆる職業、身柄、国の人々に呼びかけているが、喜劇のコロスは二十四人に限られ、これは後で判るようにアッティカの農夫がその大部分を形成しているように思われるから、洞穴のなかから平和の女神像を引き出すときに加勢を頼まれるボイオティア人、アルゴス人、ラコニア人、メガラ人等は、あるいはコロスのなかに僅かずつ入っていたかも知れないが、たぶん別の、物を全く言わない人物として登場していたのであろうと考えられる。

（6）「赤いマント」は後出一一七五行と同じく、兵士のマントを指す。

(7) 当時のアテナイの有名な将軍。前四一四年シシリアで戦死した。

一七九(1) 応召の兵士は三日分の食糧を携帯した。

(2) 地獄の門番をしている三頭の怪犬。ここでは前年に戦死したクレオンのこと。

(3) 宴会で盃に数滴の葡萄酒を入れておいて、これを一定の目的物に投じる遊戯。後出一二四四行註参照。

(4) わらぶとんは貧乏人や兵士の用いたベッド。

(5) 当時スパルタ軍をたびたび破った有名な海将。

(6) アテナイの競技場の一つ。軍隊の集合所に使用されていた。

一八〇(1) 祖国を敵に売った男。彼のやっていることを人が詰問すると、「すべていいことだ」と答えたという。

(2) アテナイでは一日に一人しか死刑にしない習慣があった。従って幾人かが死刑の宣告をうけた場合には、誰の番かを籤できめたと古註は伝えている。ヘルメスは籤や富籤の神様であるから、これを野次ったもの。

(3) これは応召のとき兵隊の携帯する食糧。

(4) これは原文ではまた淫猥な意味があるので、次のトリュガイオスの言葉がある。

(5) アッティカの有名なエレウシスの秘教に入会するためには、まず豚を犠牲に供しなくてはならなかった。その代金が三ドラクマだというのである。秘教に入会した者は死後に幸多い生を得ることになっているので、トリュガイオスのこの言葉がある。

(6) 前四一一年に四百人の寡頭政権成立に努力した主戦派の男。彼は恐ろしい勇ましい様子だったが、本当は臆病者だったという。

(7) ヘルメスは泥坊の神である。

一八一(1) ヘロドトス第一巻一一三行は、彼らがギリシア人と異なり、神像をもたず、太陽、月、風等に供物を供していると言っている。

(2) これはペロポネソス戦争中にたびたびあった日蝕を指すとも考えられるが、またこの時代のアテナイの暦の改革への言及とも取れる。

(3) デメテル女神のエレウシスの秘教、ゼウスのディポリエイア祭、アプロディテ女神のアドニス祭もみんなヘルメスの祭にするという意味。

(4) 本当はアポロン神の称呼で、これもまたヘルメスのにするという意味。

(5) 原文では本当に仕事にかかると、盃で酒を飲むとの両方にかけた洒落。

(6) 「かきながら」は二重の意味。

(7) 戦場で楯を棄てて逃げた臆病な男。後出六七八、一二九五—一三〇四行参照。

(8) スパルタ人はこの戦争中つねにアッティカに侵入して、掠奪を行ない、田畑を荒らし、果樹を切り倒して、土地を荒廃に帰せしめた。大麦は囚人の常食であった。

(9) カリスは三人の優雅の女神、ホラはゼウスとテミスの三人（春、夏、秋）の娘。ポトスは「あこがれ、要望」を擬人化した神。

(10) アレスとエニュアリオスは戦いの神。

一八二(1) ボイオティアと後出の四七五行のアルゴスとはこの戦争の終わるのに反対だった。

(2) ラマコスの兜の飾りについていたゴルゴンを指す。後出五六一行参照。

(3) アルゴスはこの戦争でどちらの側にもつかずにいて、漁夫の利を得ていた。

(4) 「かじりついている」「木」は囚人の枷のことで、ピュロスの捕虜たるスパルタ人たちを意味する。同時にこれは多分木工業者たる平和産業者と、金属を扱う戦争商売の者との対立を示しているらしい。

(5) メガラは戦争中アテナイに圧迫されて、経済的に全く窮していた。

(6) メガラはこの劇が上演された年に締結された平和条約で、その港のニサイアをアテナイに譲ることを拒んで、和平に反対した。

(7) にんにくはメガラの特産物、闘鶏にこれを用いるところから来た洒落。

(8) これはアテナイが海上の権力で満足して、他のことに手を出すなということ。

一八三(1) エウリピデスのパロディー。古註によれば、これは失われた劇『テレポス』または『トレポレモス』中の一行だという。

(2) 「小唄」はエウリピデスがその劇中で用いた、アリストパネスによれば厳かなるべき悲劇にふさわしくない調子の歌、また五三四行の「三百代言式」は、エウリピデスが好んで書いたソフィスト流の議論を意味する。アリストパネスはエウリピデスの作品のこういう点を『蛙』のなかで一々批評している。

（3）物資が豊かで、奴隷まで酔っ払っているということ。
（4）みんなが戦争でなぐり合って、顔をはらしているから、はれを引かすために吸い玉のご厄介になっているということ。
（5）戦争で儲けている者と、平和の方がよい者と商売によって違うので、平和の到来に対して、いろいろと異なる反応がある。
（6）これはラマコス将軍の武具を指す。

一八四（1）当時の大彫刻家。オリュンピアのゼウスの神像、アテナイのアクロポリスのパルテノンに安置されたアテナ女神像、パルテノンの装飾の彫刻などを作った。プルタルコスの『ペリクレス伝』中に（三一―二）、ペロポネソス戦争の原因のなかに次のごとき事柄を挙げている。この時機にアテナイの政権をほとんど独裁的に掌握していた大政治家で文芸のパトロンであったペリクレスをおとしいれるべく、彼の政敵が前四三二年に、彼の友人であるペイディアスが自分に依嘱されているアテナ女神の像を作るための黄金の一部をくすねたと攻撃した。もちろんペイディアスは直ちに身の明しを立てることができたが、今度は女神の楯の表の彫刻のなかにペリクレスと自分の姿を挿入したというので、捕えられて獄死したという。もっとも獄死のことは事実ではなく、彼は亡命したらしい。
（2）ペリクレスは自己の政権を守るために、ペロポネソス戦争を始めたと攻撃された。彼は前四三二年に、スパルタの味方である隣国のメガラに、アテナイの支配下にある多くの諸市との交易を禁じ、これが戦争のきっかけの一つとなった。
（3）デロス同盟の都市の多くはアテナイの支配下にあり貢税を課された。
（4）スパルタの人々がこの戦争を始めるために買収されたという事実は伝わっていないが、彼らにもまた、他の場合に醜い行為がしばしばあった。
（5）スパルタがアッティカに侵入して、農園を焼き木を切り倒したのに対して、アテナイ側は軍艦でもって敵方の国々の沿海地方を急襲して、これを荒廃せしめたことをいう。
（6）ペロポネソス戦争が始まると、ペリクレスはアッティカの人々をアテナイ市に強制的に集め住まわせ、アッティカの地を敵の手にゆだねるとともに、自分の方は海上を制して、これに対抗した。
（7）民会で演説する政治家たちが、田舎から引き上げて来て、窮迫している者たちに与えるべく要求した乾無花果を意味するか。
（8）何度も和睦の機会があったことを指す。
（9）スパルタの将ブラシダスがトラキアで活動を始めると、同盟の諸都市は解放の好機至れりと、ブラシダスの一挙手一投足に注意し、アテナイはまた同盟国の裏切りを恐れて見張っていた。
（10）「革屋」はクレオンのこと。彼はこの劇上演の前年に戦死した。
（11）ヘルメスは死者の魂を冥界に導く役目をもっている。従って彼は天上とともに冥界の神でもある。

一八五（1）ツキュディデスは、幾度か和睦の機会があったことを示している。平和反対者中の主謀はつねにクレオンだった。
（2）革屋のクレオンと、革で作った武具の両方にかけてある。
（3）「棄て子」apobolimaios と、「投げ棄てる」apobalein とにかけた洒落。
（4）アクロポリスに近いプニュクスの丘は、民会の開かれたところで、ここには現在もなお石の壇があり、ここに登って人々が演説した。
（5）クレオンの死後、その後継者となったデマゴーグ。彼はランプ屋だった。
（6）大悲劇詩人。この当時すでに七十五歳の高齢に達していた。
（7）前五五六―四六八年頃、イオニアのケオス島出身の大抒情詩人。彼は金銭と交換して自作の詩を売り、はなはだ金にきたなかったと言われている。
（8）これは「神の援けがあれば、簀に乗ってでも海を渡れる」という諺のもじり。
（9）アリストパネスの先輩の喜劇作者。大酒飲みで、アリストパネスは前四二四年上演の『騎士』五二六―三六行でこれを諷したところ、翌年この愉快な老人は『酒がめ』でアリストパネスの『雲』と競演して、勝利を得、自分が酒にのみ溺れているわけではないことを説明してみせた。

一八六（1）秋の収穫時に食いすぎたときの用心。
（2）エウリピデスの『ベレロポンテス』からの引用。
（3）ガニュメデスは、ゼウスがその美しさに惹かれて、この世から天上にさらって行った美少年。その糞を食っていればよろしいという意味。
（4）どこからか不明だが、この行の韻律から推測して、誰か喜劇作者からの引用。

(5) ここから八一八行までは、パラバシスと称する、コロスのみがオルケーストラに残って、見物の方に進み寄り、作者の代弁者となって見物に話しかける部分。このうち七三四—六四行が本当の意味でのパラバシス、七六五行以下は激しい踊りと歌になる。なおパラバシスにはエピレーマという部分があるべきなのだが、これは一一二七—九〇行に、別に現われている。

(6) —◡◡|—を基調にした、行進用の歌の型。アリストパネス自身でこう言いながら、次に同じ調子で自讃をやっている。

(7) 「ゼウスの娘」とは詩女神ミューズのこと。

(8) これ以下の言葉は、アリストパネスが、喜劇がつまらない俄か芝居で、馬鹿馬鹿しいくすぐりであったものを、社会のために有用な知的な諷刺の具に育て上げたのは自分だと誇っている。

(9) これはアリストパネスが『蛙』一〇〇四行でアイスキュロスに関して言っている言葉で、ここでは彼は自分がこの大悲劇詩人と同じ功績を喜劇において立てたことを誇っているのである。

(10) ここから七五八行までは『蜂』一〇三〇—六行の言葉の繰り返しである。

(11) これはアリストパネスがときの勢力家クレオンを自分の喜劇でつねに恐れるところなく攻撃しつづけたことをいう。

(12) アリストパネスは『騎士』一〇一七行でクレオンをすでにこう呼んでいる。

(13) 遊女の名か？

(14) 胴は女で手足は驢馬の形の怪物。淫乱のシムボルとなっている。

一八七 (1) プラトンの『カルミデス』などにあるように、角力場にいる美少年に近づこうと、男どもがつねにうろうろしていた。

(2) アリストパネスは禿げ頭であった。『騎士』五五〇行参照。

(3) これ以後、この歌の七七九行に至る部分は、古註によればステシコロス（およそ前六四〇—五五〇年頃）の抒情詩からの借用。七九六行以下も同じ。

(4) 同時代の悲劇詩人。彼の三人の息子はダンサーであって（『蜂』一四九七行以下参照）、一人はまた悲劇をも作った。彼の小人のような身体や、猛烈な身振りをアリストパネスはつねに嘲笑している。

(5) 古註によればカルキノスは『鼠』という劇を書いたが、全く失敗だったという。

(6) モルシモス、メランティオスは、ピロクレスの子、アイスキュロスの孫で、前者は三文悲劇作者、後者はその協力者、悲劇役者で、モルシモスの『メデイア』中で金切り声でイアソンのアリアを歌った。さらに彼は美食の大食漢だった。

一八八 (1) 古註によれば、ディテュラムボス作者は絶えず空から霊感を求める者として嘲笑されていた。この行の「澄み渡る：：」なる語は、ギリシア語ではただの一語より成る素晴らしく長い形容詞である。ディテュラムボスは酒神ディオニュソスに捧げる祭りの歌で、この時代のディテュラムボス作者は、新奇を求めてこのように大袈裟な言葉を盛んに用いたらしい。

(2) イオンは小アジアのイオニアの都市キオスの出であるが、アテナイで名声を博した悲劇と抒情詩の作家。およそ前四九〇年頃に生まれ、この劇上演の年、すなわち前四二一年以前に世を去った。彼に「空に漂う暁の星を：：」に始まるディテュラムボスがあったと古註は伝えている。

(3) カルキノスの、身体を猛烈にぐるぐると廻す踊り方を言う。ただしこれはカルキノスの「子供」と言うだろうと見物が思っているところを、予想に反して「回転」と言った手法。これはアリストパネスのよく用いるやり口である。

一八九 (1) アッティカの小邑。ここに四年に一回アテナイから賑かな群集を伴った祭使が送られた。

(2) イストモス祭はコリントス市の近くにあった海神ポセイドンの大社の祭りで、大競技会が催された。イストモスは現在は運河が掘られている。ペロポネソス半島と中部ギリシアをつなぐ地峡で、これはまた女性の身体の一部分をも意味する。ここで下男は女のその部分のまわりにぐるりと輪を指で画いてみせるのだが、この祭りには大勢の見物が来て、しかも場所が限られているので、前もって自分のテントを張る場所を予約しておかなければならなかったと古註は伝えている。

(3) 『騎士』一一八五行、『蜂』一二八三行でも揶揄されている。この男はアウトメネスの三男で、その新発見のけしからぬ方法で有名であった。

(4) アテナイの劇場ではブーレーの人々には特別の席が与えられていた。トリュガイオスは女を連れて彼らの席の方に進んで行ったのであろう。ブーレーはアッティカの十の氏族の各々から選出された五十の代表者を合わせて五

百人より成り、一年を十に分けて、各々の氏族の五十人が順番でブーレーの行政の執行委員（プリュタニス、複数はプリュタネイス）の職務を遂行した。従ってプリュタネイスはブーレーの議員中この職務の期間にある五十人を称する。彼らは民会やブーレーを召集し、議題を提供し、外国の使節を引見するなど、広い権限をもっていた。

（5）「お祭り」、原文では anarrysis アテナイのアパトゥリア祭の二日目の名で、犠牲獣の頸を切るために、その頭を上方に引っぱる anarryein ことから来た名称であるが、同時にこの語は reō「流れる」の一形 ry- を含むとも考え得るところから、あまり香ばしくない意味にかえた洒落。

（6）ブーレーには犠牲獣の肉を料理する台所があった。もちろんここでは意味は女神の身体の一部分にかけて、二重になっている。次の行の「黒びかり」は女性の身体の一部分の形容にもなっている。

（7）レスリングとボクシングを合わせたような、ほとんどあらゆることが許されている乱暴な競技。

（8）何かブーレーに申請するには、まずプリュタネイスを通じなくてはならなかった。彼らは、しかし、何か袖の下を貰わぬことには、今日は休日だから、何ごともできないというわけである。

一九〇（1）アンテステリア祭の三日目の「壺の祭り」と呼ばれる日には、いろいろな野菜を入れた壺をヘルメスに捧げた。

（2）法螺吹きの弱虫。

（3）古註によれば、籠のなかに大麦の粒と頭飾の下に小刀をかくして入れておくのが習慣であったという。頭飾を犠牲獣の頭にかけ、大麦をその上にふりかけてから、犠牲に供した。

（4）古註によればテーバイ出の笛吹き。

（5）これは祭壇を清めるためである。

（6）これは祭壇から燃えている木を取って、水につける動作で、水を火によって清めるためである。

（7）「こいつ」は原文「大麦」、これはまた男根を意味する。

一九一（1）良家の婦人や娘はこの時代には家の奥に閉じこもっていて、こういう風に窓や戸口からのぞいたりすることはよくない女のやることであった。

（2）これは本当に戦争が始まった前四三一年からではなくて、アテナイとペロポネソスとのあいだの最初の紛争が始まった前四三四年からの計算である。

（3）モリュコスは食道楽で有名だった男、『アカルナイの人々』八八七行を参照。テレアスは別にとくに食道楽としては知られていない。グラウケテスはモリュコスとともに食道楽で名高かった男。『女だけの祭』一〇三三行では鯨を食っちまったと、ひやかされている。

（4）メランティオスについては既出八〇二―三行を見よ。次に出る『メデイア』は彼の兄弟のモルシモスの作品のパロディー。

（5）鰻は食卓に供するときには砂糖大根で蔽って出した。

一九二（1）悲劇喜劇の上演に際して、コロスの費用を受け持つべく国家から命ぜられる富裕な市民。劇はディオニュソス神に奉納される行事であって、コレゴスがその奉納者と認められていたから、競演の結果の優勝の名誉もまた彼が詩人とともにこれをうけたのである。犠牲の小羊ももちろんこの場合にはコレゴスの負担であるから、これを殺さないでおくことは、その損害を少なくする。

（2）有名な占い師。

（3）実在の人物らしい。オレオスはエウボイアの町。

（4）犠牲獣の腰と尾とを火にあてて、その形によって犠牲の吉凶を占うから、「腰にさわるな」と言い、次の行で「しっぽはいいぞ」と言うのである。

（5）舌だけは別にとっておいて、犠牲の宴が終わったときに、布告の神ヘルメスに捧げる習慣であった。

一九三（1）ボイオティアの太古の予言者。彼にはニムフが憑いていたという。

（2）これはアテナイとスパルタとの二大国が手を握ることをいう。また実際にその後の平和条約では、ここに言っている通りの結果となった。

（3）市庁、すなわちプリュタネイスの役所たるプリュタネイオンには市の中心たる炉があり、毎日公けの費用で食事が供された。これにはプリュタネイスの外に、外国の使節や、そのほか公けの事柄に功のあった人が招かれた。

（4）トリュガイオスの一〇九〇―九四行は、ホメロス風の言葉と韻律とで作られてはいるが、ホメロスそのものではない。

（5）アポロン神に仕える女予言者の総称。

（6）これはホメロスの『イリアス』九巻六三行。

（7）トリュガイオスは遂に何か少々与えたのであろう。

一四（1）犠牲獣の皮は予言者の所有となった。ヒエロクレスはこういう羊の皮を着ていたものか。

（2）エウボイア島南方の島。

（3）これは兵隊の食糧。

（4）日本のお鍋、お花などのような、女中の名。トラッタとはトラキアの女の意味で、奴隷にはよく出身地の名がつけられている。

（5）ミルトの枝は宴会では客の席を飾り、また余興に客が歌う折に、これを手に持つ習慣があった。さらに小鳥の料理にはミルトを使用し、またその実は料理や薬用にした。

（6）エーゲ海北部にある島。この地の葡萄は有名であった。

一五（1）小アジアのリュディアの主都。羊毛の染物では定評があった。

（2）小アジアのギリシア人の都市。なぜこの町の名が臆病と関係あるかは不明。

（3）これはアイスキュロスの失われた作品『ミュルミドネス』中で、鶏の足をもった馬の紋章の形容詞であるが、よほど滑稽な感じを与えたとみえて、アリストパネスはよくこれを揶揄している。

（4）アテナイでは十八歳から六十歳までの男子は兵役適齢者として、年齢的に、また十の氏族別に登録されていた。召集のときには、それにあたった者のリストが、中央広場（アゴラ）の、各々の氏族の名祖の十の像の下に発表される。この折に隊長はときどき勝手にリストの名前を消したり挿入したりするというのである。

（5）軍隊用のマント。

（6）飾毛を兜の頂につける差しこみ。

一六（1）ムナーは百ドラクマ。

（2）胴には手を出すところがあるが、これをオールの孔といって、一二三四行の洒落にかけたもの。

（3）軍艦の維持は富裕な個人の負担になっていたが、これにあたった者は費用を少なくするために、オールの孔を塞いで漕手の数をへらし、費用を胡麻化した。

（4）この軍隊用のラッパは丈の高い楽器で、その先のまるく開いている方に鉛を入れて重くして、立つようにし、口の方には棒をつけると、これは下りコッタボスに使えるという意味。下りコッタボスとは、丈の高い蠟燭台のようなものの上にマネス——これは奴隷の名である——と称する小さな銅の像がついていて、その頭上に小さな秤が棒でつるされているものを言う。競技者は盃に数滴の葡萄酒を入れておいて、この秤の皿めがけて投ずる。もしその酒が皿にうまく入ると、皿が下ってマネスの頭にガチャリと当るという仕組である。

（5）ヘロドトスによれば、エジプト人は下剤の愛用者で、毎月三日間連続して下剤を服用したという。

（6）把手をつけると壺になる。

（7）これはテーバイにむかう七将の戦いの次の世代の英雄たちが、再びテーバイを攻めて、この市を陥れた伝説を歌った叙事詩『エピゴノイ』の冒頭の句であるが、この叙事詩は散佚して伝わらない。

（8）ホメロス、『イリアス』四巻四四七行、八巻六一行。

（9）『イリアス』四巻四五〇行、八巻六四行。これ以下の叙事詩風の歌は、ホメロス的ではあるが、ホメロスにはない。

一七（1）ブロマコスは「戦いを欲する者」、クラウシマコスは「戦いを歎く者」の意味。

（2）これは前八世紀のイオニアの詩人アルキロコスの有名な詩句。彼はトラキアでサイオイ人との戦闘で、身が危くなったとき、楯を棄てて逃走した。

トリバルロス　野蛮人の神、前者と同じく天上界よりの使節。

鳥

登場人物

エウエルピデス　中年のアテナイ市民。
ピステタイロス　同上。
戴勝鳥(やつがしら)の侍者　はましぎ。
戴勝鳥　前身はトラキア王テレウス、現在は鳥類の王。
鳥のコロス　二十四羽の各種の鳥類より成る。
神官
三文詩人
おみくじ売り
メトン　測地学者。
監察官
法令売り
知らせの使い
番兵
虹の女神
伝令使
親不孝者
キネシアス　ディテュランボス詩人。
告発常習者
プロメテウス　人間に好意を寄せる神人。
ポセイドン　海洋の主神
ヘラクレス　英雄にして天上ののち神となる
（ポセイドン、ヘラクレス）天上界よりの使節団。

〔舞台正面奥手に岩山、中央に洞窟あり、そばに一本の立木、四辺一帯荒涼たる僻地のありさま、エウエルピデスとピステタイロス、各自手に鳥を据え、籠や水差し、桃金嬢の枝などをてんでに携えて登場〕

エウエルピデス　まっすぐに行けだ？　あの樹の見える方へか。

ピステタイロス　勝手にしやがれ、こいつはまた戻れって啼きやがる。

エウエルピデス　馬鹿馬鹿しい、何をこうあっちこっちへとほっつき歩くんだね。へたばっちまうよ、こうあてもなく引っ張られどおしじゃ。

ピステタイロス　おれだっていいざまさ、小鴉のいうままになって。四十里のようも歩きまわってさ。

エウエルピデス　私だってとんだ災難だ、九官鳥[1]のいうままになって、あったら足指の爪を擦り減らしてさ。

ピステタイロス　だがそもそもここはどういうところか、おれにはまださっぱりわからんが。

エウエルピデス　このところからあんたは自分の祖国がまあ見つかりますかね。

ピステタイロス　いやとんでもない、あのエクセケスティデス[2]だってもここからじゃあな。

エウエルピデス　やれやれ。

ピステタイロス　おい、そんなら君はこの道を進んで行けよ。

エウエルピデス　あの鳥屋のやつめ、おれたちをほんとに酷い目にあわせやがった、板に並べて鳥を売る、腹の黒いピロクラテス[3]めが、あの鳥どもの棟梁になったやつがしらのテレウスのいどころを、この二羽の鳥が私らに知らせてくれようなんて言ってさ、タルレイデス[4]の子のこの九官を一貫でもって、あの小鴉は三貫もとって、売りつけやがった。だのにこいつらはつつくほかは何の能もありゃしない。今だってまた大口開けてんだ、いったいどこまでおれたちをあの岩山へ、このうえ引っ張って行こうてんだ。ここには道なんかてんでないのに。

ピステタイロス　全くな。こっちにだって小径一つありゃしない。

エウエルピデス　その小鴉は、行く手をどうだって言うんですえ。

ピステタイロス　うん、はて、こりゃあ今とさっきじゃあ、啼き方が違うぞ。

エウエルピデス　じゃあいったい道をどう行けてんです。

ピステタイロス　どうっておれの指をみんなばりばりかじっちまおうてだけさ。

エウエルピデス　これはまたとんだ酷い目にあうもんだな、せっかく私たちが、鴉のとこへ出て失せよう、ってんで支度までちゃんとして来たのに、肝腎の行く道が、それだのに、見つけられないってんだから。全体わたしらは、ねえこの座においでの皆さん方、あのサカ人[5]とはちょうど逆しまな病気にとりつかれてるんで、つまりあいつは市の生れでもないのに、無理やり割り込もうてんだし、私らのほうはれっきとした氏も素姓も備わってながらさ、町っ子も町っ子、唯一人追い立てる者もないのに、都を飛んで出て来たんです、両の足に乗ってね。いや何も別に自分の市がいやだってえんじゃあなし、もともと広大でないの今を盛りでないのとか、「ご存分に」誰でもが自由に罰金を払えないからてんじゃないんです、が、例えばでさ、あんな（やかましい）蟬でもが、枝葉の上で歌うのはせいぜい一、二ヵ月だけというのに、アテナイ人は一生のあいだ公事の訴訟ので歌い暮らそうてんですものね、それがいやさにこうやって出掛けて来たわけなんで。籠をぶらさげ水差しだの桃金嬢の枝だのを持って、ぶらりぶらりとどこか公事ごとのない（気楽な）場所を探してまわり、そこへ御輿を据えて世を送ろう、って考えたんです。でまずさし当り、二人してあのやつがしらのテレウスのところを訪ねて行き、もしやあの人がそんな町の上をでも飛んでいて、知ってまいか、訊こうてんです。

ピステタイロス　おい君。

エウエルピデス　何ですかえ。

ピステタイロス　さっきからこの小鴉がこう上を向いて啼くんだがね。

エウエルピデス　そう言やこの九官鳥も上向いてあんぐりやってまさ、何か教えてくれるみたいに。こりゃきっとここら辺に鳥どもがいるに相違ないですぜ。どんどん騒ぎ立てたら、すぐさまわかるでしょうよ。

ピステタイロス　じゃあこうすりゃいいんだ、そら、脚で岩を蹴るんだ。

エウエルピデス　そんならあんたは頭でなさいよ、騒ぎの音が倍になるよう。

ピステタイロス　今度は君は石をもってたたきたまえ。

エウエルピデス　よいしょ、言うにゃ及ぶと。こらこら。

ピステタイロス　おい何を言うんだ。やつがしらを子等だって？　子供ってかわりに棟梁って呼ばなきゃだめだぞ。

エウエルピデス　かしらかしら、もういっぺんたたかせようてんですか。かしらかしら。

〔はましぎ、巌の中央洞穴の口にある扉をあけて出て来る。鳥の頭の面に長い嘴をつける。鳥王の従者。二人の人間と顔を見合わせて互いにたまげあう〕

はましぎ　誰じゃね、そこな御仁らは。誰だ王様を呼んじょるのは。

エウエルピデス　おお災難除けのアポロンさま、何ていう大きな口だ。

はましぎ　ははあとんでもない、こいつらは鳥さしじゃよ。

エウエルピデス　こいつはひでえ。何とかもちっと良く言えんかね。

はましぎ　おっ死んじまえ。

エウエルピデス　だが私らは人間じゃあないんだよ。

はましぎ　じゃいったい何だ。

エウエルピデス　「おっかなびっくり[1]」さ私は、リビュアの鳥でね。

はましぎ　馬鹿なことぬかすな。

エウエルピデス　本当だよ、そんならこの足もとのに訊いてごらん。

〔下に倒れてるピステタイロスを指す〕

はましぎ　じゃあいったいそっちのは何て鳥じゃね、言わんかな。

ピステタイロス　糞し鳥さ私は、金翅鳥の類でね。

エウエルピデス　だがそもそもお前さんは全体何ていう動物だね。

はましぎ　わたしはそれ手下[2]の鳥さ。

エウエルピデス　闘鶏にでも負けたんかね。

はましぎ　そうではないが、ご主人がやつがしらにならしゃったそのときに、おつきの家来にこと欠かぬため、私も鳥になるようと、お祈りなされたのじゃけん。

エウエルピデス　じゃあ鳥でも何か家来がいるのかね。

はましぎ　そりゃご主人[3]はな。たぶん前に人間だったからじゃろうよ。じゃでパレロンのひしこが食りたくなるときには、この私が椀をもってひしこを取りにかけて行く。また汁粉が欲しいとおっしゃる、さあ杓子だの土瓶だのいる、ってえと私が馳けて杓子を取ってくる。

エウエルピデス　なるほどこいつは馳けどり[4]だな。ところでいいかね、馳けどり君、用ってのはつまりご主人をね、ここへ呼んでもらいたいんだよ。

はましぎ　だがあいにくといまちょうど臥んどいでなんじゃよ、山査子の実や羽蟻なんかをきこし召してな。

エウエルピデス　かまわんから起こして来なさい。

はましぎ　お気にさわるのははっきりとわかっとるけんど、お前がたの頼みゆえまあお起こししてあげようか。〔中に入る〕

ピステタイロス　ええ手前なんかみじめにくたばっちまえ、ひとを嚇して生きた心地もなくなしおった。

エウエルピデス　あれ、大変だ、私の九官も飛んでっちゃったよ。嚇かされて。

ピステタイロス　何だこの臆病野郎め、怖さに九官を放したんだろう。

エウエルピデス　じゃあ聞くが、あんたはあの小鴉を、へたばったおり放しちまったのじゃないかね。

ピステタイロス　なにが、そんなことあるものか。

エウエルピデス　じゃあどこにいるね。

ピステタイロス　飛んでったさ。

エウエルピデス　そいで放したんじゃない？　おい、あんたは全くお強いよ。

〔鳥類の王、やつがしら、車台に乗って現われる。鳥の面に大きな嘴と長大な頭冠毛〕

やつがしら　森を開け(1)、それへ出て参るのじゃけに。

エウエルピデス　おおヘラクレスさま、こいつはまたいったい何て動物だろう、どうだこの羽根ぐみは、どうだいあの三条の冠毛の恰好は。

やつがしら　わしを尋ねとるのはどの仁たちじゃな。

エウエルピデス　十二柱の神々があんたをとんだ目にあわせたと見えますなあ。

やつがしら　よもやこの羽根ぐみを見て、わしを嘲弄されるのではあるまいな。わしも昔は、客人がた、人間だったのじゃ。

エウエルピデス　いやべつに、あんたのことを笑いはしてませんがね。

やつがしら　では何をじゃ？

エウエルピデス　そのお嘴がちょっとおかしく見えるもんでね。

やつがしら　だがこんなふうにソポクレス奴(2)が歌舞伎のなかでわし、このテレウスを凌辱しとるのじゃ。 (一〇一)

エウエルピデス　ではあんたがテレウスさんなんで？　鳥でおいでで、それとも孔雀(3)で？

やつがしら　わしは鳥じゃよ。

エウエルピデス　そんならあんたの羽根はどこにあるんで。

やつがしら　抜けてしもうたのじゃ。

エウエルピデス　何かご病気でもなすったんで。

やつがしら　いや、だが冬になると鳥というものはな、みな羽根が抜けて、また後から別なのが生えて来るのじゃ。ところでこなたらはどうした仁じゃ、言いなされ。

エウエルピデス　あっしら？　へえ、人間なんでして。

やつがしら　生れはどこじゃ。

エウエルピデス　あの立派な軍艦(4)の出たとこで。 (一〇八)

やつがしら　陪審員(5)ではあるまいな、まさか。

エウエルピデス　とんでもない。そのあべこべ。反陪審員でさ。

やつがしら　ではこなたの郷ではそうした種子もまくのかな。

エウエルピデス　ちっとはね、探しまわりゃあ田舎に見つかりましょうぜ。

やつがしら　で、そもそも何用ばしあって、ここへやって来られたのじゃ。

エウエルピデス　あんたとご相談したいと思いましてね。

やつがしら　何ごとをかな。

エウエルピデス　まず第一に、あんたも人間だった、もと私らと同じにね、そいから借金がたんとあった、もと私らと同じにね、でまたいい気になって金を返さんでいた、もと私らと同じにね。ところが今度は鳥類に性を変えなさって、陸の上だの海の上だのをぐるうっと飛びまわっておいでだ。そこで人間の知恵、鳥の知恵の及ぶかぎりは何でもわきまえておいでなんだ。そいだからこうやって私らはあんたのところへお願いにやって来たんです、どこかにね毛布(6)のようにむくむくした、やんわりと中にくるまって寝まれる郷があったら教えてもらおうと思ってね。 (一二一)

やつがしら　ではあのクラナアイ(7)の都（アテナイ）よりもっと大きな国を探しなさるか。

エウエルピデス　大きくはないにしても、もちっと間尺にあったやつをね。

やつがしら　こなたはきっと、寡頭政治を望んどいでじゃな。

エウエルピデス　私が？　とんでもない。スケリアスの子(8)みたいな、下等な奴などまっぴらでさ。

やつがしら　ではいったいどんな郷に住まうのがいちばんお好きなのじゃね。

エウエルピデス　そこでいちばん面倒なことってのがまずこんなもんでしょうな、門口に朝早くから誰か友だちがやって来て言うことにゃ

「オリュンポスにおいでのゼウス神にかけて、どうか家(うら)へ来てください、あんたもお子さんたちもね、朝湯を使ったらぜひね。婚礼祝いの馳走をしますから。どうしても来てくれんじゃあいけません(1)よ、そいでなきゃもうけして来てもらいますまい、私が今に貧乏したときにもね」って。 (一三四)

やつがしら　全くこなたは難儀なことが好きなものじゃな。してまたあなたは。

ピステタイロス　私もこんなのが好いですな。

やつがしら　どんなのじゃね。

ピステタイロス　そのところでは出合いがしらに人がこう私をとがめるのですな、年ごろのきれいな息子の父親が、酷い仕打ちでもされたみたいに、「おいスティルボニデス、ありがたいことだな、おれの子供が稽古場(2)から湯に入って帰るというに出会っといてさ、口もつけず言いかけもせず、抱き締めもせず、きんを握ってくれもせぬなんて。親父からの交際(つきあい)なのに」ってね。 (一四二)

やつがしら　いやはやお気の毒な仁じゃな、そんな難儀なことが好きとは。だが定めじゃ、ちょうど言われるとおりの結構な国があの紅海(3)のそばにありますぞ。

エウエルピデス　ひええ、だがまっぴらですよ、私たちは、海のそばはねえ。朝っぱらから（軍艦の）サラミニアがね、裁判所(4)への召喚状をもってぽっかり出るところなどは。ギリシアの町を、どこか教えてくださいませんかえ。

やつがしら　何でまた、エリスの、レプレオン(5)へ行って住まわんのじゃな。

エウエルピデス　いやあ神々にかけて、見はしないけど、メランティオス(6)じゃあもうレプラは、まっぴらまっぴら。 (一五一)

やつがしら　だがと、ほかにもあるは、ロクリスのオプンティオイ(7)はどうじゃ、あすこにいって住まうに限るな。

エウエルピデス　だけど私はオプンティオスみたいになるのは、何十万と金をもらってもいやでさあ。それよりか、それ、この鳥仲間の暮しってのは、どんなものですえ、あんたは詳しくご存じでしょうが。

やつがしら　暮し工合は悪くもないじゃね。まず第一、こっちでは蟇口(がまぐち)なしに暮らさにゃならん。

エウエルピデス　ずいぶんとそうすりゃ世間から贋金作りが減りますよ。

やつがしら　そいから苑生(そのう)に下りて白胡麻や桃金嬢(てんにんか)の実やひなげしだのはっか草なんかをついばむのじゃ。 (一六〇)

エウエルピデス　するってえとあんたがたは、花婿みたいな暮しをやってるわけですな。

ピステタイロス　ほうほう、いや鳥の世界には素晴らしい企画が見透されるぞ、またそれを成就する力とがな、もし余が説(8)に従われればですな。

やつがしら　どんな説に従うのじゃね。

ピステタイロス　どんな説にだって？　まず第一にそこらじゅうを大口あけて飛びまわらないことですな。そんな所業はまったく不見識なこってすよ。例えばあちらの私らの国じゃ、飛びまわってる奴ら(9)のことを「こいつは何て鳥だ」って訊ねると、テレアス氏がこう言うのです「人間鳥でさ、尻が軽くて飛びまわってる、性根(しょうね)もわからず、いつだって同じとこにとまってたことはない奴ですぜ」って。 (一七〇)

やつがしら　いやあディオニュソスにかけて、良くぞそれを咎めてくださった。さてそこでどうすればよろしかろうか。

ピステタイロス　一国を建てるんですな。

やつがしら　だがいったいどんな国をわしら鳥類が建てられようぞ。

ピステタイロス　本気ですか、全く怪しからんことをあんたはおっしゃるですな。下をごらんなさい。

やつがしら　それこの通り見ておるわ。

ピステタイロス　今度は上をごらん。

やつがしら　見とるよ。

ピステタイロス　首をぐるっと廻して見て。

やつがしら　ふん全くな、頭がねじれてしもうたら、好い目を見ようて。
ピステタイロス　何か見えましたかね。
やつがしら　雲と虚空とがな。
ピステタイロス　それでさ、それがつまりまあ鳥どもの宿といったもんではありませんか。
やつがしら　宿？　どんなふうでじゃね。
ピステタイロス　いわばまあ場所とでもいうやつです。つまり何でもか （一七九）
でもそこをよぎり、そこを経巡ってゆくから、そこで、ほれ、宿と呼ぶわけですな。ところがもしあなたが一度ここに拠ってとりでを築きなさったら、宿というものから今度はそれが国と呼ばれることになりまさあ。そのあげく(1)は人間どもをばったみたいに自由に支配し、また神々のほうはメロス島風の兵糧攻めでやっつけてやれますさ。
やつがしら　何としてじゃ。
ピステタイロス　つまりですな、雲界ってのは（天と）地との真中にある。だから例えば私らがデルポイのお宮へ行こうと思えば、ボイオティア人に通行を許可してもらわにゃならん、ちょうどそのように人間どもが神々に供物を献げても、神々があんた方に税をよこさなかったら、このところはよその国なんだから、そこの空を通ってご供物の焼 （一九三）
肉のうまい匂いも通してやらないのですな。
やつがしら　これは素敵じゃ。まったく大地にかけて係蹄や網や羅にかけて、わしはこれまでこんな素晴らしい妙案を聞いたことがないわい。じゃによってもし他の鳥どもが賛成いたすなら、あんたといっしょにその国を建ててみたいものですじゃ。
ピステタイロス　そんならいったい誰がこの一件を鳥たちに説明してやりますかな。
やつがしら　あんたですわ。そりゃわしがな、長いこといっしょに暮らしているうち、もとは（言語も通ぜぬ）鴃舌の族だったが、人間の言 （二〇一）
葉を仕込んどいたのじゃ。
ピステタイロス　ところでどうして皆を呼び集めますかな。
やつがしら　造作ないこと、ほれちょっとそこの繁みに入って行って、それからわしの（家内の）歌鶯を呼び覚まし、もろともに鳥どもを招ばうのじゃ。わしらの声音を鳥たちが聞きつけさえすれば、みな羽翔って走せつけるじゃろう。
ピステタイロス　いやあんたは鳥じゅうで一等に嬉しい方だ、ではさあ （二一〇）
一刻も猶予あらせず、お願いだから早速にもそこの繁みに入って行って鶯さんを起こしてください。

〔やつがしら、舞台の後ろの木立の茂みに姿を隠す〕

やつがしら〔蔭でうたう〕

さらばわが伴侶(2)、睡りをやめて
いや崇い神歌のふしを奏でよ、
聖らかの汝が口に　嘆きとむらう
我と汝の涙つきせぬ　イテュス(3)の歌を。
しめやかの　曲のしらべに
飴色の咽喉を揺がせ　囀りあえば
髪をなす水松の葉ぬれを透けて、
すがらのこだま　大神の御座にかよえ。
そこには黄金の髪の　アポロン
汝が嘆かいの歌を聞こして、
象牙を鏤めし竪琴を　弾じあわせつ、
天上の舞楽のむらを　設けたまうに、
常磐なる神々が　口ずから御声をあわせ （二二〇）
もろともに　歌い出るは、
神さぶる　天上仙がおどろのたけび。

〔笛の音、黄鶯の歌になぞらえて聞こえる〕

エウエルピデス　ほう、こりゃ凄いぞ、素晴らしい小鳥の声だ。この木立じゅうを好い音ですっかり甘くしちまったじゃないか。
ピステタイロス　おいおい。
エウエルピデス　何です。

ピステタイロス　黙っていないか。
エウエルピデス　どうしてさ。
ピステタイロス　そらやつがしらがまた歌おうと身構えしてるんだ。
〔やつがしらの独唱(モノーディア)、鳥どもを呼び集める、鶯は同じく笛でこれに伴奏〕
やつがしら　えぽぽぽい、ぽぽい、ぽぽぽぽい、ぽい。
おい、おい、来い、来い、来い、来い、
来いよみな、ここへ、わしみたように羽根のある者どもは、
百姓たちがよく種まいた田畝(たんぼ)の畦に
住まうみんな、千よろずの、麦の穂を啄(つつ)む
田鴉(たがらす)のうからやからも、
素早く飛んで来いよ、優しげの叫びを立てて。
またお前たち、畑のくろに
土くれをとり囲んでは、怡(たの)しげな声にこうちょちょと、
群れてかわいく鳴きしきる鳥どもも、
ちょ　ちょ　ちょ　ちょ　ちょ
ちょ　ちょ　ちょ　ちょ　ちょ
またお前たち、園に降りいて常春藤(きづた)の枝の、
葉ぞえに日々を送る鳥らも、
山にいるのも野の橄欖(かんらん)を食うものも、
木苺(きいちご)の実を啄むものも、
飛んで来いよ、ここへ、私の声を聞きつけて、
とりおと　とりおと　ととぶりんくす。
また沼沢(ぬまさわ)の窪あいに吻(くち)の鋭い
蚊を嚥(く)う鳥も、露のしとどな郷(くに)の里から、
いつくしいマラトンの
草牧(まき)にすむ者どもも、
翼いろのとりどりに鮮やかな鳥、
赤鳴(あかしぎ)よ、赤鳴よ。
また大海(わだつみ)の　波を掠(かす)めて、
雌翡翠(ハリキュオネス)(1)とうち連れて飛びかう小鳥の族(やから)ども、
さあここへ、新奇な知らせを聞きに来いよ、
いまこのところへ皆の衆を集めるところだ、
首ながの　鳥のうからを。
抜目ない年寄りの仁(じん)が来たのじゃ、
奇想天外という仁がな、
また奇抜な仕事の企業家なんじゃ。
だによって、ささ、皆相談にここへ、
出おろ、出おろ、出おろ、出おろ。
とろとろ、とろとろてぃっくす。
きっかぼう、きっかぼう、
とろとろ、とろりりりっくす。
ピステタイロス　鳥が見えるかね。
エウエルピデス　いやアポロンにかけて私には見えんね、口をあんぐりあけて空を眺めてんだが。
ピステタイロス　どうもちと怪しいかな、あのやつがしらが木立の繁みに入ってって、たげりを真似てぽっぽっ鳴いたのは。
やつがしら　とろてぃっくす、とろてぃっくす。
ピステタイロス　おい君、だがほらここに何鳥か、まさにやって来たよ。
〔四羽の鳥、順次に現われて舞台前を横ぎり他方に入る。まずはじめに紅鶴(フラミンゴ)〕
エウエルピデス　やあほんとうに鳥だ。いったい何だろう、まさか孔雀じゃあるまいが。
ピステタイロス　そりゃこの鳥さんが自分で教えてくれるさねえ。これは何ていう鳥ですかね。

やつがしら　こいつはあんた方がふだんごらんのありふれたんではなく、沢地の鳥ですわ。
ピステタイロス　ふふうん、実に綺麗で紅色をしてるな。
やつがしら　当然のことじゃ、名前がだいいち紅鶴[1]というのじゃから。
エウエルピデス　ねえあんた、あんたってば。
ピステタイロス　何をそうわめきたてたんだ。
エウエルピデス　そら別な鳥がそこへ（来ましたよ）。
ピステタイロス　や、ほんとうに別の鳥だな、こいつは、しかも凶々しい方角に当たるものだ。そも何者ぞこの芸神の託宣をする、場違いな山登り鳥は。
やつがしら　こいつの名はペルシア鳥[2]（にわとり）というのですじゃ。
ピステタイロス　ペルシアだと？　おおヘラクレスさま、そんならどうしてペルシア者なのに、駱駝を連れずに飛んで来たんです。
エウエルピデス　またもう一羽何鳥かそこへ来たよ、頭冠毛をおっ立てたのが。
ピステタイロス　何者かな、いったいこの怪物は？　じゃああんたひとりじゃなかったんですな、やつがしらてのは。ここにもう一羽いますかな。
やつがしら　こいつはピロクレス[3]のやつがしらの子で、わしはこれの祖父にあたるのじゃ、つまりいわばカリアスの子がヒッポニコスで、ヒッポニコスの子がカリアス[4]てなわけじゃよ。
ピステタイロス　じゃあこの鳥はつまりカリアスなんですな、ずいぶん尾羽うち枯らしたもんだ。
やつがしら　いや毛並はしごく好いのだが、口の達者な奴ら[5]にさんざ毛を抜かれてな、それに雌どもが寄ってたかって羽根を引きむしるんですじゃ。
エウエルピデス　おおポセイドン、こりゃまた違った鳥だぞ彩のついた。いったい何ていう名なんですこいつは。
やつがしら　これは、食心鳥[6]じゃ。
ピステタイロス　じゃクレオニュモス[7]以外にも食心坊なんてのがあるんですか。
エウエルピデス　でもクレオニュモスなら、どうして頭冠をおっぽり出しちまわないんだろう。
ピステタイロス　だがしかしこの鳥どもがこう頭冠をやってるのはいったい何のつもりです。鎧兜をつけての往復競走[8]でもするんですか。
やつがしら　つまりカリアの住民どもが丘の冠り[9]に棲まうように、な、あんた、安全のためですわな。
〔鳥群のコロスどっとばかりに押し寄せて現われる、二十四羽より成る〕
ピステタイロス　おおポセイドン、あれをごらん、何とまあ恐ろしい鳥どもが集まって来おったことか。
エウエルピデス　おおアポロンさま、雲のようにまあ。やれやれ。あんまり鳥どもが飛びまわるんで、もう入口[10]さえ見えやしない。
ピステタイロス　こいつは鷓鴣だ、あいつはほんとうに赤鴫だぞ。こいつは鴛鴦だし、それからあいつはまさに雌翡翠だ。
エウエルピデス　その後ろのは、じゃ何です。
ピステタイロス　何だってのか？　雄かみそり[11]さ。
エウエルピデス　へえ、じゃ髪を剃るのも鳥ですかえ。
ピステタイロス　そんならスポルギロス[12]は鳥じゃないってのか。こいつはまた梟だぜ。
エウエルピデス　何ですって？　誰が梟をアテナイへ連れ込んだ[13]んだ。
ピステタイロス　橿鳥、雉鳩、告天子によしきり、みさご、家鴿、隼、鷹に数珠懸鳩、郭公、朱足鴫、紅鶸、紅水鶏、まぐそ鷹、鳰、鶫、大鷲、啄木鳥。
エウエルピデス　やれやれ、えらい鳥だわ、やれやれ、えらい黒鶫だわ、しかもぴいぴいと叫び立てて馳けまわること。おやおれたちに刃向かって来るようだぞ、こりゃどうだ、大口を開けてさ。あんたと私を目がけてきますぜ。

ピステタイロス　そうらしいようだな、どうも。

鳥のコロス[1]　どどどどどど、どどどこだ、わしを呼んだ仁は？　どんな場所に棲(と)まっておいでだ。

やつがしら　ほれ、ここにさっきからいるのじゃよ、仲間の衆を離れずにな。

コロス　ちょちょちょちょちょちょちょちょ、ちょちょちょちょと何か私らにうまい相談でもあるんですか。

やつがしら　皆一統に安全で、まっとうな、気に入るうえにためになろう話じゃ、つまり二人の御仁がな、くわしい理論家じゃて、ここへわしのもとへ見えたのじゃよ。

コロス　〔大いに驚愕して〕どこへ、どうして、どうだってんです。

やつがしら　人間界からな、二人の年寄り方がここへやって来たというのじゃよ、野放図もない大仕事のねっこを持って来なさったのじゃ。

コロス　ええ、私が生まれ育って以来の、とんでもない大間違いだ。何といいなさるんです。

やつがしら　まあけしして、怖がるものはないじゃけん。

コロス　何てことをいったい私らになさったのです。

やつがしら　人間を受け入れたのじゃ、このわしらの寄合いを慕って来たんじゃてな。

コロス　ほんとうにそんな仕業をやってのけたんですか。

やつがしら　しかもしたうえで喜んどるんじゃ。

コロス　でまたそ奴らはもうどこか私らの身辺にいるので。

やつがしら　わしがお前らの身近にいるとしたらな。

〔鳥どものコロス騒ぎ立つ、二人のアテナイ人後ろの木立に隠れ込んでいたのをこわごわ頭を出して見つかってしまう〕

コロス　おい、おい、
　おれたちは裏切りに逢って非道な目を見せられたのだ、
今まで仲間だった者が、同じ野山におれたちの
もとでいっしょに暮らしておいてから、
昔以来の慣例(ならわし)や掟に背き、
鳥類中の誓約を破ったのだ。
そしておいて謀計(たくらみ)に誘い込み、おれたちを非道な
奴ばらに売り込んだんだ、生れついての、
おれたちの敵(かたき)にできあがってる（人間ども）に。
だがそのほうはまた後で片づけるとして、ここなこの二人の老耄(おいぼれ)どもを、仕置きにかけておれたちで、八つ裂きにしちまうがよかろうじゃないか。

ピステタイロス　こりゃもう助からんぞ。

エウエルピデス　だけどさ、私らがこんな災難にあうのも、みんなお前さん一人のせいだよ。何だってまた私をあそこから連れ出したんだ。

ピステタイロス　おれについて来るようにさ。

エウエルピデス　いや、うんと酷い目を見せようってだろ。

ピステタイロス　そりゃ相変らずとんまな文句だな、とても。だってどうして目が見れるかね、いっぺん目玉をつつき出されておいてから。

コロス　いおう、いおう。
　進め、むかってけ、押し寄せろ、敵対(てきと)う仇を
うち殺す突貫に、四方から翼をうちかけ、
ぐるりっと　おっとり囲め。
この二人めに引導渡し、是が非でもおれらの嘴の餌食にしちまえ。
蔭暗い山にしろ蒼穹(おおぞら)の雲にしろ
また波白(しら)ぐ海にしろ、こいつらにはおれたちの
手を逃れ出て、赴(ゆ)ける場所はない。
　さあ容赦なく早速こいつらをつつくなりむしるなりした。隊長はどこにいる、右翼の方を前へ進めろ。

エウエルピデス　そら来たぞ、とんだことだ、どこへ逃げよう。

ピステタイロス　こら、待てっていうのに。

エウエルピデス　こいつらに八つ裂きにされるのをかい。

ピステタイロス　だってこの場を逃げおおせると思ってんのか。

エウエルピデス　いやそのあてはないんだがね。

ピステタイロス　じゃおれがしっかり教えてやるよ、さあ踏みとどまって戦うんだ、甕(かめ)を取ってさ。

エウエルピデス　でも甕が私らのどんな役に立つのかね。

ピステタイロス　梟は押しかけて[1]来まいからさ。

エウエルピデス　じゃそこの、爪の鋭い鳥どもは？

ピステタイロス　その金串(かなぐし)をおっ取って、そいで自分の前におしたてるんだ。

エウエルピデス　眼玉には何をやるかね。

ピステタイロス　酢の壺かそいでなきゃ小皿をそこからとってあてがうんだ。

エウエルピデス　や、感心した、よくまあ巧い、兵法にかなったことを見つけたもんだ、そうした工夫にかけちゃニキアス[2]だって遠くあんたに及ばないよ。

コロス　りゃりゃりゃ、それ進め、嘴(くち)を構えろ、ぐずぐずせずに、引っ裂け、むしれ、たたけ、追(お)っ剝(ぱ)げ、まっ先に甕をつっつけ。

やつがしら　こらこら、ま、何をする。お前らは全く下等な動物じゃな、少しの害も受けんのに、この仁(じん)たちを殺そうというのは、しかもわしの家内の国の者、同郷人なに、引き裂くなどと。

コロス　だって私らがこいつらに向かって、豺狼(やまいぬ)らよりちっとも余計に容赦することがありますかね。それともこいつら以上にまだもっと憎たらしい者をでも仕置きができるというんですかい。

やつがしら　じゃが、生れはまあ仇(あだ)かたきにしても、心のなかでは味方なんじゃよ。で、ここへもな、お前がたのためになることを教えてやろうとて来られたのじゃ。

コロス　だがこいつらがいったいどうして私らのためになることを教え[3]も知らせもできるんです。私らの爺(じじい)の代から仇のくせに。

やつがしら　だがな「賢者は敵よりこそ多くを学べ」じゃろうが。遠きおもんぱかりは万事を全うすというがな、したがこいつを教えてもらうは味方の手もとからではない、敵じゃ、敵がすぐさま無理にも悟らせてくれる。例えて見れば人間界でも多くの国は、味方でのうて敵から教えを受けて、高い城壁を造りあげたり軍艦を備えたりしとくんじゃ。さてこの教訓こそが子孫も家も財産も無事に護ってゆくのじゃわ。

コロス　なるほどそんならまず先に話を聞いてみることにしますかな、ためになるてのをね。敵からだってそりゃ巧いことを教われようもんだからなあ。

ピステタイロス　おいあいつらちょっと火の手を鎮めたらしいぞ。じりじり[4]脚を退(ひ)け。

やつがしら　それにまっとうなことじゃよ、わしの顔も当然立ててくれるのがな。

コロス　だって全く他のどんなことにだって刃向かったことなんかありませんぜ。

ピステタイロス　前より大分と平和に向かって来たぞ。（しめしめ）だから甕だの小皿だのを下におけよ、だがこの槍は、この串のことさ、まだ取っといて、楯陣の内側を巡回するんだ、それ、その水甕の上っ端からちらちらのぞきながらさ。逃げる手はないからな、おれたちが。

エウエルピデス　全くなあ、だが私らが死んだら、いったいどこへ埋められるんだろうね。

ピステタイロス　ケラメイコス[5]へ合葬さ。国家から葬いをしてもらえるように、司令官に向かって言ってやるさね、敵軍と渡りあって討死をしたんだって、鳥州(オルネアイ)でもって[6]。

コロス　さあもと通りの陣列にひき返した、そいでその「腹を楯[7]」などおっ伏せて、「いきり太刀」のそばへ置け、重歩兵(ホプリテス)のようにな。そいでこの人たちはいったい何者か、またどこから来て、何をもくろんで

るか問いただそうじゃないか。おおい、やつがしらさん、あんたを、こう呼んでるんですよ。

やつがしら　うん、何を訊きたいとて呼ぶんじゃな。

コロス　いったいこの人たち[1]は何者でどこから来たんです。

やつがしら　知恵者なギリシアからの客人じゃよ。

コロス　だがどうしためぐりあわせが、そもそもあの人たちを鳥の国まで連れ込んで来させたのです。

やつがしら　それがお前らのな、生活や日々の暮しが好きでたまらん、[2]いつまでもお前らといっしょに住まい、いっしょにいたいというのじゃよ。

コロス　何、何だって？　そいでいったい、どんなことを言ってるんですえ。

やつがしら　聞くも信をおき難い、いや、それ以上のことじゃがな。

コロス　ここに何か滞在するだけのねらうちがある利得でも見込んでいるんですかね、それをたのみに私らに力を合わせて敵の奴らをやっつけるなり、味方の者を助けるなりしようといった。

やつがしら　それがな、口にも言えず信じもできんような大きな幸せごとなのじゃ。つまりそこにあるものも、あっちのものも、こっちのものも、皆お前らの所有だ、と何でもかでも言いくるめるのじゃよ。

コロス　じゃもしや気が狂ってんじゃあ？

やつがしら　言いようもないほど気は確かじゃ。

コロス　ちょっとは知恵があるんですかい。

やつがしら　このうえもないしたたかな狡狐(わるぎつね)じゃ、どこからどこまで知恵達者の手練師(てだれし)の海千山千[3]のご仁じゃわ。

コロス　ささ、そんなら話すよう、話すように言ってください、あんたのいまのお言葉を聞いてさえが[4]飛び立つばかりな思いでさあ。

やつがしら　そんならお前とお前と、この[6]武具(もののぐ)を持っていって、万事めでとうな[5]、煖炉の奥の荒神さまの間近くに掛けといとくれ。であんたはそれ、わしが皆を呼び集めた、そのめあての談義をこいつらに言い、教えてやってくだされ。

ピステタイロス　いやあアポロンにかけてとんでもない、まああの猿面[7]が女房としたような取りきめを、みんなが私ときめてくれないうちはねえ――そらあの刀鍛冶のでさ、こいつらがけして私に食い付きもせず、きんを引っ張ったりほじったりしないって。

コロス　まさかそんなこと、するもんかね。

ピステタイロス　そうじゃない、この眼をだよ。

コロス　ちゃんと約束するとも。

ピステタイロス　ではそれを誓ってくれたまえ。

コロス　誓いますよ、そのしるしには、すべての審査員たちからも見物のみなさんからも勝の判定を得ること。

ピステタイロス　うん、そいでよしと。

コロス　もし破ったら、たった一人の審査員だけが投票してくれる。

やつがしら　聞きなさい皆の者、そいでは重歩兵どもは武具(もののぐ)を取り上げ、もとのところへ帰って行き、わしが高札に書き付けて布令(ふれ)出すことを、よく見るのじゃぞ。

コロス　嘘いつわりは万事につけて生来たえぬ
人間のさがではあれど、ともかくも
言ってみなさい、ひょっとして、まあうっかりと
気がつかなんだ好いことを言い出さんとも限るまい、
また知恵のまわらぬわれわれの心では
覚り逃がしたとても大きな性能(はたらき)でもな。
さ、あんたの気づいたことを皆、一同に言っとくんなさい。
そうすりゃあんたが万一、好いことを、授(さず)けでもしてくれた場合、
いっしょにそれへ与(あずか)れようから。

さあそんなら、一つ自分の考えを教え込もうとてやってみえたその事柄を、元気を出して述べ立ててください。した約束はけしてこっち

から先には破りませんから。

ピステタイロス　いやあ実際ね、私もたまんないんでさ、(ここにいた (四六一)
くて)、その一件がね、胸ん中でわやわやっと膨れあがってんで、そ
れを捏ね返すに何の障りがありますかい。おい小姓[1]、冠を持って来い。
手に注ぎかける水を誰ぞ早速持って来いよ。

エウエルピデス　ご馳走にありつけんですか、ええ。

ピステタイロス　とんだこった、先刻からね、でっかい膏の乗った文句を一つ言おうってむずついてんだ。そいでこいつらの胆をとりひしいでくれようってね。

コロス　おれたちが領主だって？　どこの？

〔鳥どもに向かい〕実際君たちはお気の毒でたまらないよ、以前にはみんな領主だったのに――

ピステタイロス　あんた方がありとあらゆるもののさ、第一が私の、この人の、いや天帝[2]その方のですよ。君たちはクロノス[3]やティタンたちよりもずっと古く、前に生まれてるんだ、大地よりもね。

コロス　大地よりも？

ピステタイロス　そうともアポロンにかけて。

コロス　いやそいつは全くこれまで聞いてなかった。 (四七〇)

ピステタイロス　君らは生来学がなくて研究心が足らんから、イソップにも通暁してないんだね、そこに雲雀[4]って鳥は万物のうちいちばん先に生まれたって言ってあるんだ、大地よりも先にさ――折しも病気で自分の父鳥が死んだ。ところが（埋める）地べたがまだないんで、五日間も殯してた、とうとうどうにも始末に困って、親を自分の頭の中へ埋め込んじまったてんです。

エウエルピデス　そいで雲雀の親は今でも、あ多磨（ケパレー[5]）の墓地に死んで埋まってんだね。

ピステタイロス　さてそんならばだ、大地よりも前に、神々より前に、生まれてたら、彼らのうちで総領なんだから当然主権は鳥類のものではないか。

エウエルピデス　当り前さ、それならこれから先ょ十分あんたも嘴を固めんだね。まっすぐにはゼウス神も王権を啄木鳥[6]に返すまいからな。

ピステタイロス　さてまた大昔に人間どもを統治してその君主だったのが、神々ではなくって鳥だったってことにはたくさんな証拠がある。例えばですな、まず第一番に鶏がその通り、以前にはペルシアを治める王様だった。誰よりも先にですな、ダレイオス[7]やメガバズオス[8]よりも前に。そいだもんでその時分の領地からペルシア鳥と呼ばれてるんです。

エウエルピデス　ああそのせいで今でもペルシアの大王みたいに、頭の (四八五)
上に頭飾を鳥類中[9]でひとりだけ押し立ててのし歩いてんだな。

ピステタイロス　かようにその時分は威勢があって、偉くて大したもん
だったから、今でさえも昔の威光でもって払暁に鬨をつくると、皆が
跳び起きて仕事にかかるんだ、鍛冶屋も陶工も皮なめしも、靴屋も風
呂屋も蕎麦屋[10]も轆轤師の琴作り楯作りもね。また夜中から皮鞋[11]を穿い (四九二)
てくり出したりするんだ。

エウエルピデス　そいつはおれに聞いたが好いよ、外套をね、なくしたもんさ、いまいましい、しかもプリュギア産の上毛[12]のをあいつのおかげで。いつか小童の十日の祝いに招ばれてね、町でちょっと一杯やったんだ、そいで寝込んじまった、といきなり他の皆がまだ夕食も始めないのに、こいつが鳴き出したんだ。でおれはもう夜明けだと思ってハリムウス[13]へと繰り出してった、そいで城壁からひょっこり出るといきなり追剝が棒で背中をどやしつけやがった、でおれはぶっ倒れる、大声で人を呼ぼうとする、そのうちに外套をひんめくってっちまったんだ。

ピステタイロス　それからまた鳶が昔はギリシアを治めてそこの君主だった。

コロス　ギリシアの!?

ピステタイロス　それでこいつが領主だった時分に初めて鳶の前に[14]身を
伏し倒すってことを教えたんだ。 (五〇一)

エウエルピデス　そうともディオニュソスにかけて、おれはね、鳶を見

かけてころがったもんさ、そいであおむけのまんま口を開いてるうち、
(含んでいた)一朱の銭をのみこんじゃった、そいで空の袋をさげて
帰ったものだ。

ピステタイロス　さらにまたエジプトやポイニキアじゅうの統治者は郭公だった。そこで郭公が「かっこう」って鳴くというと、ポイニキアの人たちは皆畠にある小麦や大麦をとりいれるのがきまりなんだ。

エウエルピデス　ふん、そいでこそあの諺が読めたね、「かっこう、畠へ(1)出ろ坊主頭め」

ピステタイロス　でかように大々的に王権を揮ったゆえ、ギリシアの国国で君と称えられるものはアガメムノン(2)でもメネラオスでも、その笏杖の上に鳥がとまってて何によらず献上物の相伴をする。

エウエルピデス　そいつはどうもあっしも知らなかったよ。で全くいつも妙だと思ってたんだ、芝居でもってプリアモス(3)が鷲のついた杖をもって出て来るんでね。じゃその鳥はリュシクラテス(4)奴が何か賄賂を貰やしないか見張りに立ってたんだな。

ピステタイロス　が、何よりもいちばん確かな証拠はですな、現在世界の主であるゼウスが、天主ながらに頭の上へ鳥の鷲をのせて立っとられる、また御娘の(アテナ)も同様に梟を、アポロンも子分らしく隼をのせてることだ。

エウエルピデス　ふん、デメテルにかけてその通りだが、何のためにそんなことをするのかね。

ピステタイロス　そりゃね神々に贄を献げるときにさ、定式どおり臓物を御手の中へおくだろう、そのとき鳥たちがゼウスよりも先に臓物を貰えるためさ。そいで昔は人間誰一人神にかけて誓うものはなく、みんな鳥にかけたもんだ、ランポン(5)奴は今でさえ何か胡麻すろうってときは(神様のかわりに)雁様によって誓うだろう。このように君たちをみんなが以前は偉くて神聖なものと思ってたんだ。

　それが今じゃげげす下郎の下僕だ、
それのみか気違いでもあるかのように
君たちに石を投げる、いや社の中でさえ
鳥さしがよってたかって君たちへ向け、
係蹄(6)だの罠だの黐竿だの掛け網だの、
霞網だの投網だの捕籠だのを仕掛けるんだ。
でとっ捕まえちゃ一山にして売る、
買い手はさんざんになぶって買ってくんだ、
そればかりか、たとえ買ってくときめたところが、
ただ君たちを焼いただけで食うんじゃない、
チーズを刻んでかけたり、オリーヴ油だの
生姜汁(7)だの酢でまぶしたり、また別な
甜い膏濃いかけ汁を調合して、
その熱いやつをぶっ掛けたりするんだ、
君たち自身の上にだよ、
獣の死肉でもあるみたいにさ。

コロス　いかにもいかにも全く辛い限りの物語を
してくださった、あんたはなあ、ほんとうに涙が出るよ私らの
親たちの意気地なしには。それほどな
大したものを祖先から承け継いどいて、
私らまでになくしちまうなんてさ。
だがあんたは、仕合せと結構なめぐり合せで、
私らの救主として見えられたのだ。
によって、私らは、雛っ子も私ら自身も
あんたに委せて身を立てていこうてんです。
だからさあどうしたら良いか、ここにいて教えてください。全く私
らは生きた甲斐もないんだからな、何があろうと自分らの手で統治権
を揮ってかれなきゃ。

ピステタイロス　さてそんならばだね、まず第一に私の教えてえのは、

鳥どもが一つの国を造るこってす、そいでからこの下空(したぞら)[1]をすっかりぐるっと、それに天との間もすっかり、大きな焼瓦(やきがわら)でバビュロンみたいに[2]壁囲いするんですな。

エウエルピデス　へえっケブリオネスに[3]ポルピュリオンだ、何てまあ恐ろしい国造りだろ。

ピステタイロス　そいでこいつができあがったら、ゼウスに主権を要求して渡させるんです、でもし承知しなかったり、ぐずぐず言ってすぐ考えを改めなければ、神聖戦争[4]を宣告するんですな、そして神々が君らの領分を通って往来するのを拒絶するんだ、例えば以前からアルクメネ[5]だとかアロペだとか、セメレとかって、始終下界へ浮気をしに通ってたのをね。そいでもまだ往くなら、いたずらがもうできんように、坊主頭[6]に封印をしてやるんさ。一方人間どもへは別な鳥を使節に立てて、これからは鳥類が王様なんだから鳥へ贄を捧げて祭らせる、そいでその後で今度神々に捧げるようにさせんですな。また神々にはめいめい似合いの鳥を、それぞれ適当に割り宛ててやるんです、アプロディテを祭るときには、はげ頭の大鸛鳥(おおばんちょう)に小麦を上げさせ、ポセイドンに羊を献げれば、鴨に小麦をたてまつらせる、ヘラクレスに贄を上げるなら、鶉(うずら)に大饅頭を蜜入りにして供えさせるし、天帝ゼウスに牡羊を捧げるときは、鷦鷯(みそさざい)が鳥の王なんだから、それへ、いいかねゼウスよりも前にだよ、雄の羽蟻を上げなきゃならん。

エウエルピデス　嬉しいね羽蟻を贄にするなんか。さあお偉いデウスさん[7]、雷をお鳴らしよ。

コロス　でもほんとうに人間どもがおれたちを椋鳥(むくどり)じゃなくて神様方だと思うだろうかね、羽根をもって飛び歩いてても。

ピステタイロス　馬鹿なことを。それどころかかけひきなし、ヘルメス神は神様だっても飛んで歩くし翼も持ってる、ほかにもそんなのはうんとありまさあ。例えば勝利(ニケ)[8]（女神）は金色の翼で飛んで行くし、ほれ愛神(エロス)だってもそうだ。また虹の神(イリス)だってホメロスが、「とろとろと鳴く鳩にさも似たり」って歌ってまさ。

エウエルピデス　そいでゼウスさんがおれたちへがらがらぴしゃんと、翼のある雷をよこすまいかね。

ピステタイロス　さてまた人間どもが愚かさからあんた方をまだ馬鹿にして、オリュンポスの連中を神々だと信じるなら、そのときは雀や田鴉(たがらす)の雲を起こして田畠から種をみんな（つつき取って）食っちまうんだ、その後からデメテルが、餓えて困ってる奴らへ、麦を施したら[9]いいだろう。

エウエルピデス　いやきっとそんな気はないよ、見てごらん、いい口実を持ち出すから。

ピステタイロス　それからまた鴉どもは、耕作に使うけちなつがいの牛だの、飼ってる羊なんかの眼玉を競争でえぐり出してやるんだ。そいでさ、アポロンが医者だてんなら治(なお)させる、だが代を取ろうよ。

エウエルピデス　まあちょっと待て、おれがうちの小牛ども奴をまず売ってしまうまで。

ピステタイロス　だがもし人間が君らを神とも生命とも大地とも、クロノス[10]ともポセイドンとも思うのなら、あらゆる利益を授けてやるんだ。

コロス　どうかそのご利益を一つなりと聞かせてください。

ピステタイロス　第一には人間どもの葡萄の芽を黄金虫に食い荒らさせまいさ。梟だの蒼鷹(まぐそだか)だのの一隊がすぐに来てやっつけてしまう。またこれからは小さい蟻や蜂どもが無花果(いちじく)を食い荒らすこともあるまい、そいつらを綺麗に鶫(つぐみ)の群一つで取り尽くしちまおうからね。

コロス　だがどこから人間どもを金持にしてやれるかな、誰もかも皆願うのはこれなんだから。

ピステタイロス　そりゃ占いをしてもらいに来たとき、皆がいろんな福徳を授けてやるのさ、ことに儲かる商売を易者に教えてやるんだ、船主が一人も参ったりしないようにね。

コロス　どうして参らないんで？

ピステタイロス　船旅を占ってもらいに来る奴にしょっちゅう誰か鳥仲間が予報してやるんでさ、今舟を出すな、暴風(しけ)が来るぞとか、今航け、

儲けがあるぞとかって。

エウエルピデス　荷足を買って船主になるよ、わしは、こんなところにゃもうおらんで。

ピステタイロス　そいから昔の人が隠しといた宝物を教えてやるんです、金銀なんどをね。そりゃ鳥どもが知ってるでしょう、誰だって言うんだから、「飛ぶ鳥のほかにゃ誰一人おれの宝（のありか）は知らんぞ」って。

エウエルピデス　荷足は売るよ、鶴嘴を買って（金のつまった）水甕を掘り出そうっと。

コロス[1]　だがどうやって人間を丈夫にしてやれようか、そいつは神々の手もとにあるんだから。

ピステタイロス　そりゃ工面よくやってけるなら、それがつまり大丈夫というもんでしょうぜ。

エウエルピデス　よく覚えてたまえ、人間さまのぐあいが悪きゃ、すなわち丈夫でないんだからね。

コロス　だがどうして老年に達せましょうね、こいつもオリュンポスにあるんだもの。それとも子供のうちに死ななきゃならんかね。

ピステタイロス　とんでもない、三百年ももっとだって鳥たちが歳をたしてやりまさあ。

コロス　どこからです。

ピステタイロス　どこからだって？　自分たちからでさ。知らないのかね、あのやかましい小鴉[2]は人間の五代の間も生きるってあんのを。

エウエルピデス　ほほう、じゃゼウス神よりこいつらをおれたちの王様にしたほうがずっといいね。

ピステタイロス　そうれ、ずっといいだろう、
　まず第一に鳥どものためには石でもって
　社を建てることもいらないんだし、
　また金の扉を取りつけるにも及ばない、
　木立の繁みや、いちいの木蔭にみんな
　棲まおうからな、でまた鳥の中でも
　崇かな連中にはオリーヴの木が
　社殿になるさ。またデルポイ[3]に行ったり
　アンモンのお宮を訪ねていって、向うで
　ご供物を上げることはない、木苺だの
　野に生えた橄欖の間につっ立ったまま、
　大麦小麦の粒を持ち両手をさし延べ、
　鳥どもに祈るんだな、福徳を
　少々授けてくださいってね、するてえと
　すぐさまそれが聞き届けられるのさ、
　ちょっぴり麦粒をまいてあげればね。

コロス　やああんたはいちばんの仇からうって変わって、誰よりも一等にありがたいご老人だ、私らがあんたの意見をもういい気でうっちゃっとくなんてありません。

　いや、あなたのお談義に気を大きくして
　しかと臍を固めて誓いますよ。
　もしもあんたが私らの陣営に加わって――
　心をあわせ正義の、うそ偽りのない
　神聖な論陣にですな――そいで
　私らと同じこころに歌い合わせて
　攻め立てたら、神々がわたしらの
　位をぬすんどれるのも長くはあるまい。

　じゃあ力ずくでするほどのことは、何によらず私らが引き受けましたから、知恵ずくの策略はこりゃ万事あなたが取りしきってくださいよ。

やつがしら　そうだとも、全くのこともう私らが居睡りしたりぐずぐず

とニキアスをきめこんでる時節[1]ではないんじゃ、一刻も早くとりかからにゃならん、まず第一にさあ私の巣へどうぞ来てくだされ、さあそこに藁(わら)くずや柴の小枝も敷いてありますでな。でまずお名前を名乗ってくださらんか。

ピステタイロス　いや、やさしいこと、私の名はピステタイロスというので。

やつがしら　してこの仁は？

ピステタイロス　エウエルピデス、クリオアの者[2]ですよ。(六四五)

やつがしら　これはご両人ともよろしく。

ピステタイロス　いや、どうも。

やつがしら　ではさあこっちへお入りなされ。

ピステタイロス　まいりましょう、まずあなたからご案内を願いましょう。

やつがしら　ささ、こちらへ。

ピステタイロス　だがちょっと、ええと、それそれ、ここへまあ引き返してくださいよ。はてこりゃあどんなもんですかね、私もこれも羽根がないのに、羽根の生えたあんた方と、どうしていっしょにいけますかね。

やつがしら　結構じゃが。

ピステタイロス　だってあんた、イソップの話にそらあるじゃありませんか、狐がさ、いつか鷲[3]と仲間になって酷い目にあったって。

やつがしら　いや、気づかいなさるな、いい草の根っ子があるによってな、これを食えば二人ともすぐ羽根が生えるじゃろう。

ピステタイロス　そんならば、入りましょう。おいこらクサンティアス[4]にマノドロス、その武具(もののぐ)をもって行け。

コロス　もしもしあんた、あんたというんですよ。(六五七)

やつがしら　何を呼ぶのじゃ。

コロス　この方々をいっしょにお連れして、よくご馳走を頼みますぜ。だがあのたのしい歌の、芸神(ムウサイ)たちと声をあわせる歌鶯を、ここへ呼び出し置いてってください、私らがともども歌い遊べるように。

ピステタイロス　やあ全く、ゼウスにかけて、聞き届けてやんなさい。あの蒲(がま)の穂の繁みから、その小鳥を連れ出してな。

エウエルピデス　連れて来てくださいな、ここへ、ね、どうか、私ら二人も、鶯さんが拝見できるように。

やつがしら　ではあなた方がそう考えなさるなら、そうせずばなるまいて。おい、プロクネ[5]、出て来いよ、して客人がたのお眼にかかれ。

〔鶯に美々しく扮装せる笛の楽人登場〕

ピステタイロス　ほほう、これは驚いた、何てまあ綺麗な小鳥だ、なんというたおやかさ、それに色の白さ。

エウエルピデス　こりゃほんとうに、私や抱きついてやりたくなっちまうよ、ね、あんた。

ピステタイロス　それに何てたくさんな黄金の飾りだ、まるで処女神像[6]みたように。(六七〇)

エウエルピデス　私はまたあれに接吻しようと思うんだが。

ピステタイロス　だがおい、とんだ目を見るなよ、串みたいな嘴がついているから。

エウエルピデス　だって卵みたいにさ、それ、頭から皮をむきとって、そいから接吻したらいいだろう。

やつがしら　では、まいろう。

ピステタイロス　さああんたが私たちをめでたく案内していってください。

〔やつがしらの先導で二人とも奥に入る、合唱のパラバシス始まる〕

コロス　おおなつかしい、薄茶色の
おおこのうえもなくいとしい鳥よ、
私らの、ありとあらゆる神歌(かんうた)の
連奏者(つれびきて)、相生(あいおい)のともの鶯、
さあ来たり、来たり、この眼の前に、(六八〇)

優しい声をかよわせながら。
ともあれ色音の美しいその竪笛を
春の調べをもてうち鳴らし、
仄々平(1)の律を　初めたまえ。

(2)さて何と人間たちよ、生まれついて薄暗闇に生を過ごし、木の葉の代々にさも異ならぬ、他愛ないはかないものら、泥土の土偶人形、影のように頼りないやから、羽根もなく、一日かぎりの、夢幻に等しく、みじめにも死ぬが定めの人間どもよ、心を向けたまえ、われわれ不死の者らに、永久にながらえて大空高く、老いをも知らず、不滅の知恵をはかるわれらに、——そいで私らから聞くのだな、あらゆる高遠なことがらをちゃんとね、鳥類の生れだの神々の由緒だの、川々や幽冥(3)界や混沌の由来なんどを。でそれがちゃんと解ったらプロディコスにはここからこれっきり、もうおさらばをさしちまうんだ。(六九二)

太初に混沌があった(4)、それに夜とくらい幽冥とそれから広い黄泉とが。してまだ大地も下空も蒼穹もなかった。その幽冥の果てしのない懐ろにか黒の翼の夜が、一人でもって卵を産んだ。(5)その中から時たち月満ちて、いとしなつかしい愛が生まれ出た。その背は金色の羽根に輝いて、疾風の渦巻にしも異ならなかった。これが潤やかな黄泉でもって、暗澹として翼をもたる混沌に通いわれわれのやからを育くみ孵し、まず最初に光明に接せしめたのだ。その愛があらゆるものを交わらせた前には、不死の（神々の）やからもまだなかった。それがてんでんに交わりあって、蒼穹も大洋も大地もさきわう神々の、常磐なるやからも生じたのだ、それゆえわしらはあらゆる幸わえる神々よりも年長なのだ。またわれわれが愛の子だという証拠はたくさんにある、例えばわしらは飛んであるくし恋をする人たちについてやる、いくたりも綺麗な子が、どうしてもいやだというのを、色香の失せぬうち、私らの力によって手に入れた恋人もたんとあった、鶉をやったり紅水鶏をやったり、鵞鳥だの鶏だのを贈ってね。(七〇七)

つまり人間にとりしごく大きな（恵み）はみんなわれわれ鳥のおかげによるんだ。まず第一にわれわれは、春だとか冬だとか秋とかの季節を教えてやる、それ、種をまくのは、鶴が鳴きながらリビュアへと(6)渡ってくときだ、またその時分に船長は、舵をひっ掛けといて寝込むがいいし、オレステス(7)は追剝に出て凍えぬよう、毛の合羽をはおるがいいなど。そいから今度は鳶が現われ、別な季節を人に教える、羊らの春毛を剪って梳くときだ。その次には燕さ、もう毛の上衣を売っちゃって、浴衣でもちょっと買う時節だとね。つまりわれわれは人間にとりアンモン、デルポイ、ドドナ、ポイボス・アポロン(8)てなもんさ。なぜってえとまずお鳥さまに伺いを立て、そいから万事にとりかかるんだから。商売につけ日用品を買うにつけ、嫁を貰うにつけてもさ。でいやしくも未来についての判断と来れば、何でも鳥占っていうわけ(9)なんだ、噂だっても鳥占だし、くしゃみもお前さんらは鳥占って呼ぶ、出会いも鳥、声音も鳥、召使も鳥、驢馬も鳥だ。だからわしらは明かに君らにとって、予言をするアポロンさまじゃないかね。(七二三)

そこでもしわれわれを神として崇めるなら、お前さんらは占い師でも歌神(10)でも、風でも季節でも、冬でも夏でも梅雨でも土用でも好きにできるんだ。でわしらもまたあのゼウスみたいにさ、雲居に高く逃げこんじまってしかつめらしく収まってるなんてことはない、お前さんらのすぐそばにいて、お前自身や、子供や子の子たちに授けてやろうさ、富や健康や、つまり身上や安楽や若さや笑いや歌舞の群や華やぎや、そいから鳥のミルクをね。つまり皆がいろんな幸せに満ち飽きるのも思いのままさ。そんなにお前さん方がみな福々になれるんだ。(七四〇)

樹がくれの歌の女神、
ちおちお、ちおちお、ちおちお、ちおちんくす、
曲とりどりのその御神とあい打ち連れて、
渓あいや　山々の嶺や、
ちおちお、ちおちおちんくす、

しだり葉の髪をなす　とねりこの枝に
ちおちお、ちおちおちんくす、
座をかまえ、飴色のこの咽喉から
崇い歌のふしぶしを　牧羊の神に、[1]
また厳そかな舞歌を　御山の母儀に、
あげまいらせる、
とと　ととと　とととちんくす、
そのあいまから　蜜蜂みたよう
かぐわしい神仙の　歌の果実を
プリュニコスが[2]　摘みならわした、
いつも楽しい組歌を、仕立て上げては、
ちおちお、ちおちおちんくす。

ねえ、見物の方々、あなた方の中に誰かもし鳥どもといっしょに、いつまでも楽しく世を送りたいとお思いの方があったら、私らのところへやって来なさい。何によらず当地（アテナイ）でもって、怪しからんと掟によって差し止められてることが皆、われわれ鳥の仲間では立派なことになっているんです。例えばここで、親をなぐるなんてえのは、定法では怪しからんと決められてるが、それがあっちの、わしらのところでは、立派なことなんだ、親のとこへ馳け寄って、ぶんぐっといてから、「喧嘩なら距をあげろ」[3]って言うなんかね。またもし入れ墨されたお尋ねものでもあんた方の中にあったら、その人はわしらのところじゃあ、まだらの水鶏って呼ばれるんです。もし誰にせよ、スピンタロス[4]にもひけを取らぬプリュギア人なら、それがひわどり[5]だってことになる、ピレモンの同類でね。またもしエクセケスティデス[6]みたいに奴隷でカリア人だったら、わしらんとこで祖鳥でも育てれば、いい仲間組ができるだろうよ。また、ペイシアスの子[7]が裏切りをして、下司ばった奴らに城門を開け渡そうてんなら鷓鴣[8]になるがいい、「それ親鳥そっくりのひよっ子」さね。わしらのところじゃ、ずるっこく鷓鴣をきめんのも恥じゃちっともないんだから。

かくそは、鵠のむれの、
ちおちお　ちおちお　ちおちお　ちおちんくす、
羽ばたきともろともに　声をあわせて、
アポロン神を　高らかに讃えまいらす。
ちおちお　ちおちおちんくす、
ヘブロスの[9]河畔、堤の上にたむろしつ、
ちおちお　ちおちおちおちんくす、
そのたけび　高空の雲を射抜けば、
いろとりどりの　野獣のやからも慴じ伏して、
風凪ぎの　空とおく輝きわたり、
わたつみの　波を鎮める。
ととと　ととと　とととちんくす、
オリュンポスの山をなめ　おどろと鳴れば、
感にたえたもうは神々、
オリュンポスなる優雅の神女たちも
伎芸神女とつれ　おらびあげさす。
ちおちお　ちおちおちんくす。

羽根を生やすより結構なまた楽しいことはありゃしないよ。例えばさ、あなた方見物衆に翼をもった人がいたらば、腹が減って狂言作者の歌舞[10]なんどにあきあきしたとき、ちょっと飛び出して家に帰り昼飯を食うこともできるだろうし、そいで十分腹ごしらえして、またみんなの中へ飛び降りもかなおう。またこの中にパトロクレイデス[11]みたいのがいて、用を足したかったら、もらして着物を汚したりせず、すぐ舞い上がって、用を済まし楽になったうえで、また舞い戻って来られるだろう。またもし誰かみそかごとをしてる仁がひょっとこん中にいて、そのご亭主が特別席におさまりかえってるのを見つけたら、この

皆さんがいる間から翼をはばたいてちょっと飛び帰り、あっちでよろしくやりすましてからまた何気なくもと通り坐り込んでようてんでさ。どうですえ、羽根を生やせるのにはどんなこともする値打があるでしょう。そらあのディイトレペス[1]だってさ、あけび蔓の羽根しか持ってないのに、区長に選挙され、そいから騎兵隊長になり、そいですかんぴんから今じゃ大した勢いさ、まさに栗毛の馬の鶏[2]だからね。

〔ピステタイロス、エウエルピデスの二人、模擬の翼を着けて現われ来る〕

ピステタイロス　これはそいでよしと。

エウエルピデス　だが実際ね、私は今日この日までまあこんなにおかしいものは見たことがないね。

ピステタイロス　何がおかしいのだ。

エウエルピデス　あんたのね、その大羽根のことさ。あんたが羽根をくっつけたざまは何にいっとう似てると思う、いい加減になぐり書きした、鵞鳥ってところだね。

ピステタイロス　お前は芥子坊主[3]に毛をむしられた黒つぐみだ。

エウエルピデス　これをアイスキュロス風にたとえていうてえと、「ほかならぬみずからが[4]、羽根にかかってこのざまとは」さ。

コロス　そこでさあ、どうすりゃあいいんです。

ピステタイロス　まず手始めに、この国へ何かでっかい立派な名前をくっつけるんだな、それから今度は次に神々をお祭りするんだ。

エウエルピデス　それそれ、私もそれに賛成だね。

コロス　そこではて、私らの国にどんな名をつけたもんですかね。

エウエルピデス　どうですえ、こんなでっかいやつでも。あのラケダイモンからとってスパルテ[5]って名で呼ぶことにしちゃ。

ピステタイロス　めっそうもない、スパルテー（麻縄）を私が自分の国へくっつける？　いやなこった、寝床にだってたとえ太綱だったってさ。

エウエルピデス　じゃあいったいどんな名をくっつけますかね。

コロス　何かこう大したやつを、ここのあの雲だとか空ん中のところから割り出して一つ。

ピステタイロス　では雲居の時鳥国はどうですかな。

コロス　こりゃ素敵だ、申し分ない立派で大きな名前を、あんたは見つけてくださったもんだ。

エウエルピデス　じゃさてこいつが、あのテアゲネス[6]奴の大身代がおいてある、アイスキネスのもそっくりあるっていう雲居の時鳥国なんだね。

ピステタイロス　いやそれよりも正にあのプレグラの原[7]というところだよ、神々がな、地生の巨人どもと大法螺の吹きっこをして打ち破ったという。

エウエルピデス　結構なお国柄だよ、だがねえ、どの神様がそこの守護神になんなさんのかね。どなたにご奉納の衣をあげるんかね。

ピステタイロス　そりゃなんで国護りのアテナ神ではいかんな。

エウエルピデス　だってもね、どうしてきちんとした国といえるでしょうかえ、神様のほう[8]が女身ながらに、そっくり鎧冑を着といでなのに、クレイステネスは梭を持ってるなんてところが[9]。

コロス　だがいったい誰がその都の鳥手を司どるんですえ。

ピステタイロス　わしらの仲間の鳥でさ、くだかけ[10]の種属でな、ほれあの世界中に武勇ならびないという軍神のひよっ子さ。

エウエルピデス　ほう、雛鳥のみことか。全く岩山の上におとまりなさんにゃ持ってこいの神様だよ。

ピステタイロス　〔エウエルピデスに向かって〕さあ、じゃあ君は空へかけて行って、城壁を築いてる者どもに加勢してやってくれ、砂利を運んだりはだぬぎして壁土をこねてやったり、もっこを運び上げたり梯子から落っこったりしてな。番人を置いて火は始終埋め込んどくようにし、拍子木を叩いて馳けまわり[11]向うで寝むんだ。それから二人使節を立てる、一人は上の神々のところへ、もう一人は上から下界の人間どもへだ、そいでそこから今度はまたわしのところへな。

エウエルピデス　であんたはここに残っていて、せいぜいほえづらかいておくんなさいだ。

ピステタイロス　行ってくれたまえ、頼む、私が君をやるところへね。君が行かんとわしらの言うことが、何一つ成就できないんだから。では私はここの新しい神々を祭るために、行列[1]を送り出す役の神主を呼んで来ましょう。これこれ、三宝と御手洗(みたらし)をもって来いよ。

〔エウエルピデス退場〕

コロス　「われわれも同心[2]。漕ぐ手を揃えて、
大賛成を唱えたもんです、
大そうな、おごそかな行列の歌を
神々にたてまつり、またそのうえにあわせて
御慈みをこいねがうとて、小羊を献げ[3]ましょうと」
上げろ、上げろ、ピュートー[4]の叫びを、御神のもとへ。
またカイリスはその曲(ふし)に笛をあわせろ。

〔大鴉の扮装をした俳優、笛を吹きながら現われる〕

ピステタイロス　こら吹くのはやめろ。驚かせるな、いったいこりゃ何だ。全くおれもずいぶんといろいろとんだ目を見て来たが、まだ今までに笛吹きの口金つけた大鴉は、見たことがない。〔神官出て来る〕
神主さん、仕事にかかった、新奇の神々をお祭りするんだ。

神官　しからばつかまつろうが、三宝を持った男[5]はどこにいますかな。畏(かし)こみ畏こみ祈(ね)ぎまつらくは鳥の御竈(みかまど)のおん神、また竈をまもる鳶のみこと、またオリュンポスにまします八百万(やおよろず)の雄鳥のみこと、雌鳥のみこと、またアテナの梟[6]のみこと、またスニオンに鎮座まします鷹のみこと……。

ピステタイロス　おおスニオンの鷹、ペラルゴス[7]の御あるじ。

神官　またピュートーとデロス[8]の鴻(くぐい)のみこと、また鶉の御母儀[9]レートーに金翅雀(まひわ)のみことアルテミス神……。

ピステタイロス　もうコライニスではなくて金翅雀(アカランティス)じゃよ、アルテミスは。

神官　またひわの国[10]のサバジオス神に駝鳥(だちょう)のみこと、神々と人間らとの御母儀[11]……。

ピステタイロス　キュベレのおん神、駝鳥よ、クレオクリトス[12]の母御。

神官　願わくは雲居時鳥国の民らをすこやかにまたやすらけく護らせたまえ、わが国民とキオス人らを[13]……。

ピステタイロス　キオス人は気に入ったぞ、どこへでもくっついて来る。

神官　また鳥のみことら、その御子たちを、紅水鶏(くいな)、ぺりかんにぺれきいん、また熊鷲にほろほろ鳥、孔雀鳥、またよしきり、こがもに五位、白鷺にまた鵜のとり、山雀(やまがら)に柄長のとり……。

ピステタイロス　えい、縁起でもない、呼ぶのを止めろ、やれやれ、怪しからん男だな、どんな供物に鶚(みさご)だの禿鷹だのを呼ぶつもりなんだ。一羽の鳶だってもこいつを結構かっさらってくのがわからんのかね。さっさとここから、お前さん、その御幣ぐるみ出てきたまえ。私が自分一人でもってこの供物はお献げするから。

コロス　さればこそまた繰り返しあんたのために、
御手洗のあやに畏い浄めの歌を
言い継いで呼ばい上げ、幸(さき)わう諸神を
招くのがわしらの務め——いやたった一方(かた)だけを、
もし十分な肴を上げようとならばだね。
だってここの供物[14]（の山羊）と来たら全く
角と髯っきり、何も他はない同然だから。

ピステタイロス　犠牲を献げて羽根もたる神々にさあ祈願をしよう。

〔詩人登場〕

詩人　弥栄の、かの雲居なる
時鳥国を、楽神(ムウサ)よ、

汝が神歌のふし高く歌い上げてよ。

ピステタイロス　いったいこりゃ何てこった、おいこら、君は何者だね。

詩人　拙者かな。蜜をふくめる言の葉の
謡のふしを宣りあぐる
楽神どちのまめまめしき従者、
と、こうホメロス[1]ならば言おうもので。

ピステタイロス　そんならさあ、下人の分際で髪を伸ばしてるとは？

詩人　いんにゃ、なべて師匠というは、みな「楽神どちがまめまめしき従者」じゃ、ホメロス風ではな。

ピステタイロス　なるほどな。君の着てる毛ごろもはまずしいもんだね。だが、おい詩人君、何でもってここへ来て失せたんかね。

詩人　歌曲をな作りましたんでな、この雲居時鳥国の、あんた方のですぞ、それに妙なる組歌をどっさりと、また乙女舞の曲もな、シモニデス[2]風のやつを。

ピステタイロス　それを君はいつ、どんなときから作ってたんだね。

詩人　もうとうの昔から、拙者はこの国を歌いそやしておりますんじゃ。

ピステタイロス　やっといま十日目の祝いをやってるとこだがね拙者は、そいで子供にするように、今しがた名をつけたばかりじゃないか。

詩人　さりながら楽神のお告げはその速きこと
馬の足搔きの閃きにしもたぐえてむ、
「[3]さあれ、君、アイトナの（市を建てし）国父よ、
いやに聖とき祭儀と同名のきみ」、
われに賜えや　よし何なりと
「汝が胸中に[4]」おもい立たせて
吾に与えんとおぼせしものを。

ピステタイロス　この厄介者は、何かやっておっ払っちまわないと、うるさいことを起こしそうだなおれたちに。〔神官に向かって〕おいおい、ところであんたは皮の羽織を着物の上に着込んでるね、それを脱いでこの賢明な詩人にやりたまえ。〔詩人に〕胴着を取んなさい、全く君は凍えてるようだよ。

詩人　これこの品はわが楽神もいとど
なのめならず嘉納したもうところ、
されば君、汝がむねにピンダロスが句を知りたまえ。

ピステタイロス　やっこさんまだここから出て失せんようだぞ。

詩人　「馬を追うスキュタイ人のあいにして、
営をはなれてたちもとおるは、
織りめぐらせる衣さえ持たぬもの、
見すぼらしくもかちゆきつ」、
下着もなしに羽織をつけて。
「わがいうことを覚らしめ」

ピステタイロス　覚ったよ、下着が貰いたいっていうんだろ、〔神官に〕さ脱いだ、この詩人に合力せにゃならんからね。〔詩人に〕これを持って出てきたまえ。

詩人　行きますよ、行きしなにこの国にこんな歌を捧げましょうさ。
歌いあげませ、黄金の座に
まします（楽神）、このわななける
凍えた（国を）。
雪ふりしきり、路あまたある
平原をわれ行き行きぬ。
あらら[5]い。

ピステタイロス　全くな、だがそれももうのがれただろうが、その凍えもな、この着物を貰ったからにゃ。だけど実際に、こんな災難はてんで思いがけもしなかったよ、こんなに早くこの国を聞きつけて来るなんてことは。さあもう一度この御手洗盤をもって巡ってくれ、つつしみかしこみ[6]……。

[7]〔おみくじ売り登場〕

おみくじ売り　その山羊に手をつけるのはまだ早いぞ。

ピステタイロス　君はだが何者だね。

おみくじ売り　何者？　おみくじ師ですがな。

ピステタイロス　なら勝手にしろ[1]。

おみくじ売り　これはあなたとしたことが、神事を軽んじてはいかんですな。ほれこの通り、バキス[2]様のおみくじにちゃんと雲居時鳥国のことがうとうてありますが。

ピステタイロス　そいじゃあいったいどうして君は、わしがこの国を建設する前にその予言をしとかなかったんだね。

おみくじ売り　尊い御力が私をさし止めたのでな。

ピステタイロス　まま、その文句を聞くのがいちばんよかろうて。

おみくじ売り　「されど狼と白い羽の鴉とがともに住まうとき、正しくコリントスとシキュオン[3]のあいのところに……」

ピステタイロス　だがそもそもわしとコリントの奴らと何の関係があるかね、いったい全体。

おみくじ売り　それはバキス様の謎で、空のことですがな、「まず手始めに白毛の牡羊をよろず施しの女神[4]に奉り、さて次に、わが神宣をいやさきに託べんとて来りし者に清らなる上衣とあたらしき皮鞋とを授くべし……」

ピステタイロス　鞋もと書いてあるかね。

おみくじ売り　この書き物をごらん。「まださらに盃をとらせ、手に臓物[5]を充たすべし……」。

ピステタイロス　また臓物をもやれとあるかね。

おみくじ売り　この書き物をごらん。「さて神託をうけしますらお、わが宣るごとくしかなさば、雲中の大鷲とも成りつべし、またもし施与をせざらんには雉鳩とも、まして鷲とも、啄木鳥とも成るを得じ」

ピステタイロス　そんなことまでそこに書いてあんのか。

おみくじ売り　この書き物をごらん。

ピステタイロス　じゃあそいつは、おれがアポロンのとこから書き取って来たやつとは、てんで似てないね、「されどもしいかさまなる人間招かれずして来り、祭儀を妨げあまつさえ臓腑にありつかんと欲りせば、そのときこそまさにその男を打擲すべし、脇腹のあいだを」ってのと。

おみくじ売り　やくたいもないことをおっしゃるんで。

ピステタイロス　この書き物をごらん。「していささかの容赦もあるべからず、よし雲中の鷲と化すとも、またよしランポン[6]なりとも偉大なるディオペイテスたりとも」

おみくじ売り　そんなことまでそこに書いてあんですか。

ピステタイロス　この書き物をごらん。とっとと出て失せんか、ごうつくばりめ。〔打つ〕

おみくじ売り　あいたたた。

ピステタイロス　よそへでも駆けてっておみくじでも読んでいろ。

〔入れ代りに有名な天文学者メトン[7]、測地器械をもって現われる〕

メトン　わしがおぬしらのもとを訪ねたは……。

ピステタイロス　こりゃまた別な災難だぞ、あんたはまた何をなさろうってんで？　どんな模様のご考案ですえ。どんな企画で、どういう旅行のための底高靴[8]で？

メトン　わしはこの空中の土地測量をしようと思うんじゃ、おぬしらのためにな、で畝ごとに区画をつけようとじゃ。

ピステタイロス　神々にかけて、あんたはいったい何ていう御人で。

メトン　わしが誰だと？　メトンじゃよ。ギリシアにもコロノス[9]にも名の通っておる者じゃ。

ピステタイロス　ちょっとうかがうが、あんたのお持ちのそいつは何なんで。

メトン　空の測り竿さ。つまりじゃな、空というものは形が火消し壺[10]そっくりそのままなんじゃ。そこでわしがこの竿を、この曲りくねった奴じゃ、これを上から宛てがって、羅針をそこへ置き――わかったかな。

ピステタイロス　うんにゃわからん。

メトン　まっすぐな測り竿をそこへ宛てがって測る、そいでその円が四分されるようにし、その中央に公けの広場をおく、でそれへ向かって

まっすぐな路がいくつもまん真中へ集まるようにする、ちょうど星形のようにな、それ自体は丸いかっこうじゃが、八方へ光線がさし出てるようにじゃ。

ピステタイロス　この人はタレス[1]だよ、メトンさん。

メトン　何じゃな。

ピステタイロス　私はあんたが好きだから教えたげるがね、悪いことは言わんから、この筋は早々立ち退いたがいいですよ。

メトン　そりゃどんなこわいことがあるのかな。

ピステタイロス　ラケダイモンみたいにね、[2]（ここでも）よそ者を追放してんで、相当の騒ぎなんですよ。町中の暴力沙汰も頻々でしてね。

メトン　まさか革命騒ぎでもあるまい？

ピステタイロス　いや、けしてそうじゃないですがね。

メトン　ならどうじゃね。

ピステタイロス　みんながいっしょにね、ぺてん師どもを残らずやっつけることに決めたんでさ。

メトン　そんなら立ち退くかな。

ピステタイロス　全くね、いやもう遅いかも知れんですよ、それ例のがそこへさし迫ってるから。　〔メトンを打擲する〕

メトン　やれやれ、かなわん。

ピステタイロス　私が先刻から言ってたろう。よそへなり行って身のほどを測らないかい。

〔立ち替って監察官[3]登場〕

監察官　渉外部[4]はどちらかな。

ピステタイロス　ここなサルダナパロス[5]は何者だ。

監察官　わしは選出されてな、この雲居時鳥国へ監察官として赴任した者だが。

ピステタイロス　監察官？　で誰があんたをここへよこしたんで？

監察官　テレアス[6]氏の何やらくだらん決議でな。

ピステタイロス　じゃあね、この駄賃を貰って、面倒の起こらんうちに出掛けちゃあどうですえ。

監察官　いかさまな、もともとわしは国におって、会議に出とるはずだったが、というのは、わしがな、パルナケス[7]と取り結んだ協定があるのでな。

ピステタイロス　これをもらって出て行け。駄賃てのはこれだよ、そら。　〔なぐる〕

監察官　こりゃ何としたことだ。

ピステタイロス　パルナケスについての会議さ。

監察官　証人、証人！　監察官殴打罪だぞ。

ピステタイロス　とっとと追ん出て行かんか、この壺[8]を二つ抱えて。呆れたこった。実際この国へまだ神々への建国式も済まんうちから、もう監察官などよこしおるのか。

〔引き換えにお布令（ふれ）売り現われる〕

法令売り　「また雲居時鳥国人がアテナイ市民に対して非法のおこないありたるときは……」

ピステタイロス　こりゃまた何の厄介事かな、この書き物は。

法令売り　私はお布令売りさ、つまり新しく出た法律をね、ここでひろめにあんたの国へやって来たんでさ。

ピステタイロス　何だと。

法令売り　「雲居時鳥国人はすなわちオロピュクソス[9]人と同一の度量衡および貨幣を使用すべし……」

ピステタイロス　お前はおろおろ人と同じものを使用しようよ、すぐにな。　〔法令売りを打擲する〕

法令売り　こりゃあんた、何をするんだ。

ピステタイロス　その布令をもって失せんか。ひどい法令をおれが今日いま見せしめてやるぞ。

監察官　〔また現われて〕「ピステタイロスを暴行罪により四、五月の間に召喚するものなり」

ピステタイロス　ほんとうか、こら。まだ貴様はここにいたのか。

法令売り　〔また頭を出す〕「また知事を追い出し、高札どおりに迎えざる者あらば……」

ピステタイロス　やれやれ、かなわん。貴様もまだここにいやがったか。

監察官　〔またちょっとのぞく〕やっつけてやるぞ、五万円の罰金にしてくれるぞ。

ピステタイロス　おれのほうじゃその壺をこなみじんにしてくれるぞ。

法令売り　〔また顔をちょっと出す〕覚えてるか、あの柱像(ヘルマ)[1]をぶっ欠いた晩のことを。

ピステタイロス　何を。誰かあいつをひっつかまえろ。こら、待たんか。〔周囲の者に〕では私らは一刻も早くここを立ち去り、内のなかで神へこの山羊を贄に捧げることにしよう。

〔コロスのほか一同内陣へ退場〕

コロス　もうこれからは、このすべてを知ろし
すべてを統(す)べる私らに人間どもが
みな恭しくお祈りして贄を献げようさ、
私らはあらゆる国を見張っていて、
果実(このみ)のさかえを護り扶け、ありと
あらゆるさまざまな虫類を殺して
やるんだから。そいつらはみな
貪食な吻(くち)でもって、地の中だの木の枝だのに棲みついてから、
苞の中から萌えて出る果実(み)をみんな食ってしまうのだ。
また薫りの高い花園を、とても憎たらしく
荒らしつくす奴らを殺してやる、
また世にあるかぎりの爬う虫も嚙む虫も、
私らの翼のゆくところ、みな殲滅されてしまうのだ。

コロスの長　それ、今日も今日とて、こんなお布令が出された[2]のだ、「もし各位のうち誰にせよ、メロス島の人ディアゴラスをうち殺しなば、その者に三十万円を授与すること、またもし死去したる僭主[3]らのうちの誰かを誅殺せる場合にも三十万円授くるものとす」ってね。ところで私らもいまここでこんなことを布令出そうと[4]思うんだがね。「もし各位のうち誰にせよ鳥さし国の人ピロクラテスをうち殺しなば、その者に三十万円を授与す、また生け捕りにして連れ来たらば百二十万円を与うべし、その罪状は花鶏(あとり)を数珠つなぎにして一輪(ひとわ)十円に販売し、かつ真鶸(まひわ)をふくらませたうえ人目にさらして凌辱し、また黒つぐみには羽根を鼻さきへ押し込み、あまつさえ鳩を捕えて籠のうちへ押し込め、また網へ縛りつけてはおとりになるのを強制したるをもってなり」

ま、こう言った布令を出そうと思うんだがね、もし誰かあんた方の中に鳥を囲いの中へ閉じこめて飼ってる人があったら、放してやんなさい。もしきかないと今度は逆にあんた方のほうが、鳥たちにとっ捕まっていわえつけられ、おとりにされちまおうからね。

コロス　仕合せなのは翼をもった
鳥類のやからだ、冬になっても
毛裘(けごろも)を着る要もないし、
また土用だとて、遠くかがやく
暑い日光にやかれもせずに、
私らは花の咲きそう牧原の
木の葉がくれに住まいしてるのだ、
あの神輿を受けた歌い手（の蟬）が、鋭い曲(ふし)を
真昼間の炎熱に、日に酔いしれて号(さけ)びあげるころ。
冬のあいだはまたうつろな洞に
山々のニンフとともに戯れ過ごす、
春はまた乙女らの白くみのった桃金嬢(てんにんか)だの、
雅びの神女(カリテス)が苑のこのみだのを啄(つつ)む。

コロスの長　審査員の方々にちょっと授賞のことで言っておきたいんですがね、もし私らを優勝者に判定してくださるなら、みなさん方の各自に福徳をみなさしあげましょうぜ、あのパリス[1]に提供されたのよりずっと立派な贈物をね。

　まず第一には、どんな審査員でもが何より欲しがるもの、あのラウリオン（銀山）出の梟（銀貨）が、しょっちゅうあなた方の手もとを離れず家の中に住まい込み、蟇口の中でもってひよっ子を育て上げ、そいで小粒をたくさん孵したげるでしょうよ。そいから今度はそのうえにあなた方はお社に住まってるみたいにできる、だってわれわれ鳥どもがお社の千木[2]（鷲）風にお屋根へ乗っかるでしょうからね。またもしお役儀でもいいつかったおり、何か取り込もうてんなら、はしっこい隼をあなた方の手に渡してあげようじゃありませんか。またもしひょっとご馳走にでかけるおりは、初穂鳥[3]を送ってあげる。だが万一私を落選させたら、銅像みたいに頭の上へ月形の板[4]をのせときなさいよ、もし月を頂いていなかろうもんなら、真白い着物でも着て歩いてるおり、ときこそ来れと鳥どもが寄ってたかって糞を浴びせ、仇を取るに違いないから。（一一一七）

〔ピステタイロス、卜占の儀式をおえて入場〕

ピステタイロス　鳥の諸君、供物の占い[5]は上々吉だった、がさて城壁のほうから知らせの者が誰もやって来ないとは、向うの仕事がどんな具合か訊ねたいと思ってるにな。やあ、そこへ誰やらオリュンピア風[6]のいきごみで馳け込んで来たぞ。（一一二一）

知らせの使い　どこかね、どこに、どこどこかね、どこに。どこどこかね、どこに。どこに執政ピステタイロスどのはおいでか。

ピステタイロス　これ、ここだ。

知らせの使い　あの城壁はすっかりできあがりましたんで。

ピステタイロス　それはまずめでたいな。

知らせの使い　とても立派な造りの、素晴らしいものでござんして、まずそのてっぺんの広いことったら、そのうえを嘘つき村のプロクセニデス[7]がテアゲネスと向かいあいに、二台の馬車をすれちがわされるくらいなんで、しかもその馬があのトロイアの木馬ほどあってもでさ。

ピステタイロス　大したもんだな。

知らせの使い　またその高さは「余はまた親しく[8]測定したるものなれど」百間ほどもありますんで。

ピステタイロス　おおポセイドン、そんなに高いか。何者がそれをそう高くまで築き上げたか。（一一三一）

知らせの使い　鳥たちですよ、他の者ではありません、例のエジプト人[9]の瓦運びや、大工どもがいたってわけじゃありませんや。みな自分らの手でやったんで、私も全くびっくりするくらいでした。まず第一に[10]リビュアからは三万羽もあろうかという鶴が土台の石をのみ込んでやって来るてえと、それを水鶏の類が嘴でつっついて刻み上げる、一方じゃあ万羽もいる鸛のとりが煉瓦を運んで来るし、水はというと下界から空中へ田雞だとかその他の渡り鳥らが汲み上げて来るってわけです。（一一四一）

ピステタイロス　しっくい係りは何鳥かな。

知らせの使い　鷺でさあ、もっこに積みましてね。

ピステタイロス　でその泥をどうやって乗せ込むんだな。

知らせの使い　それが、さああなたさま、とても利口なやり方を考え出したんで。鵞鳥どもがねちょうどシャベルでやるみたように、足だけでもってしゃくい上げてはもっこへ乗せ込むんです。

ピステタイロス　「げに足のなし遂げ得ざること何かあらん」[11]か。

知らせの使い　するってえと、まあ、今度は家鴨どもが前掛けをして[12]煉瓦を積みますんで。そこへ上にゃあ燕めがうしろへ小僧っ子みたいにこてをぶらさげて飛び交わし、口の中にゃあしっくいを含んでるってわけなんでして。（一一五一）

ピステタイロス　全くこんなことなら誰が金を払って人足を傭おうもの

か。さてそこでだが、これはどうした、城壁の木組のところは、何鳥が仕上げをやったか。

知らせの使い　とても巧い大工がおりましてね、ペリカアンなんで、それが嘴の斧で城戸をすっかり削り上げましたんで。その木を削る物音といったら、まるで造船所にでもいるような騒ぎでした。そいで今じゃもうすっかり彼方は砦の門もできあがって、かんぬきもしっかりとこさえ上げ、ずっとぐるりに番を置いて、見張りをして廻り拍子木をたたいて歩き、また八方に守衛の詰所が作られて、塔の上にはかがり火の支度までできてますんで。では私はちょっと馳けて行ってからだを洗って参ります、この先はあなたご自身で万事お取りしきりくださいませ。

〔退場〕（一一六四）

コロス　あなた、こりゃどうしたことで。じゃあなたは城壁がこう早くできあがってしまったのにたまげといでなんですか。

ピステタイロス　いやあ全く神々にかけて。それも当然だろう。本当のところまるで嘘みたいに思われるからな。だが、ほれ、そこへ警固の兵が、彼方から(1)の使いだろう、こっちへ私らのもとへ馳け込んで来るぞ、いくさ踊りの様子でな。

番兵　りゃりゃ、りゃりゃりゃ。

ピステタイロス　こりゃ、どうしたことなんだ。（一一七〇）

番兵　とても大変なことが起こったんで。神様方の誰かがひとり、ゼウス方の神なんでして、それが今しがた城門をくぐって中空(2)へ舞い込んだんです、日中を見張りの椋鳥(むくどり)の番士の目をかすめましてね。

ピステタイロス　いや恐ろしい乱暴な所業をはたらきおったもの。いったい何という神だな。

番兵　それがわからないので、ただ翼をもってる、だけはわかってますがね。

ピステタイロス　そんならすぐそいつをつかまえに、パトロールを繰り出さなければならんぞ。

番兵　へえ、もう出しましたので。三万羽の隼の弓をもった騎兵隊(3)が出向いまして、みなてんでんに大爪を鉤(かぎ)のように曲げて進んでまいったので、まぐそ鷹やのすりやみさごや、大鷲や梟のたぐいなどを揃えまして。空を切るその羽ばたきのさわがしさ烈しさ、その神を探しまわれば大空も渦巻きかえす有様です。しかもそう遠くじゃありますまい、もうすぐどこかここらへんにいるようですぜ。（一一八七）

ピステタイロス　おいこら、石投げを構えた、それに弓矢もな。家来の者ども、みなここへ出ろ、おのおの弓に矢をつがえろ、石投げをわしによこせ。

コロス　戦争が始まった、大変な戦争が、
私らと神々との間に。それみんな、暗闇(エレボス)の
子(4)だという、雲をめぐらすこの中空をよっく見張ったり、
うっかり誰か神様に、そこをそうっと抜けられぬよう。（一一九〇）
……みんなよくぐるっと目を四方へ見張っていろ、それもう近所に「神霊の、虚空(こくう)はるかに渦巻き返す翼をもちたる物音が」聞こえているぞ。

〔虹の女神イリス、飛行して登場〕

ピステタイロス　おいこらどこへゆく、どこへ飛んでくのだ。止まれ動くな。そのままじっとしていろ。止まって、馳け足をやめろ。誰だお前は、何者だ、いったいどこから来たか、神妙に申し立てろ。（一二〇一）

イリス　わらわはオリュンポスにます神々のもとよりまいった者じゃ。

ピステタイロス　名前は何という、客船かそれとも下賤の者(5)か。

イリス　すみやかなイリスじゃ。

ピステタイロス　パラロスかサラミニア(6)か。

イリス　それが何とした。

ピステタイロス　誰かのすりでも飛んで出てこの女をひっ捕えぬか。

イリス　わらわをひっ捕えるとや。これはそもそも何とした僻(ひが)ごとじゃ。

ピステタイロス　たんとほえづらかくさ。

イリス　これはまた怪しからぬこと。

ピステタイロス　いったいどの城戸から城壁の中へはいり込んだ、不埒者め。

イリス　存ぜぬわいな、いっこうあたしは、どの城戸などと。

ピステタイロス　皆こいつの文句を聞いたか、ごまかそうという。（一二二〇）椋鳥隊長のところへ出頭したか[1]、こら、言わんか。鸛の鳥から許可証は貰って来とるのか。

イリス　何の異なことを。

ピステタイロス　貰わなかったのか。

イリス　そもじは正気かや。

ピステタイロス　それに証紙を鳥の隊長が誰もその場で貼りつけもしなかったか。

イリス　何をいやる、馬鹿らしいあたしに誰も貼りなどせぬわ。

ピステタイロス　そんならだね、こうやってこっそりとお前さんはよその国んなかを、この虚空をだね、飛び抜けてこうってのかね。

イリス　さらばそもそもいずかたを神々が飛んでゆけばよいと申すのかえ。

ピステタイロス　「存ぜぬわいな」だが、ここを通ってはいけないんだ。（一二二九）すんでに今がもう罪人なんだぞ、だから何も文句はあるまい、あらゆる虹神の中で、お前はまさに当然のことどっ捕まって死刑にされたって。それ相応の振舞いをしたんだからな。

イリス　したがあたしは不死の身じゃぞえ。

ピステタイロス　でもやっぱり死ぬんだろうさ。だってとんだ間尺にあわん話だろうじゃないか、他の者どもはみなわれわれに服従してんのに、お前さん方神々だけが勝手な真似をして、ちっとも覚らなんだらな、今度は自分たちが目上の者に従わなきゃならんてことを。ところでちょっと訊くが、その翼をどこへ航せていくのだったね。

イリス　あたしかや、父神のもとより人間どもに向こうてじゃ、オリュンポスなる神々をまつり、牛を贄とする火壇の上に犠牲をささげ、また街々を、その香もて充たすよう申しつけようとてじゃわいな。

ピステタイロス　な、なんて言うのか、どんな神々だって？

イリス　どんなとは、これはしたりわれら天上なる神々じゃ。

ピステタイロス　じゃお前さん方は神々なんかね。（一二三五）

イリス　そも他にいかな神があろうかや。

ピステタイロス　鳥類がね、今じゃあ人間にとっての神々なのさ、だからね、人間は鳥類にこそ贄を献げるのが当然、ゼウスにかけても[2]ゼウスにはあげまいよ。

イリス　[3]愚かや愚か、おそろしい神々のお怒りを招くまいぞ、汝らが一族を正義の女神が、天帝の火の犂をもて根だやしに滅ぼしたまわぬよう、また猛火の烟におのが身もおのれが家屋敷のくまぐまもなく、「リキュムニオス」[4]の雷火を受けて、焼き尽くされぬよう気をつけたがよかろうわな。（一二四三）

ピステタイロス　こら、よくお聞き、大風呂敷はやめて欲しいね。ま、じっとして。さていったいだがそんなこと言って「[5]そもリュディア人かあるはプリュギア人を」おどしつけてるつもりなんかね。[6]「さて心得たか、ゼウス神が」あんまりわしに世話を焼かせると、自分の屋敷も「[7]アンピオンがしつらえし宮居を火をもちたる鷲に命じて焼き払ってくれるぞよ」。そいから大空へポルピュリオン[8]の紅水鶏を攻めかけさせる、豹の皮を着込んだやつを六百羽のうえの数をな。だがいいかね、その昔ゼウスさんは、たった一人のポルピュリオンで大分苦労したってじゃないか。お前とてもこのうえわしに世話をかけると、まず第一に使姫のお前さんから手足を取って、その虹をめちゃめちゃにはめてくれるぞ、こう年を取っても三隻分の船首ぐらいは、堅く立つからな。

イリス　ええけがらわしい、その言葉ごと失せおろう。

ピステタイロス　さあとっとと出て失せんか、エウラクス、パタクス。[9]

イリス　きっとあたしの父神がこの増上慢はさしとめようぞ。

ピステタイロス　そりゃこわいね、だがどこかよそへ飛んでって、誰かもっと若い手合をじらしてやるがよかろうぜ。（一二六一）

〔虹の女神、羽ばたいて飛び去る〕

コロス　すっかり門を閉めちまったぞ、ゼウス方の神々が
もうわれわれの国を通りぬけられないように。
またもはや地上からも、人間どもが　だれ一人とて、
この路から犠牲を焼いた煙を天へおくれぬように。

ピステタイロス　だが妙だな、人間界へ出かけて行ったあの伝令使がちっとも帰って来ないというなら。（一二七〇）

〔伝令の使節、手に金冠を持って入場〕

伝令　ピステタイロスさま、おお尊い[1]、このうえなく聡明な、よにも尊い、ほまれの高い、このうえなく高遠な方、どうか合図をお与えくださいませ。

ピステタイロス　何の話だなそれは。

伝令　ほれ、ここな黄金の冠を、もろもろの国たみこぞって、お知恵をたたえてお贈りし、敬うというのです。

ピステタイロス　それは重畳、だがどういうわけでこう人々がわしを敬うかな。

伝令　はい、世にも名高い空の国をお建てになったお方さま、あなたはご自分がどのくらい人間のあいだに尊ばれといでか、どんなにこの国の愛好者がたんといるかご存じないんですか。だってあなたがこの国をお建てになったその以前には、みんな誰も彼もラコニア風[2]にかぶれちまって、髪を延ばし食事を減らし、あかにまみれてソクラテスをまね、太い杖を持って歩いてました。それが今度はすっかり転向して鳥のマニアにとっつかれ、何でも彼でも鳥のしわざの真似をして嬉しがってるんです。（一二八五）

まず第一にみんな誰でも寝床から起きるといきなり朝っぱらから飛んでいってわしら同然法規にとっつく[3]、そいから今度はまたいっせいに書物にかかる[4]。その次にはそこで投票（石）[5]の間から獲物をせせり出すんです。でその鳥かぶれの烈しいことったら、全く多勢が鳥の名前をくっつけられてるほどなんですよ。例えば、一人の商人は足が悪いんで、「鷓鴣」っていう名前を貰い、またメニッポス[6]は「燕」ってえあだ名で、オプンティオス[7]は「めっかち鴉」ですし、ピロクレスは「雲雀」、テアゲネス[8]は「狐鴨」、リュクルゴス[9]は「イビス鳥」で、カイレポン[10]は「蝙蝠」、シュラコシオス[11]はまた「かけす」で、あそこなメイディアス[12]は「鶉」って名なんです、だって鶉つかいに頭をたたかれてまいった鶉にそっくりでしょう。こんなにみんな鳥好きなんで、いつも歌をうたってるんです、そのなかにね何か燕のことが歌い込んであるとか、それとも鴛鴦のことか鵞鳥か数珠懸鳩のこととか、でなきゃ翼か、またほんのちょっぴり羽根とでもあるやつをね。（一三〇三）

向うの話はまずそれだけとし、一つご注進とは、あっちからじきここへ一万人以上も押しかけて来ますぜ、羽根を欲しさに、また鷲づかみのくらしに憧れましてね。だからあなたはその移民どもに、どこからか羽根の用意をなさらなきゃ。

ピステタイロス　そいじゃあ全く、ちっともぐずぐずしとれぬわい、さあ大急ぎでお前、出掛けていってざるや籠なんどに、どれもこれも羽根をいっぱい詰めさせてくれ。そいでマネスにその羽根を外へ運び出させろ。わしはぽつぽつやって来る人間どもに会おうほどに。（一三一二）

コロス　きっとじきに、この国をどこかの人が、ますらお多き国なんて呼ぶだろうよ。

ピステタイロス　仕合せさえよく行けばな。

コロス　わしらの国へのあこがれが世間をとらえたんだ。

ピステタイロス　〔マネスに〕こら、さっさと籠を持って来んか。

コロス　だってどんな得がここにはないてんだね、
人間がここへ移住するとしてさ、

知恵も憧憬も、かぐわしい典雅の神女（カリテス）も、
また優しいこころの安楽さまの
たおやかなお姿とても。

ピステタイロス　ずいぶんぐずぐずやってるんだな、もそっと急いで運ばんかな。

コロス　さ早く羽根を入れた籠を持って来い、も一度あなたがせき立てたら。

ピステタイロス　こいつをそれこう打ってやってさ。〔マネスを打つ〕

コロス　全く驢馬みたようにのろまなんだから。

ピステタイロス　いや、マネスって奴は意気地なしだよ。

コロス　そこであなたはまず第一にこの羽根を
ちゃんと綺麗に分けてください、
歌い鳥のと、また占い鳥のと、
海の鳥のと、そいでそれぞれ人に応じ、
人を見て羽根をつけられるよう。

ピステタイロス　〔マネスに〕全く、まぐそ鷹にかけて、きさまには我慢ならんな、こう意気地なくぐずぐずしてるのを見ては。

〔ピステタイロス羽根をより分けて積み重ねる、その間に一人の男歌を唱いながら登場する、「親不孝者」である〕

親不孝者　天翔る（あまかける）[1]大鷲にもなりたや、
荒海[2]のそら高く舞い上がりつつ、
波しらぐ汐路はるかに……

ピステタイロス　使いの者が言ってたことは、うそではないらしいぞ、それ、そこへ誰か、鷲の歌をうたいながらやって来たわい。

親不孝者　あいぼい[3]、飛べるのよりありがたいことはありませんや、（私は鳥仲間のおきて暮しを言うんですがね）もう鳥気違いなんですよ、飛び立つばかり、でね、あんた方といっしょに暮らしたくて、その規則にこがれてるんです。

ピステタイロス　どんな規則にかね、鳥にも規則はいろいろあるでな。

親不孝者　残らずでさ、とりわけて鳥仲間じゃあ親爺（おやじ）の首をしめたりつついたりしても結構だってやつなんか。

ピステタイロス　いや全くのこと、ひよっ子のくせに[4]親を打ちのめしちまうようなのは、とても雄々しい奴ということになってるんだ。

親不孝者　そいですからさ、ここへ私は引っ越して来たんで、そいで親爺の首を絞めてみんな奪り上げようてんですよ。

ピステタイロス　だがね、わしら鳥の仲間には大昔からこういう規則があるんだ、鵠（こう）の鳥の高札にだが、「鵠の父鳥（おや）[5]が鵠の仔鳥らをみな揃って飛び立てるようになるまで養ってやりたるときには、雛鳥どもは親をまた、養って恩返しをせざるべからず」とな。

親不孝者　そいじゃあ全くこんなところへ来て、好い目を見たもんだよ。このおれが親爺なんかを養ってやらにゃならないなんて。

ピステタイロス　そんなことはない、お前さんはわる気なしにやって来たんだから、みなし子鳥[6]のように羽根仕立をしてあげよう、だがお前さん、悪いことは言わない、[7]「われみずからの幼きときに学びしこと」なんだ、お前、親爺をなぐんのは、やめなさい、そいでこれこのさ、翼をもって、もう一方の手にこのけづめをひっさげ、この兜の前立毛をとさかのように考えて、警備したり、出征したり、給金貰って暮らしてくんだ、で親爺さんは無事に過ごさしときな。またもし腕がうなるんなら、トラキア方面[8]へ飛んでいって、向うで戦いなさい。

親不孝者　ええディオニュソスにかけて、もっともなお話だから、そうしましょう。

ピステタイロス　全くだ、おいおいわかって来ようさ。

〔当時流行のディテュランボス詩人、キネシアス[9]登場、アナクレオン作の鳥に縁のある歌を唱いながら〕

キネシアス　〔歌いつつ〕げに軽やかの　つばさに乗りて
オリュンポスの嶺（みね）をさし、天翔けりつつ行くわれか、

それよりそれと　歌のしらべの道をわけ、翔けりゆくわれ……

ピステタイロス　やれやれ、こいつはいっぱい羽根がいるぞ。

キネシアス　〔歌う〕おそれなき心と身もて　新奇なるふしを求めつつ

……

ピステタイロス　やあ経木みたいな(1)キネシアス君のご入来だね、いったいどうしてここへその曲った足をめぐりめぐらせて来たんだ。

キネシアス　〔歌う〕鳥にかも成らんとぞ思う、
　朗らのこえの　うぐいすにしも。

ピステタイロス　歌はやめて欲しいね、で尋常に何だか言ってくれたまえ。

キネシアス　あなたから羽根をつけて貰って、空高く舞い上がり、雲の中から渦巻く大気や吹雪(ふぶき)みたような、新奇な歌曲を得たいと思うんですよ。

ピステタイロス　じゃあ雲の中からでも、歌曲が得られるといいなさんのかね。

キネシアス　それどころか、われわれの商売てのは、そこにかかっているんです。だって第一ディテュランボスの妙味ってのは曖昧模糊と黒光りのする、天を羽ばたきめぐるようなもんですからね、ちょっと聴いてみりゃすぐわかりまさあ。

ピステタイロス　いや、ご免だね。

キネシアス　ええ、ヘラクレスにかけて聴かせたげます。空中を万遍なくゆきわたって見せたげますよ。
　〔歌う〕高ぞらを翔けめぐり
　飛ぶとりの、うつつなの影、
　長いうなじのとりじもの。

ピステタイロス　こらしょ……

キネシアス　うしおの路を馳せかわし
　風の息吹(いぶき)につれていこうもの。

ピステタイロス　全くさね、私はあんたの息吹を止めてやりたいよ。

キネシアス　あるときは南の方に向かい往き、
　あるときはまた北方に身を馳せ、
　港なき空の畦路切りひらきつつ。
おや、爺さん、なかなか巧い味なことをやるね。

ピステタイロス　〔キネシアスをつかんでぐるぐる廻す〕
お前さんはぐるぐるっと羽ばたきまわされていやだってのか。

キネシアス　こんな真似を歌曲の先生にしかけるってのか、方々の村や市からいつも争ってよばれるこのわしに。

ピステタイロス　そんならここにずっといて、先生役を勤めてくれるか、飛びまわる鳥どものコロスを、レオトロピデス(2)のために仕立てる役さ、村は田鴫(たしぎ)のだ。

キネシアス　私をなぶんなさんだね、それに違いない、だがこんりんざい、私はやめないからね。よく覚えていたまえ、羽根をもらって空中を飛んで廻らんうちはだ。

〔キネシアス退場、密告者(シュコパンテス)(3)歌いながら現われる〕

密告者　これはまたどうした鳥どもか、からっけつの、羽色のさまざまな、翼のながいぶちのある燕(つばくら)よ。

ピステタイロス　今度はちょっと骨折れそうな厄介事がおっ始まったぞ。そら、そこへまた誰やら鼻歌をうたいながらやって来おった。

密告者　翼のながいぶちのあるのよ、(4)ぜひもう一度（たのんます）。

ピステタイロス　上衣のことをあの小歌はあてこすってるらしいな、どうも。だがあの様子じゃそうとう何羽も燕(5)が要るようだぞ。

密告者　どの方ですえ、ここへ来た者に羽根をつけてくださんのは。

ピステタイロス　ここにいるおれさ、だが何が入り用か言うがいいな。

密告者　「羽根が、羽根が(6)入り用じゃわい」、二度とはお訊きめされるな。

ピステタイロス　まさかすぐペレネへ(7)飛んでこうと思ってんじゃあるまいな。

密告者　とんでもない、僕は鳥の係りのね、呼び出し人(8)なんです、密告

者てえわけでね……

ピステタイロス　いや、結構な商売をしといでだな。

密告者　つまり事件を嗅ぎ出す役です、そいだから羽根を貰ってぐるっとね、諸国を巡回しておどしあこうてんでさ。

ピステタイロス　「羽音にあわせ」(1)、まあ巧いぐあいに呼び出すてんだね。

密告者　とんでもない、海賊がね、わるさしないようにでさ、で、鶴(2)どもといっしょにそこから引き揚げて帰ろうてんですよ、錘(おもり)の代りに裁判をどっさり腹にためこんでね。（一四二九）

ピステタイロス　じゃお前さんはそんな仕事をやらかしてるんだね、え、おい、君いい若い者なのに、仲間の国の人たちを告訴して歩くてえのか。

密告者　じゃどうすりゃいいんです、だって土方(どかた)もやったことないのに。

ピステタイロス　ところが、全くさ、ほかにれっきと筋のとおった仕事があるよ、それをやって一人前の人間は、裁判をでっち上げるより、もっとまっとうなことで世を送るのが道だろうさ。

密告者　いやだなあ、あんたは。とがめだてよりも僕に羽根をつけてくださいよ。（一四三六）

ピステタイロス　じゃあいま、文句でお前に羽根を付けてやるよ。

密告者　でもどうやって文句であんたは、人間に羽根が付けられるんです。

ピステタイロス　そりゃ誰だって文句でもってさ、羽根が生えて飛び上がるさ。

密告者　誰でもですって？

ピステタイロス　聞いたことないのかね、親爺連が毎度のこと、子供に向かって、理髪店(3)でこんなふうにしゃべっているのを、「いやべらぼうもなく、うちの子にねディイトレペス(4)が、話で羽根を生えさせちまった、それで馬に夢中なんだよ」って。と、こっちじゃまた自分の子が、芝居に打ち込んですっかり羽根が生え、魂が飛んで歩く、なんてね。

密告者　んじゃあ話でも羽根が生えるってんですかい。

ピステタイロス　もちろんさ、いろんな文句でもって人の心ってのは引きあげられ、人間が高揚されるんだ、でね、そんなふうにおれはお前さんにね、羽根を生やせて、立派な文句でもってさ、ちゃんとしたなりわいに向けてやろうてんだよ。（一四五〇）

密告者　でも僕はいいんですよ。

ピステタイロス　じゃいったいどうするってんだ。

密告者　自分の生れをね、はずかしめたくないんです。爺さんときから、うちのくらしは密告業なんですもの。それよりさっさと僕に羽根をくださいよ、それも軽快なやつですぜ、隼とかまぐそだかとかのね、僕がよその国の人間ども(5)を法廷へ喚び出すのに使えるように。つまりここへ召喚しといてから（その留守に）また向うへ飛んで帰るんです。

ピステタイロス　わかった、つまりこうだね、他国の人間が着いてみると、こっちじゃあもう裁判がすんで罰金をとられることになってるようにか。

密告者　そのとおりでさ。

ピステタイロス　そいでそいつが船へ乗ってこっちへ来るうちに、そいつの財産を取り上げげにお前は向うへ逆にとんでくって(6)わけだな。（一四六〇）

密告者　お手のうちだね、まるで、こままわしにそっくりですよ。

ピステタイロス　ふん、じゃあこまだな。いや全くだ、ほれこのとおり、ここにとってもない立派な二枚皮のコルキュラ製(7)の、ほれ、羽根があるぞ。

〔鞭で打擲する〕

密告者　あれ、どうしよう、鞭じゃありませんか。

ピステタイロス　なあに、羽根さ、こいつで今日はお前をこまに廻してやるんだ。

〔密告者を打ちまくる〕

密告者　あれ、いたたた。

ピステタイロス　ここから飛んで行かないか。さっさと消えてなくならんか、このろくでなしのひとでなしめ。今にも正義を曲げてやった悪事の酷いむくいを見せてくれるぞ。

〔一同に向かって〕ではわれわれは羽根をまとめて、向うへ行こうか。
〔しばらく退場する〕

コロス　そりゃもう私らは、いろんな珍しい、また
おったまげたもんの上を飛んで来たし、
おっそろしいことも見て来たんだ、
まずとてもやたらにでかく育った
大木がある、カルディア(1)よりも
もっと遠くに、クレオニュモス(2)ってね、
役にゃ一つも立たないで、ただ
臆病でなりが大きいばかり。
こいつが毎年春んなるとね
芽を吹いて告げ口をする(3)。〔いちじくをならす〕
冬んなると今度はまた
楯を木っ葉と投げちらすんだ。

そいから次にはずっともう
暗闇の方によって、灯火(あかり)の
届かないとこに国があってね、
そこじゃ人間が英雄たち(4)と、
夕べのほかはいつも連れ立ち、
食事もいっしょにやるんだけれど、
夜分だけは（英雄に）出っくわしたら、
きまって危ないっていう話さ。
つまり誰でも人がよる夜なかにだ
英雄のオレステス(5)に逢おうもんなら、
右半身をすっかりそいつにやられたうえに、
素裸にさでされちまうのさ。

〔プロメテウス(6)、ずきんで頭を包み、手に傘を持ち、人目をおそれつつ急いで登場〕

プロメテウス　やれやれ、ゼウス神に見つからなきゃいいが……ピステタイロス君はどちらかね。

ピステタイロス　〔藪の中から出て来る〕おや、こりゃいったい何だね、何者かい、この覆面は？

プロメテウス　〔耳をふたされていて聞こえず〕誰か神様は見えんかね、わしのうしろに、ここんところで。

ピステタイロス　いやゼウスにかけて、私にゃ見えないが、だがお前さんは誰だよ。

プロメテウス　今は日の何時ごろかな。

ピステタイロス　何時かって？　正午(ひる)ちょっと過ぎさ。だがお前は誰かってんだ。

プロメテウス　牛解きごろ(7)（黄昏）か、もっと後か。

ピステタイロス　いや、実に腹の立つ奴だよ。

プロメテウス　だがゼウスは何をやっているかね、むら雲を払い去ってるか、それとも雲を寄せてるか。

ピステタイロス　どうなり勝手にしやがれ。

プロメテウス　〔ずきんを脱ぎつつ〕じゃあ覆面をすっぱり脱ぐか。

ピステタイロス　おお、プロメテウスさん。

プロメテウス　しっ、しっ、大声たてるな。

ピステタイロス　いったいどうしたんです。

プロメテウス　黙って、わしの名を呼んではならん。だってもしゼウスにここで見つかったら、わしの身の破滅だからな。ところで君に上での出来事をすっかり話してあげるから、ちょっとこの日傘をもってわしの上から、さしかけていてくれんかね、神々たちがわしを見つけなどせんようにな。〔小傘をとり出して渡す〕

ピステタイロス　ようよう、巧い考えですな、こりゃ、全くプロメテウス風(8)な。それ、ちょっくら中へ入って、そいで安気に話してください。

プロメテウス　じゃあまあ聞いてもくれたまえ。

ピステタイロス　聞いてますから、まあおっしゃい。

プロメテウス　ゼウスはすっかり参ってんだよ。

ピステタイロス　いつごろから参ってんですえ。

プロメテウス　君たちが下界の空を占拠しちまったときからさ。だって人間どもの誰一人として、もう神々に贄をちっとも献げる者はないし、焼いた腿骨の煙さえ、そのとき以来、てんでわれわれのとこにはやって来ないんだから。だもんで、ちょうどテスモポリアの祭(1)どきみたいに、供物もなしでわれわれは断食してるんだ、で、えびすの国の神々なんかはね、イリリア人みたいにかつえちまって、ぎゃあぎゃあわめき立て、上のほうからゼウスのもとへ攻め寄せるってんだ、もしも市場を開いてよこし、切り刻んだ臓物なんどを、輸出して渡さん、という分にはだよ。

ピステタイロス　じゃあんた方の上のほうにも、まだ他にえびすの国の神様なんかがいるんですか。

プロメテウス　なんでいないもんか、エクセケスティデス(2)の父祖代々の神なんかは、その仲間さね。

ピステタイロス　で、そのえびすの国の神々たちの名前は、いったい何てんです。

プロメテウス　何てだって？　トリバロイ(3)さ。

ピステタイロス　わかりましたよ、そこんところから、じゃあ、「くたばっちまえ」(4)ってのは来てんですね。

プロメテウス　正にそのとおり。で、君にしかと言っとくことだが、いまにここへ交渉をしにね、ゼウスのとこから、それに上のトリバロイからもさ、使節がやって来るのだ。だが君らは講和をしちゃ駄目だよ、ゼウスが鳥類に主権をもとどおり還付して、そのうえあのバシレイア(5)を君の細君によこさないうちはね。

ピステタイロス　そのバシレイアってのはどんな女です。

プロメテウス　とてもいい娘さ、それがゼウス神の雷火だとか、その他何でもかでもを差配してんだ、ためになる論策工夫、立派な法制、節度、それから船渠でも罵詈雑言でも、法廷への出勤費支払役(6)でも、その駄賃の三十円でもさ。

ピステタイロス　じゃ何から何までゼウスの差配をしてんですね。

プロメテウス　むろんのこったよ。その女をゼウスのとこから取り上げりゃあ、何でもみな君のものになるんだ。そいつを教えてあげに、ここへやって来たんさ、わしはいつだって人間のため親切をつくしてんだから。

ピステタイロス　そりゃ神々の中であんたのおかげばかりに、私らは煮炊きができるんですものね。

プロメテウス　わしは、神々どもは誰でも彼でも、大嫌いなんだよ、知ってのとおりにな。

ピステタイロス　全く、実際に、いつでもあんたは神様嫌いですね。

プロメテウス　正真正銘のティモン(7)さ、だがさあ、馳けて戻るから、その傘をよこしたまえ、わしをゼウスが上から見つけても、籠持ち娘(8)の付添い人と感違いをするようにね。

ピステタイロス　それ、この椅子もついでに持って、椅子持ち娘になりなさいよ。

コロス　蔭足族の国(9)に近く沼地(10)が
あって、その場所で沐浴もしない
ソクラテス(11)が死霊を寄せる。
そこへまたペイサンドロス(12)もやって来て、
存命中からなくした魂（気力）に
会わせてくれと頼みに来た、
犠牲に駱駝の小羊一匹
つれて来てその咽喉くびを、オデュッセウス(13)
みたように、切りさいたまま、逃げてっちまった。
するとその面前へ、地下から駱駝の

血汐をめがけて、あの蝙蝠の
カイレポン[1]が上って来たよ。

〔プロメテウスの予告した天界からの使節として、海神ポセイドン、英雄ヘラクレス、およびさい前の野蛮人で神に擬せられたトリバロスの三人、立ち現われる〕

ポセイドン　それ、そこにわれわれが使節としてやって来た雲居の時鳥国の城池が見えるじゃろう。〔トリバロスに向かって〕おや、あんた[2]は何しとるんじゃ、左へ（衣を）そう着とるのか。ほれ、こう右へ（上手に）衣を掛け換えたらどうじゃね。やれやれ、何とまあやくたいもない、あんたの姿はライスポディアス[3]かね。ああ、民主政治よ、いったいお前はわれわれをどこへつれていくのか、もしこんな奴を神が選出したとすればじゃな。じっとしとらんかね、ええいまいましい、全くお前さんみたいに野蛮じみたのは、わしゃよろずの神々中にも、とんと見とらんわい。そこでじゃが、どうしたものじゃろか、え、ヘラクレス。

ヘラクレス　僕の考えはもう聞いていなさるでしょう、その、神々を城壁で締め出したのがどんな奴にしろ、その人間めの首を絞めてやりたいんです。

ポセイドン　だがねえ、お前、われわれが使節に選ばれて来たのは、折衝のためじゃからのう。

ヘラクレス　それだけ二重にも余計に首を絞めたいってんでさ。

〔ピステタイロス厨房（ちゅうぼう）にて鳥肉を料理の最中、いろいろと侍者にうまそうな料理の指図を下す、食いしん坊をもって名あるヘラクレスはこれにつり込まれて辛抱しかねるかたち[4]〕

ピステタイロス　チーズ擦りを貸せ、甘酢をもって来な。誰かチーズを持って来んか、炭火を強くして。

ポセイドン　そこな御仁に神々が挨拶をいたす、われら三人のものどもじゃ。

ピステタイロス　いま甘酢にまぶしてるところなんで……

ヘラクレス　だが、その肉は何の肉だね。

ピステタイロス　鳥どもですさ、民主派の鳥類に対し謀反（むほん）を企てたかどでもって、有罪をいい渡された奴らですよ。

ヘラクレス　そんなら正にまず先に、そいつらの上に甘酢をかけてるんだね。

ピステタイロス　や、こりゃヘラクレスさん、何の御用です。

ポセイドン　われわれは使節として来たのじゃよ、神々のところから戦争停止の交渉[5]にな。

ピステタイロス　油がもうびんのなかになくなったぞ。

ヘラクレス　いや、全くな、鳥肉は油っこいに限るよ。

ポセイドン　われわれとて戦いをしとっても何の得にもならんからのう、またお前さんがたもわしらと仲好しになっておけば、水たまりにはしょっちゅう雨水を切らさずにおれようし、年がら年じゅう翡翠（かわせみ）[6]の日を送ってゆかれるというものじゃろうて。そうしたことすべてについて、全権をもって来とるのじゃ。

ピステタイロス　だがそもそも私らのほうから先に立って、あなた方に戦いをしかけたんじゃありませんからなあ、今だって正当な条件を容れてくださるつもりなら、即座にもよろしけりゃ講和条約を結ぶつもりでさ。その正当なというのはね、つまりゼウスさんがわれわれ鳥類に主権を還付するということです、もしこの条件で交渉が成立する段になったら、使節の方々を食事にお招びするはずなんですが。

ヘラクレス　〔よだれを垂らして〕僕はもうそれで結構、賛成し……

ポセイドン　何だと、このろくでなし奴、お前は間抜けの食いしん坊じゃよ正に。自分の父親の位を奪いとろうというつもりか。

ピステタイロス　冗談でしょう、あなた方神々様はね、いっそう威権が高まるんですぜ、下のほうで鳥どもが統治してりゃあ。今じゃそら、雲の下にすっかり隠れ込んでからだを曲げて、人間どもはあなた方の名を呼んで偽の誓いをやってます。ところがもし鳥どもがあんた方の

盟友となれば、誰にしろもし鴉にかけてまたゼウスにかけて誓ったとき、嘘をやれば大鴉がそうっとそいつの傍にやって来て、つっと飛びついて眼をつついてえぐり出しちまうってわけでさ。

ヘラクレス　僕もそう思うんですがね。

ポセイドン　いや、ポセイドンにかけて、こいつはなるほど好い話だぞ。

ピステタイロス　〔トリバロスに向かって〕あんたはいったいどうお考えです。

トリバロス　[1]さにともけこだ。

ピステタイロス　ごらんなさい、この人も賛成だって。ところでまだ他にも、どんなにわれわれがあんた方の役に立つか、お聞きなさい。もし誰か人間が、どの神様かに贄を献げるってお祈りをして、そいで後になってから、「神々は辛抱づよいもの」[2]なんて言って、ちゃらんぽらんを述べ立て、貪欲からお礼もしない場合には、そいつも私らがきちんと取り立ててやります。

ポセイドン　ふふん、どんなふうにしてかね。

ピステタイロス　その奴さんがちょうど虎の子を勘定してるとか、それとも風呂をつかって（着物を脱ぎ）くつろいでるとき、鳶がふいっと舞い降りて、そうっと小羊二頭分の値段だけを取り上げ、その神様のところへ持ってくんです。

ヘラクレス　主権を還付するてえのに、その条件で賛成しますよ、僕は。

ポセイドン　じゃトリバロスにも訊いてごらん。

ヘラクレス　おいトリバロス、お前ひとつほえほえたいのか。

トリバロス　[3]てめえのどてばらこのぼでぐわせぞ。

ヘラクレス　たいへんどうも結構でごわすそうですよ。

ポセイドン　お前たち二人ともがそれに賛成なら、わしも賛成しとくよ。

ヘラクレス　おい君、例の主権の問題は承認ということに定めたよ。

ピステタイロス　ところでそれそれ、もう一箇条あったのを思い出しました。ていうのは、あのヘラさんは、ゼウスさまにお任せしときますがね、例の娘のバシレイア（統治権）のほうは、私の家内によこしてもらうことです。

ポセイドン　協定を望まぬというのか。ではみな、それ、国へまた戻るんじゃぞ。

ピステタイロス　ええ、ご勝手に。おい料理番、掛ける汁は十分甘くしなきゃならんぞ。

ヘラクレス　ポセイドンさん、変な人だな、あんたは、どこへ行くんです。われわれは一人の女のために戦争しようっていうんですか。

ポセイドン　ならどうしろっていうのか。

ヘラクレス　どうしろって、協定ですよ。

ポセイドン　何だと、この阿呆め、きさまはとうから瞞着されてんのがわからんか。第一きさまは、自分で自分を損ねとるんじゃぞ。ゼウスがこ奴らどもに王位を渡して死んだとすると、きさまは文なしになるんじゃぞ。ゼウスが死にぎわに遺す身代が、つまりそっくりきさまのものになるんじゃからな。

ピステタイロス　やれやれ、何てまああんたを言いくるめようてんだ。ちょっとこっちへ来てごらんなさい、お話がありますから。叔父さんはね、あんたを引っ掛けてんですよ、気の毒に。お父さん[4]の財産はね、髪一筋だってあんたに関係ないんです、法律によってですよ、あんたは庶子で嫡子じゃないんだから。

ヘラクレス　僕が庶子だって？　君は何をいうんだ。

ピステタイロス　でも実際にそうなんです。あんたのお母さんは外国人なんですからね。さもなきゃどうしていったいアテナが「世つぎ」[5]になれたとお思いです、娘なのに、もし嫡出の兄弟があったとしたらば。

ヘラクレス　もし親父さんが死にぎわに、財産を庶子の分として僕にくれたとすりゃあ。

ピステタイロス　法律がそうはさせませんさ、ここにいるポセイドンさんがね、今はあんたをけしかけてるけど、あんたから父親の財産を取り上げようとするでしょう、自分のほうが正統な兄弟だっていってね。そらね、あのソロンの掟[6]にだってありまさあ、「庶子には遺産相続の

権なきものとす、（正嫡の子女あるときには。）またもし嫡出児なき場合は、もっとも親等の近き縁者その財産にあずかるものとす」ってね。

ヘラクレス　じゃあ僕は父親の財産は、てんで貰えないんだね。

ピステタイロス　ええ、全くのところそうなんです。だがちょっと、これまでにお父さんはあんたを、仲間組の寄り合い(1)へ連れてってくれましたか。

ヘラクレス　いや、てんでないんだ。そいで僕も前から変に思ってたんだよ。

ピステタイロス　どうしてそう上向きに大口あいて、おっかない顔するんです。ですが、もしわれわれといっしょにいなさりゃあ、私やあんたを王様にしたげまさあ、鳥の乳(2)は呑み放題でね。

ヘラクレス　僕にゃ今度も君のいうことは正当のように見えるね、その娘についてさ、だから僕は引渡しに賛成だ。

ピステタイロス　で、あなたはどうお考えで。

ポセイドン　わしの意見はその反対じゃ。

ピステタイロス　するとトリバロスさんに万事がかかるわけですな。あんたの説はどうかね。

トリバロス　きれなちばしらめ(3)、とりとにひちわたすたよ。

ヘラクレス　引渡し説だとさ。

ポセイドン　何をとんでもない、こ奴は引き渡すなんどといっとらん、それどころか燕(4)めしきにとっとと去っちまおう、というんじゃ。

ピステタイロス　そんなら燕どもに引き渡すんだっていってるんでさ。

ポセイドン　じゃあお前たち二人で交渉なり取り決めなりするがいいじゃろ。わしゃ、お前らがそう決めたなりゃ、黙っとろうから。

ヘラクレス　［ピステタイロスに］僕らは君の要求を全部容認することに決めたんです、だから君自身われわれといっしょに天へ来てください。その娘さん「統治権」や、いろんなものをそこで接収しにね。

ピステタイロス　そいじゃあ、ちょうどいいときにこの鳥どもはつぶされたわけだ、婚礼の馳走のためにな。

ヘラクレス　ところでだが、どうです、僕はそのあいだここへ残ってこの鳥肉をあぶってましょうから、あなた方行ってらっしゃい。

ポセイドン　肉をあぶっとると？　うんと食い意地を張らそうてんじゃろ。みなといっしょについて来んか。

ヘラクレス　そりゃもちろん結構ですがね。

ピステタイロス　それ、誰かここへわしの婚礼の衣裳を持って来い。

［一同退場］

コロス　いいつけの郷(5)に、
漏水のかたえ、舌で胃の腑を
ふくらます悪知恵のやからが住まい、
舌でもって種をまき刈り、
また葡萄だの無花果(6)だのを
やっこらと穫り入れる。
鴃舌のえびすのやからで、
ゴルギアスとか(7)ピリッポスとか。
してそういった舌で胃の腑を
ふくらかすそのピリッポスらの
舌をアッティカ中、どこへいっても
（式のおり別に）切り取っちまうが習い(8)。

［ピステタイロスが天上にいってからの模様を報道に、使者登場、荘重な悲劇風の口調で］

伝令使　おお、とても仕合せな、言語にも絶する、おお、三度も祝福された鳥どもの翼をもちたるやから、幸ふかい宮居に主君を迎え入れなさい。いまここへおいでになります、まるで輝きわたる星の姿もそれほどには、黄金にまばゆい宮殿にも照りはえたことのないほど、また太陽の光矢の遠くかがよう光明もあの御姿には光りを失う、といったくらい、しかも言葉に絶えた美しさの御妃ともどもおいでなのです、

雷電をあの翼あるゼウスの御矢を、揮りかざしながら。それにえも言われぬよいかおりが穹窿の深みへと立ち登ってゆく美しいありさまに、薫香のけむりの渦を巻く輪を、そよ風がおちこちへとなびき渡らせる。それそこへ、もうご自身がお見えだ、さあ伎芸天女(ムウサ)のあらたかな吉祥の曲(ふし)を、うたいそめさせるがいいでしょうぜ。

コロス　(1)さどいた、わかれた、寄った、すさった、
ぐるりを飛べよ
さきわいのめぐみを添えて、幸(さき)わう君の。
あれ、あれ、何という若やぎの何という美しさ、
君こそはこの国にいとも幸わう婚姻(めあい)の式を、はたされたもの、
大きな大きな仕合せがいまこそ
鳥のやからに降って来たぞ、

この方のおかげでもって。されば婚儀の
歌や花嫁御を迎える曲(ふし)で、御身みずからと
「統(す)べ治め」(2)の御方をいざ迎えまつれや。

いそのかみオリュンポスなる
ヘラがもとに、高御座(たかみくら)しきいます
神々中にもいと尊(たか)い御主神(ぬしがみ)を、
運命の女神(モイライ)たちがおつれしたのも
ちょうどこうした婚姻(めあい)の歌で。
めでたや、やんれ、めでたやな。

咲きにおう愛慕(エロス)の神が
金の翼で、手許にひかえる
手綱をしぼり引きしめて、
ゼウス御神とさきわいたもう
ヘラ神との婚儀に見えた、
めでたや、やんれ、めでたやな、
めでたや、やんれ、めでたやな。

ピステタイロス　(3)讃歌(ほめうた)もみごと、歌曲もみごと、
ことばもまことに結構だ。

コロス　ではそれ、あの君の大地を震う
雷鳴をさあ歌い上げよう、また火と輝く
ゼウス神のいなずま(いかずち)や
恐ろしい雷火の白熱光を。
おお偉大な金色の電光のかがやき、
おおゼウス神の火と燃える不朽の投げ槍、
おお、地を震わせてとどろきわたり、また豪雨をもたらす雷鳴のおと、
それをもて今こそ君は大地を震いおののかせるのだ。
ゼウスのもたるもの皆を手に入れ、
その座(くら)わき(4)の「統べ治め」姫をさえ獲たもうえは。
めでたや、やんれ、めでたやな。

ピステタイロス　つづけさあ、婚礼の宴に、
翼をもたるやからうからの
ものどもみなみな、ゼウスの宮へ、
また婚礼の式の間に。[バシレイアに]
さあ手を伸べてくれ、さいわい
深く、そしてわたしの羽根につかまり
もろともに舞いつづけよう。そなたを
抱いてかるがると宙にあげよう。

コロス　あららい(1)、いええ、ぱいおーん、
たからかに勝を祝いまつれや、
このうえもなく尊い君の。

訳註

二〇六(1) こくまるがらす、人語をまねる小形のからす。

(2) カリア人の奴隷出身で巧みにアテナイ市民になり込んだ人物、たびたび引き合いに出される。

(3) ギリシア伝説に出るトラキアの王で、アテナイ王パンディオンの女を娶り、後これを虐遇し、ついにみな鳥と化したという、そのうちテレウスは戴勝鳥（やつがしら）として鳥族の王となる。

(4) アソポドロスの子、饒舌のためコロイオス（九官鳥）の仇名をつけられた。

(5) 「鴉のところへ行け」とは「くたばってしまえ」「出て失せろ」というような悪罵の言葉。

(6) 悲劇詩人アケストルのこと、サカ人と仇名された、十分な資格を持たずにアテナイ市民になりおおせた人物。

二〇七(1) アリストテレスの『動物誌』にもリビュアには種々な形態の動物が棲息することが記されてある。

(2) 当時流行の闘鶏で負け鶏のこと。

(3) アテナイの港口の町、「ひしこ」とは一種の小魚、東京湾の沙魚（はぜ）といったもの。

(4) 「はましぎ」trokhilos を「馳ける」trekho にかけたもの。

二〇八(1) 「門を」という代りに。

(2) 詩人ソポクレスには『テレウス』なる作品があったが、テレウスが鳥に変じた後の姿は舞台に現わさなかった、しかし報道者の句よりいうものであろう。

(3) 孔雀はこの時代になおはなはだ稀で珍重された、ここでは扮装の仰々しいのを指したものか。

(4) アテナイのこと、三段櫓の巨船を築造し、最近シケリアへ遠征したことを諷するもの。

(5) アテナイの最高法廷なるヘリアイアの審判員、当時アテナイ人が公事を好みやたらに法廷へ出たがったのを諷刺する。

(6) 山羊毛の粗末な外套の類、ブトンなどの代用にもされる。
(7) アテナイの古名、一種愛国的な回顧の情を伴うとされた。
(8) アリストクラテスという人物のこと、のち寡頭派の領袖になった。

二〇九 (1) 「今に金持になったとき」の代りに反対を言ったもの、人情の軽薄をそしる。
(2) ギュムナシオン、体育練成場のこと。
(3) 今のインド洋のこと。
(4) サラミニアはアテナイの巨船、この喜劇上演の数カ月前シケリアより召喚されたアルキビアデスを乗船させ、裁判に付した。
(5) エリスにある町、レプラにかけたもの。
(6) アリストパネスにひどく嫌われた悲劇詩人、レプラなりといわれた廉による。
(7) ロクリスにある町オプスの住民、これを当時悪名を謳われた密告常習犯人オプンティオスにかけたもの。
(8) 当時アテナイの演説家の常套語。
(9) 狡猾で悪辣な当時の勢力家、軽躁な人間どもの棟梁として？ か。一〇二五行参照。

二一〇 (1) この喜劇上演の一年たらず前、アテナイ軍がメロス島を兵糧攻めにして攻略し、住民を苛酷に処罰したことを諷するもの。
(2) いっしょに棲むもの、と共に歌うものとにあわせかけた語、テレウスの妃プロクネ（鶯）のこと。
(3) テレウスとプロクネとの子、ギリシア神話に出で、両親の争いの犠牲となって殺されたもの、プロクネ（後伝フィロメラ）は鶯に、その妹フィロメラ（後伝ではプロクネ）は燕となった。

二一一 (1) ケリュロス（雄翡翠）のこと、アルクマンの処女合唱歌のまね。

二一二 (1) フラミンゴのこと。
(2) ギリシアでは鶏のことをペルシア鳥またはメデア鳥といった、これはペルシア軍のギリシア侵入に際し、多数の駱駝を引率して来た印象がアテナイ市民の心に刻みつけられたせいであろう。
(3) いま鳥類の王となっているのはソポクレス作『テレウス』の化身たるやつがしら鳥であるが、その子はピロクレス作の『テレウス』で、その子をカリアスに擬したもの、カリアスはアテナイ名家の出であったが、放蕩のため家産を蕩尽した、プラトン、クセノポンの作中にも現われる。
(4) 嫡長孫が祖父の名を継承することはアテナイの常習であったのでここにカリアス家を引例して、カリアスに鋒を転じたもの。
(5) sykophantes は通例密告や告訴の常習者をいうが、ここではむしろ事実上佞口の寄食者、太鼓持ち連をいうのであろう。
(6) 他の類似した名の鳥にまねて作った名前。
(7) アリストパネスの喜劇中にたびたび現われて揶揄される人物、臆病で大食であったという。
(8) 走場を往復すること、武具をつけて競走をするものである。
(9) 小高い岡によく部落を設けることを指したものか、またはシュレーデルのいうごとく「兜の飾毛をいつもつけて」か。前説を採った。
(10) 「空がもう見えない」という代り。
(11) 「雄かわせみ」をもじったもの。
(12) 当時実際にいた理髪師だろう、また「鳥」とは一六九行に出るごとく、尻の落ちつかぬ軽薄者のこと。
(13) 当時の諺で「釈迦に説法」の類、梟はアテナイの守護神アテナイの使鳥であった。

二一三 (1) ここで問答をするのは、もっぱらその地頭ともいうべき Koryphaios（コロスの長）である。

二一四 (1) 梟がなぜ来ぬかには種々の説あり、或いはアテナイの鳥で、馴染なるゆえか。
(2) ニキアスはちょうどこの時分シケリア遠征に赴いていたが、兵術をもって聞こえたがゆえにいうものならん。
(3) 前のやつがしら鳥の話より採ったものと解す、「聞いてみるのがよいことだ」と解する者もある。
(4) 古註に「向き合いのまま一歩ずつ退ること」。
(5) アテナイ郊外の有名なる墓地、ツキュディデス中のペリクレスの演説参照、国事のために死したるものはここに葬られた。
(6) アルゴリスの一市、鳥（オルニス、オルネオン）に縁あるをもって択んだもの、この一年ほど前にアテナイとアルゴスの連合軍がこの市を攻め一兵

を損せずして占領したことあり、従ってかくいう（一人も戦死したはずなし）。

（7）激情と憤激とを重歩兵の武装になぞらえたもの。

二五（1）当代ギリシアの文明開化なのを皮肉ったもの、ソピスタイなどの語と縁あり、「インテリな」など。

（2）エロス、シュレーデルはこれを前話者の語に付し「どういうめぐり合わせで…の懐かしさが連れて来たか」と解す。

（3）いずれも悪事にかけて練達の者なることをいう「古狐、こまかく引いた粉、すれっからし」などの意。

（4）下に出るクサンティアス、マノドロスの二人の下僕（後見）、皿や串、かめなどを取り収める。

（5）条約、法令、儀式などに通例用いられるさいさきを祝う言葉「神護によりめでたく」。

（6）諸説あり、青銅の鼎台、陶製のヘルメス、器物をかける木台など。

（7）パナイティオスという丈のひくい醜男のあだなで、悍婦を妻とし、喧嘩が絶えず、ついに云々の約束で和睦したというので、当時評判されたものという。

二六（1）公衆の前で演説するときは、桃金嬢の冠を被るをつねとした、手を洗うのはいずれにせよことを慎しむためと解せられる。

（2）オリュンポスの主神、ローマのユピテル。

（3）ゼウスの父で、その前の天界の統治者、ティタンも原生神でその一党。

（4）現伝イソップ物語にはこの話なし、アエリアヌスの言によればインド伝来の説話なりと。

（5）アッティカの一部落、頭（ケパレー）と同字なるをもってしゃれたもの。

（6）きつつきはギリシア名「樫打鳥」なるをもって、ゼウスの神木なる槲よりゼウス攻撃者と解したもの。

（7）有名なるペルシア王、ギリシアを遠征す、メガバズオスはその将軍でエジプトを攻略した。

（8）前出、ギリシアでは鶏のことをかくいう。

（9）いわゆるティアラで、頭に巻く布、王だけはその端を立てるのを鶏冠に擬したもの。

（10）大麦の輓割を売るもの、そばやのごとし。

（11）市中の商売に対し、田舎を旅行する者のこと、次の笑話を引き出すための言葉。

（12）ギリシアでは小児が生まれて十日目に祝宴をし名をつけた。

（13）アテナイの外港ペイライエウスから程遠からぬ沿海の一邑、城壁とはアテナイ市の囲壁を指す。

（14）古註によると「春来と共に鳶がギリシアに現われ、それを喜んで人々が地上に倒れ伏す…そのゆえは昔は鳶が春を知らせたので、労民は冬を逃れたのを喜び、身をまろばせて鳶を礼拝した」云々。

二七（1）アッティカの田舎で流行した文句という、郭公が鳴くと悪戯好きな若者らを仕事に引き出すのが面白い、坊主頭とはセム人等の風習で割礼を施すのを卑猥に解したもの。

（2）トロイア遠征軍の総大将、ミュケナイ王、メネラオスはその弟でスパルタ王、共に『イリアス』に現わる、鳥というのはゼウス神の使という鷲のこと。

（3）『イリアス』中のトロイアの老王。

（4）アテナイの将軍であったが、強欲で官物を横領しまた収賄の廉で批難された。

（5）当時の有名な占術者でペリクレスの友としてアテナイで勢力があり、アリストパネスにしばしば攻撃されており、アリストテレスもこれを嘲っている。

（6）紐でしめる仕掛のもの、罠は鼠とり式のバネを用い、掛網は木立の枝にかけ渡した網、かすみ。

（7）アフリカ、キュレネ地方の名産なる植物汁で、鋭い、粘液状のもの。

二八（1）ギリシアでは雲霧などの生ずる下空と、澄明な上空 aither とを区別した。鳥類が占拠したのは、この地表に近接した雲界である。

（2）バビュロンはメソポタミアの有名な古都で、ニネヴェなどと同じく厚い瓦の城壁をめぐらしていた。

（3）ポルピュリオンも共に太古にゼウス神らと統治権を争った巨人神。

（4）三十余年前、前四四八年にデルポイの神殿を恢復するために起こした戦争。

(5) ゼウスによりヘラクレスの母となる、アロペはポセイドンの子ヒッポトンを生み、セメレはディオニュソスを生む。
(6) はり切って通う男神たちの露出した頭に、二一七ページ註(1)参照。
(7) ドリス方言、クレタなどでゼウスのこと。
(8) ニーケーは通例翼あり、彫像にもその姿が多い。エロスも小さい翅をもつ少年として表現される。
(9) デメテルは大地豊饒、禾穀の女神であるから。当時アテナイで民衆政治家が人気とりのため貧民へ施食を約しながら時に果さないのを揶揄したもの。
(10) ゼウスの父神、その統治時代には人間は現在より遥かに幸福な生を送ったという。

二九(1) 健康衛生の女神(厚生か)ヒュギエイアがオリュンポス山上の神界にいるゆえにいう。
(2) プルタルコスの引用によりヘシオドスの説として伝えるところでは、小鴉は人の九世代間生きるとあるを恐らく誤用したものか。
(3) アポロンの有名な神殿あり、その神託ははなはだ尊重された、アンモンの神占も有名で古代にひろく流行した。

三〇(1) ニキアスがシケリア遠征に際ししばしば躊躇して好機を逸したのを諷刺するもの。
(2) アッティカのアンティオキス区に属するクリオアの邑の者、ハリムウス(四九六行)に住居してクリオアの邑民という意か、またクリオス(牡羊)にも縁あり。
(3) イソップ(アイソポス)の寓話はすでに前四七一年に集成として知られたが、これはその前よりアルキロコスの諷刺詩に出ること古註にいうごとくである。
(4) 前出、舞台後見役らしき下僕の名。
(5) 前出、テレウスの妻、すなわちやつがしら鳥の配偶の鶯で、アリストパネスは上演に際し笛吹きの上手を傭い、鳥の扮装をさせて登場せしめたものと推察される。
(6) アクロポリスなるパルテノンの神像のことならんという、一説にはアテナイの贅沢な金銀の装身具をつけた市民の女のことというも無理なるごとし。

三一(1) 短々長の詩律で、もっとも通例な歌曲の調子、これよりすなわちパラバシスの主部なる「言いかけ」に入る。
(2) ホメロスの『イリアス』六巻でトロイアの勇将グラウコスがディオメデスにいう言葉より。
(3) ケオスの人、プラトンのプロタゴラス等にも出る自然哲学者、その宇宙生成説をさす。
(4) ヘシオドスの宇宙説による。
(5) 風を受けた、無精卵をいう。
(6) ヘシオドスの『仕事と日々』四四八行。
(7) ここでは伝説の英雄でなく、当時有名な追剝で、アッティカの近郊に出没した強盗、後にも出る。
(8) いずれもみな神託神占をもって天下に知れた神々や社殿の所在地。
(9) ギリシアでは、鳥に関係のないことでも、前兆、予告、縁起などをオルニスまたはオイオーノス(すなわちとり)と称したのでかくいう、ラテンの omen も鳥より語原をひくというのが通説。
(10) すなわち初夏の候。

三二(1) 小アジアの大地豊饒の女神キュベレのこと、イダ山はその聖地とされた。
(2) アイスキュロスに先行するギリシア悲劇作者、アリストパネスによりいつも称揚された。
(3) 当時流行した闘鶏からの句「さあ、支度しろ」というほどの意。
(4) 前出のエクセケスティデスやアケストル同様の偽アテナイ人、みな外国出身者であった。
(5) プリュギア人と語呂の似たところから、ピレモンもプリュギア人であった。
(6) 前出、悪名高く、ときに杜鵑にたとえられて、次の語あり、子孫という代りに、偽の卵を他の巣へ産み込むけしからん親鳥の同類を集めたらば、という意。
(7) 古註書にも来歴不明の人物であるが、多分アテナイに従属した海外の都市を裏切って敵軍の手に渡したものであろう。
(8) perdix をマケドニア王族に多い名のペルディッカスにかけたもの。「しゃこを極める」とは、この鳥が猟師を巧く欺して狡猾に逃げるのを指すことだという。

(9) トラキアにある大河、今もなおこの地方には鵠などの大群を見るという、この一段、アポロンと白鳥との縁を説く。
(10) ディオニュシアの祭儀に際し、悲劇は午前中に上演され、午後に喜劇があったため、かくいうものと推定されていた（これが三日つづいた）、ところがこれは反対らしい。
(11) 政治屋で議論好きであった、またケサス（糞しどり）と仇名されていたという。

三三(1) 真正のアテナイ人でないと言われた、小商人から籠類の販売で身代を造り立身した人物。
(2) アイスキュロスの『ミュルミドン人』より、『蛙』九三二行にも出る、前者を諷するものなりといわれる（シュレーデル、ヴィルヘルム）。
(3) 椀形に毛を剃り残した髪形で、奴隷の若者などの剃り方だという。
(4) 『ミュルミドン人』より。自分の羽根で射られた鷲の嘆きに、アキレウスが自身をたとえた文句。
(5) 床などに用いる丈夫な綱をつくる葦状の草本、アフリカ、スペイン等に産出する、それとアテナイと当時戦争中のスパルタとをかけたもの、ラケダイモンの首都である。
(6) 貧乏なくせに法螺吹きの人物、「鳥の国」に自分の大財産があるとは、つまり「どこにもない」との意、アイスキネスも同然、『蜂』三四二、四五九行等参照。
(7) ゼウスが治世のはじめ巨人たちの謀反にあったが、とうとうこれを敗北させた決戦場。
(8) アテナのパルテノン神殿にある像をさす、クレイステネスは、アテナイの有力者だったが、女性的なのでいつも喜劇詩人の目の敵にされてる人物、『女だけの祭』参照。
(9) アクロポリスの有史前築造にかかる城壁ペラルギコン（ペラスゴイの、あるいは鸛のとりの）を指す、このところピステタイロスの科白とする説（ロジャース等）あるも、シュレーデルに従う。
(10) 若武者をたたえる詩語を字義どおりにとったもの。
(11) 見張りのために警鈴を鳴らして巡邏する役。

三四(1) 儀式のための供物をいれる籠と手を洗う器。
(2) ソポクレス『ペレウス』の科白になぞらえる、以下みな同然。
(3) アポロン社殿の所在地デルポイの古名、つまりアポロンへの讃歌パイアンのこと。
(4) 当時のあまり上手でない琴唄いでまた笛吹きなりという。『アカルナイの人々』一六、八六六行『平和』九五一行などにも現われる。
(5) 人界の祈禱の定式にならい、まずヘスティア（かまどの女神）をよぶ。
(6) コックに従い二行を入れる。梟はアテナの使鳥、スニオンには有名なポセイドンの社あり。
(7) アテナイの古名、また鸛のとりのこと、あるいはペラギケーすなわち「海の（御神）」との語呂合わせか。
(8) いずれもアポロンの社殿のある地、鵠はアポロンに縁故の深い鳥、アポロンとアルテミスの生母レートーはデロス島で二子を儲けた。
(9) デロスは別名を Ortygia というのでそれにかけてレートーのことを鶉 ortyx の母といったもの、この名は一般に鶉の先達をするという水鶏の名として用いられる。
(10) プリュギアと鳥のひわ phrygilos をかけたもの。
(11) Kybele は通常 magna mater（ラテンでは）と呼ばれ広く信仰された、それと駝鳥を「大きな雀（とり）」いうのをかけた。
(12) 当時のアテナイ人で歩き方が駝鳥に似ていたという。
(13) 祈禱の定句では「わが国民と同盟の民らを」というはずのところ、アテナイの有力かつ忠実な同盟者であったキオス人に好意を示すためという。
(14) 供物の山羊がやせていて肉がほとんどないということ。

三五(1) 『イリアス』一巻三三一行等に見える従者のきまり文句、「まめまめしい、忠実従順な」の意だとされる。
(2) シモニデスは前五世紀前半の有名な抒情詩人、ディテュランボス、合唱歌、処女歌、悼詩いずれにも優れた。
(3) ピンダロスの真似、シケリアの僭主ヒエロンへの歌詞の一部分と見えた(断片一〇五―六)。
(4) ピンダロスの語調を模するもの。
(5) 喜びの歓声なりという。
(6) 警蹕の句、「語をつつしみ口をつぐめ」との意。

(7) 当時流行のバキスの占いとおみくじ解きを業とする男、『騎士』九九七行『平和』一〇五二行参照。

三六(1) 迎える挨拶の語の代りに「吠えろ、喚け」という罵りの語を用いたもの、悪罵、不歓迎の際によく発される。

(2) ボイオティアの古い予言者で、そのおみくじ解きなど当時大いに流行した。

(3) シキュオンはコリントスの隣市で間に余地がない、また狼と鴉とはすなわち人間と鳥のことなりとも説かれている。

(4) pandora　この名前は、施物を貰うつもりに由来するものだという、白羊を享けるところより案ずれば空の新しい神か。

(5) 神に捧げた羊の臓物。

(6) 前出二一七ページ註(5)参照、当時の有名な神宣解き、ディオペイテスも神官で、アナクサゴラスを告訴した者であった。

(7) 当時の有名な天文学者でまた測地術、天文等に通じ暦法を改革した、しかし新文化人の一先達として守旧派の喜劇詩人からはあまり好意を持たれなかった。

(8) 旅行などに用いる底高の深ぐつ、コトルノス。

(9) 前四三一―二年頃にメトンが測時機を市広場中の丘(コロノス)に設立したことを指す。

(10) 燃え残りの炭を消すための半円球形のかまど。

三七(1) 前七世紀後半の最初のイオニア哲学者、エジプトに旅行し測地学や天文に通じたといわれる、「安倍の晴明」というごとく、大知者の意。

(2) スパルタを首都とする国、スパルタではときどき法律をもって逗留する外国人を追放に処したので、外国人の地位はつねに不安定であった。

(3) アテナイがその領土や管理下にある国々に対してこれを監督しその行政等を組織報告するために派遣した役人で、立派な服装をしていた、以下の句を引き出すため。

(4) 外国や外国人の利益や身分を保護代理する役目の者、領事や代理店のようなもの。

(5) アッシリアの有名な国王、服装の仰々しいのと言語の横柄なところからの連想。

(6) 前出、当時のいかがわしい人物、彼の申出によってアテナイから赴任したとの意。

(7) ペロポネソス戦役初期時代のペルシアの太守、彼と交渉中だというので、自分の重要性を示そうとしたもの。

(8) 市民投票のための豆粒を入れる壺。

(9) トラキア地方の一市で、もとアテナイに属していた、単に語呂上より拉し来た名称で、雲居時鳥国をアテナイ領と見なすわけ、「おろおろ人」はその語呂をもじって泣喚の声としたもの。

三八(1) 胸像の下が石柱になっているもの。

(2) ディオニュシア祭の演劇上演に際し、これを利用して会集に種々な公布がなされたので、その事実を転用諷刺に宛てたもの、メロスのディアゴラスは不敬罪と宗教秘儀への干渉をもって弾劾され実際にアテナイから亡命し、お尋ね者となっていた。

(3) アテナイではもう五十年以上も実際に僭主が出たこともないのに、市民はなおつねにこれを恐れてしばしば嫌疑を加えていたので、それを諷したもの。「生きてるのはもういないはずだから、死んだ僭主を恐れ糾弾しようというのだろう」との意。

(4) 前出、これも不敬罪で弾劾されたわけである。「鳥さし国」は出たらめの造語、鳥に対する不敬で、前のディアゴラスとそっくりの文句なことに注意。

三九(1) トロイアの王子アレクサンドロスの別名、イダ山で牧羊中にヘラ、アテナ、アプロディテの三女神現われてパリスに「最も美しきもの」の選定を委嘱し、各自しかるべき贈物を提供してパリスの心をおのれに誘おうとした、パリスはアプロディテを選んでヘレネを獲たこと、ギリシア神話に有名である。

(2) aeton または aetoma は「鷲」aetos の縁語であるが、神社の破風の三角をいうに用いられたところから、こういう。

(3) 不明なる鳥名、穀物の初穂をつむ鳥の類か。

(4) 市中に設立された像(多くは大理石)は鳥類のための汚損を避けるため、多く頭上に月形の小銅板を被っていた、この月形がないと鳥どもが汚すという意。

(5) 羊の内臓、腸のよじれからの吉凶の占いをいう。
(6) 文字通りには「アルペイオスを息吹きながら」。アルペイオスはオリュンピアの傍を流れる河で、つまりオリュンピアの競走にその河堤をかける、そのような息使いで、烈しく馳け込んで来たとの意。
(7) プロクセニデスとテアゲネスの両人は前出、八二二行にある大法螺吹き、邑名は恰好に造り上げたもの。
(8) ヘロドトスなどによく使われている文句を揶揄したもの、怪しいというわけである。
(9) エジプト人が煉瓦や石で巨大な寺院ピラミッド等々を築造したことは周知のごとくである。
(10) 俗間の説に（一四二九行参照）鶴は海上を渡るとき、安定のため石を嚥下して飛ぶと信ぜられた、雲海飛翔に際し着陸の目的で、下界が海か陸かを探知するためともいう。
(11) 古註には「げにも世に手のなし得ざることあらんや」という古諺あり、それをもじったものという。
(12) 家鴨が頸に白い輪のあるのを前垂れをしたものと考えたのである。

三〇 (1) もと武装して楯と槍とを携える勇壮な舞踊だったが、アテナイでは毎年パンアテナイアの祭に赤い合羽を着てこれを踊るをつねとした、『雲』九八八行、『蛙』一五三行等にも出る、「勇ましく意気込んで」との意。
(2) 天界から下空へというものであるが、本来は警固のことゆえ「市の中へ」というのを言い外したところである。
(3) この時分アテナイの友軍として戦ったトラキアの弓馬隊をもじったもの。
(4) パラバシス参照、下空が闇より生まれたというヘシオドスの宇宙生成説を引いたもの。
(5) 諸説あるもいずれも疑わしい、要するにイリスを船の話にもちかけたもので、Kyne は恐らく船のことであろう、一般には「犬皮帽子」で、つまらぬ、平凡な、の意と解される、いずれにせよ「下らぬ卑小のもの」に違いない。
(6) いずれも当時の快速艦、足の疾いというところから持ち出したもの。

三一 (1) 当時関所の査閲のために通行が困難だったのを諷刺したもの、椋鳥は前出の城壁巡視隊である。
(2) 「全く」とか「決して」というのを「ゼウスにかけて」などいったところから、洒落たもの。
(3) このあたり一帯、悲劇の文句をもじって宛てはめたもの、つまり芝居がかりでいう。
(4) アルクメネの義弟であるが、ここでは単にエウリピデスの同名劇中に現われる雷火に撃たれて焼死した者の物語をさすもの。
(5) 以下エウリピデス『アルケスティス』六七五行より、つまりピステタイロスも負けずに芝居がかりで返答をやるわけである。
(6) ソポクレス『アンティゴネ』二行をもじったもの。
(7) 以下おそらくアイスキュロスの『ニオベ』から採ったものと想像される。
(8) 鳥の名で、同時にゼウスに抗して戦った巨人の名であるのを利用したもの。
(9) 手を叩いて追っ払う音だという。

三二 (1) 文字通りには「至福の、祝福された」であるが、つまり神などに用いる尊称である。
(2) スパルタのこと、スパルタでの剛健質樸の風、ソクラテス云々は『雲』八三五行以下を参照。
(3) 以下鳥の所業にかけてアテナイ人の法律狂い、裁判好きを諷刺したもの。これは法規と牧とが共にnomos（アクセントのみ相違）なのを利用。
(4) 書巻とパピュロスの草、すなわち葦の類とにかけたもの。
(5) 投票に用いる白と黒との石を、河原などの小石に見立てたところ。
(6) 調馬師であったという、馬の蹄の内くぼを「つばめ」（形からであろう）というところから、蹄を切り焼く仕事に携った彼をこういうものと考えられる。
(7) 片目でかつ貪欲なことを鴉に類するところよりいう。
(8) この二人の仇名の理由は明らかでない、頭の形とも歩き方ともいう、狐鴨は深い穴の巣を営むので、彼の見えない財産を諷するものか。
(9) 有名なる弁舌家の祖父であろう、脛の長いところよりともいう。
(10) 一五六四行にも「蝙蝠」として出る、顔色が悪く痩せたところからだと。
(11) 当時の弁舌家、おしゃべりなところから。喜劇作家エウポリスは彼の演説を吠える小犬に譬えている。

(12) 当時流行した鶉の競技で、鶉の頭をはじき鳥が圏外へよろめき出ると敗けになる、メイディアスはこの鶉の仕立てをしていたところから、かく揶揄されたものと考えられる。

二三三 (1) ソポクレス『オイノマオス』からだという。

(2) 「高空の」または「下空の」を入れるものもあるが、ここでは海と解した。

(3) ここでは喜悦の懸け声と解される。

(4) アテナイではその時分こういう連中が相当にあったのを諷したものと考えられる。

(5) アテナイの古い立法家たる賢人ソロンの掟に、親を扶養しない子を弾劾してあるのを、鳥に言い換えたもの。

(6) アテナイでは国のための戦死者の孤児を国家が扶養し、大ディオニュシア祭に際して成人した子供に武具と装備を与えて送り出し、劇場の最前列に置いた、この事実に言いかけているものと思われる。

(7) テオグニスの教訓詩八七より。

(8) 当時アテナイはトラキア地方のアンピポリス方面でニキアスの条約後もなお戦闘をつづけていた。

(9) プラトンの『ゴルギアス』五七にも言及されている、当時もてはやされたディテュランボスの詠唱者、喜劇作家からは体の痩せたことや不品行、特異な歌癖などのため、つねに揶揄されている。

二三四 (1) 原義は、とねりこ等の薄い内樹皮を剝ぎ、水に浸して引き裂き、髪結いや紐などの代用に使うもの、薄くやせ細っているのを諷したのである。

(2) ルキアノス『歴史の書き方』三四に「馬鹿を賢人に仕立てるのは、鉛を金に、またレオトロピデスをミロン（有名な運動競技者）にするよりも立派なことだ」とある、つまり痩せ細った人物で筋肉隆々たるミロンの反対、ここでは同時に彼とキネシアスとの相似から持ち出したものであろう、田鳴も同様の意味からと考えられる。

(3) 当時訴訟の流行につれ、他人の非事を実否にかかわらず密告し或いは告訴し、その間に乗じて私利を図るものが多く現われた、こういう人物をSというので、名が無花果 sykon に縁あるところから、しばしばその類語も用いられる（後段参照）、ここに現われ出たのはかなり悪性かつ素寒貧の人物と見られる。

(4) 燕つまり春というのは、畢竟自分の破れて寒風を防ぎ得ない上衣が春を待ちかねる、という意。

(5) 諺に「一羽の燕は春を作らぬ」とあるところから、彼に春を与えるには相当の燕が要るということ。

(6) アイスキュロス『ミュルミドン人』中のアキレウスの句、「武具を、武具を……」というのをもじったもの。

(7) ペレネの競技は冬期に行なわれ、賞品には温い毛の上衣を与えたという、つまり上衣を獲るため、の意。

(8) 召喚者、アテナイ所属のまたは盟邦の島々の住民をアテナイの法廷へ召喚する使者、またその証拠人。

二三五 (1) 古い歌謡よりの句だという。

(2) 前出、鶴が錘りに呑み込んでいる石のこと、この民間流説をアリストテレスは『動物学』で否定している。

(3) アパトゥリア祭の三日目には成年期に達した子供が壮丁となり、髪を切り供えるため理髪店が繁昌し、子供を連れた親爺がここに集まって話題を盛んに交換した。

(4) 七八九行参照、当時の出頭人でこの時分馬車競争で名声を獲得した。

(5) アテナイの盟邦諸島の人間をさす、召喚人はその島々を渡り歩き、被召喚者の不在に乗じ利を占めた。

(6) 鞭で打って廻転させるこま、ぐるぐる堂々めぐりなことを指す。

(7) コルキュラ市の保安係は象牙柄をそなえた大きな皮鞭を携行していた、二枚の革羽根より成るという、それにたぐえての言葉。

二三六 (1) トラキアのケルソネソスにある都市、心臓と同字であるので、それから離れた、つまり「勇気のない」にかけたもの。

(2) 前出二八九行、『蜂』一六行などに現われる人物で、大食かつ臆病の巨大漢、それを巨木に見立てたところ。

(3) 「密告」という語が上述のごとく「いちじくを表わす」とも字義通りに解されるところからかくいう。

(4) 半神の伝説的英雄を指す、また夜中こうした英雄の亡霊に街上で行きあうと、右半身が麻痺して倒れるという伝説があったので、夜を避けるわけで

ある。

(5) 前出、四九八、七一二行等、アガメムノンの子なる古英雄と同名の追剝強盗をかくいったもの。

(6) アイスキュロス『縛られたプロメテウス』のように人間のためつねに配慮するティタン神の一人、ここもそのため登場したもの。

(7) 牛を農事のための犂から解き放す時分、夕刻と解される、ロジャースに詳細なる説明がある、時代な言い方。

(8) プロメテウスとはギリシア語で「前に慮る者」という意であるから、「ひじょうに思慮ぶかい注意だ」「プロメテウスにふさわしいものだ」ということ。

三七 (1) アテナイでは十月頃に行なわれたデメテルの祭、豊饒を祈るものでその三日目の断食日には、アテナイの婦人等がみな断食した、もっぱら婦人連によって行なわれる祭儀で、アリストパネスの喜劇『女だけの祭』はその滑稽を取り扱ったもの。

(2) 前出の外国出身でアテナイ市民になり込んだもの、元来各々の家にはその氏神があった、それゆえ外国出身のものには外国人の蛮夷の氏神が当然あるはず、との論である。

(3) 本劇上演のしばらく前にオドリュシア地方に侵寇した北方の蛮夷で、現今のブルガリア西部に居住したものと推定される、しかも侵入の原因が饑饉で糧食欠乏のためと考えられるというから、いっそう恰好の名前となったわけである。トリバロイは後にマケドニアにも侵入し、アレクサンドル大王、及びその父ピリッポスとも戦った。

(4) epitribeies は悪罵の言葉であるが、ちょうどトリバロイと語呂が幾分相似てるところから、きっとその神にかけた罵言だろうと考えたもの。

(5) 上古の作家ではゼウスの女、または妹とされているが、ここではそれと関係なく純粋に抽象的な統治の観念を神化したもの（女性名詞である）。こうした例はギリシアに稀ではない。

(6) 市民が勤める法廷審判役の日当で三オボロスすなわち三十余円であった、その支払出納役はコーラクレテースと呼ばれ、閉廷とともにこれを各員に付与した。

(7) ペロポネソス戦役の初期頃にアテナイに居住した人物で、人嫌いをもって知られ、この少し前に死去したものと推定される、その伝についてはプルタルコスの『アントニウス伝』、ルキアノスの『ティモン』等参照。

(8) 祭式の行列に際し聖食を入れた籠を運ぶために、毎年アテナイの上流家庭より選出された少女、その付添いとして傘その他を持ち歩く役があったので、プロメテウスをその傘持ちになぞらえたもの。

(9) 熱帯地方に住居すると考えられた想像的人種、四足で歩きその前肢にみずかき様の膜があり、それをかざして傘の代用にするといわれた、ここでは上記の傘の話からの連想によるものであろう。

(10) いわゆるアケロンの沢で、冥界からの河流がここに淀むと考えられた、地の涯にあるというところから前の蔭足人の国に近いというわけ。

(11) ソクラテスはここでは冥界の精霊を呼び出すものとされている、彼がいろんな理念や思想の産婆役をつとめる、というところからであろう。哲学者らがあまり沐浴しなかったことは喜劇作者にしばしば嘲笑されている。

(12) アカルナイの人で、丈が高く臆病者として名があった民衆煽動家、生きながら気を失った意気地なしというわけである。

(13) 『オデュッセイア』の冥界遊歴にまねて、ペイサンドロス相応に、とても丈の高い大きな羊を連れて来て冥界神へ犠牲にささげるのだが、恐さのため途中で逃げだしたというわけ。

三八 (1) 前出のソクラテスの弟子、『ソクラテスの弁明』『雲』等に現われる、陰気な相貌、蒼白な血色から夜の子といわれ、すなわち蝙蝠に比された、この「鳥」は血を吸うと考えられていた。

(2) 「右手へ」という語はまた一方では「上手に」という意味に用いられるので、それを利用した洒落。

(3) 前四一四年にスパルタへ侵入したアテナイ軍の一将であるが、脛がはなはだ痩せていたので、つねに衣を長く垂らしてこれを隠そうとしていた。

(4) Silphion の意訳、アフリカ産の草本から採った甘い調味料の液体、また草を擦ったものも使う。

(5) この科白を家僕の言とする学者もあるが、ここだけなので採らず、ピステタイロスは気に入らぬ神々の文句をわざと聞こえない振りで料理をもってヘラクレスを誘惑しようと努める。

(6) 冬至の前後各七日にわたり、かわせみの孵卵期としてゼウスがその間波

風を止めると称された、かわせみは大洋中の海面に巣を営むといわれていた、つまり無事平穏の凪（なぎ）の日をいう。

二三九（1）トリバロス神の言葉はいわゆる鴃舌で明瞭でないが、つまりギリシア語を下手に言ってるものと考えられる、ここのは恐らく「三人とも異存なし」ということだろう。

（2）古註のいうところでは「神々は待たされるが欺くことはできない」という諺があった、それをここで悪用しようというわけ、神々は辛抱強く待ち忍ぶから、も少し放っておこうとの意。

（3）これも鴃舌であるが「お前の皮を杖で打ちのめすぞ」ということらしい、ヘラクレスの脅迫に対し怒ったもの。

（4）当時のアテナイの法律では、出生児の生母が外国籍の者であるときは、その子は、充分な市民権をもつことができなかった。ここで嫡子とか庶子とかいうのはその意味で、すなわち生粋のアテナイ市民権を享受する子女と、半外国人として享受できない子女とを指す。ヘラクレスの生母は人間のアルクメネで神でないから、従ってヘラクレスは神の国にとっては庶子であり、充分な相続権を有しないこととなる。

（5）当時アテナ女神の神号の一つに「世嗣ぎのアテナ」というのがあったことにかけたもので、ヘラクレスが庶子のため女ながら世嗣ぎになれた、との意。

（6）前七世紀末のアテナイの政治家で立法者、七賢人の一とされる、次の項はだいたいそれを模したもの。一六六二行は後世の挿入らしい。

二四〇（1）アテナイの旧家およびその一党は各自一の郷党を作り、これに参加を許されることは家柄のよさを証するものとされていた、この事実を人界ならぬ神々の世に移したもので、ゼウスが彼を郷党の会合へ一度も連れてって馳走してくれたことがないのはおかしい、というわけ。

（2）「ずっと前から」との別読もある。

（3）「綺麗な尊い娘の統治権を鳥どもに引き渡そう」ということらしい。

（4）この一行ははなはだしい争論の的となり種々の見解が提出され、表現がその通り曖昧で不完全であるが、ロジャースは上のごとく解し古註釈者も同一意見で筋も通るためこれを採ることとした。

（5）仮想的な地名、漏水とは法廷で弁士の各持時間を測定する水時計であるが、また一般に泉のことも指すので、アテナイへ来て弁舌をもって生計を立てる外国生れの弁説家が、法廷に巣食うことを、泉の傍といったもの。

（6）例の告発や密告者のこと。

（7）有名なる修辞学者でイタリア、レオンティノイの人、プラトンに出でる。このころアテナイを訪いシラクサ遠征の実行に与って力があった、ピリッポスはその子か弟で同伴者、『蜂』四二一行等参照。

（8）犠牲を献げるに際して、一般の解体に先だちまず別に舌だけを切りとる習いがあった、『オデュッセイア』三巻三三二行などにその例が見える、それを舌癖の悪い奴らの懲罰として持ち出したもの。

二四一（1）アテナイでの祭式行列に際して群集を掻きわけて行列を進めるための掛け声を模した句で、ここでは周囲の鳥群に指図するもの。

（2）女バシレイア（統治権）のこと。

（3）この科白を報道者の言とする学者もあるが、ピステタイロスの方が自然である、前の合唱で彼がバシレイアとともに輦を進めて登場したことはだいたい明らかだから。

（4）「王座を共に分かつ、共に統治する」の意。

二四二（1）勝鬨をいわう悦びの掛け声で「いえ、ぱいおーん」はもとアポロン神への頌歌にそえる呼号であったが、ここでは単に凱旋と幸先をいわう歓声であって、ピステタイロスと同時に作者アリストパネスの勝利を祝おうとするもの。

女の平和

登場人物

リュシストラテ　アテナイの若くて美しい夫人。
カロニケ　同右。
ミュリネ　同右。
ラムピト　ラコニアの若くて美しい夫人。
その仲間大勢
婦人警官
老爺のコロス
老婆のコロス
最高参議官の役人
巡査数名
ストラテュリス　老婆のコロスの一人。
アテナイの女　甲・乙・丙・丁・戊
キネシアス　ミュリネの夫。
その子供
その奴隷マネス
ラケダイモン人の使者
ラケダイモン人の使節たち
アテナイ人の使節たち
市場の連中数人
門番
その下役
ラコニア人

舞台

アテナイのアクロポリス正門前。

〔アテナイ市の城山（アクロポリス）へ通ずる城門（プロピュライア）の前。明け方。若くて美しいアテナイの婦人リュシストラテ〕

リュシストラテ　〔独白〕ほんにお酒の神さま[1]のお社に呼ばれたか、パン[2]か愛の女神のコリアスさまかゲネテュリスさま[3]のお社にだったら、手太鼓の群れのため通行さえできないところなのにねえ。ところが今はたった一人の女の人さえここにいやしない。と思ったら、ほらあそこにご近所の女（ひと）がやって来たわ。〔カロニケ、登場〕

カロニケさん、ご機嫌よう。

カロニケ　ご機嫌よう、リュシストラテさん。どうしたの、苦虫面（にがむしづら）はおよしなさいよ、ねえ。瞋恚（いかり）のまなじりなんてのはあんたには似合わないわよ。

リュシストラテ　だって、カロニケさん、あたしは胸のなかが煮えくりかえる、そしてわたしたち婦人のために心を痛めているのよ、だってね、男たちの考えではあたしたちは悪賢い悪党だってさ。

カロニケ　だってほんとうにそうよ。

リュシストラテ　それなのに、大切な用事で相談がありますから、ここにお集まりくださいって言っといたのに、眠っていて来やしない。

カロニケ　いいえ、来るわよ。女の人には外出はなかなかむつかしいのよ。ご主人の世話で時間がつぶれるし、召使を起こしたり、子供を寝かしつけたり、洗ってやったり、おまんまを食べさせたり。

リュシストラテ　だって、それよりもっともっと大事なことがあるんだもの。

カロニケ　そりゃ何なのよ、リュシストラテさん、わたしたち女をあんたが呼び集めたその問題は？　どういうことなの？　大物[4]？

リュシストラテ　大きいわ。

カロニケ　そして太い？

リュシストラテ　ええ、たいした太さよ。

カロニケ　それじゃどうして来ないんだろうね？

リュシストラテ　そんなことじゃないのよ。そうだったらさっさと集まって来ているわよ。そんなことじゃなくて、これはあたしが考え出した計画なの、幾晩も幾晩も眠りもやらずにあっちへ投げこっちへ投げして。

カロニケ　あっちへ投げこっちへ投げじゃ、何かちっちゃいものね。

リュシストラテ　そうよ、あまりちっちゃいんで、ギリシア全体の救済が女の人たちの肩にかかっているというわけなの。

カロニケ　女の人の肩にだって。心細い肩ね。

リュシストラテ　この国の運命があたしたちにかかっている、それからペロポネソスの人たちの存否。

カロニケ　なあに、それなら、いなくなったほうがいいわよ、ほんとうに[5]。

リュシストラテ　それからすべてのボイオティア人も破滅に陥る。

カロニケ　みんなじゃ困るわ、鰻（うなぎ）[6]は別口にしてくださいな。

リュシストラテ　だがアテナイに関しては、こんなことは言わないでおきましょう。だけどわたしの心のなかを察してください。女の人たち、ボイオティアやペロポネソスの方々、それにわたしたちがここに集まったら、みんないっしょになってギリシアを救うことができるでしょう。

カロニケ　だって女にどんな賢いすばらしいことができるというのよ。顔を塗り立て、サフラン色の着物[7]を身につけ、飾り立てて、透きとおった薄い衣裳に、派手な靴のあたしたちに。

リュシストラテ　それがすなわち救いの神だ、とあたしは思うのよ。サフラン色の着物に香料に派手な靴に紅（くれない）に透きとおった肌着が。

カロニケ　はてね、どうして？

リュシストラテ　今の世の男の人たちがお互いにむかって矛（ほこ）を取ることがないようになるでしょう。

カロニケ　それじゃあたしは、二柱の女神さま[8]に誓って、サフラン色に

染めましょう。

リュシストラテ　そして楯を手にすることがなくなるでしょう。

カロニケ　あたしゃ薄い衣裳を着ましょう。

リュシストラテ　剣も。

カロニケ　派手な靴を買いましょう。

リュシストラテ　だからさ、女連中がここに来るべきでしょう？　ね？

カロニケ　それどころか、ゼウスさまにかけて、とっくの昔に飛んで来るべきだわよ。

リュシストラテ　だけれど、ねえ、あの連中がほんとうにアッティカ式[1]だってことが今にわかるわよ。なんでもかんでも手おくればかり。浜(パラ)区(リア)[2]の女も一人も来てやしないし、サラミスからも。

カロニケ　なあに、あの連中は間違いなく朝早く伝馬(てんま)[3]にのって海を渡っているわよ。

リュシストラテ　それから、いの一番にここに現われるだろうと思ってあてにしていたアカルナイの女の人たちも来やしない。

カロニケ　しかしテアゲネスの奥さん[4]は、ここに来るつもりで、ヘカテさまの神棚に吉凶[5]をお尋ねしましたとさ。

［アナギュルス区のミュリネ、これにつづいてほかの女たち登場］

だけど、ほら、誰かこっちへ来る、それからほら、また別に誰かやって来るわ。くさい、くさい、どこの人たちでしょうね。

リュシストラテ　アナギュルスの方よ。

カロニケ　ほんとに、じゃ、とにかくアナギュルスを動かしたというわけね。

ミュリネ　おそかった？　リュシストラテさん。ねえ、どうなのよ、どうして黙っているのよ？

リュシストラテ　感心しないわね、ミュリネ、こんな重大事件に今ごろ来るなんて。

ミュリネ　まっくらななかでなかなか帯がみつからなかったのよ。だけど、火急の用なら、さあ、あたしたちここにいる者に話してよ。

リュシストラテ　いいえ、少しのあいだ待ちましょう。ボイオティアとペロポネソスの方たちが来るまで。

ミュリネ　そう、そのほうがいいわ。ほうら、あそこにラムピトがやって来るわ。

［スパルタのラムピト、仲間の女たちとともに登場］

リュシストラテ　まあ、ラコニアのラムピトさん、ようこそ。なんてあなたは美しくていらっしゃるんでしょうね、大好きな方。健康そのものの美しい肌[6]、身体じゅうの筋肉がぷりぷりしているわ、牡牛だってしめ殺せそうね。

ラムピト[7]　二柱の男神さまにかけて、ほんとにそう、運動して、尻蹴り跳びをやるのよ。

リュシストラテ　まあ、見事なお乳をもっていらっしゃること！

ラムピト　まるで神さまにあげる獣みたいに私を撫でまわすのね。[8]

リュシストラテ　ここにいらっしゃるも一人の若い方はどこの方？

ラムピト　二柱の男神さまにかけて、ボイオティアの女大使としてあなた方のところへ来た人です。

リュシストラテ　まあ、ほんとに美しいはらをもっておいでねえ、ボイオティアさん。

カロニケ　ほんとに！　きれいに草が抜いて掃除してあるわ。[9]

リュシストラテ　も一人の女は誰？

ラムピト　二柱の男神さまにかけて、よか女子よ、コリントスの方。[10]

リュシストラテ　ほんとによか女子ね。間違いなしだわ、［と指ざして］ほら、ここのところが。

ラムピト　誰がいったいこの女の集りを召集したのですか？

リュシストラテ　それはわたし。

ラムピト　なんのためかわたしに話してくださいな。

ミュリネ　ほんとに、ねえあんた、いったいその大切なことってなんだか話してよ。

リュシストラテ　話すわ。だけど話す前にあなた方にちょっとしたことが聞きたいのよ。
ミュリネ　なんなりとお望みしだい。
リュシストラテ　戦争に出ていて留守のあなた方の子供のお父さんを恋しいとは思いませんか。あなた方の旦那さまが外国に行っていらっしゃることをわたしはようく知ってますからね。(一〇一)
カロニケ　そうよ、うちの人は、なさけないったら、五ヵ月間トラキア[1]に出かけて留守、それも番をしてんのよ、エウクラテスのね。
ミュリネ　わたしのはまる七ヵ月ピュロスに行ったきりよ。
ラムピト　わたしのは戦争から帰って来たと思うと、楯に紐をつけて[2]、さっさとふっ飛んで行っちゃったわ。
リュシストラテ　そうよ、色男の影さえ残ってやしない。ミレトス人[3]がわたしたちを裏切ってからというものは、八本指の長さの革袋[4]さえお目にかかったことなしよ。もっとも頼りない嘘の皮のお助けだけれどね。だけど、もしこのわたしが方法を発見したら、あなた方はわたしを助けて、この戦争を終らせるのにひと肌ぬいでくれる？
ミュリネ　もちよ。わたしはやるわよ、たといこのマントを脱ぎ捨てて、今日ただいま……ぐっとのみほさなくっちゃならないとしてもね[5]。
カロニケ　わたしはね、まるで鰈(かれい)[6]のように身を二つに裂いて、半分を喜んで提供するわよ。
ラムピト　わたしはね、平和が見えるというのなら、タユゲトス[7]の頂上にだって行くわよ。(一一八)
リュシストラテ　話すわ、これはかくしておくべきではありませんからね。みなさん、わたしたちは、もし男たちに平和をどうしても結ばせようと思うなら、清浄に保たなくてはなりません。
カロニケ　何から？　言ってよ。
リュシストラテ　あなた方やる？(一二三)
カロニケ　やりますってさ、たとえ死ななくっちゃならないったって。
リュシストラテ　それじゃ言いますよ、わたしたちは身を清浄に保たなくてはなりません、男から。おや、どうして顔をそむけるの？　どこへ行くの？　あんたたちどうしてへの字口でいやいやしているの？　どうして顔色が変ったの？　どうして涙を流すの？　やる、それともやらない？　どうしようっていうのよ？
ミュリネ　いやなこった、戦さが続いているほうがいいわ。
カロニケ　わたしもまっぴらごめんだわ、戦さが続いているほうがいいわ。(一三〇)
リュシストラテ　よくもそんなことが言えるのね、鰈さん。たったいま身体を半分に裂いてもいいと言ったくせに。
カロニケ　ほかのことなら、なんだっていいけれど。必要とあらば火のなかだって歩くわよ。そのほうが男からなんとかよりはましだわ。こんなことってないわ、ねえ、リュシストラテさん。
リュシストラテ　〔ミュリネに〕じゃああなたは？
ミュリネ　わたしも火のなか組よ。(一三六)
リュシストラテ　あきれた、わたしたち女性ったら、みんな助兵衛ばかりだわ。お芝居がわたしたちを題材にするのも道理だわ[8]。わたしたちと来た日には、色男と棄て児にあけくれている。けど、ねえラコニアさん、もしたった一人、あなたがわたしに味方してくれれば、まだ望みがありますよ、わたしに賛成してね。
ラムピト　ほんとに、二柱の男神さまにかけて、女が男なしにひとりでいるのは、これはむつかしい。けれど、仕方がないわ。平和が緊急必要事ですものね。
リュシストラテ　まあ、大好きな方、あなたはここにいる者のなかでたった一人のほんとうの女子よ。(一四五)
カロニケ　だけど、もしあんたの言うものから身を清浄に保ったら、――くわばらくわばら、こんなことはありませんように――そのおかげで平和が促進されるの？
リュシストラテ　大いによ、誓うわ。わたしたちが家でお化粧して坐っていたり、アモルゴス[9]製の透きとおる肌着を着て、身体じゅうまる見

えで、例のところは毛を抜いて、きれいにして、そばを通ってごらんなさい、男たちはいきり立って、からみつきたいと思うでしょう、ところがよ、わたしたちはそれに応ぜず、知らぬ顔の半兵衛さんをきめこめば、大急ぎで休戦条約よ、きっと間違いなし。（一五四）

ラムピト　ほんとに、メネラオスは裸のヘレネの玉のお乳をちらっと横目でみて、もう刀を投げ出しちゃったわね[1]。

カロニケ　だけどもし男たちがわたしらを捨ててしまった日にはどうするのさ。

リュシストラテ　なあに、ペレクラテスの言葉のとおりに、皮のむけた犬をむくのよ[2]。

カロニケ　そんな贋物はだめよ。だけど、もしわたしたちをとっつかまえて、寝室にむりやりに引っぱりこんだら？

リュシストラテ　扉にしがみつくのよ。（一六〇）

カロニケ　ぶったら、どう？

リュシストラテ　仕方がない、しぶしぶ従うのよ。暴力で得たものには楽しみはなし、そのうえに、苦痛を伴うこと必定ですからね。なあに、すぐにやめるわよ。女と協力しなければ、男はけっしてけっして愉快にはなれないんですからね。

カロニケ　あなた方二人がそう思うのなら、わたしたちも賛成するわ。

ラムピト　まったく正しく偽りなしに平和を結ぶように、わたしたちも主人を説き伏せましょう。ですが、アテナイの浮き草のような民衆をどういうぐあいに、馬鹿げた真似をしないように説き伏せられると言うの？（一七一）

リュシストラテ　心配ご無用、わたしたちが自分のほうは説き伏せますよ。

ラムピト　だけど、あなた方の三重艪（ろ）の軍艦が戦闘準備されていて、女神さまのお社に無限のお金[3]があるあいだは、だめよ。

リュシストラテ　その点も手ぬかりなし、今日城山（アクロポリス）を占領する[4]ことになっているのよ。年寄の婦人たちにこの仕事が命ぜられているの、わたしたちがこのことを協定しているあいだに、犠牲をあげるふりをして城山（アクロポリス）を占領することが。

ラムピト　万事うまくゆきそうね、あなたの言葉はこの点でもすばらしいもの。

リュシストラテ　それじゃ、ラムピト、さっそくみんなで、誓いましょうよ。この計画が破れることがないように堅めの誓いを。（一八〇）

ラムピト　それじゃ誓いをするように、誓いの言葉を教えてよ。

リュシストラテ　いいわ、婦人警官（スキュタイナ）[5]はどこにいる？〔と婦人警官に〕何をぼんやりしているのよ、さあ、ここに楯をさかさに置いて、それから犠牲（いけにえ）の獣の肉切れをください。

カロニケ　リュシストラテさん、どういうことをわたしたちに誓わせようというのよ。

リュシストラテ　どういうですって？　ほら、アイスキュロスのお芝居[6]のなかでやったというように、楯のなかに仔羊[7]の喉を切って血を注ぎ。

カロニケ　だめよ、リュシストラテさん、平和に関する誓いに楯はだめよ。（一九〇）

リュシストラテ　それじゃ何にすればいいの？

カロニケ　白馬[8]をどこからか手に入れて、切りきざめばね。

リュシストラテ　白馬ですって？　だめよ。

カロニケ　それじゃ、どういうぐあいに誓いをしますかね。

ミュリネ　よければわたしが言ったげるわ。大きな黒い盃を仰向きに置いて、タソスの島の酒甕（さかがめ）[9]を仔羊に見たてて殺し、誓うのよ、盃に、けっして水は入れません、てね。

ラムピト　まあ！　なんてすばらしい誓いだこと。

リュシストラテ　盃と酒甕をもっておいで。

〔女が舞台へ酒甕と巨大な盃とを持ってくる〕

カロニケ　まあ、みなさん、なんて大きな瀬戸物でしょうね。これを〔と盃を指して〕手にするだけでもぞくぞくするわ。（二〇一）

リュシストラテ　〔婢女にむかって〕その盃を下に置いて、猪[10]を取って

おくれ。おお、かけまくもとうとき説得（ペイトー）の婢女（ひめ）に愛のかための盃よ、
わたしども婦人の味方としてこの犠牲（いけにえ）をうけたまえ。

〔召使、酒を注ぐ〕

カロニケ　血の色はよし、見事にほとばしるわ。[1]

ラムピト　カストルさまにかけて、ほんとにすばらしい匂いだわ。

ミュリネ　みなさん、わたしにいの一番に誓わして。[2]

カロニケ　愛の女神の御名にかけて、順番にあたらなけりゃ、だめだめ。[3]

リュシストラテ　みんな盃に手をかけて、さあラムピトさん、そして一人があなた方の代表で、わたしの言葉をくり返すのよ、そしてあなた方は同じことを誓って、これをかためるのよ。

〔と誓文を唱える〕

色であれ夫であれ、どんな男も、

カロニケ　色であれ夫であれ、どんな男も、

リュシストラテ　わたしにいきり立って近づくことなし。さあ言って。

カロニケ　わたしにいきり立って近づくことなし。ああなさけない、腰が抜けちゃうわよ、リュシストラテさん！

リュシストラテ　家では牡なしの生活、

カロニケ　家では牡なしの生活、

リュシストラテ　サフランの衣にお化粧して、

カロニケ　サフランの衣にお化粧して、

リュシストラテ　夫がわたしに色欲の焔を燃やしますように。

カロニケ　夫がわたしに色欲の焔を燃やしますように。

リュシストラテ　それからけっして夫に喜んでは従わない。

カロニケ　それからけっして夫に喜んでは従わない。

リュシストラテ　いやがるわたしを無理強いにしたら、

カロニケ　いやがるわたしを無理強いにしたら、

リュシストラテ　容易には身をまかせず、うまく調子を合わせてやらない。

カロニケ　容易には身をまかせず、うまく調子を合わせてやらない。

リュシストラテ　天井にむかってスリッパーをさしあげません。

カロニケ　天井にむかってスリッパーをさしあげません。

リュシストラテ　チーズけずりの上についてる牝ライオン式に立ちません。[4]

カロニケ　チーズけずりの上についてる牝ライオン式に立ちません。

リュシストラテ　この誓いにそむかなければ、お酒が飲めますように、

カロニケ　この誓いにそむかなければ、お酒が飲めますように、

リュシストラテ　これにそむけば盃が水で満たされますように。

カロニケ　これにそむけば盃が水で満たされますように。

リュシストラテ　〔一同に〕あんた方みんなこれに同意して誓いますか？

ミュリネ　ええ、誓います。

リュシストラテ　さあ、わたしがこれを頂きましょう。〔と飲む〕

カロニケ　おすそ分け願いまあす。まず最初からお互いに仲よしになるようにね。

〔遠くで女たちの声がする〕

ラムピト　おや、あの騒ぎは？

リュシストラテ　あれは、ほら、わたしの言ったことよ。女たちが女神さまの城山（アクロポリス）をもう占領したんだわ。[5] さあ、ラムピトさん、あなたは行って、あなたのほうのことをうまくやってちょうだい、ですが、ここにいるこの女（ひと）たち[6]は人質にここに残しておいてください。わたしたちはなかに入って、城山にいるほかの女（ひと）たちと力を合わせ、閂（かんぬき）をかけましょう。

カロニケ　だけど男たちがすぐにわたしたちにむかって来るとは思わない？

リュシストラテ　あんな連中なんかへっちゃらよ。嚇（おど）しだろうが火だろうがだめ、この扉を金輪際開けることはできやしない、わたしたちの出した条件でなきゃ。

カロニケ　愛の女神さまにかけて、ぜったいにいやよ。でなきゃ、無敵のあばずれ女というわたしたちのその名は、伊達になるわ。

〔女たち城山に入る。ラムピトはスパルタさして出発。やがて男女のコロス、登場〕

男のコロス[1]　進め、ドラケス[2]、足ふみしめてしっかりと、お前の肩がオリーヴの生木の重さに痛もうとも。
ほんに、長生きすれば不思議なことに出会うものよ、こりゃ、ええ、おい、ストリュモドロス、前代未聞だ、
　家のなかでの疫病神の
　女の奴らが
ご神像をばさし押え
城山(アクロポリス)をば占領し
閂や丸たん棒で
御門をばかためようとは。
さあ急げ、城山さして大急ぎだ、おいピルルゴス、この事件をおっぱじめ、やった女の奴めらの囲りに、ほら、この丸たん棒をぐるりと並べて、おれさまみずから手を下し、一つの山に積み重ね、焼いてやろうぜ、一人残らず、たった一度の投票[3]でだ、まず第一にリュコンの嬶(かかあ)[4]だ。
　このおれさまが生きているうちは、デメテルの御名にかけて、ただではおかぬぞ。昔初めて城山を占領したクレオメネス[5]も、
　無傷で退去するどころか
ラコニア風に威張っちゃいたが
よろいかぶとを引き渡し
なさけなや、シャツ一枚のすってんてん
垢だらけ、ぼろだらけ、百日鬘(ひゃくにちかずら)の頭して、
六年(むとせ)のあいだ風呂なしだ。
これほどすごくこのわしは、あの野郎をば包囲した、十七重(え)にも取り巻いて、御門の前に野宿して。それなのに、エウリピデスと神々の仇敵(あだがたき)なるこいつらにこのおれさまが目の前でこんなとんでもないことをするのを許すというのかい。そんなことなら、四カ村に立ってるわしの戦勝碑(トロフィー)は消えてなくなれ。
だが道中はまだまだ長いぞ、
わしの急いでいる目的の
あの城山の鼻べちゃ坂[6]よ、
驢馬なしにこいつを引っぱり上げるには、
はてどうしたもんじゃろう。
この二本の丸太めはわしの肩をばしめつける。
とはいえ先に進まにゃならぬ、
そうして火をば吹かねばならぬ[7]。
せっかく道中終りになって、知らぬあいだに消えちゃっちゃ、こりゃ台なしだ。
フウ、フウ、

〔と老爺たちは壺に入れて消えないように大切にもっている火種を起こすべく吹く〕

こりゃたまらん、煙いわ煙いわ。
こりゃひどい、南無三八幡大菩薩！
壺のなかからわしにむかって飛びかかり、
まるで気違い犬みたいに、眼に噛みつきおる。
こりゃレムノスのご神火[8]だ、
まったくひどいね、たしかにさよう。
さもなくば、わしの目くそにこのように手ひどく噛みつくわけがない。
進めや急げや城山へ、
女神さまをばお助けしろ、

今こそ、ラケス[1]、女神さまをばお助け申すべきときぞ、
フウ、フウ、
こりゃたまらん、煙いわ煙いわ。

ありがたや、ありがたや、神々のご加護をもってこの火種が起きてきて生きいきとしているわい。それじゃここにまず丸太をおいて、葡萄の枝の炬火(たいまつ)[2]を壺のなかに押し込んで火をつけて、それから扉[3]に牡羊[4]のようにぶっつかってゆこうかい。わしらが呼んでも女どもが門をはずさぬそのときには、扉に火をつけ、煙でもっていぶさにゃならん。さあて、荷物を下ろそう。煙いわ、こりゃたまらぬ。サモスにござる大将[5]たちの誰が丸太に手を貸してくれるかな？　この丸たん棒め、やっとわしの背中を圧し潰さなくなったわい。炭をおこすのは、壺よ、お前の役目だよ、火のついた火を一刻もはやくわしにおくれ。ああ、勝利(ニケ)の女神さま[6]、わしたちが城山にいる女どもの、あの生意気な出す[7]ぎた仕業を打ち破り、勝利の記念を打ち建てるのにご助力くだされえ。

〔女のコロス、水甕を肩に城山の北面より登場〕

女のコロス　なんだか渦巻く火煙りが見えるようだよ、皆さん方、まるで火が燃えているかのように。さあ急ぎましょう。

飛んで行け、行け、ニコディケ[8]、
カリュケとクリテュラ[9]のお二人が
火に包まれて焼かれてしまうよ、
むごい法(おきて)の手にかかって、
くそ爺(じい)どもの手にかかって。
だが心配だわ、間に合わないんじゃないでしょうか？
朝早くやっとのことで水甕に水をみたした、泉から、いや水甕の混雑、物音、その騒ぎときた日には、
女奴隷の悪党どもに
もまれながら、すばやく
持ち上げ、火あぶりに
なってるわたしのお仲間に
水を持って助けに来ました。
それというのも聞いたからさ、
よぼ爺どもが丸たん棒を
風呂のお釜に焚くみたように、
何十貫目も重いのをえっちらおっちら
すごい嚇しの文句を並べて、やって来たとね。
けしからん女どもを黒こげにせにゃならんとさ。あの女(ひと)たちが、ああ女神さま、焼かれませんよう、いいえ、それより戦さと狂乱からギリシアと市民を救い出しますよう、
このためですのよ、黄金なす
飾毛ゆたかな御兜頭(おんかぶとかしら)に頂く御女神[10]、
あなたの御座(みくら)[11]をわたしどもが占めましたのは。
トリトゲネイアよ、あの女(ひと)たちを男どもが
焼こうとしたら、わたしどもの水運びの
味方におなりくださいまし。

とまれえ！　こりゃなんじゃ、〔と男どもに〕悪党の大悪党の男たちめ、立派な人なら、神を崇(うやま)う人ならばこんなことはしないでしょうものね。

男のコロス　これは思いがけないことになったぞ、女どもが蜂の群れのように戸のなかから援けに出て来るぞ。

女のコロス　どうしてわたしたちに尻ごみしてるのさ。わたしたちはごらんのとおりの小勢だからね。あんたの見ているのは、まだまだわが軍勢の一万分の一ぐらいのもの[12]なんですよ。

男のコロス　おい、パイドリアス、女郎(めろう)どもにこんなことをしゃべらしとく気か？　女どもを棒でぶんなぐって、背中を叩きのめしてやらな

きゃ。

女のコロス　わたしらも甕を下におろしましょう。誰か手を出したら、これが邪魔にならないように。

男のコロス　こいつらの頬っぺたを二つ三つ、ブパロス[1]の頬っぺたみたいに、ひっぱたいてやったなら、ぐうの音も出なくなるのになあ。

女のコロス　ふん、打ってごらんよ。わたしゃじっとしていて、なぐられてやるよ。そのかわりお前の睾丸のご馳走は外の牝犬には食えないようにしてやるぞ。

男のコロス　黙れ、でなきゃあ、老耄婆め[2]、叩きのめすぞ。

女のコロス　〔近づいて〕ほんのちょっと、指先でも、ストラテュリスにさわってごらん！

男のコロス　なんだって、拳骨でぶちのめしたら、どうしようってんだ？

女のコロス　食いついて、肺臓とお腹のなかのものを引きずり出してやるから。

男のコロス　エウリピデスはまことに衆にすぐれた詩人だな、「女ほど恥知らずなけだものは、この世にはいませぬぞえ[3]」だ。

〔男どもは女の激しさに怖れをなし、ストラテュリスに手を出すのはやめにして、また火のほうに取りかかる。女どもは、一方、下に置いた水甕（三五八行）を取り上げる〕

女のコロス　さあ、ロディッペ[4]さん、水甕を取り上げましょうよ。

男のコロス　神さまのかたきめ、なんだって水なんか持って来やがったんだ。

女のコロス　墓石の化物め、なんだって火を持ってきた？　自分に火をつけるためかい。

男のコロス　わしはね、火葬壇を築き上げ、お前のお友達を焼いてあげようというのさ。

女のコロス　わたしはね、お前の火葬壇をこれで消してあげようというのさ。

男のコロス　わしの火を消す？

女のコロス　論より証拠、すぐみせたげるよ。

男のコロス　この女郎、このここにある炬火でお前を天ぷらにしてやるぞ。

女のコロス　シャボンを持ってりゃ、お風呂に入れたげるよ。

男のコロス　わしに風呂だと、このくされ婆め。

女のコロス　それもね、お嫁さん用のおめでたいのさ[5]。

男のコロス　あの女郎の生意気を聞いたか？

女のコロス　わたしゃ自由な市民ですよ。

男のコロス　今に舌の根を止めてやるぞ。

女のコロス　ところがお前の裁判役はもうおしまいだよ[6]。

男のコロス　女郎の髪の毛を焼いてしまえ。

女のコロス　さあ、竜神さん[7]、やった、やった。

〔と水を浴びせかける〕

男のコロス　こりゃたまらん。

女のコロス　ええ、温かいかえ？

男のコロス　温かいだと？　やめてくれ、何をするんだ。

女のコロス　芽が出るように水をやってるのさ。

男のコロス　ところがわしは胴震いでしなびちゃった。

女のコロス　それじゃ火があるんだから、自分で暖まったらいいでしょう。

〔最高参議官の役人[8]、警官を伴って登場〕

役人　女どもの気まま勝手が、どんちゃん騒ぎ[9]が、酔っ払いの神様騒ぎ[10]が、屋根の上でのアドニス嘆き[11]が、おっぱじまったか。そいつをわしはいつだったか民会にいて聞いたことがある。あのデモストラトス[12]——とんでもない野郎だ——がシシリアへ遠征しようと提案したとき、女どもは踊りながら、「ああアドニス」と言っていた。ところでデモストラトスめ、ザキュントス[13]の重甲兵を募集しようとぬかしおった。

ところが屋根の上のあの女は、ほろ酔い機嫌で、「おいたわしや、アドニスさま」と言いやがった。ところであの神々の憎まれ者、穢(けが)らわしい肝癪玉め、横車を押しとおし、提案通過だ。女どもの無恥無慙(むざん)はかくのごとしだ。(三九八)

男のコロス　こいつらの増上慢がわかったからって、どうだというんだ。それも数々あるうちで、わしらに水甕からざあっと一風呂あびせやがった。おかげで大事なこの着物は、小便をたれ流したのとそっくり、ほうら、しぼれるわさ。(四〇二)

役人　海神[1]さまの御名にかけて、当然の罰だ。わしども男が女どものわがまま勝手を助長して、甘やかしほうだいにしていれば、とんでもないこんな考えも浮かび出そうというものさ。その男どもたるわしたちは、職人の店でこんなことを言っている。

「金細工屋、お前さんの造ってくれた首飾りだが、夕方私の細君が踊っているまに、男金(おがね)が女金(めがね)から落ちちゃった。私はサラミスに行かねばならん。暇があったら夕刻に間違いなしにやって来て、彼女(あいつ)に男金をはめてやってくれ」(四一四)

　ところがこんどはほかの男が、靴屋の小僧に——子供に似合わぬ大きな物の持主だ——「おい靴屋、家内の足のかわいい指をサンダルの紐がいためている。なにしろ華奢(きゃしゃ)にできてるんだ。こいつを、だから、お昼にやって来て、もっとゆっくりなるように、拡げてやってくれ」

　こういうぐあいに、なかなかもって容易ならん事態に立ちいたっておる。このおれさま、最高参議が櫂(かい)用の木材を手に入れて、今や金が入用というのに、[2]わしは女どもに締め出しを食っている。ぼんやり立ってるときではないぞ！　さあ棒をもって来い、あいつらの増上慢をこのわしが止めてやるぞ。(四二五)

〔と巡査にむかい〕何をぽかんと口を開けてるんだ、死に損いめ、それからお前は、〔と、もう一人のほうにむかって〕どこを見てるんだ。居酒屋ばかりのぞいてやがって。扉の下に挺子をさしこみ、お前らはそっちからもち上げろ、わしはこっちから加勢する。

〔リュシストラテ、城門を開いて立ち出でる〕

リュシストラテ　おやめあそばせ。わたしのほうから出てまいりますから。挺子なんか入用ございません。それよりも入用なのは頭のほうでございますよ。

役人　恥知らずのあばずれめ、ほんとか？　弓組の者[3]はどこだ。あいつをひっつかまえ、手を後ろにふん縛れ。

リュシストラテ　アルテミス女神さまにかけて、私に指一本でもふれようものなら、不浄役人め、ひどい目にあうわよ。(四三六)

役人　〔巡査に〕こいつめ、びくついているのか。胴体に組みつけ、〔他の巡査に〕それからお前もこいつに加勢して、さっさと縛っちまえ。

カロニケ　パンドロソス[4]さまの御名にかけて、ちょっとでもこの女(ひと)に手をだそうものなら、踏みにじられて、お前さんはお尻から垂れ流しだよ。(四四〇)

役人　うん、お尻から垂れ流しとは、よくも言ったな。もう一人の弓組の者はどこだ。こいつから先にふん縛れ、ぺちゃくちゃしゃべりゃあがる。

ミュリネ　天津ひかりの女神さま[5]の御名にかけて、[6]この人に指の先でも出そうものなら、お見舞一発、すぐさま吸い玉のご厄介になるわよ。

〔巡査どもひるむ〕

役人　なんたるこっちゃ。弓組の者、こいつらをとらえろ。〔女たちに〕お前らの出撃は、このおれさまがとどめてやるぞ。

ストラテュリス　タウロイのアルテミスさま[7]の御名にかけて、この女(ひと)に手を出したら、髪の毛を引き抜かれて、泣きわめくぞ。

〔巡査はみな遁げてしまう〕

役人　こりゃいけない。弓組はもう残っていないぞ。だが女どもには、ひけはけっして取らぬぞ。巡査ども、一斉突撃！　突撃！(四五二)

リュシストラテ　二柱の女神さまの御名にかけて、あたしたちのほうにも女の四箇中隊がなかにいるんですよ。

役人　それ巡査ども、あいつらの手を後ろに廻して、ふん縛れ。

リュシストラテ　味方の方々、出撃あそばせ、おおい、種卵野菜売子の方たち！　おおい、大蒜接客パン売子の方たち！　組みつき、引きずり[1]、ぶんなぐり、ご加勢あそばせ！　悪口雑言、あばずれ振りを発揮あそばせ！　（四六〇）

〔女たち門外に突撃して、巡査どもをさんざんな目にあわす〕

やめえ！　後退！　死人を剝ぐな[2]！

役人　チェッ！　無態やわが弓組はさんざんだ。

リュシストラテ　なんと思っておいでになったのでしょうか。それとも女には、怒り虫がないとでもお思いでしょうか。

役人　どういたしまして。居酒屋が近くにあったそのときには、大した虫がぐうぐうだ。

男のコロス　役にも立たぬおしゃべりの、この地の役人め、何をこのけだものどもと無益の問答をしているんじゃい。こいつらがたった今さっき、とんでもない水浴を着物を着たままわしらにさせたのを知らないのか――それも糠なしでだ。　（四七〇）

女のコロス　どうして、お前さん、近所の人にむやみと手出しするのは、よくないよ。もしやれば、ぽかんと一発のお見舞いは必定。わたしゃまるで娘のようにおとなしく坐っているつもりだよ、ここで誰の邪魔もせず、藁一本でも動かしもせずにさ、誰かが胡蜂の巣から蜜を盗むと同様に、わたしを怒らせさえしなきゃあね。

男のコロス　おおゼウスさま、このような怪物どもをなんとしたらばよかろうか。もう堪忍袋の緒が切れた、お前とわしとのこの悶着を糺明すべきじゃ、いったいなんで、何がなんで、岩山[3]をばのっとりおったか、いったいなんで、巨岩の尊くかしこい城山を、聖い神の境域を。

取り調べろ、言いくるめられるな、あらゆる尋問をやれ。こんなことを吟味もせずにほっておくのは恥だからな。

役人　まず第一にききたいのはこのこと、なんのために門をかけて、わしらを城山から閉め出しおったか。　（四八五）

リュシストラテ　あのお金を安全に保存して、あなた方が、そのために戦さをつづけないように。

役人　あの金が戦さの原因だ？

リュシストラテ　そうよ、そのうえに、ほかのこともみんなそこから起きてきた。ペイサンドロス[4]や役人たちがお金を盗むことができるように、絶えず喧嘩を起こしている。さあ、あの人たち、なんなりと好きなことをするがよい。鐚一文だってこのお金はもう取らせてやらないから。　（四九二）

役人　それじゃどうしようと言うのだ。

リュシストラテ　そんなことを今さら尋ねるの？　こっちでお金をあずかります。

役人　そっちでお金をあずかります？

リュシストラテ　どうしてそれがいけないのです。あたしどもは家の会計をすっかりやってあげているじゃありませんか。

役人　そりゃ違うよ。

リュシストラテ　どう違います？

役人　こりゃ戦費だ。

リュシストラテ　ところが戦争するには及ばないというわけなの。

役人　しなきゃあ、われわれは破滅する。

リュシストラテ　わたしどもが助けてあげます。

役人　あんたたちが？

リュシストラテ　わたしどもですよ。

役人　はてさて、これは！

リュシストラテ　いやでも救ってさしあげます。　（四九八）

役人　けしからん。

リュシストラテ　ご立腹？　それでもやっぱりこれはしなければなりま

せんわ。

役人　デメテルの御名にかけて、こりゃけしからん。

リュシストラテ　ねえあなた、救わなくてはなりませんのよ。

役人　断わったら。

リュシストラテ　そうすればなおのこと。

役人　いったいどうして戦争と平和に口出しすることになったのだ。

リュシストラテ　お話ししましょう。

役人　早く言え、それでないとひどい目にあわせるぞ。

リュシストラテ　耳をすまし、手出ししないようにするんですよ。

役人　できない相談だ。むつかしいね、腹を立てているのに手を出さないのは。

ストラテュリス　そうすりゃもっとひどい目にあうよ。

役人　くそ婆め、勝手に啼いてろ。〔リュシストラテに〕さあ話せ。

リュシストラテ　心得ました。前の戦さ[1]のときにはわたしたちはおとなしく、あなた方男の人たちのすることを我慢しておりました。わたしどもにぐうとも言わせなかったのですもの。ですが、あなた方のやり口が気に入っていたのではありません。いいえ、それをようく知っていました。そして家のなかにいながら、大切な事柄に関してあなた方がまずい評議をしているのを聞いたものです。そして胸のなかでは心痛しながら、表は笑いを含んで尋ねました、「今日は民会で講和条約の碑文[2]に何を加えると決議しましたの?」「それがどうしたというのだ」と夫が言い言いしました、「黙っていなさい」そこでわたしは黙りました。

ストラテュリス　ところがわたしはけっして黙りませんよ。

役人　黙らなきゃあ、喚かしてやるぞ。

リュシストラテ　そこでわたしは家のなかで黙っていました。ところがすぐさま、またほかのあなた方のもっと悪い決議を知りました。そこでわたしどもは尋ねたものです、「ねえ、あなた、どうしてこんな馬鹿なことをなさるの?」ところが夫はすぐさまわたしをにらみつけて、言い言いしました、「おとなしく織っていなきゃあ、お前のど頭に思い知らせてやるぞ。『戦争は男の仕事だ[3]』」

役人　その言葉、まことにもっともじゃ。

リュシストラテ　何がもっともなもんですか、なさけない人ねえ、とんでもない評議をやってるあなた方に忠告しちゃいけないなんて。それから、あなたたちが往来で「この国には人物がいない」と言ったり、ほかの人が「いや、まったくいないよ」というのをはっきり聞いたとき、それからすぐさまわたしども女が集まって、ギリシアを救うことを、きめました。ためらうことがどこにあります? それですから、わたしどもがしていたように、こんどはあなた方がわたしどもが見事に演説するのをば聞いて、黙っている番にまわったら、あなた方の過ちをうまく直してあげられるでしょう。

役人　われわれの誤りを直す? けしからん、我慢ならん。

リュシストラテ　黙れ!

役人　うう、女郎め! わしがお前のために黙る! しかも頭にヴェールをかけている女郎のために? それじゃ死んだほうがましだ。

〔リュシストラテは役人の言葉によって、男女の位置顛倒の手続きに及んで、彼の頭にヴェールを被せる〕

リュシストラテ　もしこのヴェールが邪魔になるなら、これをあたしから取って、さあ頭におかけあそばせな、そうして、黙れ!

…………[4]〔欠行〕

ミュリネ　そしてさあこの籠を。

リュシストラテ　それから裾をはしょって、お豆を嚙み嚙み毛糸梳き[5]、戦争は女の仕事だ!

女のコロス　皆さん、水甕をおいて立ち上がるのよ、あたしたちもまた仲間の方に応分の加勢をしましょう。

わたしゃ踊っても踊っても疲れやせぬ、この膝も疲れることはありゃあせぬ。

あの女たちとなんなりと
いっしょにしましょう。
見上げたものだ、その性、勇気
優しく賢く国を愛する
慧い徳。

勇ましい祖母さんと、いらぐさの刺々とした母さんの子供たち、気負って進め、ひるむでないぞ。風はまだまだ追風だよ。

リュシストラテ　心を蕩かすエロスさまとキュプロス生れの愛の女神（1）が、わたしどもの胸と膝とに魅惑の気をば吹きかけて、男たちの心中に甘い情念、棍棒使いの心をば醸し出して（2）くだされば、わたしどもはギリシア人のあいだで平和の女神と呼ばれるでしょうよ。

役人　してその手段は？

リュシストラテ　まずいの一番に武器を手に市場をうろつき（3）、乱暴するのをやめさせる。

ストラテュリス　パポス（4）の愛の女神の御名にかけて、そのとおり。

リュシストラテ　今では瀬戸物市場だろうが青物市場だろうがお構いなしに、市場じゅうを武装して歩きまわっています。まるで気違い坊主（5）よ。

役人　そうさ。勇ましくなくっちゃならんのだからね。

リュシストラテ　ところがおかしいのは、ゴルゴン（6）の頭の紋うったる楯をかついで、芝蝦を値切っています。

ストラテュリス　ほんとに、わたしゃ長い髪（7）の騎士隊長さんが馬上で、青銅の兜のなかへ婆さんから買った卵焼を入れてるところを見ましたよ。またトラキア人の傭兵（8）は、テレウス（9）みたいにもったいぶって、小楯と小槍を振りまわして、無花果売りの娘っ子を嚇して追っ払い、おいしい干無花果を噉みこみました。

役人　それじゃあんた方は、あっちこっちと、もつれにもつれているものを、どうしてやめさせ、解きほぐすことができると言うのかね。

リュシストラテ　わけなしよ。

役人　はて、その法は？　聞かせてもらいましょうかね。

リュシストラテ　糸の綛がもつれたときに、ほら〔と実物を取り上げる〕このように取り上げて、あちらこちらと紡錘でもって解きほぐす、ちょうどそのように、この戦争も、もし誰も邪魔をしなければ、解きほぐしましょう。あちらこちらと使者でもって解きほぐして。

役人　毛糸に糸綛に紡錘でもって恐るべき事件をば、止められると思っているとは、この脳たりんめ！

リュシストラテ　あなた方に脳味噌が足りていたら、あたしどもの毛糸作戦のやり口ですっかり政治をなすったでしょうにね。

役人　どういうぐあいに？　さあ教えてもらいましょうか。

リュシストラテ　第一に、洗い桶の中で生の羊毛を洗うように、この国から脂と汚れを洗い落して、台の上で無頼漢どもを叩き出し、薊をつんで取り除き、政権を求めて党をなし、羊毛のなかの塊りみたいになっている奴らを梳きほぐし、その核を抜き取らなくてはなりません。それから市民、在留外人、外国人、それから国庫の債務者も、みんないっしょに混ぜ合わせ、全体に共通の善意という糸巻き籠のなかへ梳き入れる。それからこの国の植民都市を一つ残らず、これは別々に引き出した糸と同じに考える。次にみんなから糸を取り、ここへ集め、一つにまとめ、それから大きな糸玉をこしらえ上げて、この玉から国民に外套を織ってあげなきゃあなりません。

役人　この女どもが棒で打ったり糸玉を巻いたりせよとは、とんだご説法だ。戦争になんの関係もないくせに。

リュシストラテ　どういたしまして、この不浄者め、あたしたちは戦争の二倍以上の被害者ですよ。第一に子供を生んで、これを兵士として戦争へ送り出した。

役人　しっ！　過ぎたことをとやかく言うな。

リュシストラテ　第二に歓喜にみちた青春を享楽すべきそのときに、軍旅のために空閨を守っています。それからあなた方は、わたしどもの、

ほら、あのことを気にもかけない、わたしどもは乙女らが閨(ねや)のなかで未婚のまま老いてゆくのがたまらない。

役人　男は年を取らないっていうのか。

リュシストラテ　そりゃ取りますさ。だけど事情がちがいます。男は帰還して、白髪まじりになってても、さっさと子供みたいな若い女(ひと)と結婚できる。ところが女の盛りは短かい。もしこれをのがしたら、誰も貰ってくれ手がなくて、恋占いなぞしながらに、空しく日をば送るのです。

役人　だがまだまだ一物の達者な奴は……

〔と言いかけるのを皆まで言わさず、女たちは彼に経帷子を着せる〕

リュシストラテ　あんたは何をぐずぐず、さあさっさと死んでおしまい、
小豚[1]もあげます、棺桶も買う、
蜜煎餅[2]は捏ねてあげます。
〔と一文銭(オボロス)を渡して〕これ[4]をお取り[3]、それから冠。

カロニケ　それからこの頭飾りをわたしから受け取って。

ミュリネ　これからその花冠[5]を受け取って。

リュシストラテ　何が足りないのさ、ほしいのさ。さっさと船にお乗り
カロンが呼んでるよ、
あんたは舟出を遅らせてるよ[6]。

役人　このわしに加えられた暴行はなんたるこっちゃ、うんそうだ、走って行って同僚の最高参議官(プロブーロス)たちにこのわしのていたらくを見せてやろう。

リュシストラテ　あら、あんた、北枕にしなかったって怒っているの？だけど三日祭には朝早くからあなたのために、間違いなしにお斎(とき)の立派なご馳走がわたしたちから送られますよ。

男のコロス　こりゃ自由な市民が惰眠をむさぼっているときではないぞ。
いや、みんな、鉢巻してこの事件に取りかかろう。いやもうこれは並並ならぬ大した大きな事件のような匂いがするて。ヒッピアス[7]めの専制政治のその匂いがぷんぷんするぞ。
心配だぞ
ラコニア人めが
この市のクレイステネス[8]が
家に集まり
神々の敵なるこの女どもをば巧みに煽(あお)り立てそうだぞ、
わしらのお金[9]、
その日の糧の
あの日給を
押えるように。
とんでもない、この女郎らが市民諸君に忠告し、女のくせして楯や刀に関してぺちゃくちゃ、そのうえ、あんぐり口を開いた狼よりも信義のないラコニア人とわしらとに仲直りをばさせようとは。これはみんな独裁政治を目的にやったことだ。ところがどっこい、わしは用心、そうはさせぬぞ、今後は刀をてんにん花の枝のあいだに隠し持ち、アリストゲイトン[10]といっしょになって鉄兜にいかめしく、市場で買物、ほうらこのように〔と身振り〕彼の側にふん構え、
〔と言いつつ身構えして、ストラテュリスの横面へお見舞いする〕
ここから一発、神々の敵のこの婆の頤へとぽかり。

女のコロス　お前が家へ帰ったら、おふくろさんにはお前の顔がわかるまい、親泣かせめ、さあ皆さん、まず上着を脱いで、地面に置きましょう。市民(まち)の皆さん、わたしどもがまず初めに立派な
忠告をこの市にするのは、
これは当然、わたしを立派にあまやかし育ててくれたこの市へのわたしの義務です。

七つになって(1)
すぐさまにわたしは聖函捧持の童女の役
次に十では
聖臼を女神さまのために挽く役目(2)、
それから次にブラウロニアのお祭に、黄色い衣の熊乙女(3)、
ついで見事な乙女になって
無花果の飾り頸にかけ、
聖籠捧持の晴れの役(4)、

それだからこそこの市に立派な助言をしますのはわたしの義務でございます。女に生まれたこのわたしが、現在のこのごたごたよりも、すぐれた物を貢いだからとて、とやかく言うには及びません。男の子を国に貢いでいる。応分の分け前をわたしは払っているんだから。ところがあんた方出来そこないの老いぼれどもは、それどころか、ペルシア戦争のおかげで集めた祖父さん以来のあの貢ぎ物(5)をば、使い果したそのあげくに、代りの物を貢ぐどころか、お前のおかげでわが国は破滅の危機に瀕している。ぶつぶついう気か？　ぐずぐず言うなら、ほらこのざらざらの皮靴であんたの面にぽかりと一撃。

〔と男のコロスの長を撃つ〕

男のコロス　こりゃけしからん、
生意気だ。そのうえに
ますます増長すると見えた。
なあ睾丸のある男なら、こいつぁ捨てておくこたぁできぬ。さあ、仕事着を脱ぎ捨てようぞ、男は男の匂いがすべきだ。ぬくぬくとくるまっているときではないぞ。
いざいざ、白足党(6)の者ども、進め、
そのかみわれらが血気さかんなそのときに
レイプシュドリオンの塞によった者どもよ、
今こそ
今こそふたたび若返り、総身に
翼
かろやかに、よる年波を
振い落す、そのときだ。

ほんのちょっとの手がかりでも許そうものなら、こいつらは、何ごとなりともいかなることにもおくれを取るまい(7)。いやいや、奴らは船をつくって、さながらアルテミシアのように船いくさ、わしらにむかって船を進めんとするじゃろう。もしも馬術にむかった日には、それこそ騎兵は総なめだ。女は馬術の天才で、しっかりとまたがり、走ったとて落ちやせぬ。ほらあのミコン(8)が描いた、馬上で男と闘うアマゾンどもをごろうじろ。いやさ枷に入れなきゃならんぞ、その素っ首を引っ捕え。

〔といきなりストラテュリスの首に飛びかかって締めあげる〕

女のコロス　この野郎、もしもあたしの怒りの焔を
燃えあがらせたら、あたしゃ獣のそのように、
荒れて狂って今日今日
延びちゃって、仲間の者に助けてくれえと言わせてやるぞ。さあ、皆さん、あたしどももさっさと着物を脱ぎ捨てましょう、怒って今にも食いつきそうな女の匂いがするように。
さあこい。
もう大蒜もえんどう豆も
食えぬようにしてやるぞ(9)。
あたし一人の
悪口を言っただけでも、あたしの
怒髪は天をつき
鷲の卵をねらいよる
甲虫になってやるぞ(10)。

ラムピトと、可愛い立派な家柄のテーバイ生れのイスメニア[1]さえ生きてれば、お前なんかは糞でもくらえだ。たとえ七たび投票しようが、そいつはなんの効能もなし、不幸な人よ、みんなの市民の、隣国人の嫌われ者め、だから昨日もあたしがヘカテ[2]さまのお祭に隣から子供らのためにボイオティアから女友達、それこそすばらしいほれぼれするような鰻を招いたのに、向うで断わってきましたよ、その原因はお前さんの法令[3]さ。あんたたちはこの法令遊びをけっしてやめまい、お前の脚をひっつかみ、逆さに空に吊るし上げ、その頸骨を折るまでは。

〔と言いながら、相手の脚をひっつかみ、投げ倒す〕

〔リュシストラテ、登場。前の場面より数日後〕

女のコロス　この仕事[4]、この企ての女君さま、いかなれば苦い顔をして家のなかよりおいであそばしました？

リュシストラテ　卑しい女どもの仕業、女々しい心があたしを、気落ちいたして、あちこちと歩ませるのじゃ。

女のコロス　なんと仰せられます？　なんと？

リュシストラテ　まことじゃ、まことじゃ。

女のコロス　何ごとでござりまするか。友なるわれらにおもらしくださりませ。

リュシストラテ　語るは恥、隠すはせつないことじゃ。

女のコロス　どんな凶事が起こったのか、さ、包まずお明かしくださりませ。

リュシストラテ　一言で申さば、意馬心猿の心とどめがとうて。

女のコロス　ああ！　これはしたり。

リュシストラテ　何がこれはしたりじゃ。これはまさしくわが言葉のとおりじゃ。わたしはもうあの女たちを男から遠ざけておくことができないのよ。逃亡を企てています。最初の女は、パンの祠のあるところの孔[5]から抜け出そうとしているところを捕えました。も一人は井戸の滑車に縄をかけて下りようとしているのを、またも一人はさっさと脱走、また一人は雀にのって[6]オルシロコス[7]の家さして、今やまさに飛んで行こうとしているのを、昨日その毛をひっつかみ、引きずり下ろしましたのよ。家へ帰ろうと、ありとあらゆる口実を引きずり出す。ほらあそこに誰かやってきました。もうし、あんた、どこへ走って行くの。

女・甲　家に行きたいのよ。家ではわたしのミレトス製のウール[8]が虫に食われてほったらかしなの。

リュシストラテ　どんな虫だか。さっさと廻れ右！

女・甲　ねえ、すぐに帰って来るわよ、ほんとに、ちょっと寝台の上に拡げるだけでいいのよ。

リュシストラテ　拡げなくともよろしい、またどこへも行ってはいけません。

女・甲　それじゃだめになるのを放っとくの？

リュシストラテ　仕方がないわ。

女・乙　こりゃとんでもないことをしたわ、アモルゴスの麻[9]をさばかないで家においてきちゃったわ。

リュシストラテ　ここに別な女が、さばいてないアモルゴスの麻のために出て行こうとしているわ。こちらへ戻っておいでなさい。

女・乙　ほんとに、さばいて皮をむきおえたら、さっそく大急行で帰って来るわ。

リュシストラテ　逃げちゃだめ！　あなたがこれを始めたら、他の女も同じことをやろうとするから。

女・丙　おお、エイレイテュイア[10]さま、お産をしてもよいところにわたしが行くまで、お産を延ばしてくださいまし。

リュシストラテ　そりゃなんのたわ言なの？

女・丙　わたしは今にもパンクしそうなのよ。

リュシストラテ　だって昨日はお腹は大きくなかったじゃないの。

女・丙　だって今日はそうなのよ。ねえ、リュシストラテさん、産婆さんのところへ行くために、わたしを家へすぐさまやって下さいな。

リュシストラテ　何を言ってるのよ。この堅いものは、こりゃなあに？
女・丙　男の児よ。
リュシストラテ　愛の女神の御名にかけて、嘘よ、なんだか銅の丸いもの(1)だわ。さあ出してごらんなさい。あきれた！　女神さまの御兜をかかえていて、お腹が大きいなんて言ってたのね。
女・丙　ほんとにお腹が大きいのよ。（七五三）
リュシストラテ　それじゃどうしてこれをかかえているのさ。
女・丙　まだ城山（アクロポリス）にいるあいだに産気づいたら、この兜のなかに入って、生むつもりなのさ、鳩のように。
リュシストラテ　なにを言ってんのよ。事態は明々白々よ。兜のかけめぐりの祝い(2)を、さあここで待っているがいいわよ。
女・丁　だってお宮のなかのお守りの蛇(3)を見てからというものは、城山の上ではほんのちょっとの間も眠れないのよ。
女・戊　あたしはほうほうと啼きつづける梟(4)のおかげで、なさけないかな不眠症で死んじゃうわよ。（七六二）
リュシストラテ　あきれた方たちね、だましっこはやめにしましょう。男が恋しいんでしょう。ところで男のほうはあたしたちを恋しがっていないと思っているの？　たしかにあの人たちもつらい夜々を送っているのよ。さあ皆さん、辛抱して。も少しのあいだの我慢よ。仲間割れさえしなければ、捷利はわがものというご神託があるんだから。ほらこれよ。〔と見せる〕
女たち　どんなご神託か読んで聞かせて。
リュシストラテ　それじゃ黙って〔と読む〕。つばくろどもが戴勝鳥（やつがしら）をのがれて一つところに行って、うずくまりいて、金精鳥より離れておれば、凶事（まがごと）は去って、高きに轟くゼウスの神は、上のものを下になしたもうであろうぞ。
女たち　あたしどもは上でしょうか？（七七四）
リュシストラテ　されども離ればなれになって、つばくろどもが聖殿より、翼にのって飛び上がれば、これほど助兵衛、これほどだらしのない鳥は、ほかにはないとみゆるであろうぞ。
女たち　ほんとにご神託ははっきりしてるわ。八百万（やおよろず）の神々さま、辛い辛いと嘆いて中途でやめることはけっしていたしません、さあ、なかに入りましょう。みっともないことですものね、ねえ、みなさん、ご神託を裏切ったりしては。（七八〇）
〔女ども、リュシストラテとともに城門内に退場〕
男のコロス　話を
　一つきかせよう、まだほんの小さな
　子供のころに聞いた話だ。
　昔々
　メラニオン(5)という若者がいた、彼は
　結婚を嫌がって、人なきところに行きました。
　そして山中（やまなか）に住んでいた。
　そして網を編んで、
　兎狩り、（七九〇）
　そして犬をもっていた。
　女が嫌いでけっして家に帰らない。
　このように
　女嫌い。
　おれたち賢い方々も
　メラニオンに劣らず、女嫌いだ。
男のコロスの長　お前に、婆さん、キッスしよう。〔と近づく〕
女のコロスの長　そしたらもう玉葱(6)が食えなくなるよ。
男のコロスの長　そして脚を上げて蹴っとばす。
〔と脚をあげると、肝心のところが丸見えになる〕
女のコロスの長　まあ藪みたいに毛むくじゃらだわ。（八〇〇）
男のコロス　そうとも、ミュロニデス(7)も
　ここのところが毛むくじゃら、

ありとあらゆる敵に対して黒尻殿[1]、
ポルミオン[2]もおんなじだ。

女のコロス　あたしも
話を一つ、あんたのメラニオンとせりあって話しましょう。
昔々
ティモン[3]とかいう人が、家もなく足も踏み入れるところもない荊のなかに、顔をかくして住んでいた。
このティモンという男は
憎悪の女神の申し子です。
…………………〔一行欠〕
憎しみのあまり悪党の
男どもをば散々に呪って世をば捨てちゃった。
このように
この人は、あんたたち悪党の
男どもをば嫌い抜いたが、
女の人は大好きだった、とさ。

女のコロスの長　ほっぺたをなぐられたいかい。〔と進みよる〕

男のコロスの長　いや結構、こりゃ恐ろしや。

女のコロスの長　それじゃ脚でゆきましょうか。

男のコロスの長　それじゃおまんまがまる見えだ。

女のコロスの長　なんだって、だけれどあたしが婆さんでも
そいつは毛を生やしているどころか、
ランプの光にきれいにつるつる。

〔しばらく舞台空白。リュシストラテ、アクロポリスの城壁上に現わる〕

リュシストラテ　ねええ！　みなさん、わたしのところへ速く速く！

女・甲　どうしたの？　どうして呼んだの？

リュシストラテ　男よ、男が見えるのよ、こっちへやって来る、恋の女神のあやしい狂乱に気がくるって。

女・甲　おお、キュプロス、キュテラ、パポス[4]をしろしめす女主の君、
あなたさまのお運びになっている路をまっすぐにおいでくださいませ[5]。
だがその人はどこにいるの、誰？

リュシストラテ　クロエ[6]さまのお社の側よ。

女・甲　あら、ほんとにいるわ。いったい誰でしょうね。

リュシストラテ　ようく見て。あなたたち誰か知ってる？

ミュリネ　ええ、ええ、知ってますとも。あれはうちのキネシアス[7]よ。

リュシストラテ　それじゃこれはあんたの役目よ、あの人を焼いて、ひつくり返して、うまく口説きだまして、キッスしてキッスしないで、あの盃の誓い以外のあらゆることをやってやるのよ。

ミュリネ　承知の助、やるわよ。

リュシストラテ　そしてわたしは、ここに留まっていて、あんたの手くだに加勢していっしょにあの男を焙ってやりましょう。〔女たちに〕さあ、あっちへ行って。

〔キネシアス、半狂乱のさまで、小さい子供をつれて登場〕

キネシアス　ああ、ああ、たまらねえ、痙攣と硬直とが、まるで拷問の輪にかけられているように、おれに襲って来る。

リュシストラテ　そこにいる、哨戒線のなかに立っているのはだあれ！

キネシアス　僕ですよ。

リュシストラテ　男の方？

キネシアス　まさしく男の方ですよ。

リュシストラテ　さっさと行っておしまい。

キネシアス　僕を追い立てようという君は誰だ。

リュシストラテ　日直の番兵よ。

キネシアス　お願いだ、ミュリネを呼んでくれ。

リュシストラテ　おや、ミュリネを呼ぶんですって？　あんたは誰なの

よ。

キネシアス　あれの夫の、助兵衛町（パイオニダイ）[1]のキネシアスさ。

リュシストラテ　おや、よくいらっしゃったわね。あなたのお名前はわたしたちのあいだではたいした評判、みんな知ってますわよ。あんたの奥さまは口癖のようにあんたのことをおっしゃって、卵や林檎をあがるたびに、「これを愛の印にキネさんに」[2]ですってさ。

キネシアス　わあ、たまらねえ。

リュシストラテ　ほんとよ。そして男の方のことに話が落ちるたびに、あなたの奥さまはすぐにおっしゃるのよ、キネさんにかかっちゃ、ほかのは話にもならないってね。

キネシアス　すぐ行って、呼んでくれ。

リュシストラテ　じゃなんかわたしにくださる？

キネシアス　上げるともさ、お望み次第。〔と財布を取り出して〕これだ。これを上げる。

リュシストラテ　さあ、それじゃ下りて、呼んで来ましょう。

〔と城壁より姿を消す〕

キネシアス　はやく頼むよ。あいつが家から出て行ってからというものは、世のなかに楽しみというものはなくなった。家に入ると味気ない、なにもかにも脱殻（ぬけがら）だ、物を食っても、なんの味もありゃしない。勃然ともよおしているからな。

ミュリネ　〔城壁の側で声のみ〕わたしはあの人が大好きよ、大好きなのよ。ところがあの人ったら、わたしに愛されるのが嫌いなの。あの人のためにわたしを呼ぶのはおやめなさい。

〔と姿を城壁上に現わす〕

キネシアス　可愛い可愛いミュリちゃん、どうしてそんなことを？　ここへ降りて来ておくれ。

ミュリネ　いやよ。

キネシアス　僕が呼んでいてもかい、ミュリネ。

ミュリネ　わたしをほしくもない癖に、あなたは呼んでいるんです。

キネシアス　君がほしくない？　冗談じゃない、もうそのために僕はやつれはてている。

ミュリネ　さよなら。

キネシアス　いけない、いけない。さあ、この子供の言うことを聞いてくれ。〔子供に〕おい、母ちゃんを呼ばないか。

子供　母ちゃん、母ちゃん、母ちゃん。

キネシアス　おい、どうしたというんだ。六日というもの、洗ってももらえず、乳もなしのこの子供を可哀そうとは思わないのか。

ミュリネ　そりゃ可哀そうですとも。だけど悪いのはお父さんですよ。

キネシアス　降りて来てくれ、ねえ、子供のために。

ミュリネ　母親ってねえ、ほんとに。降りなくっちゃならないわ、仕方がない。〔と城壁内に姿をかくす〕

キネシアス　あいつはずっと若くなって、魅力をましたように見えるぞ。おれに対してすねて、腰をふりふり歩いてくる、これがまたたまらなくおれの心をかき立てるなあ。

ミュリネ　〔城門より出で来る〕悪いお父さんのほんとに可愛い子、さあ、ママのキッスよ、可愛い子。

キネシアス　ひどい奴、どうしてこんなことをして、外の女どもの言うことを聞き、おれをひどい目にあわせ、お前自身も困っているのだ。

〔となれなれしくミュリネを抱こうとする〕

ミュリネ　だめ、手をひっこめて。

キネシアス　家のなかの物は、お前のもおれのも、お前のおかげでひどい有様だ。

ミュリネ　そんなことはどうでもいいわよ。

キネシアス　お前のウールを鶏どもがめちゃめちゃにしても、どうでもいいのかい。

ミュリネ　いいわよ、ほんとに。

キネシアス　恋の女神の神聖な儀式をお前はこんなに長いあいだやらずにいる。ねえ、帰って来てくれないか？

ミュリネ　いや！　あなた方が平和を結び、戦争をやめないかぎり、いやですよ。
キネシアス　なあに、そういうなら、それだってやるよ。
ミュリネ　なあに、あなたがそういう気なら、わたしだって家に帰りますよ。だけど今はそうしないって誓ったんですよ。
キネシアス　そりゃそうとして、さあ、おれと久しぶりにいっしょに寝てくれ。
ミュリネ　いやっ！　だけどあなたを愛していないというわけじゃないのよ。（九〇五）
キネシアス　愛している？　それじゃどうして寝ないんだ、ねえ、ミュリちゃん。
ミュリネ　何を馬鹿馬鹿しい、子供の目の前でですか？
キネシアス　とんでもない。おい、マネス、〔と奴隷にむかって〕こいつを家へ連れていけ。〔マネス子供を連れて去る〕
さあ、子供はもう邪魔でなくなった。さあ、寝よう。
ミュリネ　いったいどこでそんなことをするんですよ、馬鹿ねえ。
キネシアス　パンの洞(ほこら)のあるところさ。(1)
ミュリネ　そしてどうしたらまた城山(アクロポリス)に穢(けが)れなしに入れるというのよ。
キネシアス　なあに、わけはない。クレプシュドラの泉(2)で斎戒沐浴さ。
ミュリネ　それじゃ、誓っておいて、それを破ることになるじゃないの、馬鹿ねえ。（九一四）
キネシアス　偽証罪はおれが引き受けたよ。誓いなんか気にするな。
ミュリネ　それじゃベッドを持ってきましょう。
キネシアス　いらないよ、われわれは地べたでたくさんだ。
ミュリネ　いいえ、あたしはあなたを、こんな方を、地べたに寝かしたりはできませんわ。〔と退場〕
キネシアス　あいつはおれを愛しているな、明々白々だ。
ミュリネ　〔マットレスを持って登場〕ほら、早く横になって。あたしも着物を脱ぎますわ。ちょっと待って、はてなんだっけ、そう、敷物をもって来なくっちゃ。（九二一）
キネシアス　なんだ、なんだ、いらないよ、敷物なんか。
ミュリネ　だって、ほんとに裸のベッドの上じゃひどいわよ。
キネシアス　さあ、キッスしてくれ。
ミュリネ　ほら。〔とキッスする〕
キネシアス　うわはっ、はっ、たまらねえ。すぐ戻って来るんだよ。〔ミュリネ、退場〕
ミュリネ　〔敷物を持って登場〕ほら、敷物。横になって。あたし着物を脱ぐわ。だけど、はてなんだっけ、枕がないわ。
キネシアス　おれはいらんよ、そんな物は。
ミュリネ　だけどあたしはいるのよ。〔退場〕
キネシアス　だがこの一物は、おあずけをくらった犬だよ。
ミュリネ　〔枕を持って登場〕さあ、上げて、早く。〔と枕を頭の下に置く〕
キネシアス　もうこれで完全だ。
ミュリネ　完全ですって？
キネシアス　さあ、こっちへおいで、大事な人。
ミュリネ　もう帯を解いているのよ。忘れないでね、ほら、あの仲直りのことでわたしをだましちゃだめよ。（九三〇）
キネシアス　ほんとうだとも、でなきゃあ死んでもいいよ。
ミュリネ　かけ蒲団がないわ。
キネシアス　いや、ほんとにいらないよ。それよりは実行だ。
ミュリネ　もちよ、やらしたげるわよ。すぐ来ますからね。〔退場〕
キネシアス　あいつめ、蒲団でもっておれを殺してしまうぞ。
ミュリネ　〔帰って来て〕さあ、立って。
キネシアス　もうこいつは立ってらあ。(3)
ミュリネ　香油を塗ってほしい(4)？
キネシアス　いや、もうほんとにいらないよ。
ミュリネ　あんたがいろうがいるまいが、だんぜん塗ったげる。

キネシアス　おお、ゼウスよ、香油なんてこぼれてしまえ。〔と退場〕

ミュリネ　〔帰って来て〕手をお出しなさい。これを取って、お塗りなさい。

キネシアス　この香油は、アポロンにかけて、ちっともよくないて。それどころか、宵待香で、結婚の結びの匂いは零だぞ。

ミュリネ　あらあら、わたしはロドス香を持って来ちゃったんだわ。

キネシアス　これで結構。構わないよ。お前。

ミュリネ　だめだめ。〔と退場〕

キネシアス　香油の発明者め、くたばってしまいやがれ！

ミュリネ　〔帰って来て〕さあ、この瓶をとって。[1]

キネシアス　ところがおれはほかのをもってる。さあ、こいつめ、寝ろ、もうおれになんにも持って来るな。

ミュリネ　ほんとにそうしましょう。ほら、靴を脱いでるわよ。だけど、ねえ、可愛い方、休戦するように投票してよ。

キネシアス　おれは提案しよう……。

〔と言いかけるうちに、ミュリネはすばやくアクロポリスの門内に姿を消す〕

あの女郎のおかげでおれは破滅だ、おしまいだ、さんざんひどい目にあわせたあげくに、おれのあいつをひんむいて行っちまいやがった。

ああ、こはいかに、誰を相手にしましょうか、
あの尤物は逃げてしまった。
この孤児をどう育てたらよかろうか。
キュナロペクス[2]はどこにいる？
おれさまに乳人を一人雇ってくれ。

男のコロス[3]　ああ、気の毒な、だまされて、
あんたは凶事に心が滅入る。
わしらも憐れで見ちゃおれぬ、ああ！
どんな魂、どんな金の丸玉が、
どんなお下が、どんな急所が、
こう責め抜かれては
明け方に一本抜かずにいらりょうか。

キネシアス　おお、ゼウスよ、ああ苦しい。

男のコロス　この苦しみをそなたになめさせたのは、
あの大あばずれの、穢れ女だ。

女のコロス　どうして、可愛い愛らしい女だよ。

男のコロス　可愛い女だと。
穢らわしい穢らわしい奴だ。おお、ゼウス、
ゼウスよ、
あの女を、まるで藁の束のよう、
大竜巻とつむじ風で
巻き上げ、くるくると廻し立て、
さらって行って、ほうり出せ、
あいつはもとの地べたに落ちて、
あっと思う暇もなく、
ぐさりと刺されて、帰命頂礼極楽往生。

〔キネシアス、退場。スパルタよりの使者と役人、登場〕

使者[4]　アテナイの年寄衆はどこにごわすか。
当番役衆は？　お告げいたしたいことがごわす。

役人　どなたかな。人間か、それとも越野子根尊[5]かな。

使者　おいどんは使者でごわす、おい稚児さん、双柱の大神にかけ申して、スパルタより和睦の儀で来申した。

役人　それで槍を小脇に隠して来たんだな。

使者　おいどんはさような物は。

役人　どっちへ向くんだ。どうしてマントを前にかけるんだ。旅の疲れで腰が腫れ上がったというのかね。

使者　いやはや、こいつは老いぼれの馬鹿者でごわす。

役人　だがぴんと威勢がいいぞ、この野郎。

使者　おいどんに限って、さようなことはごわさぬ。冗談はおかれえ。（九八九）

役人　それじゃ、こりゃなんだい。

使者　ラコニア式符牒杖(スキュタレー)[1]でごわす。

役人　〔自分のを指して〕それじゃこれもラコニア式符牒杖かい。さあ、ほんとのことを白状しろ、みんなわかっているんだから。スパルタの様子はどういうぐあいだ？

使者　スパルタはみんなかつえて、味方の者どももみんな、かつえて、おいらん芋が必要でごわす。

役人　いったいどうしてこの禍いが降って来たのだ、原因はパンか[2]？

使者　あいや、首謀者はラムピトと見えた。それからほかのスパルタの女子(おなご)どもがまるで駆けくらの、スタートのようにいちどきに、男どもを近づけず、追い払い申した。（一〇〇一）

役人　それでどうした。

使者　ひどいさまでごわす。市(まち)じゅうを風の前に灯(あかり)をもっているかのように、みんな身をかがめて歩いている。女どもは桃にさわることさえ許さぬ、おいどんらがみんな口を揃えてギリシア全体と和睦をせぬうちは。

役人　これは女どもが至るところでやっている陰謀だ。今こそわかった。さあ大至急和睦に関して、こちらへ全権大使をよこすように言ってくれ。わしのほうはここからひと走り、この一物をば見せて、五百人会(ブーレー)に同じく大使を選出するように言おう。（一〇一三）

使者　おいどんは飛んで行き申そう。貴殿のお言葉まったくもってもっともじゃ。

〔と両名退場〕

男のコロス　女[3]ほど相手にして始末の悪い獣はない。火も物かは、豹でさえもこのように恥知らずではない。

女のコロス　そういうことを知っていながら、あんたはわたしと争う気なの、悪魔め、わたしをあんたの盟友にすることができるというのに。

男のコロス　おれ[4]はけっして女嫌いをやめないぞ。

女のコロス　お好きなときにおやめなさい。しかし今はあんたがこんなふうに裸でいるのを捨てちゃおけませんよ。滑稽だものね。さあ、そばへ行って、この仕事着を着せてあげましょう。（一〇二二）

〔と近づいて着物を着せてやる〕

男のコロス　ほんとに、このお前のやり口は悪くはないて、どうも悪く腹を立てて、裸になっちまったんだよ。

女のコロス　まずこれで立派な男に見えるし、滑稽でもなくなった。わたしに意地悪をしなければ、あんたの眼のなかに入っている虫を取ってあげるんですがね、ほらなかにいるよ。

男のコロス　こいつめ、おれをひどい目にあわせている、この噛み虫め、こいつをしゃくり出し、取れたらおれにみせてくれ。こいつは、ずっと以前からおれの眼を噛みつづけているんだからな。

女のコロス　いいとも、そうしましょう。だがあんたは気むずかしい人ね。〔と虫を取り出す〕まあ、なんて大きい虫が入っているんだろうね。ほうら！　これはトリコリュトス[5]の虫じゃない？（一〇三三）

男のコロス　ありがたい、ほんとにありがたい、そいつはずっと前からわしに食い入っていたものだから、取れたあとから涙が出るわ、出るわ。

女のコロス　さあ拭いたげるわ、あんたは悪者だけれどね。それからキッス。

男のコロス　いやいけない。

女のコロス　いやおうなしよ。

男のコロス　ええ、くたばっちまえ、なんちゅう巧言、甘言にたけた奴だ、なるほどうまくほんとうのことを言ったものだなあ、こんなひどい奴とは、いっしょにいることもできなければ、別れていることもできない、とは。さあ仲直りして、これから後は、もうこっちも悪いことをしなければ、そっちからもされないで、いっしょになって、一つになって、歌を歌い始めよう。（一〇四二）

男女のコロス〔共に〕
さあ、みんな、私どもは
市民諸君の悪口を
これから言おうというのじゃない。
それどころか反対に、大いに
ほめたり、親切にしてあげたり
するつもり。もう悪いことがありすぎる、
そのうえ今のこの事件。
さあさ、男も女も、
みんな申し出てください、
一ムナー(1)、二ムナー、三ムナー、
さあいらっしゃい、家のなかにはたくさんの
空の財布がございます。
いつか平和の世になったら、
誰だろうが私どもから
お金を借りている人は、
その借金を――かあえすな。
カリュストス人(2)のお客さま
ご馳走に招きましょう、
立派なすぐれた紳士です。
そのうえスープに
仔豚のご馳走、
こいつあ諸君が柔らかい
おいしい肉を食べるよう、つぶしたんだよ。
それだから今日は私のところへ
おいでなさい。あんたも子供も
朝早く風呂に入って(3)
おいでなさい。それから
なかにお入りなさい、
なんにも尋ねることはない、
ただまっすぐに堂々と
自分の家であるかのように
威張って入れ、ところが
門が――しまっている。

〔スパルタよりの使節の一行が近づいて来るのが見える〕

ほら見ろ、あそこにスパルタからの使者殿方が、長い髯を引き摺りながらやって来る。まるで膝のまわりに豚囲いが垂れているようだな。

〔スパルタの使節たち、登場〕

ラコニアの方々よく見えました、してご様子はいかがかね、これを知らせてもらいたい。

ラコニア人　何にもとやかく申すことはごわせぬ。おいどんらがどんな有様かは、ごらんのとおりでごわす。

コロス　おやおや、この災難は恐ろしくぴんと張り切っていますな。こりゃどうもひどく悪く熱があるらしいな。

ラコニア人　言語道断、言葉は無用。誰でも構わぬ、どうなりと構わぬ、なんでもかでも平和が望みでごわす。

〔アテナイ方の使節、尤物を押し隠そうと、前かがみ外袍（ヒマティオン）を前方に押しつつ、登場〕

コロス　ほら見ろ、あそこに国つ神の後裔ども(4)が、まるで力士のように腹から外套を前のほうに押しやっている。だからまるで練習中に身体をねじった、腰曲りみたいだ。

アテナイ人　どこにリュシストラテはいるかな、誰か教えてくれ。われわれ男は、これごらんのごとくの有様だ。

コロス　こっちの病気は〔と一方を指し〕、こっちの病気と〔と他方を指す〕符合している。ええと、明け方にひどく来ますかね。

アテナイ人　いやはや、だがこうやっていてはもう続かぬ、だから誰かさっそく仲直りをさせてくれんことには、ええ、構うことはない、ク

レイステネスを代用品にしてやるぞ！

コロス 〔ラコニア人らに〕お前さん方、気がきいているのなら、外套を着るがよい。ヘルメス壊し(1)の連中の誰かがお前さんたちを見つけないようにね。(一〇五三)

アテナイ人 いや、そのとおり、そのとおり。

ラコニア人 かしこまった。さあ、衣をすっぽりと被ろう。

アテナイ人 よく見えられた、ラコニアの方々、お互いにひどい有様ですな。

ラコニア人 稚児さん、こりゃまったくひどい目にあうところでごわした、あの連中が、おいどんらがぴんと張りきっているのを見た日には。

アテナイ人 さあ、ラコニアの方々、すっかり論判せねばならぬ。何しにここへ来られましたな。

ラコニア人 和睦の使者でごわす。

アテナイ人 よくぞ言われた。われらもまたご同様。さあ、リュシストラテを呼びましょう、われらを和睦させることのできるのはあの女だけだ。

ラコニア人 そのとおり、もしお望みとあらば、男のリュシストラトス(2)でも結構でごわす。(一一〇五)

アテナイ人 ところが、どうやら呼ぶには及ばぬらしいて。自分のほうから、声を聞いて、ほらあそこに出て来た。〔リュシストラテ登場〕

コロス これはこれは衆にすぐれて勇ましいお方。さてこんどは賢明、立派、卑小で堂々、うるわしく、経験に富んでいなくてはなりません。ギリシアじゅうの第一の者どもが、あなたさまの呪法にかかって、あなたさまに降参いたし、全事件の仲裁方をご一任いたしました。(一一一一)

リュシストラテ 彼らが恋の心に荒れ狂い、しかもまだ互いに近づき満足を得ないでいるうちに捕えれば、それはなんのむずかしいことでもない。今すぐにわかるでしょう。「和睦」はどこにいますか？ まずラコニア人をこなたに連れてまいれ、だがしかし、乱暴に強引に引き立ててはなりませぬ、わたしたちの主人らが愚かにもそうしたように、してはならぬ、いいえ、そうではなくて、婦人方にふさわしいように、そつなくやらねばならぬ。手を引くことを拒むなら、まん中の手で引いて来い。さあ、それからまた、アテナイ人をつれてまいれ。何であろうと差し出した物をつかんで引いて来い。ラコニアの方々、わたしのそばにお立ちください、それからあなた方〔とアテナイ人に〕はそこに。そしてわたしの言うことをお聞きください。(一一二三)

わたしは女ではございますが、思慮分別はちゃんともっております(3)。わたしは生れながらに悪くはない頭の持主のつもり、父親と老人たちの言葉の数々、聞いたおかげで教養も立派にございます。あなた方をいっしょにして、いっしょに正しい譴責を与えたいと存じます。あなた方は同族の者として、挙げればいくつもあるうちに、オリュムピア、ピュティア、ピュライア(4)の祭に、一つ水盤より聖壇に水を注ぐ間柄でありながら、虎視眈々とねらう夷狄のあるも構わず、戦争でギリシアの人を、ギリシアの市を、滅ぼしている。あなた方に対する共通の言葉はこれで終りました。(一一三五)

アテナイ人 おれはもういきり立って、死にそうだ。

リュシストラテ 次にラコニアの皆さま、さあ、あなた方の番でございますよ。ラコニア人のペリクレイダス(5)が、昔ここへやって来て、真紅の戎衣に真っ青で、アテナイ人に軍隊をさし向けてくれえと頼みこみ、祭壇に訴願人となって坐ったときのことをあなた方は知らないのですか。そのときメッセネはあなた方に襲いかかり、同時に大地は打ち震いました。四千の重甲兵をひき従えて赴き、キモンはまったくラケダイモンを救いました。アテナイ人からこの恩恵を蒙りながら、恩人の地をあなた方は荒しているというのですか。(一一四六)

アテナイ人 リュシストラテ、確かにこいつらが悪い。

ラコニア人 おいどんらが悪い。〔とリュシストラテをじろじろと眺めて〕とはいえ、なんとよか尻でごわすな！

リュシストラテ 〔アテナイ人に向かって〕ところであなた方アテナイ

人をそのまま許すとお考え？　羊の皮の前掛[1]をかけているあなた方をラコニア人がやって来て、槍先で大勢のテッサリア人を打ち滅ぼし、大勢のヒッピアスの仲間と味方を打ち滅ぼし、その日ただ一人の味方となって、あなた方を解放し、皮の前掛のその代りに、市民にマントをふたたび着せた、そのときのことを知らないというのですか。（一一五六）

ラコニア人　これほどよか女子（おなご）は見たことがごわせん。

アテナイ人　こんな見事な弁天さまのお社は見たことがない。

リュシストラテ　こんなにお互いに親切をつくしたあいだなのに、どうしてあなた方は闘って、喧嘩をやめようとはしないのですか。どうして仲直りしないのですか。さあ、何が邪魔なのですか。（一一六一）

ラコニア人　おいどんは仲直りしたいものじゃが、ただし条件がごわす。あの廻しマントを返してくれれば。

リュシストラテ　なんですって？

ラコニア人　ピュロス[2]のことでごわす。前からここがほしくて、さわってみたくてむずむずしていた。

アテナイ人　いやぜったいにいかん、けっして許さんぞ。

リュシストラテ　ねえ、返しておあげあそばせな。

アテナイ人　だがそれじゃ、闘いの場所がなくなる。

リュシストラテ　なに、ほかのところをその代りに要求なされればよろしいでしょう。

アテナイ人　はてね、それじゃあと、まず第一に弁天が岡[3]に、後ろにあるふっくらした林檎湾（イーリス）とメガラの脚とをこっちによこせ。（一一七〇）

ラコニア人　いいや、みんなはならんぞ、この気違いめ。

リュシストラテ　いいわよ、脚のことで争うのはおやめなさい。

アテナイ人　いや、もう着物を脱ぎ棄てて、裸で畑を耕したいものだ[4]。

ラコニア人　おいどんは、朝早くに肥えを運びたいものでごわす。

リュシストラテ　和睦なされば、そうできますわよ。そうすることにきまりましたら、協議して、おいでになって、味方の方々とよくご相談あそばせな。

アテナイ人　味方とだって？　ああ、もうたまらん！　われわれ両方の味方はまったく同意見だ、すなわちやること。

ラコニア人　神かけて、おいどんの味方も同じでごわす。

アテナイ人　ゼウスに誓って、カリュストス人も同じだ。（一一八二）

リュシストラテ　そのお言葉結構です。さあ潔斎してください。女たちが城山（アクロポリス）であなた方をわたしどもの食物籠のなかにある有り合せのものでご馳走いたしますから。そこで互いに誓言して、保証を交わして戴きます。それからめいめいご自分の奥さまをお連れになって、お帰りください。

アテナイ人　さあ、早く行こう。

ラコニア人　どこなりとお望みしだい。

アテナイ人　そうだ、早く早く。

〔リュシストラテ、両国の使節たちとともにアクロポリス内に退場〕

コロス　五彩の布も
マントも被いも
黄金（こがね）の飾りも、おれさまのもってる限り、
少年たちに誰だろうが
惜しまず貸そう、
聖籠捧持の娘にも。（一一九〇）
さあ、みんな、今こそ家の
なかからおれの財宝を
勝手に取れよ、
なんだってその封印が
破れぬほどにていねいに
しまっちゃないぞ、
内にある物はなんでも取り次第。
だがしかし、眼を皿にして探しても（一二〇〇）

何にも見えまい、お前がおれより
眼がよくなければねえ。

もしも誰かが召使やら
大勢の小さい子供に
食わせにゃならず、飯がないなら、
すばらしい小麦をおれから
もらえるぞ、
素敵な大きな
パンもある。
誰でも構わぬ、貧乏で
ほしい男は取りに来い、
革の袋や合財袋を肩にして
おれの邸へ取りに来い。おれの家来の
マネスが袋に入れてくれるだろ。
ところが、待った、おれさまの
家の戸口に近づくは、こいつぁ
危ない、嚙み犬にご用心だ。

〔市場でうろついている連中の幾人かが使節のご馳走になっている家の戸口に近づき、押し入らんとする。門番とその下役、登場〕

市場の連中・甲[1]　戸を開けろ！

門番　さっさと行っちまえ！

連中・甲　なんだってぼんやりしてるんだ。てめえをこの松明で黒焼にしてやろうか？　だがこりゃつまらねえ俄か芝居だ。やめとこう。だが、見物方のたってのご所望とあらば、お気に召すよう、一番やりますぜ。

連中・乙　おれさまたちもおめえを助けて片棒かつぐぜ。

門番　とっとと行け。さもないと頭の毛はとんだご災難だぞ。さあ、どけ、ここにおいでのラコニアの方々がご馳走がすんで、静かに立ち去られるように。

〔アテナイの使節ら出て来る〕

アテナイ人・甲　こんな宴会はまだお目にかかったことがない。ラコニア人たちはじつに愉快だったな。こっちはこっちで酒席ではたいした気のきいた飲み仲間だったなあ。

アテナイ人・乙　まったくだ、われわれがうまくないのは正気のときだけだよ。アテナイの奴らがおれの言うことを聞いてくれりゃ、いつも、どこへ使節に行くのだって酔っ払って行くね。まあ、考えてみろ、ラケダイモンに行くときに、正気だったら、何か仕出かしてやろうときょろきょろしていて、先方が何を言おうが聞きゃしないで、言いもしないことをば勝手に推量し、同じことについてまちまちな報告する始末と相成る。ところがこんどはなんでもよし、クレイタゴラ[2]の句を歌うべきときに、テラモンの歌を歌ったら、そいつをやんやと賞めそやし、おまけに間違いなしだと誓うのだ。

〔門番に追っ払われた連中がまた帰って来る〕

門番　またあの奴らが、ほら、帰って来た。この小伝馬町行きめ、さっさと失せろ。

連中・甲　ほんとになかから出て来るぞ。

〔ラコニア人ら出て来る〕

ラコニア人　おお、好い奴め、さあ笛を取れ、おいどんが、ひとさし舞うて見事な歌をアテナイの方々と仲間の衆のために歌うほどに。

アテナイ人　そうだ、笛を取ってくれ、お願いだ、あんたの踊りが見たいものだ。

ラコニア人　はげませや
若殿ばらを、記憶の女神よ、
なが歌をうたわんために。その歌は
われらがこと、はたまたアテナイ人が勲を知れり、

そのかみアルテミシオン(1)にて、かの人々
仇（あだ）なす敵が船に打ちよせ
神さながらに、メドス人（びと）を打ち破る、
さるをまた、われらをひきいて
レオニダス(2)は打って出でたり、
そのさまは、さながら牙とぐ猪のよう。
その顎（あぎと）には泡吹き出でて、
丈（たけ）なして、肢（あし）をば流れ下る。
浜の真砂の数もものかは。
寄せ来るペルシアの強者（つわもの）どもの数は知れず、
いざ来ませ、こなたへ、処女神よ、
野の御神、アルテミスよ、獣の殺戮者よ、
われらが結びの誓いと、
われらを永久（とわ）に結ばんために。
今こそは
われらが結ぶ約定に
永久（とわ）に変らぬ、豊かな友誼が望み、
やめるが望みじゃ、おお、
狡い狐のその真似はきれいさっぱり
来ませや、こなたへ、こなたへ、
おお、狩人の処女の女神よ。

〔リュシストラテ、仲間の女たちおよび先に（二四四行）人質として受け取ったペロポネソス方の女たちとともに登場〕

リュシストラテ　さあ、すっかりうまくゆきましたから、ラコニアの方、この方たちを(3)〔と人質を指し〕お連れあそばせ、そして〔とアテナイ人に〕あなた方はこの方々。〔と仲間の女たちを指す〕男の方と女の方と、女の方と男の方とが連れ合って、わたしどもの幸運を感謝して、神々さまに踊りを奉納、これから後は、二度とふたたび過ちを重ねぬように用心いたしましょう。

〔と合唱の歌に合わせて踊る〕

コロス　さて合唱だ、雅女神（カリテス）をこなたへ、
迎えよアルテミス、
迎えよ、双生(4)の歓喜にみてるアポロンを、
迎えよ、ニュサの大神(5)、この神は狂乱女（マイナス）(6)たちとともどもに
暴れ狂い、双のおん眼は火にかがやく、
迎えよ、焔に燃え立つゼウスの大神、
迎えよ、幸（さち）多きその御妃（おんきさき）(7)の女君、
次に迎えよ、天地の諸霊を
キュプロスの御女神、アプロディテがなし遂げたもうた
寛（ひろ）い心のこの和平の
未来永劫忘れることない証人(8)に。
アラライ、イエ、パイエオン、
脚をば蹴上げて、イアイ、
勝鬨あげて、イアイ、
エウオイ、エウオイ、エウアイ、エウアイ。
さあ、ラコニア人、もう一つ新たな歌が所望じゃ。

ラコニア人　麗わしいタユゲトスを後にして
たたえんとて、ラコニアが詩神（ムーサ）よ来ませ、
われらがアミュクライ(9)の御神と
　銅（からかね）の宮居にいますアテネ(10)を、
エウロタス(11)の河辺にて戯れ遊ぶ
気高いテュンダレオスの御子ら(12)を。
エイア、さあ(13)、舞おうぞ、
羊の皮の縁取り軽く、
いざスパルタをほめたたえん、
これはこれ神々のコロスと

高い足拍子の国。
乙女らは仔馬のように
エウロタスの河辺にて、
足取りかろく、あなたこなたへ
飛び交うて、
髪はみだれる、テュルソスの枝(1)ふりまわし、
戯れる、バッケー(2)たちのそれのよう。
音頭をとるは、きよく
麗わしいレダが娘(3)じゃ。
いざやいざ、乱れる髪を押えよや
両手でもって、足では跳べや、
鹿のよう、合唱を喜ぶ声も
高々と
いとも剛毅(ごうき)な戦いの
銅(からかね)の宮居にまします女神を
ほめたたえよや。

訳註

二五四 (1) ディオニュソス＝バッコスのこと。これはまたアテナイ婦人の酒好きに対する揶揄。

(2) 山羊の耳、角、脚をもった牧畜の神。酒神の伴侶で、猥らな神。本来ペロポネソス中央部高原アルカディアの出であるが、アテナイにおいても、アクロポリス山の懸崖、城門の北側の一洞穴に祠をもっていた。

(3) コリアス、ゲネテュリスはともに愛の女神アプロディテの別名であるとともに、女神に従う神のなかに数えられている。これもまたアテナイ婦人の男好きの心に対する皮肉。

(4) 以下の形容詞、事件と男根の二重の意味に用いられている。

(5) この劇の上演（前四一一年）当時、アテナイは、前四三一年以来の、スパルタとの戦争の最中にあり「ペロポネソスの人たち」（三三行）というのは、敵方を指す。

(6) 有名な、ボイオティアのコパイス湖の鰻を指す。

(7) これは黄色の下着または肌着で、アテナイ婦人のあいだで流行の色であった。

(8) エレウシスの秘教の主神たる、大地と収穫の女神デメテルと、その娘で冥府の女王ペルセポネを指す。

二五五 (1) あまりにも民主的な、ペリクレス以後のアッティカ式衆愚政治は、急場の間に合わず、しばしば時機を逸した。

(2) 神話中のアッティカの古王パンディオンが区分した三区の中の、海岸に沿った区域。

(3) 「伝馬」とここに訳した kelēs は「乗馬、俊馬」または「小船の一種」の意味であって、これは一方においてはなはだ淫猥な意味を有する。なお、「朝早く」にもまた特別な意味があった。

(4) アカルナイの人。非常に迷信深くて、外出のたびに、かならず自分の家の戸口にあるヘカテ女神にご託宣を求めたという。そのため、「テアゲネスの神棚」なる諺があり、ここでは夫のことがその妻に移されているのである。ヘカテの小さな像や神棚は、アテナイの街にごく普通に見られるものであっ

て、市民は、月の女神としてのヘカテが、夜のあいだ自分の家を保護してくれるように、その戸口にこの女神の神棚を設けていた。

(5) アッティカの一区の名。これはまた anagyris と称する悪臭を放つ植物と同じ名であるので、「アナギュリスを動かす」という諺が、「不愉快なことをもたらす」意味に用いられていた。六八行の「アナギュルスを動かす」はこの諺にかけての洒落。

(6) この言葉は、少女のころから男のように身体を鍛錬しているので名高かったスパルタの婦人に対する讃辞。

(7) スパルタでは女も男と同じように運動競技によって身体を錬ることを要求せられた。したがってスパルタ婦人の見事な身体は有名であった。ここでもリュシストラテはランピトのよく発達した美しい身体を撫でまわして驚嘆するのである。尻蹴り跳びというのは、この運動訓練のなかの一つで、跳び上がると同時に尻を足で蹴る、bibasis と呼ぶ型。

(8) 犠牲に供える獣は、欠点がないかどうかを調べるために撫でまわした。

(9) 一行前の「はら」、すなわち下腹部に生えているものを指す。抜毛はギリシア婦人の化粧の一つ。

(10) 原文には「コリントスの女」と「コリントスの地」の二様の意味があり、次の行の「ほら、ここのところが」は、言うまでもなく意味明瞭であるが、またこれはコリントスの有する港に対する意味も含まれていると考えられる。

二五六 (1) エウクラテスに関しては未詳。古註の「エウクラテスはアテナイの将軍なり。賄を取り、売国奴、外国人として揶揄せられたるものなり」とあるのは、何を指すか未詳。ただしこのエウクラテスは、アテナイの有名な将軍、政治家で、シシリア遠征の総帥として、かの地で死んだニキアスの兄弟で、のち三十人の政権下において処刑されたエウクラテスらしい。

(2) スパルタ人は被支配階級たる農奴ヘイローテスの反乱を恐れて、武器が利用されないように、楯は、使用しないとき、すなわち戦争に出ていないときには、楯の紐や把手をとりはずしておき、出征のときにこれをつける習慣であった。

(3) 小アジアのギリシア植民地イオニアの最大の都市。この市は、この劇の上演された前年、すなわち前四一二年の夏に、アテナイより離反して、ペロポネソスの味方となった。古くより爛熟せる文化で有名であり、風紀の点でも香ばしからぬ評判の持主であった。「八本指の長さの革袋」は恐らくこの市よりとくに輸出されたものであろうか。

(4) 本文 skytinē'pikouria「革の援助」。これは諺の sykinē epikouria「無花果の援助」とかけての洒落。無花果の木は弱いので、友人につれない援助しか与えない人間の譬えに用いられる。

(5) これは、マントを脱ぎ捨てるというので、何か重大事、たとえば格闘するというようなことを言うかと思わせておいて、酒を飲むという、まったく見当はずれのことで結んで見物を笑わせる、喜劇の常套手段である。以下この例が多い。

(6) 鰈やひらめのように扁平な魚は、本来一尾のものが二つに裂かれたと考えられていた。

(7) スパルタの西方に、ラケダイモンの平野を画して聳え立つ大山塊（最高峰二四〇七メートル）。

(8) 原文は「ポセイドンに箱船」。これはソポクレスの『テューロー』という、今は失われている悲劇を指す。サルモネウスの娘のテューローは、海神ポセイドンと通じ、双生児を生んだが、これを隠すべく箱船に入れて流す。このところ、古註は、「その心は、わたしたちは性交と子を生むこと以外には、何ものでもないという意味である」と言っている。

(9) エーゲ海上、キュクラデス群島の南端にある島。この地の麻製の布は有名で、非常に薄く、透きとおっていた。

二五七 (1) スパルタ王メネラオスは、トロイアの陥落のとき、トロイアの王子パリスと出奔し、トロイア戦争の原因となった不義の妻ヘレネを殺すべく、刃を構えたが、その美しさにうたれて、殺すことができず、かえって相携えて帰国したという話を指す。

(2) アリストテレスよりやや先輩の、有名な喜劇作者のことであるらしいが、古註家たちは、その時代に残存していたペレクラテスの喜劇中には、これに該当する箇所を見出すことができなかったらしい。「皮のむけた犬をむく」とは、諺で、「無益の努力」を意味するのであるが、ここではもちろん、前出（一〇九行）の革製品を指している。

(3) これはペリクレスが、ペロポネソス戦争の初めに、特別の重大事に備え

て、守護神アテナの神殿にたくわえておいた、一千タラントンを指す。この劇上演の前々年（前四一三年）に、シシリア遠征が失敗に帰し、アテナイの大艦隊と軍隊とが全滅したため、アテナイの同盟諸都市も続々とスパルタに通じて反乱し、アテナイは非常な窮境に陥り、急遽、新艦隊建造の必要に迫られ、ついにこの金をこれにあてることに決した。そこでこの銀の使用はすなわち戦争の継続を意味するので、女たちは使用を阻止せんものと、後にあるごとくに、この銀の貯蔵所たる、アテナの神殿パルテノンのある城山（アクロポリス）を占領するのである。

（4）「城山を占領」ということは、また革命を意味する。クーデターをやる者は、必ずこれを占領するを常とした。

（5）アテナイではスキュティア人の奴隷が巡査の役目にあたり、弓矢で武装して、会議の守衛をした。したがって婦人の会議には女のスキュティア人の警官がいるというのである。

（6）犠牲獣を切り裂いて、そのいろいろな部分を重大な誓いの印に用いるのは、古くからの習慣であった。「アイスキュロスのお芝居」というのは、『テーバイに向かう七将』四二行以下における、テーバイにむかうアルゴスの七将が、敵陣の前で牡牛を屠って、楯のなかにその血を注ぎ、これによって戦さの神に誓う箇所を指す。

（7）牡牛の代りに羊にしたのは、「牡牛」は男性の象徴であるのに反して、「羊」は「乳房」の意味をギリシア語でもち得るから、ここは両者にかけての洒落。

（8）馬は前出（六〇行）の馬と同じく、性交の型を示す。

（9）ギリシアでは葡萄酒に水を割って飲むのが普通であって、生のままで飲むのは大酒飲みのやることになっていた。

（10）これは酒甕を犠牲獣になぞらえ、「猪」と呼び、犠牲獣の喉を切って血を注ぐように、酒甕の封を切って葡萄酒を注ぐというわけである。

二六八（1）これは吉兆を意味する。古註によれば、犠牲の際に神官の言う言葉である。

（2）最初に誓うことは最初に盃を口にすることであり、女どもはみな酒を見て喉をならしているのである。

（3）ギリシアの宴席では、その席の一切の手順を指揮する者が一同のあいだより選ばれて、これがその席のいろいろなことを取りきめ、どういう順に盃を飲み廻すかをも決定する。この場でも、女どもは犠牲であることを忘れ、香がよいの、まず最初に飲ませろなど言うが、カロニケにいたってはまったく酒盛りのつもりになって、順番にあたらなくてはだめだと主張するのである。

（4）交合の一つの型で、四足になること。なおギリシアのチーズけずりは、小刀の一種で、その柄には銅や象牙の、象、獅子等の彫刻がついていた。

（5）一七五行以下のリュシストラテの言葉にある老婆の一隊が城山を占領すべくやって来て、これを奪ったのである。

（6）ラムピトの伴の女たちを指す。

二六九（1）喜劇のコロスは二十四人より成っているが、この劇ではこれが二つに別かれ、十二人の老爺と十二人の老婆の組になっている。おのおののコロスに長があり、後出のストラテュリスはおそらく老婆コロスの長と同一人であろう。老婆のコロスはすでにアクロポリス内にあり、これに対して老爺のコロスが丸太を背に、火種を壺のなかに後生大事に消えないようにかこいながら、登場する。まず老爺のコロスが入場の歌（パロドス）を歌う。

（2）コロス中の老爺の一つの名。特別に誰を意味するのでもない。後出のストリュモドロス、ピルルゴスも同じ。

（3）一度の投票でやるのは法に反するのであるが、老爺どもはいきり立っているので、興奮激昂したアテナイ民衆が時折そうやったように、この簡単な手続きで、死刑にしてしまえと言うのである。

（4）古註によれば、リュコンの妻、アウトリュコスの母、ロディアを指す。彼女はその不埒な行為のために、同時代の大喜劇詩人エウポリスの「市々（まちまち）」のなかで諷されたという。リュコンは、アリストパネス『蜂』一三〇一行参照。彼は後にソクラテスを訴えた人々の一人として有名である。

（5）スパルタ王（およそ前五二〇—四九〇年）。彼はクレイステネスのアテナイ民主化を妨げるべく、イサゴラス及び三百人の招きに応じて、アテナイに来た。このときクレイステネス自身は、王を避けて身を退いたにもかかわらず、イサゴラスに政権を委ねんとし、かえってアテナイ人の反対にあい、アクロポリスを占領してここに立て籠り、包囲されて三日目に降参し、スパルタ人とともにアッティカを去った。二八〇行の「六年のあいだ」というの

は、ほんとうは、二日間なのを、大袈裟に言ったもの。

(6) アクロポリスの正門たるプロピュライアに至る道は相当に急な坂になっていて、その鈍い背のごとき形は、まさに「鼻べちゃ坂」の形容にそっくりである。

(7) 老爺たちは壺に入れた火種をもっている。これを消さないように、フーフー吹くのである。二九七、三〇八、三一五行を見よ。

(8) エーゲ海の北東部の島。火山で、火神ヘパイストスが、母神ヘラによって、天より投下されたところとつたえられ、この島はこの神の崇拝の中心地となった。ただしここでは、次の行の「目くそ」のギリシア語 **lēmai** と **Lēmnion** とにかけた地口。

二八〇 (1) ラケスは、前出（二五四行）のドラケスと同じく、コロス中の老爺の仲間の名であって、特別に実在の人物を指すものではない。

(2) 丸太に火をつけるための、つけ木。

(3) アテナイの城山には、正面の急坂を登ると、プロピュライアがあり、これには五つの扉があった。

(4) 「牡羊」は、また、城門破壊用の棒の意。

(5) この劇上演当時アテナイ軍の司令官は、小アジアのイオニアに面する大島サモスを根城とし、アテナイ市の改革に容喙していた。そこで、ここでも、老爺どもは、女との争いにおいて、将軍たちの誰かが自分の味方をしてくれるかな、と皮肉ったのである。

(6) アクロポリスに上る坂道から眺めると、向かって右側の高い堡塁の上に小さいが実に見事な小神殿があり、ここにニケ・アテナ通称「翼なき勝利の女神」が祀られていた。

(7) 老爺のコロスは、やっとのことで目的地たる城門の前に達し、今やいよいよ火を起こし、その煙が立ち上って、城山に達する。すると二十四人のコロスのなかの残りの十二人より成る老婆のコロスが、遠くより、火を消さんものと、水甕を持って近づき、登場（パドロス）の歌を合唱する。しかし女たちはまだ男たちと直接に顔を合わすにはいたっていない。

(8) コロス中の女の一人。

(9) カリュケ、クリテュラはともにリュシストラテの仲間の女。二人は目下城門の番人の役目をしている。

(10) 処女神アテナは鎧兜に武装した姿で表わされていた。次の「御座」とは、城山をさす。この女神はアテナイ市の守護神として、その城山にまつられていた神々中の主神であった。

(11) アテナの称呼の一つ。ほんとうの意味は不明。

(12) 老爺のなかの一人の名。

二八一 (1) その兄弟アンテルモスとともに、前六世紀の有名な、キオスの彫刻家。エペソスの乞食詩人ヒッポナクスの醜い姿を彫（きざ）んだので、この悪罵をもって名高い詩人は、彼らに対する激しい諷刺詩をものした。一説には彼らはこの嘲罵に堪えず、首をくくって死んだと伝えられる。ここではヒッポナクスがやったように、お前をやっつけるぞ、という嚇し文句である。

(2) 次の行のストラテュリスを指す。彼女はおそらくコロス中の最年長者で、隊長。

(3) ソポクレスの『エレクトラ』六二二行の、アガメムノンの妃で、彼を殺害したクリュタイメストラの言葉で、エウリピデスの現存作品のなかには見出されない。しかし内容とスタイルはいかにもエウリピデス的であるので、あるいはアリストパネスの記憶の誤りであろうか？

(4) コロス中の女の名。

(5) アテナイでは花嫁は結婚する前に、九頭泉（エネアクルーノス）という泉の水を汲んで儀礼的な沐浴をした。ゆえに老婆たちが人にもまれながら汲んで来たのは（三二九行以下）、この泉からの水であろう。

(6) アテナイの陪審員となって、「裁判所」に座を占め、わずかの目くされ金を日当に貰って、被告の憐れっぽい弁舌を聞くのが、この種の老人どもの唯一の楽しみであった。

(7) 「竜神さん」は原文「アケロオス河神よ」。アケロオスは、ギリシア最大の河で、水神、河神として、すべての水の根源と考えられていたので、ここでは水の代用として用いられたのである。

(8) プロブーロスはペロポネソス戦争中、シシリア遠征軍が全滅し、国が危機に瀕したとき、前四一三年に選ばれた、四十歳以上の市民十人より成る、最高の委員会の委員の名である。彼はスキュティア人の警官を伴っている。

(9) これは騒ぎを鎮めんと出て来た役人が、女どもの集まっているのを見て、二五七ページ註（5）を参照。

また例の、東洋より輸入の、女どもの好きなお祭騒ぎかと感違いしたのである。

(10) 原文はサバジオスの複数形。これは小アジアのプリュギアの神で、酒神ディオニュソスと同一視されていた。

(11)『平和』一八一ページ註(3)参照。

(12) アテナイの不幸なシシリア遠征が計画されたときに、その指導的な役割をつとめた政治家。この遠征が民会で認められ準備が進められているあいだに、アテナイではアドニス祭があり、その嘆きの声が市にみちたので、これは不幸の前兆と考えられたという。

(13) ペロポネソスの西北岸、イオニア海中の島。この地の重甲兵がシシリア遠征のアテナイ軍中に加わっていたことは、ツキュディデスによって知られている。

二六二(1) 海神とはポセイドン。この神は海と馬との両方の神様であるので、海軍の建設に忙しかったプロブーロスが、とくに「海」を強調したのである。

(2) アテナイは、シシリア遠征の失敗によって多くの兵と艦隊を失ったが、なお屈せず、新たに艦隊を建造することに決し、その資金としてアクロポリス山上のアテナ女神の神殿パルテノンに、戦争の始めに非常用としてとっておいた一千タラントンの銀を用いることとし、その管理を、十人のプロブーロスに委任した。そこでそのなかの一人たる彼がこれを取りに来ると、女どもが占領している。女どもは、アクロポリスにあるこの金を使わせないで、戦争を終らせるのが、占領の目的である(一七四―九、四八七、六二四)。さらにアテナイ軍艦建造上の悩みの一つは、木材に乏しいことであって、そのなかでも軍艦に用いる非常に長い櫂のための、まっすぐな堅い木は容易に求め難く、その供給をマケドニアに仰いでいた。

(3) スキュティア人の巡査を指す。彼らは弓矢をもっていて、こう呼ばれていた。

(4) アテナイの伝説的王ケクロプスの娘。彼女をまつった祠が、アテナイのアクロポリス山上、エレクテイオン神殿西側にあった。

(5) ヘカテ、月神、アルテミス女神のこと。

(6) 一撃をくらって、紫色に腫れ上がったところにつけるためである。

(7) オレステスとイピゲネイアがタウロイからもらってきた女神。

二六三(1) 四五七・八行に呼ばれている市場の売女どもは、その勇み肌と口の悪いので有名であった。

(2) 戦死者の身につけているものを剝ぐ習慣が当時あった。

(3) **Kranaa** はアテナイのアクロポリスの古名。アクロポリスは全体が巨大な岩塊で、山全体が聖域であった。

(4) アテナイの政治家。民主政体を覆えして、四百人の政権を建てんとした際の主謀者。この政権顚覆後スパルタに遁れ、欠席裁判で国家に対する謀反人の判決をうけた。彼は腐敗、臆病、肥大漢としてつねに喜劇作者の嘲笑の的となっていた。

二六四(1)「前の戦さ」とは、ペロポネソス戦争の始まりからニキアスの和平にいたる(前四三一―四二一年)戦いを言う。

(2) 講和条約その他の国際間の条約は、法令やその他の公文書と同じく、石に刻んで建てた。

(3) ホメロス『イリアス』六巻四九二行よりの引用。これは戦場に出んとするトロイア方の大将ヘクトルが、別れに臨んで、妻アンドロマケの心配を鎮めるべく言った言葉の一部である。

(4) 女が糸を巻くときに毛糸を入れておく籠。

(5) アテナイの婦人は、毛糸を梳いたり、織物を織ったりするときに、何か始終口に入れていた。ここで「豆」というのは、特別にアテナイの女がこういうときに豆を好んだというのではなくて、アテナイの男どもが豆を選挙のときに用いたからで、かかる投票用豆は役人にはむいているという洒落である。

二六五(1) **Kyprogeneia** は愛の女神アプロディテの称呼の一つ。

(2) 原文 **Lysimakos**「戦闘を止める女たち」。これはリュシストラテ(「軍隊を解く、やめさせる女」の意)と似た意味の名前である。

(3) この劇上演当時のアテナイの危機に際して、アテナイ市民は武装して市中を歩いた。

(4) キュプロス島上のアプロディテ崇拝の中心地で、有名なこの女神の神殿があった。

(5)「気違い坊主（コリュバンテス）」(**Korybantes**) はプリュギアの大地大神キュベレに仕える神官で、武装していた。この女神崇拝者は狂気のごとくに踊り狂うをつね

とした。

(6) ギリシア神話中、ペルセウスによって退治せられた、その頭髪が蛇より成る、その顔を見る生物をただちに石化したと言われる女性。これを楯の紋章にしていたのは、アテナイの有名な将軍ラマコスであった。

(7) アテナイの騎兵は良家の子弟より成り、頭髪をアポロンのごとくに長く延ばしていた。

(8) トラキア人はアテナイ軍の補助として雇われていた。小楯と短槍はトラキア人の特徴たる武器である。

(9) 伝説的トラキア王。のち戴勝鳥（やつがしら）と化したという。ここではトラキア兵がこの鳥のごとくにもったいぶっている様子をいう。

二六六 (1) 「小豚」とは、エレウシス秘教入会のときに犠牲（いけにえ）にするもので、ここでは死ぬ前にこの秘教に入会していないと死後の安楽が得られないからである。

(2) 「蜜煎餅」は、地獄の門番たる怪犬ケルベロスに死人が投げ与えることになっていた。

(3) 「これをお取り」のこれは、三途の川の渡し守カロンに与える船賃として、死者の口のなかに入れる一文銭（オボロス）を言う。

(4) 友人たちから死者に贈られる頭にまくリボンの類を指す。

(5) 死者の頭を飾る、その季節の花であんだ冠のこと。

(6) これはエウリピデス『アルケスティス』二六〇行以下のパロディーか？

(7) アテナイの最後の独裁者。前五一〇年に追放された。ここでは、老人たちが、ありもしない陰謀を嗅ぎ出そうとするアテナイ民衆を皮肉ったもの。

(8) その女々しさのゆえに、つねに喜劇作者の嘲笑の的となっていたアテナイ市民。

(9) 例のアクロポリスにある、一千タラントンを指す。陪審員の日給三オボロスもまた、このなかから支払われていた。

(10) アリストゲイトンとハルモディオスとは私怨から、ヒッピアスとヒッパルコスの暗殺を企て、ヒッパルコスは殺したが、ヒッピアス暗殺は不成功に終り、ハルモディオスはその場で斬り殺され、アリストゲイトンは捕えられて処刑された（前五一四年）。しかしペイシストラトス一族の独裁政権は前五一一年に覆えされたため、両人は市の解放者とあがめられるにいたり、二人の像が立てられた。六三二行の「てんにん花の枝のあいだに隠し持ち」は、スコリオンと呼ぶ、宴席で歌う形式で作られた、この二人を主題とした有名な歌からの引用である。

二六七 (1) 以下に次々に挙げてあるのは、アテナイの良家の少女が仰せつかる宗教上の晴れの役目である。まず七歳から十一歳のあいだの少女から、アクロポリス山上のエレクテイオン神殿におけるアテナ女神に、一年間奉仕すべく四人が選ばれる。彼らはアレポリア祭において、函のなかに入れたいろいろな秘物を運ぶ役目をするので、「アレポロス」（聖函捧持の童女）と呼ばれた。

(2) これは聖菓を作るために、聖なる臼を挽く役目の少女で、十歳以上のもののから選出せられたらしい。

(3) アッティカのブラウロンには、イピゲネイアの神話で有名な、人身御供を求めるタウロイのアルテミス女神の神域があり、アッティカの乙女は、ブラウロニア祭において、アルテミスの神獣たる熊をかたどって、黄色い衣裳を着て、熊の真似をしなくてはならなかった。ただし、ここに言う祭はアクロポリス山上のこの女神の祭を指すものであろう。

(4) これはパンアテナイア祭における、聖なるいろいろな物を入れた籠を頭にのせて、祭の行列に加わる、アテナイの乙女のもっとも名誉な役目である。

(5) ペルシア軍撃退後、デロス同盟をつくって、ペルシアにあたるべく、同盟諸都市にアリステイデスが割り当てた貢（前四七七年）を指す。

(6) 「白足党（レウコポデス）」は、かつてペイシストラトス家の独裁政権を倒すべく闘ったアルクマイオニダイの人々に与えられたあだ名「狼足党（リュコポデス）」をもじったもの。六六六行の「レイプシュドリオン」は、狼足党が独裁政権顛覆の機をねらいつつ、たて籠ったところの、アッティカのパルネス山中の塞である。彼らはこのときには失敗したが、後、ついに前五一一年、スパルタ王クレオメネスの支持を得て成功した。

(7) ペルシア戦争の際に、ペルシア方に加わり、サラミスの海戦で奮戦した、カリアの女王である。日本ならば、巴御前、板額というところ。

(8) 前五世紀前半の大彫刻家、画家。神話中のアマゾンのアッティカ侵入と、これを迎え撃ったテセウスとの戦闘を描いたと伝えられている。

(9) 古註によれば、「にんにく」は戦争にもってゆくもの、「えんどう」は投票用の豆で、すなわち戦争も、またお前たちの大好物の投票も、できないようにしてやるぞという意味。

(10) これはイソップのなかの、鷲にひどい目にあわされた甲虫が、復讐のために、たとえ鷲がどこに卵を生もうが、それがゼウス大神の懐のなかであっても、忍びよって、卵を引き出して破壊したという、一寸の虫にも五分の魂という話を指す。

二六八 (1) ラムピトにつれられて来たテーバイの女使者（前出八九行）の名。この名はテーバイの伝説中の王女イスメネ、テーバイ市のアポロン・イスメニオスのごとくに、テーバイの名である。

(2) 夜と冥府、魔法の女神。このお祭に、例のご馳走珍味の鰻をボイオティアから取りよせんとしたのである。

(3) どの法令か不明だが、ボイオティアをとくに怒らせる性質のものであろう。

(4) 古註によれば、七〇六行はエウリピデスの失われた悲劇『テレポス』よりのもじり。七一三行もまた同じ。七〇六—一七行は明らかに悲劇の口調で書かれているから、おそらくこの十二行はすべてエウリピデスの悲劇のもじりであろう。

(5) これは城山（アクロポリス）北西隅の中腹にあったパンの祠に通ずる城壁口のことである。

(6) 雀は愛の女神アプロディテのお使いの鳥で、したがってここでも男の愛に飢えた女が雀に乗って行こうとするのは、きわめて当を得ている。

(7) 古註によれば、女郎屋の亭主の名。

(8) 「ミレトス製のウール」はたいへん上等品として珍重されていた。

(9) 「アモルゴスの麻」に関しては、二五六ページ註(9)参照。次行の「さばかないで」は、麻はまずその外皮を除き、中心部の繊維質を織物に用いる、そのために鉄の櫛ですくのである。

(10) お産の女神。なおアクロポリスは神聖な地域なので、お産や死のごとき不浄によって、汚すことは許されなかった。

二六九 (1) アテナ女神は武装した形で現わされていた。

(2) 「かけめぐりの祝い」とは、子供が生まれてから五日目（?）に、家の炉（これは神聖な火のある場所）の廻りを子供を抱いてかけ廻り、家の神々にお目見得させる儀式である。これによって子供は家族の一員として迎えられ、親戚縁者友人たちはこれを祝って贈物をした。

(3) アクロポリスのエレクテイオン神殿に住むと伝えられていた蛇で、アクロポリスの守護者と考えられていた。

(4) 梟はアテナ女神のお使いで、アッティカにはこの鳥が多いので有名であった。

(5) ギリシア伝説中の有名な女狩人アタランタの夫。彼女は並ぶ者のない走者で、美しかったので、多くの男が求婚したが、結婚を嫌い、自分と競争して勝った者と結婚する、しかし負けた者は殺される、という条件をつけた。それにもかかわらず、多くの若者が競走を申し込んで、死んで行った。メラニオンもまた彼女に恋し、アプロディテ女神の加護の下に彼女と競走し、女神より貰った三つの金の林檎を競走の途中で負けかかると投げる。アタランタはそのたびにこれを拾わんとして追ったので、ついにメラニオンに負け、二人は結婚した。老爺たちは男嫌いのアタランタの話を、わざと逆にメラニオンの話にして、お伽噺の文体で物語るのである。

(6) 「もう戦争に行けなくなる」の意。二六七ページ註(9)参照。

(7) 前四五九—六年のあいだにコリントス人とボイオティア人を破った勇将。

二七〇 (1) 黒尻は毛むくじゃらのことで、勇者の相であった。たとえば神話中の最大の英雄ヘラクレスはこの点がとくにそうであったという。

(2) ペロポネソス戦争の始め（前四三〇—二九年）、アテナイ海軍の提督として、コリントスを封鎖し、ついでペロポネソス方の海軍を破った英雄。

(3) ペリクレス時代にいた有名な人間嫌い。

(4) すべて愛の女神アプロディテの崇拝の中心地。

(5) これは女たちが、恋の女神の援助によって自分たちの計画が成就せんとしていることを見て、あなたさまのいま行なっていらっしゃるところを、ずっとまっすぐに進行させてくださいと言うのである。

(6) デメテルの別名。これは「最初に出た緑の若穂」の意味で、収穫女神たるこの神の別名であった。その小さい御堂がアクロポリスの、すぐ近くにあった。

(7) 前五世紀後半のディテュラムボス詩人で、その詩、容貌、行ないは喜劇詩人のつねなる嘲罵の的であった。ここでもおそらく彼のことであると思われるが、またこの外に kinein「動かす」という意味での洒落でもある。

二七一 (1) 「助兵衛町（パイオニダイ）」(Paionidai) はアッティカのある区（デーモス）の名であるが、paiō

「打つ」は、kineō「動かす」と同じく、エロティクな意味があるので、この両方にかけての地口でもある。

(2) ギリシアでは酒のみならず、ほかの物を食べたりするときにも、乾杯の場合と同じく、「誰々に対して」という習慣があり、愛人同士のあいだでは、これがよく行なわれた。

二七二(1) パンの洞はアクロポリスの西北隅の中腹にあった。

(2) 城門の北、パンの洞のすぐ西にあった泉。その水で、結婚の前日に花嫁がするように、沐浴すれば、穢れはたちどころになくなるというのである。

(3) キネシアスは、ギリシア喜劇によくあるように、革製の大きな一物をつけた扮装である。これはこの喜劇に出て来る男の人物のすべてに共通。

(4) 新婚の花婿のように。

二七三(1) 「ほかの」とは革製一物のこと。

(2) 「犬と狐の混血」という意味で、女郎屋の亭主ピロストラトスのこと。

(3) これ以下九八八行までは、悲劇の愁嘆場の口調のもじりである。九六二行に対する古註は、これは、エウリピデスがこの喜劇と同年に上演した『アンドロメダ』のもじりであると言っている。

(4) 以下男はみなキネシアスと同じく、革製の大きな突起物をつけている。使者はこれをなんとかして隠そうと苦心している。

(5) 原文 Konisalos これはプリアポスと同じく、アテナイの男根神である。

二七四(1) 「符牒杖(スキュタレー)」は、スパルタ人が戦場に赴く際に用いた暗号用の棒。二つのまったく同じ形の棒を作り、一つは将軍が携える。通信の場合、この棒に細長い皮革をぎっしりとまきつけ、そのうえに通信を書いた後に、解いて送る。一方はこれをまた同じように自己の棒にまいて、これを読むしくみ。

(2) パンは淫猥な神さまであると同時に、突然の狂気 (panic) を惹起するとも考えられていたので、この両方にかけての洒落である。

(3) エウリピデスの引用か (?)。

(4) エウリピデスよりの引用か。『ヒッポリュトス』六六四行。

(5) アッティカの最北部、ペルシア戦争の有名な古戦場マラトンの、テトラポリス「四市」と呼ばれた四邑のなかの一つ、海岸沿いの低い沼沢地で、非常に蚊が多く、マラリア病のあるところである。

二七五(1) ムナーはタラントンの六〇分の一である。

(2) アッティカの北方にある長大なエウボイア島上最南端にある市。アテナイの味方で、この劇上演当時にもかなり大勢のカリュストス人の兵がアテナイ市中にいたらしい。彼らは田舎者であると同時に、色好みで有名であったらしい。後出一一八二行を見よ。

(3) これは宴会に行くときの身だしなみ。

(4) アテナイ人は、他の地のギリシア人が、他所からの移住民であるに反して、自分らはアッティカの地に昔よりずっといたことを誇りにしていた。

二七六(1) シシリア遠征軍がアテナイを出発する少し前に(前四五一年)、ある夜市中の多くのヘルメス像が何者かによって破壊せられた。その真犯人はついに明白にならなかったが、このためにアルキビアデスや雄弁家アンドキデスらの若い貴族たちが糾弾せられた。ヘルメス像は四角な半身像で、大きな男根を有し、破壊にあたっては頭部と男根とが叩き落された。

(2) リュシストラテ「軍を解く女」の意味。これをリュシストラトスとすれば、男性になって、同じことを行なう男の意味を有する。

(3) 次の一一二五行は、古註によれば、エウリピデスの失われた劇『女学者メラニッペ』よりの引用。一一二四—二七行の四行は、同じ箇所よりの引用か。あるいは多少これをもじったものであろうと思われる。

(4) テルモピュライにおいて毎秋行なわれた、アムピクティオネス同盟加入都市の集会を指す。デルポイのピュティア祭とオリュムピア祭はともに全ギリシア的大祭として有名であった。この行は古註によれば、エウリピデスの失われた劇『エレクテウス』よりの引用。

(5) 前四六四年にスパルタには大地震があり、全市崩壊の悲惨事に見舞われた。同時にこの年にラコニアのヘイロテスと呼ばれる被征服民族より成る奴隷階級が反乱を起こし、メッセネのイトメ山の城塞によった(第三メッセニア戦争、およそ前四六四—六〇年)。スパルタ人はこれを鎮圧しかね、かつ大地震のために如何ともしがたく、味方の諸都市の援助を求めたが、そのうちペリクレイダスはアテナイに送られ、アテナイは兵を援助に送ったが、このときスパルタ人はかえって援軍を疑い懼れ、ほとんどこれを用いることなしに帰らしめたので、アテナイ人はこれを憤り、「この遠征より初めてラケダイモン人とアテナイ人との不和が明らかとなった」。

二七七(1)　これは下のほうが羊皮でできている毛の服で、奴隷等身分の低い者の着物、独裁者ヒッピアスが、アッティカ内に住むことは許されているが、アテナイ市に入ることは禁ぜられていた追放者に課した不名誉の服装であったらしい。これら反ヒッピアス派の貴族らは、自力ではこの独裁政権を倒すことができず、スパルタの援助を乞うた。スパルタはまず小部隊を送ったが、ヒッピアスの下にあったテッサリアの騎兵隊千名によって破られたので、クレオメネス王みずから大部隊を率いて来り、テッサリア兵を破り、ヒッピアスをアクロポリスに包囲し、ついにアテナイを解放した（前五一一年）。

(2)　ペロポネソスの南西岸にあるところで、ここの湾を塞ぐスパクテリア島は前四二五―四〇九年のあいだアテナイ人によって占領せられていた。リュシストラテの着ているマントとピュロスを取りまいている城壁とにかけての洒落。

(3)　原文 'Echinounta (acc.) は地名であるとともに、また女の局部の意味を有する。メリス湾はテルモピュライの東方につらなる湾で、エキヌスもまた湾に面していた。一一七〇行の「メガラの脚」は、アッティカに隣接したメガラ市とその外港ニサイアとを結ぶ長い城壁のことである。ただしこれは前四二四―三年の冬にメガラ人自身によって破壊されたのであるから、ここでは全然意味をなさず、単に「脚」ということを言いたさに持ち出したものである。

(4)　これと次の行とは、淫猥な意味を有する。

二七八(1)　これ以下、門前の場面は明らかに当時の喜劇の常套手段であった。俄か芝居的場面に対する嘲笑である（一二一八行を見よ）。

(2)　これはスコリオンと称する連歌に似た歌の一つで、宴席で、座興に最初にある題について一人が歌うと、次の者がそれに合わせた歌を歌う。この際に竪琴、てんにんかの枝、盃等が順番を示すべく廻される。この場合には、クレイタゴラの歌を歌うべきところを、間違えて、テラモンの歌を次に歌ったわけである。クレイタゴラはテッサリアの女流詩人（ただし古註にはラコニアの詩人とある）。テラモンはギリシア神話中の英雄。

二七九(1)　エウボイア島の北西岸にある岬。前四八〇年七月、ペルシアとギリシア艦隊の古戦場。一二五三行の「メドス人」とはペルシア人をさす。

(2)　アルテミシオンの海戦と同時に闘われたテルモピュライの戦闘のギリシア軍の総帥、スパルタ王レオニダスのこと。

(3)　前出、一二四四行を見よ。

(4)　アポロンとアルテミスは双生児である。

(5)　酒神ディオニュソスのこと。ディオニュソスは Dio-「ゼウスの」と -nysos の合成語であり、ここにニュサがこの神と密接に関連しているゆえんがある。

(6)　狂乱女(マイナス)は酒神の供をして、踊り狂う女たちのこと。

(7)　ゼウスの妃ヘラのこと。

(8)　これはアポロン神を呼ぶときのかけ声であるとともに、勝利の勝鬨でもある。

(9)　スパルタの南方にあった古都。ここはラコニアにおけるアポロン神崇拝の中心で、有名なアポロンの祭たるカルネイア祭とヒュアキンティア祭がここで行なわれ、ヒュアキントスの墓があった。

(10)　これはスパルタの守護神としてのアテナで、その神殿はスパルタのアクロポリスの西北端にあった。

(11)　ラコニアを貫いて流れている河。

(12)　これは伝説的スパルタ王テュンダレオスじつはゼウスとレダとのあいだに生まれたカストルとポリュデウケスの双生児の英雄を言う。

(13)　スパルタ人の着物の下部は羊皮または羊毛で縁が取ってあった。

二八〇(1)　酒神の信奉者が持っている、蔦(つた)と葡萄の葉で被い、てっぺんに松露をつけた杖。

(2)　酒神に従う狂乱女。

(3)　レダとゼウスの娘ヘレネのこと。「きよく」というのは、伝説にあるごとくパリスと姦通したトロイアのヘレネではないという意味である。ヘレネに関してはいろいろな伝えがあり、本来はスパルタの一女神であったらしい。

女だけの祭

登場人物

ムネシロコス　エウリピデスの姻戚の男。
エウリピデス　高名なる悲劇作者。
アガトンの従者
アガトン　悲劇作者、若くて瀟洒なる人物。
布令の女
コロス　テスモポリア祭に参加の女たちよりなる。
女甲　ミッカ
女乙
クレイステネス　アテナイの市民で女みたいな男。
女丙　クリテュラ
市の役人
巡警　弓矢をもったスキュティア人。
こだま　舞台裏の声。
踊り子　エラピオン「鹿の子」

〔舞台の一方に小さい門、劇作者アガトンの家を示す。一方にデメテルの社の入口。右の脇道からエウリピデスとムネシロコス登場。ムネシロコスは年輩の男で、足を引きずりやっと追いついて来る〕

ムネシロコス　やれやれ、燕[1]がこれでもいつかは来るんじゃろうか。朝っぱらからこの人はわしをあちこち引きずりまわして、殺そうてんだね。え、こう脾臓がわしをすっかりへたばらせんうちに、どこへいったいつれてこうてんか、聞かしちゃ貰えないもんかね。エウリピデスさん。

エウリピデス　でもすぐとその場で見られることを、何もいちいち聞く必要はないでしょうが。

ムネシロコス　なんだって、もいちどいってごらん、わしが聞く要はないって？

エウリピデス　ありません、もうすぐ見るはずのことなら。

ムネシロコス　じゃわしが見る要もない？

エウリピデス　ありません、もうすぐ聞くはずならば。

ムネシロコス　どうしろってわしにいうんだ。いかにもうまい文句だがね、君はわしが聞いても見てもいかんというんじゃな。

エウリピデス　つまりそれは、めいめい別の性質のもんですからね。

ムネシロコス　聞いても見てもならんがかね。

エウリピデス　そうですとも。

ムネシロコス　どう別なんじゃね。

エウリピデス　そのときそういうぐあいに別れたんです。つまり大空の気がはじめて別れていって、自身のうちにうごめく四方の生物を生みだしたとき。それで物を見るように、まずはじめに眼というものを、日輪の形になぞらえて巧み出したのです。そいから聴くのには耳を漏斗形にほり開けたんです。

ムネシロコス　その漏斗のおかげで、こう聞きも見もならんてんじゃね、いやあ全く、そいつを教わってわしはまあいかにも嬉しいよ、ともかく利口な人とつきあうてえのは素敵なことじゃからな。

エウリピデス　どっさりそうしたことなら、私から習えましょうよ。

ムネシロコス　じゃあどうだね、そうしたいろんな好いことへ、[1]も一つおまけに、見つけ出してくれんかな、どうしたらびっこになれるかわかるように、両足ともな。

エウリピデス　こっちへ来て、しっかりと気をつけてごらん。

ムネシロコス　へ、こうかな。

エウリピデス　そこに小門が見えるでしょう。

ムネシロコス　いかにも、全く見える、ようじゃがな。

エウリピデス　そら、黙って。

ムネシロコス　黙ったよ、門を。

エウリピデス　お聞きなさい。

ムネシロコス　聞いて黙ったぞ、門を。

エウリピデス　ここにはあの有名なアガトン[2]さんがちょうど住まってるんです、あの悲劇作家の。

ムネシロコス　どんな人じゃね、そのアガトンてえのは。

エウリピデス　アガトンて人があんですよ。

ムネシロコス　まさか、あの色の黒い、がっしりした男じゃ？

エウリピデス　ありません、別な人です、いちども会ったことがないんですか。

ムネシロコス　あのもっさり顎鬚を生やしてんでも？

エウリピデス　いちども会ってないんですね。

ムネシロコス　いや、全く知らん、だから全然面識なしじゃよ。

エウリピデス　あんただってきっと陰間になったんだけど、判らなかったんでしょう。だが横へかくれてかがむとしましょう、誰か召使でも出て来たようです、手に炭火と桃金嬢（てんにんか）[3]の枝とを持って、たぶん詩作のためにお祈りの式をするとこらしく。

〔アガトンの召使戸を開けて現われる〕

召使　〔大仰に〕言（こと）をつつしめ、もろもろの民びとたちよ、
口を閉して。いまこそ詩神（ムーサイ）の群のまどいが、
歌曲をつくりたもうわれらの
主人（あるじ）の殿（との）の屋敷のうちに、のぞみたもうゆえ。
高空もしずけく、風の息吹きを収め、
わたつみのあさぎの波も、さやぐを止めよ。

ムネシロコス　ありゃありゃ。

エウリピデス　黙って。何をいうんです。

召使　翼もたるやからも眠りにやすらえ、
森をたばしる野獣のたぐいも、
脚ぐみを解くことなかれ。

ムネシロコス　ありゃりゃん、りゃん。

召使　今やかの美（うま）し歌の、われらが君、
アガトンどのこそ……

ムネシロコス　やられようてんじゃあるまい。

召使　誰だ、声を立てたは。

ムネシロコス　しずけき高空じゃよ。

召使　戯曲（しばい）の基礎に足場を設けたもうところだ。詩句をつくる外框（そとわく）を新規にまげたわめ、あるいはろくろにかけ、または曲を膠（にかわ）づけにし、または想念を鋳型にはめ、語詞（ことば）をつけ替え、また鑞（ろう）を注ぎ込みぐるっとまろめて、さて坩堝（るつぼ）に入れる。

ムネシロコス　さて情事にふける。

召使　誰だ、のきばに立ち寄る田舎おのこは。

ムネシロコス　お前と、そいから美（うま）しうたの作者先生の、[4]のき先へさ、ぐるっとまるめてねじこんで、この丸太棒をはめこもうと待ちかまえてる者さ。

召使　きっと若いころには、お前ずいぶん色事師だったんだろうな、え、じいさん。

エウリピデス　おい、ねえ君、この人はまあほっといて、ひとつアガトンさんをここへ呼んでくれたまえ、何とでもして。

召使　願いには及ばん、自分からじき出といでだろう、もう作曲を始めといでだから。つまり冬の時分だでのう、詩のふしをたわめあげんのも、容易じゃないんだ、戸外へ出て、日の光にでもあてんことにはな。

〔門内へはいる〕

ムネシロコス　さて、わしはどうしたもんじゃろう。

エウリピデス　待っといでなさい、出て来るから。やれやれ、ゼウスさま、私を今日どうなさろうとお思いなんで。

ムネシロコス　いや、神々にかけて、私は訊きたいんだがな、こりゃいったいなんとしたことじゃ、なんでも歎息したり、つらがったりなさる。何もあんたが隠しだてすることはなかろう、わしの身内だというに。

エウリピデス　とても大した災難がね、私にともうでっち上げられてるんです。

ムネシロコス　どんなことじゃ。

エウリピデス　で、今日というこの日に定(き)められようてんで。エウリピデスを生かしとくか、殺しちまうかってことが。

ムネシロコス　そりゃまたなんでじゃ、だって現在法廷(1)が裁判をやるはずはなし、議会も開かれちゃいないんじゃろうに。今日は掟祭りの三日目の、中日なんじゃからな。

エウリピデス　だってまさにそのことが私の命取りになろうって思うんです。つまり女たちがですよ、私に対して陰謀を企らんでるんですから、そいで掟授けの(2)両神(ふたがみ)のお宮でもって、私の殺しを議題に、今日にも会議をしようってんです。

ムネシロコス　そりゃいったいなんでだね。

エウリピデス　私が芝居を作って、そいで女のことを悪くいうからってんですよ。

ムネシロコス　いやあ、ポセイドンにかけて、そりゃ当然の報いというもんじゃ。が、しかしそれをのがれるどんな策略(てだて)を持っといでかな。

エウリピデス　それで芝居の演出をするアガトンさんを説きつけて、掟の神のお社へゆかせようてんで。

ムネシロコス　何をさせようとてじゃね、言うてごらん。

エウリピデス　女どもにまじって会議に出て、もしもの場合、私のために弁じてもらおうてんです。

ムネシロコス　公然にか、それともこっそりとかね。

エウリピデス　こっそりです、女の着物を着込んでもらって。

ムネシロコス　そいつは素敵な思いつきじゃ、いかにも、お前さんの流儀らしくな。そうした工夫にかけちゃあ、褒美(ほうび)の菓子はわしらのもんじゃて。

エウリピデス　黙って。

ムネシロコス　なんじゃね。

エウリピデス　アガトンが出て来ますよ。

ムネシロコス　はて、どこへじゃね。

エウリピデス　そら、そこへ、台座に乗って出た人でさ。

〔アガトンの家の外壁を開いて、中よりアガトン、車台にのせられ、押し出される〕

ムネシロコス　だがこりゃわしは盲になったかな。わしには誰も男はこのところには見えんが。(歌妓(ヘタイラ)の)キュレネ(3)が見えるだけで。

エウリピデス　黙って。いま歌をうたう支度をしてるところですから。

〔小唄のふしがきこえる〕

ムネシロコス　蟻の通い路じゃな、また何か口ずさもうというのかな。

〔アガトン、自作の劇の科白を朗唱する〕

アガトン　〔まず仕手の役者として〕

乙女らよ、大地の女神らに対しまつり、
神聖な炬火(たいまつ)を手に執って、自由な
心で叫(おら)びあげ、舞いおどるがいい。

〔今度はコロスとして〕
いかなる神霊のため、この群れは頌い狂うか、
さあ、言ってくれ、私の心は、
神々をあがめまつると、信心をささげるものゆえ。
〔仕手として〕
されば、楽神よ、黄金の弓を
たもたす御神ポイボスを祝ぎ[1]
頌いたまえ、シモエイスのへに、
河あいの郷を築いた神を。
〔コロスとして〕
いと美しい頌歌をもてポイボス神に
礼しまいらす、歌舞音曲の競技に
聖い褒美を授けたもうもの。
〔仕手として〕
また檞の木立のしげる山あい、
……かの処女神をうたいたまえ、
狩猟の女神アルテミスを。
〔コロスとして〕
歌い継ぐのはいとも畏い
ラアトオの御子を祝いまつると、
穢れをしらぬアルテミスを。
〔仕手として〕
またラアトオをも（讃えよ）、アシアの琴をかきならしつつ、
プリュギアの拍子に適う
典雅神たちの旋舞にそうて。
〔コロスとして〕
ラアトオの御神をあがめまつる、
また世にしるい神歌の、母なる手琴を、
雄々しいたけびに。
それにつれ、大神の御眼より光がさし出る、
まだわたしらの、突然なたけびにつれて。
このゆえにポイボス神を、あがめまつれ。
いざ来ませ、幸ふかいラアトオの御子よ。

〔老人感きわまってうめき上げる〕

ムネシロコス　なんてやさしい気持のいい歌じゃ、ええ、ややを造りの女神さまがた[2]、それに小娘みたいな、舌のさきをちゅっと吸いの、ちょっぴり先をつき出しの、おかげでそれを聞いてるわしまで、お尻の下がさ、まさにむずむずして来たわ。ところでな、おい、お若い仁、あんたは何人か、アイスキュロス風にあのリュクルゴスの狂言[3]がかりで、訊ねてみようが、「その女々しい奴は何者じゃ、祖国はどこ、その着物はなんじゃ、なんという風俗のみだしようじゃ、その弦は、黄色い衣に、また竪琴は頭髪の網にどう映るのか、膏油のびんと帯しめとは、なんと不釣合いなことじゃ。そも手鏡と剣とは、いかなかかわりがあるのじゃ、ええ」
　さて、君自身は何者じゃね、おい、若い衆、いったい男に育ったものか、ならどこに一物がある。短上衣やラコニア靴はどこへやった。じゃあ女ならどうだいったい。そんならどこに乳房があるね。なんという、なぜ黙っとる。だがそんならいまの歌からでも、お前の素姓をさぐり出すかね、自分で言おうとなさらんなら。

アガトン　これ、これ、老人、ご老人よ、その妬みからでた雑音は今しがた耳にしたが、なんの痛みも感じなかったよ。わたしはこの着物を考えあって着てるのだもの。つまり詩人たる者は、いま制作にかかると定ったその狂言、そいつに似合うた様子をせねばならないのだ。それで例えば、女役の狂言をつくるとあったら、その気質所作にふさわしく、体の方をあわせなけりゃならないわけだ[4]。

ムネシロコス　じゃあ馬に跨るんだね、パイドラを仕組むのにゃあ。

アガトン　で男役の狂言をつくるときには、自分の体におのずからその

性が具わっている。が天性に欠ける場合は、さっそく模倣(まね)をしてそれを捕えるという次第さ。

ムネシロコス　そんなら半羊神(サテュロス)[1]どもを出すときにゃあ、きっと私を呼ぶんだね。張り切って後の方から私が手伝ったげようからね。

アガトン　さはなくとても、野蛮で毛だらけな姿をしてんのは、詩人たるにふさわしくありません。ごらんなさい、あの有名なイビュコス[2]だって、あのテオスの詩人アナクレオンでも、アルカイオスでもみんな甘いしらべのこしらえ手だが、鉢巻きをして、ちょっとこんなぐあいに（身振りをして）立ちまわったんです。プリュニコス[3]もさ、あなたもこれは知っといでだろう、自分がもともと好い男なうえ、衣裳も見事なもんだった。そのおかげであの人の作った芝居も見事なものになったんです。つまり制作てえのは、何がなんでも、その性状に従わざるを得ないんだから。

ムネシロコス　はて、そいだもんでピロクレス[4]は、なりがぶざまだから、ぶざまな作をし、またクセノクレスはたちがわるいから、作もわるい。またテオグニスは味もそっ気(け)もない奴だから、作もそっ気がないんだな。

アガトン　みんなそうならざるを得ない、それを私もわきまえてるから、十分支度をするわけなんです。

ムネシロコス　どんな風にだね、いったい。

エウリピデス　吠え立てんのは止めなさい。私だってもね、こんなんでしたよ、制作をはじめたころは、ちょうど同じい年輩でもって。

ムネシロコス　いや、ゼウスさんにかけて、わしゃ君の教養を妬みはせんがね。

エウリピデス　［アガトンに向かい］ところで私が何のためにここへ来たか、言わしてください。

アガトン　どうぞ。

エウリピデス　アガトンさん、賢者にふさわしいことですね、ながい話を短くしかも立派に切りつめていえるというのは。さて私はとんでもない災難にやっつけられて、こうお願いに、あなたのところへ来たわけなんです。

アガトン　どんな用がおありでもって？

エウリピデス　今日テスモポリアの祭のおりに、女どもが寄ってたかって私をやっつける企らみをしようてんです、私が女を悪くいつも言うって廉(かど)で。

アガトン　ところで、私が、どんなお役に立とうてんで。

エウリピデス　何もかもです。つまりこっそりあんたが女どもの間にまじって相座しながら、女のふうをよそおってですよ、私のために弁疏してくださったら、もちろん私を助けられましょう。あんただけです。私にふさわしく弁ずることができるってえのは。

アガトン　そんならどうして、あなた自身そこへ出て弁解なさらないんです。

エウリピデス　そのわけてえのはですね、まず第一に私はみんなに見知られてますもの。そいからつぎには私はこう白髪[5]だし、顎髯がありますからね。ところがあんたは、男振りもよし、色白で、髯もきれいにそっといでだし、声も女じみて、やさしく、様子もいかさますっきりとして。

アガトン　エウリピデスさん。

エウリピデス　なんですえ。

アガトン　お作にありましたねえ、[6]「そなたが日の光を見てよろこぶに、この父は喜ばぬと思いやるか」って。

エウリピデス　いかにもありますがね。

アガトン　そんならあんたの災難をわたしらが引きうけようなどあてにしちゃ困りますね、そりゃ気でも狂えばだが。それより自分で、もともと自分のことだから、じっくり忍ぶがいいでしょう。いろんな術策(てだて)を用いて艱難に処しようてえのは、正しくない、ただ受けこたえるのが本当です。

ムネシロコス　いかにもな、そうじゃろ君は、おい、でっちり君、君の

お尻のめどがでかいのは文句じゃなくて、受けこたえのせいだろうよな。

エウリピデス　だがそこへ行くのに、何をそう気遣うんです。

アガトン　あなたより、もっとひどい目にあわされますもの。

エウリピデス　どうして。

アガトン　どうしてだって？　きっと女どもの夜ごとのいとなみを盗み取って、婦人の（享けるはずの）楽欲をこっそりかすめさるものと思われましょう。

ムネシロコス　盗み取ってだとな、それよりゼウスさんにかけて、つっこまれてっていえよ。だがその口実は全くもっともらしく聞えるがね。

エウリピデス　どうです、そうしてくださいますかえ。

アガトン　いえ、とんでもないこと。

エウリピデス　ああ、なんて運のわるいことか、もうだめだ。

ムネシロコス　まあま、エウリピデスさん、君はだいじなわしの身内だ、そうわが身を見かぎりなさんな。

エウリピデス　そんならいったいどうすりゃいいんです。

ムネシロコス　この男とはさっぱり手を切ってな、このわしの身を、どうなり好きにしたがいいさ。

エウリピデス　じゃあ、さあ、あんたの身を私にまかしてくれるってんなら、その着た着物をぬいでください。

ムネシロコス　〔着物をぬいで下へおく〕そらこう地面にな。ところでこれからわしをどうするかね。

エウリピデス　〔髯をさして〕こいつを剃り落とすんです。下の方は焼いてとります。

ムネシロコス　そうしたきゃ、するがいいじゃろ。さもなきゃ身をまかさんどきゃよかったからな。

エウリピデス　アガトンさん、君はしじゅう剃刀をもっておいでだから、ひとつ私らにその剃刀を貸してください。

アガトン　自分でそこの剃刀台から持っといでなさい。

エウリピデス　〔ムネシロコスに〕坐って、さあ右の頬をふくらましなさい。

ムネシロコス　あいた。

エウリピデス　何をわめき立てんです。黙ってないと、猿ぐつわをはめますよ。

ムネシロコス　〔とび上がって逃げ出す〕あいたたた、いたたたい。

エウリピデス　こらこら、あんた、どこへ駆けてくんです。

ムネシロコス　かしこい女神がた[1]のお社へさ、いや、もうデメテルさまにかけて、ここにゃおられん、こう切り刻まれちゃあ。

エウリピデス　まったく笑いものになりますよ、半分だけ剃り残して半分だけがすっぺりなんじゃ、あんた。

ムネシロコス　ちっともかまわん。

エウリピデス　どうか、ええ、神々にかけて、たのむ、見棄てないで来てください。

ムネシロコス　やれやれ、ひどい目にあうこった。〔戻って坐る〕

エウリピデス　じっとしてあおむいてください。どっちへ体をねじくるんです。

ムネシロコス　むうん、むうん。

エウリピデス　なぜにそううんうん言うんです、もうすっかりきれいになりましたよ。

ムネシロコス　やれやれ、ひどい目にあった、身軽でこんどは従軍するのか。

エウリピデス　何も心配ありません、とてもきれいになりましたよ、まったく、姿をひとつ見ちゃあどうです、鏡で。

ムネシロコス　そうだな、貸してくれ。〔鏡をエウリピデスから受けとる〕

エウリピデス　どうです、自分の顔が見えますか。

ムネシロコス　いや、とんでもない、こりゃクレイステネス[2]じゃよ。

エウリピデス　今度は立ってください、毛を焼きますから。かがみ込ん

でくださいよ。

ムネシロコス　やれやれひどいこった、祭の仔豚[1]にされちまうんだね。

エウリピデス　誰か家(うち)から松明(たいまつ)か手燭をもって来てくれ。かがみ込んで、そら尻尾の先に気をおつけなさい。

ムネシロコス　うん、よしきた、だがこりゃ身が焼けるぞ、や、や、こりゃたまらん、水だ水だ、おおい、近所の衆、股ぐらに火がもえつかんうち、ぶっかけてくれ。　(二四三)

エウリピデス　大丈夫ですよ。

ムネシロコス　なんで大丈夫だ、こう火を現に焼(た)きつけられておるというに。

エウリピデス　でも、もう何も心配はいりません、こいでだいたい厄介ごともおしまいですから。

ムネシロコス　ふう、やあなんてこりゃひどい煤だ。すっかり股倉一帯、黒焦げになっちまったよ。

エウリピデス　心配なさらんでもいいです。下僕がそれはゆすいでくれましょうから。

ムネシロコス　吠え面かかすぞ、おれの尻をゆすぐなんてえ奴は。

エウリピデス　アガトンさん、あんた自身がやるのはいやでも、せめて着物だけなりこの男に貸してくださいな、それに帯とね。そいつまでまさか、ないとはおっしゃらんでしょうから。　(二五三)

アガトン　持ってってお使いなさい、構いませんよ。

エウリピデス　でどれを持ってくんで？

アガトン　どれって？　この黄色い衣をまずもってって、お着なさい。

ムネシロコス　やあ全くアプロディテにかけて、甘い匂いがするぞ、だが珍香のだな、早く着せつけてくれ、さあ帯をとって。

エウリピデス　それ。

ムネシロコス　そらさあ、脚のへんをちゃんとそろえてくれ。

エウリピデス　頭かぶり[2]とバンドとがいりますね。

アガトン　ここに、ほれ、丸い帽子があります、私が夜にかぶるものだが。

エウリピデス　こりゃまったく、ちょうどぐあいのいいものだ。

ムネシロコス　だがおれに合うだろうかね。　(二七〇)

エウリピデス　ええ、ゼウスにかけてとても素敵です。〔アガトンに〕それと肩かけは？

アガトン　その、長椅子から持ってらっしゃい。

エウリピデス　履物がいるんですか。

アガトン　私のはいてる、これをあげます。

ムネシロコス　だがおれに合おうかな。〔はいてみると合うので〕さてはあんたはゆるいが好きじゃな。

アガトン　おわかりですかね、ではもう入用のものもおそろいだから、誰か早速にも来て私を奥へ連れ込んでくれ。〔車台ごと奥へはいる〕

エウリピデス　さてこの旦那もすっかり様子は女になりましたがね、外見ではまあ。だが物をいうときには十分こえをですよ、よく女に似せて本当らしくやってください。

ムネシロコス　やってみようよ。

エウリピデス　そんならさあ、いらっしゃい。

ムネシロコス　いや、アポロンにかけて、いやじゃよ、あんたがわしに誓ってくれんうちはな。

エウリピデス　何をです。

ムネシロコス　わしを救援してくれるとな、あらゆる策を用いてだ。もし災難でももちあがったら。　(二七七)

エウリピデス　誓いますとも、ゼウスの宮居の高空[3]にかけて。

ムネシロコス　なんでそれがヒッポクラテスめの仲間の宿よりいいんじゃ。

エウリピデス　そんなら、あらゆる神々を根こそぎにかけて誓い[4]ますよ。

ムネシロコス　そこでだ、あれを忘れんでくれよ、つまり「誓ったは心じゃ、舌は誓いを立ててはせぬぞ」とな。わしとて誓いは立てなんだでの。

〔叫び声がきこえ、社殿がおし出され、場面かわる〕

エウリピデス　早くいってください。もう集まりがはじまるという合図の札が、掟授け（テスモポロス）のお社中に出ていますから。私は帰りますよ。

〔エウリピデス退場〕

ムネシロコス　こっちだよ、さ、トラッタ[1]、ついといで、まあ、トラッタ、ごらん、たくさん松明が燃え上って、その煙の火かげに、なんて大勢の女が登ってくることか、さて、おお、美しさきわまりない掟授けの両女神さま、しあわせに（わたしを）お護りくださいませ、ここでもまた帰り路（じ）でも。おおい、トラッタ、その箱をおろしとくれ、そいからお餅を出しなさい、それを持ってって、女神さまがたをお祭りしようからね。

女神さま、いとも畏くあらたかなデメテルさま、それからペルセパッタ[2]さま、いく度もいろんなものを、御前におささげしとりますこの私が、他のときはともかく、今だけは見つからないよう。そいから私どもの娘豚子（トンコ）に金持な夫をお授けくださりませ、でも他は、薄ぼんやりで間ぬけな男を何とぞ。また珍太郎[3]は、利口で分別のある人間になりますように。

〔祈りをおわる〕

どこへ、どこへ坐ったらいいだろう、弁士たちの話が十分よく聴けるいい場所はねえ。トラッタ、お前はあっちへおいで。お下の者たちは、お話をきくのを許されてないんだからね。

〔布令の女現われて[4]会議の始めを告げる〕

布令の女　お謹しみを、しずかに控えてお謹しみを。掟授けの両女神にお祈りなされませ[5]、デメテルさまとコレーさまに[6]。またプルトスさま、カリゲネイアさまに、また若者を養い育てるガイアさま、またヘルメスさま、典雅神女（カリテス）さまにも。

この集まり、これから始まる寄り合いがこのうえなく上首尾にゆきまするよう。このアテナイの都にもいと有益にわたしら自身にもしあわせにまいるようにと。またアテナイの民衆のため、かつは婦人衆（おなごしゅ）のため、最善の道を護りまたつくした女（ひと）が、勝を得ますよう、こうお祈りなされませ。またあなたがた自身には福徳を。〔叫び〕いいえ、ぱいおーん、いえ、ぱいおーん、さあさ、めでたく。

コロス　〔旋舞歌の一〕

かしこまりました、されば諸神が、
このわたしらのご祈禱を嘉納しまして、
ご来降あらんことを祈りまする。
誉れいと高きゼウスの御神、また黄金の琴の、
聖いデロス[7]をたもす御神、はたまたおん君、
抗（あらが）うものなき処女神にまし、きらめく眼（まなこ）に
黄金の槍もち、みなが羨ましがる
この町を護らす[8]御神、来降しませ。
また異名あまたに、野獣狩る乙女、
黄金のおもわのラアトオが御子。
また君も、いともかしこいポセイドン神、
海の御主、うろくずあまたの、
疾風うずまき狂う奥処（おくが）を去って。
うしおのそこのネレウスが娘御たちも、
野山をさまようニンフがたも、
さらにまた黄金の大竪琴も、
わたしらの祈りにこたえて、とどろきませと、
欠けるところなく会議をわれらが
はたし得ますよう、アテナイ市の
筋目正しい婦人衆（おなごしゅ）たちが。

布令の女　祈禱なされませ、オリュンポスにます男神がた女神がたに。またピュトーにます男神がた、女神がた、またデロスにます男神がた、女神がた、またほかの神々にも。もし誰にもせよ婦人の組合にむかい

よからぬ企らみをめぐらし、またはエウリピデスやペルシアにむかって和議を提唱し、何らか女子どもの不利を図らんとするもの、また専制を志し企らみ、あるいは専制君主を呼び戻したり、あるいは贋あかんぼを暴きたてたり、下婢の身で、とりもちをしといてから、主人にそっと耳打ちしたり[1]、使にやられてほんとうでない伝言をしたり、または間夫のくせにうそをついて欺くらかし、前に約束したものをあとになってくれなかったり、または年よりの女が情夫に物を贈ったり、または芸者が物をもらってふるい馴染みを裏切ったり、あるいは商人や女商人の身で一升枡や一合枡のはかりめをごまかすものは、自身も家族もみじめな最期を遂げるようにとお祈りなされ、他のみなさまがたにはいろんな幸を神々が授けられるようお願いなされ。

コロス〔対旋舞歌の一〕

いっしょに祈りましょう、お国に対しても
民衆に対しても、このお祈りがすっかり
とどこおりなく果たされますようにと。
そいで最上の策をすすめてくれる女が
みんなの賛成を得ますように。
また人をだましこもうと企らんだり、
ちゃんと定められている
誓言の面にそむいて利欲にさそわれ、
みんなの不利になることがらを
企らむような女たちだの、
議決したお布令や法律を
変改しようとくわだてたり、
秘密なことをわたしたちの
敵方にむかって洩らすような者、
または利得のため不利をはかって、
ペルシア軍を国へさそいこんだり
する女らは神々をなみし、
国をそこなうひとたちです。
でも全能の（おめぐみ深い）
ゼウスさま、どうかお力により
よし私らは女の身にせよ、
神々がたがご加護くださいますように。

布令の女　さてみなさん、お聞きなさい。〔状を捧げて読みあげる〕婦人たちの本議会は以下の決議をおこないました。議長はティモクレイア、書記はリュシラ、動議者ソストラテ、「掟授け」のお祭の中日朝から、つまりわれわれがいちばんひまなおりに会議を開き、まず第一にエウリピデスにつきいかなる刑罰を加うべきかを論議すること。彼はわれわれ一同に対し有害なものと断定いたしますから。弁論に立とうてえのは誰です。

女の甲　私ですの。

布令の女　演説の前にまずこれをお被りなさい。〔冠をとって渡す、一同に対して〕黙って静かに、よく注意してください、ほら、もう咳払いしてますから、いつも弁士がやるようにね、そうとう長論議らしいわ。〔退場する〕

女の甲〔立ち上って演説をはじめる〕お両柱の女神さまにかけ、決して私は見栄ずくで演説のため立ち上ったのじゃありません。みなさん、ですが、まったく慨歎にたえないからですわ。情けない、もう長いことあなた方があの野菜売り女の息子エウリピデスのため、顔に泥をぬられっぱなしでいるなんて、そいでさんざもうありとあらゆる悪評を立てられっぱなしなんですもの。この男が私どもにやらないような悪事が一つでもあって、誹謗のかぎりをつくさないでいた場合が。手早くいうと、いやしくも見物人や俳優や組舞いのそろったところで、私らを、やれ「密通根性」だの、「他の夫を思う女」だの、酒飲みだとか裏切り者とかお喋りとか、またはてんからろくでなしだの、男にと

っての大厄だのって言ってさ。

そいだもんで芝居小屋からうちへ帰って来るといきなり私たちをじろじろ見て、どこかうちんなかに情男でも隠しこんでやしないかとすぐ探しまわるんでしょ、今までみたいに私たちよろしくやるなんてのはもうてんでだめんなっちまいましたわ。こうしたろくでないことをこの男が、わたしたちの夫におしえたんです。ですから奥さんが花冠でも編んでようもんなら、もう恋をしてるな、と考えんのよ。またもし家のあたりをぶらついてて道具でも投げようもんなら、「誰のために水さしを割った」と夫が訊(き)くしまつだわ。「きっとコリントスから来た客のためにちがいあるまい」、なんてね。

また若い娘でも思ってると、すぐ兄弟がいうんです、「どうも妹のこの顔色が気に入らんな」って。そいからね、どこかの奥さんが子供がないもんで、そっと附替児(つけかえ)をしようと思っても、ないしょでやることもできません、亭主が前からもうそばを離れずについてるおかげで。お爺さんたちもね、これまでは若い娘をお嫁にもらったもんですが、悪口をふき込まれてからもう誰一人年寄りで結婚しようって人はない始末だわ、あの文句のせいでね、「年老いし花婿にとり、妻は女主人(あるじ)にひとしければ」って。そいからこの男のおかげで、みんな婦人室の入口にもう封印をしたり、閂をかったりすることにして私たちを見張るようになったし、そのうえシェパードまで飼い込んで、忍び男を脅そうってんですよ。でもそいつはまあ皆さん我慢なさるとしてもさ、これまでは麦や油やお酒を私たちが宰領して、すきなままに出して使うのも自由でした、それがもうだめなんですよ。なぜって亭主たちがちゃんと自分で、鍵を持ち歩いてんでね、ないしょの、とてもたちのわるい、ラコニア出来とかっていう、三つ尖りのあるやつをよ。以前は封印した扉をこっそり開けたっても、三文判さえ用意してありゃ平気だったのを、今じゃこの三太夫のエウリピデスめが、みんなに虫食いみたいな判こを、しじゅう指にはめてるように、教え込んだんです。

そこで今私は動議します。われわれはこいつをどんなにでもして破滅させねばなりません、毒を盛るとか、なんとか工夫をひとつこらして、ない者にするんです、これだけを私ははっきりと申し立てます。あとのことは女書記さんに頼んで、書いて出すつもりですけど。

コロス　この婦人よりもっと幾重にもいりくんだ、
もっと巧いことをしゃべる女は、
まだ聞いたことがない。
どの話もみなもっともだし（正しいし）、
どの考えもよく検討して、
すべてをさぐり、さて緊密に
こみいった議論をつくりあげてるんだから、
しっかりとしらべておいて。
そいだから、たとえあのカルキノスの子の
クセノクレス[1]がしゃべるんだっても、
この女のそばにおいたら、ま、私の考えじゃあね、
てんで議論をなさないと、みなさんの眼に
見えようっていうものさ。

女の乙　ちょっと申し上げたいことがあってわざわざ出て来たんですが、たいていのことは今の方が立派に告発なさいました。それで私が現にうけた被害だけを、述べようと存じます。

つまり私のつれあいは五人も子を残したままキュプロスでなくなりましたもんで、私はようやっと桃金嬢市場(ミルテ)[2]で花冠(かざし)をつくって子を育ててきたわけなんです。それがこれまではまあやっとこさっとこ身過ぎをしてこられたのを、今じゃこの人が歌舞伎のなかのせりふでもって、神さま[3]なんていないもんだと旦那衆に信じさせちまったんです。それでもう前の半分さえも商売がありませんの。ですからどうかこの男をいろんな理由(わけ)からしても、みなさんが懲罰してくださるようお頼みも勧めもいたしますんです。

ほんとに、ねえみなさんがた、わたしらに野放図なわるさを働くんですよ、自分が野山の菜っぱで育ったせいでしょうが。じゃ私は市場へまいります、旦那衆のご注文で、二十ほど花冠を編まなきゃなりませんもので。

〔退場する〕

コロス〔旋舞歌の二〕

いまの陳述は、また前のより
一段ときっぱりした別な
意見じゃあないかえ。
しゃべりまくったこともみんな
適切だし、すじも立って
いくえにも工夫をかさねてあって、
理由もわかり、みんなもっともなことだもの。
じゃ私らはこうした
罪過のかどで、この男をきっぱりと
処刑にかけてやらなきゃならない。

ムネシロコス〔あわてて立ち上り、弁護演説をはじめる〕みなさんがた、ま、あんたがたがエウリピデスにむかって、ひどくいきり立っておいでなのも、こうした悪行をお聞きのうえじゃ、別にふしぎなことでもありませんわ、腹わたが煮えくり返るのだってもね。わたくし自身にしましても、子供たちのかわいさにつけ、あの男は憎くてたまりませんの、さもなきゃ気違いですわ。ですけどもさ、お互に十分論議はつくさなきゃなりませんでしょ、いまは私たちきりで、よそへ話がもれる心配もありませんし。そんなわけですのに、どうして私たちがあの人を責めたてて苦情をいう筋がありましょう、よしあの人がわたしどものした悪事を二つや三つ、さとって言ったにしてもです、数限りなくやってんだもんね。

第一私にしてからがですよ、他人のことはいわないとしてさ、ずいぶんいろいろやっつけた覚えがありますわ。なかでも、そら、ことに酷いのってばあれだね、お嫁入りして三日目のこと亭主がわきに寝てたんですよ、ところが私にゃかねていい人があってね、その人は私が七つのとき生娘でなくしたんですがね、それが私恋しさにやって来て[1]そっと部屋の戸を爪でひっかくんですの、そこでね、すぐそれとさとりましてね、そいからこっそり降りてこうとすると、宿六がきくんですよ、「どこへお前降りてくんだね」って。「どこって癪の気でとてもお腹がいたむんですのよ、あなた、ですからちょっとはばかりへ行って来ます」「じゃおいで」っていうんで、やどが扁柏の実やはこべや鼠尾草の実をつぶしてるまに、私は（きしまないよう）枢に水を差しといてから姦夫のところへやって来ましたの、そいで道祖神[2]のそばで抱かれたんですの、桂の木につかまってそっとね。こいつはまだこれまでエウリピデスだって言ってないでしょ、ね、みなさん。そいからいつも下男だの、馬丁[3]だのにしょっちゅう身をまかせているなんてこともね、もし別にいい人がいないときはですよ。そいからまた、とりわけ夜分、誰かといたずらをやってたときは、朝っぱらからにんにくをくちゃくちゃかんで、宿六が市の囲壁[4]から戻って来たおり、鼻を利かせて悪さをしてたなんて感づかないようしとくんです。ほうらね、こんなことはちっとも言ってないでしょ。たとえパイドラの悪口をいおうと、それが私たちにとってなんだってんです。あのことだって言ったことないわ、そら、奥さんが旦那のまえへ大きなショールをひろげてさ、どんなに艶々しいか見せつけてるのが、ほんとうは裏に情人を覆しこんで逃してやる手段だ、なんてまだ言ってませんわ。

こんな女も知ってます、そのおかみさんは十日の間も、赤ん坊が手に入るまで陣痛がするっていいつづけてたんです、そいでご亭主が安産の秘方を買いに駆けまわってるうち、年とった婆さんが瓶に入れて赤ん坊を持ち込んで来る、その口には泣き立てないよう蜂の巣をつめこんどいてさ、で、持って来た女がうなずいて合図すると、いきなり叫ぶんですよ、「あっちへいって、あっちへ、ようあんた、いまにも

赤ん坊が生まれそうだわ、ほら、かめの側(1)を足でけってんですのよ。」そこで亭主はよろこんで駆けてく、するとおかみさんが赤ん坊の口から蜜をもぎとる、だもんで赤ん坊がわめきだす、するってえと、その子供を持って来たいやらしい婆あが亭主のところへにこにこ顔で駆けつけていうんですよ、「ライオン、ライオンみたいに素敵な児がお生まれですよ、ほんとに生き写し、どこもかしこもすっかり、おちんちんまであんたにそっくりですわよ、松ぼっくりみたいにちょっとねじくれてってね」って。

こういったわるさをいつもやっているんじゃないの、まったくアルテミスさまにかけて、私たちはね。それでいて、しといたことよか、何もひどい報いもうけてないのに、みんなエウリピデスを怨むんですの？

コロス〔対旋舞歌の二〕

こりゃ、だがまったくたまげたことだね、
どっからそんなことが見つけ出されたか、
そいでどういう邑がこのようにまで
図々しい女を育て上げたんだろう。
まったくさ、こんなことをおおっぴらに、
こうまで恥知らずにこの悪い女が、
みんなのなかでしゃべろうとは思いがけも
しなかったよ、よもや言い出そうなんて。
でもこうなりゃ、どんなことも起こり
かねないよ、あの昔からのことわざ(2)は
ほんとうだわね、石は必ず、まあたとえ
どんな石でもさ、下に弁士が（かくれてて）
噛みつかないよう、調べろってのさ。
だけどまったく世間中に、生まれつき恥を知らない女よりなんにつけても悪いものはないよ、ただ別にすればさ(3)、女をね。

女の甲　ほんとにアグラウロス(4)さまにかけて、みなさん、ご熟考ねがいます。まったく悪いまじないをでもかけられたか、何かそうしたとんだ悪戯にあってんだわね、この悪女に私らみんなを、こんなふうに勝手に侮辱させておくとは。もし誰か遣り手がいればよし、誰もいなきゃ、私自身が女中といっしょに、どっかから榾火をもって来てこの女のお尻の毛をすっかり焼きとってやりますわ、女のくせに女たちの悪口を以後は言うんじゃないってのを覚えるようにね。

ムネシロコス　あらそんなお尻なんて困りますわ、みなさん、だって言論の自由が認められてて、われわれ出席してる女市民はみなしゃべっても差し支えないはずでしょ、そうして私の正しい知識をエウリピデスのため披瀝したからって、そいだからって、あんたがたに毛抜きのお仕置きにあうなんてあるでしょうか。

女の甲　仕置きにあうはずはないだって、お前一人だけが図々しくもあの男の弁護をしといてさ、われわれにさんざわるさをやった男をだよ。うまく芝居をこさえあげてね、なんでも悪い女がありさえすりゃ、やれメラニッペ(5)やれパイドラって、たんと創作っといてからが、ペネロペ(6)はいちどだって出さないじゃないか、つつしみ深い女って思うもんでさ。

ムネシロコス　あたしはね、そのわけはよく知ってるよ、今どきの女がね、一人だってペネロペ（みたい）だとはよう言えまいがね、誰もかもみなパイドラだもの。

女の甲　みなさんがた、お聞きなさいよ、この悪い女が私たちみんなを、いまもまたどんなふうに言ったかをまあ。

ムネシロコス　いえ、まったくだよ、まだね、すっかりは知ってることを言い切らないんさ、好きなら、もっと言ったげるかね。

女の甲　このうえにまだあるもんかね、知ってる限りをぶちまけちゃったもの。

ムネシロコス　おあいにくだがね、私ら女がする万分の一もまだ言って

ないんだよ。これも言わなかっただろ、そら、私らが垢こすりを持ち出してお米をくすね上げるなんてのは……。
女の甲　お前なんかくたばっちまいよ。
ムネシロコス　そいから今度はアパトゥリア[1]のお祝いから肉を盗んで取持ち女にやっといてから、鼬だってのも……。
女の甲　まあひどい、そんなでたらめいって。
ムネシロコス　そいから亭主を斧でかみさんが斬りきざんだなんてのも言ってないし、麻薬でもって別な女が亭主の気を狂わしたとか、そいから風呂場の下を掘って埋めたとか……。（五六二）
女の甲　死んじまえ。
ムネシロコス　アカルナイの女は親父を殺すし。
女の甲　こんなことまったく聞いていられるの。
ムネシロコス　そいからお前もさ、女中が男の子を生んだとき、そいつと取り換えっこに、自分の生んだ女の子を女中におっつけたなんて。
女の甲　な、なんだって、両柱の女神にかけて、それを言ったからにゃ無事に帰しちゃやれない、髪をすっかり梳いてくれるから。
ムネシロコス　なんだってこいつ、触らせてたまるもんかい。〔ムネシロコスをなぐる〕
女の甲　何を、そうら。〔なぐり返す〕
ムネシロコス　何を、そうら。
女の甲　この上衣をもっといで、ピリステ。〔女中に渡す〕
ムネシロコス　ちっとでも手を出してみろ、私がお前をそれこそ（アルテミスさまにかけて）……。
女の甲　どうするってのさ。
ムネシロコス　今食った胡麻せんべいを吐き出させてくれるから。（五七〇）
コロス　悪口のつき合いはおやめ、そら誰か女の人がこっちへ、とても大急ぎで駆けてくるわ。だからすぐそばへ来ないうちに静かになさい、あの女のいうことがちゃんと聴けるように。

〔クレイステネス[2]、婦人の服装で現われ、一同に言いかける。アテナイ中でもいちばんに女らしい男〕

クレイステネス　あら仲よしのみなさん、私はね気だてもみなさんそっくりなんでね、あんたがたの味方ってのは、この（滑っこい）顎でもよくわかるでしょう。まったく女性てのに夢中でしてね、しょっちゅうあんたがたの肩を持ってんです。今が今とてみなさんにとり一大事件を耳にしたもんでね、ほんのちょっとまえ市の広場で人がしゃべってたんですが、それをみなさんにお伝えしようと思ってやって来たんですよ。よくみんなで抜け目なく見張ってくださるように、そいでなにかとんだ恐ろしいことに、みなさんがうっかりしてて、襲われちゃなるまいと思いましてね。（五八一）
コロス　どういうことです、え、坊ちゃん、だってあんたは坊ちゃんって呼んだ方が似合ってんもの、そう顎がつるつるしてるうちはね。
クレイステネス　エウリピデスが誰か自分の身内の老人をね、今日といって今このところへ、よこしたっていうんです。
コロス　どんなことをさせにかね、またどんな考えでもってかえ。
クレイステネス　つまりなんによらず、あんたがたが相談したり決議したりしようってことを、みなその男がスパイするってわけでさ。
コロス　だけどどうして男の身で、女のなかにまじって見つからないかね。
クレイステネス　その男をエウリピデスがすっかり毛を焼いたり抜いたりして、何から何まで女そっくりに仕立てたんですよ。（五九一）
ムネシロコス　そんなことにこの人を信じるんですの。どこにそんな間抜けな男があるもんですか、平気で毛をむしられるなんて。ま、あたしはまっぴらだわね、いとも尊い両女神さまにかけて。
クレイステネス　馬鹿なことを。そんなら私がしらせに来るもんかね、それが確かな筋から耳にはいったことでなきゃあさ。
コロス　これはとても恐ろしい大事件だね、このいまのしらせは。さあみなさんがた、ぐずぐずしてちゃあだめだわよ、その男をよく訊ねて

探し出さなきゃ、どこにこっそり隠れて坐り込み、私たちの眼をごまかしてるんでも。
〔クレイステネスに〕あんたもいっしょにそいつをみつけ出しとくれ、そのためにも今のとあわせてあんたにお礼がいえようものね、ごひいきぶんに。

クレイステネス　そいじゃあと、〔女の甲に向かい〕まず手始めにあんたは誰かね。

ムネシロコス　〔当惑して〕どっちを向いたらいいもんかな。

クレイステネス　みんな調べないといけないんだもの。

ムネシロコス　やれやれ困ったことだ。

クレイステネス　あんたがた、この女の人は誰かご存じですか。

女の甲　私が誰かって訊くの、クレオニュモス[1]の家内ですわ。

コロス　ええ知っていますとも、他の女を調べてください。

クレイステネス　じゃその小さい児を抱いてる女は誰ですえ。

女の甲　うちのばあやですのよ、ほんとうに。

ムネシロコス　〔傍白〕こりゃすっかりまいったぞ。　〔逃げ出す〕

クレイステネス　そら、あんた、どこへ行くんです、止まった、なんで逃げんだ。

ムネシロコス　お小用にいかせてよ。

クレイステネス　あつかましい女だね、あんたは。そんならお前、やるがいいさ、ここで私はまっているから。

コロス　しっかり待ってて、あの女を十分調べてくださいよ、私たちの知らないのは、ね、あなた、あの女一人きりだから。

クレイステネス　ずいぶん長くお小用してんだね。

ムネシロコス　ええほんとに、あんた、詰まってぽちぽち[2]なんですもの、ゆうべ水田(みずた)がらしを食べたせいで。

クレイステネス　水田がらしがどうしたんだ、早くここへ、私のところへこないか。

ムネシロコス　まあなんだって私を引っ張るの、気分がわるいのに。

クレイステネス　じゃ訊くが、あんたの旦那は誰かね。

ムネシロコス　私の亭主をお訊きなの。あの人ご存じでしょう、あのコトキス邑(むら)の者で。

クレイステネス　あの人ってどんな人です。

ムネシロコス　あの人って、あのそら、いつか、あの人の子のあの人を……。

クレイステネス　でたらめをあんたは言ってるらしいね、前にもうここへ上って来たことがあるの。

ムネシロコス　ええ、もちろん毎年来てますわ。

クレイステネス　そいで誰があんたの小屋仲間[3]だったね。

ムネシロコス　あの女でしたわ、困ったな。

クレイステネス　馬鹿なことをいう。

女の甲　〔クレイステネスに向かって〕あっちへいらっしゃい、私がこの女を十分吟味してやりましょう、昨年のお会式のことを訊いてね。あんたは遠くへいって、男の人はわきで聞いてちゃいけないんだから、〔ムネシロコスに向かい〕お前はさ、お式で最初のお定めはどうだったのか、言うんだよ。

ムネシロコス　こうっと、何がさて初めだったかな、みんなで一杯やったわね。

女の甲　そんならその次にはどうしたえ。

ムネシロコス　酌(さ)し交わしましたわ。

女の甲　そりゃ誰かに聞いたんだろ、じゃ三番目は？

ムネシロコス　クセニュラが大盃をくれってったわ、おまる[4]がなかったもんで。

女の甲　馬鹿なことといって。ここへ来てよ、ここへ、クレイステネスさん、こいつがその話の男ですよ。

クレイステネス　そんならどうしましょうかね。

女の甲　この人を裸にしてください、ろくでもないことばかり言うんだもの。

ムネシロコス　そいじゃああんたがた、九人もの子の母親を裸にするってえのかい。
クレイステネス　さっさと帯をおほどき、恥しらずな奴だよ、お前は。
女の甲　まあなんてたくましいがっしりした体だろう、それにあらまあ、私たちみたいなお乳房がないわ。
ムネシロコス　だって私は石女でまだいちどもお腹が膨れたことがないんだもの。
女の甲　こんどはかい、さっきは九人の子の母親だった[1]ね。
クレイステネス　まっすぐに立つんだ、どこへそいつを押しこもうてんだ、下へ。
女の甲　〔後ろへ回って〕あら、のぞいてるよ、とても好い色して、かわいそうに。
クレイステネス　〔後ろへ行く〕そいでどこにあるね。
女の甲　こんどはまた前に出て来たわ。
クレイステネス　〔前へ戻る〕こっちにゃないがね。
女の甲　〔後ろから〕あらまあ、また、こっちへ来たわ。
クレイステネス　こいつは地峡[2]てなもんだね、おいお前さん、上へ下へと、コリントのよりもっと忙しく往復させるじゃないか。
女の甲　まあいやらしい人だわ、そいだからエウリピデスをかばって私たちの悪口をいったんだよ。
ムネシロコス　やれやれ難儀なこった、なんていう厄介ごとにはまりこんだもんだろ。
女の甲　ねえ、そいで、どうしましょうかね。
クレイステネス　こいつをみんなでよく見張りしてて下さい、逃げてっちまわないように。私はこの事件を検察庁[3]へしらせに行って来ますから。
コロス　そんなら私らはこれからさっそく灯りをつけて、しっかりと腰をからげ、それ勇ましく、上っぱりをぬぎすて、どこかにまだ男がはいり込んでないか探すとしようかえ。お社中も小屋小屋も参詣道もみな駆けまわって探すんだ、それまっさきに歩みもかろく、ここを立ち出て音を立てずにくまなくあたりを調べにゃならぬ。何よりもさて、おそいが禁物、このうえぐずぐずしないが肝腎、まず第一に、それぐるりと早く駆けて歩いた、及ぶかぎりに、それよ今度は足跡をつけみんな探った（よくしっかりと）、もしや誰かがまだこの辺に坐りかくれていやしないかと八方にまなこをくばって、そちらの方も、こっちの方もすべて十分しらべるがよい。

〔主旋舞歌〕たとえ怪しかる業をしといて私たちに
みつからずとも、いまに報いをうけよう、
さてそのうえで、神をなみする悪性者や、
不正な所業や、不埒なことをする男への
みせしめにしてくれようからね。
そしたらはっきり神さま方が
おいでとみんな思うだろうし、
またすぐさまと万人にとり、
信心のみちの訓えとなろう、
また掟に従い正道をふみ、
法をまもって、善事をするよう。
もしそうせねば果てはしれてる、
そんな奴らが正しいことは、
やらないどいて、気違い沙汰に
燃え立って猛り狂いつ、何かしたのを見つけたならば、
あらゆる男また女らの眼にも
みな示してやろうぞ、
掟に背き道をはずれた行ないには
神罰がすぐさま降るってことを。
だがもうどうやらみな十分に探りつくしたらしいんだけど、とにか

くほかにはかくれこんでる者は一人もみつからないね。
〔ムネシロコス、女の甲の赤ん坊をひったくって神壇に逃げ込む(1)〕

女の甲　あれ、あれ。ど、どこにお前逃げてくんだよ、こら、こら、お待ちったら、まあ、情けないわ、あたしほんとに情けないこと、赤ん坊をこのおっぱいから、引っさらってっちゃったんだもの。（六九一）

ムネシロコス　うんとこ、わめけ、こいつにゃもうけしてお前うまうまをやれまいよ、わしを放してくれん限りは。そいでここ、この御供物の腿肉のとこで、これ、この剣で真紅な血管をぶった切られて、神壇を血にまみれさすだろうよ。

女の甲　ああ、情けないこと、みなさんがた、助けてくださらないの、大きなときのこえを、かちどきをあげてくださらないの、そいでこのたった一人の赤ん坊をとられた私を見殺しにしようってえの。

コロス　おや、おや、まあ運命の女神さまがた、この光景(ありさま)はまた、いまも今とて、またなんとしたとんだできごと。まあ何もかも、全く大胆で恥知らずな所業だわ、なんとしたふるまいをまた見るのか、なんてまあいうことか、みなさんこれは。（七〇三）

ムネシロコス　お前さんたちのあんまりひどい増上慢をたたきつぶすようなことさ。

コロス　こりゃ全く恐ろしい、いやそれにもまさる事件じゃないか。

女の甲　恐ろしいにもさ、私の子供をかっさらったんだものね。

コロス　〔対旋舞歌〕
そもそもなんてこれについて人はいうだろうか、
こんなことをやっつけるほど恥しらずなこの男に。

ムネシロコス　だがね、まだまだしまいにゃしないからな。

女の甲　そいだってさ、そこへ来たからにゃ逃がしゃしないよ。（七一〇）
お前がこんなひどいことしたうえ出て来たなんぞと、
苦もなく逃げてっていわせはしない。

ムネシロコス　だがそうはまあ決してなるまいよ、願い下げだね。
きっと痛い目を見せてやるから。

コロス　そんなら誰が、とこしえにます神々のうちどの御神が、
いろいろ悪事(わるさ)をやったお前の、味方についてくれるってのかえ。

ムネシロコス　そうしゃべってもだめだよ、「あの女をわたしは赦しはせぬぞえ」だ。

コロス　だけど、両人の女神さまにかけても、きっともうすぐ、
平気でもって無礼を働き、怪しからぬことを
言っちゃあいられぬようになろうよ。（七二〇）
神をなみする所業でもって私たちとて、
お前のしわざに仕返しをしてくれようからね。
それが当然だろうさ、
そいで多分はお前の運勢もわるい方に
向きがかわって、違ったふうになるこったろうよ。
〔女の甲に向かい〕さあこの女(ひと)たちをあんたはこれから連れていってね、薪をもち出しこの悪者を丸焼きにしなきゃいけないよ、ちっとも早く火を持って来て。

女の甲　〔女中に〕枯れ枝をとりにいこうよ、マニア(2)、〔男に向かって〕これからわたしがお前を火の玉にして見せるよ、今日こそね。（七二九）

ムネシロコス　火をつけて燃やすがいいさ、〔赤ん坊に向かって〕お前はさっさと小袖を脱ぐんだ、ええ小童(こわっぱ)、お前が死ぬのも、女のなかでたった一人の、お母儀(ふくろ)のせいなんだぞ。〔子供を裸にする〕
こりゃどうだ、女の子が皮の袋になったぞ、ぶどう酒が一杯はいった、しかもこんなペルシアぐつをはいてだ。なんてまあ女ってのはちっとも我慢のできない、のんだくれぞろいか、そいで何かにつけてお前たちは飲むことばかり企らんでんだな。なんてまあ酒屋にとっては大きな幸せ、おれたちには大した災難か。簞笥(たんす)(3)にとっても機(はた)にとって

も災難ばかりだ。

女の甲　枯れ枝をうんとおよこし、マニア。

ムネシロコス　よこすがいいさ、だがお前、さあこの返事をしろ、こいつを生んだってえのか。

女の甲　ええ、十月のあいだもね、抱えてたんだよ私が。

ムネシロコス　お前が抱えてたと。

女の甲　ええ、むろんのことさ。

ムネシロコス　五合ほどもか、どうだ、ええおい。

女の甲　なんてことをしてくれたの。まあひどい人だね、私の子供を裸にしちゃって、まだちっぽけなのに。

ムネシロコス　ちっぽけだと。

女の甲　ええ、ほんとうにちっちゃいんだよ。

ムネシロコス　なん歳になるんだね、三年越し[1]か四年か。

女の甲　まあだいたいそのくらい、それにディオニュシアからの月数だけと。ともかく返しとくれよ。

ムネシロコス　とんでもない、こいつはね。

女の甲　そんならみんなでお前を焼くよ。

ムネシロコス　どんどん焼けよ、こいつをすぐにもぶった切ってくれるから。

女の甲　よしとくれ、お願いだから、ね、どんなことでもそのかわりにいうことを聞いたげるからね。

ムネシロコス　子供好きな性分なんだな、だがどうあろうと、こいつをぶったぎっちゃうぞ。

女の甲　〔泣き声を出す〕あら子供を、まあ。受け盆[2]をとっとくれ、マニア、そんなら、私の子供の血をせめてうけたいのだから。

ムネシロコス　下へお出し、その一つだけお前ののぞみをかなえてやるぞ。

女の甲　ひどいひとだよお前は、なんてけちんぼで意地悪なんだろう。

ムネシロコス　この皮は巫女[3]のものになるんだ。〔酒袋を女の甲に渡す〕

女の甲　何が巫女のものになるって。

ムネシロコス　これをもってけ。

他の女　〔入って来て〕かわいそうだねミッカは、誰がお前の児をふんだくったの、誰がお前の可愛い娘をとってったんだえ。

女の甲　この悪者だよ、ここにいる。だけどお前さんせっかく来てくれたんなら、こいつを見張っておくれ、私ゃちょっとクレイステネスをつれて、この人のしでかしたことをお役人にしらせに行ってきたいから。〔立ち去る〕

ムネシロコス　さてそこで、この身を助かるどんなてだてがあるだろうか、どんな試み、どんな工夫をすりゃあいいか、私をこんな厄介ごとに引きずり込んだ張本人はまだちっとも姿を見せないが。さあ、そうとすりゃどういう使いを迎えに出したらよかろう。いやあったぞ、いかにも好い方便が、『パラメデス』[4]の（芝居の）なかに。あの人みたいに櫂の表に、字を彫り込んで投げてやろう、だがどこから櫂をみつけりゃいいか、どこから。はてどうだな、ここにある奉納の札を櫂のかわりに刻みつけて投げちらしたら、またいちだんとうまくいこう。なんと、こいつらもとにかく木、あれもまた木だったからなあ。

〔芝居がかりで〕

おおわが両手よ、
救いを得る道の仕事にかからにゃならぬが、
さて、汝ら、磨かれた板の札よ、
刻んでゆく刀のすじをうけてくれや、
私の難儀を告げる使者ともなって。やれやれ、
こりゃまた難儀なり[5]の字だわい、
〔小刀に〕進め、進め、なんという畝か。
〔刻んだ札を方々にほうる〕
行けよ、急いであらゆる道を、
あちらへもこちらへも、必ずさっさと。

コロス　そいじゃあ私らは、これから前へ進み出て自分たちの讃美をやろうじゃないか。たとえみんなが女ってえ族（やから）のことをいろいろ悪くいうにしてもさ、つまり、私らは人類にとり何につけても禍いで、またあらゆる不幸、たとえば喧嘩諍（いさか）い、みじめな党争、悲歎や戦（いく）さも私らがもとだなんて。だがそんならだよ、もし禍いならなんで私らを貰うんだね、私らがほんとうに禍いならばさ。それにまた私らが表へ出たり、覗くところを見られたりするのを禁じて、こんなにいろいろ骨折って、禍いてえのを護ろうと心がけるのさ。そのうえだよ、どこかへ細君が出ていって、そいつを外で見つけようもんなら、もう気が狂ったようになる。ほんとうなら大喜びで神さまにお礼いうはず、もう真実その害悪が家からどこかへ追ん出ていって、中じゃ出くわせないとしたらね。

そいからまた私らがお祭の日に遊びつかれて他家（よそ）へ泊り込んだりすると、誰もかもこの禍いな（だっていう）私たちを、探して歩く、臥床の辺をぐるぐる回って。また小窓から首でもちょっと出してると、いっその害悪をしきりに見たがる、そいで恥かしがって引っ込むと、いっそう皆胸を燃やしてもういちどその害悪が首を出すのを見ようと構える。こんなわけで私らがお前さんがた（男たち）よりずっとましなのは明らかなこと。証拠はすぐに見せてあげるよ、どっちが劣るか、試してみようさ。私らは男の方が下等っていうし、お前さんたちはこっちが下等だっていうなら、さあ一人ずつ対（つい）に並べて吟味をしよう。女の名前と男の名前を、一人一人に較べてみてさ。

カルミノス[1]がナウシマケに敗けるのは事実のうえで明らかなこと、それからさ、クレオポンだって、まるっきりサラバッコにはひけをとるんだ。アリストマケに、あのマラトンのさ、そいからストラトニケにむかっちゃ、もう長いことお前さんがたの誰一人とて手抗（てむか）いしようて気も起こさない。また去年の議員さんがたのなかで、誰がエウブゥレに優るだろうか、議員の職を他人に渡した男が。アニュトスだとてそうとはいえまい。こんなぐあいで私らは男たちよりずっと偉いと自慢できんのさ。

また千万円がとこも公金を盗んでおいて、しかもアクロポリスへ二頭立てで、出かけるなんて女はいまいよ、ま、せいぜいのところでくすねたものは、亭主から麦をかますに一杯ぐらい、それも盗んだその日のうちにもとへ戻しておくてんだから。

だが私らはこんなことをいつもやっている
男たちをいくらも名指して見せられるんだよ、
またそのうえに私らよりもずっと
ひどい食いしん坊や追剝や
浮浪人（ごろつき）や人さらいをね。
それにまったく先祖のものを
護っていくにも私たちがずっと上だよ。
だって私らは今になってもまだ
親代々の糸かけ棒やはた織り竿や、
仕事かごや日傘も大切にもっているのに、
私らの亭主といったらもう大ていが
槍の棒まで穂先ぐるみに、
家のなかからなくしちゃったし、
そのうえ合戦の最中てえのに
肩から笠を投げすてちまった
男もずいぶんいることだもの。

わたしら女が当然に男の人を非難してやる権利があろうということもずいぶんある、なかでもひどいのはこれさ、つまり私ら女が誰にしろ市にとって役に立つ人間を、まあ隊長なり将軍なりだが、生んだ場合にゃ、それ相当の栄誉を与えられるが当然、たとえばステニア[2]やスキラの祭でその女を上座に置くとか、また私らがずっと昔からやるしきたりのいろんな他の祭のおりもさ。

その反対に臆病者や邪しまな人間とかを生んだ場合は、たとえばたちの悪い戦艦の頭役とか、臆病な舵取りとかね、その母親は椀形に髪

を剃られて、勇士を生んだ女たちより後ろの方に坐るが当然さ。それゆえ、市の衆、みなに向かっていうけど、ヒュペルボロス[1]のおふくろが白い衣を着、髪を垂らしてラマコスのおふくろのすぐそばに坐っていてもいいんだろうか、そいで高利貸しをつづけていてもね。ほんとうならば金を貸しつけ、利息をもうけていくようなのには、誰も利子など払ってやらずに、元金までも力ずくなり取ったらいいのに、こう言ってやってね、「全くお前は（利）子相応だよ、あんな息子を持ったんだから」って。

ムネシロコス　〔エウリピデスを待ち設けるていできょろきょろしながら〕どこから来るか待ち受けてんで、藪睨みになっちまった。が、ちっとも来ん、何がいったい邪魔をしてんか、きっとこのあいだの、『パラメデス』[2]が、見栄えしないで受けなかったのを気に病んでるのにちがいない。そんならあいつをひとつ芝居がかりで、引き寄せてやるとしようか。うん、そうだ、新作の『ヘレネ』[3]から振りでももって来るとしよう、ちょうどすっかりこう女の衣裳も着込んでいるから。

クリテュルラ　なにをまたお前、もちゃもちゃやってんだい、なぜきょろきょろばかりしてんのさ。お役所から誰か来るまでおとなしくしてないてえと、しょっぱいヘレネに逢いかねまいよ。

ムネシロコス　〔ヘレネをまねて〕「これはナイルの、みめうるわしいニムフらが沐浴をなす流れなりや、久方の雨のかわりに、その河ぞま白なるエジプトの野をうるおすもの、まっ黒な医薬をもちいる民草をば」

クリテュルラ　お前は全く悪者だね、光をもたらすヘカテ[4]さまにかけて。

ムネシロコス　「わらわが故郷はあの、世にしらぬ者とてない国スパルテ、父上はテュンダレオス殿……」

クリテュルラ　なんだって、このろくでなし、あの人がお前なんかのおやじだって？　それよりさ、ほらプリュノンダス[5]だろうよ。

ムネシロコス　「わらわはヘレネともうしまする」

クリテュルラ　またもいちど女になろうてのかい、まだ前に女のまねをした罰の仕置きも受けないどいてさ。

ムネシロコス　「あまたの人の玉の緒が、わらわのためにスカマンドロスの、流れのほとりで絶えましたのを……」

クリテュルラ　お前こそ死にゃよかったね。

ムネシロコス　「それでわれらはここにおりまするが、運命つたないわが夫メネラオス殿がいっこうお出ましないものを、なんでこのうえ世にながらえよう」悪性な大鴉めのためなんどに……「したが何とてわらわの胸はこうときめくのか、ああ、大神さま、身に立ちそめたこの望みを、ゆめお消やしはくださりまするな」

エウリピデス　〔メネラオスの身振りで現われ、近よろうとする〕はて、この堅固な屋敷を所持されるのはいずれの方じゃ、冬のあらしや難船のため、わたつみのうしおのあいに、難儀をうけた異国人を、もてなされようといわれるのは。

ムネシロコス　これはプロテウスさまのお館でござりまする。

エウリピデス　はて、そのプロテウス殿とは？

クリテュルラ　まあ、なんてあきれた奴だろう、ほんとに両女神にかけて、うそつきだよ、プロテアス[6]は十年前に死んじゃってるのに。

エウリピデス　われらが船を寄せたるこの地はいかなる郷か。

ムネシロコス　エジプトでござりまする。

エウリピデス　おお、運命つたない身の、かくもはるけく漂い来たとは。

クリテュルラ　あんたは、こんなろくでなしが、でたらめをしゃべくり立てんのを、ちっとでも信用しなさんのかえ、ここは掟授けのお宮だよ。

エウリピデス　してプロテウス殿その方はお内か、または不在か。

クリテュルラ　あんたはきっと、まだ船酔いがさめないんだね、お客さん、プロテアスはもうとっくに死んじゃってるって聞かせたのに。まだそのうえで「内かそれとも不在か」って訊ねるなんて。

エウリピデス　いなとや、もう世を去られたとな。してその奥津城はい

ずれにあるぞ。

ムネシロコス　このわらわの坐しておりまする、これぞすなわち御墓じるし。

クリテュルラ　まあ罰あたりだよ、こいつは。きっと今に罰が当るからね、このお社の祭壇を墓じるしだなど、大それたこといって。

エウリピデス　したがそもそも女の身もて、この塚の辺(へ)に被衣(かつぎ)をかむり、跪(つ)いいたもうはいかなるゆえか、聞かせてたべ。（八九〇）

ムネシロコス　プロテウスのご子息が、是が非でも意に従えよ、妻になれよ、と迫られます……。

クリテュルラ　なんだって、このろくでなしめが、またこのよその方を騙そうてんかい。ね、あんた、〔エウリピデスに向かって〕この悪漢(わるもの)はね、この女たちの集まりへ、金の道具を盗もうてんで、ここへ登って来た奴なんだよ。

ムネシロコス　〔女に向かって〕勝手に吠えろ、おれの体に罵詈を浴びせかけやがって。

エウリピデス　〔ムネシロコスに〕見知らぬ姫よ、御身をかくもあしざまにいうこの老嫗(おうな)はそも何人なるぞ。

ムネシロコス　あれはプロテウス殿の息女(むすめ)テオノエでござりまするが。

クリテュルラ　なんだとえ、馬鹿お言い、ガルゲットス区のアンティオスの息女、クリテュルラじゃないか、お前は大悪党だよ。

ムネシロコス　いくらでも勝手をお言い、そなたの兄へけしてわらわは嫁ぐまいぞえ、トロイアにおいでのれっきとした夫(つま)、メネラオス殿を裏切りなどして。（九〇一）

エウリピデス　こりゃなんといわるる、君がひとみを日の射すかたへと向けられよ。

ムネシロコス　わたしゃ恥かしいよ、こう顎をなぶられたまんまでは。

エウリピデス　こりゃなんとしたこと、いかにも言語に絶えたこのおどろき、おお神々、この眼に映るはいかなる姿か、そもそもそなたは誰人なるぞ。

ムネシロコス　してまたあなたはどなたさまか、わたしとても不審は同じく。

エウリピデス　そもじはギリシアの女性(にょしょう)なるか、またはこの土の上臈(じょうろう)か。

ムネシロコス　わらわはギリシアのものなれど、殿のお国が伺いとうござりまする。

エウリピデス　ヘレネの姿(なり)そのままと、御身はいかにも生きうつし……。

ムネシロコス　あなたはまた、メネラオスさまそっくりに、その蘇芳(すおう)の枝からしてが……。

エウリピデス　その見わけこそ過たね、われは運命(さだめ)こよなくつたなき汝が夫(つま)。（九一〇）

ムネシロコス　おおようやっと、待ちかねし、わらわのかいなにおいでなされたわが夫(つま)さま、わらわを御手に、おん手に抱きしめてくださり[1]ませ。さあ接吻(くちづけ)をまいらしょう。わらわをつれて、つれて、つれていって、早くさっさといっしょに。

クリテュルラ　酷い目にあわすよ、ま、両女神にかけて、誰でもお前をつれてこうって奴は、松明でぶちのめしてやるから。

エウリピデス　そなたはわたしが自分の妻の、このテュンダレオスの姫君を、スパルテへとつれてゆく、その妨げばしなされるかな。

クリテュルラ　あれ困ったね、お前もまたどうやら悪者らしいね、そいでこいつとぐるなんだろ、そいで読めた、さっきからエジプトがっていたんだね、だけどこいつはどうでも仕置きにあわすんだから。そら、もうそこへ町役人と弓持ちの巡警さんがやって来たよ。（九二三）

エウリピデス　こいつはまずいな、ひとまずわきへ引っ込んでるとしようか。〔奥へ引き退る〕

ムネシロコス　やれやれ、わしも運のわるいもんだが、どうすりゃいいか。

エウリピデス　安心しといで、私が息のある間は、決して見すてはしまいからね、数限りなくたくさんな工夫のたねが尽きないあいだは。

ムネシロコス　この釣糸には何もかからなかったな。

市役人　これがあのクレイステネスが私らにしらせていった悪漢かな。こら、なぜうつむき込んでいるんだ、この男を引っぱってさらし板[1]に縛りつけろ、弓取り、そいからここへ、引っ立てて番をするのだ、誰一人こいつの傍へ寄りつかんよう気をつけてな。万が一にも近づく者があったら鞭でもって打ってやるんだ。

クリテュルラ　ええ全くですよ、今が今とてね、男の人が帆布を綴(つづ)くって、すんでにこいつをさらってくとこでしたよ。

ムネシロコス　ねえお役人さん、この右手にかけてお頼みしますよ、そいつをあんたは誰かがお泉貨(ぜぜ)をくれるてえ場合に、いつも上向け[2]にして出すのがお好きだ。先の短い身なんだから、この私のささやかな願いをきいてくださいよ。

市役人　〔大いに心動いて〕なんの願いをきけというんだ。

ムネシロコス　この着物を脱がしてから裸でもって立板に縛るよう巡警さんへいいつけてくださいよ。こう老人の身で黄色い（婦人）服や鉢巻(バンド)の姿で野鴉の腹をこやしてからが、笑い草にはなりたくないから。

市役人　そういう服装(なり)でお前を縛りつけるというのが民会の決議なんだ。お前が怪しからん奴だってえのが通行人にもよくわかるようにな。

ムネシロコス　イアッタタイアクス（やれやれ）、なんてえことを黄色い服めが仕出かしやがるんだ、もう命を助かる望みてえのはひとったらしもありゃしない。

〔巡警はムネシロコスを引き立て、一同みな舞台から内へはいる〕

コロス　さあさ、これから私らは、ここんところで女連中のきまりになってる遊びをしようじゃないか、いつもこの尊い季節に、両柱(ふたり)の女神のとうとい会式(えしき)を行なう折にね。それをかしこみパウソン[3]さんがいま断食をやってるんだよ、両神さまへ何度も祈りをささげてからね、一節季から次の節季まで、こんな仕合せがちょいちょい授かるようにだってさ。

〔第一の舞〕進めや踊れ、
歩みもかろく輪形をつくって、
手に手をつないで舞いや
謡いの、拍子にみなならちつれ
進め、すばしこい足どりをもて
さて八方に
眼(まなこ)を配って踊りの模様を心にとめつ。
それとひとしく
オリュンポスなるよろずの神を
謡い、かつみな讃えまつれや、歌舞に心もそらなる声で。
もしまた人が
お宮の内で、わしらが女であるゆえに、男のことを
たいてい悪くいおうかとあて込むならば、その考えは間違ってるよ。
さてこれからは
（神歌のわざをめざして）

〔第二の舞〕まず美しい輪をなす舞いのみやびな歩みを停めるがよいこと。

歩みを進めよ、琴に巧みな御神[4]さまを、
また弓を帯びたもうアルテミス
いさぎよく畏い御神をうたいあげつつ、
めでたしや遠矢射る神、
勝利をさずけさせたまえや、
またヘラ[5]、婚嫁(めあい)のつかさを
みちにかのうて頌(うた)いまいらしょう、
あらゆる歌と舞いのつどいに入りあいたもうて
婚姻(めあい)のかぎをたもたす御神を。

また牧の神ヘルメスさまやパンさま、
したしいニムフさまに願うは、
われらが舞いを
楽しみたもうて
心を傾け笑ませたまえと。
さればこれから歌舞の二重の
たくみを、心をこめて始めようかえ。
舞いあそぼうよ、女衆よ、定めのとおりに、
何につけてもまた断食して[1]。

〔第三の舞〕さてまた今度は足の拍子も巧みに次の旋舞をおどれや、
声張りあげて謡をうたえや
謡の音頭はそれ、ご自身に
常春藤を冠るバッコスさまが
お執りなされや、私は歌舞の
陽気なさわぎに謡いまつろう。
おおエウイオス[2]、大神ゼウスと
セメレさまとの御子ブロミオス、
舞歌に心なぐさむ、
山あいでニムフがいとしい讃歌につれ、
おおエウイエ、エウイエ、エウオイ
おおエウイエ、舞いおどらする。

あたり一面鳴りとどろくは
キタイロン[3]の嶺のこだま。
山は森蔭くろぐろと、
谿は岩々嵯峨としてかたみにひびけば、
御つむりにはまるい蔦の環、
蔓をなす葉も見事に栄えて。

〔スキュティア人の弓持ち巡警、板に縛りつけたムネシロコスを伴い登場[4]〕

巡警　さあごごで、この野天でもって吠いじょるがええわ。

ムネシロコス　ねえ、巡警さん、お願いですが。

巡警　わすにお願いせんでええ。

ムネシロコス　この挿し込み[5]をゆるめてくださいな。

巡警　そいつはひとつわすがしてやる。

ムネシロコス　おや、酷いことを。あんたいっそきつく締めたじゃないか。

巡警　もっとやってぐれというかに。

ムネシロコス　あいたた、あいたたい、とんでもない野郎だ。

巡警　黙り、このもうろく爺いめ。うん、わすは茣座をもち出して来るぞ、きさまを見張りすんにな。

ムネシロコス　こりゃとんだ有難い目をエウリピデスのおかげで見たもんだよ。や、うん、そうだ、救いの神のゼウスさん、その見込みは十分あるぞ、あの人間はきっと信義を破る者じゃあるまい、そらいまもいま、ペルセウス[6]の姿で駆けて来て合図を私にやって見せたよ。わしによろしくアンドロメダになれっていうんだ、いかにもな、こっちは縛られている、そいだからもちろんのことこれから、わしを救い出しに来てくれようてんだ、さもなきゃ傍を翔ってゆくまい。

〔アンドロメダのふりで〕
親しい乙女ら、親しい人たち、
どうしたら逃げらりょうか、そいでまた
このスキュティア人をごまかせようぞえ。

〔耳を傾けてわが言葉の岩屋にひびくのを聞く〕
聴いてたも、おお、窟のなかへと歌いかける
(こだまよ)、
許してたもれ、わらわをば

おかか[1]のもとへゆかせてたもれ。
情けも涙もない者よなあ、人の世にも上なく悩みの
多いこの身を厳に縛りつけたというは。
やっとのことであの腐った婆めの手を逃れたのに、やはり命は助からぬわい。これこのとおりスキュティア人が眼を放さずに、もうさっきから張り番をして、うたてや、友もないこの身を野鴉どもへ馳走にとさらしにかけたが。
見てたもれ[2]、歌舞のむれもなく、
同じ年頃の乙女らを伴いもせず、
投票を手に投入壺に立ち添うことか、
きびしい鎖に身をしばられて、
あの化生の魚グラウケテス[3]の
餌食にしようとて身を臥せるこのわらわ。
嫁入りの祝い歌ではのうて、
虜われの歌につれるとは。
わらわをいたみ泣いてくりゃれ、侍女たちよ。
つれないわざをこう身にうけるつれないわらわ、
ああ情けない、わしゃ情けない。
身内の人らに、まださまざまな無法な目をば
見せられたのに——その人を願ぎもとめる身、
涙ゆたかな冥府の歎きをかこちいたみつ、
ああ、あい、あい、あい、え、え、
このわしをまず剃りあげて
そいから黄色い着物を着せ込んだ人、
かてて加えて、ここの社に
わしを連れこんだ男を、侍女どもよ。
おお、わらわがこの容赦ない厳しいさだめ、
ああ呪われたわが身の上じゃ。
誰かこの禍いを眼の前にして、
わらわの苦艱をあわれと見ぬ者があろうぞ。
いっそわらわを、あの高空の火を吐く星が、
不運なこの身を、滅ぼし去ってくれればいいに。
もはや天なる永遠の焰火を眺めることも
恋しくはありませぬ、こう縛しめにかけられた身には。
咽喉を断つ苦しみも神々ゆえ、亡者の
郷へと幽冥道をたどってゆく身に。

〔舞台のうらでエーコー・こだま、おそらくエウリピデスの発するこえ、姿は見えず〕

こだま　ごきげんよう、お姫さま、あなたを岩へさらしものにした父御、ケペウスどのが神罰で死ねばいいのに。

ムネシロコス　お前は誰かえ、あたしの不幸を歎いてくれるは。

こだま　こだまですわ、人の言葉を歌い[4]答えてふざけかえす者なんですの。去年もちょうどこの同じところで、エウリピデスに芝居をやるてつだいをしてあげましたのよ。だけどね、あなたは自分の役をしなきゃあいけません、あわれげに泣くんですよ。

ムネシロコス　あんたも後からまねて泣くんだよ。

こだま　それにゃぬかりはありませんさ、さあ、科白を始めて。

ムネシロコス　「おお聖らかな夜、なんとまあそなたは、遙かな道に馬乗り物を馳せてお行きゃるか、聖らかに星影映ゆる高そらの背をのりわたりつつ、あやに畏いオリュンポスを越え……」

こだま　オリュンポスを越え……。

ムネシロコス　「なにゆえにこのアンドロメダは他人にも超えて、苦艱に満ちたさだめを受ける身となりしよのう……」

こだま　身となりしよのう……。

ムネシロコス　「死をば、憐れや……」

こだま　死をば憐れや……。

ムネシロコス　ぶっ壊しになるよ、え、婆さん、そうくだらんおしゃべ

りしちゃあ。

こだま　くだらんおしゃべりしちゃあ。

ムネシロコス　まったくうるさいねえ、そう出しゃばって来てやたらに……。

こだま　やたらに……。

ムネシロコス　おい君[1]、わしに一人で謡わしてくれよ。頼むからね、やめてくれよ。

こだま　やめてくれよ。

ムネシロコス　ええ、勝手にしやがれ。

こだま　勝手にしやがれ。

ムネシロコス　なんてえこった。

こだま　なんてえこった。

ムネシロコス　馬鹿をいうな。

こだま　馬鹿をいうな。

ムネシロコス　どやしつけるぞ。

こだま　どやしつけるぞ。

ムネシロコス　この野郎。

こだま　この野郎。

〔巡警、ようやく聞きとがめてやってくる〕

巡警　こら、なにしゃべっとるか。

こだま　こら、なにしゃべっとるか。

巡警　役人を呼んでぐるぞ。

こだま　役人を呼んでぐるぞ。

巡警　なんちゅうごった。

こだま　なんちゅうごった。

巡警　どこからあの声が来るだに。

こだま　声が来るだに。

巡警　〔ムネシロコスに〕きさましゃべっとるのか。

こだま　きさましゃべっとるのか。

巡警　酷い目にあわすど。

こだま　酷い目にあわすど。

巡警　おれを侮辱する気か。

こだま　おれを侮辱する気か。

ムネシロコス　とんでもない、すぐそばにいる女ですよ、そこに。

こだま　女ですよ、そこに。

巡警　どこにおる、その不埒な女は。こいつこりゃ逃げていくな。こら、こら、どこへ逃げてく、勝手はさせんど。

こだま　勝手はさせんど。

巡警　まだぐずぐずいうとるか。

こだま　まだぐずぐずいうとるか。

巡警　とっつかまえろ、不埒な女を。

こだま　〔遠のきながら〕つかまえろ、不埒な女を。

巡警　うるさい、げしからん女だ。

〔エウリピデス、ペルセウスの扮装で現われる〕

エウリピデス　「おお神々よ、いまたどり着いたこの邑は、いかなる夷が住まう国土か。すみやかな飛行の鞋に、高空のさなかを切って道を進めつつ、翼を具する足を停めるこのわれこそはペルセウスなれ、いましアルゴスへとゴルゴン[2]の首を携え、海路をわたりゆくなるを」

巡警　なんというか、あのゴルゴス、ゴルゴス先生のぐびをきさま、もってゆぐんか。

エウリピデス　あのゴルゴンの首じゃ、わしがいうのは。

巡警　そら、ゴルゴスとおれもいうとるに。

エウリピデス　「はてこれはなんとした状、あれなる崖にまさしく乙女の、女神にもたぐえつべきを、船のごとくに繋ぎとめしは」

ムネシロコス　「おお、おはもじながら、よに痛ましきわらわがうえをあわれみあって、このいましめをお解きなされてくださりませ」

巡警　こりゃ、きさましゃべっちゃならんど。げしからん奴だ、いまにも死刑になるちゅうに、しゃべりぐさって。

エウリピデス「おお乙女よ、つながれた御身の姿を見るにあわれはまさるものを」

巡警　こりゃ乙女ではない、囚人のおいぼれ爺の盗人の悪者だがな。

エウリピデス「なんのたわけを、スキュティア人、これこそ正しくケペウスの姫アンドロメダじゃ」

巡警〔ムネシロコスを指して〕だら前の道具[1]を見んがええ、ちっこいもんじゃあるまいが。

エウリピデス　いで、ここへおん手を差し出されよ、乙女よ、わが手に執れるよう。いで、スキュティア人よ、およそ世に生きとし生けるもの悩みをもたぬとてはない、わしの心はこれこの乙女ゆえに、恋のとりことなりおおせたのじゃ。

巡警　別にやっかみはせんど、それじゃよ、もしもお尻がこっちの方を向いとったらな、お前がいってよろしくやろうと、いっこうおれは邪魔などせんどい。

エウリピデス　ではわしに、乙女の縛しめを解き、これスキュティア人よ、ともども比翼の枕を交わさせてはくれまいか。

巡警　もし、お前がそうこの爺にかまいたくてならぬというなら、後ろの板に穴をあけて突っ込んだらよかろうがな。

エウリピデス　いや、とんでもない、この縛しめを解こう。

巡警　ならこの鞭でうつど。

エウリピデス　ぜひにもこうしてくれる。

巡警　ならきさまのどたまをこの鎌刀で切り離してくれっど。

エウリピデス　やれやれ、なんとしようぞ、いかなる策を用いたものか。はて無知蒙昧なる者の性には施す道もなかろうもの。「げに愚かなものにむこうては、ことかわった妙案を施そうとも」つまりは無用に帰するであろう。されば何か違った、こやつに相応する手段を施さねばなるまい。　〔退場する〕

巡警　げしからん狐めだ、わすをなぶり者にしぐさって。

ムネシロコス　ペルセウスさま、お忘れなく、この私をみじめな態に置いて行くのを。

巡警　まだきさまはこの鞭をぐらいたいというんか。

〔坐り込んでやすみ、やがて居睡りをする。コロスはその間を利用して舞唱にかかる〕

コロス〔まず第一は市の守神アテネへのうた〕

歌舞をめでさせたもうパラスさまを[2]
これなる舞いに招きまつるは定まるならい、
まだ生娘の姫神さまを。

われらが市を護らす御神、
また隠れなき力をもたせば、御神のみぞ
鍵の守り手と呼ばれたもう。
来降しませ、おお、暴い僭主を
もとよりながら憎みたもう神。

君を呼ばうは、げにも女の
市民のつどい、来ませやここに
祭をめでる平和とともに。

〔第二はデメテルとコレーとのテスモポロス両柱神への歌〕

おいでませ、み慈みふかくお優しい
女神さまがた、私どものこの神苑に。
いかにもここでは殿方衆が両神さまの
とおとい祭事をのぞき見するは許されませぬ、
篝の火かげに不死の姿を現じたもうおり。
おいでませ、来降しませ、おねがいしまする、おお、
掟授けの、あやにとうとい両神さま。
いつぞやむかしも、祈りをきこして

おいでたならば、今もおいでて、このところなる
私どもへ来降しませとお祈りしまする。

〔エウリピデス、取持ちのやりての姿で、踊子と笛吹きをつれてくる〕

エウリピデス　ご婦人衆、もしあなたがたがこれからさき末長く私と仲直りをしようってお言いなら、今がそのときですぞ。どうですな、これから先いっさいあんたがたのわるい噂は立てぬという条件で、この提議を私は布令あげさせます。[1]

コロス　どういう要があって、そんな話をお持ち込みかえ。

エウリピデス　そのね、立板に縛えつけられてんのが私の身内なんでさ。もしその人を連れてかせてくれるなら、もう決して私はみなさんの悪口は言いますまい。またもし言うことをきかなきゃ、いま留守中にやっといでな事柄を、あんたがたのご亭主たちが、戦さから戻ってきた[2]とき、すっかりばらしてくれるがどうです。

コロス　私たちのほうは、いかにもたしかに承知だけどもね、ここにいる異人さんのほうは、あんたが自身で納得させてくださいよ。

エウリピデス　そいつぁ引き受けた。〔踊り子に向かって〕そら、鹿の子ちゃん、[3]こんどはお前が、道々いっておいたようにな、ぬかりなく、きっとやっつけるんだぞ。まず初めには裾をまくってな、そばを歩いてとおるのさ。そいから君はね、テレドン、ペルシアの曲を吹き立ててくれたまえ。

巡警　〔筵のうえに居睡りしてたのが目を覚まし〕このぴーひゃらはなんだな、祭の行列でもがおれの目をさましおったかい。

エウリピデス　この娘がね、おさらいをしときたいってんですよ、ちょいと、弓の旦那、だってあるお邸へね、これから踊りをしに招ばれてくとこなんですの。

巡警　うん、踊るなりおさらいなりするがええ、おれはちっともかまわん。なんてま身軽なもんだな、まるで毛皮の上の蚤みたように。

エウリピデス　さあこんどはその上衣をぬぐんだよ、ね、鹿の子ちゃん、お膝の上に坐らしてもらってね、スキュティアさんのよ、両足をお延ばし、あたしが靴を脱がしたげるから。

巡警　お坐り、お坐り、そんだよ、そう姐ちゃん、ありゃまあ、なんてかっちりしたおっぱいだろ、蕪みたいによ。

エウリピデス　〔笛吹きに〕お前、もっと早く吹くのよ、まだこのスキュティアさんが怖いのかい。

巡警　かわええおいどだな。[4]〔ひとり言で皮道具に向かって〕こいつすっこんでないとひどいぞ。もたげたり覗いたりしとる、すっかり首を出しやがって。ええわ、ここら辺がえらいいぐあいだに。

エウリピデス　結構だよ、着物をおきな。あたしたちゃもうそろそろ行かなきゃあね。

巡警　さきに接吻してくれんかね。

エウリピデス　ほんとだね、接吻しておあげ。

巡警　お、お、お、ぱぱぱぱい、なんて甘っこい舌だね、まるでアッティカの蜜みたいに。[5]ちとわすといっしょに寝てゆかんかね。

エウリピデス　さよなら、弓の旦那、そいつはね、だめなんですのよ。

巡警　な、ええだろ、婆さん、わすの頼みをきいてくれ。

エウリピデス　そいじゃ、四貫くださって。

巡警　うん、いいとも、あげるよ。

エウリピデス　そんならお金を、さ、ください。

巡警　それが持っとらんのだよ、代りにこの弓箱[6]をもってってくれよ。あとでまた返してぐれな。姐ちゃん、随いておいで。あんたはこの爺さを見張っててぐれよな、婆さ。だがあんたの名はなんていうのかね。

エウリピデス　アルテミシアですの。

巡警　そいじゃあ、名前を覚えておるがらな、アルタムウクシアさん。[7]

エウリピデス　ごまかしのヘルメスさま、これからもまだうまくやってくださいまし。

〔スキュティア人、小娘をつれて退場するのを追っかけ、小娘に、

また は笛吹きに？〕
そいじゃお前、駆けておいで、これを持ってね。さて、わたしはこの人を解いてやろう。
〔ムネシロコスを板からときにかかる〕あんたは、そら縄を解かれたらさっそくにも、勇ましくとっとと逃げて、おかみさんや子供たちが待ってる家へとんでくんだね。
ムネシロコス　それにゃわしがぬかるもんかね、いちど縄をほどかれさえすりゃ。〔縄を解きおわる〕
エウリピデス　そら、解けたぞ、さ、仕事だよ、逃げんだ、弓持ちが戻ってきて、とっつかまえないうちにさ。
ムネシロコス　いかにもわしゃそうするとこだよ。(一二〇九)
〔ムネシロコス、エウリピデスとともども、慌てふためいて退場する。巡警、入れ違いに駆けこんでくる〕
巡警　おい、婆さん、お前の姐ちゃんは本当にかわいい子だな。それに気難しゅうない、優しい子だよ。どこだね、婆さは。ありゃあ、こいつはしまった、どこかへいっちゃったぞ爺がここから。おおい婆さん、ばあ……そりゃいかんな婆さん、アルタムウクシア、わすを欺しおったんだな、あの婆は。さっさときさま行っちまえ。
〔弓箭をとって抛り出す〕
ほんとうにきさまは弓箱(いみ)だぞ。わすをいっぱいはめくさって。やれやれどうしたもんかな、どこへ行った婆さは、アルタムウクシア。
コロス　あの婆さんをお訊ねなの、あの三味線をかかえてた。
巡警　そうだよ、そうだ、あいつを見たかね。
コロス　こっちの方へ行きましたよ。あの女とそれに一人のお爺さんが随(つ)いて。
巡警　黄色い（女の）着物をきた爺さんだろ。
コロス　ええそうよ。まだ追いつけるでしょ、こっちの方へ追っかけてったら。(一二二一)
巡警　なんてまあげしからん婆だ、どっちの道へ駆けてきゃいいかね、アルタムウクシアめ。
コロス　まっすぐ上手へ追っかけてらっしゃい、どっちへ行くの、こっち、逆の方へ駆けていくのよ、そっちじゃあべこべの方角ですわ。
巡警　やれやれなんていうことだ、その間もアルタムウクシアは逃げて行きおる。〔エウリピデスらと反対の方角へ駆け込む〕
コロス　さあさあ、とっととおいで、追風(おいて)に帆上げて鳥のとこへ。(一二三〇)
さて私らはほどよく十分遊びをしました、
されば、ほんとにめいめい家(うち)へ
帰ってゆくのにちょうどよい時分、
では掟授け(テスモポロス)の両神さまがこのお代りに、
結構な褒美をわたしどもへくだされますよう。

訳註

二八九（1）「春が」という意味。ギリシアでは春先に燕が来ることが詩や歌にも出ている。春のきざし。

二九〇（1）エウリピデスは、よく乞食や跛者を舞台に上せるので、それにからんだもの、つまり「歩きまわらずにすもうか」との意。

（2）プラトンの『饗宴篇』にも出てくる喜劇作者、その作品の新奇と風姿の典雅優美をもって知られた。つぎの「色の黒い」もわざと反対を言ったもの。

（3）炭火は犠牲を焼いて祈るため、てんにんかの花環は祈願者の印しとして頭に戴くもの。

（4）「陽具をつっこもう」という意。

二九一（1）テスモポリア祭の中日、断食日（ネステイア）には議会も裁判所も休む習いであった。

（2）以下度々出てくる、この祭の主神たるデメテルとコレーの母子双柱の女神のこと。

（3）『蛙』一三二八行にも出てくる、当時名うての歌妓で、つまりアガトンの柔弱ぶりを諷するもの。

二九二（1）ポイボスはアポロンの異称。シモエイスはトロイア地方を流れる河。アポロンはトロイアの戦争でもっぱらトロイア方にひいきした。次節はその妹である狩猟の女神アルテミスを讃える。

（2）ゲネテュリデス。産褥を護る女神たちで、アプロディテの部下に属する。いくぶんエロティクな神々。

（3）ディオニュソスにかんする伝説で、トラキア王リュクルゴスが神に逆らい神罰を蒙って狂死した物語に取材した四部作を指す。その一つ『エドニア人ら』に「この女々しい奴は何者じゃ」という科白があり、以下それに係るといわれる。

（4）パイドラはエウリピデスの傑作『ヒッポリュトス』に出るヒロイン、義子に恋して自殺する。ラシーヌの「フェードル」のもと。

二九三（1）演劇の主神ディオニュソスに従う山羊脚の下級神。

（2）以下いずれも前七、六世紀の有名な抒情詩人、恋愛を歌った作も多い。

（3）初期のすぐれた悲劇作者。

（4）アイスキュロスの甥だが、同じく劇作者となり凡庸、以下いずれも同然。

（5）本喜劇上演ごろエウリピデスは七十歳あまりであったから。

（6）エウリピデス作『アルケスティス』の科白、自分の代りに死んでくれと頼む息子に父親がいう句。

二九四（1）復讐を司る三女神のこと。その社がアテナイのアレオパゴス丘にあった。

（2）アテナイの有力者で名家の出ながら柔弱で女らしいとて、いつも嘲笑される男。後段に自ら現われ、エウリピデスたちの策謀を失敗させてしまう。

二九五（1）牲として神前に奉る仔豚、火で焼いて毛を取り除く習いであった。

（2）以下いずれも整髪用具、バンドは鉢巻きのように締めるリボン風なもの。

（3）もちろんあの名医ではなく、無教育をそしられるアテナイ人でたくさんの子供らと小屋に住んでいた者。

（4）『ヒッポリュトス』六一二行にある有名な句。「舌は誓ったが、心は誓わぬ」と主人公が言いのがれをする科白。

二九六（1）下婢の名、女装しているので小婢を連れている風にもてなしたもの。

（2）上記コレー女神と同じ。通例ペルセポネと呼ばれる。

（3）豚子と同じく、いいかげんに案出した男女の子供の名。

（4）アテナイの民会で恒例の開会の祈文を述べる、以下その常用句のもじり。

（5）「美しい生まれの」の意で、もと女神コレーの別名であったが、後その侍女神の一人の名とされるのがつね。

（6）アテナイのデメテル社のそばには大地女神ゲー（ガイア）の社があったと記されている。

（7）アポロン神の生地であるから。

（8）パラス・アテネは、アテナイ市の守護神とされている。パルテノンはその社。「みなが羨ましがる」というのは、伝説に彼女と海の主神ポセイドンとが、アテナイの支配を望んで争いあったことをさす。

二九七（1）子供のない妻が家庭内の地位を確保するため、よそから嬰児をそっと貰って自分で生んだふりをする。また女の児を男の児とすりかえたりするのがときにあった。それを暴（ば）らす行為。

二九八（1）前一六八行にも出た悲劇作家。

（2）アテナイの大広場アゴラには祭式や儀礼用にふだん用いるミルテの冠のための枝を売る小店群がいつも開かれていたのをいう。

(3) 彼がその『ベレロポン』などで述べる句。

二九九 (1) そっと扉を擦って合図をすること。

(2) 「道しるべのアポロン」として尖った柱を家の前に立てる習いであったという。

(3) 奴隷中でもとりわけ粗暴な荒くれ男が多かった。

(4) この時代はペロポネソス戦役中で、しかもアテナイの旗色が悪く、スパルタ軍が市の外郊に迫っていたので、市民は交代で城壁の防備に当っていた。

三〇〇 (1) 「お腹の皮」というところを、赤児を壺に入れて持って来たので。

(2) 古い酒宴歌に「どんな石の下にも蝎(さそり)がいるから、気をつけろ」とあるのをもじったもの。蝎が弁士に変ったわけである。

(3) よくある言い回しで、つまり女がいちばん悪いことになる。

(4) アテナイ伝説の王ケクロプスの娘、婦人の誓いによく使われた。

(5) アイオロスの娘で、ポセイドン神と通じ双子を生んだ。アイオリス人、ボイオティア人の祖。

(6) オデュッセウスの妻で二十年間夫の不在中貞節を守った、「貞女の亀鑑」。

三〇一 (1) 十月ごろ行なわれる祭で、同族者の、その年に生まれた新産児が加入を許される。

(2) 前出、アテナイでもいちばんの柔弱で女らしいという廉でいつも冷嘲されている男。次行の顎鬚をすっかり剃っているのもアテナイ人の風習に反した柔弱の兆とされる。

三〇二 (1) よくアリストパネスの喜劇に出て嘲られる男、大食漢で卑怯者。

(2) 滴尿症で、田がらしはこれに利くといわれた。

(3) 祭の際、社のそばにいっしょに小屋を設けてお籠りした仲好し、この祭は三日にわたり婦人の参籠を求めたので大抵女は二人ずつで小屋に泊った。

(4) 酒を飲みすぎて尿意を催したわけ。

三〇三 (1) 喜劇の俳優は大きな面を被り、また皮製のとくに大きい陽具をつけている、それを隠そうとしてしきりに押し込んでいる身振り。

(2) コリントス地峡のこと、東西に海を控え、車へ載せて船や荷を運んだ、その往復より頻繁との意。

(3) 市政や検察に当る月番の議員、スキュティア人は公僕として巡警を勤め、弓と矢を携えていた。

三〇四 (1) ムネシロコスは女の抱いた赤児をひっつかむと社の祭壇に逃げこみ、子供を殺すぞと脅すが、それが実は酒を一杯入れて着物を着せた皮袋であった。

(2) 葡萄の枯れ枝をまるめた焚きつけ。マニアは小婢の名前。

(3) 酒を飲むために着物もみな質に置いたり、売り払われたりするので。

三〇五 (1) 「酒祭を三度経た酒かね」ということを赤児の年齢にかけたもの。

(2) 犠牲の獣の血をうける盆。ここでは赤児を神に献げたわけなので、その血、つまり葡萄酒をうけ入れて飲もうというわけ。

(3) 神に献げた獣の皮は巫女の役得とされたから、空になった皮袋を女にやるということ。

(4) エウリピデス作悲劇の題名。前四一五年上演という。パラメデスはトロイア戦役の勇士で知者として知られる、オデュッセウスのため裏切者として陥構され死罪となる。弟オイアクスが故郷の老父にそれを告げようとして道具のないところから、櫂に刻んで海に投じた故事、従って以下の句は彼の悲劇に出る科白である。

(5) Euripides と刻むのだが、ギリシア字のロー(ρ)は頭が丸いので刃では刻みにくいわけ。

三〇六 (1) 「海戦」という意だが、女の名前にもなり得るのを使ったもの。カルミノスが海戦に敗れたことを諷する。以下サラバッコは歌妓ともいわれ、アリストマケは「戦いの最優者」ストラトニケも「戦いの勝利」、マラトンはペルシア戦役にギリシア軍が大勝した地、エウブゥレは「良い謀策」の義で、いずれも女の名前。

(2) ステニアはテスモポリアの本祭の二日前に行なわれる婦人の祝祭で、その日女たちは互に悪口を言いあう。スキラは夏に行なわれる「日傘の祭」。

三〇七 (1) クレオンの後継者になった民衆政治家。金持であったが身分が卑しく燭台製造業をしていたのでいつも悪口を言われていた。この前も陶片追放にあい前四一一年に殺された。恐らく先代から高利貸もしていたらしい。ラマコスはすでに前四一四年に戦死し、ヒュペルボロスもこのときは死んだ後と思われる。

(2) 『パラメデス』があまり好評でなかったのを諷刺したものと考えられる。

(3) エウリピデスの最近作、前年に上演されたらしい。ヘレネの誘拐はトロイア戦役の原因であるが、ここに用いる他説ではエジプトに渡って夫メネラ

オスに伴われ帰国する。八五五行以下はそのなかの科白とだいたい考えられるが、ときどきおかしくもじってある、「まっ黒な医薬」など然り。

(4) 夜を司どる幽冥の女神。これも『ヘレネ』に出る。

(5) 当時アテナイにいた、いかさま師で悪名が高かった。

(6) 当時の海軍の将軍か、確かには不明。ここでは現実との相違が問題。

三〇八 (1) このように同じ言葉をよく重ねて用いるのは、エウリピデスのとくに目につく癖であった。

三〇九 (1) ムネシロコスを舞台裏へつれ込み、木の板に縛りつけて戻る。罪人を処刑まで立てさらしにしておく習いであった。これはもちろん次のアンドロメダの仕草にかかるため。

(2) アテナイの市政当局者の収賄行為を諷したもの。袖の下をうけとるために手を出す形である。

(3) アリストテレス『詩論』にも出てくる写実派の画家で、あまり一般に認められなかった。

(4) アポロン神のこと。「遠矢射る」も同じくアポロンの冠詞。

(5) ゼウス大神の妃で、婚姻を司どり夫婦の義を守るものとされた。

三一〇 (1) テスモポリア祭をするこの日は断食日であるから。

(2) ディオニュソス神の別称、バッコス、ブロミオスも同じ、エウイエはその呼びかけの形。

(3) テーバイの南境にある丘陵で、ディオニュソスはテーバイと縁が深い。常春藤はバッコスにつきもの、その神聖な植物とされている。

(4) 以下スキュティア人の巡警は外国人なので、ひどく怪しげな言葉を使う。ここではかりに方言に似たものとした。

(5) 囚人の縛しめを堅くする（または弛める）のに用いるくさび、スキュティア人はわざと逆に意地悪く彼の縛しめをきつくしたもの。

(6) ギリシア神話の英雄、ヘルメス神の飛行の鞋を借りてゴルゴンの首をとりに赴き、その帰途エティオピア王ケペウスの娘アンドロメダが海の怪物の牲として岩に縛られているのを救う。以下エウリピデスの悲劇『アンドロメダ』の科白を用いて芝居仕掛けで掛け合いをやるわけ、この劇は前年に上演されて優勝し、ひじょうな好評を博したといわれる。

三一一 (1) アンドロメダはもちろん「母上のもとに……」と言ったはずだが、ムネシロコスは地金を現わして細君や子供のところへ帰ろうというもの、一二〇六行参照。

(2) 劇の科白より。ただし「投票を」云々はアテナイの民会の習いをふざけて入れたもの。喜劇ではいつもこうした突拍子もない的外しを入れる。

(3) 『平和』にも出る食いしん坊として有名だった男、「鰈」の名もある。

(4) 前年に上演されたアテナイのディオニュソス劇場を指す。

三一二 (1) 窈窕たる美姫に扮しているはずなのが、ときどき地を現わしてしまう。

(2) ペルセウスが携えてきた怪物の首、これを見る者は石に化した。その話を無学なスキュティア人は知らないので、当時アテナイにいたらしい実際の人物ととり違える。あるいはプラトンにも出る修辞学者ゴルギアスのことだろうともいわれている。

三一三 (1) 巡警は憐れむべきエウリピデスの迷いを覚ましてやろうと、ムネシロコス、つまり喜劇俳優が扮装に用いる、大きな皮の陽具を指し示す。

(2) 以下、パラス・アテネ、すなわちアテナイ市の守護の女神への讃歌。

三一四 (1) 戦いで休戦の提議をするときの文句、和議提唱を大げさにいうもの。

(2) 当時は戦争中だったから、夫が帰還したさい悪事をばらすと脅したわけ。

(3) 小妓の愛称。こうした名前はよく踊り子や歌妓の名として用いられていた。この妓はいま誰かの私邸での饗宴に招かれて踊りをしに行くところ。エウリピデスは今度はやりての婆さんに扮して現われ、踊り子をつれて色仕掛けでスキュティア人の巡警をだまそうというのである。伴奏者として笛吹きの少年をつれている。

(4) 古註には「陽具に向かっていう言葉、覗き出ようというのを敲きながら」とある。

(5) 蜂蜜はアテナイ名産の一、ことにヒュメットス丘のものは名高かった。

(6) 弓を入れておく器。もちろん官品であるが、一時抵当に預けておくわけ。

(7) ヘルメスは商業の司神でもあるが、また偽言者や盗賊の親玉でもあるので、ここではスキュティア人をだますについて、その神助を求めたもの。

三一五 (1) 「烏のところへ失せろ」「烏ども許へ行っちまえ」とは、ありきたりの悪罵の言葉で「悪魔のところへ行け」などと同然。次の「遊んだ」というのは「演戯をおえた」という意味をあわせ含む。

蛙（かわず）

登場人物

クサンティアス　ディオニュソスの召使。
ディオニュソス　酒神。
ヘラクレス　ギリシア神話中の英雄。
死体
カロン　地獄の渡し守。
蛙のコロス
秘教入会者のコロス
アイアコス　地獄の門番。
ペルセポネの侍女
女将
プラタネ　その婢。
エウリピデス　ギリシアの悲劇詩人。
アイスキュロス　同右。
プルトン　地獄の王。
このほかに葬列に従う人々、プルトンの従者たち大勢

［ヘラクレスの家の前。ディオニュソス、サフラン色の絹の衣に悲劇役者の用いる半長靴を着し、衣の上には獅子の皮を着け、棍棒を手にヘラクレスの扮装にて登場。その召使クサンティアス、天秤棒を肩に、驢馬に乗って彼に従う。棒の両端には旅行用の道具をくるんだ荷物がかかっている］

クサンティアス　旦那、例のやつをひとつ言いますかね、見物方がいつでもお笑いになるのを。

ディオニュソス　うん、なんなりと好きなことを言うがよいが、「ああもうつぶされちゃう」は、こいつはいかん。反吐（へど）が出るほど飽きあきだ。

クサンティアス　何かほかの洒落（しゃれ）たことも？

ディオニュソス　「ああ、もうへしゃげる」はいかんぞ。

クサンティアス　それじゃ大した滑稽なことを言ったらば？

ディオニュソス　よいとも、大いにやれ、だがあいつだけはいかんぞ。

クサンティアス　そりゃなんですかい。

ディオニュソス　天秤棒を担ぎかえながら、「うんこがしたい」はいかん。

クサンティアス　「こんなに重い荷を担いでいながら、誰か助けてくれなきゃあ、一発放つぜ」もですかい。

ディオニュソス　お願いだ、そいつはいかん。おれが吐きたくなるまで待ってくれ。

クサンティアス　それじゃいったいなんのためにこんな荷を担ぐ用があるんですかい。プリュニコスやアメイプシアスやリュキス[1]が書いた喜劇のなかで例外なしに荷担ぎに言わせたことを一つもあっしがやらないとあればね。

ディオニュソス　いかん、いかん、おれは見物席にあってこういう洒落を聞くたびに、十二カ月がとこ年をとって桟敷から出て来るよ。

クサンティアス　憐れなはあっしのこの頸(くび)でございだ。へしゃげそうになっているのに、こいつを種に滑稽が言えぬとは。
ディオニュソス　生意気な思い上がりだ、こいつぁ、ディオニュソス、大酒甕(おおさかがめ)の子[1]たるこのおれが、ご自身じゃ苦労して歩いて、こいつを驢馬に乗せ、いたわって重い荷を担がずにすむようにしてやっているのに。
クサンティアス　あっしが担いでいないんですって？
ディオニュソス　驢馬の背中に乗っていて、どうして担げる？
クサンティアス　こいつを担いでまさあ。
ディオニュソス　どういうぐあいにだ。
クサンティアス　ひでえ重荷だ。
ディオニュソス　お前の担いでいる荷は驢馬が担いでいるのじゃないか。
クサンティアス　あっしの持っている荷物はあっしが担いでいるんで、驢馬じゃありませんよ。
ディオニュソス　自分がほかのものに担がれているのに、どうして担ぐことができるんだ。
クサンティアス　あっしには判りませんな。ですがあっしの肩は「つぶれそうだ」。
ディオニュソス　驢馬がお前の役に立たないというのなら、よしそれじゃ代って驢馬を持ち上げてやれ。
クサンティアス　おやおや、えらいことになった。どうして海戦に出なかったんだろうな[2]。そうすりゃ一昨日(おととい)おいで尻まくり、ひどい目にあわせてやれたのに。
ディオニュソス　下りろ、悪党め。おお、まず立ち寄らねばならぬ家の戸の前に来たな。しかもおひろいでだ。おおい、頼もう、おおい。
〔とディオニュソス戸を叩く〕
ヘラクレス　「戸口に出る」戸を叩いたのは誰だ。気違い馬のようにぶつつかりやがって。ええ、こりゃいったいなんだね。
〔とディオニュソスの妙な格好を上から下までじろじろと眺め廻す〕
ディオニュソス　〔クサンティアスに〕おい。
クサンティアス　なんですかい。
ディオニュソス　見たか。
クサンティアス　何をですか。
ディオニュソス　あいつは大恐惶だ。
クサンティアス　さようさ、あなたが気違いじゃないかと心配してね。
ヘラクレス　わあ、は、は、デメテルさま、こりゃたまらぬ。唇をどうかみしめても、やっぱり、わ、笑わんでは……。〔と哄笑する〕
ディオニュソス　おい、君、君、こっちへ来てくれ。頼みがあるのだ。
ヘラクレス　だが笑いが追い払えんわい。サフラン色の衣の上に獅子の皮とはどういうつもりだ。半長と棍棒との組合せは、こりゃどうしたことだ。どこにご旅行ですかね。
ディオニュソス　船に乗り組んでいたのさ、クレイステネス[3]と。
ヘラクレス　海で戦ったのか。
ディオニュソス　そうとも、沈めたね、敵艦を、なあに、ちょっと十二、三隻さ。
ヘラクレス　二人だけで
ディオニュソス　そうとも。
クサンティアス　そこで私は目が覚めた。
ディオニュソス　さて船上で、おれは一人で『アンドロメダ』[4]を読んでいると、突然に憧れがおれの心をはったと打った。その強さといったら。
ヘラクレス　憧れだと？　どれくらいの大きさだ。
ディオニュソス　なに、大したことはない、モロン[5]くらいのだ。
ヘラクレス　女か？
ディオニュソス　いやいや。
ヘラクレス　少年か？
ディオニュソス　いいや。
ヘラクレス　男へのか？

ディオニュソス　ああ！

ヘラクレス　クレイステネスといちゃついたのか。

ディオニュソス　兄弟、(1)からからのはよしてくれ。笑いごとじゃないんだ。激しき思いはわが身を焦がさんばかり。

ヘラクレス　はてね、言ってみな、兄弟。

ディオニュソス　だめだ。だが一つ譬えでもって話してみよう。突然に豆スープが欲しくてたまらなくなったことはないかね。 (六二)

ヘラクレス　豆スープ？　大ありの助、一万遍もだ。(2)

ディオニュソス　「それでもう十分お判りか」(3)、それとも言いかえようか。

ヘラクレス　いいや、スープの点はよく判った。

ディオニュソス　それほどの大きな憧れがわが身を焦がした、エウリピデスへのだ！

ヘラクレス　なんだと、亡者じゃないか。

ディオニュソス　そうさ、だが誰がなんと言って止めようが、おれはあいつを求めに行くのだ。

ヘラクレス　地の下の、地獄へか。

ディオニュソス　そうだ。たとえもっと下でもだ。 (七〇)

ヘラクレス　いったい何をしにだ。

ディオニュソス　真の詩人が入用なのだ。
「ある者はすでに世になく、あるは悪い者ばかり」(4)

ヘラクレス　なんだと。イオポン(5)は生きていないかね。

ディオニュソス　そうさ、たった一つの
われわれに残された幸（さち）なんだ。もしほんとうにそうならばね。
この点についてさえも疑いなきにしもあらずだからな。

ヘラクレス　それじゃどうしてソポクレスを――このほうがエウリピデスより先だ――連れて来ないのだ。どうしても連れて来なくちゃならんとあればだ。

ディオニュソス　いや、イオポンをたった一人にして、ソポクレスなしにどんな響きを出すかを試してからだ。そのうえにエウリピデスは悪知恵の働く男だから、おれといっしょにこの世へ逃げ出そうとするだろうが、ソポクレスはこの世にあってもあの世にあっても不平不足なしにいる。 (八二)

ヘラクレス　だがアガトン(6)は、どこにいる？

ディオニュソス　われらを後に残して去ってしまった。立派な詩人、友人どもには惜しまれている。

ヘラクレス　哀れな奴め、どこへ行った。

ディオニュソス　「至福の人の宴（うたげ）へと」(7)

ヘラクレス　それじゃクセノクレス(8)は？

ディオニュソス　えい、あんな野郎はくたばってしまえ。

ヘラクレス　それじゃピュタンゲロス(9)は？

〔ディオニュソス、答えずに肩をそびやかす〕

クサンティアス　〔傍白〕だがこのおれさまに関しては一言もなし。おれの肩がこんなにひどく痛んでいるのに。

ヘラクレス　だがこのほかにけちな野郎どもが万もいるじゃないか。みんな悲劇作者で、エウリピデスに梯子をかけたおしゃべりどもが。 (八八)

ディオニュソス　こいつぁ実のない木の葉さ、雑言、燕のさえずり、悲劇の破壊者、いちどコロスをもらったが最後で(10)、おさらばさ。悲劇の女神といちどいちゃつくだけだ。血眼で探したところで創造的なすばらしい言葉を創る詩人は見つかりはしまいよ。 (九七)

ヘラクレス　創造的って、どういう意味だね。

ディオニュソス　こういうぐあいに創造的なのだ。何かこういう大胆きわまることをあえて行なう詩人だ、「ゼウスの宮なるアイテール」(11)とか、「時の足」(12)とか、「心は供物（くもつ）を前に誓言いたそうとはせなんだが、舌が勝手に偽誓いたしたわ」(13) (一〇二)

ヘラクレス　お前はこんなのが好きなのか。

ディオニュソス　好きなのって、有頂天さ。

ヘラクレス　こいつぁお前も知ってのとおり、まったくとんでもない代物（しろもの）だぜ。

ディオニュソス 「わが心に住むはやめにせい」[1]、お前には住む家があるじゃないか。
ヘラクレス なに、まったくくだらぬ代物だと言うことよ。
ディオニュソス お前が教えられるのは食い物のことだけだ。
クサンティアス 〔傍白〕だがおれさまに関しては一言もなし。
ディオニュソス だがおれがお前の真似をしてこの代物を身につけてやって来たわけは、お前がケルベロス[2]を求めて地獄に行ったおり、お前をもてなしてくれた人々をおれに教えてくれるようになのだ。いるかもしれないからな。この人々、港、パン屋の店、おき屋、休憩所、茶店、泉、道路、町、宿屋、いっとう虫の少ない宿の女将。
クサンティアス 〔傍白〕だがおれさまに関しては一言もなし。
ヘラクレス おいおい、お前ほんとうに行くつもりか。
ディオニュソス そんな言い方はやめにして、地獄へのいちばんの近道をさっさと教えろ。それも暑からず寒からずという奴だよ。
ヘラクレス さてと、どれをまず教えるかな、どれを。大索に漕ぎ手のベンチというのも一法、それから首をくくる……。
ディオニュソス いや、そいつは少々喉がつまりすぎるて。
ヘラクレス ええと、近道があるがね、よく踏みならされて、摺られている、薬研[3]でだ。
ディオニュソス 毒人参か[4]。
ヘラクレス まさにそのとおり。
ディオニュソス そいつぁ冷たくて寒すぎるな。あっと言う間に向う脛を凍らせる。
ヘラクレス それじゃ短くて急なのを教えてほしいか。
ディオニュソス そいつぁいいぞ、おれはあまり歩くのは達者でないからな。
ヘラクレス まずケラメイコス[5]へ歩いて行く。
ディオニュソス それから[6]。
ヘラクレス あの高い塔に登って、
ディオニュソス それからどうする。
ヘラクレス そしてそこから松明競争が始まるのを見るんだ。それから見物が「そら、やれ！」と言うとき、お前もぽんとやる。
ディオニュソス どこへ。
ヘラクレス まっさかさま。
ディオニュソス それじゃ脳味噌の二枚の葉っぱはお陀仏だ。この道はごめんだよ。
ヘラクレス それじゃどうする。
ディオニュソス お前があのおり降りて行った道だ。
ヘラクレス だが長い航海だよ。まず大した広大な湖[7]に来る、底なしだ。
ディオニュソス どうして渡るね。
ヘラクレス これっぱかしの〔と手真似で示す〕ちっぽけな舟で年寄の渡し守が二銭[8]の船賃で渡してくれる。
ディオニュソス ほう、二銭の威力たるやどこでも大したものだな。どうして地獄まで広まったんだ[9]。
ヘラクレス テセウスが広めたのだ。それから数かぎりもない蛇に猛獣、ものすごいぞ。
ディオニュソス 嚇かすな。おれはやめないぞ[10]。
ヘラクレス それから汚物の山、糞尿の永劫の河[11]だ。このなかにころがっているは賓客を害し、お客になっていながら女の枕を探し、母親をなぐり、親父の頭に一発お見舞い申し、偽誓をなし、モルシモス[12]の演舌を写した者どもだ。
ディオニュソス キネシアスの剣舞[13]を習った野郎も、こいつらといっしょにいるべきだ。
ヘラクレス その次に笛の音が風に漂いお前を包む、そして美しい光を見るだろう。ちょうどこの世のような。それからミルトの木立、ついで幸多き男女の群れと賑わしい手拍子の音。
ディオニュソス この人たち[14]はいったい誰だね。
ヘラクレス 秘教入会者だ。

クサンティアス　さよう、このわしはとにかく秘教会に一役もっている驢馬でさあ。[1]（一五九）
　だがもうこいつは一刻も我慢がならん。

〔と荷物を下ろしかける〕

ヘラクレス　彼らはお前に必要なことをみんな教えてくれるだろう。この人たちは道のすぐそばに、プルトンの家の戸口に住んでいるのだよ。さようなら兄弟。

ディオニュソス　ああ、君もご機嫌よう。〔クサンティアスに〕お前は荷物をかつげ。

〔ヘラクレス、家に入る〕

クサンティアス　まだ下に置きもせぬうちにですかい。

ディオニュソス　そうさ、早くしろ。

クサンティアス　いや、いけませんよ、お願いだから誰か雇ってください。かつがれてこの旅路を急ぐ奴を。

ディオニュソス　見つからなかったら？

クサンティアス　そのときには私を連れて行きますさ。

ディオニュソス　おやおや、見ろ、あそこに死骸をかついで行くぞ。

〔葬列が棺台に死骸をかつぎながら舞台を横切る〕

おおい、お前さんを呼んでいるんだ、死人のお前さん。この小荷物を地獄までかついでくれる気はないかね。（一七一）

死体　〔起き上って坐る〕どれだ、重さは？

ディオニュソス　これさ。

死体　二ドラクマ払うかね。[2]

ディオニュソス　とんでもない。高すぎる。

死体　〔棺桶かつぎに〕おい、やってくれ。

ディオニュソス　まった、まった、ねえ君、なんとか手が打てんかね。

死体　二ドラクマ払わないなら、談判無用だ。

ディオニュソス　一ドラクマ半にしろ。

死体　それじゃ生き返ったほうがましだよ。

〔とまた横になる。葬列退場〕

クサンティアス　こん畜生、生意気な野郎だ。ひどいめにあうぞ。私が自分で行きましょう。

ディオニュソス　立派な見上げた奴じゃ。さあ渡しへと急ごう。

〔カロンの声が聞え、ついで渡し船が舞台に現われる〕[3]

カロン　エイ、オウ、船をつけろ！（一八〇）

クサンティアス　こりゃなんだ。

ディオニュソス　これ？　例の湖さ、あいつが話した。船が見えるぞ。

クサンティアス　たしかにそうだ。それからあいつがカロンだ。

ディオニュソス　おおい、カロン、おおいカロン、おおい、カロン。

カロン　禍いと悩みよりの憩い所に行くは誰ぞ、忘却の野に行くは誰ぞ、それから驢馬の毛へ、ケルベリオスどもへ、犬に食われるは、タイナロンに行くは。[4]

ディオニュソス　私だよ。

カロン　早く乗れ。

ディオニュソス　行先はどこだ。ほんとうに犬に食われるのか。

カロン　そうさ、お前のためになる。乗れ。

ディオニュソス　〔クサンティアスに〕おい、こっちへ来い。

カロン　奴隷はいかん。自分の身を贖（あがな）うために海で戦った奴は別だがね。[5]

クサンティアス　おれはだめだったのだ。眼病を患（わずら）っていたのだ。（一九二）

カロン　それじゃ湖を廻って走って来い。

クサンティアス　どこで待っているんですか。[6]

カロン　殺生石の横でだ。憩い所のそばの。

ディオニュソス　判ったか。

クサンティアス　判り申した。運が悪いな、けさ出がけに何に出あったろうな？[7]

〔とクサンティアス駆け始める〕

カロン　櫂（かい）の座にすわれ。ほかにお客はないか。急げ。

〔ディオニュソス、言葉どおりに櫂の上に坐ってすましている〕

おい何をしているんだ。

ディオニュソス　何をしているって？　お前の言ったとおり、櫂の上に坐っているんじゃないか。

カロン　そこに坐るんだ、太っちょめ。

〔とディオニュソスを突き落す〕

ディオニュソス　こうかい？

カロン　腕を前に出して延ばすのだ。

ディオニュソス　こうかい？

カロン　馬鹿な真似はやめろ。足をしっかりふんまえて[1]熱心に漕げ。

ディオニュソス　経験もなし、船乗りでもなし、サラミス人でもないこのおれが、どうして漕げる。

カロン　おやすいことだよ。ちょっと櫂を引き始めさえすりゃ、とてつもなく美しい歌が聞える。

ディオニュソス　誰の？

カロン　白鳥蛙のだ、すばらしい。

ディオニュソス　それじゃかけ声をかけてくれ。

カロン　えんやらほう、えんやらほう。

〔蛙の合唱、姿は見えず、水中より聞こえて来る。これに合わせてディオニュソス漕ぐ〕

蛙　ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ[2]
ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ
湖と泉の子らよ、いざ上げん
笛の調べに讃えの歌を
グヮアッコ、グヮアッコ
ゼウスの御子、ニュサ[3]の
ディオニュソスをあの沢[4]で
讃えし歌を
美しき壺（つぼ）の祭に
酔いしれし人の群れが
われらが聖域に進みしときに。
ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ。

ディオニュソス　ところがおれの尻っぺたが
痛んで来たわい、グヮアッコ、グヮアッコ。

蛙　ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ。

ディオニュソス　ところがお前はお構いなし。

蛙　ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ。

ディオニュソス　グヮアッコもろとも消えてなくなれ。
お前にはグヮアッコのほかに何もなし。

蛙　そのとおり、出しゃばりめ、
うるわしき小琴のムーサらと角足（つのあし）の
蘆（あし）の音（ね）にたわむれる牧神（パン）とはわれらをめでにしを。
竪琴の神アポロンもわが歌の音（ね）に喜びし、
水中（みずなか）に、沢中（さわなか）に、琴胴の支えに
われらが養える蘆茹（あしかり）ゆえに。
ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ。

ディオニュソス　おれの手はすりむけ
とっくにお尻は汗だらけ
今にてっぺんむいて歌うだろう
ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ。
おお、歌好きの族（やから）ども
やめてくれ。

蛙　いや、いや、もっと
歌おうぞ、その昔、うるわしい
陽光の注ぐ日に飛び跳ねし、
葦と灯心草のあいだをくぐって、
くり返し水に飛び込む、
歌の調べに心躍らせ、

あるはまた、大神の降らせる雨を
遁(のが)れつつ水庭に水中(みなか)の
あやなす歌を、その昔、歌ったことがあるならば、
ブクブク、ブクブク、水泡(みなわ)もろとも。

ディオニュソス　ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ、（二五〇）
こいつぁお前たちから失敬したんだよ。

蛙　そいつぁまったくひどいねえ。

ディオニュソス　もっとひどいのはこのおれさま、
漕いでるうちに破裂しそうだ。

蛙　ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ。

ディオニュソス　こん畜生、勝手にしゃあがれ。

蛙　だがおれたちは歌いぬくぞ
喉の開きが許すかぎりに
一日じゅうを。（二六〇）

ディオニュソス　ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ。
この競争じゃ負けないぞ。

蛙　おれたちも、けっして、けっして。

ディオニュソス　おれもまた、けっして、けっして、けっして。
けっして負けぬぞ。歌いぬくぞ、
一日じゅうでも
お前のグヮアッコに勝つまでは
ゲゲゲゲゲッコ、グヮアッコ、グヮアッコ。

〔蛙、沈黙する〕

お前のグヮアッコを止めてやれると判っていたさ。

カロン　漕ぎ方やめえ、櫂で押して岸につけろ。〔船、向う岸につく〕船賃を払って下りろ。

ディオニュソス　さあ二銭(オボロス)。おおいクサンティアス、クサンティアス
はどこにいる。クサンティアスか？（二七一）

クサンティアス　へえ。

ディオニュソス　こっちへ来い。

クサンティアス　今日は、檀那(だんな)。

ディオニュソス　そりゃなんだ。

クサンティアス　暗闇に汚物でさあ。

ディオニュソス　それじゃここで、あいつが話した父殺し、偽誓どもが
いるのを見たか。

クサンティアス　見ませんでしたか？

ディオニュソス　いや、いや、たしかにおれにも、ああ見えるわ。〔と（二七五）
見物席のほうをじろじろと見渡す〕さてなんとしよう。

クサンティアス　進むがいちばんですよ。ここは恐ろしい獣がいるとこ
ろと、あの男が言いましたぜ。

ディオニュソス　あん畜生め、おれを嚇かそうとほらを吹きやがった。
おれさまの勇気を知っていて、やきやがったんだ。世のなかで無類の
空威張り屋は——それはヘラクレスだ！[1]　おれは何かに出あいたいも
のだて、この旅にふさわしい冒険に。

クサンティアス　そのとおり、そのとおり、おや、何か音がするぞ。

ディオニュソス　どこだ、どこだ。

クサンティアス　後ろのほうに。

ディオニュソス　後ろに廻れ。

クサンティアス　いや前のほうですぜ。（二八六）

ディオニュソス　それじゃ前に廻れ。

クサンティアス　おやあ、ものすごく大きい獣が見えるぞ。

ディオニュソス　ど、どんな？

クサンティアス　恐ろしい。ううん、いろいろな姿に変わってゆくぞ、
牡牛、それから騾馬、それから娘、年頃の美しい。

ディオニュソス　どこにいるんだ。さあ会いに行こう。

クサンティアス　だがもう娘ではなくなった、犬だ。

ディオニュソス　そいつぁエムプサだ。[2]（二九二）

クサンティアス　とにかく火で顔じゅうが爛々(らんらん)。

ディオニュソス　銅の足をしているか。
クサンティアス　そのとおり、も一つの足は牛の糞だ、たしかに。
ディオニュソス　どこに逃げよう。
クサンティアス　私もどこへ。
ディオニュソス　おおわが神官よ[1]、おれを守護してくれ、そしたらいっしょに飲むぞよ。
クサンティアス　ああ、もう駄目だ、ヘラクレス大王さま。
ディオニュソス　おい、おい、お願いだ、おれを呼ぶなよ、その名は禁物だ。
クサンティアス　それじゃ、おお、ディオニュソス。
ディオニュソス　そいつぁもっと悪い。〔化物に〕さあ、行ってしまえ。
クサンティアス　こっちだ、こっちだ、檀那。
ディオニュソス　なんだ。
クサンティアス　心配ご無用、万事好都合でさあ。ヘゲロコスみたいに言えますぜ。「荒浪立ちしその後にまたもやなぎがほの見えるは[2]」エムプサは行っちゃいましたよ。
ディオニュソス　誓言しろ。
クサンティアス　神かけて。
ディオニュソス　もういちど。
クサンティアス　神かけて。
ディオニュソス　もう一ぺん。
クサンティアス　神かけて。
ディオニュソス　おやおや、お化けを見ておれはまっさおになったぞ。
クサンティアス　ところがあの人ときたら、心配して顔がまっ赤だ。
〔とディオニュソスの神官を指さす〕
ディオニュソス　ああ！　この禍いはどこから降って来るのか。いかなる神がこのおれの破滅の源（みなもと）となっているのか。「ゼウスの宮なるアイテール」か「時の足」か？
〔劇場の外より、笛の音漂い来る〕
おい。
クサンティアス　なんです。
ディオニュソス　聞こえないか。
クサンティアス　何が。
ディオニュソス　笛の音が。
クサンティアス　聞こえる、それから松明（たいまつ）の香が吹いて来る。大した秘教的香だ。
ディオニュソス　じっと坐って聞こうじゃないか。
〔合唱の歌はるかより聞こえ来る[3]〕
コロス　イアッコス、おお、イアッコス、
イアッコス、おお、イアッコス[4]。
クサンティアス　これが例の秘教の善男善女ですよ、ご主人[5]、あいつが話した――ここらへんでふざけているのだ。ディアゴラスの作ったイアッコス歌を唄っている。
ディオニュソス　そうだ、それじゃ静かにしているのがいちばんだ。はっきりなんだか見きわめよう。
〔コロス、登場。このとき湖水の背景は地獄の王プルトンの宮殿の門前に変わる〕
コロス　おお、イアッコス、いとも尊き宮居[6]にいますこの地の神よ、
イアッコス、おお、イアッコス、
この草原をところせましと足ふみ鳴らし踊らんために、いざ来ませ、
うかれたる奉教者へと、
頭上にはミルトの実も
さわなる輪飾を
舞わしつつ。狂おしき恐れ知らぬ足取りに無碍（むげ）自在
うかれたる、聖き尊（とうと）び、
優雅の女神（カリテス）もこれに和す。つつましき
入会者の舞隊にいざ来れ。

クサンティアス　おお、いとも尊き御主、デメテルの御娘、なんてうまそうな豚肉の香だ。[1]

ディオニュソス　静かにしろ、腸くらいくれるかもしれん。

コロス　目覚めよ、手に燃えさかる松明を振りかざし、
イアッコス、おお、イアッコス。
夜闇の御儀の朝の明星よ。
草原は焔に燃え
老いたる膝も跳るわ。
尊き御儀につらなって
古き悩みもふりこし多くの年も
振るい落として。
幸多き御方よ、
松明に輝きて花咲けるうるおえる野辺に導きたまえ
青春の踊りの群れを。

コロスの長　静まれ、[2]静まれ、われらがコロスに加わるべからず、秘教の理に通ぜざる者、[3]心に汚れある者、真のムーサの女神の乱舞を知らず、これに加わりしことなき者、[4]牛を啖うクラティノスの舌の秘儀に入会せしことのなき者、あるいはまた下等なる時を得ざる悪ふざけの言葉を喜ぶ者、あるいはまた確執を鎮めず市民と和せず、自己の利のためかえってこれを煽ぐ者、市が嵐のさなかにあるときに大臣でありながら賄いをうける者、あるいはまた要塞や軍艦を敵に売り、トリュキオン流に[5]禁制品を船積みし、あの悪党の五分税取りめ、[6]アイギナよりエピダウロスへと[7]櫂あて、帆、瀝青を送りこむ、敵の船に必要な物をば供給するように説き伏せる者、[8]あるいはまたディテュラムボス師のくせしてヘカテさまの神棚をあらす者、あるいはまた詩人の給料をかじり取る演舌師、[9]ディオニュソスの古くからの御儀で嘲罵の的となったというので。こういう者どもは退け退け、退けと申す、奉教者の合唱より退け。お身たち、かき立てよ、歌とこの祭にふさわしい夜を通じてのわれらが賑わいを。

コロス　進め、皆の者、勇ましく
花うるわしき野辺の
懐へ、足どりかろく
口もかるやか、
たわむれつ、からかいつ。
腹ごしらえは十分だ。

〔地獄の女王ペルセポネへの讃歌〕

進めよ、われらが
救いの女神を
歌もて称えん、
御神はわが国を
とわに守らんと仰せらる、
トリュキオンがなんと言おうと。

コロスの長　さて次には歌の調べを異にして、実りをもたらす御女神デメテルを称えまつらん、神曲の歌もさやかに。

コロス　おお、デメテル、尊き御儀の
御主、君が歌人を
助け守りたまえかし。
たわむれ踊らせたまえかし。
おかしきことも直ぐなることも
数多くわれらに言わせて、
君が祭にふさわしく

たわむれつ罵りつ、勝利の冠を
頭に戴かんことを。

コロスの長　えいや、
さて次には歌もてうるわしき若き男神をこなたへと
招き寄せよ、われらが歌のこの隊の伴侶をば。

コロス　いとも尊きイアッコス、喜ばしい
祭の歌の創造者よ、いざこなたへ
女神の[1]下に
長き旅路[2]をいかに苦もなく
渡られるかをお示しあれ、
踊りに狂うイアッコス、われらを伴い導きたまえ、
面白おかしくつつましやかに遊ぼうために
われらがサンダル、古き衣裳を
引き裂きても
心にかくることもなく、
たわむれ踊る道を開きたまえる
踊りに狂うイアッコス、われらを伴い導きたまえ。
おお、みめ美しい乙女子が
あちらに見えた、いや美しい
われらが仲間、
裂けた衣のその胸より
乳房がほいと顔を出す。
踊りに狂うイアッコス、われらを伴い導きたまえ。

ディオニュソス　おれはいつでも誰かの後にくっつくのが好きだ。ひとつあの子といっしょに踊りたわむれてみようか。

クサンティアス　ご同様だ。

コロス　みんなでいっしょに
アルケデモス[3]をからかってやろう。
あいつは七つになっても縁者が生えない[4]、
ところが今じゃデマゴーグ
地上の亡者をひきいている、
そしてかしこの悪党の大親分。
それから人の噂によれば
墓場でクレイステネス[5]は
自分の尻の毛を抜いて、頤かきむしり
うずくまっては胸をうち
嘆き慟哭しているという、
セビノスを。こいつはお尻が祖先だ。
それから人の言うところでは
馬助（ヒッポビノス）の子カリアス[6]は
獅子皮をば身にまといヴェヌスが丘で戦っている。

ディオニュソス　おたずねいたすが、プルトンの邸はここのどの辺か。われらはたったいま着いた他国の者だ。

コロスの長　もう長旅の要もない、また、もいちどたずねる要もない、まさにその戸口にあなたは立っていられるのじゃ。

ディオニュソス　おい荷をかつげ。

クサンティアス　こりゃひでえぞ。荷をかつげ、荷をかつげの百万遍[7]。

コロスの長　進め、
神のめずる祭に加わる者よ、たわむれつつ
女神の尊き境域を、花にみてる聖き地を。
われは乙女ら女（おみな）らとともに進まん、
女神を祝う通夜の場へ聖火をばもたらさん。

コロス　いざ進まん、薔薇にみてる花かぐわしき野辺に

幸多きモイラ[1]が
あやなせる
いと美しき踊りもて
われらがようにたわむれつ。
日輪と喜びの陽光はただわれらのみに照る、
秘教に入り
家人にも他国人にも
けがれなき生を
送りしわれらのみに。

ディオニュソス　〔プルトンの宮殿の戸口に立つ〕どういうふうに戸を叩けばよいかな、どういうふうに。ここの人たちはどういうふうに戸を叩くのかな。

クサンティアス　ぐずぐずせずに、戸の味を試してみるんでさあ。ヘラクレス式に、威張って。

ディオニュソス[2]　〔戸を叩く〕おおい、頼もう。

アイアコス　誰じゃ。

ディオニュソス　豪傑ヘラクレスさまじゃ。

アイアコス　おお、悪党、恥知らず、むこうみずの滅茶苦茶野郎、こん畜生のこんこん畜生の畜生の畜生め、おれんとこの犬のケルベロスを追っ立てて、首っ玉をひっつかまえ飛んで逃げて行きやがった、そいつをおれがあずかってたんだ。さあつかまえたぞ、じたばたするな、ステュクス[3]の心まで黒い大岩が、はてまたアケロンの血汐をたらす懸崖がお前を見つめているわ、そのうえにコキュトスのはねまわる犬ども[4]、百頭の大蛇エキドナ[5]が。こいつがお前の生胆をひっさばく、またタルテソスの大八目鰻[6]がお前の肺の臓にかじりつき、お前の腎の臓をば、臓腑もろともティトラスのゴルゴン[7]が血まみれにして切り裂くぞ。こいつらのところへひと走り、連れに行こう。

〔ディオニュソス腰をぬかす〕

クサンティアス　これはしたりどうしました。

ディオニュソス　やっちまった、神を迎えよ[8]。

クサンティアス　物笑いの種め、さっさと起き上がらないか、誰にも見つからぬうちに。

ディオニュソス　気が遠くなりそうだ。心臓に海綿をあててくれ。

クサンティアス　〔海綿を出して〕さあ。あてるんだ。

ディオニュソス　どこにある。〔と海綿を尻にあてる〕

クサンティアス　わあ、黄金色の神さま！　あなたの心臓はそこにあるんですかい。

ディオニュソス　びっくりしすぎてお腹の下に下りてしまった。

クサンティアス　神のなかでも人のなかでもいちばんの臆病者めが。

ディオニュソス　おれが？　どうして臆病だ。お前に海綿をくれと言ったこのおれが。ほかの男にはこんなことはできやしまい。

クサンティアス　なんですと。

ディオニュソス　臆病者なら延びてしまってふうふう言っているだろう。ところがおれは立ち上がって、そのうえ拭いたぞ。

クサンティアス　大した勇気だ。

ディオニュソス　おれもそう思うて。だがお前はあのすごい文句と嚇しが怖くないのか。

クサンティアス　これっぱかしも。一昨日おいでだ。

ディオニュソス　お前がそんなに勇ましくて強いなら、さあ、お前はおれになれ。この棍棒と獅子の皮をとるんだ。お前は怖い物知らずだからな。その代りおれがお前の荷担ぎになろう。

クサンティアス　こっちへよこしな。承知の助だ。〔と獅子の皮を着こんで棍棒を手に威張ってみせて〕クサンティアスのヘラクレスを見な、臆病であなたのようにへなへなかどうだか。

ディオニュソス　やあ、こいつぁほんとうにメリテ区[9]の悪党だ。さあ、おれはこの荷物を持って行こう。

〔ところへ地獄の女王ペルセポネの侍女、登場〕

侍女　まあ、ヘラクレスさん、いらっしたのね。こっちへお入りなさいな。女神さまはあなた方がいらっしゃったと聞くが早いか、パンを焼き、大壺に二、三杯の豆スープを煮、牛を炭火で丸焼き、蜜パンに巻パンを焼きました。さあ、お入りあそばせ。

クサンティアス　〔断わって〕いいや、ありがたいが。

侍女　まあ、ほんとうに、ですがあたしはあなたをやりはいたしませんよ。女神さまは鳥の肉を焙り、つまみ物をつくり、このうえもなくおいしいお酒を用意していらっしゃる。さあ、あたしといっしょにお入りあそばせ。

クサンティアス　たいへんありがたいが……。

侍女　ご冗談ばかり。やりはせぬぞえ。それにほんに美しい笛吹きの女子がちゃんと内でお待ち申していますうえに、二、三人の踊り子。

クサンティアス　な、なんだと、踊り子？

侍女　咲き初めたばっかりの生々しさ、たった今手入れしたばかり[1]。さあ、お入りあそばせ。お料理方がお魚を火からはずそうとしています、お机を運び込んでおりまする。

クサンティアス　よし、内に入って、何より先に内にいる踊り子どもにおれさまがご入来だと伝えるのだぞ。

〔侍女、退場。ディオニュソスに〕

おい、荷物を持ってついて来い。

ディオニュソス　おい、待て。まさか本気にしてやしまいな。冗談にお前をヘラクレスに仕立て上げてやったからって。クサンティアス、ばかな真似はよせ。包みを取り上げて運び込め。

クサンティアス　なんですって。あなたが自分でくれた物を、まさか、取り上げるんじゃありますまいね。

ディオニュソス　ありますまいどころか、もうそのとおり実行しているんだ。獅子の皮を脱げ。

〔とクサンティアスを剥ぎ始める〕

クサンティアス　これはけしからん、立ち会い、お立ち会い！　神々に裁きをおまかせするぞ。

ディオニュソス　神々だと、ふん。なんたるばかばかしい、虚栄だ、奴隷で人間のくせにアルクメネの息子[2]に化けようと考えるなんて。

クサンティアス　よろしい、それじゃお取りなさい。今に神さまの思召しのままに、また私に頼むことになりましょうぜ。

コロス　こりゃ気のきいた
頭のよい、船旅に
慣れてもまれた男の仕方、
石像のように
じっと一つの姿でいないで
ぐあいよいほうへころがるのは。
楽なほうへと
転ずるのは
利口な男のやり口、
いやさテラメネス[3]だ。

ディオニュソス　こりゃまったく滑稽だ、
奴隷のくせしてクサンティアス
ミレトスの毛布にくるまり
踊り子にキッスして、
小便壺をもて！　とがなりおる、
ところがおれは[4]これを見て
さやえんどうをばひっつかむ、
あいつあ、悪党め、
これを見て、拳固で一撃
おれの顎から前歯をば
ばっさり叩き落としたと、したらばこりゃ滑稽だ。

〔女将とその召使プラタネ、登場〕

女将　プラタネ、プラタネ、こっちへおいで。ほらあの悪党がいるよ、ほらいつか店に来てパンを十六も食べた奴だ。

プラタネ　ほんとに、あいつにちがいない。

クサンティアス　禍いの神のご到来だ。

女将　それからそのうえにシチュウ肉が二十皿、一皿半銭(オボロス)ずつの。　(五五二)

クサンティアス　はは、誰かがひどい目にあうて。

女将　それからうんとこさと大蒜(にんにく)。

ディオニュソス　ばかなことを、おかみさん、なんのことだかさっぱりわからん。

女将　なんだって、わからないと思っているのかい、半長を履いているから。なんだと。あの魚のことはまだ言わなかったね、こん畜生、それから新しいチーズだよ、まあ、それをこいつは籠(1)ごと食べてしまいやがった。そうしておいてあたしがお代を言ったら、怖い顔をしてにらみつけ、うおうと咆え立てた。　(五六二)

クサンティアス　そのとおり、こりゃこいつのしわざだ、こりゃこいつのやり口だよ。

女将　それから刀を抜いて気違いの真似をしやがった。

プラタネ　ほんとにひどい目にあったわ。

女将　あたしたちは震えあがって、屋根部屋へ一目散にとび上がった、そしたらあいつはマットをかっさらって飛び出して行ってしまったのさ。

クサンティアス　そのとおり、あいつのしわざだ。

プラタネ　なんとかしなくちゃ。

女将　走って行ってあたしの保護者(プロスタテス)(2)のクレオンさんを呼んでおいで。

〔二人で外に走り出る〕

プラタネ　〔女将に向かって〕それから、おかみさんは、もし出あったら、ヒュペルボロスさんを呼んでくださいよ、あいつをひどい目にあわせてやろう。

女将　汚れ喉(のど)め、ほんとうに、お店の品を食いつくしやがった。お前の石臼歯(いしうすば)を粉みじんにしてやりたい。

プラタネ　あたしはね、お前をあの竪穴(3)にぶちこんでやりたい。　(五七四)

女将　あたしはね、あの腸を呑み込んだその喉を、鎌を取って切り離してやりたい。だがクレオンさんのところに行こう、あの方は今日こそお前をしょっぴいてさんざん油をしぼりなさるぞ。

〔女将とプラタネ駈け出す。ディオニュソスはもじもじし、クサンティアスはそっぽを向き、沈黙〕

ディオニュソス　〔ついにたまりかねて〕クサンティアスが好きでなかったら、地獄に落ちてもよい。　(五七九)

クサンティアス　という心のなかは承知の助、その話はもうやめた。わたしゃヘラクレスはまっぴらだ。

ディオニュソス　そういうもんじゃない、クーちゃん。

クサンティアス　いったいどうして私が、奴隷で人間のこの私がアルクメネの息子になれますかい。

ディオニュソス　怒っていることはよくわかっているし、またもっともだ。私をなぐっても、返す言葉もないよ。だがね、もしこれからのちお前からこの衣裳を剥ぎ取ったら、それこそおれは根こそぎにおれも家内も子供らもともども地獄に堕(お)ちてもよい、それからしょぼ目のアルケデモスもだ。

クサンティアス　その誓言、承知した。この条件で引きうけた。〔とクサンティアス、ふたたびヘラクレスになる〕

コロス　さあ、しっかりやれ　(五九〇)
はじめに着ていたその
衣裳を着たからには
若返って、もいちどすごい
顔付きをしなくちゃならぬ、
お前が化けた
あの神さまを心に置いて。

おしゃべりしたり
ちょっとでも臆病風を吹かしたら、
またもや元の荷担ぎへと
舞い戻らねばならないぞ。

クサンティアス　諸君、こりゃありがたいご忠告、だがこのおれも同じことをば考えていた。何かうまいことが降って来れば、これをおれから剝がそうとするはわかりきったこと。さもあらばあれ、このおれは意気軒昂、苦虫のしかめっ面。扉がきしむ音がする、しっかり、しっかり。

〔アイアコス、中央戸口より手下を引きつれて登場〕

アイアコス　この大泥棒を引っくくれ、引っ立てろ、ぐずぐずするな。

ディオニュソス　面白くなってきたぞ。(六〇六)

クサンティアス　〔立ち廻りながら〕えい、くたばれ、犬ども退れ。

アイアコス　なんと、手むかいする気か。おい、ディテュラス、スケブリュアス、パルドカス[1]、ここへ来てこの野郎をやっつけろ。

〔立ち廻りのあいだに〕

ディオニュソス　こいつが他人の物を盗みながら、そのうえお巡りをなぐるとは、こりゃひどい。(六一二)

アイアコス　もってのほかだ。

ディオニュソス　ひどいもひどい、恥知らずだ。

クサンティアス　〔ついに取り押えられて〕ゼウスに誓って、もし前にこの地に来たことがあるならば、またもし髪の毛一筋でも盗んだことがあったなら、死んでもよいわ。さあおれは正々堂々とやるぞ。このここな奴を引っ捕えて拷問しろ[2]。もしおれに罪があったら、しょっぴいて殺してくれ。(六一七)

アイアコス　して拷問の方法は？

クサンティアス　どんな方法でもよい、梯子に縛りつけ、ぶら下げ、鞭で打つなり、皮を剝ぐなり、引き延ばすなり、そのうえに鼻の孔に酢を流しこむなり、煉瓦を身体の上に積み上げるなり、なんでもお好きなとおり。ただ若葱と玉葱でこいつを打つのはいかん[3]。

アイアコス　公正そのものだ。もしこいつをなぐって片輪にしたら、その代金を払おう。(六二三)

クサンティアス　いや、そんなものはいらん。しょっぴいてやっつけてくれ。

アイアコス　いいや、目の前で供述するよう、ここでやろう。〔ディオニュソスに〕おい、さっさと荷物を下ろせ。いいか、嘘を言うと、承知せんぞ。

ディオニュソス　おい、言っておくがな、このおれは神さまだ。それを拷問にかけるとはけしからん。後悔するぞ。

アイアコス　なんだと。(六三〇)

ディオニュソス　おれは神さまで、ゼウスの御子ディオニュソス、こいつは奴隷だと言っているのだ。

アイアコス　〔クサンティアスに〕聞いたか。

クサンティアス　聞いたよ。なおのことこいつを鞭でなぐらなくっちゃ。もし神さまなら平気のはずだからな。

ディオニュソス　ようし、お前も自分が神さまだと言うんだから、お前もおれと同じだけなぐられたらいいだろう。

クサンティアス　うん、よろしい。二人のなかで先になぐられて悲鳴をあげたり、ちょっとでもひるんだりしたほうを、こいつが偽神だと判定するのだ。

アイアコス　うん、まったく見上げた立派な男だ。正義そのものだ。さあ着物を脱げ。(六四一)

クサンティアス　どういうぐあいに公平にためすかね。

アイアコス　おやすいご用だ。両方に交互に一鞭一鞭。

クサンティアス　よい考えだ。さあ来い。〔アイアコス、鞭で打つ〕どうだおれがひるむかどうか見てくれ。

アイアコス　もうなぐったよ。

クサンティアス　冗談を。
アイアコス　どうもおれにもなぐらなかったような気がするな。今度はこいつをなぐってやろう。
〔アイアコス、ディオニュソスを打つ〕
ディオニュソス　〔平気な顔をしながら〕いつ？
アイアコス　もうなぐったよ。
ディオニュソス　ええ？　それじゃどうしておれはくしゃみ一つしないのだ。
アイアコス　わからんな。もいちどこっちを試してみよう。
クサンティアス　おお、早くやれ。〔アイアコス、打つ〕ふうう。
アイアコス　どうしてふううだ。
クサンティアス　痛かったのじゃあるまい？
クサンティアス　どうしてどうして、おれはヘラクレスのディオメイア祭[1]がいつだろうかと考えていたのだ。（六五一）
アイアコス　聖者だ！　さあ今度はこっちだ。
〔とディオニュソスを打つ〕
ディオニュソス　ふう、ふう。
アイアコス　なんだと。
ディオニュソス　あの騎士たちを見ていたんだ。
アイアコス　それじゃその涙は。
ディオニュソス　玉葱の香がする。
アイアコス　平気なんだな。
ディオニュソス　平気の平左さ。
アイアコス　それじゃもいちどこっちの番だ。
〔とクサンティアスを打つ〕
クサンティアス　ああ！
アイアコス　なんだと。
クサンティアス　この刺を抜いてくれ。
アイアコス　こりゃどうしたというんだ。今度はこっちだ。
ディオニュソス　おお、アポロン、〔とどなってただちに詩の一句にする〕デロスとピュトン[2]を治し召す。（六六〇）
クサンティアス　痛がったぞ、聞いたか。
ディオニュソス　どうしてどうして、ヒッポナクス[3]の句を思い出していたのさ。
クサンティアス　何の役にも立たぬわ。こいつの脇腹を叩きのめせ。
アイアコス　そいつぁよい思いつきだ。さあ腹を出せ。
〔とディオニュソスを打つ〕
ディオニュソス　おお、ポセイドン！
クサンティアス　痛がったぞ。
ディオニュソス　アイガイオスの岬をば、また深き灰色の海を治し召す。
アイアコス　デメテルさまの御名にかけて、お前たちのどっちが神さまかさっぱりわからぬ。[4]だが二人ともうちに入れ。ご主人さまご自身と、それからペルセパッタさまが見破ってくださるだろう。お二人ともまた神さまだからな。
ディオニュソス　よろしい。おれがなぐられる前にそうしてほしかったな。（六七一）
〔アイアコス、ディオニュソス、クサンティアスともに中央扉より退場〕
コロス　ムーサよ、聖なるコロスに来たれ、来たれわが歌の喜びに浸らんために、
見よ、ここに犇き群がる人々、よろずの聡明かしこに座を占めいて[6]、
クレオポン[5]をも凌ぐ、おっと、こいつの混血の唇にはトラキアの（六八〇）
燕が
唐変木にとまって
凄い呻きを響かせている、
夜鶯の涙にぬれた調べを歌うは、破滅じゃ、
たとえ同数の票を得ようと。[7]

さあ、われわれの市（まち）を秀れた言葉で導き訓すは、
この聖合唱隊にふさわしいことだ。その第一は、
わが市民を平等ならしめ、恐怖をば取り除くこと。
たとえ誰かがプリュニコス[1]の角力場で手を過って倒れても、
そうだ、その過ちをば告白して、
足踏みすべらした人々に以前の罪を洗うべき自由を与えてやるべきだ。
第二に、この市では誰とても権利を傷つけられた有様でいてはならない。
これは醜いことだよ、たったいちど海上で戦ったからと言って
すぐさまプラタイアイ人、奴隷の代りに主人となるのは[2]。
私はけっしてこのやり口が悪いと言うのではなくて、
これこそ諸君のやった唯一の賢明なことだと考える。
いやさ、そうではなくて、皆さん方とともどもに、父も子も
幾度となく海上で戦ってきた、皆さん方の血をわけた、その人たちにも
あのたった一つの過ち[3]を許してやれと言うのです。
おお、賢明なる方々よ、怒りを捨てて
すべての人を、ともどもに海で戦ったあの人々を、血族、
市民、有権者に喜んでしようではありませんか。
だがもしこれに耳をかさず、威張りちらして、
「荒浪の腕のまにまに漂える」[4]この市をば
そっくり返らせるのなら、私たちは後の世にふたたび賢者の評は得られますまい。
今に殪（たお）れて後悔する男の生活、やり口を「わが見る眼に過ちなくば[5]」
今はときめく悪党の、あの猿め、
ちんちくりんのクレイゲネス[6]、
灰の灰汁（あく）とにせ硝石にキモロス[7]の粘土を混ぜた
にせ石鹸の王国を治（しろ）し召す
大悪党の三助は
ながいことはよもあらじ。これをば見て取りあの野郎、
杖を持たずに外に出て酩酊酔歩のそのうちに
追い剝がれてすってんてん、丸裸ん坊にやられてはと、いつでも喧嘩を買って出る。
[8]私はしばしば考えた、われらが市は
立派な紳士の市民らを
古鋳貨幣と新しい金貨と同じに扱うと。
これは少しも混じり物ない
お金のなかで一等の、正真正銘、
ギリシアにあっても外国でも、
あらゆるところで造られた、たった一つの立派な貨幣、
これをばわれらは使わずに、銅の悪貨を使っている、
ついこのあいだ造られた、お金のなかでの最悪品、
それと同じく、生まれよく心正しく
道あやまらず、身心ともに立派な人々、
運動競技、舞いに音楽に育てられたこの人々を、
ないがしろにして、銅製異人、赤っ毛[9]の
悪党の子の悪党ども、新参者でこれまでは
市が案山子[10]にさえも使わなかった人間どもをあらゆることに用いている。
おお、馬鹿者め、今からでも遅くはないぞ、やり方を
変えてふたたび秀れたる者を用いよ。成功すれば[11]
賞讃、またたとえつまずこうと、立派な木からぶら下がり、
たとえ憂き目にあおうとも賢者とともにありと見えるは。

〔アイアコス、クサンティアス、登場〕

アイアコス　救い主ゼウスの御名にかけて、立派な人だな、お前の主人は。

クサンティアス　立派な人？　そうだとも、酒と女のほかにはなんにも考えない男だ。

アイアコス　だがお前の嘘がすっかりばれたのになぐらないとは、お前が奴隷のくせに主人だと言い張ったのに。

クサンティアス　やってみろってんだ、どうなるか！

アイアコス　こりゃまったく奴隷根性、そのやり口だよ、おれもそれが好きさ。

クサンティアス　好きだと、ええ？

アイアコス　おれは生きながら天国にある気になるのさ、そっと蔭で主人を悪口雑言するときにはね。

クサンティアス　さんざんなぐられてから戸の外に出て行ってぶつぶつ言うのは？

アイアコス　それも好きだよ。

クサンティアス　それじゃ他人の秘密をかぎ歩くのは？

アイアコス　うん大好物だ。

クサンティアス　ゼウス、血縁の神[1]！　それから主人の言葉を立ち聞きするのは？

アイアコス　たまらねえな。

クサンティアス　そしてこれをしゃべりちらすのは？

アイアコス　それをこのおれに聞くのかい？　ええ？　そういうときのおれさまは、それこそ見物だ。

クサンティアス　おお、ポイボス・アポロンさま[2]！　握手してくれ、互にキッスを交わし、それから教えてくれ、われわれ獄門野郎の守りの神ゼウスにかけて、家の内のあの物音、叫び声、あの罵声はいったい何ごとだ。

アイアコス　アイスキュロスとエウリピデスだよ。

クサンティアス　ええ？

アイアコス　大した、大した大事件が凄い軋轢が死人のあいだで起こっている。

クサンティアス　どうしてね？

アイアコス　ここでは立派な秀れた技に関する一つの法があって、おのおのの技にいちばん達者な者は、プリュタネイオン[3]で食事を供せられ、プルトンさまと並んで座を占める。

クサンティアス　わかった。

アイアコス　その人よりも同じ道でもっとすぐれた者が来るまでだ。そのときには譲らなくてはならない。

クサンティアス　だがこれがどうしてアイスキュロスを困らせるのだ。

アイアコス　あの男が悲劇の椅子を占めていたのさ、この道で第一等というので。

クサンティアス　それで今は誰が？

アイアコス　エウリピデスが下って来たとき、追剥ぎ、掏摸、親父殺し、強盗どもに——これが地獄の大衆なのだが——奴らに盛んに自己宣伝をやってのけた。そこで奴らは反駁、ひねり、体かわしに耳を傾け狂喜して、あいつをいちばんだと考えたのだ。そこであいつは上気して、アイスキュロスの坐っていた椅子をば要求したのさ。

クサンティアス　あいつは石を投げつけられなかったのか。

アイアコス　どうして、どうして、それどころか民衆どもはどっちが悲劇の技にすぐれているか試験しろとどなって要求した。

クサンティアス　悪党どもがか。

アイアコス　そのとおり、天まで届けとどなったのさ。

クサンティアス　アイスキュロスには味方がなかったのか。

アイアコス　すぐれた人は数が少ない、〔と見物を眺め廻して〕ここと同じにね。

クサンティアス　それでプルトンはどうしようってんだね。

アイアコス　すぐさま競技を行ない、二人の技を試験しようというのだ。

クサンティアス　それじゃどうしてソポクレスもその椅子を要求しないのだ。

アイアコス　どうして、どうして、あの人はそんなことはしないさ。下りて来たときにアイスキュロスにキッス[1]して、握手して、彼に席を譲ったのさ。しかし今では、クレイデモスの言葉によれば控力士として座を占めるということだ。もしアイスキュロスが勝てばそのまま、もし負けたそのときには、エウリピデスと悲劇のために最後まで闘うと言うことだ。

クサンティアス　ほんとにやるかな。

アイアコス　たしかに、もうすぐ始まる。そしてこの場で大したことが起こるぞ、詩の技をば秤(はかり)で量ろうというのだ。

クサンティアス　なんだと、悲劇を犠牲(いけにえ)の仔羊[2]のように量るというのか。

アイアコス　それから定規に言葉の物指、細長い型[3]。

クサンティアス　煉瓦を造ろうと言うのかい？

アイアコス　それから分廻し(ぶんまわし)に楔(くさび)だ。エウリピデスが一句一句悲劇を試そうと言うからだよ。

クサンティアス　これにはアイスキュロスは怒ったろうな。

アイアコス　うん、頭を下げて牡牛のように睨んだな。

クサンティアス　審判は誰だ。

アイアコス　そこが難しいところだよ。二人ともちゃんとした人間を見つけることができなかった。アイスキュロスはアテナイ人はいかんと言うのさ。

クサンティアス　あまり強盗が多すぎると思ったんだろう。

アイアコス　それからほかのすべてのものは詩人の性を量るにはまったく話にならんと考えた。そこでお前の主人に一任したのさ。この道の巧者だというので。さあ、内に入ろう。主人たちが何かに熱中しているときには、われわれには厄病神のご入来だからな。

コロス　咆吼[4]に天地を揺る雷神の心は憤怒にみたされん、
鋭き舌のかの敵が牙をば磨くを打ち眺め
そのときこそ、おぞましき狂乱の
心に眼(まなこ)は水車。
立て巻くたてがみ、きらめく甲(かぶと)の言葉争い、
屁理屈の乱れ飛ぶ破片、滑らかな詞(ことば)
理想の匠(たくみ)、英雄の戦車に駕した言の葉を
はっしとまともにうけるとき。
生まれながらのたてがみの荒毛は怒髪天をつき、
険しき顔に眉をよせ咆吼いちばんはったと放つ
言葉の大板、引き裂く厚板、
大地より生まれし巨人の息吹きもて。
さてここに、言葉の匠(たくみ)、試煉者なる滑らかな
舌はとぐろを解き、嫉妬の銜(くつばみ)うち震わして、
言葉を切って切り刻み、屁理屈で吹き倒さん、
肺臓の大なる労苦の果実をば。

［背景ここで変わって、地獄の王プルトンの宮殿の内部、プルトン中央に坐し、前方にエウリピデス、アイスキュロスの両人、ディオニュソスをはさんで立っている。このほかに地獄の王者にふさわしい種々な人物、仕丁も登場したと思われるが、これは推測である］

エウリピデス　わが輩は椅子をやらんぞ、忠告無用、余は主張する、この男より余のほうがこの道にすぐれていると。

ディオニュソス　アイスキュロス、どうして黙っている。あれを聞いただろう。

エウリピデス　なに、まず見えを切ってみせているのだ。これがいつで

も悲劇のなかでやってみせた奴のぺてんの手だ。

ディオニュソス　おい、おい、あまり大言壮語はやめてくれ。

エウリピデス　わが輩はこの男を知っている、昔からよく観察していたのだ。野蛮人造り[1]、強情語り、轡なし、抑えを知らぬ、締まりなしの、迂説法なし、大法螺の鞴口だ。

アイスキュロス　「うんなんと、田圃の女神の息子め[2]」よくも申したな、雑言蒐集者め、乞食造りめ、襤褸縫いめ[3]。その言葉ただではおかぬぞ。

ディオニュソス　まった、アイスキュロス、「憤怒のあまり五臓六腑を煮え立たせるはやめにせい[4]」

アイスキュロス　ならぬ、この跛造り[5]の正体を明るみに出し、生意気の皮をひんむかでは、ならぬ、ならぬ。

ディオニュソス　仔羊を、黒い仔羊を[6]、皆の者、持って来い。嵐の神が今に襲って来ようとしているぞ。

アイスキュロス　おお、クレタ風独唱ダンス[7]の屑拾いめ、不倫の恋の悲劇への輸入者め。

ディオニュソス　しばらく、しばらく、尊いアイスキュロスよ。また情けないかなエウリピデスよ、霰から逃げたほうが利口だぞ、さもないとあの男は頭ほどもある言葉でもって顳顬をぶんなぐり、お前のテレポス[8]をくちゃくちゃにしてしまうぞ。アイスキュロス、怒っていずに穏かに試し試されるがよい。パン売り娘のようにお互に悪口雑言は詩人には不似合いだ。ところがお前はまるで火のついた樫の木みたいになっている。

エウリピデス　わが輩のほうはいつでも来いだ。けっして後ろは見せんぞ、噛もうと先に噛まれようと、こいつのお好きなようにだ、悲劇の対話、歌、筋なんでも来い、それからペレウスにアイオロスにメレアグロス、それからテレポス[9]もだ。

ディオニュソス　お前はどうするかね。さあ言ってくれ、アイスキュロス。

アイスキュロス　わたしはここで争いたくないな。われわれの競技は公平でない。

ディオニュソス　どうして。

アイスキュロス　わしの作品はわしとともには死ななかったが[10]、こいつとは死んだからだ。それだからこいつは引用自由自在だからな。だがよい、もしあなたがよしと思われるなら、そうしなくてはならん。だが

ディオニュソス　さあ誰か行って乳香と火を持って来い、知の闘いが始まる前に祈ろう、この詩の最高の競技をば裁くように。〔コロスに〕お前方は詩女神たちに讃歌を歌え。

コロス　おお、ゼウスの尊い九人の乙女、
諺造りの勇士らが
理屈鋭く身をひねらせる格闘に言葉を返しつ争いの
庭に入るとき、男子らの鋭き聡き心をば高きよりみそなわす
ムーサよ、来れ、辞を創り言葉の
おが屑にことかかぬすぐれし口の
力をば眺めんために。
今こそ知恵の大闘争が
始まろうとはしているぞ。

ディオニュソス　両人も自分の詩句を引く前に祈りをあげよ。

アイスキュロス　わが心を育まれしデメテルよ、わしをしてご秘教に価いする者たらしめんことを。

ディオニュソス　〔エウリピデスに〕お前も乳香を取ってたけ。

エウリピデス　いや結構、わが輩の祈る神々は別物だ。

ディオニュソス　お前に特別の新鋳貨幣かね。

エウリピデス　まさしく。

ディオニュソス　それじゃお前の特別あつらえの神さまに祈るさ。

エウリピデス　アイテール、われを養う物よ、回転自在の舌よ、知性よ、香に鋭き鼻孔よ、わが組まんずる言の葉を巧みに敗ることを許させた

まえ。

コロス　まことに聞きたいもの、
この両学者から、すさまじい道に分け入り
いかなる言葉の壮麗な調子と動きを踏まんとするかを。
舌は狂暴に研ぎすまされ、
両人の意気は軒昂、
怒りは燃え立つ。
よもや期待を裏切るまい、
かたや気のきいた
磨きをかけたことを言い、
かたや[1]言葉もろとも根こそぎに
飛びかかりざまはねちらす
言葉の凄い砂の雨。

ディオニュソス　さあ、早く始めなくては。そして両人とも気のきいたことを言い、誰でも言えるような下らぬことがないように。

エウリピデス　さて、わが輩はわが輩の詩的天才については後で述べよう。それよりもまず示そう、この男がいかなる法螺吹きでペテン師で、いかなる術でプリュニコス[2]に養われたまぬけの見物どもを手玉に取って騙したかを。まず誰か悲嘆にくれ頭に衣をひき被った人物を舞台に坐らせる。アキレウスとかニオベ[3]とかだ、顔をばかくし、悲劇の見本だ、そしてうんともすんとも言わない。

ディオニュソス　そのとおりだ、まさしく。

エウリピデス　それからコロスが立てつづけに四つも歌をひと息に大熱演でずらりと歌うが、役者は一言も言やしない。

ディオニュソス　だがおれはあの沈黙が好きだったな。そして今日このごろのぺちゃくちゃしゃべる奴らよりおれを喜ばしたて。

エウリピデス　まぬけだったからさ。それだけのことだ。

ディオニュソス　いかにも。それでも、どうして彼はこうしたのかね。

エウリピデス　ペテン師根性でだ。見物がいつニオベが口を開くかと胸を躍らせながら坐っているようにだ。その間に劇は進行する。

ディオニュソス　悪党め、よくもおれを騙しやがったな。〔アイスキュロスに〕どうして身もだえしてじりじりしているのだ。

エウリピデス　なに、痛いところをつかれたからさ。それからこのようにたわけた真似の後で、そして劇がもうなかばのときに、一ダースほどの牡牛式大言、眉をよせ怒髪は天をつくありさまでものすごい、しかし見物にはちんぷんかんぷんの壮語を言う。

アイスキュロス　ああ、この野郎。

ディオニュソス　静粛！

エウリピデス　ところが一言だってわからない。

ディオニュソス　〔アイスキュロスに〕歯がみはやめろ。

エウリピデス　なんでもかんでもスカマンドロス河だ、濠だ、楯の上の青銅浮彫のグリフィン鷲[4]だ、騎士的到天的高言だ、七むずかしくてわけのわからぬ。

ディオニュソス　まったくそのとおりだ。ほんとうにおれは「長き夜の時をば[5]」眠りもやらずに考えた、あめ色の雄鶏馬[6]とはいったいどういう鳥だろうかとね。

アイスキュロス　馬鹿者め、それは船に彫りつけられた目印だ。

ディオニュソス　おれはピロクセノスの子のエリュクシス[7]かと思っていた。

エウリピデス　いったい雄鶏は悲劇のなかに持ち込むべきものだろうか。

アイスキュロス　なんじ、神々の敵め、お前のやり口はどうなんだ。

エウリピデス　お前のように雄鶏馬や牡山羊鹿[8]なんかじゃない、こいつあペルシアの壁掛用動物だよ。大言壮語にふくれ上がって言葉の重荷に喘いでいる、悲劇の技をお前から受け取るやいなやまず第一に、軽妙な句、散歩に白甜菜[9]の治療法、書物からしぼり取ったお喋り汁を与えて、まず第一に細身にし、贅肉の重みを取り去った。それから独唱

で食養生、ちょっぴりケピソポン[1]を混ぜ合わせ。そして、わが輩はでたらめにしゃべったり、いきなり飛び込んだりせず、最初に登場する者がその劇の素姓をば語るのだ。

アイスキュロス　そりゃお前の素姓より立派だったに違いないて。

エウリピデス　それから初めの句から何ごともむだはなく、わが輩の劇では女も奴隷も少しも劣らずものを言い、主人も乙女も年寄婆も少しも劣らずものを言うのだ。

アイスキュロス　こりゃたしかに、こんなことを乱暴にもやってのけてお前は死刑にされる価値があるぞ。

エウリピデス　どういたしまして、こりゃ民主的なんだ。

ディオニュソス　おい、おい、この問題はおきたまえ。この散歩はあまりお前のためにはならないぜ[2]。

エウリピデス　次に彼らに話す術を教えた。

アイスキュロス　異議なし、そのとおりだ。教える前にお前がまっ二つに破裂すればよかったのに。

エウリピデス　それから精緻な尺度と詩句の角を計る定規を与え、考え、見、理解し、めぐらし、恋におち、たくみ、悪を疑い、あらゆるものをこづきまわす。

アイスキュロス　そのとおりだ、異議なし。

エウリピデス　われわれによくわかる日常生活の物ごとを舞台にのぼせた。それはみんながよく知っていて、もしへまをやったなら、わが輩の技の過ちはしっぽを出してしまうのだ。わしは大法螺を吹いて、彼らの頭をからっぽにし、嚇したりなどはしなかった、キュクノス[3]や鈴ついた馬飾ある駿馬にのったメムノン[4]などを持ち出して。この男とわが輩の弟子たちを見ればすぐに判るだろう。ポルミシオス[5]はこいつのだ、それから頓馬のメガイネトス[6]、喇叭、槍、髯男に杉の木の身体まげ男[7]だ。ところがわしのはクレイトポン[8]に優雅なテラメネスだよ。

ディオニュソス　テラメネス？　利口な男だ、何ごとにかけても巧みな男だ。困難に陥り、まさにその縁に立っていても、たちまちこれから転がり出て、私はキオスじゃなくてケオス人[9]でさあ、だ。

エウリピデス　これが私が人々に
もたらした思考の種だ、
わが技に推理に考察
をつけ加え、そのため彼らは
あらゆるものを熟考深慮、
前よりも家を上手に
治めている、
それから研究、どうしてこうなのだ、
これはどこにある、これをとった奴は誰だ、とね。

ディオニュソス　まさにそのとおり、今じゃあらゆる
アテナイ人が家に帰るや
家の者にどなりつけ、
尋ねるのだ、壺はどこへ行った？
小鰮（こいわし）の頭をかじったのは誰だ？
去年買った小皿は
死んじゃった。
昨日の大蒜（にんにく）はどこにある？
このオリーヴをかじったのは誰だ？
ところが昔はこのうえない頓馬で、
口をあんぐり、薄のろ三助
三太郎然と坐ってござった。

コロス　「これを見られい、誉れ高きアキレウス殿[10]」
さあこれにどう返答なさる。ただ
憤怒のあまりコースから
飛び出さぬようご用心。
あの人の糾弾は凄かった。
だが、おお気高きお人よ、
怒りにまかせて言葉を返さず、

帆を縮め、その端だけで
風をうけ、
風が静まり、
おさまったら、
次第次第に迫りより
隙を見せるな。
おお、聳ゆる気高い言葉の塔を築き上げ、悲劇の詞を飾り立てた最初のギリシアのお人よ、勇みに勇んで泉をばほとばしらせい。

アイスキュロス　この嘆かわしき運命にわが心は猛り、わが五臓六腑は煮えくったり、こ奴と言葉を交わさずばならんとは。とはいえこ奴にわれ返答に窮したりと言わさぬために、詩人が歎賞さるる原因はいかなるものか、返答せよ。

エウリピデス　その才とその堅実な忠言とでだ、市民たちをよりよき者にするためにだ。

アイスキュロス　しからばもしもこれをなさず、すぐれたる尊き者より最悪の者となしたるそのときには、いかなる罰をうくべきか。

ディオニュソス　死刑だ。この男にきくまでもない。

アイスキュロス　しからば彼らをこのわしより受け取ったとき、いかなる人であったかを考えても見よ、気高い六尺の、義務を遁れることのない市民たちじゃ、今日このごろのごとき浮浪のやくざ者でもなし、悪党でもない、いやそれどころか、その息[1]は長槍短槍、まっ白き飾り毛の大兜。脛当に七重の牡牛の皮重ねたる勇士の心じゃ。

ディオニュソス　さあ禍いの神のご入来だ。兜造りをおっぱじめておれをくちゃくちゃにしてしまうぞ。

エウリピデス　それじゃどういう方法でそんなに気高くしたのかね。

ディオニュソス　アイスキュロス、返事だ。そう独壇上で威張り返って怒っているのはよせ。

アイスキュロス　戦さの神にみちみてる劇を作ってじゃ。

ディオニュソス　それは？

アイスキュロス　『テーバイに向かう七将』[2]これを見れば誰たりとも武者振るいせぬ者はなかろう。

ディオニュソス　お前のしたことはけしからん。テーバイ人を前よりも戦さに勇敢ならしめたのだ。その罰に、さあこの一撃を食らえ。

アイスキュロス　なんじらにも同じく行ない得たのだが、これには見むきもせず。これにつづいて『ペルシアの人々』[3]を上演し、すぐれたる尊き業を飾り立て、いつなりとも敵をば打ちひしがんとはやり立つよう、わしは教えたのじゃ。

ディオニュソス　コロスが死んだダレイオス[4]を嘆いて声を放ち、両手をばこのように打ち合わせて「イアウオイ」と言ったとき、おれはほんとうにうれしかった。

アイスキュロス　さよう、これが詩人の務めじゃ。まず初めより見てもみよ、詩人のなかで高貴なる人々がいかに世のためになったかを。オルペウス[5]はわれらに秘教儀を教え、殺生を禁じ、ムサイオス[6]は病いの治癒と予言の術を、ヘシオドス[7]は農耕と実りのときと鍬入れどきを。またかの神々しきホメロスは軍勢の布置、勇武、戦士をば鎧う術など、世にもすぐれたることどもを教えたればこそ尊ばれ、栄誉を得たのではあるまいか。

ディオニュソス　だがあのぶきっちょのパンタクレス[8]には教えなかった。ついこのあいだお祭の行列でまず兜をば結んだ後で、そのうえにたてがみを結びつけようとしおったぞ。

アイスキュロス　いやしかし、そのほかの多くのすぐれた人々を彼は教えた。英雄ラマコス[9]はその一人じゃ、そこよりわが心[10]は印象をうけて数多くの武勇を創り出した、獅子心のパトロクロス式[11]テウクロス式の。市の人がラッパの響きを聞いたとき、彼らと競って[12]みずからも負けじと務めさすためにじゃ。じゃが、神かけて、パイドラ[13]やステネボイア、淫婦どもを劇にいたしたことはないわ。まったわしが恋をしかけし女をば劇にいたしたことがあるとは何人も言えぬわい。[14]

エウリピデス　たしかに、お前には恋の女神は関係がない。

アイスキュロス　望むところじゃ、じゃがお前とお前の芝居には女神がどかっと腰を据えたは、そのためについにはお前自身にも砂を噛ませたぞ[1]。

ディオニュソス　ほんとうにそのとおりだ。他人の妻たちにやらせたことと同じことを自分で今度はやられたのさ。

エウリピデス　だがわが輩のステネボイアがどんな害を市に及ぼしたかね、根性曲りめ。

アイスキュロス　この女は立派な男の立派な夫人に、お前のベレロポン式芝居を恥じて毒を飲ませたのだ。

エウリピデス　だがわが輩の作ったパイドラの話はほんとうにあったことじゃないかね。

アイスキュロス　たしかに、ほんとうじゃ。じゃが詩人は悪をばかくし、芝居に出したり上演したりすべきではない。幼い子には話しかける者すべてが先生、そのように大人には詩人が師だ。まことにわれらはよきことを言わねばならぬのじゃ。

エウリピデス　リュカベトス[2]とか大いなるパルナソスとかお前の大言壮語が、これがよきことを教えることかね。とにかく人間の言葉で話すべきだよ。

アイスキュロス　この蛆虫め、必要なのだ、壮大な考えと構想には、これに匹敵する言葉を生み出すことが。そのうえに半神の英雄たちには壮大な言葉を語るのがふさわしいのだ。衣でさえわれらよりはるかに厳かなものをまとっておる。このことどもをわしがいみじくも定めたものを、お前がすっかりだめにしたのだ。

エウリピデス　どういうぐあいに？

アイスキュロス　まず第一に王たちに襤褸をまとわせてだ。哀れっぽく見せるためにだ。

エウリピデス　こうしたからとて何が悪い。

アイスキュロス　このために金持たちは誰も三重櫓船を調えようとはせず[3]、襤褸を身に、嘆き悲しみ、金がないと言いおる。

ディオニュソス　デメテルの御名にかけて、そのとおり、下には上等の毛のシャツを着ているくせにだ。こう言って騙しおおせると、たちまち魚市場[4]にひょいと顔を出す。

アイスキュロス　それから次には演舌、口舌、舌をば鍛えることを教えた、これが運動場をば空っぽにし、雀のようにぺちゃくちゃさえずる少年どもの尻をば痩せさせ、よりぬきの水夫どもに、士官に口答えさせることを教えたのじゃ。ところがわしの生きていたころには奴らは大麦パン[5]をくれとどなり、エイオウと漕ぎつつ歌うことしか知らなかった。

ディオニュソス　そのとおり、そのとおり、そして下の段の漕ぎ手の口のなかへと屁を放ち[6]、メス仲間をくそだらけにし、上陸しては追剝ぎをやる。
ところが今じゃ口返答、漕ぎゃしないで、
あっちへひょろひょろこっちへひょろひょろ、漂泊だ。

アイスキュロス　なんたる悪の源だ！
こいつぁ[7]舞台にのせたじゃないか[8]、
遣手婆、神殿で子を生む女[9]、
兄弟と不倫の交わり、
それから生は生にあらず[10]という女だ。
それからわれらのこの市は
へっぽこ書記官でいっぱいだ、
おたんちんの民衆猿
いつでも民衆を騙している。
松明競争に走れる奴は一人もいないわ。
そのとおりだ、だから[11]おれは
パンアテナイア祭であまり笑って涙が出た、
のろのろした、生白い、ぶよぶよの男が
びりからいちばん、身体をば二つ折にして、
情けない有様で走るのを見たときに。ところへ
ケラメイコス[12]の住人どもが門のところで打ったたわ、打ったたわ、

そいつのお腹に胸に脇腹。
そいつぁ平手打ちをくらわされて
ぷうっと臭い一発
松明を吹き消して逃げたとさ。

コロス　ことは重大、争いは激し、戦いは荒れ狂う。
かかるもつれを断つは難儀だ、
かたや猛くも攻め寄せれば、
かたや勢い盛り返して気も鋭く反撃する。(1)
無策に坐すは禁物。
叡知の攻むべき隙間は多いぞ。
あらん限りの力をもって
論ぜよ、攻めよ、皮をむけ、
旧きも新しきも、
繊細巧知、胆太く語れ、語れ。

見物人が無学文盲、繊細な詞が
わかりかねると
心を痛めておるとならば、
懸念に及ばぬ、そりゃ危惧と申すもの。
彼らには戦いの経験あり、(2)
さらにまたおのおの方には本を手に微細な点までよくおわかりだ。
天のなせる美質の上に、
今ではそのうえ磨きがかかった。
心おきなく全力をあげ
うたれえ、見物方は、心配無用、ようくおわかりじゃ。

エウリピデス　それじゃお前のプロローグへとむかおう。この天才の悲劇の最初の部分を、まず最初にためすためにだ。事実を述べるそのときでも言葉までが曖昧だ。

ディオニュソス　どれをためして見るかね。

エウリピデス　山のようにあるぞ。まず「オレステス劇(3)」のを言ってみてくれ。

ディオニュソス　さあ、みんな静まれ、さあ、始めた、アイスキュロス。

アイスキュロス　黄泉の国のヘルメス、みおやの道の司となって、
われらが祈りに応え、救いの神、わが勢となりたまえ。
この国にわれは来たりぬ、われは戻らん。(4)

ディオニュソス　これに何か悪いところがあるかね。

エウリピデス　一ダース以上。

ディオニュソス　だがみんな合わせたって、たったの三行だよ。

エウリピデス　各行に二十ずつ欠点がある。

ディオニュソス　〔何かすごい剣幕で言いかけるアイスキュロスに〕アイスキュロス、まあまあ待った。そうでないと、お前の借金は三行の短長格詩(5)じゃすまなくなるぞ。

アイスキュロス　わしがこいつのために待つ？

ディオニュソス　私の忠告を聞き入れてくれればだ。

エウリピデス　開口一番、天にもとどく山ほどの欠点で始めている。

アイスキュロス　なあに、戸迷い言だ。屁とも思わぬぞ。どう悪いんだ。

エウリピデス　もういちど、はじめから言ってみろ。

アイスキュロス　黄泉の国のヘルメス、みおやの道の司となって。

エウリピデス　オレステスはこれを死んだ父の墓のそばで言うんだろう。

アイスキュロス　そうじゃないとは言わぬよ。

エウリピデス　それじゃ彼の父が女の手にかかってその陰謀におちて殪れたときに、ヘルメスがこれを見ていたというのか。

アイスキュロス　いいや、そうじゃない。加護の神ヘルメスに、黄泉の国のと呼びかけたのじゃ。そして父神の大権を代行していると言って、このことを示したのじゃ。

エウリピデス　こりゃわが輩の希望以上にお前の欠点は大きいぞ。もし

この地下の役目を父神より得たとなると[1]……。

ディオニュソス　これじゃこいつぁ父祖代々墓あばき屋だあね。

アイスキュロス　ディオニュソス、お前の酒は香が悪いぞ。

ディオニュソス　さあ、次の行だ。〔エウリピデスに〕誤りを見落とすな。

アイスキュロス　われらが祈りに応え、救いの神、わが勢となりたまえ。
　この国にわれは来たりぬ、われは戻らん。

エウリピデス　わが賢者アイスキュロス先生は同じことを二度くり返している。

ディオニュソス　どうして二度だ。

エウリピデス　この表現を見てみるがよい。説明しよう。「この国にわれは来たりぬ、われは戻らん」と言うが、「来る」と「戻る」とは同じことだ。

ディオニュソス　こりゃ誰かが隣りの男に「擂鉢を貸してくれ、でなきゃあ、あたり鉢」というようなものだ。

アイスキュロス　このへらず口め、これは同じではない、この行は完全無欠じゃ。

ディオニュソス　どうしてね。どういう意味に用いたのか教えてくれ。

アイスキュロス　祖国がある男には国に来ることができる。彼はただ来るだけのはなしで、そのほかには何のこともない。しかし、追放された男は「来て」そして「戻らん」なのだ。

ディオニュソス　なるほどね。お前の返答はどうだね、エウリピデス。

エウリピデス　いや、わが輩はオレステスが国に戻ったのではないと断言する。人にかくれて来たので、正規の許しを得たんじゃない。

ディオニュソス　なるほどね。〔と傍白〕とは言うもののどういう意味だかよくわからんて。

エウリピデス　さあ、別の詩句をやってくれ。

ディオニュソス　そうだ、さっさとやれ、アイスキュロス。〔エウリピデスに〕お前は欠点をよく見ているんだ。

アイスキュロス　奥津城の塚に立ちて、われは呼ぶわが父に
　聴かれよ、耳を傾けたまいてよ。

エウリピデス　〔途中で遮って〕また二度くり返した。「聴く」と「耳を傾ける」とは明らかに同じだ。

ディオニュソス　なあに、死人に言っているんだよ、このごろつきめ、こいつらは三度呼んだってうんともすんとも言やしない。[2]

アイスキュロス　それじゃお前はどういうぐあいにプロローグを作ったのだ。

エウリピデス　聞かせてやろう。もしわが輩が二度くり返したり、あるいはまたちぐはぐな詰め物があるのを見つけたら、わが輩に唾をはきかけてくれ。

ディオニュソス　さあ始めた。こりゃ聞き逃すことができないぞ、お前の正確無比の言葉廻しのプロローグは。

エウリピデス　オイディプスはその初め幸多き人なりし[3]……。

アイスキュロス　どうして、どうして、それは嘘だ。生まれつき不幸な男だ。生まれる前にアポロンが父親殺しになると言った男だ。まだ存在さえもせぬ前にだよ。どうしてこの男がその初めは幸多き人であるものか。[4]

エウリピデス　が、人の子のなかにも較ぶべくもなき哀れなる者となりぬ。

アイスキュロス　いいや、なりぬではない。彼はけっしてこれ以外の者であったことなし。ええ？　生まれ落ちるやいなや、冬というのに土甕に入れて捨てられた、育てられて父親殺しにならぬようにだ。それから腫れあがった足をしてポリュボスのところへいざり行った。それから自分は若いくせに婆さんと結婚した、それがしかも自分の母親と来ている。それから自分の眼玉をくり抜いた。

ディオニュソス　運のよい奴だ。奴はエラシニデス[5]の同僚にならずにすんだのだからな。

エウリピデス　たわけ言だ。わが輩のプロローグは大したものだ。

アイスキュロス　ええい、ゼウスの御名にかけて、お前の言葉を一言一

言、ほじくり返すは面倒だ。神々の恩寵によって、わしはお前のプロローグをちっちゃな油壺一つで粉微塵にしてくれるわ。

エウリピデス　ちっちゃな油壺でわが輩の言葉を？

アイスキュロス　ただ一つの油壺でだ。お前のような書き方なら、なんだろうがうまく調子が合うわい、蒲団(コーダリオン)だろうが油壺(レーキュティオン)だろうが小袋(テューラキオン)だろうが同じことだ。短長格詩(イアムボス)(1)にぴったりだ。ただちに証明してやるぞ。

エウリピデス　お前が証明してみせるだって？

アイスキュロス　するとも。

ディオニュソス　それじゃ始めろ。

エウリピデス　あまねく人の知るごとく、アイギュプトスが五十人の息
子とともに海を旅して
アルゴスに着いたとき、(2)

アイスキュロス　油壺をばなくしたとさ。

エウリピデス　な、なんだと、油壺だ？　油壺め、おぼえていろ。

ディオニュソス　ほかのをやってみろ、もいちどはっきりさせるためだ。

エウリピデス　祭杖(テュルソス)(3)と仔鹿の皮を身につけて
パルナッソスの頂きに松明の火のうちに踊りはねる
ディオニュソスが(4)

アイスキュロス　油壺をばなくしたとさ。

ディオニュソス「ああ！　またもうたれた」(5)
例の油壺で！

エウリピデス　なに、なんでもない。今度のこのプロローグには油壺はよもつけられまい。
何人もよろずにかけて幸ある者はなし。
貴き生れのその人は資に乏しく、
賤しき生れの者は(6)

アイスキュロス　油壺をばなくしたとさ。

ディオニュソス　エウリピデス！

エウリピデス　どうしました。

ディオニュソス　帆を巻いたほうがよいな、油壺めが大風を起こしそうだぞ。

エウリピデス　なんの、デメテルにかけて、かまうものか。あいつの手からそれを叩き落としてやるぞ。

ディオニュソス　それじゃも一つやってみろ。油壺に気をつけろ。

エウリピデス　その昔シドンの町をアゲノルの子カドモス(7)が立ち去って、(8)

アイスキュロス　油壺をばなくしたとさ。

ディオニュソス　おい、お願いだからその油壺を買い取ってしまえ、おれたちのプロローグをめちゃめちゃにしてしまわぬように。

エウリピデス　なんだと、わが輩があいつから買　取る！

ディオニュソス　おれの忠告だ、そうしろ。

エウリピデス　まっぴらだ。わが輩にはまだまだプロローグがたくさんにある、それにはこいつめ油壺はくっつけられない。
タンタロスの子ペロプス(9)が足はやき牝馬を駆って
ピサへと進み行き(10)、

アイスキュロス　油壺をばなくしたとさ。

ディオニュソス　そら、また油壺をくっつけたぞ。〔アイスキュロスに〕お願いだから、さあその油壺を返してやれ。一銭(オボロス)でほんとに立派なよいのが手に入るから。

エウリピデス　まった、まった。まだたくさん残っている。
「オイネウスはその昔大地より(11)」

アイスキュロス　油壺をばなくしたとさ。

エウリピデス　まず一行全体を言わせてくれ。
オイネウスはその昔大地より豊かなる実りを得て、
初穂を神に捧げしとき、

アイスキュロス　油壺をばなくしたとさ。

ディオニュソス　神様に捧げ物をしているときにだと。誰がちょろまかしたのだ。

エウリピデス　かまうな、ほっとけ。これにはどうするか、言ってみろ。
　ゼウス、真理の言葉にあるごとく[1]

ディオニュソス　だめだよ、「油壺をばなくしたとさ」と言うだろうからな。この油壺はお前のプロローグの上にまるで目の上のたん瘤のようにへばりついているぞ。後生だから今度はあいつの歌のほうに風向きをかえてくれ。

エウリピデス　なあに、あいつがどんなにへっぽこ歌作りか、またいつでも同じものばかり作っているかを示すのは朝飯前だ。

コロス　さて何ごとが起こることやら、
思案投首五里霧中、
どんな非難をするつもりか、
古今を通じて及ぶものない
美しい詩歌を数知れず
創り出したこの人に。
はてこの酒神の霊感に
ふるいたった悲劇の王の
どこに隙間を見出すつもりか、
私は驚き、この人のために恐れる。

エウリピデス　おお、大した歌だ。今に見せてやるぞ。こいつの歌をみんな切り刻んで一つにしてみせてやるぞ。[2]

ディオニュソス　そしておれはここにある小石[3]を取り上げて勘定してやろう。

〔ここでどこよりともなく笛の音聞こえ来る。一二七七行までのエウリピデスのアイスキュロスよりの引用による朗誦に伴奏する〕

エウリピデス　おお、プティアのアキレウスよ、
殺戮のあの物音を耳にしながら、[4]
そうじゃ、あの打撃を、しかも助太刀にはまいられぬのか。
遠きみおやのヘルメスを、われら湖の住人は崇め奉る。[5]
そうじゃ、あの打撃を、しかも助太刀にはまいられぬのか。

ディオニュソス　〔勘定しながら〕これで二本入った[6]、アイスキュロス。

エウリピデス　おお、アカイアの誉れも高き、
広くを治し召すアトレウスの御子よ耳を傾けたまえ。[7]
そうじゃ、あの打撃を、しかも助太刀には参られぬのか。

ディオニュソス　三本目だ、こりゃ、アイスキュロス。

エウリピデス　しずまれい、蜜蜂の乙女らがアルテミスの宮居の扉をば
　開くべく近づきぬ。[8]
そうじゃ、あの打撃を、しかも助太刀にはまいられぬのか。
勇士らの軍旅をまてる運命を語るはわれの義務にこそあれ、[9]
そうじゃ、あの打撃を、しかも助太刀には参られぬのか。

ディオニュソス　おお、ゼウス大王、こりゃいったい何本になるかわからぬて、おれは風呂屋行きだ、こう何本もやられては腎の臓が腫れあがってしまうだろう。

エウリピデス　待った、こいつのいろんな竪琴歌の調べから捏ね上げた組曲をも一つ聞くまで、待った。[10]

ディオニュソス　それじゃやってくれ、しかし打撃は勘弁してくれ。

エウリピデス　いかに[11]、アカイアの双の御座に治し召す者よ、ヘラスの
　精鋭の君よ、
こりゃトプラットトラット、トプラットトラットだ。[12]
禍いなる宿命の司、執念の鬼スフィンクスを送りぬ。[13]
こりゃトプラットトラット、トプラットトラットだ。
復讐の手と槍とをひっさげたる猛き鳥は[14]
こりゃトプラットトラット、トプラットトラットだ。
空高く舞う猛き犬の餌食にと供すべく[15]
こりゃトプラットトラット、トプラットトラットだ。

かくてアイアスに群がり攻め寄ったり[1]
こりゃトプラットトラット、トプラットトラットだ。

ディオニュソス　このトプラットトラットトラットというのは何かね。こりゃマラトン製か、それともどこからこの縄ない職人の歌を拾ってきたのだ。[2]

アイスキュロス　だがわしは歌の調べを尊い源より受け取って尊いところへと導いたのだ。プリュニコスと同じい詩の女神の聖なる草原より花を摘んでいると見られないように。ところがこいつはあらゆるエロ[3]歌やメレトス[4]の連歌(スコリオン)、カリアの笛歌[5]、挽歌、舞踊音楽からメロディを採っている。今すぐに見せてやる。誰かリラを持って来い。いや、だがどうして、こんなことにリラなんか不必要だ。あのカスタネット[6]女はどこにいる。エウリピデスの音楽の女神さま、こっちへ来い。こんな歌はお前にもってこいだ。

ディオニュソス　この音楽の女神さまはレスボス女[7]……じゃなかった、いや、なかった。

アイスキュロス　〔歌う〕

永遠(とわ)[8]に浪うつ綿津見(わたつみ)の
浪間にしゃべる翡翠(かわせみ)[9]よ、
汝(な)が羽根をしとど降る
波のしぶきに濡らしつつ、露をおきつつ。

屋根の下なるかた隅に
巻(ま)ああく[10]は指もて
蜘蛛たちよ、織機(はた)に張られた緯糸(よこいと)を。
吟人(うたびと)の梭(ひ)の宝[11]。

笛好きの海豚(いるか)が踊る
黝(あおぐろ)き舳(へさき)を横切って[12]
神宣に競走の場を
葡萄の輝く若芽
悩みを癒す渦巻く総(ふさ)よ、
おお、わが子よ、双の腕(かいな)もてわれを抱け[13]。

〔と言いながら、やめて、ディオニュソスに〕
この脚[14]だ、見たか?

ディオニュソス　見えた。

アイスキュロス　〔今度は自分のほんとうの足を出して〕それじゃこれは?

ディオニュソス　見えた。

アイスキュロス　こんなものを作りながらわしの歌をばよくも非難しおったな、キュレネの十二手式[15]の歌作りめが。
これがお前の合唱歌だ[16]。次にはお前のソロ歌がどんなものかを説明してやる。

〔歌う〕

おお、[17]「夜」の輝く闇の
暗黒よ、お前の送った
無明(むみょう)よりの不幸な夢占いは
黄泉(よみ)の国よりの使者
何ごとであろうな、これは
魂なき魂をもった
黒き「夜」の子じゃ、
身の毛も慄(よだ)つおそろしげな
黒い死の衣裳を纏うた、
眼には血が、血が見える、
怖ろしい大きな爪をもっておる。
腰元ども、灯を、灯を。
水甕に川より水を汲んで、温めてたもれ、

この夢見を洗い落とそうほどに。
ああ、海の精よ、[1]
さてはこれであったのか、[2]ああ同宿の方々、
この前兆を見てくだされえ。
わたしの雄鶏をかっさらって
グリュケが[3]見えなくなった。
山のニムフたちよ、
おお、マニアよ、[4]捕えてよ。
不運なこのわたしは、心をば
仕事にむけていました、
糸で重い糸巻竿を
手でもってまあああああきつつ、
巻糸をつくっていた、
暗いうちに市場へもって
行って商うため。
ところが空へ飛び上がる、飛び上がる
いとも軽い翼の端で風を切って。
このわたしには悲しみを、悲しみを残した、
涙を涙を不幸なわたしは
眼から流した、流した。[5]
だが、[6]おお、クレタ人よ、イーダの山の子よ、
弓を取って助けに来てたもれ、[7]
脚踊らせてこの家を
囲んでたもれ。
またディクテュンナよ、[8]
美しき乙女アルテミスよ、牝犬どもを引き具して
家じゅうを隈なく探してたもれ、
おお、ゼウスの御子、双の火の
鋭い光の松明を手に
ヘカテよ、[9]グリュケの
家を照らしてたもれ、
あたしゃ入って見つけようほどに。

ディオニュソス　さあ、歌はやめた。

アイスキュロス　わしもあきあきしたよ。あいつを秤にかけたいものだて、これはわれわれ二人の詩の唯一の試験だ。われらの詞の重さを験してくれる。

ディオニュソス　それじゃこっちへ来い。おれは詩人たちの作品をまるでチーズのように量らねばならんのだ。

〔大きな秤が舞台に持ち込まれる〕

コロス　天才の苦労といったら！
これは新式珍無類の
驚異が一つ、
彼らのほかにいったい誰がこんなことを思いつこうぞ。
いいや、誰かが私にいま目の前で
起こりつつあることを話したら、
信じるどころか、
嘘八百だと思うだろう。

ディオニュソス　さあ、二人、秤の皿のそばに立つのだ。

アイスキュロス　エウリピデス、そうら。

ディオニュソス　そしてそれをつかんで一人ずつ詩句を誦してくれ。おれが「郭公」というまで二人とも放すな。

アイスキュロス・エウリピデス　心得た。

ディオニュソス　さあ秤に詩句を！

エウリピデス　おお、アルゴが海原を飛び行かねばよかったに[1]。
アイスキュロス　おお、スペルケイオスの河よ、草をはむ牛の戯れ場よ[2]。
ディオニュソス　カッコウ！　放せ。ははん、この人の秤皿のほうがずっと下にいったわい。
エウリピデス　そりゃどういうわけだ。
ディオニュソス　なあに、河をのっけたからさ、羊毛商人式に、羊の毛と同じに詩句を濡らしてね。ところがお前は羽の生えた詩句をのっけた。
エウリピデス　さあ、あいつに別なのを言わしてわが輩と競争させよう。
ディオニュソス　それじゃもいちどつかめ。
アイスキュロス・エウリピデス　よろしい。
ディオニュソス　言え。
エウリピデス　説得の女神の宮居は言葉のほかにこれあらず[3]。
アイスキュロス　神々のうち「死」のみが賜物を望まず[4]。
ディオニュソス　放した、放した。またこっちが下がったぞ。禍いのなかでいちばん重い「死」をのせたからだ。
エウリピデス　わが輩はすばらしい詩句、説得の女神をのせたのだが。
ディオニュソス　説得は軽くて、意味は空っぽだ。だがほかの重いやつを探し出せ、お前の皿を引き下ろすように、強くて大きいのをだ。
エウリピデス　はてね、そんなのはどこにあるかな、どこに。
ディオニュソス　おれが言ってやろう。
　アキレウスはエース二つに四を一つ投げた[5]。
　さあ、言え。これが最後の勝負だ。
エウリピデス　右の手には南蛮鉄うったる錫杖を引っつかみぬ[6]。
アイスキュロス　戦車に戦車、死骸に死骸を積みかさねて[7]。
ディオニュソス　今度もまたやられたぞ。
エウリピデス　どうして。
ディオニュソス　彼は戦車二つに死骸二つを置いたのだぜ、こいつぁ百人のエジプト人がかかっても持ち上げられまい[8]。
アイスキュロス　ええい、もう一句一句は面倒だ、秤の上にあいつ自身、子供も細君も、ケピソポンも[9]、本もろとも乗りこんで坐らせろ。わしはたった二句を言うだけで十分だ。
ディオニュソス　二人とも私の友人だ。私にはどっちに[10]すべきか決しかねる。どっちにも敵とはなりたくない。一人は賢明、また一人を私は愛好しているのだ。
プルトン　それではあなたのここへ来た目的が達せられまい。
ディオニュソス　もしきめたら？
プルトン　どっちなりと、きめたほうを連れて立ち去られるがよい。来られたことがむだとならぬよう。
ディオニュソス　かたじけない。さあ聞いてもらいたい、おれは詩人を求めて冥府に下りて来たのだ。
エウリピデス　何のために？
ディオニュソス　われらが市が救われて、合唱の祭を行ない得るためにだ[11]。お前方のどちらでもわれらの市に一等すぐれた忠告をしてくれる者を私は連れて行こう。まずアルキビアデス[12]に関して、おのおのいかなる意見をいだいているか。われらの市は難産に苦しんでいるのだ。
エウリピデス　して市は彼についてどういう意見をもっているのだ。
ディオニュソス　どういう意見だと。
　彼を愛し、憎み、しかも自分のものにしておきたいと願っている[13]。
エウリピデス　祖国の奉仕には遅く、損うにはすみやか、
　自己の利にさとく、国の利にうとき
　市民はわしは嫌いだ。
ディオニュソス　うまい、おお、ポセイドン！
　〔アイスキュロスに〕お前の意見はどうだ[14]。
アイスキュロス　国内に獅子を飼うべからず、されど育て上げられたるそのときには、その意に従うべし。
ディオニュソス　救い主のゼウスにかけて、決断がつかぬ。一人は賢明、一人は明断。しかし今一度われらが市の救済法について意見を述べて

くれ。

エウリピデス　（もしもキネシアスにクレオクリトスの羽根をつけたら、(1) 風が彼らを海原越えて運んで行くだろう。

ディオニュソス　滑稽な光景だろうな。だがその意味は？

エウリピデス　もし海戦になったなら、二人は薬味容れを手にもって敵の目玉に酢を降りかけて注ぎ込む。(2)）わしは知っている。言うぞ。

ディオニュソス　言え。

エウリピデス　現在信用せられていないものを信用すべし、また信用せられていたものを信用できぬと考えたとき。

ディオニュソス　なんだと、わけがわからん。もっと常識的にわかりよくやってくれ。

エウリピデス　現在信用している市民どもを信用せず、今使っていない者どもを使ったならば、われらは救われるであろう。もし現在のやり方で現在失敗しているのならば、その反対をやったなら、どうして救われぬことがあろう。

ディオニュソス　（よいかな、おおパラメデス、おお世にも賢明なる天才よ。(3)

　これはお前自身の発明か、それともケピソポンのかね。

エウリピデス　わが輩一人の考えだが、薬味容れはケピソポンのだ。）

ディオニュソス　〔アイスキュロスに〕それでお前の考えは？

アイスキュロス　まず市がどんな人間を使っているかを話してもらいたい。立派な人々かな。

ディオニュソス　どういたしまして、そういう人は市は大嫌いだ。

アイスキュロス　悪人どもが好きなのか。

ディオニュソス　いや、好きなのではないが、やむなく使っているのだ。

アイスキュロス　それじゃどうして救えよう、毛織物も毛皮もどちらも合わない、こんな市が。(4)

ディオニュソス　もし地上にいまいちど帰りたいなら、その方法を考え出せ。

アイスキュロス　あの世で言おう。この世じゃいやだ。

ディオニュソス　いや、いかん、ここからお前のよい忠告を上界へ送ってくれ。

アイスキュロス　敵の地を己が地と考え、己が地を敵のものと目し、船をば富、富をば屑と考えしとき。(5)

ディオニュソス　うまい、しかし陪審員がその富を呑みこんでしまうのだ。(6)

プルトン　さあ、きめるのじゃ。

ディオニュソス　されば、わが判決はこうじゃ。わが心の望む者を選ばん。(7)

エウリピデス　誓った神々を頭において、わが輩を連れて帰ってくれ、お前の友人を選べ。

ディオニュソス　「わが舌は誓えども(8)」、われはアイスキュロスを選ぶぞ！

エウリピデス　なんたることを！　うぬ、卑劣漢め。

ディオニュソス　おれがか？　アイスキュロスの勝利だ。この判決がどうして悪い。

エウリピデス　このおれに煮え湯を呑ませておきながら、よくもしらじらしい顔が合わせられるな。

ディオニュソス　何が煮え湯だ。(9) 見物はそうとは思わぬぞ。

エウリピデス　冷酷無情漢め、わしを死んだままにほっておくつもりか。

ディオニュソス　生とは死ならんや否や、誰ぞ知る、(10) また息は食、眠りは羊の毛皮なりや否やを。

プルトン　ディオニュソス、内にお入りあれ。

ディオニュソス　どうして？

プルトン　お前方二人が行かれる前に歓待いたすため。

ディオニュソス　かたじけない。これはまんざら嫌いでない仕事だて。

〔一同退場〕

コロス　研ぎすまされた知性を
もてる者は幸いなるかな
これよろずごとの教うるところ。
賢明と銘うたれるこの人は
ふたたび家路に帰り行く、
市民の幸、
眷属友人の幸、
聡明の性のゆえに。　(一四九〇)
ソクラテスの傍に
座を占めて囈言いたすは(1)
ムーサの技をかえりみず
悲劇の技の根元なる尊きものを
おろそかにいたすはめでたからぬこと。
いかつい言葉をひっかき
まわして、雑言に
無為のときをば過すのは
愚か者の仕事じゃな。

〔アイスキュロス、ディオニュソス、プルトン登場〕

プルトン　さらばじゃ、アイスキュロス、行くがよい、われらが市をよい忠告で救済し、愚か者どもを教えてやれ。山ほどいるわ。　(一五〇三)
〔と包みを取り出して〕これをクレオポンに持って行ってくれ。それからこれをあの顧問役(2)のミュルメクスとニコマコスに。それからこれをアルケノモスに。そして彼らにわしのところに、ここにぐずぐずせずにすぐ来るように伝えてくれ。さっさと来なければこのわしが自分で出かけて焼印押して、手枷足枷、レウコロポスの息子のアデイマントス(3)もろともに地の下にさっさと投げ下ろすであろう。　(一五一四)

アイスキュロス　心得ました。わしの椅子はわしがここへ帰って来ることがあるまで見守ってくれるように、ソポクレスに与えられたい。この人をわしはわが技でわしに次ぐすぐれた人だと考えている。この悪者の嘘つきが、ひょっとこ野郎が、わしの椅子にけっして、たとえいやいやながらも坐らぬように、くれぐれもご注意。　(一五二三)

プルトン　〔コロスに〕それではお前方は聖松明でこの人の道を照らし、この人の歌と踊りで賑かにこの人を送ってあげるがよい。

コロス　まず、光明に向かって去り行くこの詩人に
つつがなき幸ある旅路を与えたまえ、地下の諸力よ、
また市には大いなる幸を生むべきよき考えを。
かくて塗炭の苦しみより、また
悩ましき戦いより救われん。クレオポンや
その仲間には、もししたければ、はるかなる
自分の土地(4)で勝手に闘わせるがよい。　(一五三〇)

〔とアイスキュロスを送りつつすべて退場〕

訳註

二九（1） プリュニコスとアメイプシアスはアリストパネスと同時代の喜劇詩人。リュキスに関しては、ここにその名が伝えられているほかは不明。同時代の喜劇詩人であろう。

三〇（1） ギリシアでは酒を甕に入れて保存した。ディオニュソスは酒神であるから、したがって酒甕の子と自称する。

（2） これは前四〇六年のアルギヌサイにおける海戦を意味する。アテナイはこの海戦に大捷を得たので、海戦に参加した奴隷はすべて解放せられて自由の身となった。このとき将軍たちは海中に落ちた人々と戦死者の遺骸を収容することを怠ったために、のち訴えられた。彼らは罪を艦長の怠慢に帰して、命令を下したにもかかわらず、これが行なわれなかったと弁明した。そこで艦長らは有名な雄弁家テラメネスを主とし、将軍らと争い、命令が出たときにはすでに手遅れであったと主張した。将軍たちは有罪となり、そのうちの六人（エラシニデスを含む）は死刑に処せられ、せっかくのめでたい勝利も暗いかげのうちに終ったのである。アリストパネスはこの劇中でこの不幸な海戦にしばしば言及している。

（3） 有名な美少年。「乗る」という言葉が美少年に用いられると、妙な意味にもなり得る。

（4） エウリピデスの劇の名。前四一二年上演。

（5） 『アンドロメダ』に出演した、べらぼうに背の高い俳優。

三一（1） ディオニュソスとヘラクレスは腹こそ違え、ともにゼウスの子。

（2） ヘラクレスは喜劇のなかではつねに大食漢として取り扱われている。

（3） 古註によればエウリピデスの失われた劇『ヒュプシピュレ』よりの引用。

（4） 古註によればエウリピデスの失われた劇『オイネウス』よりの引用。これはディオメデスがオイネウスに、どうして彼にはこうも味方が少ないのか、と尋ねるのに対する答えであるという。

（5） ソポクレスの子で、悲劇詩人。父の存命中より悲劇を上演して、エウリピデスの『ヒッポリュトス』（前四二八年）と競争して二等を得たこともあるが、彼の作には偉大なる父の手が加わっているのではないかとつねに疑われていた。

（6） アッティカ三大悲劇詩人につぐ有名な悲劇作者。前四四七年生れ。アテナイを捨てて、マケドニア王アルケラオスの宮廷に客となって赴いた。作品は不幸にして一つも伝存していない。

（7） これは「至福の人」、すなわち死者の国または島へと言うべきところを「宴」にかえて、アガトンが大食で有名なマケドニア人の宮廷に行ったことを皮肉ったもの。八三行の「われらを後に残して去ってしまった云々」とあるのは、死者に対する通例の言葉であるから、ここですでに死人の取扱いをしているわけである。

（8） アイスキュロス時代の有名な悲劇詩人カルキノスの三人の息子のなかの一人で悲劇詩人。この一家はあらゆる喜劇作者の嘲罵の的となり、クセノクレス自身も「侏儒」とか「機械師」などと罵られている。

（9） ここにある以外に伝承なし。

（10） アテナイにおける悲劇の上演は公けの行事であって、ディオニュソスの祭に劇の競技に出場せんとする者は、まず政府にコロスをつけてくれるように出願しなくてはならなかった。そこでいちどはこれを与えられて上演するが、これで失敗し、その後はだめになる群小詩人どももという意味。

（11） エウリピデスの失われた劇『メラニッペ』の「われはゼウスのいますアイテールに誓う」という句のもじり。

（12） エウリピデスの「かくて時の足は歩みゆきぬ」のもじりか？ なおエウリピデスの最後の劇『バッコスの信女』八八八行には「時の長き歩み」なる言葉があるが、この劇の発表は『蛙』以後のことに属する。

（13） この二行の句はエウリピデスの『ヒッポリュトス』六一二行の有名な「わが舌は誓うたが、心は誓いはせぬ」という句のもじり。エウリピデスのいう心は、ヒッポリュトスが真の意味を知らずして口では誓ったが、心は潔白というのであるが、これが表面上のみの意味にとられて、喧々囂々たる議論と非難の的となった。

三二（1） 古註によればエウリピデスの句。ギリシア語の「住む」という語oikeinには「治める」の意味があり、この二つの意味にかけて、人の心を量って余計な世話をするなという洒落。

（2） 地獄の門の番をしている三頭（または五十頭）の犬。ヘラグレスはかつ

てこれを求めて地獄に下ったことがある。

（3）　道がよく踏みならされているという表現は、また薬研で摺るというのとギリシア語では同じ語をもってする。

（4）　この毒薬はまず四肢の末端を犯し、その感覚を失わせ、非常に冷たい感じを起させる。

（5）　アテナイ市北西郊外にあった一地区。一部分は城壁内にあり、城外の一部は墓地として有名。

（6）　有名な「人間嫌い」のティモンが籠った塔。

（7）　地獄のアケロンの湖水。死人はまずこれを渡って冥府に入らねばならなかった。

（8）　地獄の渡し守はカロンと呼ぶ老人。渡し賃は普通は一オボロスであって、死人は必ずこれを口にして死出の旅路に出た。ここに二オボロスとあるのは、ギリシアにおける当時の一日の最低生活費が二オボロスで、劇場の入場料、陪審員そのほかの賃金もまた古くはこれであったので（『蛙』上演当時は三オボロス）、そこでアリストパネスは一オボロスをアテナイ式に二オボロスに値上げしたのであろう。

（9）　アテナイの英雄、あらゆる制度の創始者として崇拝せられていた。彼もまた地獄へ生きながら下ったことがあるので、ヘラクレスはテセウス以外にかかるアテナイ式賃金を地獄にもたらした人を考え得ず、テセウスなりと断定するのである。

（10）　かかる汚物のなかにころがっているのは、オルフィク教の伝承によれば、「秘教に入会せず、啓示をうけずに冥府に来た人々」であった。しかしまた瀆神不敬の者、悪人も同じ運命が待っていた。

（11）　原文「少年」。

（12）　アイスキュロスの兄弟の孫で、ピロクレスの子。へっぽこ詩人。

（13）　「剣舞(ピュリケー)」とは武具に身をかためて踊る激しい動きのダンス。キネシアスは当時その華美な文体で有名であったディテュラムボスの作家。

（14）　オルフィク教やアッティカのエレウシスで行なわれた大地女神デメテルの秘教等に入会した者は死後に永遠の輝かしい光と幸多き生活を約束せられた。

三三（1）　エレウシス秘教の行なわれる際、アテナイよりエレウシスに至る行列において儀式に必要な品物を驢馬に背負わせた。それで「秘教の驢馬」は日本の「縁の下の力もち」とよく似て、他人のために働いて苦労しながら、何も自分は得るところがないことを意味する。

（2）　一ドラクマは六オボロスである。

（3）　ここで背景のヘラクレスの家が湖水の光景に変ったのであると思われるが、かかる上演上の技術についてはわれわれの知るところはまことに少なく、想像するほかはない。

（4）　「驢馬の毛」とは、いくら刈っても役には立たぬ、「蛙の面に小便」というほどの意味である。「驢馬の毛」、「ケルベリオスども」が実際にはどこを意味するか不明。次のタイナロンはペロポネソス南端の断崖絶壁をなす岬で、ここには冥府に通ずると信ぜられていた大洞穴があり、地下神としてのポセイドンの祠があった。

（5）　眼病はギリシアに非常に多かった病気で、軍隊においてはこれは不合格の一つの原因となり、戦場に出たくない臆病者のよい口実となった。

（6）　地獄のアケロン湖は非常に広大で底なしであると言われているのに、これを船でなしに歩いて廻ることができる上に、船より先に向う側に着いて待っていなくてはならないところに皮肉な滑稽がある。実際の舞台では湖はおそらくオルケストラの円形の場によって代用せられ、クサンティアスはさっさとこの外側を走って廻って、再び舞台上で待っているが、ディオニュソスは苦心惨澹、船（おそらく車輪がついているか、あるいは丸木を下にかってある）で手に豆をこしらえつつオルケストラを横切るであろう。

（7）　悪い前兆のこと。

三四（1）　アテナイ近傍の島で、この島の住民は海に慣れた船頭であった。

（2）　アテナイの沼沢地リムナイで歌っていた蛙どもの亡霊が黄泉(よみ)の国のアケロンの沼で歌うのである。

（3）　『女の平和』二七九ページ註（5）参照。

（4）　「沢」とは原文 Limnai「沼沢地」。ここではアテナイ南西の低地の名。この地はアクロポリスに隣接し、ディオニュソス劇場に近く、そこにこの神の神殿があった。ここでアンテステリオンの月の十二日に酒神祭が行なわれた。「壺の祭」とはこの酒神祭の第三日目の祭の名。

三五（1）　エウリピデスの失われた劇『ピロクテテス』の冒頭の「世のなかで類ま

れなる威張り屋は、それは男だ」という句のもじり。

（2） 地獄の女神ヘカテが差し遣わす化物で、身を絶え間なく変じる。

三六（1） ディオニュソスは、ここでまえに進みでて、見物席最前列中央の特別席にいるディオニュソスの神官に呼びかける。

（2） ヘゲロコスは俳優の名。エウリピデスの『オレステス』中の主人公に扮して登場した際、「荒浪立ちしその後でまたもや凪がほのみゆるは」というところで（二七九行）、「凪」galēn' という語を発音するときに、その後にほんの少しばかり思わず間をおいたために、galēn「いたち猫」という意味となり、見物人はどっと沸き立ったという。ここでは「またもやなぎ（凪）」＝「またもやなぎ（柳）」と苦しまぎれに訳しておいた。

（3） コロスは始めは姿を見せず蛙となっていたが、ここで秘教入会者となって近づき、三二四行で姿を現わす。彼らは秘教入会者の衣裳で、手に松明を持っている。

（4） 「おお、イアッコス」は秘教の際の叫び声であって、これより Iacchos なる固有名詞がつくられ、エレウシス秘教においてデメテル、ペルセポネとともにまつられるディオニュソスの別名となった。

（5） メロス島の人。「無神者」と呼ばれた。彼は秘教を攻撃して死刑の宣告をうけ、ペレネに遁れたと伝えられる。しかし一説には別人のディアゴラスなる詩人があって、秘教の讃歌を作ったとも言われるが、前説の解釈のほうがこの場合には滑稽味が多い。おそらく無神者ディアゴラスが秘教を罵って、もじり讃歌を作ったのであろう。

（6） これはアテナイのペイライエウス門の内側にあったデメテル、ペルセポネ、イアッコスの三体のエレウシス秘教の主神をまつった神殿を指す。ここよりイアッコスの神像が運び出されて、秘教者の行列は像を担いでケラメイコスを通過し郊外に出で、蜿蜒たる長蛇の列をなしつつ、讃歌とともに、山を越え野を横ぎってエレウシスの神域へと練って行った。

三七（1） 秘教では新入会者の儀式に豚を犠牲に供した。

（2） これ以下三七一行にいたる言葉は、エレウシス大秘教の始まる前にアテナイのストア・ポイキレにおいて行なわれた宣言のもじり。これはエレウシスの最高神官たるヒエロパンテスによって行なわれた。このなかで不浄の者、すなわちある種の罪や汚れを犯した者は儀式より遠ざかるべしと命令せられるのであるが、アリストパネスはこれを利用して、文学批判の能力に欠けている者や政治上の罪を犯した者を追放する。

（3） すなわち秘教の理と喜劇の理の両方。

（4） クラティノス（およそ前五二〇―四二三年）は有名な喜劇作者。「牛を啖う」というのはディオニュソス自身の称呼の一つ。牡牛が秘教において神の身代りとして犠牲に供せられ、その肉を啖うことによって神自身の力を得ると信ぜられたので、一種の聖餐であった。

（5） トリュキオンは、ここ以外に伝承なし。

（6） 戦争中は輸出禁制品があり、これには五分の税がかけられていた。その主なるものは造船用資材と穀物であった。

（7） アイギナ島はペロポネソス半島の北東端に近い島で、この時代にはアテナイの領土となり、アテナイ市民の植民地となっていた。この島より対岸のエピダウロスへと禁制品を密輸出したのであろう。

（8） 前出（三二二ページ（13）註参照）のディテュラムボス詩人キネシアスを意味する。古註によれば彼はかかる悪戯をやったらしい。ヘカテは地下の女神の主なるものの一人であって、この女神をまつった小さな神棚が三本辻などにあった。

（9） 喜劇の上演費用をけずり、またそのあまりにも自由な悪口雑言を取り締まる法令が、たとえばアルキノス、アギュリオス、アルケデモス等によって提案せられ公布せられた。

三八（1） ペルセポネのこと。

（2） 「長き旅路」とはアテナイよりエレウシスに至る道。

（3） 五八八行で「眼のしょぼしょぼした」と言われている、アテナイの政治家。彼は公金横領とか民衆の買収者とか攻撃されているが、ここではおそらく、アルギヌサイ海戦の将軍たちの告発者として、攻撃せられているであろう。

（4） アルケデモスは外国生まれであったために、アテナイ人としての系譜をなんとかしてでっち上げようとしているが、まだできないという意味。ここでの洒落は Phrateras「同氏族の人々」と Phrasteras「二度目の歯、永久歯」とのあいだの類似によっている。

（5） クレイステネスは美少年で女のごとき男であったが、アルギヌサイの海

戦でありもしない友人を失ったと称して喪に服したという。髪の毛をむしりとったり、胸をうったりするのは悲嘆の表情である。

（6） 有名な女たらしの放蕩者。ヘラクレスの後裔なりと自称し、そのため獅子の皮を身につけていた。彼はヒッポニコスの子であったので、ここでこれをもじってヒッポピノスの子としたもの。この語はものすごい精力を表わしている。そこでカリアスはアルギヌサイで戦う代りに、女護が島で奮闘しているという意味となる。

（7） 原文は「荷物のなかはゼウスのコリントスばかりだ」とある。あるときコリントスの使者がメガラに赴いた際、コリントス市の始祖でその名をこの市に与えたという伝説的英雄コリントスがゼウスの子であったため、「ゼウスのコリントス」と二言目にくり返して言ったため、メガラ人はついに我慢がならず、「ゼウスのコリントスはやめにしろ」と怒鳴って彼を叩き出したと伝えられる。そこで同じことばかりをいやになるほどくり返すという意味の諺にこの句が用いられる。この場合にもクサンティアスは何かというと「荷をかつげ」と言われるので、またかというわけであるが、同時にコリントスはベッドに住む虫の産地として有名であり、ここは両者にかけての洒落である。

二九（1） 運命の女神。

（2） ミノスおよびラダマンテュスとともに地獄の判官であるが、ここでは地獄の王プルトンの門番となっている。

（3） 地獄の川。

（4） コキュトスは同じく地獄の川の一つ。「コキュトスの犬」とは復讐の女神エリニュエスを意味する。

（5） エキドナは怪物、大毒蛇。

（6） イベリア半島のタルテソスの八目鰻は珍奇なご馳走として食道楽の垂涎の的であった。また八目鰻を意味するギリシア語 myraina は有毒の海蛇をも表わす。

（7） ティトラスはアッティカの一区（デーモス）の名。これと怪物ゴルゴンとのあいだにいかなる関係があるか不明であるが、おそらくこの言葉の裏にはティトラスの女どもがゴルゴンのごとき女怪であるという皮肉が加わっているのであろう。

（8） これは秘教の儀式で最後の灌酒が行なわれた後に、「酒は注がれた、神を呼べ」というのをもじって、「パンツのなかにうんこをしちゃった、神を呼べ」と洒落たのである。

（9） アッティカのデーモスの名。ケラメイコスに隣接し、ここに「疫病除けのヘラクレス」の有名な神殿があった。

三〇（1） 原文「毛を抜いたばかり」。これはギリシアの習慣で、頭以外のところにある毛をきれいに抜き取るのは化粧の一つであり、とくに遊女はこれを注意して行なった。

（2） ヘラクレスのこと。

（3） 節操がないので、コトルノス（Kothornos. 左右の区別のない靴の一種）とあだ名せられた有名な政治家。しかしアリストテレスはその『アテナイの国制』二八においてテラメネスをアテナイの大政治家として賞讃し、最近の史家の考えもまたこれに影響せられて同じ方向に傾き、そして彼の定見なき、信義なきごとき行為は、彼が賢明な先見の天才であって、つねに中庸の道をとらんとしたことに由来すると解している。自己の先見の明のゆえに、友を売ることを辞せなかったところに、彼の悲劇があったと言えよう。

（4） 男根のこと。

三一（1） そのなかでチーズが造られる籠のこと。

（2） 在留外人や解放奴隷はプロスタテスを通じてのみ種々の法律上の手続を行ない得る。クレオンは前四二二年に死んだ有名なデマゴーグ。五七〇行のヒュペルボロスもまた前四一一年に死んだデマゴーグの一人。『蛙』上演のときには（前四〇五年）両者ともに死んで、今は地獄において生前と同じくデマゴーグをやっているというわけ。

（3） 「竪穴」はアテナイのプニュクス丘の西方にある穴のことで、ここに死刑囚を投げ込んだ。しかし、「竪穴のなかに」という言葉は、さらに一般的に「くたばれ」「地獄に落ちろ」というほどな意味となっている。

（4） このところ原典に脱落あり。一般の読み方にしたがった。

三二（1） アテナイの巡査はスキュティア人であった。これらの -yas -okas に終る名はスキュティアの人名の語尾である。

（2） ギリシアでは奴隷を拷問して、主人の行為に関する供述を得ることが許されていた。

(3)　これは意表に出た滑稽な条件であるが、かかる習慣は宗教上の儀式において実際にあり、ことに「身代り」をこのような柔らかな若芽で打ったことが知られている。

三三三 (1)　ディオメイア門（アテナイ北東）の近くで四年に一度行なわれたにぎやかな祭礼。ここにヘラクレスの神殿があった。

(2)　デロスはエーゲ海のキュクラデス群島中央に位する小島。アポロンとアルテミス生誕の地として、アポロン神崇拝の一大中心地であった。ピュトンは中部ギリシア、コリント湾の北岸に近い、アポロンの聖地として、またその神託で名高いデルポイを指す。

(3)　前六世紀の詩人。小アジアのエペソスの人。彼は野鄙な諷刺詩（イアムボス）の作家として有名。

(4)　ペルセポネのアッティカ方言名。

(5)　アテナイの政治家。ここでアリストパネスのクレオポンに対する嘲罵の内容は、彼がなかばトラキア人（彼の母はトラキアの出であったといわれる）であって、ギリシア語が正確に話せないというにある。

(6)　「トラキア」はクレオポンの母を指す。また燕はギリシアでは日本の雀と同じく、ぺちゃくちゃとわけの解らぬことをさえずる者の代表とされていた。

(7)　これはクレオポンが、当時何かの原因で訴えられていたことを意味する。しかし「同数の投票」を得た場合には、これは無罪を意味するものであるから、たとえ彼が裁判で無罪になろうとも、とにかくだめだぞ、というつもりであろう。

三三四 (1)　ペイサンドロス、テラメネスとともに前四一一年の「四百人」のクー・デターの中心人物であった。彼はこの寡頭政権を最後まで守って、ついに暗殺せられた。したがってアリストパネスの言う意味は、たとえこの政権に加わって誤った道を一度歩んだ者でも許してやるべきだというにある。

(2)　これはアルギヌサイの海戦に参加した奴隷が市民権を与えられたことを指す。「プラタイアイ人」とはこのアッティカに隣接したボイオティアの一小都市の市民が古来つねにアテナイの味方であり、前四二七年にペロポネソス同盟軍がこの市を攻略して破壊したときに、アテナイ人は遁れて来た二百十二人のプラタイアイ人に、その九十二年間の忠実な同盟に報いるため、「プラタイアイ人は他のアテナイ人と同じくアテナイ市民権を有し、アテナイ人の享有するあらゆる権利を享有すべし」という決議をして、彼らに市民権を与えた事実を指す。

(3)　これは「四百人」のクー・デターを指す。

(4)　アルキロコスの詩句。

(5)　古註によれば、これは悲劇詩人。キオスの人イオンの失われた劇『ポイニクス』中の一句。また一説に『カイネウス』よりとも言う。

(6)　ここに見えるほか伝承なし。次の註を見よ。

(7)　エーゲ海のキュクラデス群島中、メロス島の北に隣接する小島で、その土は自然の石鹼をなしていた。ここでクレイゲネスに対する非難は彼が風呂屋を職とし、お客に粗悪な混り物の多い石鹼を売りつけているということと、反和議論者であるということである。

(8)　これ以下のところの解釈には疑問がある。最近ではこれは、昔の立派な貨幣およびペロポネソス戦中に勝利の女神の黄金像を鋳潰して造った金貨（前四〇七年）が非常に質のよい立派なものであるにもかかわらず、これを用いず、かえって新鋳の悪貨（前四〇六―五年の銅貨）を用いているのと同じく、われわれは古くからの立派な市民を用いずして、新参の素姓のよくない人間ばかり信用しているという意味に解されている。

(9)　赤毛はとくにトラキアおよびスキュティア人の奴隷の特徴であった。

(10)　「案山子」。本文では「人身御供」。これはまた一般的に「悪党」「社会のかす」という意味に用いられる。

(11)　「立派な木」。これは「首をくくるにも良い木から」という諺をもじったもの。たとえ、ひど目にあうにしても、善い賢明な人々とともに、というのを面白く表現したものである。

三三五 (1)　悲劇のなかのいわゆる「アナグノリシス」(anagnorisis) すなわち互いに別れ別れになって見失った親子兄弟が、なんらかの徴（たとえば髪の毛、所有物等）によって血縁の関係を認知して狂喜する場面のもじりである。

(2)　アポロンの称呼の一つ。

(3)　市庁とも言うべきもの。市の公けの賓客が食事を供せられた。

三三六 (1)　クレイデモスに関しては何ごとも不明。おそらくソポクレスに関していろいろな身辺の些事を探り出し、そのゴシップを振りまいて歩いた彼の崇拝

者の一人でもあろう。

(2) アテナイのアパトゥリア祭で、子供が両親の氏の帳面に登記せられるおりに、供物として仔羊を捧げたが、その際いちいちこれを量ってあまり大きいものは拒絶した。

(3) 「細長い型」とはそのなかに煉瓦を入れて造るものを言う。

(4) この途方もなく大袈裟な歌はアイスキュロスの悲劇の文体のもじりであるが、手本となったもとの劇が残っていないので、もじりのほんとうの面白さを味わうことができない。なおこのなかで第一、第三聯はアイスキュロス、第二、第四聯はエウリピデスを言っているのである。

三五七 (1) アイスキュロスの取った題材はプロメテウスとかそのほかの、神話中でも太古に属する非常に野蛮な時代のものが多かった。

(2) これはおそらくエウリピデスの失われた劇『テレポス』のなかの「海の女神の子供よ」のもじり。エウリピデスの母クレイトは良家の娘であったらしいが、アリストパネスはつねに彼女を「野菜売り」と罵っている。何ゆえにかかる悪罵が行なわれるにいたったか、またほんとうに彼女が野菜屋であったかは不明。

(3) エウリピデスは写実的に劇を構成し、たとえ神話中の英雄でも話のなかで乞食になっていれば乞食に、また貧しい者は貧しいままの扮装で登場させた。

(4) これはアイスキュロスの句の引用であるらしいが、出所不明。

(5) エウリピデスの劇『テレポス』の同名の主人公。

(6) 地下神に対する捧げ物であって、この場合は暴風の神テュポスに対するものである。

(7) これは二重の意味がある。一つはエウリピデスのクレタに取材した『クレタの女』と『クレタ人』のなかで彼はアエロペとパシパエの二人のクレタの女の不倫の恋を取り扱った。それとともに彼はクレタ風の歌に合わせて一種のパントマイム式の踊りを伴ったヒュポルケーマ (**hyporchema**) と称する形式を劇中に挿入し、コロスの部分を縮小している。この二つを合わせて非難したものであろう。八五〇行の「不倫の恋」はこのほかに、たとえば『ヒッポリュトス』におけるパイドラの義理の子ヒッポリュトスに対する恋のごときを指す。

(8) テレポスはエウリピデスの失われた劇の名。ここでは「脳味噌」と言う代りに「テレポス」と言ったので、エウリピデスの頭はテレポス式乞食悲劇でいっぱいだという洒落。

(9) すべてエウリピデスの悲劇の題名。

(10) 古註によればアイスキュロスの劇は彼の死後も特別の例外として新しい劇との競演に再演することを許されていたという。

(11) 「アイテール」すなわち「空気」はアリストパネスによれば新式ソフィスト派の人々の神であった。ここに列挙されている神々は、滑稽な「鼻孔」以外はすべてソフィスト式のものである。「鼻孔」も、あるいはソフィストの新しい五感説に対する皮肉であるかもしれない。

三五八 (1) 前者はエウリピデス、後者はアイスキュロスを指す。

(2) アイスキュロスよりやや先輩(前五二〇―四七六年頃の人)の悲劇詩人で、とくにその甘美な歌で有名。

(3) アイスキュロスの今は失われた『プリュギア人』(または『ヘクトルの贖い』)と『ニオベ』を指す。前者の舞台ではアキレウスが友人パトロクロスの死をいたんで悲しみのヴェールを面に被っている。後者ではニオベが自己の子供らをアポロンとアルテミスに殺されて、嘆いている場面を言う。

(4) 「スカマンドロス河」はトロイアの城の側を流れている河の名。「濠」とはこれで取り囲まれている陣営や城を意味する。グリフィンは半鷲半獅子の化物。アイスキュロスがかかる騎士の楯上の紋章を好んで叙述したことを言う。

(5) 「長き夜の云々」はエウリピデスの『ヒッポリュトス』三七五行のもじり。

(6) 「あめ色の雄鶏馬」。アイスキュロスの『ミュルミドン』中の句。これは原文の **xuthos** なる語が、「黄色の、あめ色の」と共に「鋭い声の」という意味をもち、また「雄鶏馬」は逆に「鶏の馬のごときもの」という意味にも解し得るので、どちらの意味に作者が用いているのか判じかね、そのためにこの句は喜劇作者の揶揄の的となったらしい。

(7) このほかに伝承なく不明。古註によれば彼の醜い姿を罵ったものとある。

(8) 「牡山羊鹿」とはペルシアの模様に見える動物。

(9) 白甜菜は軽い下剤の用をなした。

三五九 (1) ケピソポンを薬味代りに入れろという洒落。彼はエウリピデスの家人で、

彼の詩作を援助したと伝えられる。同じ行の「独唱」とは前にもあったごとく一種のソロにダンスを伴ったもので、エウリピデスは合唱隊歌の代りにしばしばこれを用いた。

(2) これはエウリピデスの属していたソフィスト的な教養ある人々が貴族主義であったことを指す。

(3) ギリシア神話中、ポセイドンの子。彼は不死身であったが、アキレウスは彼と闘い、彼の身体を地に投げつけて殺した。そして彼の武具を剝いだところ、キュクノス（「白鳥」）はその名と同じ鳥に変じたという。アイスキュロスのどの劇にキュクノスが現われたかは不明。

(4) 曙女神とティトノスの子。トロイアの味方であった。アイスキュロスはその失われた劇『メムノン』および『魂の秤』でこのアキレウスに殺された後、母なる女神の願いで不死となった英雄を扱っている。

(5) 古風なタイプの政治家。有髯の豪傑。

(6) 不明。ここで「頓馬」と訳した原語 Manes の意味もよくはわかっていない。

(7) これは本来はコリントスの地峡に居をしめて、旅人を捕え、二本の杉の木を曲げておいてこれに不幸な男を縛りつけ、木を放し身体を八つ裂きにして殺したという神話中の盗賊シニスに与えられた名。のちにアテナイの英雄テセウスによって同じ方法によって退治せられた。

(8) おそらくソクラテスの仲間の一人であったクレイトポンのことであろう。

(9) テラメネスの節操のないことを皮肉ったもの。ギリシアの骰子の目でいちばん悪いのを chios、最高のものを kōios と称した。テラメネスはケオス島生まれの外国人であるという噂が立っていたので、これにかけて、彼に「キオスじゃなくてケオス人でさあ」と言わせ、骰子の目のように反転つねなきことともに、その素姓を皮肉ったものである。

(10) 古註によればアイスキュロスの失われた劇『ミュルミドン』の第一行。次の九九四行の「コース」は競技の走場のコースのことである。

三四〇 (1) 「七重の牡牛の皮重ねたる」はホメロス中の大豪アイアスの有名な大楯の形容詞。

(2) アイスキュロスの前四六七年に上演せられた叙事詩に名高いテーバイ攻防の戦闘を主題にした劇。

(3) 『ペルシアの人々』は前四七二年上演。ペルシア戦争中の有名なサラミスの海戦（前四八〇年）の大勝利を中心として、ペルシアの敗北を歌ったもの。

(4) 「イアウオイ」(iauoi) なる語は現存の『ペルシアの人々』のなかには見当らず。しかしこれに類した叫び声が見出される。これは『ペルシアの人々』中六二五—六七六行の、死せるダレイオス大王の霊を呼び出すためにコロスが歌う場面をさす。

(5) ホメロスより古い時代に属する古詩人。トラキアの出と言われ、彼の名を冠したオルフィク教の始祖と考えられていた。秘儀と殺生に関する言葉はこれがためである。

(6) トラキアの出で、オルペウスの弟子と伝えられる。古代の詩人は一面巫呪師でもあったので、ここに彼は病いを治療し、予言の術を創始したと言われているのである。

(7) ホメロスより後、前八世紀頃の詩人。彼の作品では『労働と日々』と『神統記』とが残っている。前者は農耕に関する教えにきわめて平凡なる日常生活に対する忠告を交えた一種の教訓詩である。

(8) パンタクレスは兜の飾り毛を、被る前につけておくのを忘れて、兜の緒を結んだ後に、これをつけようとしたのである。なおここに祭の行列とあるはパンアテナイア祭のおりの行列をさす。

(9) 前四一五年にアテナイがシシリア遠征軍を送ったときに将として赴いた三人のなかの一人。彼はその翌年シシリア人との戦闘中に戦死した。

(10) 『イリアス』中、アキレウスの親友。ギリシア軍が敗走した際、アキレウスの鎧を借りて出陣し、奮戦の後戦死した。

(11) トロイアにおけるギリシア軍中最大の弓の名人。

(12) エウリピデスの『ヒッポリュトス』中の女主人公。彼女はテセウスの妻でありながら、義理の子ヒッポリュトスに道ならぬ恋をしかけ、彼にしりぞけられ、これを怒ってテセウスにヒッポリュトスを自己の誘惑者なりと讒言して、みずから縊れて死ぬ。しかしエウリピデスの劇のなかでは、詩人は新しい解釈を下し、パイドラをヒッポリュトスに対する欲情を悲しくも抑えんとしながら抑え得ぬ不幸貞潔な女として描き、これが彼女の乳母によってヒッポリュトスに明かされ、そこでパイドラはこの秘密のテセウスに漏れんこ

とを恐れて自殺し、ヒッポリュトスを破滅に導くにいたるという構想に変えている。

(13) アルゴス王プロイトスの妻。グラウコスの子ベレロポンに道ならぬ恋をしかけ、しりぞけられたのを怨みに思って、プロイトスに逆に讒言する。エウリピデスは失われた劇『ベレロポン』および『ステネボイア』のなかで彼女を扱っている。

(14) しかしアイスキュロス自身も『アガメムノン』のなかで、その妻クリュタイメストラとアイギストスとの不倫の恋と、その結果の夫殺しを扱っている。

三四一 (1) これは実際に何をさすか確かでない。一説によればエウリピデスの妻の一人がその家人ケピソポンと通じたと言い、また一説には彼の妻が二人とも不義をしたとも伝えられるが、これはまったくあてにならない。

(2) アテナイ市北東郊の峨々たる岩山。ここではエウリピデスはアイスキュロスの大袈裟な措辞を非難しているのである。

(3) アテナイの金持は税金の一種として、市のいろいろな催し物とか、軍艦の維持とかの費用を負担せねばならなかった。

(4) 魚はギリシアにおいては贅沢の一つの表象となっていた。ギリシア人の魚好きは激しいものであって、魚ばかり食っていることは金持の特権、証拠であった。

(5) 大麦に油と葡萄酒とを混ぜてつくったもので、ギリシア人の常食の一つ。

(6) ギリシア戦艦では漕ぎ手が三段のベンチに座を占める。上の段の者ほど長いオールを用いるので、よい水夫と考えられ給料もよかった。そこで上の者の尻のところに下の者の顔があったわけである。

(7) 「遣手婆」とは直接にどの劇をさすのか不明であるが、たとえば『ヒッポリュトス』中のパイドラの乳母のごときはこれに相当するであろう。アリストパネスはその『女だけの祭』一一七二行以下でエウリピデス自身に遣手婆の役を演じさせている。

(8) 「神殿で子を生む女」とは、失われたエウリピデスの劇中のアウゲを指す。彼女はヘラクレスに犯され、自分が神官の職にあったアテナの神殿内に子をかくした。

(9) エウリピデスの失われた劇『アイオロス』のなかのカナケをさす。彼女は兄弟のマカレウスと交わり、子供を生んだ。

(10) 「生は生にあらず」エウリピデスはその失われた劇『ポリュイドス』のなかで、「誰か知らん、冥府においては、生は死にして、死は生なるを」また、『プリクソス』において「誰か知らん、死と呼ばるるは生にして、生は死なるを」と劇中の女に言わせている。しかしかかる断片からは、これを口にした女性がなんぴとであるか不明。

(11) 七月に行なわれたアテナイ最大の祭の一つ。このとき行なわれた競技の中に松明競走があり、ケラメイコスより出てトリアス門を経てアクロポリスにいたるコースを走った。

(12) ケラメイコス門、すなわちディピュロン門の住民はこの門に集まって、いちばん遅れた走者に平手打ちをくらわしたと古註は伝えている。

三四二 (1) 前者はアイスキュロス、後者はエウリピデスを指す。

(2) これはアテナイ市民が兵役の義務に服し、すべて実戦の経験があることを指す。

(3) 一般にはアイスキュロスの最大傑作たる三部作『オレステイア』(前四五八年)を意味するが、ここではエウリピデスはもっと簡単に「オレステスの話」というほどの意味に用いているので、したがって、オレステスの登場しない『アガメムノン』はこのなかに加えられていない。

(4) これは伝存の『オレステイア』の写本にはない句であるが、『供養する女たち』冒頭の句であることは疑いなく、現在のこの劇の刊本にはすべてこの三行が最初に加えられている。

(5) これは悲劇の対話の部分によく用いられる、短長の音節が二つずつで一単位となり、これが一行に三度重ねられた詩のミーターを言う。前出の三行はこの格で書かれている。

三四三 (1) ここでエウリピデスはアイスキュロスの言葉を曲解して、「父神の大権」というのを、アイスキュロスは「加護の神」としての意味で言っているのを、「地下の神」としてのヘルメスと解し、ヘルメスを地下の大神、すなわち地獄の王プルトンの子にアイスキュロスがなしたぞと言うのである。

(2) 死人を葬るときに最後の別れに三度呼ぶのがギリシアの習慣であった。

(3) この行と一一八七行とはエウリピデスの失われた劇『アンティゴネ』の最初の二行である。

(4) オイディプスはテーバイ王ライオスとその妃イオカステの子。ソポクレ

ス『オイディプス王』参照。

(5) 不幸な結末に終った例のアルギヌサイ海戦の将軍の一人。もし盲にならなかったら、オイディプスは海戦に参加して勝利を得たにもかかわらず帰国後あらぬ罪に問われて死刑にされたろうが、幸い盲になっていてよかった、というのである。

三四(1) 原語の kōsarion, lēkythion, thylakion はいずれも同数の同じ長さの音節を有し、イアムボスの格の詩にあてはまり、しかも意味も通じ文法的構造にも支障なしだと言うのである。そこでエウリピデスはその得意のプロローグを次々と立てつづけに六つも誦するが、すべて「油壺をなくしたとさ」という滑稽な一句をつけ加えられて、せっかくの詩句を台なしにされてしまう。これは彼のプロローグがじつにくだらぬ、吹けば飛ぶように軽々しい調子であると罵ったもの。

(2) エウリピデスの失われた劇『アルケラオス』の冒頭の句であると言われているが、アレクサンドレイアの大文献学者アリスタルコスは、彼の時代に出版せられているこの劇のプロローグにはこの句はないと言っている。おそらく二種の異なるプロローグがこの劇にあったのであろう。かかることはエウリピデスの悲劇には珍しいことではなかった。なおアイギュプトスはアルゴス王ダナオスの兄弟で、前者は五十人の息子、後者は五十人の娘をもっていた。息子たちは娘を得んとしてエジプトよりアルゴスに来り、ダナオスに結婚を強いる。ダナオスは娘たちに結婚の夜に夫を刺し殺すことを命ずる。そしてヒュペルムネストラ以外の娘はこの命令を遂行した。

(3) 松露をつけ、蔦の葉をからませた酒神の杖。

(4) エウリピデスの失われた劇『ヒュプシピュレ』よりの引用。最後の一行は「デルポイの乙女らとともに」で結ばれていた。

(5) アガメムノンがクリュタイメストラから死の刃の一撃、二撃をうけたときに悲劇のなかで叫ぶ言葉である。

(6) エウリピデスの失われた劇『ステネボイア』より。第三行目の句の後半は「豊かなる耕地をもてり」である。

(7) フェニキアのテュロス王アゲノルの子。彼は妹エウロペの行方を探すべく国を立ち出で、多くの漂泊の後、テーバイの伝説的創立者となった。

(8) この二行はエウリピデスの失われた劇『プリクソス』の最初の句、第二行目の結びは、「テーバイの地に来たりぬ」である。

(9) ギリシア神話中の英雄。タンタロスの子で、トロイア攻撃の総帥アガメムノンの祖父。彼はピサの王オイノマオスの娘ヒッポダメイアを妻とすべく、この地に赴き、結婚の条件たるオイノマオス王との戦車競争に勝って彼女を妃とした。

(10) この二行はエウリピデスの現存の劇『タウリスのイピゲネイア』の冒頭よりの引用。第二行は「オイノマオスの娘を娶(めと)りぬ」で結ばれている。

(11) エウリピデスの失われた劇『メレアグロス』よりの引用。古註によればこれは冒頭の句ではないと言うが、おそらくアリストパネス時代の原文には冒頭にあったもので、後にこの前に詩句が加えられたものであろう。オイネウスはカリュドン王でメレアグロスの父である。

三五(1) 『賢女メラニッペ』の冒頭の句であると伝えられているが、プルタルコスによれば、この劇は元来は「ゼウス、ゼウスとは何者か、話の外には知らぬぞ」とあったが、あまりの不敬瀆神であるとの非難をうけたために、後にかく改められたものであるという。この句の続きは「ヘレンを儲けぬ」となっているので、この後には今度こそ「油壺をばなくしたとさ」はくっつけられない。なおこの句はエウリピデスの他の失われた劇『ペイリトゥス』のなかにも見出されるということであるが、この場合には冒頭の句ではない。

(2) ギリシアにおいては詩人は単に詩句を創るのみではなく、同時に作曲家を兼ねていた。詩はすべて楽器の伴奏で歌われたからである。それでディオニュソスが一二四八行で言っているのは歌の調べのほうの話である。エウリピデスはこれに対して、アイスキュロスの歌のメロディーはすべてホメロス式の長短々格(ダクテュロス)(daktylos)すなわち—◡◡を基礎とした六脚一行のヘクサメトロンとなり、単調きわまりない。それで「おれはアイスキュロスの歌をすべて切り刻んでたった一つの調子」すなわち長短々格六脚となるのを見せてやろうというのである。

(3) ギリシアで用いた計算用の小石のこと。

(4) 古註によればアイスキュロスの『ミュルミドン』よりの引用。この場合の原文の格律は◡—◡◡—◡◡—◡◡—◡◡——となり、ダクテュロスであり、これがすべてくり返されていた。「そうじゃ、あの打撃を、しかも助太刀には参られぬか」を引用の詩句の後にいちいち付したのは、アイスキュ

ロスの歌の調子がすべてこの一行の調子と同じであるということを示すためである。したがってここでは本文の格律を知らねば、ほとんど無意味に見える。

(5) アイスキュロスの失われた劇『霊魂召還』よりの引用と古註にあり、また格律も前に同じ。次に一二六五行と同じ詩行がくり返されているのは格律の単調さを示すためにすぎない。

(6)「あの打撃を」という句をもじって、これと同じ格律の詩句が引用されるたびに、「一本入った、二本入った」とディオニュソスは計算している。

(7) アイスキュロスの失われた劇『テレポス』または『イピゲネイア』よりの引用と伝えられている。

(8) アイスキュロスの失われた劇『女宮守』よりの引用。「蜜蜂の乙女」とはアルテミス女神の女の神官の名称であって、アルテミス自身もまた「蜜蜂」なる称呼を所有していた。

(9) アイスキュロスの『アガメムノン』一〇四行よりの引用。

(10) これまでは笛の伴奏で行なう朗唱の部分の検討であったが、今度はキタラ(琴)を伴奏とする本式の歌を取り上げようというのである。

(11) アイスキュロスの『アガメムノン』一〇八行と九行。

(12) これは竪琴の伴奏の一種を口三味線式に入れたもので、ちょうどトテツンシャンとわが国で言えば、一定の音と弾き方を示すのと同じである。

(13) アイスキュロスの失われたサテュロス劇『スフィンクス』よりの引用。このサテュロス劇は『ライオス』、『オイディプス』、『テーバイに向かう七将』なるオイディプス伝説に題材を取った三部作に附加せられたもの。

(14)『アガメムノン』の一一一行と一一二行。

(15) 出所不明。

三四六(1) アイスキュロスの失われた劇『トラキアの女たち』よりの引用。

(2) ペルシア戦争の古戦場たるアッティカの北端のマラトンには海岸に沿って湿地帯があり、そこには縄にするによい芦が密生していた。そこでディオニュソスはマラトンの野で戦った古強者たるアイスキュロスに、「お前のこの歌はマラトンの戦場で拾ってきたのか」と暗に彼を貶めたのである。またギリシアにはいろいろな職人や労働者にそれぞれその職とする技に応じた鼻唄があり、したがってトプラットトラットは縄ない職人の節かというわけである。

(3)「エロ歌」はロジャースの推測による。このところには原文に誤写があって、種々の読み方が提唱せられているが、ロジャースのがいちばん適当と思われる。

(4) スコリオンの有名な作者。「スコリオン」というのは酒席で歌われた古い型の歌で、前の句の後付け式に歌を作っていった。

(5)「カリアの笛歌」は物悲しい調子の歌であったらしい。

(6) 陶土製のカスタネット式の楽器を奏する遊び女。

(7)「レスボス女」とは、一つにはこの島に発達したテルパンドロス、第十番目のムーサと呼ばれたサッポー、アルカイオス等の古来の抒情詩の伝統と、一つには同性愛のレスビズムの女との両方にかけた洒落である。

(8) 以下の歌はもちろんエウリピデスの新式な歌の調子を真似したものであって、その節まわしが主として問題となっているために、このように切れ切れの句を集めてあるのである。われわれは不幸にしてギリシアの音楽をよく知らないので、これがいかなる点で新式なのか解りかねる。さらに歌詞は言うまでもなくエウリピデスの悲劇からのもじりであるに相違ないが、これもまた彼の作品の大部分が失われている現在においては、おのおのをその源に溯ることは困難である。

(9)「しゃべる」 この一節はエウリピデスの現存の劇『タウリスのイピゲネイア』一〇八九行以下のもじりであるが、「しゃべる」という言葉のみは、悲劇には使用しない俗語がわざと挿入されている。

(10)「巻ああく」は音楽上の音の引きのばしであって、かかる方法はすでに古くより抒情詩に用いられ、サッポー等にも見うけられるが、エウリピデスにはとくに多かったらしく、現に『エレクトラ』四三七行にもこれと同じやり口が用いられている。

(11) 古註によればエウリピデスの失われた劇『メレアグロス』よりの引用である。

(12) エウリピデスの現存の劇『エレクトラ』四三五・六行の引用。

(13) この行はエウリピデスの失われた劇『ヒュプシピュレ』よりの引用。その前の二行の出所は不明。

(14)「この脚」とは詩脚を意味する。アイスキュロスは、エウリピデスがグ

リュコニック・スタンザの要求する詩脚の法則を破って異なる脚を用いているので、憤慨のあまり「この脚を見たか」と叫ぶと、ディオニュソスが洒落て「見たよ」と答える。そこでアイスキュロスは洒落をうまくうけて、今度はほんとうの自分の足を出して、「これは？」というと、ディオニュソスもこれに応じて「見えた」というのである。

(15) キュレネは有名な遊女の名であって、その十二手とは、わが国の四十八手というに等しい。

(16) 「ソロ歌」とはこれに一種のダンスを伴ったものであって、歌い手は歌とともに身振りによって歌詞を髣髴させつつ踊る後世パントミモスと呼ばれるに至ったものに近い形式の踊りである。以下の歌はすべてエウリピデスの本物のもじりであることは言うまでもない。

(17) これにはエウリピデスの現存の劇『ヘカベ』六八行以下参照。

三四七 (1) 海神ポセイドンを指す。

(2) ここで突然に内容が変って、はなはだ滑稽な賤しい女の嘆きがトロイアの王妃ヘカベのそれに代っている。

(3) 同輩の女の名。

(4) 同じく同輩の奴隷の女の名。おそらく同じ織女であろう。これを山のニムフたちと同列に扱っているところに滑稽がある。

(5) この種の同語重複はエウリピデスの一つの癖である。

(6) ここでまたふたたび元の悲劇の荘重な文体に帰る。古註によればこれ以下はエウリピデスの失われた劇『クレタ人』よりの引用であると。

(7) アテナイの巡査がつねに弓をもっていたので、たちまちにして外国の夷狄より成る警察官という滑稽な連想がかもし出されるのである。

(8) 狩猟の女神としてクレタ島のアルテミスの別名。

(9) ヘカテはヘシオドスによればゼウスの娘ではなく、巨人（ティタン）のペルセスとアステリアの子とある。この神は夜の女神であるために、ここでは月の女神と同一視され、したがってゼウスの娘たるアルテミスとも同じと考えられて、「ゼウスの御子」と呼ばれているのであろう。女神の姿は手に松明をふりかざした、恐ろしいものと想像せられていた。

三四八 (1) エウリピデスの現存の劇『メデイア』の第一行。なおアルゴとはイアソンがもろもろの英雄とともに金毛の羊の皮を求めてコルキスに赴いた遠征の際の船の名である。ここで彼はコルキス王の娘メデイアと恋し、金毛の羊の皮と彼女とを得て帰国する。しかるに後、彼はメデイアを捨てて他の女に走ったために、ここに引用せられたごとき嘆きが発せられるに至ったのである。

(2) アイスキュロスの失われた劇『ピロクテテス』よりの引用。スペルケイオスはテッサリアの南の境を流れている河である。

(3) エウリピデスの失われた劇『アンティゴネ』よりの引用。

(4) アイスキュロスの失われた劇『ニオベ』よりの引用。

(5) エウリピデスの失われた劇『テレポス』よりの引用。ここでエウリピデスは舞台上に英雄たちが骰子を投じて遊ぶところを出して、大いに非難を蒙り、後にこの場面を改めざるを得なくなった。そこでディオニュソスが意地悪くこの行を引き、同時に骰子のごとき軽いものを挙げて皮肉りかつ揶揄したのである。

(6) エウリピデスの失われた劇『メレアグロス』よりの引用。

(7) アイスキュロスの失われた劇『グラウコス』よりの引用。

(8) エジプト人はとくに重い荷を担ぐ能力ありと考えられていた。

(9) 「本」とは、エウリピデスが古代において有名な蔵書家であったために、こう言ったのである。

(10) すなわちエウリピデスは賢明で、新しい学問があるという意味である。この「賢明」というのは天性のみならず、ソフィスト的学問に育てられたという意味を含む。

(11) 劇詩人の忠告によってアテナイ市が現在の苦境より救われて、悲劇や喜劇のごときコロスを要求する祭、すなわちディオニュソスの祭が行なわれるためにと言う意味である。なお詩人はギリシアでは人々の師となるべきものと考えられていた。

(12) 前四五〇年より少し前に生まれ、前四〇四年にプリュギアにおいて暗殺され、ペロポネソス戦争中ペリクレスなき後のアテナイを支配した有力な政治家。彼は美貌で富裕で家柄がよく、気まぐれで、女に好かれた。この劇上演の際には、彼は亡命してケルソネソスにいた。アリストパネスのこの質問は一種の探りであって、観衆はかかる問いに対してはおのおの自己の意見を自然と何らかの形において表明したであろう。「市は難産に苦しんでいる」というのは、アルキビアデスをいかに扱うべきかに関して、よい意見を

生み出すことが容易でなかったことを示している。

(13) これは悲劇詩人、キオスの人イオンの『哨兵』よりの引用。古註の伝えるところでは、元の句はヘレネの言葉で、彼女はオデュッセウスに「黙し、憎み、かつ欲している」と言うのである。

(14) この行の前（一四三一行）に「獅子の子を国内に飼うべからず」というほとんど同じ一行がある。同じ意味のものが二行つづくことはあり得ないから、どちらかが誤りであって、ここで一四三一行を除去した。獅子の子を育てるという譬喩はアイスキュロスの『アガメムノン』七一八行以下より得たものと思われる。

三三九 (1) クレオクリトスは大男で醜い、駝鳥に似ていると言われたアテナイ人。キネシアスはひょろ長いやせた男で、あまり細いので折れぬように支柱をつけたと悪口せられている。

(2) 括弧のなかの行はこのままでは前後関係がうまくあわず、一四三七—一四四一、一四五一—一四五三の八行は、一四四二—一四五〇の九行とはあまりに内容的に異なりすぎ、写本においてもこの二つはしばしばどちらかが本文以外の余白に挿入せられている。したがってこの両方は、二つの校本に属し、第二の改良本のほうで改められたのを、前の校本の分をも写本の余白に書き入れたために、かかる不揃いができあがったものであろう。また一四三七—一四四一行は古代においてすでに、アレクサンドレイアのアリスタルコス（前二〇〇年ごろの人）やアポロニオス（後一〇年ごろ）によって本文より除去せられている。

(3) エウリピデスの失われた劇『パラメデス』よりの引用。パラメデスはトロイアにおけるギリシア方の英雄で、その知をもってオデュッセウスと並び称せられ、骰子そのほか多くのものの発明者と伝えられている。

(4) これは諺であって、どっちにも満足しない人間を意味する。

(5) これはペリクレスが、ペロポネソス戦争の始めに、アテナイ市民に与えた忠告と同じである（『ツキュディデス』一巻一四〇—四）。彼はアテナイの強みはその海軍にあり、スパルタの軍が陸路自国を犯そうともけっして心を落とさず、艦隊によって海を支配し、敵を下すべしと言った。これを面白く述べたもの。

(6) すなわち陪審員どもがアテナイの国庫収入をすべて食いつくしているということ。

(7) 明らかに悲劇の語調であるが、出所は不明。

(8) エウリピデスの『ヒッポリュトス』中の有名な文句。三二一ページ註(13)参照。

(9) エウリピデスの失われた劇『アイオロス』よりのもじり。

(10) エウリピデスの失われた劇『ポリュイドス』の「生は死、死は生なるやを誰か知らん。死は生と冥府にては考えられたり」、また『プリクソス』の「死と呼ばれたるはすなわち生、生は死なるか否やを誰か知らん」のもじりである。三四一ページ註(10)参照。

三四〇 (1) エウリピデスはソクラテスの弟子ではなかったが、彼と同類の、くだらぬおしゃべりにときを過ごすソフィストの一人と考えられていた。

(2) これは困難な事態の生じたときに（とくに財政方面で）、それに対処する方法を勧告する役目を有する専門家よりなる委員会のごときものであったらしい。ミュルメクス、ニコマコスに関しては、何人か不明。アルケノモスについても同じ。ただしこのニコマコスは『リュシアス』三〇中に見出される役人と同人であろうか。

(3) アテナイの将軍として有名。彼はプロタゴラスの弟子であった。のちアイゴスポタモイの海戦でアテナイ海軍を敵将リュサンドロスに売ったと言われている。なおここでプルトンがアイスキュロスに託する包みには、自殺道具（刀とか縄とかの）が入っているのである。

(4) 「自分の土地で」というのは、クレオポンの祖国（？）と言われていたトラキアを意味する。六七八行以下を参照。

女の議会

登場人物

プラクサゴラ
第一の女
第二の女　プラクサゴラ、ブレピュロスの隣人。
女どものコロス
プラクサゴラの夫ブレピュロス
第二の女の夫　プラクサゴラ、ブレピュロスの隣人。（ト書きには単に隣の男と誌す）
クレメス　プラクサゴラ、ブレピュロスの隣人。
触れ役
第一の老婆
第二の老婆
第三の老婆
若い女　若者
プラクサゴラの下女
（他に端役として数名の踊り子）

〔舞台はアテナイ市内の往来。背景にブレピュロス、クレメスと第二の女の家が並んでおり、中央のブレピュロスの家の戸口にはランプが懸っている。午前三時ごろ。ブレピュロスの妻プラクサゴラ男装して戸口から現われる〕

プラクサゴラ　〔いささか悲劇の口調を帯びて〕おお轆轤でできたランプの輝く瞳が目につくとこに好い具合に懸ってること。お前の素姓と運命とを一つ明かして進ぜようか。陶師の手の力で轆轤に廻されて生まれたが火嘴は日輪の栄光を欺く。さあ、その焰で約束の合図(1)をしておくれ。お前だけには打ち明けるのが当然(2)だろう。閨のなかでもアプロディテのさまざまの仕ぐさ(3)をあたしたちが試みるすぐそばにお前は立ってるのだし、くねらせた両つの体を打ち眺めるお前の眼を家のなかから逐い出す者もないからには。お前ばかりは両脚の奥の禁断の深み(4)を照らし、そこに茂った毛を焦がしてしまう。穀物や葡萄酒でいっぱいの物置きを女どもがこっそりと開けるときにも、(5)お前はついて離れない。いつも仲間になりながら他人には決してしゃべらない。そのお礼に今日はあたしの親しい女たちの間でスキラの祭の折(6)に決めたことを教えてあげよう。だけど、来るはずのひとがまだ一人も見えないわ。もうそろそろ夜明けだというのに。それに民会はほんとうにやがて始まるでしょう。あたしたち女どもは覚えておいでなら、ピュロマコス(7)がいつか言った席を取って、こっそりと坐ってなくちゃ。いったいどうしたっていうんだろう。申し合わせた付け髯の工夫がまだできないのかしら。それとも殿方の上衣をそっと盗むってのは、女にとっちゃ楽な仕事でないのかしら。でも灯が一つやって来る。さあ、ちょっと引っ込まなくっちゃ。ひょっと誰か男でも来かかったらとんでもない。

第一の女　〔ランプを片手に登場〕出発の時刻だわ。あたしたちの来る途中で夜廻りがちょうど二度目の(8)——ときをつくったもの。

プラクサゴラ 〔隠れた場所から現われて〕 あたしったらあんたたちを待って夜っぴて起きてたのよ。さあこのお隣さんを呼び出さなくちゃ、戸口をそっと叩いてみよう。あの女の旦那に気取られちゃ大変だものね。

第二の女 〔戸口から出ながら〕 靴を履いてると、あんたの指のひっかく音が聞こえたわ。眠っちゃいなかったんだもの。ねえあんた、うちの伴れ合いと来たらサラミス者[1]でね、一晩中蒲団のなかであたしをじっとさせないのさ。だもんで、あれの上衣も今やっと手に入れたってわけよ。

第一の女 ごらんなさい。クレイナレテもソストラテもピライネテもやって来たじゃないの。

〔町方の女どものセミ・コロス右手よりオルケストラに登場〕

町方の女のセミ・コロス 急いだ、急いだ。グリュケが、誰でもびりになった者はお酒五升に豌豆五合[2]の罰金と約束したはずよ。

第一の女 ごらんなさい。スミキュティオンのおかみさんのメリスティケが、男の靴を穿いて急いで来る。あの女だけは楽々と旦那から抜け出したらしい。

第二の女 飲み屋のおかみさんのゲウシストラテが右手に松明を持って来るのが見えるじゃないの。

プラクサゴラ そいからごらん。ピロドレトスとカイレタデスのおかみさんをはじめ、この市で見どころのある女たちがとても大勢やって来ますわ。

町方の女のセミ・コロス[3] ねえ、あんた。抜け出すのも全く一苦労でしたよ。うちの主人と来た日にゃ、夜っぴて咳込みましてね。ゆうべいしこ[4]を腹いっぱい詰め込んだおかげで。

プラクサゴラ さあ腰を据えなさい。みんな集まったようだから、あたしから一つ質問しましょう。スキラの祭での取り決めは実行して[5]？

第一の女 あたしはやりましたよ。第一にあたしの腋の下は約束通りに密林も顔負けってわけだし、主人が広場[6]に行くときにはいつも全身に膏を塗ったうえ、一日中日向に立って色揚げしたのよ。

第二の女 あたしもご同様よ。剃刀なんぞははなから家の外に投げ出しちゃって、体中をもじゃもじゃにして女みたいなとこをなくそうと心がけたんですわ。

プラクサゴラ だけど髯はあって？ あのときの申し合せでは、集まるときみんな付けて来るはずでしたね。

第一の女 ヘカテ[7]にかけて、あたしのはこんなにみごとなのよ。

第二の女 あたしのだって、エピクラテス[8]のよりはるかに立派よ。

プラクサゴラ 〔セミ・コロスの女どもに向かい〕 あんたたちは何て言ってるの？

第一の女 持ってるってよ。うなずいてるわ。

プラクサゴラ じゃ、他は万事実行済みと認めます。ラコニア靴[9]も穿いてるし、ステッキも男の上衣も言っといた通りだし。

第一の女 あたしはごらんの通り、ステッキをうちのラミアス[10]が眠ってる間にこっそり持ち出したのよ。

プラクサゴラ じゃこれは、持ち上げるとおならの出るっていう杖[11]ね。

第一の女 救いの神ゼウスにかけて、あの人ったら八方睨み[12]の（アルゴスの）毛皮にくるまってお仕置き係り[13]を見張るのに誰よりもはまり役でしょ。

プラクサゴラ さあ、ぐずぐずせずに、空の星の消えぬ間にあとのことに取りかかりましょう。あたしたちが身ごしらえをしてこれから出かける民会は、夜明けといっしょに始まりますよ。

第一の女 ごもっとも。そしてあんたは演壇の下で当番の議員方[14]と向かい合って席を取らなきゃ。

第二の女 〔羊毛の塊を示しつつ〕 ねえ、こんなものを持って来たのよ。民会がいっぱいになる間にほぐしてやろうと思って。

プラクサゴラ いっぱいになる間にって。お馬鹿さんね。

第二の女 アルテミスにかけて、そのつもりよ。ほぐしながらでも聞こえる道理は同じでしょ。うちのやんちゃたちが裸なんですもの。

プラクサゴラ　あんたがほぐすんだって！　着席した男の人たちには、肌をちょっと覗かせてもいけないのに。

〔調子を変えて〕ねえ、素敵じゃないこと。民衆がぎっしり詰まったとき、あたしたちの誰かが座席にまたがりながら着物をまくって、ポルミシオス[1]をお目にかけたら。

〔元の調子〕だけど、ひとより先に坐って男の上衣にくるまってれば、誰にも気づかれる心配はない。そしてあそこでは付け髯を風になびかせてるんだから、誰が見たってわれわれを男でないとは思うまい。アギュルリオス[2]にしたってこっそりとプロノモス[3]の髯を付けてるけれど、この先生もとを正せば女だった。今じゃどうして、[4]ひとかどの政治家になりすましてる。あの東雲にかけて全くこんなこともあるんだから、あたしたちも大それた冒険に乗り出したのです。公事の枢機にあずかってお国のためになりたいばかりに。今じゃ全く、にっちもさっちもいかなく[5]なってるから。（一〇九）

第一の女　だけど女が集まったところで殿方とは違うし、人前で演説なんかできるかしら？

プラクサゴラ　そりゃみごとにやってのけますとも。下世話にも言うでしょう。若い者のなかでもあの一儀[6]に熱心な奴ほど、おしゃべりにかけては達者だって。あたしどもには生まれつきそれが具ってるってわけよ。

第一の女　そんなもんかしら。でも経験のないのが心配ね。

プラクサゴラ　ここにわざわざ集まったのは、あそこで言うことをおさらえするためじゃなかった？　さあ、急いで腮に髯を付けなさい。

〔セミ・コロスに向かって〕ほかのおしゃべりを練習したひとたちも。

第一の女　ねえ、あんた。女でおしゃべりのできないひとってあるかしら。（一二〇）

プラクサゴラ　さあ髯を付けて早く男になんなさい。あたしもこの花冠[7]を置いてあんたたちとご同様髯を付けるわ。改まって話をするときにはね。

第二の女　ほら！　プラクサゴラさんたら、まあちょっと見てごらん。何ておかしなことになったんだろう。

プラクサゴラ　何がおかしいの？

第二の女　まるで火に焙った烏賊に髯をつけた[8]みたいじゃないの。

プラクサゴラ　〔これより民会開始のつもりで〕[10]お祓いの役は鼬を持[9]って廻りなさい。みんな前[11]に進んでアリプラデス、おしゃべりはやめなさい。みんな中にはいって着席。演説希望者は？　（一三〇）

第一の女　わたし。

プラクサゴラ　神慮めでたくこの花冠をつけなさい。

第一の女　〔花冠をつけて〕ほら、このとおり。

プラクサゴラ　しゃべるんですよ。

第一の女　じゃ、飲む前[12]にしゃべるってわけ？

プラクサゴラ　なるほど「飲むって」ね。

第一の女　それじゃ、あんた、花冠をつけたのはいったい何のためなの。

プラクサゴラ　おひっ込みなさい。あんたじゃ、晴れの場所[13]でもあたしたちにこんな恥かかすくらいが落ちでしょう。

第一の女　何ですって。民会でも、みんな飲むんじゃなくて？

プラクサゴラ　まあ、「飲む」なんて！

第一の女　アルテミスにかけて、それも生のままでね。あの人たちのやってる評議ときたら、ちょっと考えのある人にとっちゃ酔っぱらいの[14]狂気沙汰ってとこでしょう。おまけにゼウスにかけて御神酒もあげるし。さもなきゃお酒を抜きにしたら何のためにあんな仰山なご祈禱をやるんだろう。そして、飲んだくれみたいに怒鳴り合ったあげく、羽目をはずした者は巡査[15]につまみ出される。（一四三）

プラクサゴラ　あんたは退いて坐んなさい。いっこう役にも立たない。

第一の女　ほんとうに髯なんぞつけない方がましだった。喉が渇いて、まるで焦げつきそうだわ。

プラクサゴラ　誰か他に演説希望者はなくて？

第二の女　わたし。

プラクサゴラ　さあ花冠をつけて。仕事をはかどらせなくちゃ。男みたいに上手に話すんですよ。体をステッキに支えながら。（一五〇）
第二の女　わたしは、どなたか他の経験のある方が素晴らしい演説をなさって、自分はじっと拝聴していたかった。でもこうなった以上、わたし一個の意見として、飲み屋で酒槽に水を容れる[1]というのは捨ておけません。二柱の女神[2]にかけて、どうも飲み込めない話であります。
プラクサゴラ　「二柱の女神」だって？　頓馬な女。しっかりしなさいよ。
第二の女　何ですって？　飲まして頂戴って言ったわけじゃなし。
プラクサゴラ　ごもっとも。だけど男のはずなのに二柱の神に誓ったりして。だけど、その他はなかなか上手にしゃべったわね。
第二の女　おお、アポロンにかけて——
プラクサゴラ　〔第二の女の花冠を取りながら〕ちょっとお待ち。私は（一五九）
ここんとこが正確にできない間[3]は、民会割り込みの仕事を一歩も進めはしませんよ。
第二の女　花冠を返して。もういちどおしゃべりしたいわ。もう立派に訓練できたつもりよ。ご着席の淑女がた。わたくしは思いますのに——
プラクサゴラ　何て間抜けなんだろう。男のことを淑女だって言うの？
第二の女　〔観客席を指さしつつ〕あのエピゴノスの故[4]ですよ。あの人の方を向いてたもんで、女相手に話してる気になっちゃった。（一六八）
プラクサゴラ　あんたも引きさがってそれから坐んなさい。わたし自身でこの花冠をつけて、あんたたちのために、一席弁じましょう。まず神々に対し奉りわれわれの計画成就をお祈りいたします。
〔演説口調に移りつつ〕さて私がこの風土の恩恵に浴する点は、諸君と全くひとしいのであります。しかも私は、今日の国政万端について心を痛め、不満を覚ゆるものであります。と申しますのは、国家を動かしているのはつねに邪なる指導者であります。そして誰か一日だけ有益な人物であったとしても、爾余の十日は悪事を働く。別の男に委せてみる。すると彼はいっそう大きな過ちを仕出かす。心頑なる者に訓うるはいかに難いことか。真に愛せんと欲する者をば遠ざけ、愛せざらんと欲する者に絶えず平身低頭する諸君よ。昔は民会の制のごとき、全くなかった時代[5]もあったのである。そしてわれわれは、かのアギュルリオスを目して邪なりと断じたのであった。今や民会の制は確立し、日当を受くる者はこの制度を絶讃し、これに反して、受けざる者[6]は民会で日当を求むる者を目して死罪に値する、となしているのである。
第一の女　アプロディテにかけて、こりゃまたみごとにやってのけたわね。（一八九）
プラクサゴラ　お馬鹿さん。アプロディテに誓ったりして[7]。民会でこんなこと言ったら、それこそ大笑いになるでしょうよ。
第一の女　あそこじゃそんなこと言うもんですか。
プラクサゴラ　じゃ今からそう言う癖はやめることね。
〔演説口調にかえって〕さてこの同盟関係[8]は、さきごろ論ぜられたところでは、もし成立せざるときは国家滅亡のほかなしと言われた。しかるにいちど成立するや、人々はこれに不満を覚え、これを説得せる弁士[9]はたちまち遁走してしまった。艦隊を進水せしむ[10]べきである。貧民[11]はこれに賛成であるが、富裕者ならびに農民はこれに反対である。諸君は従来コリントス人たちを嫌った[12]し、彼らも諸君に対し同様だった。ただ今、彼らは好意を示しているゆえ、諸君も好意を示すべきだ。アルゲイオス[13]は見識を欠くが、ヒエロニュモス[14]は賢明である。救済の端緒は見えた。しかし、トラシュブロスその人がまだ呼び戻されずに遠ざけられている。（二〇三）

シモス(1)のごとくに動揺する。しかしながら、もし諸君が私の考えに従うならば、まだ救済の途が残されている。男子はすべからく女子に国政を委ぬべきだと、私は主張する。家庭内部に在っても、われわれは婦人に家政を司どらしめ、また家計を委ねているではないか。

第一の女　素敵、素敵。ゼウスにかけて、素敵だ。さあ名人。つづけた、つづけた。

プラクサゴラ　余は婦人が、男子よりもいろいろの遣り口において優っている所以を説明したいと思う。第一に、羊毛を染めるにも、女どもはみな昔からの習慣で熱湯に浸し、新奇の工夫をする者は見いだすこと困難である。そしてアテナイ人の国家は、もしそれに何らかの長所があるとしたら、別に新奇な工夫さえせねば救われるのではないか？　女どもは腰をおろして大麦を炒ること、昔のままである。物を頭にのせて運ぶ(2)のも、昔のままである。テスモポリア祭(3)をとり行なうのも、昔のままである。蜜入り菓子を焼くのも、昔のままである。亭主どもを尻に敷くのも、昔のままである。家の内に間男を連れ込むのも、昔のままである。独りで美味いものの買い食いをするのも、昔のままである。好んで生の葡萄酒を呷るのも、昔のままである。かの一儀を行なって歓ぶのも、昔のままである。

　さて諸君、われわれはかかる婦人連に国政を手渡して、とやかく批評したり、また彼女たちが今後何を計画するかを詮議するのは、やめようではないか。ひたすら鷹揚な態度をもって、彼女らに政治をさせてみたい。けだし、次の点は一考をめぐらしただけで信頼できる。すなわち第一に、生みの母たる彼女らは、兵士の安寧についてもっとも心をいたすであろう。次に兵士の食糧にしても、生みの母以上にこれを送る者があろうか？　金策にかけてもっとも巧みなのは女であり、政務をとっても決して欺かれることはなかろう。彼女ら自身人を欺くのはお手の内だから。その他の点はもう論じません。とにかく私の提案に従いさえすれば、諸君は必ずや幸福な生活を送ることとなろう。

第一の女　結構！　まあ、プラクサゴラさんたら。実にお上手ね。ねえ、お転婆さん。いったいどこでこんなうまいこと習ったの？

プラクサゴラ　あの避難のときに(4)、主人といっしょにプニュックス(5)に落ちついたの。そして演説家の口調を聴き覚えたってわけよ。

第一の女　なるほど。ねえ、あんたったら、それで口も達者ならお頭も聡明なのね。だからあたしたち女どもは、あんたが計画を実行なさるなら、たちどころに将軍(6)に選ぶわ。だけど、ひょっとして運悪くケパロス(7)があんたを民会でこき下ろしたら、何てってあいつに答えるつもり？

プラクサゴラ　気違いだと言ってやるわ。

第一の女　だけど、そんなことはみんな承知の助よ。

プラクサゴラ　そのうえ鬱ぎ屋だと言ってやるわ。

第一の女　そのことも知ってるわ。

プラクサゴラ　茶碗作りはお下手だけど、政治のお手並みは見上げたもの、って言うわ。

第一の女　目爛れのネオクレイデス(8)があんたを野次ったら？

プラクサゴラ　あいつには「犬の尻でも覗け(9)」って言うでしょう。

第一の女　もしみんなしてあんたの邪魔だて(10)をしたら？

プラクサゴラ　調子を合わせてやるわ。衝かれることには慣れっこですもの。

第一の女　もう一つ考えとかなくっちゃ。もしお巡りさんがあんたをつまみ出そうとしたら、どうするつもり？

プラクサゴラ　肘鉄砲を食わしてやるわ。〔身振りで示しつつ〕こういった具合にね。胴中をつかまえられるようなへまはしませんよ。

セミ・コロス　つまみ出そうとしようものなら、われらが許せと命じましょう。

第一の女　そこんとこは立派に対策が立ったけど、まだ考え残したこ(11)とがある。いざとなったとき、どうしたら忘れないで手を挙げられるでしょう。ふだんは足を揚げる(12)のにばかり慣れてるんだから。

プラクサゴラ　むずかしい点ね。でもみんな片腕を肩から剝き出しにし

て手を挙げるんですよ。〔セミ・コロスに向かい〕さあ下衣を上にからげ上げ(1)、できるだけ早くラコニア靴の紐を締めなさい。ちょうどご亭主が民会その他に出かけるときにいつもするのを見慣れてるように。そいから、それがちゃんとできたら、髯をおつけなさい。髯をしっくりと取りつけたなら、かすめて来た男の上衣をひっかけて、つぎにはステッキを片手に出発としましょう。田舎者の風情を真似て、年寄りの節まわしを歌いながら。

第一の女　異議なし、〔プラクサゴラと第二の女を顧みて〕わたしども(2)はあの人たち(3)の先に立って進みましょう。他の女どもも、田舎からまっすぐにプニュックス(4)に来ると思うわ。

プラクサゴラ　さあ急いだり。朝早くプニュックスに現われない者は、鐚銭一つ貰えずにこそこそ帰ることになってるから。

町方の女のセミ・コロス　〔退場しつつ〕さあ殿方。われらの進むべきときが来た。うっかり忘れたりせずに、いつも「殿方」と呼ぶことだ。危険はちっとやそっとじゃない。闇に紛れてこのような大それたこと企てて、それこそいったん捕まったら。

殿方、いざ民会へとまいりましょう。
法務官ども(5)が夜の明けぬうちに
埃まみれで
にんにくの香をさせながら(6)
酸っぱい顔して出て来ぬ者にゃ(7)
三オボロスを渡さない(8)とておどかしなされた。
おお、カリティミデスに
スミキュトスにドゥラケス
急いで来るんだ。
めいめいしっかり気をつけて
どじを踏まずに
必要な意見を述べるんだ。
また出席票(9)を貰ったら
互いに近く席を取り
われら女の決議には
すべてにこぞって
手を挙げよう。
おやこれはしたり！　殿方とこそ
呼ぶべきだった。

在方の女のセミ・コロス(10)　〔男装して登場〕おいらはこの町方の野郎どもを
一つ追っ払ってくれよう。奴らときた日にゃ
先のころわざわざ出ても貰えるのは
たった一文だったときにゃ
花屋の店先にとぐろを巻いて
無駄話に花を咲かせおった。
今日日ときてはうるせい限りだ。
だがあの立派なミュロニデス(11)が
幅を利かしていたころにゃ
いったい誰が金貰うて
政治をする気になったろう。
そのころ出席した者は、めいめい
革嚢に酒を容れ、そのうえ
乾いた麵麭に
玉葱二つ、それに
三つのオリーヴまでもわざわざ持参つかまつった。
今あいつらが公けの
ことを手にかけ三文に
ありつこうとするその態は

漆喰運び[1]にそっくりだ。

〔コロスすべて退場。背景の戸口が開き、ブレピュロスが妻の上衣と履物で現われる〕

ブレピュロス　いったい何たることだ。うちの女房はどこへ失せたんだ。追っつけ夜も明けようってのに、あいついっかな見つからない。わしは寝床のなかでさっきから雪隠を催して、暗がりに靴と上衣を捜しとった。手探りに捜しあぐんどるとこへ、あの「糞たれ男」[2]がしきりと戸を叩く。そこでわしはこの通り家内の上っ張りを着用し、あれのペルシア靴[3]をつっかけたんだ。だが、どこへ行ったら人目につかずに用が足せるんだ。それとも夜中じゃどこでもお構いなしってわけかな？ ここで糞たれたとて、見る者はあるまいて。ああ、不仕合せなことだ、年取って女房を貰ったとは。いくら撲られたとて文句は言えないのじゃ。あれが出かけたのは、きっと腹に一物あってに違いない。だが、一つ用を足すとしようか。

〔別の戸口が開いて第二の女の夫が出て来る〕

隣の男　誰だい？ 隣のブレピュロスじゃないかね？ 確かにあの先生に間違いなしだ。〔彼に近づいて〕おい、お前さんのその黄色いのは、いったい何だね？ まさかキネシアス[4]が粗相したんじゃあるまいな。

ブレピュロス　いやどうして。いつも家内の着るさふらん染めの小袖を着用してお出ましというところさ。

隣の男　お前さんの上っ張りはどこへ行ったんだ。

ブレピュロス　皆目わからない。捜したんだが、蒲団の上にゃなかった。

隣の男　じゃ、令夫人にゃ捜させなかったのか？

ブレピュロス　仰せの通り。たまたまご不在ときた。わしの知らん間にこっそり家を抜け出しおった。そんなわけで、何かまた碌でないことをせんかと心配しとる。

隣の男　ポセイドンにかけて、こりゃ全くわしとご同様な目にあったわけだ。うちの女房も、わしのいつもの上衣を持ってどろんを決め込んだ。おまけに、靴まで浚ってったには弱った。全くどこにも靴が見つからないんだ。

ブレピュロス　ディオニュソスにかけて、わしも自分のラコニア靴がなかったが、あいにく雪隠を催してたんで、あいつの靴に両足をつっこんで飛び出した。真白い毛布に粗相しちゃならんと思ってな。

隣の男　ぜんたいどうしたってわけだろう。誰か仲間の女が朝飯に呼んだんじゃないかな？

ブレピュロス　おれの見当もそんなとこだ。わしの知っとる限りじゃ、ありゃべつだん悪い女じゃない。

隣の男　だが、お前さんの出してる代物は井戸縄[5]みたいじゃないか。ところで、もう民会にお出ましの時刻だ。もっとも一張羅の上衣を見つけたうえのことだが。

ブレピュロス　わしもな、用を足したらお伴しよう。目下のところ、野梨[6]のおかげで糞づまりの態たらくだ。

隣の男　トラシュブロスがスパルタ人に言ったって奴[7]じゃないか？

ブレピュロス　ディオニュソスにかけて、こりゃどうもえらく腹が張るわ。だがどうしたもんだろう。さしあたっての苦痛の他に、これからも食わにゃならんし、そしたら今後わが糞はいずこへ行く、だ。目下のところこいつがしっかりと戸口に錠をかけおった。どんな野郎か知らんが、この「野梨」の仁[8]が。誰か医者を呼んでくれんかな？ 医者は誰にするかな？ 衆道に耽る奴ら[9]のなかで、この術に得意なのは誰だろう。アミュノン[10]は心得とるかな？ だがおそらく知らんと言うだろう。誰かアンティステネス[11]を手練手管で呼んでくれ。こいつこそ、奴さんの溜息から推して[12]、雪隠を催した尻の穴の欲するところをご存じだ。おお、女神エイレイテュイア[13]さま。どうぞお助けください。出口を塞がれて破裂しそうです。さもなけりゃ喜劇の虎子[14]になっちまいます。

〔隣の男戸口のなかに退場。これまでにすでに夜は明けている。別の隣家の主クレメス民会より帰って来る〕

クレメス　この男(ひと)ったら何しとるんだ？　用を足してんのか？

ブレピュロス　わしかね？　もうすんだんで御神輿(おみこし)を上げるところだ。

クレメス　令夫人のお召しを着用しとるじゃないか？

ブレピュロス　暗いうちに家んなかでたまたまこれを見つけた次第だ。だがお主(ぬし)はいったいどこからやって来たんだ。

クレメス　民会からのご帰館だ。

ブレピュロス　すると、もう散会か？

クレメス　いかにも。明け方におしまいだ。そして、おおゼウスさま、赤土(1)で取り巻いた様子は、まことに滑稽だった。

ブレピュロス　ところで、例の三文は拝領に及んだか？　(三七九)

クレメス　さようにありたや、だが遅刻してね。恥ずかしながら〔空の財布を示しつつ〕お土産は、実のところこれだけさ。

ブレピュロス　そりゃまたどうしたわけだ。

クレメス　前代未聞の大勢の人間が、わんさとプニュックスに集まったんだ。ところで見渡すところ、どれもこれも靴屋(2)とでも言いたい奴ばかりさ。奇怪の極みだが、全民会が白一色に塗りつぶされたようだった。そんな次第で、日当を貰いそこねたのは、わしの他にも大勢あった。　(三八八)

ブレピュロス　じゃ今から駆けつけても駄目かな？

クレメス　いや、とても、とても。かけ値のないとこ、二番鶏の鳴いたころ行ったとて無駄だったろう。

ブレピュロス　ああ情けなや。「アンティロコスよ。今は亡き、かの三文よりも生けるわが身を歎きたまえ。わがことすでに畢(おわ)りぬ。(3)」ところで、そんな仰山な人数が時刻に間に合って集まったとは、いったいどうしたことだ。　(三九五)

クレメス　別でもない。当番の議員方(プリュタネイス)が国家救済につき意見を開陳さすことに決めたんだ。すると、さっそく目爛れのネオクレイデス(4)が、いちばん乗りに這い上がった。そこで民衆の野次ることったら、まるでお話にならない。「こいつが人前で敢えて大口たたくとは、そもそも何ごとだ。しかも問題は国家の救済だというのに。きさまときたら睫毛(まつげ)も満足じゃないぞ」とね。するとあいつは叫び声を上げて、あたりを見まわしながら言うことにゃ「余はそもそもいかになすべきか」(5)

ブレピュロス　「にんにくと果汁(6)とを摩(す)り合わせ、ラコニア種の甘遂(なつとうだい)を投げ込んで、毎晩自分の瞼(まぶた)に塗れ」と、わしなら言ってやったろう。もし出席してたらな。　(四〇七)

クレメス　彼につづいて口八丁のエウアイオン(7)が登壇したが、たいていの者には裸と見受けられた。しかし、あいつは着物を着てると主張したあげく、すこぶる民主的な演説をやりおった。　(四一一)
「諸君ごらんの通り、余自身もまた四両(8)で間に合う救済を必要としている。それにもかかわらず、余はいかにせば諸君が国家と市民とを救い得るかを述べたい。もし冬至になると、すぐに布晒し屋が困っている者に暖かい上着を提供することとしたら、肋膜炎の患者は絶無となるであろう。寝台も蒲団もない者は、飯を食ったら毛皮屋のところへ行って眠ることとする。冬の季節に戸口を鎖(とざ)して入れぬ者は、毛布三枚の罰金とする」　(四二一)

ブレピュロス　ディオニュソスにかけて、こりゃ素敵だ。だが、も一つあれまでつけ加えたら、一人として反対できなかったろう。押麦商は食うに困る者すべてに一升五合を無代提供する。さもなけりゃ(9)こっぴどい目にあわせる、とな。あわよくばナウシキュデスからこういう有難い待遇(もてなし)を受ける、という狙いさ。

クレメス　さて次には、見目よい若者(10)で色白く、ニキアス(11)みたいなのが一席弁じようと跳び上がった。こいつの言わんとするところは、女どもに国家を引き渡すことの必要だ。すると、例の靴屋みたいなわんさ連(12)がどよめき立って喝采したが、田舎から来た連中は大声で不平を鳴らした。

ブレピュロス　そりゃ全く賢明じゃった。　(四三三)

クレメス　だが、その仲間は頭数で負けた。若者は声張り上げて相手を抑える。女のことは褒(ほ)めちぎるが、お前さんに対しては悪態の限りだ

づた。
ブレピュロス　で、何て言ったんだ。
クレメス　第一にお前さんは無頼漢だと言った。
ブレピュロス　そしてお主のことは？
クレメス　そいつはしばらくお預けだ。そしてまた泥棒だとも言った。
ブレピュロス　わし一人のことかね？
クレメス　そしてゼウスにかけて告発常習者[1]だとも言った。
ブレピュロス　わしだけをかね？
クレメス　いや、ゼウスにかけて〔観衆を指しつつ〕この皆の衆もだ。
ブレピュロス　こいつにゃ誰も異議あるまい。
クレメス　女とは抜け目がなくて金を稼ぐ者だとも言った。また、女どもはいつだってテスモポリア祭の秘密を洩らしたりはしないのに、お前さんやわしときたら絶えず国家の秘密をしゃべる、とね。
ブレピュロス　ヘルメスにかけてこれは嘘じゃない。
クレメス　そして、女どもはお互いに着物とか小間物とか銭とか食器とかを貸し合い、それも証人を立てずに相対ずくでやると言うのだ。そして、借りた物はすっかり返して猫婆などはしないのに、われわれ男ときたらたいていはこれをやると抜かしおった。
ブレピュロス　ポセイドンにかけて、証人までおってもな。
クレメス　告発の常習でもなけりゃ求刑もしないし、民主政を倒しもせねば、その他にもさまざまの美点があるとね。まだその他の色々の理由から、女のことを褒めちぎった。
ブレピュロス　そして決議は？
クレメス　お前さんは国家を女どもに委ねにゃならん。これだけはこの国でもまだやった験しがないというわけなんだ。
ブレピュロス　そして決まったのかね？
クレメス　いかにも。
ブレピュロス　すると、市民の仕事はすべて奴らが引き受けるんだな？
クレメス　そういったわけだ。
ブレピュロス　裁判所にも、わしじゃなくて家内が行くんだな？
クレメス　家中を養ってくのも、お前さんじゃなくて令夫人だ。
ブレピュロス　じゃ、朝っぱら溜息して起きることもなくなるな？
クレメス　違いない。そいつはもうご婦人連の役目だ。お前さんは屁でもひりながら家にとぐろを巻いていられるんだ。
ブレピュロス　ただわれわれごとき年輩じゃ、あれが恐ろしい。もし女どもが国家の手綱を握ったあげく、無理無体に強制によって——
クレメス　何をさせたらってんだ。
ブレピュロス　やつらを動かせ[2]、ときたら。
クレメス　だがそれができぬ相談だとしたら？
ブレピュロス　朝飯をくれまい。
クレメス　お前さんは何とかして朝飯にもありつければ動かしもする工面をするがええ。
ブレピュロス　強制とは悲鳴を上げるな。
クレメス　だがいったん国家の利益とならば、われわれ挙って実行せにゃなるまい。ほれ、昔からの伝えにも何とか言うとるて。思慮の足りぬ馬鹿げた評定でもすべてわれわれにとっては御利益になるそうだ。おお、女神のパラスさまはじめ奉り、もろもろの神々。どうぞためになりますよう。ところでわしは失敬するぜ。さよなら。
〔クレメス己の家の戸口に入る〕
ブレピュロス　さよなら。クレメス君。
〔ブレピュロス己の家の戸口に入る〕
〔男装せる女どもの全コロス登場の歌声とともに民会から帰って来る〕
コロス　急げや、進めや。
誰か男がつけてやしないか。
振り返っては見まわせよ。
悪党の数は多いんだから、みっちり警戒怠らず

誰か後から来た者にわれらの姿[1]を見破られまいぞ。
両つ(ふた)の足で、できるだけしかと大地を踏み鳴らし進むこととしようぞ。
それこそ女全体の恥と言うもの、
もしも男衆が事実を見つけりゃ。
それゆえきちんと身づくろいをし、
あちらこちらや右手にも
いたるところに目を配り、仕事をへまに終わらせまい。
だが、急いだり。民会へわれらの出かけたその折に
勢揃いしたあの場所ももはや間近とあいなった。
今しも市民の決議したあの計画を思いついた
大将のお館(ま)も目のあたり。
それゆえ、われらは付け髯で
いつまでもぐずぐずしちゃおられない。
ひょっと誰かに見つかって咎められぬよう、用心が大切。
さあ、こっちの塀の
日蔭にはいり
片方の眼で見張りながら
平素(いつも)の姿にかえりましょう。
のろまは禁物。そらごらん。われらの大将も
民会から今しもご帰邸遊ばすとこ。
さあ、みんな急いで両頬の髯なぞお払い箱にしよう。

〔プラクサゴラとその連れの二、三の女を指して〕

あの女(ひと)たちももうちゃんと元の姿でお帰りだ。

〔プラクサゴラと二、三の女、女の姿にて登場〕

プラクサゴラ 〔コロスに向かい〕皆さん、われわれの計画したことは幸いにすっかり成功しましたわね。だけど、誰かに見つからぬうちにできるだけ手早く上衣を棄てて、靴を脱ぎなさい。ラコニア靴の紐を解き、ステッキを捨てなさい。〔コロスの音頭とりに向かい〕ところで、あんたはこの女(ひと)たちを整頓してちょうだい。わたしは家に忍び込み、主人に見られぬうちに、あの人の上衣とかそのほか持ち出した品を元のところに返しておきましょう。

〔プラクサゴラ家のなかに入り、やがて再び戸口より現われる。
この間にコロス女の姿にかえる〕

コロス ご命令は、もうちゃんと万事実行できました。あなたの次のお仕事は、どんな有利なことをしたら、あなたの心に適(かな)うかをわたくしどもに教えるだけ。あなたくらいに遣り手の方にはお目にかかった覚えがないので。

プラクサゴラ 皆さんお待ちください。今さき決議した女の支配について、あんた方みんなに助言者になっていただきましょう。というのは、あそこ[2]でも恐ろしい騒動のなかで、あんた方はほんとうに男らしかったから。

ブレピュロス 〔突然家から出て来る〕おい、どこから帰ったんだ。プラクサゴラ。

プラクサゴラ ねえ、それがあなたにどうしたって言うの？

ブレピュロス それがおれにどうしたって？ 訊くまでもないじゃないか。

プラクサゴラ まさか情人(いいひと)んとこから帰ったっておっしゃるんじゃないでしょう。

ブレピュロス たぶん一人の男じゃあるまい。

プラクサゴラ そこんとこの穿鑿(せんさく)はあなたの勝手ですわ。

ブレピュロス どうするんだ。

プラクサゴラ あたしの頭に香油のにおいがするかどうか。

ブレピュロス 何だって。女は香油なしにはかの一儀をやらんと言うのか？

プラクサゴラ かわいそうに、あたしに限ってやりませんとも。

ブレピュロス 何だってあんなに朝早く、わしの上っぱりを着込んで抜

け出したんだ？
プラクサゴラ　仲のよいお友達が夜中に産気づいて、わたしを呼びに寄こしたの。
ブレピュロス　わしに一言断わって出かけられなかったかい？
プラクサゴラ　ねえ、あなた。そんなに苦しんでる産婦のためなら夢中になっていけないの？
ブレピュロス　だが、わしに話したうえでのことだ。どうもこりゃ何か怪しいぞ。
プラクサゴラ　二柱の女神にかけて、身なりも構わずに飛び出したんですよ。わたしを呼びに来た女(ひと)がぜひ来るようにって、しきりに頼むんですもの。
ブレピュロス　それで自分の上衣を着なくてもよかったと言うのか？　わしの着物を取り上げてお前のやつを代わりに掛け[1]、まるでわしをお葬いの遺骸(ほとけ)みたいに残して行きおった。冠をつけたり香油瓶(レキュトス)[2]を供えたりしなかっただけはましだったが。
プラクサゴラ　寒かったし、わたしは痩せて華奢(きゃしゃ)な質(たち)ですからね。それで冷え込まないためにそれを着込んだの。ねえ、あとに残ったあなたは蒲団のなかでぬくぬくしてたはずよ。
ブレピュロス　ラコニア靴とステッキはどうしてお前のお伴をしたんだ？
プラクサゴラ　あなたの上っぱりの安全のために[3]履物まで替えたのよ。あなたの真似して両の足を踏み鳴らし、ステッキで石を打ちながら行きました。
ブレピュロス　わしが民会からもらったはずの五升の小麦[4]が、お前のおかげでふいになったのはご存じかね。
プラクサゴラ　くよくよするのはおやめなさい。男の児を生んだんですよ。
ブレピュロス　民会がかい？
プラクサゴラ　まあ、とんでもない。わたしの呼ばれてった女(ひと)ですわ。でも民会はあったんですか？
ブレピュロス　もちろん。昨日お前に話したのはもう忘れたのか？
プラクサゴラ　今思い出したわ。
ブレピュロス　じゃ決議のことも知らんね。
プラクサゴラ　ほんとうに何も知りませんわ。
ブレピュロス　じゃ腰を落ち着けてするめでも噛みながら聴きなさい。お前たちに国事が委されたって噂だ。
プラクサゴラ　何するために？　機を織ること？
ブレピュロス　いやどうして、支配するんだ。
プラクサゴラ　誰をです。
ブレピュロス　国家のありとあらゆる仕事をだ。
プラクサゴラ　アプロディテにかけて、国家の将来はほんとうに幸福でしょう。
ブレピュロス　どうして？
プラクサゴラ　いろいろわけはあります。今後はいかに大胆な者でも国家に恥辱を加えることはできないでしょうし、もはや証人に立つことも、告訴を商売にすることもなくなるでしょうから。
ブレピュロス　神々の御名にかけて[5]、そんなことはやめにしてくれ。そしてわしの生計(くらし)を取り上げるのはまっぴらごめんだ。

〔この間にクレメス登場〕

クレメス　おい、先生。ご婦人にしゃべらせておけよ。
プラクサゴラ　追剝ぎも出なけりゃ、隣近所へのやきもちもなくなるし、裸の者もなくなりゃ貧乏もなくなる。喧嘩口論もなくなれば、財産の差し押えもなくなる。
クレメス　ポセイドンにかけて、ほんとうとすりゃ大したことだ。
プラクサゴラ　わたしがそれを説明してお目にかけましょう。そしたらあなたもわたしの証人になるでしょうし、〔クレメスを指して〕この方だって何一つ反対できないでしょう。

コロス　今こそあなたは仲よしの
女同士を護るため決意を固め
しっかりと知恵を絞らにゃなりませぬ。
舌三寸に語られる計画こそは
公の福祉を目ざすものであり、
市民大衆の生活を
測り知られぬ
利益もて
祝福するに違いない。
あなたの能力を発揮なさい。今こそ
その折。なぜならば、
われらの国家にゃ賢明な
新発明が要り用だ。
ただ、今までに
実行も計画もされぬようなことを
天晴れ仕遂げてくださりませ。
陳腐なものを幾度も見れば
見物衆もうんざりだ。
だがのろまは禁物。さっそく計画を始めなされ。
手っ取り早くやることがいちばん大向うに受けるのだ。

プラクサゴラ　わたしの教えることが有益なことは自信があります。でも、見物衆が新奇をお好みかどうか、ありきたりの古臭いことに暇をつぶすのはお嫌いかどうか、これが、いちばん心配です。

ブレピュロス　新奇ということなら、心配ご無用。われわれは古き支配の代わりに革新を断行し、往時を忘れにゃならんのだから。

プラクサゴラ　じゃ、話し手に耳を傾けてその意嚮を呑み込むまでは、あなた方のどちらも異議を申し立てたり、半畳を入れちゃだめですよ。わたしに言わすれば、万人が万物を共有し、これによって生活すべきであり、ある者は富むのに、ある者は悲惨だったり、ある者は広大な土地を所有するのに、ある者には墳墓の地もなかったり、ある者は多数の奴隷を抱え、ある者には一人の奴隷すらないというのは改むべきであり、万人に共同かつ平等の生活を与えたいのです。

ブレピュロス　いったいどうしたら万人共同の生活ができるかね？

プラクサゴラ　あなたはわたしより先に「糞食らえ」[1]ですよ。

ブレピュロス　糞までも共有にするのか？

プラクサゴラ　いいえ、でもあなたはさっそく嘴を容れたじゃありませんか。そこんとこを、ちょうど今説明しようとしていたのですよ。まず第一に、土地やお銭やその他めいめいの持ち物を万人の共有にします。それから、この共有財産で、われわれ女どもがあなたたち殿方を養っていきますが、財政の切り盛りには節約を忘れず、注意を怠らぬつもりです。

ブレピュロス　だが、われわれのうちで、土地はないが銀貨やダレイコス金貨[2]のような目につかぬ財産[3]のある者はどうするんだ。

プラクサゴラ　それはみんな持ち寄って納めるんですよ。

ブレピュロス　だが、納めんで偽誓する者があったら？　そもそも手に入れたのも偽誓のおかげだからな。

プラクサゴラ　だけど、そんなことしたって全く無駄でしょう。

ブレピュロス　そりゃどんなわけで。

プラクサゴラ　誰だって貧ゆえに何かすることはなくなるでしょう。万人が万物を共有するのです。パンも魚の切り身も、大麦菓子も外套も、お酒も花冠も豌豆も。だから、持ち寄らなくても別に得はないでしょう。さもなきゃわけを説明してちょうだい。

ブレピュロス　現在だって物の豊かな奴ほど盗み[4]をするんじゃないかな。

プラクサゴラ　ええ、これまではね。昔からの法律に従っていた限りはそうでした。これからは共同生活なんですから、匿したって何の得になるでしょう。

ブレピュロス　もしや誰か娘を見て色気を出し、一儀に及ぼうってとき

にゃ、取っておきの財産の一部をくれてやれるわけじゃないか。そしていっしょに寝れば、共同財産にあずかったことになる。

プラクサゴラ　でもこれからは、男はただで女と寝られるんですよ。女は共有ですから誰とでも寝られるし、好きな人の子を産むんですよ。

ブレピュロス　だが、もしみんながいちばん綺麗な女にやって来て手に入れようとしたら？

プラクサゴラ　醜女(しこめ)や獅子鼻の女が美人のそばに侍っています。それで美人を求める者は、まず醜女を抱かねばなりません。

ブレピュロス　だが、われわれ年寄りは醜女を抱いたあげくじゃ、お前の言う目的地[1]に到達する前に一件が駄目になりゃせんかな？　（六三〇）

プラクサゴラ　あなたのために戦さは起こりませんよ。元気を出しなさい。心配ご無用。

ブレピュロス　戦さ[2]は起こらないって？　何のための戦さだ。

プラクサゴラ　あなたといっしょに寝られぬための。あなたについてはこういった次第です。

ブレピュロス　女どもについてはたしかにうまく考えたもんだ。どの女の窩(あな)もあいてないように、あらかじめ工面してあるからな。だが、男の場合はどんな具合になるかな？　女の方でも醜男(ぶおとこ)は避けて、好い男には寄って来るはずだから。

プラクサゴラ　ですが、まずい男は、好い男が夕餉(ゆうげ)をすませて出かけるのを警戒して、おもてで見張り[3]をするでしょう。それで女も醜男やちび助のご機嫌を取らぬうちは、好い男と寝るというわけにはいきません。

ブレピュロス　そうなると、リュシクラテス[4]の鼻も整った鼻と同じ気位になるな。　（六四〇）

プラクサゴラ　アポロンにかけて、その通りです。これはまことに民主的な思想でして、立派な、指環をはめた紳士方[5]を大いに嘲笑することになりましょう。草鞋(わらじ)[6]ばきの男が「先番のわしの後に控えて。用がすんだら後番(あとばん)のお前さんに渡すから、それまで待つんだ」と言うんですから。

ブレピュロス　ところで、われわれが皆こんな生活をしたら、めいめい自分の子供の区別はどうするんだ？

プラクサゴラ　要らぬ心配ですよ。みんな自分より年長の人を父と考えるでしょうから。

ブレピュロス　そうなると、誰だかわからないんだから、年寄りを片っぱしからみごとに絞め上げる[7]だろう。今日(こんにち)手前の親爺(おやじ)とわかっていてさえ絞めるんだから。どうだろう、親とわからなかったら、糞をひっかけるくらいしかねまいが。　（六五〇）

プラクサゴラ　ですが、そんなことは傍(はた)の者が許しますまい。今までの世の中では、他人(ひと)ごとだと誰が殴ろうが知らぬ顔でしたが、今後はぶたれた者があると聞いたら、自分の父がぶたれてるんじゃないかとの心配から、乱暴者に食ってかかるでしょう。

ブレピュロス　そこんとこまでは一つもそつがないようだが、もしエピクロスとかレウコロポス[8]のようなのが近寄って、わしのことを「パパさん」などときたら、聞いてぞっとするね。

クレメス　それよりかもっと恐ろしいのは――

ブレピュロス　そりゃ何だ？

クレメス　もしアリステュルロス[9]が自分の親爺だと称してお主(ぬし)に接吻(キス)したら――

ブレピュロス　半殺しにしてくれるわ。

クレメス　お主(ぬし)は定めし薄荷(はっか)[10]の臭いがしよう。

プラクサゴラ　だけど、その人はあの決議以前に生まれたんですから、あなたに接吻(キス)する心配はありませんよ。　（六六〇）

ブレピュロス　いやはや、とんだ目にあうとこだった。ところで畠を耕すのは誰だ。

プラクサゴラ[11]　奴隷です。あなたの[12]仕事といったら、日時計の影が十尺にもなったときに、一風呂浴びて夕飯のお膳につくだけですよ。

ブレピュロス　じゃ、着物のことはどう工面する。この点も確かめとか

にゃならん。
プラクサゴラ　第一に今あるのが間に合いますし、あとはわたしたちが織りましょう。(六五四)
ブレピュロス　も一つ質問がある。もし誰か裁判に負けて他人(ひと)に罰金を払わにゃならんと、どこからこの金を払うのかね。共同財産から払うわけにゃいかんし。
プラクサゴラ　でも、そもそも訴訟なんてないでしょう。
ブレピュロス　そうなったらずいぶん大勢をいじめることになろう[1]。
クレメス　わしもその点を考えとったところだ。
プラクサゴラ　でも、わからない方ね、いったい何のために訴訟を起こすんですの。
ブレピュロス　アポロンにかけて、そりゃいろいろあるさ。まず第一に、もし誰か借金をしながら借りぬと言い張れば――(六五九)
プラクサゴラ　貸し手はいったいどこから貸金を見つけるんです。財産は全部共有なのに。さもなきゃ立派な泥棒でしょう。
クレメス　デメテルにかけて、奥さんはお主にとって好い先生だ。
ブレピュロス　も一つ先生のお答えを願いたいのは、ご馳走になったあげくに酒癖が悪くて[2]人を殴った者は、この乱暴に対して何で償うのかね。これにゃお前も困るだろう。
プラクサゴラ　当人の食い扶持で[3]です。これを取り上げられたら胃袋を懲らしめられるんですから、そう無分別に乱暴を繰り返せないでしょう。(六六八)
ブレピュロス　泥棒も一人もないわけかね？
プラクサゴラ　何でも分け前があるんですから、盗むってことはありませんよ。
ブレピュロス　夜中に追剝ぎにあうこともなかろうな。
プラクサゴラ　ええ、家のなかで眠ってれば[4]。いえ、家の外だって、今までみたいな心配はいりません。暮らしに困る者はないんですから。着物を剝がれたものは、進んでやっちまうでしょう。争う必要がどこにありますか。共同の倉庫に行けば、もっといいのが貰えるんですから。(六七二)
ブレピュロス　すると、手慰みをやる連中もなくなるかな？
プラクサゴラ　いったい何を賭けてやるんです。
ブレピュロス　毎日の生活はどんな風にする気かね。
プラクサゴラ　みんな共同です。つまり市(まち)のなかの隔てはすべて取りこわして全体を一つの住居にしてしまい、お互いに往き来のできるようにしましょう。
ブレピュロス　すると食事はどこで出すんだ。
プラクサゴラ　裁判所や柱廊(ストア)などを全部食堂にあてましょう。
ブレピュロス　だが演壇[5]は何か役に立つかな？
プラクサゴラ　徳利だの水差しだのを並べます。そして、少年どもは戦争に勇敢な人たちのことを歌う[6]ので、卑怯者は恥ずかしくて食事に出られないようにします。
ブレピュロス　アポロンにかけて、そりゃ名案だ。抽籤器(ちゅうせんき)はどこへ持ってく気かい？(六八一)
プラクサゴラ　広場(アゴラ)に据えましょう。そして、ハルモディオス[7]の像のわきに立てて、みんなを抽籤します。そうすれば、めいめい当たった籤(くじ)に満足して、どこで食事するか迷わずに出かけるわけです。そして、触れ役がβ(ベータ)に当たった者は「王の柱廊(ストア・バシレイオス)」[8]に行って食事するように導く[10]し、θ(テータ)組はそのわきの柱廊(ストア)[9]に、それからK(カッパ)に当たった者は穀物市場の柱廊(ストア)に行かせるってわけです。
ブレピュロス　かっぱらいに行くのか[11]？
プラクサゴラ　まあいやだ。食事に行くんですよ。
ブレピュロス　食堂を指定した字に当たらなかった者は、みんなして追い出すわけだな？(六九〇)
プラクサゴラ　でも、そりゃわたしどもにゃあり得ぬこと。
みんなにたんまりご馳走できます。
それで誰でも頭には花冠(かんむり)[12]よろしく、片手には

松明持って千鳥足、家路をたどるというわけです。
すると女どもが往来で
宴会帰りの人々を待ち受けて
言う言葉には「家にちょっと寄っていらっしゃいよ。
とてもいい娘[1]がいますのよ」
すると二階から他の声で
「あたしんとこにももう一人
色白の素敵な娘がいるわ。
だけどあんたはあの娘と寝たけりゃ
先にあたしと寝にゃならない」　(七〇〇)
男ぶりの好い者や美少年に連れ立った
まずい男は言うでしょう。「お前さんはどこへ急ぐんだ。
行っても何にもなるまいぜ。
決議によれば鼻低や醜男がまず
かの一儀をやるってことになっている。
お前さんはしばらく門口で
無花果の葉[2]でも撫でながら
待つより他にしようがない」と。
さあ答えてちょうだい。お二人ともこれどう？　お気に召して？

ブレピュロス　いやまことに。

プラクサゴラ　じゃ、わたしは広場に出かけにゃなりません。声のいい女を一人呼び出し役に連れてって、集まって来る品物を受け取らなくっちゃ。選ばれて支配者になった以上これがわたしの仕事だし、共同食事の準備もしなくちゃ。今日第一回の宴会を開こうってからには。

ブレピュロス　じゃ、さっそく宴会とくるのか？

プラクサゴラ　そうですよ。それから闇の女は一人残らず撲滅したいと思います。　(七一八)

ブレピュロス　そりゃ何のためだ。

プラクサゴラ　言うまでもありません。〔コロスを指して〕この女たちが若者の青春を享楽するためです。そして女奴隷どもがめかし込んで自由な者の情事[3]を横取りするようなことはいけません。奴隷らしく仔豚[4]の毛を抜いて奴隷仲間とだけ寝るようにさせましょう。　(七二四)

ブレピュロス　では、わしもお前にくっついてお伴と出かけようか。そうすりゃ皆わしを振り返ってこう言うだろう。「大したもんじゃないか、大将の連れ合いだぜ」とね。

クレメス　わしは広場に諸道具をもってくために、まず運び出して調べるとしよう。

〔プラクサゴラ、ブレピュロス退場。クレメスは戸口より自分の家に入る〕

コロス　〔歌詞は今日伝わらず〕

〔クレメス諸道具をもって戸口より現われ、それらを祭礼の行列のように並べはじめる〕

クレメス　こっちへ来るんだ。可愛い粉篩。わしの家財のそのなかで第一番に戸口から綺麗な顔して出ておいで。幾袋もの粉を通したお前は、お白粉つけて[5]三宝運び[6]だ。牀机運び[7]はどこへ行った。土瓶もこっちへ出ておいで。いやはや、お前はえらく黒いぞ。リュシクラテスが髪を黒く染めた薬を煎じても、これほどまではなるまいて。あの娘[8]のわきに並ぶんだ。装束掛り[9]もこっちへ来い。水差し[10]持ち、その水差しをここへ持って来い。　(七三八)

〔雄鶏をつれ出しつつ〕さあ歌姫[11]もこっちへ出て来い。お前はしばしば暗いうちから夜明けを告げる歌をうたって民会[12]に出るようにとわしを起こした。鉢を持った者は進み出て、蜜蜂の巣を持って来い。オリーヴ[13]の枝も近くに立てろ。それから鼎二つに香油瓶を出すんだ。小皿や、がらくたはやめておけ。　(七四五)

〔別の戸口が開き、三二七行以下に出た隣の男現われる〕

隣の男　わしも自分の持ち物を納めるって？　そんなことしたら、かわいそうにちょっとお頭が足りないってことになる。ポセイドンにかけて、絶対ご免だ。まず成行きをとっくり調べて、高見の見物と行こう。

こちとらは汗と倹約の賜を、しかとした当てもなしに投げ出すほどお坊ちゃんじゃないんだ。なんせ成行きをことごとく見きわめたうえのことだ。

〔クレメスの仕業に気づいて〕お前さん、この諸道具はいったいどうしたってんだ。引っ越しのために持ち出したのかね？ それとも質屋にでも運ぼうってのか。

クレメス　いや違う。

隣の男　なぜこう行列してんだ。よもや競売人のヒエロンとこへ行列を送るってんじゃあるまい。

クレメス　とんでもない。法律の取り決めに従って、国家のために広場へ運ぶところさ。

隣の男　運ぶところだって！

クレメス　いかにも。

隣の男　救主ゼウスにかけて、不幸な仁だ。

クレメス　どうして？

隣の男　どうして？ 見やすい道理だ。

クレメス　何だ。法律に従っちゃいけないと言うのか。

隣の男　気の毒な仁だ。いったいどんな法律のことだね。

クレメス　決まった法律さ。

隣の男　決まった？ なんてまた間抜けた人だろう。

クレメス　間抜けた？

隣の男　そうじゃないか。いや、天下無類の頓馬ときてる。

クレメス　命ぜられた通りやるからか。

隣の男　利口な男が必ず命令通りやるものかね？

クレメス　もちろんやるさ。

隣の男　鈍物ならやるがね。

クレメス　じゃお前さんは納める気はないのか。

隣の男　皆の衆がどうする気かわかるまでは用心しよう。

クレメス　そりゃ持ち物を出す気にきまってるさ。

隣の男　百聞一見にしかず[1]、って奴だ。

クレメス　だが道ばたでは噂が盛んだ。

隣の男　そりゃ噂はあろうさ。

クレメス　そして、自分の物を持ち出して納めるって言ってる。

隣の男　そりゃ口先ではそう言うさ。

クレメス　畜生！ 何一つ信じない野郎だ。

隣の男　そりゃ何一つ信じまいよ。

クレメス　おお、ゼウスさまの罰当たりめ！

隣の男　そりゃ罰を加えることもあろうさ。世間の気の利いた奴で誰か納めるって言うのか。昔からそんな仕来りはありゃせんぜ。いやゼウスにかけて、われわれは受け取るだけが能だ。神さまにしたって同じこった。その手を伸ばしたお姿を拝んだだけでわかるだろう。お恵みを垂れたまえ、と祈るときにも、掌を差し出して立ったその様子じゃ、どう見ても何か賜わるんじゃなくて受けるおつもりだ[2]。

クレメス　先生、いい加減にして、ちょっと仕事をはかどらせてくれないか。こいつを一つに縛らにゃ。紐はどこにあるんだ。

隣の男　ほんとうに納める気なのか。

クレメス　いかにも。ちゃんと鼎を二つ縛り合わせてるとこだ。

隣の男　馬鹿馬鹿しい話だな。しばらく日和見して他の奴がどうするか見届けたうえで、しかる後に——

クレメス　どうするんだ？

隣の男　待機して、それからさらにゆっくり構えるんだ。

クレメス　そりゃ、どういう肚[3]だ？

隣の男　もしか、ひょっと地震が起こったり、[4]雷が落ちたり、鼬[5]がつっ走ったりすりゃ、供出もおじゃんというわけだ。察しが悪いな、お前さんは。

クレメス　こいつを納める場所がなかった日にゃ、結構な目にあうて。

隣の男　受けとる場所のことじゃないか[6]？ 心配ご無用。あさって行ったって必ず納められる。

クレメス　そりゃまたどうして？

隣の男　〔観衆を指しながら〕知っての通り、この方々は決議は早いが、決めたことをやがて否認しなさる。

クレメス　いや、あんた、みんな納めますよ。

隣の男　納めなかったらどうする？

クレメス　納めるに決まってるさ。

隣の男　もし納めなかったら、どうする？

クレメス　奴らと闘争するまでだ。

隣の男　もし奴らの方が強かったら？

クレメス　ほっといて退却だ。

隣の男　退却させなかったらどうする。

クレメス　きさま、くたばっちまえ。

隣の男　わしがくたばったらどうする？

クレメス　結構な次第だ。

隣の男　お前さん、ほんとうに持ってく気なのか？

クレメス　もちろんさ。自分の隣近所で出すのを見てんだから。

隣の男　そうだ。アンティステネス[1]なぞはきっと出すだろう。あいつにゃ、一月の余も雪隠にはいってる方がよっぽどお似合いだが。

クレメス　くたばっちまえ！

隣の男　合唱の先生のカリマコス[2]はみんなに何を出すかな？

クレメス　カリアス[3]よりはたくさん出すだろう。

隣の男　この男[4]は財産をすっかり投げ出すに違いない。

クレメス　ひどいことをぬかすな。

隣の男　何がひどい。民会の決議だっていつもこんな調子なのを、ご存じないみたいだ。あの塩についての決議[5]を知らないのか？

クレメス　知ってるとも。

隣の男　あの銅貨を決議したとき[6]のことを忘れたかい？

クレメス　あのお鳥目には参った。葡萄を売って銅貨を口に頬張った[7]まま家を出て、押麦買いに市場へ行ったと思いなさい。そして、ちょうどわしが袋[8]で受けたとたんに触れ役が大声で言うしゃないか。「今後は誰も銅貨は受け取らぬこと。銀貨のみ有効」とね。

隣の男　ついこないだも、われわれは口を揃えて五百タラントンを国家に納めると誓ったばかりだ。エウリピデス[9]の発案になる例の二分半の税[10]でね。するとたちまち、猫も杓子もエウリピデスに金鍍金した。ところが、とっくり思案してみりゃ、これも「ゼウスさまのコリントス[11]」で、とうてい役に立たぬとわかった。すると今度は、誰も彼もがエウリピデスに泥を塗る始末だ。

クレメス　だが、あんた、そりゃ別じゃ。あのころは男が支配してたが、今は女の天下だ。

隣の男　ポセイドンにかけて、女子に小便しかけられぬよう用心しましょうわい。

クレメス　馬鹿話聞く耳は持たぬ。〔奴隷に向かい〕さあ、お前、運搬板[12]を持って来い。

〔女の触れ役登場〕

触れ役　さあ市民の皆さん方、こういう次第になりましたゆえ、お出ましになって女の大将のところへお急ぎください。籤をひいてめいめい運できまった場所でご馳走にありつくというわけです。食卓の準備も整って、あらゆる珍味が山盛りだし、寝台[13]にゃ毛布や絨緞がちゃんと備えてございます。お銚子だってついてるし、香油売りの娘[14]らはずらりと並んでるし、切り身は火にかかってる。兎の肉は串に刺され、お菓子は焼いてる最中です。花冠も編んでるところだし、デザートも焙ってるところです。いちばん若い娘らは豆スープを鍋で煮ています。すると乗馬服のスモイオス[15]がそれらの間に立ち交じり女どものお皿[16]をなめている。ゲロン[17]老人は粋なマントに舞踏靴までつっかけて、若者といっしょに手をとって高笑いしながらやって来る。いつもの靴や着古した上衣はそっくり投げ出した。そんなわけゆえ、来ないという法は全くありません。給仕の者がパンを持って待っております。あなた方は口さえ開けば結構なんです。

〔女の触れ役退場〕

隣の男　〔触れ役の話に気を変えて〕それじゃわしも必ず出かけるとし

よう。国家がそう決めたからにゃ、ここに立ちんぼしてても始まらない。（八五四）

クレメス　だが持ち物を出しもしないで、お前さん、どこへ行くんだ。

隣の男　ご馳走になりにさ。

クレメス　女どもにも考えがあろうから、出さぬうちはそりゃだめだろう。

隣の男　出すことにしたよ。

クレメス　いつ？

隣の男　わしの仕ぐさが邪魔になることもなかろうて(1)——なあ、あんた。

クレメス　そりゃどうした意味だ。

隣の男　他人さまはやっぱりわしより後で出そうってものさ。

クレメス　どうでもご馳走になりに出かけるのか！

隣の男　じゃ、どうしたらいいんだ。善意ある者は国家のために全能力を傾倒すべきだ(2)。

クレメス　だが女どもが入れてくれなかったら、どうする？(3)

隣の男　体をかがめて突撃だ。

クレメス　鞭で打ったら、どうする？

隣の男　女どもを喚問するまでさ。

クレメス　みんなに嗤われたら、どうする？

隣の男　戸口にたたずんで——　（八六五）

クレメス　どうする気だ？　言ってごらん。

隣の男　納めに来る奴らの食糧をかっぱらおうさ。

クレメス　じゃ、後からおいで。さあ、シコンとパルメノン(4)、いっさいがっさいかつぎ出すんだ。

隣の男　一つわしも、運搬のお手伝いと行こうか。

クレメス　鶴亀、鶴亀。あの女の大将んとこで納めるときに、自分の品物だなぞと開き直られちゃまっぴらだ。〔クレメス奴隷とともに退場〕

隣の男　ゼウスにかけて、こいつは一思案というとこだ。自分の持ち物は手放さずに、みんなといっしょに大宴会にもぐり込もうってからにゃ。

〔思い入れあって〕うん、こりゃ悪くない考えだ。さっそくご馳走の現場に参上せにゃ。ぐずぐずしてるのは禁物だ。　〔隣の男退場〕

コロス　〔歌詞伝わらず〕

〔コロスにより、背景は変わらないが主人公が変わり、新しい場面の展開することが告げられたらしい。立ち並ぶ三軒のうち二軒の、おのおのの二階窓辺に老婆と若い女が立っている〕

第一の老婆　男衆はどうして来ないのじゃ。時刻もえらく経ったというに。わたしがお白粉を塗りたててサフラン染めの着物をひっかけ、手持ち無沙汰にただ独り端唄なんぞを口ずさみふざけた真似して立ってるのも、誰か通りかかったら捉えたいばかりさ。おお、ムーサイよ。このわたしの唇に光臨あって、イオニア風(5)の一節を授けたまえ。（八八三）

若い女　皺くちゃ婆さん。先にのぞいたのはあんたですよ。あたしがここにいなかったので、人の見ぬ間に葡萄の穫り入れを一人でやる気だ(6)ったんでしょう。誰か引っ張ろうと唄など歌って。あんたがその手に出るのなら、あたしも張り合って歌うことよ。見物衆にはご迷惑か知らないけど、ちょっと狂言らしいお慰みでしょう。

第一の老婆　〔革製の道具を娘に投げ与えつつ〕これでも相手にして消(7)え失せろ。　（八九〇）

〔オルケストラの笛吹きに向かい〕ところで可愛い笛吹きさん、お前さんは笛を取り上げて、あんたにもわたしにも似つかわしい間の手を一つやっとくれ。

〔歌う〕面白い目にあいたけりゃ
わたしといっしょに寝るがいい。
知恵にかけては若い娘は
とうてい年増にゃかなやせぬ。
わたしが惚れて添い遂げた
主を愛するそれほどに
大事にゃせずに他の男に

飛んで行くのにきまってる。

〔若い女老婆に張り合って歌う〕

若い女　若い女に嫉妬(やきもち)をいまさらやいてもはじまらぬ。
嬌(なまめか)しさは柔かな
脚に輝きまた胸の
両の乳房に華(はな)と咲く。
婆さん、あんたは眉毛から
伸びすぎたのを引っこ抜き
お白粉ごてごて塗ったけど
死に神様のお気に入り。

第一の老婆　〔歌う〕お前が寝ようとするときにゃ
つび(1)は塞がり、そのうえに
枕もどこやら見当たらぬ。
床にはいってあの男(ひと)に
接吻(くちづけ)しようと抱きつけば
あれ恐ろしや男では
なくて冷たい蛇(くちなわ)(2)じゃ。

若い女　〔歌う〕こりゃまあ、いったいどうなるの。
わたしの相手はまだ見えない。
お母さんたらお出かけで
ここに残るはわたしきり。
〔独白〕それから先はおしゃべりは禁物よ。
〔再び歌う〕でもねえ婆や(3)お願いよ。
オルタゴラス(4)を呼んで来て。
そしたらお前も仕合せよ。
わたしはお前に祈ります。

第一の老婆　〔歌う〕いい気味、早くもイオニア(5)の
あばずれみたいに催した。
〔会話体で〕お前さんはレスボス人のλ(ラムダ)(6)もやりかねまい。

若い女　〔歌う〕わたしの色香を消そうとか
わたしの情人(いいひと)取ろうとか
したとてとうていできぬこと。

第一の老婆　さあ、たんと歌うがええわ。鼬(いたち)みたいにのぞくさ。わたしより先にお前さんとこへ来る者はありゃしないから。

若い女　そりゃお葬いのこと？　婆さん、これ新奇な冗談(7)じゃない？

第一の老婆　新奇などころか。

若い女　婆さんに向かって新奇な話もあったもんじゃないわね。

第一の老婆　わたしの年齢(とし)に構うこともあるまいに。

若い女　じゃ何？　その紅(べに)とお白粉には顔負けね。

第一の老婆　何をほざいてるのじゃ。

若い女　あんたこそ何をのぞいてんのよ。

第一の老婆　わたしかね？　独りでわたしの可愛いいエピゲネス(8)に歌ってるのじゃ。

若い女　お前さんにはゲレス(9)のほかにも男があるのかい？

第一の老婆　そのうちに納得がいくだろう。やがてあたしを訪ねて来るから。おや、ご本人の到来じゃ。

〔宴会帰りの若者一人、松明を持って登場〕

若い女　お前を訪ねて誰が来るもんか。この疫病神！

第一の老婆　ごもっとも。この、ぎすぎす阿魔。

若い女　あの人が黒白をつけるわ。わたしは隠れていよう。

第一の老婆　わたしもそうしよう。そしたら、わたしの方がよっぽど目の開(あ)いてることがわかるだろう(10)。

〔若い女、老婆ともに室内にかくれる〕

若者　〔歌う〕(11)若い娘と寝たいもの。
鼻低女や大年増
先に抱けとは無理なこと。

自由の身には堪えられぬ。

〔第一の老婆窓からのぞいて独りで歌う〕

第一の老婆　溜息つきつかの一儀。
　カリクセネ[1]の遣り口と
　違ってこれは掟ゆえ
　民主政治じゃぜひもない。
〔独白〕じゃが、わたしも御神輿を上げて、お前さんがどうするか拝見といこう。

〔老婆再び室内にかくれる〕

若者　おお神々よ。別嬪だけを手に入れたいもんだ。それに恋い焦がれればこそ、かくは一杯機嫌で推参したわけだ。

〔若い女再び二階の窓に現われる〕

若い女　あの憎まれ婆をみごとに瞞してやった。わたしが家にひっ込んでると思って行っちゃった。さあ、わたしたちの張り合ったあの男が来たんだわ。

〔歌う〕いざやいざ。
　いとしの君よ、いざ来ませ。
　今宵一夜をわが宿に。
　分かちたまえやわが衾。
　君が捲毛を恋う心
　われを悩ませ休ませず
　燃ゆる想いをわが胸に
　身も焦がれつつ過ごすなり。
　許したまえや愛の神[2]
　冀いは一つかの君を
　招きたまえやわが臥床に。

若者　いざやいざ。
　降りたまえよ君もまた。
　開きたまえよこの扉。
　承けたまわずばわれははや、
　玉の緒絶えて打ち伏さん。
　いとしの君よ冀いとは
　君がみ胸[3]に憩いつつ
　君がいいしきを愛ずること。[4]
　ああキュプリスよ、いかなれば
　かの君ゆえにわが心
　かくは狂わせたもうぞや。
　許したまえや愛の神、
　冀いは一つかの君を
　招きたまえやわが臥床に。
〔独白〕これだけ述べ立てりゃ、自分の悩みに対してまあ十分といったとこだ。
〔若い女に向かって〕ねえあんた。いとしの君、後生です。

〔歌う〕開きて迎えたまわずや
　君ゆえにこそかく悩む。
　おお、金色に輝くおれの可愛い人。キュプリスの嫩枝。ムーサイの蜜蜂[5]。カリテス[6]の育て児。情欲の顔[7]。

〔歌う〕開きて迎えたまわずや
　君ゆえにこそかく悩む。

〔若い女、窓を去って戸口を開きに下におりる。若者、誤って老婆の戸口を叩く。飛び出して来たのは第一の老婆〕

第一の老婆　ほう、この人は。何で戸を叩いてるのかえ？　わたしに用かね？
若者　ご冗談でしょう。
第一の老婆　でも、うちの戸口を叩いたじゃないか。
若者　めっそうな。
第一の老婆　じゃ、いったい何用で松明片手にやって来たのかね？
若者　ちょっとアナプリュストス[8]の人を捜してんだ。

第一の老婆　そりゃ誰じゃ。

若者　お前さんの考えてんのはたぶんセビノス[1]だろうが、それたあ別だ。

〔老婆、若者を捕えて家のなかに引き込もうとしながら〕

第一の老婆　アプロディテにかけて、こうなりゃ否応なしじゃ。

若者〔裁判の口調をまねて〕だが、われわれは目下のところ六十歳以上のは扱わないで、しばらく延期と決めた。きょうわれわれは二十歳以下のだけを審理する。[2]

第一の老婆　坊っちゃん、昔のお定めではそうじゃったが今日（きょうび）はわたしどもを第一に扱わにゃ。

若者　それが望みの者はね。ちょうどパイトイ人の法律[3]みたいに。

第一の老婆　したが、お前さんとてパイトイ人の法に従ってご馳走にありついたのでもあるまいに。

若者　わけのわからんことをほざいてる。こっちの戸口を叩けば[4]いいんだ。

第一の老婆　わたしの戸をまず叩いてからだよ。

若者　われわれには目下「篩（ふる）い布」[5]は要らないんだ。

第一の老婆　惚れてるに違いない。ごらんの通りあたしが外に出てる[6]もんだから、それで驚いてんだね。さあ口を寄せて。

若者　いや、あんたお前さんの情人（いろ）は気味が悪いよ。

第一の老婆　誰のことだい。

若者　並みならぬ絵師さ。

第一の老婆　そりゃまた誰のことかいな。

若者　遺骸（ほとけ）のために香油瓶（レキュトス）[7]の絵を描く人さ。だが早くはいってるんだ。さもないと、そいつに戸口で見つかるぜ。[8]

第一の老婆　お前さんの胸のなかはすっかり読めてる。

若者　ゼウスにかけて、こちとらだってお前さんの気持はね。

第一の老婆　守り神のアプロディテ[9]にかけて、わたしは金輪際（こんりんざい）放しませんぞ。

若者　婆さん、こりゃ狂気の沙汰だ。

第一の老婆　冗談じゃない。わたしゃどうでもあんたを蒲団まで引っぱってく。

〔ここで老婆いっそう強く若者を引っぱる〕

若者　釣瓶（つるべ）の鉤（かぎ）を銭で買うことも要らなくなるぜ。こんな婆を下におろして、井戸のなかから釣瓶が引き上げられるんなら。

第一の老婆　冷やかしもいい加減にして、さあ兄さん、わたしについて来るんだよ。

若者　おれに従う義務はないさ。お前さんがその年齢（とし）に対して五百分の一税[10]を国家に納めたんでなけりゃ。

第一の老婆　アプロディテにかけて、いやとは言わせないよ。わたしゃお前さんみたいな若い者といっしょに寝るのが嬉しいんだから。

若者　おれはお前さんみたいな女はまっぴらだ。断然言うことはきかないぜ。

第一の老婆　じゃが、ゼウスさまにかけて、これがお前さんを縛って放すまい。

〔老婆一枚の紙片をひけらかす〕

若者　これたあ何だ。

第一の老婆　あの決議じゃ。そのおかげでお前さんはわたしんとこへ来にゃならぬ。

若者　そりゃいったいどんな中身か、読んでくれ。

第一の老婆　読みましょう。

婦女子ノ決議。モシ若キ男子ガ若キ女ヲ欲スルトキハ、マズ老婆ト媾合セル後ニアラズンバ、カノ女ト交媾スベカラズ。モシ彼ガ予備的交媾ヲ行ナウヲ拒ミ、若キ女ヲ求ムルトキハ、年長ノ婦人ラハカノ若者ノ「鉤（カギ）」[11]ヲ捉エテ彼ヲ拘引スルヲ妨ゲズ。

若者　情けなや。今日にもプロクルステス[12]になるってわけか！

第一の老婆　わたしどもの法律にゃ従うほかない。

若者　だが、誰か町内の者[13]か友達が来ておれを貰いさげたらどうなる？

第一の老婆　じゃが、今じゃ男は誰も一メディムノス[14]以上の力はない。

若者　正当の理由を誓っても許されないかね？

第一の老婆　逃げ口上は役に立たぬ。
若者　貿易商[1]と申し立てたら？
第一の老婆　お前さんの後悔の種じゃ。
若者　じゃ、いったいどうしたらいいんだ。
第一の老婆　わたしんとこへついて来るのよ。
若者　そりゃ絶対の強制かな？
第一の老婆　いかにも。ディオメデスのあれ[2]じゃ。
若者　それじゃまず第一に臥床に芙沃刺那[3]を敷き、[4]葡萄の枝をよく潰したのを四本下に並べ、お頭には小さなリボンをつけ、香油瓶をそばに置き、戸口の前には水甕を備えるんだ[5]。
第一の老婆　じゃ、お前さんはわたしに笄[6]まで買ってくれるのかえ？
若者　ゼウスにかけて買ってやろう。ただし蠟細工のやつだぜ[7]。もうおっつけ家んなかでくたばるんだろう。
〔若い女とつぜん戸口から駆け出して来る〕
若い女　あんたこの人をどこへ引っぱってくの？
第一の老婆　わたしの旦那をお連れするとこじゃ。
若い女　まあ分別もない！　こんな若い男じゃお前さんと寝る年格好でもないのに。あんたはこの人の奥さんていうよか、お母さんてとこよ。だから、もしあんたたちがこんな法律を押し通せば、世界中をオイディプス[8]で一杯にするってわけよ。
第一の老婆　ええ忌まいましい女っちょじゃ。やきもちやいてこんなへ理屈を考えおった。じゃが、このままではすまぬぞよ。
〔第一の老婆退場〕
若者　救主のゼウスにかけて、おお優しい君よ、あの婆を追っ払ってくれたのは、実に有難い。そいで、このお手柄に対し、今夜はあんたにたんまりと実のあるお礼を返しますよ。
〔若者若い女の腕をとる。たちまち戸口の一つから第二の老婆が現われる〕
第二の老婆　この娘ったら掟を破ってこの男をどこへ引っぱってくのかえ？　わたしといっしょにまず寝るようにちゃんと書き上げてあるのに。
若者　やれやれ、情けない。どこからはい出し上がったんだ。このくたばりぞこないの糞婆め！　今度の奴は前のよかいっそういけすかない代物だ。
第二の老婆　さ、こっちへおいで。
若者　〔若い女に向かい〕ねえ、後生です。こいつに引っぱられてんのをわきで見てないで！
第二の老婆　引っぱるのは、わたしじゃなくて法律だよ。
〔若い女あきらめて退場〕
若者　いや、そうじゃない。体中血ぶくれ[9]で覆われた化物だ。
第二の老婆　さあ、お兄さん、おしゃべりはやめて早くこっちにおいで。
若者　まあちょっと放して、何はさておき雪隠へ行かしてくれ。そこで一息つかにゃやり切れない。さもないと、怖さのあまり、ここで見てる前で何か黄色いものをやるぜ。
第二の老婆　心配ご無用。家んなかにはいってしなさいよ。
若者　そうなりゃ、こっちの望むことだけじゃすまなそうだ。さあ、保証人[10]はたっぷりと二人も出すぜ。
第二の老婆　そんなものは要らないよ。
〔第三の老婆が現われる〕
第三の老婆　お前さんはどこへ、いったいどこへこの女としけ込むんだね。
若者　しけ込むどころか引っぱられてんだ。誰だか知らないが、おれがこんな目にあってんのを見殺しにしないお方に大いなる祝福あれ！〔第三の老婆の正体に気づいて〕おお、ヘラクレス、おお、パン[11]たち、おお、コリュバンテス[12]、おおディオスコロ[13]！　今度のはこっち[14]のよりもっとやりきれない代物だ。助けてくれ！　こりゃいったい全体何物だ。お白粉を塗りこくった猿公か、さもなきゃ亡者のなかからさ迷い出た山姥か？

第三の老婆　ひやかさないでさ。こっちへ来るんだよ。
第二の老婆　こっちだよ。
第三の老婆　決して放しゃしないよ。　（一〇七五）
若者　体が二つに裂けちまう！　このくたばりぞこないども。
第二の老婆　法律上わたしについて来なきゃいけないのさ。
第三の老婆　もっとまずい年寄り[1]が現われりゃ、そうはゆかぬ。
若者　お前たち二人の間でかわいそうにお陀仏になったら、ねえ、あの綺麗な娘ん(こ)とこへ行けなくなる。　（一〇八〇）
第三の老婆　そりゃお前さんの好きにおし。だがこの勤めは果たさにゃいけない。
若者　ところで、どっちを先に満足させてから放免になるんだ。
第二の老婆　わかんないのかい？　こっちへ来な。
若者　〔第三の老婆に向かい〕この女(ひと)放せってば。
第三の老婆　わたしんとこへ来るんだよ。
若者　〔第二の老婆を指しつつ〕もしこの人が放してくれりゃ。
第二の老婆　ゼウスさまにかけて、放すもんか。
第三の老婆　わたしも放しませんぞ。
若者　船頭になったら二人ともさぞうるさいことだろう。
第二の老婆　なぜ？
若者　乗り手を引っぱり合ってへとへとにするだろうて。
第二の老婆　黙ってこっちへ来るんだ。
第三の老婆　ゼウスにかけて、わたしの方へ。
若者　こりゃとりも直さずカンノノス[2]の決議だ。左右から捉えられて一儀をせにゃならんとは。いったいどうしたら一人で二人の女を操れる[3]ってんだ。　（一〇九一）
第二の老婆　何でもないさ。ボルボス[4]を一鉢平らげりゃ。
〔第二の老婆若者を戸口の方に引っぱって行く〕
若者　ああ、情けない。戸口の近くまで引っぱられちゃった。
〔第二の老婆、いよいよ若者を戸口のなかに引き入れんとする〕
第三の老婆　でも、こいでお前さんに分(ぶ)があるわけじゃない。わたしもいっしょにすべり込もうから。
若者　神々よ。それだけはお許しを。一つの災難にとっつかれんのは、二つよりまだましだから。
第三の老婆　ヘカテにかけて、いやおうはありませんぞ。
若者　ああ、三度厄病神にとりつかれたおれだ。萎(しな)びた女と夜昼ぶっ通し一儀に及ばにゃならんとは。そしてこいつから放免されりゃ、お次は顎(あご)の下に香油瓶(レキュトス)をぶらさげた[5]プリュネ[6]ときやがる。これで不運でないっていうのか。救主のゼウスにかけて、こんな獣(けだもの)に追いまわされてるおれは、実もって運の悪い不幸な男だ。　（一一〇四）
〔以下観衆に向かって〕だが、ここに船を入れ[7]ますゆえ、この売女(ばいた)のおかげでひょっとしてとんだことになったら[8]、奈落[9]の入り口に埋めてくだされ。そして墓の上には、あとに残った奴[10]に生きたままで樹脂(タール)を塗り、それから両足の踝(くるぶし)のまわりに鉛を注いで香油瓶(レキュトス)の標(しるし)におっ立ててくだされ。　（一一一一）
〔若者と第二の老婆一つの戸口のなかに入る[11]。第三の老婆もおそらくその戸口より退場。つづいてプラクサゴラ、ブレピュロス夫妻の下女傍手より登場〕
下女　おお、幸福な民衆(デーモス)[12]、仕合せなわたくし。そしてわたしの奥さまこそいちばん幸福なお方。そして戸口に立ち並んだあなた方すべて[13]が、お隣さんも町内の人たちも、誰彼なしに幸福よ。わたしはその人たちの女中だけれど、頭にゃ素敵な香油をつけてんの。おお、ゼウスさま。だけどそんなことのすべてにまして、心が躍るはタソスの酒壺[14]。その香りったらいつまでも頭に沁みて残るから。他のものならたちまちに凋(しぼ)んで消えてしまうのに。だから、お酒の方[15]がずーっといいわ。本当にずーっと、おお神さま。生(き)の酒を注ぎましょう。香りの高いのを選びさえすりゃ、あなた方を夜っぴて夢中にさせる。ところでご婦人方、

お訊ねいたしますが、ご主人はどちらでございます。私の奥さまの旦那さまは。

コロス　ここで待ってりゃ見つかりましょう。

〔ブレピュロスおよび若い踊り子数名登場〕

下女　おやほんとうに！　お食事にお出かけのところだ。おお旦那さま。おお恵まれた、幸多いお方。

ブレピュロス　わしかね？

下女　ゼウスさまにかけて、他に並びないお方。あなたさまより幸福な方ってあるんでしょうか？　三万の余を数える市民[1]のなかで、たった一人だけまだ食事をなさらないあなたさまに較べて[2]。

コロス　この人を幸福だとは、お前、鮮やかに言ってのけた。

下女　〔ブレピュロスに向かい〕もし、どちらへおいでになります。

ブレピュロス　食事に出かけるところだ。

下女　アプロディテにかけて、ほんとうにみんなのしんがりでございます。でも奥さまがあなたさまと、それからごいっしょに〔踊り子たちを指して〕この娘さん方[3]をお連れするよう申しつけられました。キオス島[4]のお酒をはじめ、その他結構な品々がたんまり残っております。ですから、お急ぎなさいませ。〔観客席に向かい〕それから見物衆のなかで思し召しのある方は、また審査員[5]のなかで横見をなさらぬ方[6]は、ごいっしょにお伴をいたしましょう。何でもふんだんに差し上げますから。

ブレピュロス　鷹揚(おうよう)[7]にみんなに知らせて誰も除(の)け者[8]にはしないんだろうな。つまり、自由に年寄りも若者も小さな子供までも呼ぶんだろうな。〔観客に向かい〕と申すのは、皆さまに[9]夕食の用意がちゃんとできておりますから──[10]もしお宅にお帰りになれば。ところでわしは饗宴に急ぐところじゃ。松明もこんな結構なのを持っとる。

コロス　なぜそう愚図愚図[11]して、この娘さん方を早く連れてかないの？　あなたの歩くのに調子を合わせて、わたしが食前の曲[12]を歌いましょう。〔観客席に向かい〕そして、審査員の方々にちょっとお含みを願うことがあります。聡明なお方[13]は私の英知にお目を留めて判定なされ。よく笑うお方は、諧謔によってご判定下され。つまり、どなたも洩れなく私をお選びくださるよう、敢えてお願いいたします[14]。私がいちばん先に上演されたとて[15]、籤(くじ)に責を負わせることなく[16]、右の次第もれなくご斟酌(しんしゃく)のうえ、ご誓約をお忘れなく、狂言をつねに正しく判定なされませ。新奇の客のことばかり心にかける憎らしい遊(あそ)び女(め)の風は真似なさるな。おお！　おお！　ときが来た。ご婦人方、われらの仕事を果たすため饗宴に出かけるときが来た。〔ブレピュロスに向かい〕クレタの調子[17]であなたも足拍子を取りなされ。

ブレピュロス　〔足拍子をとって〕ごらんの通り。

コロス　そしてこちらの娘(ひと)たち[18]も……空(す)き腹ながら、華奢(きゃしゃ)な両足に調子を取るのだ。するとさっそく食卓に上るご馳走は

[19]かきにひれにくさめこざめ──
ずがいのきれはしおすずけ──
はちみつかけたしるふぃおん──
つぐみくろどりまだらばと──
はとにあぶったとりののう──
せきれいいわばとしんざけに──
つけたとにくにくえるはね。

〔ブレピュロスに向かい〕あなた、これを聞いたうえでさっそくにも[20]一皿取りなさい。それから腹をこしらえるために、豆粥(まめがゆ)も受け取って埃(ほこり)を浴びつつ急ぎなさい。

ブレピュロス　みんな、がつがつやっとるだろうて。

コロス　おみ足あげて。いあい[21]、えうあい！

ご馳走になるんだ。えうおい[22]！　えうあい！

えうあい！　勝鬨(かちどき)あげよう。

えうあい！　えうあい！　えうあい！　えうあい！

〔足取り面白く、ブレピュロス、踊り子の娘たち、コロス退場〕

訳註

三六三 (1) この街頭を照らすランプの光の下に女どもが集まる約束だったのである。

(2) 「打ち明ける」内容は女どもの今回の秘密の企て。

(3) 性交のさまざまの体位。

(4) 古註は「女陰の謂にして何人もこれをうかがう能わざるがゆえにかく呼ぶ」としている。

(5) アテナイの家では安全のために物置きや納戸に鍵をかけて封印し、鍵は主人が握っている習慣だったため。

(6) だいたい六月に当たるスキロポリオンの月に Athena Skiras のために女のみで行なった祭。本来の主神はデメテルだったらしい。

(7) ここは難解で古来さまざまの解釈が行なわれている。本訳はロジャースと共に写本の hetairas を認め、ピュロマコスはアガトンあたりの悲劇作家の佚篇の中に出て来る主人公あるいはこれを演じた役者、またはコロスの音頭取りをした人物の名と解し、彼がコロスの人々に対し何か劇の筋の進行中に身をひそめているように命じた句と見る。しかし「もし覚えておいでなら」の句はプラクサゴラの独白のなかにおいて観客に呼びかけるようで不自然であるため、ロジャースはこれも本来悲劇のなかの句でその主人公がすでにコロスに対し或る場合に身をひそめることを命じ、その場面になって音頭取りがコロスに主人公の句を想起せしめて身をひそめさせた言葉をそのままプラクサゴラが踏襲したのではないかと考えている。

(8) 「夜廻り」と訳した原語は以下にしばしば「触れ役」と訳したもの。夜のことゆえ、かりに上のごとく訳したが、それが kekokkyken (「雄鶏が鳴いた」) とされており、つまり夜廻りとは雄鶏のこと。

三六四 (1) サラミスはエレウシス前面のアテナイ領の島。サラミス島民にはアッティカの陸地との間の艀業に従う者が多く、彼らはつねに艀を漕いでいた。この二つのギリシア語から、その道の数奇者の隠語であったらしい。

(2) お酒と訳したのは葡萄酒。以下すべてこの例に倣う。日本流に言えばビールに塩豆とあるべきところ。この罰金としての品物は以下にも見えるごとくアテナイ婦人の飲酒癖を諷している。

(3) 以下の三行はコロス中の音頭取りが語ったと思われる。

(4) アリストパネスにしばしば出て来る魚。小骨が多くてそれを喉にひっかけたのである。

(5) アテナイ婦人は肉体の美観を損うと思われる毛はことごとく抜いたり剃ったりする習慣だった。民会では挙手採決が行なわれたのでこの習慣を中絶して男子たるを示そうとしたもの。

(6) アゴラはギリシア市民の生活の象徴であった。有閑の市民がアゴラで談論にときを費すことを agorazein という現代語に訳せぬ言葉で表現した。本篇に出て来るブレピュロス、クレメス及びもう一人の隣人がことごとく何を職業としているか示されておらぬことを考えあわすべきである。

(7) ヘシオドス以後の文献に見える女神。助言、助産、道路や門の守護などの働きをなすと考えられた。道路の神として三叉路に住むとされたが、またかかるところに多数の犬や妖怪を伴って現われる妖精とも考えられた。会話で女性はこの女神にかけて物を言う習慣だった。

(8) 髯のエピクラテスとあだ名された当時の有名な煽動政治家。リュシアスはこの、前から収賄の罪を犯していた男を、公金横領のかどで訴え死刑を要求している。ピロクレスのアルコンの年（前三九二―一年）に追放されているが、後にコリント戦役中ポルミシオスと共にペルシアに使いして、大王により買収されてアテナイ人に和平を奨め、使節の失敗のゆえに前三八七年ごろ死刑にされた。

(9) スパルタの領域のラコニアでできた靴。これは男の靴だった。

(10) 第一の女の夫。ラヴェンナ本古註では材木運びを生業としたとあるが他の古註によればラミアスは典獄であった。その職業柄の警戒癖の裏をかいた自慢である。

(11) 一古註によればクラテスの人食い婆ラミアを扱った同名の喜劇のなかに彼女が「杖を片手に放屁した」という句のあったのをラミアスの名から想い出して言ったのである。

(12) 伝説に、イナコスの娘でゼウスに愛され、ヘラの嫉妬をさけるため牝牛にされたイオを見張っていた人物で、百の眼をもっていたと言われる。ゼウスの手下たるヘルメスのために殺された。

(13) イオとあるべきところを、彼が典獄であるところからその手下の奴隷身

分の賤しい死刑執行人を持ち出したのである。要するに前の句に引続き、自分が夫の監視の目を盗んでステッキを持ち出したことの自慢。

(14)『アカルナイの人々』五ページ註(12)を参照。評議会の議場や議題を告示し、民会の開催を公告するのが彼らの役目でその席は演壇の横に並び一般の市民の席とは向き合っていた。

三六五(1) 古註に彼もまた美髯であったが、この名は女陰の隠語と説明されている。ペロポネソス戦役末期に当たり「古の制度」を求めた人々の仲間の一人に数えられ、三十人支配の暴政の倒された後、ポルミシオスは一般市民の復讐的態度に出ることを恐れ市民権を土地所有者に限ろうと提案した。七一行のエピクラテスと共にペルシアに使いし、彼もまた大王から巨額の賄賂を受けた。

(2) 前四世紀初頭の著名な人物。「もとは女だった」と言うのは若いころ美少年として男色の噂があったため。古註は彼をかげま乃至若衆としている。アテナイの港税の請負に関係してアンドキデスに攻撃されている。民会への日当を創始した人として民衆に人気があった。彼のきめた一オボロスをヘラクレイデスが二オボロスとしたので彼はさらに三オボロスに引き上げた。これにより人気を得た彼はもっとも重い官職たる将軍に選ばれ、艦隊の指揮に任じた。デモステネスは(恐らく港税事件に関連して)彼が一時投獄されたこともあると伝えているが、彼の民衆のためにつくした功績を賞している。しかし彼は競演する三人の喜劇作者が国家から受ける祝儀(優勝者への賞ではない)を削減したために彼らから怨まれた。

(3)「美髯の笛吹き」と古註に見える。

(4) 女が男となり、さらに一流政治家となったこと。

(5) ここは国家を難航の舟に譬えているので直訳すれば「帆の力でも橈の力でもどうにもならぬ」となる。

(6)「あの一儀」と訳したのは交合を表わす俗語。この語は今後もしばしばお目にかかるが、以下おおよそ「かの一儀を行なう」と訳した。

(7) 公開の席で演説する者は花冠をつけて行なう習慣だったのでプラクサゴラはその二、三を手にしていたのである。冠と言ってもオリーヴの枝や花などで作ったもの。

(8) 太陽に灼けた女たちの皮膚の色と白い烏賊の焙られてちょっと色づいたところを比較したものか。

(9) お祓い役とは民会や観劇など人々の集まるとき犠牲にされた仔豚を持って会場の周囲を廻り、その場所を祓い潔めた者。仔豚の字は「女陰」の隠語であったゆえプラクサゴラが韻に改めたのかと想像されている。

(10) アナクサゴラスの弟子。他に所伝がないがアリストパネスによりもっとも女との非行に富む人間として痛罵せられている。古註は彼を女と悪業を行なう歌手とし、あたかも彼がプラクサゴラを取り巻く女のなかにいたかのごとくに引き合いに出したものとしている。もしそうとすれば、三十年の余にもわたって作者は同一人物を非難しているわけである。

(11) 祓い潔めの役の通った線のなかに入って。

(12) 宴飲の前にも人々は冠をつけた。第一の女は民会の習慣を知らぬために冠を渡されてこれから飲むのだと解したのである。

(13) 民会のこと。

(14) 厳かな祈禱の前にはお神酒を供えるのがつねだった。民会開会に際しての祈禱から女どもはお神酒が供えられると推量し、しかもそれは会合した男子どもが酒を飲むための口実であると考えた。アテナイ民会の度重なる愚かな決議を揶揄すると同時に女どもの酒好きを暴露せる句。

(15)『アカルナイの人々』六ページ註(7)参照。

三六六(1) 直訳では「水溜めを作る」。これも女どもの飲酒癖を揶揄せる句。

(2) デメテルとペルセポネ。女が誓いに呼び慣れた女神。一五一—一五二行では男性形容詞を使いみごとに男らしくやってのけたが、ここで忽ち失敗しプラクサゴラにとがめられるのである。

(3) 男性として話すこと。

(4) 古註は女々しくて絶えず女に立ち交じっていたゆえに引き合いに出されたとしている。

(5) 記録の遡る限り民会は存し、他に参政権なき大衆もこれには出席できた。作者の言わんとするのはアギュルリオスが民会手当を定める前には出席者の少なかったことであろう。

(6) 民会には出席者の制限はなかったから、定刻に出た者は皆手当を得た。だからこれは中流以上で三オボロスと言うような鐚銭を受くるをいさぎよしとしなかった者(思想的には反民主的な者)、または農民で年に四十回の民会に田園から出席しかねた連中ではあるまいか。

(7) アプロディテに誓うのは女の習慣だった。

(8) 古註に「ピロコロスは（この喜劇上演の）二年前アテナイ人（写本は誤ってラケダイモン人とす）とボイオティア人との間に同盟成立すと伝う」と記しており、この同盟はディオドロスではポルミオンのアルコンの年（前三九六—五年）スパルタを敵として結ばれたとされている。はじめハリアルトスの戦さに勝ち有望なスタートを切り、コリントス、アルゴスの加入を見ていわゆるコリント戦役となった。しかしコリントにおいて同盟軍は敗れ、アテナイ軍がとくに打撃を受けた（前三九四年八月初めごろ）うえその後間もなくスパルタのアゲシラオス王のためにコロネイアで再敗した。一九四行の「いちど成立すると不満を感じ」とあるのはその結果である。

(9) 古註はこれをコノンと解している。しかし彼は当時東方に活動中でこの役割をしたはずはない。クセノポンによれば提案はテーバイの使節が行ないアテナイ人がこれに賛成演説をしたが、その名は伝えられていない。

(10) ペロポネソス戦役の結果アテナイは僅々十二隻の三段橈船の保有を許されたに過ぎなかったが、このころにはすでに艦隊復興に大童だった。

(11) サラミス海戦以来貧民は軍艦の漕手として活動し日当を与えられ、この軍事における役割が民主政の徹底にあずかって力のあったことは周知であろう。富裕者は三段橈船の建造ではないが艤装、船員徴募の義務を輪番に負わされ、農民はペロポネソス戦役の際のごとく敵軍侵入により畠や果樹園を荒されるおそれがあるため、この両者は当然反戦的であった。

(12) 言うまでもなくペロポネソス戦役はアテナイとコリントスとの争いに端を発し、アテナイが敗れ去った後にもコリントス人はアテナイへの敵意を失わなかった。このころにはスパルタという大敵を向うにまわしてコリントスは欣然アテナイと手を握ったが戦争がコリントス市をめぐってつづけられ、その災害が大となるに及びコリントス市民の一部にはアテナイと手を切って再びスパルタと結ぼうとの意嚮も生まれ、同時にアテナイ人の間にも彼らへの反感が萌したのを警めているのである。

(13) 「アルゴスの市民」を意味するがここはアテナイ市民の一人。ヒエロニュモスと共にいかなる人物か不明。古註は皮肉に事実を逆に述べたものでほんとうはアルゲイオスが賢く、ヒエロニュモスが馬鹿だったとしている。

(14) 前四〇四—三年の「三十人」の暴虐なる支配を武力により打倒し、民主政の復活にもっとも功績のあった人物。むろん民主主義者であるが、この功績とその慎重なる性格とにより作者はこれに好意を寄せていた。このごろアギュルリオスが民会手当により民心を得ていたので作者はトラシュブロスのために弁護したのである。トラシュブロスは前三九五年テーバイとの同盟成立以来スパルタと戦い、前三九四年夏コリントス付近でスパルタ軍に敗れた。ここの句はこの当時の彼の立場を物語ると思われる。しかし彼は前三九〇年には将軍に選ばれ艦隊を率いて小アジア方面に活躍したが、やがて部下の行為のゆえに怨まれてアスペンドスの人々のために殺された（前三八九年夏）。

三七 (1) 古註によれば跛で市民権喪失者だった。

(2) 男は肩に担ったり手にさげた。ヘロドトスはエジプト人の風習が他民族のそれと異なる一例として男が頭上に物を運び、女は肩に担ぐことを挙げている。

(3) 婦人のために掟を与えたと考えられたデメテルのための祭。十—十一月にわたるピュアノプシオンの月の前半（十月の後半）に行なわれ、参加者は既婚婦人のみであった。

(4) 古註は、かの前四〇四年の「三十人」の寡頭支配の暴虐からの避難と解したが、ロジャースの言っているように市内に残虐を逞しゅうしている「三十人」の支配を逃れて民会議場たるプニュックスの丘に安住の地を見出したというのはおかしく、またそのころには民会が正規に開かれたとも思われぬ。それで一般にはペロポネソス戦役開始の際におけるアッティカ田園の民の城壁内への避難を指すと解されている。これに対しロジャースはそれがほぼ四十年も前のことで観客のなかにはその記憶のないものが多かったはずとし、ペロポネソス戦役の末期前四〇五年アイゴスポタモイの勝利の後にスパルタのリュサンドロスがアッティカの外に在住せるアテナイ人をことごとくアテナイ市に追い返したときのことを指すと解する。おそらくこれがもっとも無難な説明であろう。

(5) 『アカルナイの人々』五ページ註（1）参照。

(6) 大部分の政務官が抽籤により任ぜられ、かつ一年任期で重任不可だった当時、選挙により任ぜられ幾度でも重任を許され、従ってもっとも名誉とされた職務で、毎年十人が選出された。以下プラクサゴラは民会で成功したの

ち将軍あるいは女将軍と呼ばれているが、訳文にはこの一語を「大将」と訳した。

(7) ケパロスが陶師であったことはプラクサゴラの返答で明らかであるが、たぶん前四世紀初めから七十年代までさかんに民衆の頭領として活躍し、弁舌家として知られたコリュトス区出身の同名者らしい。古註はこれを別人としている。

(8) ネオクレイデスというアテナイ人は大勢あったが、『福の神』(六六五行)古註に「演説家にして告訴常習者(シュコパンテス)」と誌された人。

(9) 古註は弱視の者をからかった諺としている。

(10) 普通「人の話を中絶させる」の義に使われたが、直訳すれば「下から打つ」の義であり淫猥な意味をもち得た。二五八行の「衝かれること」もプラクサゴラが「邪魔立て」の字を淫猥に解したことから来ており「調子を合わせる」も同様である。

(11) 民会においては賛成者は挙手によりその意志を表示した。

(12) 足(tō skele)はその双数形の示す通り淫猥な意味である。

三八(1) 夫の下衣で長すぎるため。

(2) プラクサゴラと第一、第二の女。

(3) 町方の女どものセミ・コロスの人々。

(4) この集合の場所に寄らずに。

(5) アテナイの九人の高官(アルコン)のうちの六人がこの名で呼ばれる職務について司法関係の事務を扱ったが、判決は陪審者の投票によったゆえ裁判官ではない。

(6) 原文は「にんにくの漬け物に満足して」。

(7) 原文は「酸っぱいサラダのような様子で」。以上ともに田舎者の食物で、田舎から朝飯もそこそこに急いで埃を浴びつつ民会に馳せ参じた者の姿を写す。

(8) カリティミデス、スミキュトス、ドゥラケス、すべて男性名なることに注意。また古註によれば実在人物の名ではない。

(9) 民会日当が始まってから遅刻しなかった参会者は入場の際にこれを与えられ、散会のときにこれと引換えに三オボロスを受け取ったものらしい。

(10) 二八〇—二八一行に登場を予測された田舎からの女ども。その数は十二人であるが、女が変装していることを示す句は歌のなかには見えない。作者の好意を寄せる農民を代表し、市内の民会手当で暮らす連中には反感を示す。後者を代表する第一のセミ・コロスがまだ舞台から去りきらぬためにちょっと小ぜり合いが起こるのである。

(11) ペルシア戦役以後前五世紀半ばまでアテナイに活躍せる人物。前四七九年キモン、クサンティッポスと共にスパルタに使いしプラタイアの戦いに出陣。前四五八年将軍としてコリント人と戦い、翌年再び将軍としてオイノピュタの戦いにボイオティア軍を大いに破った。古武士型のところがこの作者の好んだ点である。

三九(1) 煉瓦師の手伝いで最下級の労働者。

(2) kopros(糞)の字とアッティカの区コプロスの所属員 Kopreios とにかけて作ったでたらめの名。「戸」とは肛門の隠語で、その男がしきりに戸を叩く、とは古註の説くごとく頻りに便意を催したの意。

(3) 前出のラコニア靴が男のであるのに対し、女の靴。

(4) 『鳥』一二三ページ註(9)参照。

(5) 「井戸縄」とはブレピュロスの用を足しているさまを評した句であるが、この「井戸縄」の字を第四格の副詞的用法と見て、「長い間にわたり」と解する者もある。しかし露骨なる叙景と見るべきであろう。

(6) 野梨の実は収斂性を以て知られた。

(7) 古註はトラシュブロスがコリント戦役中に休戦のために来たスパルタ使節に対し反対演説を行なう旨をアテナイ人に約束しながら、スパルタ側に買収されて演説を中止する口実に野梨を食ったので声が出ないから演説できぬといった故事にもとづくとしている。この古註の述べる事件は前三九三年のこととして一般註釈家に採用されている。

(8) 前出の野梨 achras の字とアッティカの区名 Acherdus とにかけた洒落。

(9) この形容詞は男色の義でブレピュロスの目下の苦痛を癒す術との関係は明瞭である。

(10) 古註に「医者にあらず、男色を行なえる演説家」とある。医術を認めることはこの習慣を認めることとなるので「知らぬと言うだろう」と付け加えたのである。

(11) 古註に「女のようで陰間」とされている。

（12）アンティステネスは男色の習慣があったと共に便秘症にかかっていたことは本篇八〇六—八〇八行で明らかである。

（13）助産の女神。分娩に際して女どもはこの女神の名を呼んだ。

（14）**amis**（溲瓶）と **skōr**（大便）との合成語 **skōramis**。恐らくそれの底に開閉できる栓があったために譬えに引き出された。

三七〇（1）『アカルナイの人々』五ページ註（14）参照。

（2）絶えず屋内で仕事をしているため靴屋は色の白いものとされていた。本篇の初めにプラクサゴラその他は皮膚の色を黒くする試みをした旨見えるが、それは大した効果がなかったわけである。

（3）註釈によればアイスキュロスの『ミュルミドン』のなかの「アンティロコス、今は亡き（パトロクロス）よりも生きて残れるわれを歎きたまえ」の句をもじったもの。原句は言うまでもなくアキレウスが親友パトロクロスの死を告げる使者への言葉。

（4）演壇へである。「這う」と言うのは眼の悪いのを示すためか？　四二八行にプラクサゴラについては「跳び上がった」とあるのと対照せよ。

（5）ネオクレイデスは恐らく「国家を救わんがためには」とつづけるつもりであったろう。

（6）無花果の若い枝を傷つけたときに出る酸性の樹液で乾酪（チーズ）を作る際に牛乳を固めるために常用された。

（7）古註には単に「貧乏人」と説明せるのみ。この名のアテナイ人は数名知られているがここに当たる者はない。「裸と見えた」とあるごとくつねに破れた着物で知られたと思われる。

（8）彼は自分の欲する衣服の値段を不当に安く評価しているのである。

（9）押麦製造で富をなし、公共奉仕を行なったといわれる人物。

（10）言うまでもなくプラクサゴラである。

（11）あの有名な同名人、すなわち富人で将軍、政治家として活動し、保守派に属し、ペロポネソス戦役にニキアスの和約（前四二一年）を結び、前四一五年シラクサ遠征軍を率い、前四一三年悲劇的最期を遂げた人物の孫と推定される。

（12）男装せる女ども。

三七一（1）アテナイ民主政治の悪しき副産物とも言うべく善良な市民のひんしゅくを買った連中。毎年第六プリュタネイアの主要民会においてかかる職業的訴訟人に対する予備的告訴三件以内が採決された。

（2）「女を動かす」と言う表現はアリストパネスに限らずしばしば淫猥な意味に使われた。

三七二（1）女だてらに男装せる姿。

（2）民会議場。

三七三（1）夜が寒くてブレピュロスは自分の外衣を蒲団の上に掛けて寝ていたのである。

（2）冠、香油瓶はともにアテナイ人の葬儀のさまを示す。出棺前に遺骸には白衣を着せて頭には花冠をつけ、ギリシア人の生活にもっとも親しいものだったオリーヴ油の容器たる小瓶の幾個かを副葬品として添えた。以下においても香油瓶はしばしば死、葬儀を象徴する意味で使われている。

（3）追剝ぎを防ぐためにあくまで男になりすまして、の意。

（4）原文は「一ヘクテウスの小麦」。ヘクテウスは五二リットル余の一メディムノスの六分の一。民会出席者には三オボロスの貨幣が手当として渡されたが、これで購い得る小麦の量を述べている。この記事は前四世紀初葉の小麦価格が一メディムノス一八オボロス、すなわち三ドラクメーだったことを教えている点で大事であり、他の史料の記事と比較して正しいとされている。そして『蜂』のピロクレオンと同様この老人に三オボロスが無意味でなかったことを示し、古代市民の性格の一端を暗示する点に興味がある。ブレピュロスは便秘の一件は伏せておいて、偏えに自分の上衣のなかったことを民会欠席の理由としているのである。

（5）古代市民のいわゆる政治人的、消費者的性格は五六一—五六三行にいっそう顕著である。

三七四（1）この一行は口出しをせぬという約束をたちまち破った夫に対するプラクサゴラの不満の表現。しかるに夫はそれを彼女の計画せる共同生活の細目かと思い、次行のような質問を向けるのである。

（2）有名なペルシア帝国の金貨。ただしこの金貨はかのダレイオス一世の名に因むのではないことは古代人がすでに認め、今日でも専門家に承認されている。

（3）民主政期のギリシア人は今日の動産をかく呼んだ。

三五（4） 煽動政治家や役に就いた市民の役得、公金横領などを指す。

（1） 美人のこと。

（2） ブレピュロスはプラクサゴラが女共の男に対する競争を大袈裟に「戦さ」と言ったのでちょっと呑み込めなかったのである。

（3） 原字は「公けの場所で」。

（4） 古註に鼻の低い者としている以外には不明。七三六行によりこの男が自分の鼻の低いにもかかわらずめかすのに苦労しているのがわかる。

（5） 指環をはめているのは町方の紳士であった。

（6） ここでは田舎者の粗末な履物の意味で使われているゆえかく訳した。

（7） 『蜂』一〇三九行、『鳥』一三四八行以下にも父親を絞めることが見えており、何かそのような有名な事件があったと想像されている。

（8） 二人とも古註に破廉恥漢と見ゆる以外には不明。

（9） 古註に「ならず者」と見え、『福の神』三一四行から推してこの男がかつて顔に糞を塗られたことが噂に立っていたので、その接吻は閉口と言うのである。

（10） 「いぬ薄荷」という植物であり、周知の香気をもっているが minthos が「人糞」を意味する字なので前註の事件に因み洒落たもの。

（11） ロジャースの測定によれば影を落す棒が一呎として日歿前三十一分である。

（12） 原字は liparōi すなわち「体に膏を塗って」。

三六（1） 『蜂』に詳しく描かれているように裁判所の審判員としての日当が大勢の市民の生活を助けていたことを示す。

（2） 「酒癖が悪くては」は原字にないが意味上補った。

（3） この字 maza は「大麦菓子」の意であるがここは古註の説明するように食物一般を指す。

（4） この一句はプラクサゴラのちょっとした冗談にすぎない。

（5） 古註は裁判所のそれと説明している。

（6） 古くからギリシア人の間では大人どもが身を横たえて饗宴を楽しむ間に、少年が勇士の行為を歌ったり、物語ったりする習慣があった。

（7） アリストゲイトンと共に僭主ヒッパルコスを暗殺せんとせる者。暗殺は成功したが護衛兵のために殺された。この二人がまさに暗殺を行なわんとしているところを表わした群像はいわばアテナイ民主政治の守護者の象徴としてアテナイ独立時代にはとくに尊崇された。

（8） 広場（アゴラ）の最古の建物で第二のアルコン（アルコン・バシレウス）の役所であった。β組がここで食事するとしたのは古註の説く通り basileios の頭文字のゆえである。

（9） 古註はこの建物の名をβの場合と同様にθではじまると考え Thēseion（テセウス神殿）と解したが理由がない。Harpocration の basileios stoa の項にはこれにならんだストアとしてゼウス—エレウテリオスのそれが伝えられているゆえそれであろう。つまりθについてはプラクサゴラは何の洒落も言っていないのである。

（10） 原字は alphitopōlis すなわち「押麦市場の（ストア）」。ここも組の名と行先の名は無関係であるが試みに音を合わせてみた。

（11） 原字は hina kaptōsin? この字は「貪って食ったり、飲んだりする」の意。それは押麦市場にふさわしいがブレピュロスがこの問を発したのは κ（カッパ）と kaptō の語呂から洒落たものである。それゆえ訳文では字義に捕われず κ に近い邦語を充てた。

（12） 次行の松明と共に宴会帰りの人たちのおきまりのいでたちであった。宴会の花冠には多く薔薇の花が使われたといわれる。

三七（1） ここの他多くの記事により当時の女の部屋は多く二階にあったと考えられている。

（2） 原文には「二度実る無花果の葉」とあり、これは男性性器の隠語と解されている。従って全体は masturbari の義。

（3） 原字キュプリスはアプロディテの別名で情事を意味した。

（4） 仔豚は喜劇作者によりしばしば女陰の義に使われた。

（5） 粉飾ゆえ当然使用後も白い粉がついているゆえにかく言ったもの。

（6） 原字は「聖籠運び」。パンアテナイア祭の行列には、上流家庭の数名の少女が聖籠を捧げて行列の先頭に立ったがこれはすこぶる名誉のこととされた。ディオニュソス祭においても同様に一人の処女が籠持ち役をしたことは『アカルナイの人々』二五三行に明らかである。

（7） パンアテナイア祭の行列がパルテノンに着いたとき「籠運び」の少女が腰を下ろすための椅子を運んだ者とロジャースは推定している。ここでは土

瓶がこの役に充てられている。

(8)　籠持ちの少女、すなわちここでは粉篩。

(9)　籠持ちの少女につき従い、衣裳や髪などの世話をした少女。クレメスがいかなる家具をこの名で呼んだかは不明。

(10)　これもかの祭礼の行列の一員。在留外人(メトイコス)で七四二行の蜜蜂の巣を運んだ者の妻がこの役をした。クレメスが水差しをこの名で呼んだか、あるいは他の道具に水差しの役をふりあてたかは不明。

(11)　雄鶏のことを洒落て言ったもの。女性形は前述の行列における楽手が女だったためである。古註はこれを「粉ひき女奴隷」と解し、また石臼のこととみる解釈もあるが、雄鶏の土偶を舞台で使ったものとみる。

(12)　これと菓子とを盛った鉢を捧げて行列に加わったのも在留外人だった。これもクレメスが自分の鉢をこの役としたのか、他の器具をあてたか不明。

(13)　これを持った老人連も行列に加わる習慣だった。『蜂』五四四行参照。

三七八(1)　意訳で、原文は「私は見た上で信用した」の義。「見届けたら信用しよう」という風に本文の変改を試みる者もあるが、これを当時の諺でこの男が引用せるものとするロジャースに従う。

(2)　古註は大部分の神像はこの格好だったとしている。事実『鳥』五一八行にペイステタイロスの言葉として、神々に贄を捧げるとき臓物を御手のなかに置くのが慣例だった、と見える。

(3)　ギリシア人は地震が神意にもとづくものとして、これが起こると遠征軍を引きかえらせたり、民会を中止したりした。

(4)　原字は「避けるべき火(稲妻)」で、この形容はギリシア人が雷をゼウスの下したものとし、その落ちたところを踏むことを避けたためである。

(5)　この動物の横切った道は他人が通るまでは歩かぬとか、石を三つ投げてから通るという迷信があった。

(6)　原文は意味をなさぬ句であるが、七七八—七八三行に納めるのではなくて受けることのみを主張せるこの男の、クレメスを揶揄する言葉と解されよう。

三七九(1)　三六六行に出て来た人物。ここの記事により便秘症にかかっていたことが知られる。おそらく彼はけちんぼとして知られていたので、「きっと出す」は反語である。

(2)　古註に貧乏な人とされている。

(3)　前四四九—八年有名なカリアスの和約をペルシアと結んだ人として、またアテナイの最富人として知られた同名人の孫で、非常な浪費により遂に産を傾けたので有名であった。『鳥』二八三行以下を見よ。

(4)　カリアスのこと。ここは隣の男の独白である。

(5)　内容年代不詳。

(6)　ペロポネソス戦役の後半前四一三年にスパルタ軍がアッティカのデケレイアを占領したためにラウレイオン銀山の採掘が不能となり、やむなく銅貨を通用せしめたときのこと。それは前四〇四年に戦いが終わった後さっそく回収されたはずで、そのころのことを叙しているのである。

(7)　アテナイ人は貨幣を口に入れて持ち歩く習慣があった。『蜂』七九一行参照。

(8)　押麦を入れるための袋である。

(9)　有名な悲劇詩人と関係のある人物か否か不明。

(10)　原語は「四十分の一税」。財政の非常時に取られた財産税のように思われるが、当時の疲弊したアテナイでは市民の財産の四十分の一で五百タラントンの巨額に達することの不可能は明らかだったはずであり、財産税が一時にもせよ提案者を人気者にしたという点も疑わしく、これは何らかの間接税で、しかも五百タラントンというのは作者の甚しい誇張となす説がある。

(11)　ここでは「実効を伴わぬ大袈裟な言葉とか案」とかの意。『蛙』四三九行三二八ページ註(7)参照。ここは四十分の一税ぐらいではとうてい五百タラントンの巨額に達せぬことがわかったの意。

(12)　首を入れる半円形の穴のあいた板で品物をそれに吊して運んだ。『蛙』の八行にも見える。

(13)　ギリシア人は横臥しながら食事した。

(14)　共産制の新制度に売買があるわけではないから、旧制度における「花売娘」といったような若い娘の意であろう。

(15)　古註に固有名詞で女に対し恥ずべき行ないをせる人、と見えている。

(16)　ここでは女陰の意味をかねている。『騎士』一一八五行にはアリプラデス(一一二九行及び註を見よ)に同じ行為ありとして、より明瞭に述べられている。前行の「乗馬服」も隠れた意味をもっていることは『蜂』五〇二行か

ら察せられる。

(17) ここは固有名詞であるが、元来「老人」の意の字であり、老人が国庫支給の新しい衣裳に若返って躁ぎながら若者と宴会場に赴く姿を描いたと解される。

三八〇(1) 「他人が早く供出するのの邪魔にはなるまい。他人は私を待たずに供出するだろう」の意であるが、次の説明で明らかなとおり反語である。

(2) 先に財産納付を頑強に拒んだこの男がご馳走のことを聞いて急に新制度礼讃に変わったことを示す。

(3) 以下数行で七九九行以下の相手の口ぶりを今度はクレメスが真似していることに注意。

(4) 共に奴隷の名。

(5) イオニア人は享楽的、惰弱として知られていた。

(6) 「見張りのいない間に他人の葡萄畠の収穫をする」、すなわち見る者のいないのに安心して大胆なことをする者の譬。

(7) 「これと共に語れ」というのが原義で、舞台を醜い老人が通りかかったのを指して言った言葉、との解釈もあるが、ロジャースに従い「これ」を『女の平和』一〇九行に olisbos と呼ばれている男根の張り形と見る。

三八一(1) 「つび」と言う古語で訳した trēma は「孔、竅」の義であるが『女の平和』四一〇行に玉門の義に使われている。

(2) 無論この意味だけでも十分であるが、この字は「冷たい、無気力な情人」の陰語としても使われた旨をロジャースは述べている。しかしこの陰語の真の意味は陰萎と思われる。

(3) 古くは老婆に対する親愛の呼びかけとして使われ、後には養母、乳母を指した言葉。舞台では敵役の老婆に喜劇的に呼びかけたものかもしれないが、歌の内容からは『ロミオとジュリエット』に出るジュリエットの乳母のような情事の仲介を辞せぬ老婆である。

(4) 特定の個人ではなく情人一般を代表させた呼び名。この固有名詞の前半に含まれる orthos (erectus) なる形容詞は九〇八行の陰語としての ophis に対立するかと思われる。ファン・デールの註にのべるようにこの歌の句では男性性器の張り形の陰語であろう。

(5) 三八〇ページ註(5)を見よ。

(6) レスボス島の女どもは同性愛を行なうものとして知られてたい(『蜂』一三四五行参照)。今日でも lesbisch とか Lesbiasmusという字で女性の変態的行為が呼ばれる。λというのは leichein (舐める) の語の略称。

(7) 『福の神』一〇〇八行にも同じ冗談が見える。当時よく行なわれたもので新奇ではなかったらしい。

(8) 実在の人物ではない。

(9) 古註には「禿頭で貧乏人」とあり、実在者か? この固有名詞は老人ゲロンに通じる。

(10) 「若い男はけっきょく年増を好む、という持論の正しいことが証明されよう」の意。

(11) 以下九三八―九四五行の若者と老婆との歌は共に相手に聞こえることを目的としたのではなく独白的なものである。老婆も娘も若者の行動を見守っているが先に見えたようにいちおう身を隠しており、若者は老婆の存在に気がつかないのである。

三八二(1) 古註は「足りない女」と伝えているがエウスタティオスは「女の作曲者」とし Etymol. Magnum もまた「昔の笛吹き女で作曲者」としている。本文は直訳すれば「カリクセネの時代の遣り口」で、それは時勢おくれのものを意味した。

(2) 「解き放ちたまえ」の義。恋を成就し得ぬ悩みより解き放ちたまえ、の意。

(3) kolpos は「胸」と言うのが第一義であるが「女陰」の義にも使われた。次註参照。

(4) 多少意訳。直訳に近い Minckwitz-Wessely の訳を紹介すれば O Lieb, ich will, dir ruhend im Schoss, abfingern im Takt des Sitzteils schwellend Rund である。

(5) 自然の美を鍾(あつ)めて作詩する者としての詩人の譬喩。『鳥』七四九行以下参照。ここではさきほどの若い女の歌を讃めた気持である。

(6) charis (優美) を擬人化せるもの。通常三人とされ、アプロディテの侍女とされたり、ムーサイの同伴者とされた。

(7) tryphē は優しさ、柔かさを第一義とするが第二義には淫奔を意味する。これを擬人化したもの。「顔」の字は化身、権化の意。

(8) アナプリュストスはアテナイ東南部のスニオン岬に近い区。クレイステネスの改革以来各市民はどこかの区民であった。ここにAnaphlystosの区名を選んだのはanaphlaō＝masturbari にかけたもの。

三八三 (1) これもまた binein＝coire にかけた洒落。この洒落は『蛙』四二七行にも見える。

(2) ここはアテナイの民衆裁判所の制度をもじって老婆を拒む理由としたのである。「六十歳以上、二十歳以下」の字の後には共に女性形たる gynē（女）と dikē（裁判）の二字が同時に略されているわけである。古註によれば「何年以来の繋争問題を扱う」と裁判所で公示したので、その口調を真似て「六十歳以上」の年寄りはご免「二十歳以下」の若い娘は歓迎の意を述べたのである。

(3) パイトイはトラキアの住民であるが、その法の内容は不明。何かその遵守について選択を認める法があってアテナイ人の間に知られていたらしい。

(4) 文字通りの意味の他に elaborately ambiguous な意味が含まれている。

(5) ポルックス（二世紀の註釈家）によれば粉篩のまわりを、粉をいっそう綺麗にするために包んだ羊毛製の布。ただし、なぜ若者がここでかかる物を持ち出したかは明らかでない。アテナイの通人の間でありふれた辻君を呼ぶのにこの名をもってしたとの想像も行なわれている。ただその原語が前行の「叩いて」(Krouseis) と語呂を合わせていることは言うまでもない。

(6) 老婆は一人出を恐れる娘のような口ぶりをしているのである。

(7) 五三七―八行参照。

(8) 葬儀屋に死骸と間違えられて連れ去られるな、という忠告。

(9) 直訳すれば「籤で私を抽き当てたアプロディテ」。これは当時の観念で人は生まれると直ちに何かの神あるいはダイモンに帰属せしめられ、後者が生涯その人に付き添って守護すると考えられていたのにもとづく表現。

(10) 当時財産の五百分の一を徴集する財産税のあったことが推定されており、これをもじって老婆の唯一の財産はその高齢のみという軽蔑の意味で放った言葉。税金の未納者は市民権喪失者であり、新制度による特権は与えられぬ、というつもりである。

(11) 物を懸けるための木釘であるがここは古註により男根の陰語と説明されている。

(12) 旅人を捕えて自分のベッドの大きさに伸縮させたと伝えられる有名な伝説的盗人の名であるが、ここはその伝説とは無関係で、一〇一七行の prokrouein から作った人名。訳せば「予備的交合者」の義。

(13) 三八二ページ註（8）を見よ。「区民のなかの誰か」の義で、若者をアテナイ市内の住民とみて上のごとく訳した。

(14) メディムノスは穀物の量目単位で約五十二リットル。イサイオスに「法律の明文により子供は契約の権を有せず、婦人は大麦の一メディムノス以上についての契約を禁ぜられている」とあり、古註の説く通り男女の地位の転倒により本文のごとくなったのである。

三八四 (1) 小売商とは別で海外貿易をする者。古註は彼らが兵役免除の特権を有したと伝えている。これは輸出入の促進のためであろうからアテナイの経済政策として注目に値する。しかし四世紀のころには貿易商でないものがこの職業を詐って兵役を免れんとした。『福の神』九〇四行参照。

(2) 古註によれば、「ディオメデスはトラキアの人で己の娘を淫売婦に仕込んでいた。旅人が通りかかると彼を娘と無理やりに同衾せしめ、男を満足のあまり死に至らしめた。神話ではこの娘たちは食人馬と呼ばれている」と。この所伝の正否は別として「ディオメデス的な必然」は当時諺となっておりプラトンの『国家論』にも見える。

(3) 英名 Majoram という植物。これと次行の葡萄の枝とが一般に寝台の詰め物だったらしい。若者は老婆の要求に応ずるような口吻で臥床を用意させながら、すぐにこれが臨終の床の準備であることを言ってのける。

(4) 古註により「遺骸のように冠をつける」と説明されている。

(5) ポルックスに「忌中の家を訪れた者は立ち去るときに水を手に注いで穢れを去った。この水は陶製の器に入れて家の前に置かれたが、その水は他の家から持って来たものでその器は ardanion と呼ばれた」と見える。

(6) 原字は今までしばしば出た「花冠」。次註を見よ。

(7) 老婆の感ちがいした新婦のための花冠ではなくて、死者の副葬品として用いられた蠟細工の花冠と言うわけ。

(8) テーバイのライオス王の子で不思議な運命によりその母イオカステと母子相姦を行なうにいたったと伝えられる人物。老婆は若い女にイオカステに譬えられたにはこたえたと見えて、そこそこに舞台を去る。

(9) 古註は「老婆の着ていたサフラン染めの上衣の色から言ったのか、あるいは老婆に何か傷があったためか」とし、ロジャースは後者を正しいとしている。

(10) 用便に行くふりをして逃げることのないための。

(11) 杜の静寂のなかに急に恐怖を起こす者として（panic の字の源）知られたアルカディア系の半獣神。マラトンの戦いの後にアテナイにその祭祀が齎された。本来一人だったがここのように喜劇や後期作者では複数形でも見える。ここは若者が第三の老婆を、第二の老婆から解放してくれる若い娘ぐらいに思って助力を乞うたのにその正体を知ってびっくりしたので、この驚愕をパンの与えるそれに比してこれに呼びかけたもの。

(12) フリュギア系のキュベレ女神の随伴者。キュベレのために騒がしい音楽や舞踊を伴う熱狂的な祭儀を行なった。ここではパンと同様恐怖を与えたものとして呼びかけられている。

(13) ゼウス神の双生児の意で、二人の名はカストルとポリュデウケスで、騎士として優れ、とくに戦場における危急の際の助力者と信ぜられたが、後には病気をはじめ、あらゆる困難からの救助者と考えられた。その信仰はカストルとポルックスの形でローマ人の間にもひろまった。

(14) 第二の老婆。これは依然として彼を捉えているのである。

三八五 (1) 第三の老婆は第二のよりさらに醜いことを自認しているわけである。

(2) カンノノスは提案者の名。クセノポンにその内容が見える。曰く「誰かアテナイ市民に不正を加うる者は民衆の面前にて縛せられたるままにて弁論を開陳し」云々。ヘシュキオスや古註は犯人が「両側から押えられて陳弁する」としている。

(3) 本来スカールのように一対のオールをもって力漕することであるが淫猥な意味に使われた。

(4) 植物の名。古註には「交合のための必要物」と説明されており、アテナイオスに強精、催淫剤としての役割を示す引用が多く挙げられている。

(5) たびたび見えたようにここでも香油瓶は副葬品で「死期に近い」の意。「老婆の頬が瓶のように垂れ下った」の意にとる古註は誤りであろう。

(6) 元来蟾蜍（ひきがえる）を意味し、アテナイで遊女一般を呼ぶあだ名であった。前四世紀の有名な白拍子プリュネは本篇よりも時代が下るのでここは特定の遊女を指したものではない。

(7) 第二の老婆の言うことをきいて「その家にはいる」の意。

(8) 「死ぬ」の意味でしばしば使われた語。

(9) この字は原文にはなく単に入口とあるのみであるが前後よりかく補訳。

(10) 正しくは「地上に残った女」。家に男を引き込んだ第二の老婆は彼と共に墓のなかに入るので、残るのは第三の老婆である。

(11) 背景二軒説をとったヴィラモヴィッツ（『女の平和』）は作者が以前の住者（すなわち若い女と第一の老婆）を無視して、その戸口のいずれかに第二、第三の老婆と若者が入ったとした。背景三軒説をとれば第三の家に入ったと考え得る。

(12) プラクサゴラが新制度の立案者として新時代に最高の地位を占めているから。

(13) ブレピュロスその他二人の隣人の戸口の前に立った、の意にとり、コロスの女どもと解する。

(14) 頭髪の香油と頭のなかに廻った酒との比較。エーゲ海北岸のタソスの葡萄酒は瓶に詰める際に蜂蜜に浸した小麦の捏粉を入れたので甘味と香気が強かった。

(15) 原字は「水で割らぬ酒を水で割れ」であるが実際の意味は「生のままで飲め」と言うこと。これもまたアテナイ婦人の強い飲酒癖への諷刺。

三八六 (1) アテナイ市民の数を三万と呼んだ例は前五、四世紀に少なくない（『ヘロドトス』第五巻九七、プラトン『饗宴』三など）。なおこれらの数字は二十歳以上の男子たる市民のみでその家族を含まない。

(2) 食事をまだせぬゆえに幸福だというのは次のコロスの句と同様に反語と解されるが、ロジャースの言うように大きな楽しみを後に遺しているからとも解し得る。

(3) 古註はコロス中の娘たちと解し、この見解がひろくとられた。ロジャースはブレピュロスの娘としたが、フレンケルに従い端役の踊り子たちと見る。

(4) キオスはイオニア前面の島。そこの酒も美酒として知られた。

(5) 運動競技の審判員にも使われた名であるが、アテナイではとくに演劇競演に際しての十人の等級決定者をかく呼んだ。

(6) この作品のごとく一等に入選すべきものから目をそらして愚作に心を惹

かれるようなことをせぬ、の意。

(7) ブレピュロスは女中の言葉により観客一般を招こうというのである。

(8) ここに男子の観客のみが挙げられて婦人の見えぬことは喜劇を婦人に観せなかったと考える論者の重要な論拠となっている。

(9) ここで巧みな諧謔によって観衆は空想の天国から現実に引き下ろされるのである。かかるご馳走への招待に伴う意想外の「落ち」は『女の平和』(一〇五八、一〇七一)にも見える趣向である。

(10) これは九七八行に見える若者の持って来た松明か。若者は老婆に捕えられたとき松明を舞台のどこかに置いたと思われる。

(11) 「舞台を去る」ことを意味する言葉。

(12) **melos mellodeipnikon.** 語呂を合わせてあることに注意。

(13) 作者がつねに賢明なる観衆に訴える態度は『蜂』一〇四四行にも明らかである。

(14) 一一五四行以下の観衆や審査員への呼びかけには古喜劇のパラバシスの微かな名残りが見られる。

(15) これは本来の台本にはなく競演開始に先立ち籤で順番が定まった後に加えられた句である。一一六一行以下の句で明らかなように最後に上演され印象の鮮かな作品が有利だったと想像される。

(16) 原字は「偽誓することなく」。審査員は公平な判定を行なう旨を誓ったが、誓いに反して判定の不正が行なわれたことはデモステネスなどに明らかである。

(17) クレタ調の韻は—◡—である。しかし以下の長い名前の料理の部分はロジャースの説く通り厳密なる韻律の規則には従っておらぬかも知れぬが **dactyl** (—◡◡) と **tribrach** (◡◡◡) を交じえていることは一見して明らかである。それゆえ本文の「クレタの調子」は韻律には無関係で一種の舞踊形式であったとするロジャースに従う。

(18) 「クレタの調子」の舞踊は複雑でとくにそれを演ずるために数人の踊り子を登場させたとはフレンケルの推定。

(19) 以下七行にわたる料理の名はあたかも一個の長大きわまりなき単語のように多数の名詞、前置詞、形容詞を結合している。そして個々の原字は o で終わる形にされている。とうてい原字の趣きを出した翻訳は不可能で、ことにこの o の字は現わせないが、原典の風情を多少とも髣髴たらしめんがために訳文には平仮名を列記した。これを漢字交じりに直せば

牡蠣にヒレ肉、鮫、小鮫—頭蓋の切れ端、塩酢漬—蜂蜜かけたしるふぃおん—鶫、黒鳥、斑鳩—鳩に焙った雄鶏(とり)の脳—鶺鴒、岩鳩、新酒に—漬けた兎肉に食える翅。

となる。一一七一行のしるふぃおんはアフリカのキュレネの産物として知られた芳香の植物。薬用、調味料として珍重された。

(20) 歌の文句にはえらいご馳走が並んでいるがそれは作りごと、お前の受け取る豆粥の他には実は何もないと言う「落ち」である。しかしそれから最後までのブレピュロス、コロスの文句はたいへんなご馳走があるものとしており、つねの喜劇に同じく賑やかに、楽しく幕を閉じる。

(21) いずれも歓喜の叫び声。

(22) 直訳すれば「勝利に向かって」の意。プラクサゴラの新制度の勝利のみでなく、競演における作者の勝利を暗示する。『女の平和』一二九二—一二九四行参照。

福の神

登場人物

カリオン
クレミュロス
福の神
老人たちのコロス
ブレプシデモス
貧乏神
クレミュロスの妻
正しい人
告訴常習者
老婆
若者
ヘルメス
ゼウスの神官

〔オルケストラはアテナイ市の道路または広場で正面にはクレミュロスの家。左手よりみすぼらしい姿の盲目の老人が手探りで登場。そのあとからクレミュロスとその奴隷のカリオンがつづいて登場。二人は神託を求めた旅から帰ったしるしに月桂樹の枝でつくった冠をつけており、カリオンは犠牲に供えた獣の肉の一片を手にさげている〕

カリオン　気のふれたご主人の奴隷になるとは、おおゼウスはじめ神さまがた、いかにもつらいことにござります。召使がいちばん善い忠言を呈したとて、かれの持ち主が採りあげまいときめた以上、召使まで災いのお相伴を免れませぬ。自分の身体とて自由にならず、買い取った方次第というのがこの世の運命なので。(七)

それはそうとして。アポロンさまに対しては金の三脚台から予言(1)の文句を歌われるが、一つ道理のかなったお小言を申したい。噂によれば賢いお医者で占師とのことだが、わしのご主人の気をふれさせて帰しなすったのはどうしたことだ。そのご本人は盲人(めくら)のひとのあとをつけておいでだが、これは当り前とは逆さじゃないか。目明きのわれわれが盲人の先に立つものだ。ご自分があとについて行くばかりか、わしにまでそうさせて、そのうえわしには一言(ひとこと)の返事もようなさらぬ。どうしてあの男のお伴をせにゃならぬか言ってくださらぬなら、もうこのわしとて黙っちゃおられぬ。旦那さま、このうえは一つ言いがかりをつけますぞ。ひっぱたくわけにもいくまいて、冠(2)をつけとりますで。

クレミュロス　ぐずぐず言うと、いっそう痛いように冠をひっぺがすぞ。

カリオン　ご冗談でしょ。あの先生が誰だかおっしゃるまでは止めませんぜ。大きに旦那のためを思えばこそ訊ねてるんで。(二五)

クレミュロス　よし、お前には打ち明けよう。わしの下男どものうちじゃお前がいちばん信用がおけるし、いちばん手が早い(3)からな。わしは

信心深くて正直者だがいっこううまいこともなくて貧乏だった。

カリオン　そりゃ承知の助ですわ。

クレミュロス　ほかの奴らは、賽銭泥棒にしろ、演説屋にしろ、告訴気違いにしろ、とにかく悪い奴らは懐が温かいんだ。

カリオン　おっしゃるとおり。

クレミュロス　わしがあの神さまにお訊ねに行ったのは、生涯の矢を射尽くしたような可哀そうなわし自身のためじゃなくて、わしの独り息子がやり口をすっかり変えて、ならず者、不正直者、ろくでなしになったほうがええかを訊ねたかったのだ。こいつのほうが生きてくうえに都合がええと考えてな。

カリオン　そいでポイボスはお冠から[1]何てお告げになりやした。

クレミュロス　よろしいか。神さまがはっきりとわしにこうおっしゃったのだ。ここを出てから最初に出会ったひとをしっかり捉えて放さず、いっしょに家まで来させるようにと命ぜられた。

カリオン　していったい、だれにいちばんさきにぶつかりなすった？

クレミュロス　〔盲人を指しつつ〕このひとだ。

カリオン　すると、間抜けの旦那。神さまがはっきりとおっしゃった考えが呑み込めないんだな、ご子息をお国ぶりに仕込むようにってことでさ。

クレミュロス　何でそう判断するんだ。

カリオン　盲人にしたところで、この娑婆じゃまっとうのことをやらぬ方がずっと得なことは、はっきり心得てるようですからな。

クレミュロス　ご託宣の意味はそっちの方じゃあるまいて、もっと別の大きなことがあるんだ。あのひとがわれわれに誰だかを明かして、いったい何のために、それに何の必要があって、われわれといっしょにここまで来たか教えてくれたら、われわれのご託宣の意味もわかろうというものだ。

カリオン　〔盲人に向かって〕さあ、お前さん、誰だか言うがいい。さもないとただではすまさないぜ。さっさと白状するんだ。

福の神　じゃ言おう。お前こそ痛い目みるぞ。

カリオン　〔クレミュロスに向かい〕誰って言ったかわかりますか？

クレミュロス　お前に言ってるんだ、わしじゃない。お前の訊き方は間抜けて乱暴だ。〔福の神に向かい〕だが実直な人間のやり口がお好きなら、このわしには言ってくださいまし。

福の神　じゃ言おう、泣く目にあうぞ。

カリオン　〔クレミュロスに向かい皮肉に〕このひとと神さまのお告げは素直に受けときなさい。

クレミュロス　〔福の神に〕デメテルにかけて、もう笑っちゃいられんぞ。白状しなけりゃ、こっぴどくやっつけるぞ。

福の神　なあ、ご両人、わたしから離れてくれまいか。

クレミュロス　どういたしまして。

カリオン　旦那さま、わたしの言うようにしたらこのうえなしだ。このひとをむごくたばらせやしょう。崖っぷちにこ奴を据えて、置いてきぼりにする、そうすりゃつんのめって首の骨を折りまさあ。

クレミュロス　さっさと持ちあげちまえ。

福の神　そいつはごめんだ。

クレミュロス　白状せん気か？

福の神　わしが誰だかわかった日にゃ、そりゃようわかっとるが、お前さんたちはわしをいじめたうえに放すまいて。

クレミュロス　神さまがたにかけて、お望みとあらば、そうしましょう。

福の神　何はさておき、わしを放してくれんか。

クレミュロス　そら、放しました。

福の神　ではお聞きなされ。どうも隠しておきたかったことをしゃべらにゃならんらしい。実はわしは福の神[2]なのじゃ。

カリオン　おお、人間どものうちのいちばん腐った奴、じゃお前さん福の神のくせに黙ってたのか？

クレミュロス　こんなみじめななりで、お前さん福の神か？　おおポイ

ボス・アポロンに八百万の神々、さてはもろもろの精霊にゼウスさま、何と仰せられる？　お前さんほんとうにあのお方か？

福の神　いかにも。

クレミュロス　あの方ご自身か？

福の神　まさしくご自身じゃ。

クレミュロス　では言っていただきたいが、どうしたわけで汚ないなりで歩いていなさる。

福の神　パトロクレス[1]の家から出て来たのじゃ、あの生まれ落ちてから風呂に入ったことのないひとのところだ。

クレミュロス　どうしてこんなひどい目にあいなすった？　話してくださらんか。（八六）

福の神　ゼウスが人間どもを妬んでこんなことをしでかした。わしもまだ若者だったころには、正しい者、賢いもの、またきちんとした者のところへきり行かぬと自慢したものじゃ。ところがあのお方はこのわしを盲人になすった、そういった者を目つけ出せんようにな。あの方はこんなあんばいに立派な人を妬んでおられる。（九二）

クレミュロス　だがご自身は、立派な人たちや正直者たちばかりから尊敬されておられる。

福の神　その通り。

クレミュロス　ところで、いかがなもので？　昔のように、もういちど目が見えるようになったら、悪い奴らのところにゃ行かなくおなりかな？

福の神　いかにも。

クレミュロス　して、正しい者のところにだけお出かけか？

福の神　たしかに。久しいあいだ会ったことがないからな。

カリオン　〔観衆に向かい〕不思議でもない、目明きのわしでもご同様。

福の神　さあ、放してくだされ。わしの話はこれですっかりご存じだ。

クレミュロス　ゼウスさまにかけて、こうなりゃますますくっついて放しませせぬぞ。（一〇一）

福の神　迷惑しごくと申したではないか。

クレミュロス　お願いです、どうぞ言うこと聴いて、見棄てないでくだされ。どこを探したって、わたしより行ないの立派な人間は目つかりませせぬぞ。

カリオン　〔観衆に向かい〕ゼウスさまにかけて、わたしをのけては誰もいませぬ。

福の神　誰でもそうおっしゃる。だがいちどこのわしをほんとに手に入れて金持ちになったが最後、悪事のやり口にはまったく際限がない。

クレミュロス　その通りだが、悪い者ばかりとは限らない。（一一〇）

福の神　いや、ゼウスにかけて、どれもこれもだ。

カリオン　うんと泣かせてくれるぞ。

クレミュロス　わしのところにおればどんなええことがあるか教えてあげようから、心にとめてお聴きなされ。つまりわしの考えでは――神さまもご異存あるまいが――あんたの盲目をなおして目が見えるようにしようと思うのだが。

福の神　そいつはまっぴらだ。もいちど目明きになりたくはないのだ。

クレミュロス　何とおっしゃる？

カリオン　〔観衆に〕このひとは生まれつき貧乏性にできてる。

福の神　ゼウスがこの人たちの馬鹿な企てに気づいたら、このわしに八つ当たりするにきまっとる。

クレミュロス　今だってそうじゃないか、お前さんを躓いたりよろめいたりさせてるんだから。（一二二）

福の神　わしは知らぬ。とにかくあの方はまことに恐ろしい。

クレミュロス　そりゃ本気ですかな、神々のなかでいちばん弱虫のお方。ゼウスさまの支配にしろ、雷電にしたところで、三文の値打ちがありましょうか、あんたがほんの束の間にしろ目明きになったら。

福の神　おお、悪いひと、そんなこと言うもんじゃない。

クレミュロス　お静かに。あんたの方がゼウスさまよりずっと能力のあることを証して進ぜよう。

福の神　わしの方がか？
クレミュロス　大空にかけまして。早い話が、ゼウスさまが神々を統べておられるのはなぜでしょう。
カリオン　お金のためさ。あの方ほど持ってる人はない。
クレミュロス　さあ、あの方にこのお金を持ってくのは誰だろう。
カリオン　〔福の神を指して〕このひとだ。
クレミュロス　そしてあの方にお供えができるのは誰のおかげだろう。
カリオン　さよう、そのうえゼウスにかけてひたすら金儲けを祈ってる。この方のおかげじゃないか？
クレミュロス　そりゃこのひとの責任で、このひとさえその気になりゃ、そんなことは簡単に止められるんじゃないか？
福の神　どうして？
クレミュロス　あんたさえ望まなかったら、誰もお供えをする者はあるまいて、牡牛にせ、お菓子にせ、その他何のお供えにせよ。
福の神　どうして？
クレミュロス　どうしてだって？　もしあんたが居合わせてお金をくれるんでなけりゃ、物を買うってことははじめっからできませんや。だから意地悪をされたって、ゼウスさまの権力なんぞはあんたひとりで潰せまさあ。
福の神　何だって？　わたしによってあの方にお供えをする？
クレミュロス　いかにも。それにもし、人間のあいだに何か立派なもの、美しいもの、快いものがあるとしたら、それはあんたのおかげで生まれたもの。ありとあらゆるものは富に隷属しとるのだから。
カリオン　わしにしてからが、もとは自由の身だったが、わずかの小銭のおかげで奴隷になりました。
クレミュロス　コリントの遊女たちにしても、噂によると、懐の淋しいものが口説いたところで見向きもしないが、相手が金持ちだったら、さっそくお尻を向けるちゅうじゃないか。
カリオン　それどころか男の子だって、好きな男のためじゃなくて、お金のために、同じことをやるそうだ。
クレミュロス　だがそりゃ、ちゃんとした男じゃなくて陰間のすることだ。ちゃんとした男ならお金はほしがらないからな。
カリオン　じゃ何を？
クレミュロス　良い馬をほしがる者もいるし、猟犬をねだるのもいる。
カリオン　たぶんお金をねだるのは恥ずかしいんで、名目をつけて悪事をごまかしてるんだ。
クレミュロス　人間のあらゆる技術も工夫も、あんたのおかげで発明された。われわれのなかには、坐ったきりで靴を作ってる者もあるし、鋳物師もあれば大工もある、あんたから黄金をもらって金細工をする者もある。
カリオン　ゼウスにかけて、追剝ぎするのもいるし、壁を掘る[1]のもあるし。
クレミュロス　布を晒すのもあるし、羊毛を洗うのもあるし、革をなめすのもあるし、玉葱を売るのもあるし、間男の現場をつかまって、あんたのおかげで毛を抜かれる[2]のもある。
福の神　やれやれ、そんなこととは昔から気づかなかった。
クレミュロス　ペルシアの大王が威張ってる[3]のも、このひとのおかげじゃないか？　民会[4]にしてもが、このひとのおかげで成立するじゃないか？　そいから？　三段橈船[5]に乗り組ませるのもあんたじゃないかがかな？　コリント駐在の外人部隊[6]を養ってるのもこのひとじゃないか。それにパンピロス[7]を泣かすのもこのひとじゃないか？
カリオン　針商人[8]がパンピロスといっしょに泣くのも？　アギュルリオス[9]が屁をひるのも、このひとのためじゃないか？
クレミュロス　ピレプシオス[10]が作り話をするのもあんたのためじゃないか？　エジプト人との同盟[11]もあんたのおかげじゃないか？　ピロニデス[12]に惚れてるのもあんたのためじゃないか。
カリオン　ティモテオスの塔[13]にしてからが――
クレミュロス　お前の上[14]に倒れるがええわ。万事があんたゆえに行なわれるのじゃないか？　あんたひとりが、善いこと、悪いことすべてに

責任がある、こりゃまったくの話です。

カリオン　戦争にしたって、いつでもこのひとが御輿(みこし)を据えた方が勝つにきまってる。

福の神　わたし独りでそんな力があるのかな？

クレミュロス　ゼウスにかけて、もっともっといろいろのことができる。だから今まで誰だってあんたに満ち足りたひとはない。他のことだと何でも飽きが来るものだが。情事(いろごと)にしても[1]——

カリオン　パンにしても

クレミュロス　詩歌にしても

カリオン　甘いお菓子も

クレミュロス　名誉にしても

カリオン　パイにしても

クレミュロス　男らしさも

カリオン　干無花果(ほしいちじく)も

クレミュロス　名誉欲にしても

カリオン　大麦のパンにしても

クレミュロス　将軍の役にしても

カリオン　豆汁にしても

クレミュロス　いまだかつて誰もあんたに満ち足りた人はない。十三タラントンが手に入れば今度は十六タラントンほしくなり、そいつがかなうと四十タラントンほしくなる。それがだめとなりゃ、人生は生きるに値いせずなどとほざく。

福の神　ご両人ともなかなかうまいこと言われるようだ。ただ一つ気がかりなのは——

クレミュロス　そりゃまた何ですかな？

福の神　どうしたら、わしに備わってるとあんた方の言う力を自由自在にふるえようか。

クレミュロス　ゼウスにかけて下世話にも財産(おたから)ほど臆病なものはないと申しますからな。

福の神　そいつはちがう。そりゃ誰か壁掘りが言った悪口だ。あるとき家に忍び込んだが何も取れなかった、いっさいがっさい鍵がかかってたというわけだ。そこで先生、私の用心のことを臆病と名づけなすった。

クレミュロス　心配ご無用。われらの計画にあんた自身熱心になりさえすりゃ、リュンケウス[2]にもまさる視力にしてあげますぜ。

福の神　死すべき身でどうしてそんなことができるのだ？

クレミュロス　実は大いに有望なことがありまする。アポロンご自身がピュトー[3]の月桂樹を揺すってお告げになったことで。

福の神　ではあの方も陰謀をご存じか？

クレミュロス　その通りで。

福の神　要心しなされ。

クレミュロス　好いお方、ご安心あれ。わたしは、これは断言いたしますが、死ぬ目にあってもこれだけは仕遂げる所存にござります。

カリオン　お望みなら、このわたくしも。

クレミュロス　それに、われら二人には多勢の味方ができましょう、正直でありながら食うに事欠く人たちですが。

福の神　おやおや、なさけない味方のことをおっしゃった。

クレミュロス　そんなこたあない。もいちど初めっから金持ちになりさえすりゃ。［カリオンに向かい］さあ、お前は急いでひと駆けしろ。

カリオン　何ご用で？

クレミュロス　百姓仲間を呼ぶんだ、きっと畠で汗水たらしとるだろう。みんなここに集まって、われわれ同様にこの福の神さまのご利益にあずかるためだ。

カリオン　ではまいりましょう。この肉切れは誰か家の人が受け取って片づけてください。

クレミュロス　そりゃわしが引き受けた。お前は急いで走るんだ。神々のうちでいちばん強い福の神さま、あんたはわしといっしょになかへおはいりくだされ。この家をお主(ぬし)は、今日のうちに財宝(おたから)でいっぱいに

せにゃなりませぬ、手段のぜひにはお構いなしに。

福の神　だが、神々にかけて、いつもよその家に足を踏み入れるごとにほんとにうんざりしてしまう。面白い目にあったためしがないんだから。節約家の家に行ったとする、するとたちまちわたしを地下に埋め込むのだ。そして誰かその友だちで立派なひとがはした金をもらいに来ると、わしの顔など見たこともないとぬかしおる。ところが酔狂人(1)の家に入ったが最後、売女とさいころに投げ出されて瞬く間に裸で戸口から追い出される。

クレミュロス　つまり、ほどのよい人物にまだ会われぬわけですな。ところで、わたしはいつもそういう人間なのでして。倹約を喜ぶことでも人後に落ちないが、必要とあらば気前よく金を使う。だがとにかく内には入りましょう。ひとつあなたに、わしの家内と独り息子の、わしがあなたに次いで可愛がってる奴をお目にかからせたいので。

福の神　それに違いあるまい。

クレミュロス　あなたに嘘をつく者はあるまいて。

〔福の神とクレミュロスかれの家のなかに入る。カリオンに連れられて農民たちのコロス登場〕

カリオン　〔コロスに向かって〕わしの旦那と同様に麝香草を食い慣れた親しい同村の方々、して骨折りをいとわぬ方々、さあ、急いだり。ぐずぐずしとるときじゃござらぬ。いまこそは救援に馳せ参ずべき大事なとき。

コロス　ごろうじないか、先刻からわれらが一生懸命に、年寄りの無気力者には精いっぱい急いでるのを。お主は走れと言われるが、なぜにお主の旦那がわしをここに呼び寄せたかはまだ語りもせぬ。

カリオン　前から言うとるではござらぬか？　お主こそ聴こうとせぬ。旦那の申さるるには、お主がたはみんな冷たく味気ない暮らしを棄てて、怡しい暮らしをはじめるのだ。

コロス　そりゃまた何たること、してあのひとの言うことの由来は？

カリオン　おお、役にも立たぬご連中、あのひとは一人の老人を連れてまいった。垢だらけで腰が曲がり、みじめな姿で、皺くちゃで、禿頭で歯抜けと来てる。大空にかけて、わしの見るところじゃ、そのうえ、むけまらだ。

コロス　おお黄金の言葉をお告げの方、何と言わるる。いまいちど言ってくれまいか。そのひとは宝の山を持って来たと言われるが。

カリオン　わしに言わせりゃ、老人どもの悩みをどっさり持って来た。

コロス　わしらを煙に巻いといて無事に逃げ出せると思っとるか、しかもわしは杖を持っとるのだぞ。

カリオン　〔冷静に〕わしを、生まれつき万事にそんな性質の者で、まともなことは口にせぬと思し召されるか？

コロス　このくたばりぞこないが、もったいぶった口をきく。きさまの向う脛は足枷ほしさにもう「痛い、痛い」とわめきおるわ。

カリオン　柩のなかで裁判せよとの番号札(2)がいま当たったのに、お主は行こうとしないのか？　カロンが引換券(3)をくれるというのに。

コロス　消えて失せろ。きさまなんと生意気でふまじめな性質だ。駄法螺吹いていまだに事実を打ち明けぬ、われら(4)が疲れた体で暇もないのに、いそい　と麝香草の根を踏み分けてここまで駆けつけてまいったのに。

カリオン　では包み隠すのはやめとしよう。おお皆の衆、わしの旦那はあんた方を金持ちにしてくれる福の神を連れて来られた。

コロス　われら一同が金持ちになれるとは真実であろうか？

カリオン　神々にかけてみんなミダス(5)になれる、もし驢馬の耳さえもてば。

コロス　これは何たる嬉しいこと、喜びに手の舞い足の踏むところを知らぬ、もしもお前の言葉が真実とすれば(6)。

カリオン　さてわしは、トレッタネロ、キュクロプスの真似(7)をして足取りも面白く、あなた方をばお連れ申そう。それ、子供たち、絶えずわめいて

羊や臭いの強い山羊の
節まわしを真似つつ
むけまらでお続きなされ。牡山羊どもがご馳走にありつくのだ。

コロス　こちとらは、トレッタネロ、羊の声を立てながら
垢に汚れたキュクロプスのお主をとっつかまえるぞ。
頭陀袋と露に濡れた野菜を携え、
酔っぱらって羊を引き連れ、
うっかり眠ってしまったとこを
火のついた大杭で目を潰そうと[1]いうわけだ。

カリオン　こちとらは薬を盛るキルケ[2]の役だ、
いつかコリントでピロニデスの仲間に
豚みたいに、自分で捏ねた糞を食わせたあの女、
わしはこいつをいろいろに真似るぞ。
お前たちは、嬉しさに鼻鳴らしつつ
仔豚になって母豚について来い。[3]

コロス　よし来た。こちとらは薬を盛って
魔法を使い、われらの仲間を汚した汝キルケを
喜び勇んでひっ捉え、
ラエルテスの息子[4]の流儀で睾丸つかんで吊るし上げ
牡山羊のように鼻つらに糞塗りつけよう。
アリステュルロス[5]さながらに、ちょっと開けた口からきさまが言う
には
「仔豚になって母豚について来い」

カリオン　ところで、皆の衆、悪口はもうこの辺でやめて
別の姿に戻りなされ、
一方わしは内にはいって
旦那の目を盗んで
パンと肉を持ち出して
噛りながら、そろそろ仕事のお仲間入りとしよう。

クレミュロス　〔家から出て来て〕おお、村の衆、「今日は」の挨拶じゃ、もう古くてかびが生えとる。わしは「ご機嫌よう」と申し上げる、かように勇み立ち、張り切り、緊張しておいでなすったんだから。これからの仕事にもわしの味方になって、ほんとうにあの神さまを助けてくだされ。

コロス　心配ご無用。わしをほんとうに軍神アレスと思ってくだされ。全くのとこ、三文を手に入れようと民会のたびごとに押し合いをしながら、福の神のご本尊を他人に取られちゃ目も当てられない。

クレミュロス　ほれ、ブレプシデモスの仁もあそこにやって来る。あの足どりの速さから見ると、やっこさんもう事件の噂をご存じだ。

ブレプシデモス　こりゃどうしたことだ？　誰のおかげで、それにどんなやり口でクレミュロスはたちまち金持ちになったのだ。どうも信ぜられぬ。ところで、ヘラクレスさまにかけて、床屋でとぐろを巻いてる連中のもっぱらの噂では、あのひとはにわかに金満家となったということだ。さてこれはわしにとって不思議千万なのだが、きゃつは結構なことになりながら、友だちを寄び集めているのだ。どう見ても、今度の事件はこの土地の風とは別だわい。

クレミュロス　神々にかけて、一部始終を包まず申そう。おおブレプシデモス、わしらは昨日に較べりゃずっと結構な身分なのだ。だからお主もご利益にあずかれるというわけだ。お主も友だちの一人だから。

ブレプシデモス　じゃお主は、噂の通り、ほんとうに金持ちになったのか？

クレミュロス　神さまがその気になられりゃ、即刻にそうなるというわけだ。だがちょっと、この仕事にゃ危険があるのでな。

ブレプシデモス　そりゃまたどんな？

クレミュロス　たとえば——

ブレプシデモス　どうせ言うことなら早く話せよ。

クレミュロス　うまく行けば、いつまでも結構なご身分だ。だがいった

んつまずいたら最後、身の破滅というもの。

ブレプシデモス　こいつは厄介な荷物だな、わしの性には合わない。にわかに大金持ちになりながら、一方じゃおっかなびっくりってのは、何かまっとうでないことをした人間の話だ。

クレミュロス　どうしてまっとうでない？

ブレプシデモス　ゼウスにかけて、もし金か銀を神さまからくすねて、あそこ[1]から帰って来て、それでちっと後悔してるとすると——

クレミュロス　災難よけのアポロンさま、ゼウスにかけてわしはそうじゃない。

ブレプシデモス　たわ言はやめてくれ、あんた。わしはすっかり見抜いとる。

クレミュロス　わしに向かってそんな嫌疑はやめてくれ。

ブレプシデモス　ふうん！　誰だってほんとうに真直ぐとばかりはいかぬものさ、人間はみんな利益の餌には弱いからな。

クレミュロス　デメテルにかけて、あんたは正気ではなさそうだ。

ブレプシデモス　〔独白〕あのひとも以前とはえらく変わったもんだ。

クレミュロス　もしもし、大空にかけて、あんたはどうかしてるぜ。

ブレプシデモス　〔独白〕第一、目つきにしてからが落ち着かない、何か悪事を働いたと言わぬばかりだ。

クレミュロス　お前さんが何をわめいとるか、わしにはよくわかっとる。わしが盗みをしたというんでお裾分けを狙ってるんだ。

ブレプシデモス　お裾分けを狙う？　何のだ？

クレミュロス　ぜんたい話がちがうんだ。

ブレプシデモス　盗んだんじゃなくて、ひったくったのか？

クレミュロス　お前さん、何かに取っ憑かれてるぜ。

ブレプシデモス　他人さんの物を、猫婆したんじゃないか？

クレミュロス　絶対そんなことはない。

ブレプシデモス　おお、ヘラクレスさま、さあ、どっちへ向いたらいいんだ。ほんとうのことを言う気がないんだ。

クレミュロス　わたしのことを呑み込まないうちに悪口を言うからさ。

ブレプシデモス　なあ、あんた、わしはちっとばかり奮発して、町じゅうに知れ渡る前にこいつを仕上げようと思うんだ、小銭で演説屋たちの口をふさいでな。

クレミュロス　友だちぶって、きっと、三ムナ使っといて十二ムナを請求しそうだな。

ブレプシデモス　目に見えるようだ。誰かさんが段の上に坐ってる[2]、その手には命乞いの小枝をもち、わきには餓鬼どもと女房が控え、その様子はパンピロス描くところのヘラクレスの一族[3]と寸分ちがわない。

クレミュロス　とんでもない、このわからず屋さん、わしが金持ちにしようちゅうのは立派な人たち、利口な人たち、それに分別のある人たちだけなのだ。

ブレプシデモス　何だと？　そんなにたんまり盗んだのか？

クレミュロス　やれやれ、始末の悪い、寿命が縮まる。

ブレプシデモス　わしに言わせりゃ、お前さんこそ、自分で寿命を縮めとる。

クレミュロス　いや、意地悪先生、そいつはちがう。わしは福の神をもっとるのだから。

ブレプシデモス　お前さんが福の神を？　そりゃまたどんな？

クレミュロス　ご本尊だ。

ブレプシデモス　してどちらにおいでだ？

クレミュロス　うちに。

ブレプシデモス　どこ？

クレミュロス　わしの家にだ。

ブレプシデモス　お前さんとこか？

クレミュロス　いかにも。

ブレプシデモス　くたばりたいのか？　福の神がお前さんとこに？

クレミュロス　神々にかけて。

ブレプシデモス　ほんとうを言ってんのか？

クレミュロス　さよう。
ブレプシデモス　ヘスティア[1]にかけて？
クレミュロス　ポセイドンにかけて。
ブレプシデモス　あの海の神[2]のことか？
クレミュロス　もし別のポセイドンがおいでなら、別のにかけて。
ブレプシデモス　じゃ、われわれ友だちのとこには引き廻さないのか？
クレミュロス　仕事はまだそこまで運んどらんのだ。
ブレプシデモス　何だと？　お裾分けまでいってない？
クレミュロス　ゼウスにかけて。まず手始めに――
ブレプシデモス　なに？
クレミュロス　われわれ二人で目明きにして――
ブレプシデモス　誰を目明きにする？　言ってくれ。
クレミュロス　福の神を昔にかえす、手段を選ばずにだ。
ブレプシデモス　じゃほんとうに盲目なのか？
クレミュロス　大空にかけて、間違いなしだ。
ブレプシデモス　わしんとこに一度もお見えにならなかったのも無理もない。
クレミュロス　だが神々の思し召しがあれば、今度はご到来だぞ。
ブレプシデモス　誰か医者を呼ばねばなるまいて。
クレミュロス　この市に今日誰か医者がおるかな。謝礼も出なけりゃ、医術[3]もなしだ。
ブレプシデモス　〔観客席を見渡して〕捜してみよう。
クレミュロス　〔観客席を見渡して〕どうもおらんな。
ブレプシデモス　わしにも見当たらん。
クレミュロス　全くだ。ところで、わしの前からの計画なんだが、あのお方にアスクレピオス[4]のお宮で寝ていただくのが最上の策だ。
ブレプシデモス　神々にかけて、そいつはずば抜けた名案だ。そうなったらぐずぐずせんで、なんでも急いで一つやってみることだ。
クレミュロス　この通り歩いとる。
ブレプシデモス　さあ急いだり。
クレミュロス　仰せの通りやっとるて。
〔二人が舞台から退場せんとするところに、きたない姿の貧乏の女神がとつぜん現われる〕
貧乏神　おお、無茶で神々にも、また法にもそむく企てを大胆不敵に実行する、この不幸者の小人ども、どこに、どうして、逃げなさる？　お待ちにならぬか？
ブレプシデモス　ヘラクレス[5]。
貧乏神　わたしはね、お前さんたちみじめな奴を、みじめにくたばらせるのさ。我慢のならぬ不遜の企てを敢えてする以上はね。神さまにしろ人間にしろ、いまだかつて誰も企てなかったことじゃないか。だから二人とももうおしまいさ。
クレミュロス　お前さん誰だ。何だか顔色[6]がよくないみたいだね。
ブレプシデモス　悲劇に出て来るエリニュスらしいぞ。狂乱の態で悲劇がかっとる。
クレミュロス　いや、松明を持ってないもの。
ブレプシデモス　いずれ泣き喚くさ[7]。
貧乏神　わたしを何だと思いなさる？
クレミュロス　旅籠屋のおかみか豆汁売りか。さもなきゃ、何もされないのにこんなに喚きたてるはずはない。
貧乏神　そりゃ本性かな？　この娑婆からあたしを追い出そうと企てた[8]りして、極悪非道の振舞いじゃないか。
クレミュロス　お前さんに残されてんのはお仕置場[9]だけさ。だがいったいお前さんは何者だ。早く白状しろ。
貧乏神　わたしをここから消しちまおうとする企てに対して、今日日にもお前さん二人を処罰しようとする者さ。
ブレプシデモス　この近辺の居酒屋の女将じゃなかったかな、いつも枡目をごまかしてわしに損をかける。
貧乏神　お前さん二人と長年いっしょに住んでる貧乏神さ。

ブレプシデモス 〔逃げ出して〕王者のアポロンその他の神々、どこに
逃げよう。
クレミュロス これ、どうしようてんだ。腰抜けの畜生。待たんか。
ブレプシデモス まっぴらごめんだ。
クレミュロス 待たんか。大の男二人が阿魔一匹から逃げ出すとは。
ブレプシデモス 貧乏神じゃないか、間抜け野郎、どこ捜したってこれ
以上不吉な生きものはない。
クレミュロス 待ってくれ、後生だから、待ってくれ。
ブレプシデモス ゼウスにかけて、わしはごめんだ。
クレミュロス はっきり言うが、あらゆる仕草のなかで飛び抜けてひど
いことをやらかすわけだぞ、この阿魔を怖がって、合戦もせずにあの (四四四)
神さまをほっぽり出して逃げ出したとあっては。
ブレプシデモス どんな武器、またはどんな力を頼りにするんだ？ 胸
甲にしろ、楯にしろ、この汚れた阿魔が質草[1]に入れぬのがあるかな。
クレミュロス 心配はご無用。わしは知っとる、この福の神さまひとり
だって、あの阿魔のやり口には立派に勝てるんだ。 (四五三)
貧乏神 人間の屑ども、思い上がってまだぶつぶつ言ってるのか？ ひ
どいことを企てて現場を抑えられたくせに。
クレミュロス くたばりそこないめ、お前さんは何の被害もないのに、
なんで、悪口並べにやって来たんだ。
貧乏神 おお、神々もご照覧を。お前さんたちは二人で福の神を目明き
にしようとして、そいでわたしに害を及ぼさぬというのかね。
クレミュロス あらゆる人たちにわしたちが福をもたらしたとしたって、
それがどうして、あんたに害を及ぼすんだ？
貧乏神 そいでお前さんたちはどんな福を手に入れるのかね？
クレミュロス どんな？ まず手始めにはお前さんをヘラスから追い出
す。 (四六三)
貧乏神 わたしを追い出す？ 人間にとってこれ以上の罪つくりが何か
考えられようか？
クレミュロス 何か？ もし実行を延期して忘れたりしたら。
貧乏神 じゃ、このことについてあんたたちにまずここで、わたしの理
窟を言って聴かせよう。そしてもしわたしが、あらゆる幸福の原因は
わたしひとりであり、あんた方の生きてるのもわたしの故だと証明し
たら――それができなかったら、二人の好き勝手にするがよい。 (四七一)
クレミュロス 穢れた婆あめ、こんなことまでほざく気か？
貧乏神 お前さんもよく呑み込みなさい。正直者を金持ちにしようなん
ていうんなら、あんたはすっかり間違ってる。わたしに言わせりゃ、
それを説明するのはほんとに朝飯前ですよ。
クレミュロス おお、棍棒に首枷[2]、助けに来てくれ。
貧乏神 呑み込まないうちに、嘆いたり喚いたりしちゃいけない。
クレミュロス こんなこと聞かされて喚かない者があるだろうか？
貧乏神 思慮分別のある者さ。
クレミュロス ところでお前さんが裁判に負けたとき[3]の科料は、どのく (四七九)
らいにしようかな。
貧乏神 お前の好きにするさ。
クレミュロス いいことを吐かすな。
貧乏神 お前さんたちが負けたら、同じ目にあうんだからね。
クレミュロス じゃ、二十回の死刑で充分かな？
ブレプシデモス こやつにはな[4]。わしらには二回でよかろう。
貧乏神 さっそく仕事にかかりなさい。わたしの議論にまともに反論で
きる者はないんだから。
コロス いまこそお主がたが賢い言葉でこの女をやりこめ、議論に勝利 (四八八)
を挙げるとき、弱味を見せるは禁物ですぞ。
クレミュロス わしの観るところでは、これは誰の目にもはっきりわか
ることだ。人間のうちで立派な者が幸福になり、悪人や不信心者がそ
の反対の目にあうのは、いかにも正しい。わしたちはこのことに深く
頭を悩ましたすえに、みごとで立派な、それに万事に応用のきく計画
を発見した。と申すのは、もし福の神がただいま目を開いて盲人の放

浪をやめたら、人間のうちの善人のところに赴いてそこから去るまいし、悪人や不信心者は避けるにちがいない。そしてすべての人を立派で、もちろん金持ちで、神々を敬う者にするだろう。人間にとってこれ以上の恩恵を考え出せる者があろうか？

ブレプシデモス　誰もない、わしが証人になってもいい。この阿魔に訊くのは止めろ。

クレミュロス　当世のわれわれ人間の暮らしと来た日にゃ、誰の目にも気違い沙汰、いや(1)それどころか悪魔に憑かれたみたいだ。悪い人間どもが邪な道であれを集めて金持ちになってるのはざらだ。一方、ほんとうに立派な人たちは不仕合せで空き腹をかかえ［貧乏神に向かって］たいていいつもお前さんといっしょだ。だから、わしに言わせりゃ、福の神がいったん目を開けてこの女をやっつければ、人間どもへのこれ以上のご利益の途はないというものだ。

貧乏神　だが、およそ人間のなかで無類に気の触れやすいこの二人のご老体、たわごととでたらめの講中仲間(2)、あんたたちの望みがかなった日にゃ、わたしに言わすとおためになりませぬよ。なぜなら万一、福の神がもいちど目明きになってご利益を平等に振りまいたら、人間の技や術を誰も顧みなくなるでしょう。この二つがあんたたちの間で消滅したとしたら、誰が鋳物をしたり船を造ったり、縫い物をしたり車を造ったりするか、また靴屋や煉瓦造りや布晒しや革なめしになり手がありましょうか。また犂で地面を起こして、デメテルの実りを穫り入れしましょうか。こんなことは全く顧みずに働かないで生きてゆけるっていうんだから。

クレミュロス　たわごとを吐かしおる。お前さんがいま並べ立てたことは、みんな召使どもが骨折るさ(3)。

貧乏神　じゃどうして召使を手に入れる？

クレミュロス　もちろんお金で買うさ。

貧乏神　でも第一に、売り手は誰です？　その人だってお金は持ってるんだから。

クレミュロス　金儲けを狙う商人がテッサリアに多勢いる人浚い(4)から買って来るさ。

貧乏神　でもそもそも、あんたの話じゃ、人浚い(5)になる者があるでしょうか。懐ろが豊かなら、誰が命を危険に曝してまでそんなことをやりますか？　だから自分でやむなく畠を耕し、土を掘ったり、その他さまざまの骨折りをして、今よりずっとつらい暮らしをすることになりますさ。

クレミュロス　お前の頭に降って落ちろ(6)。

貧乏神　それに寝床のなかに眠ることもできない。寝床がないんだから。絨毯の上というわけにもいかぬ。金があったら誰が織る気になりますか？　花嫁を迎えるときに香油を振りかけることもできないし、金をかけた色模様の衣裳で飾ることもできない。こういうことができないんじゃ金持ちの甲斐があるまい。ところが、わたしからならあんた方のほしいものは何でも手にはいる。わたしはご主人然と坐したままでそう仕向けるだけだけれど、必要と貧乏のゆえに職人が暮らしの手段を捜すようにしてますよ。

クレミュロス　お前さんがくれるよい物といったら、銭湯の火傷(7)と空きっ腹の餓鬼どもとひしめき騒ぐ婆あたち、数えきれない虱と蚊と蚤、そいつらが頭のまわりでうるさく騒いで目を覚まさせ言うことにゃ「腹は空こうが起きるんだ」。それに加えて、上っぱりの代わりにぼろを着け、寝台代わりに藺草の蒲団、そいつにゃ南京虫がうようよして眠った者の目を覚ます。絨毯に代わるは腐った蓙。枕の代わりに大きな石に頭をのせる。パンの代わりに葵の芽を食い、大麦菓子の代わりには萎びた人参の葉、腰掛け代わりにゃ毀れ甕の頭、桶の代わりにゃ樽の胴体の、これも毀れたやつ。お前さんのおかげで人間どもにいかに多くの結構なことが起こるか、これでわかったにちがいない。

貧乏神　お前さんが並べたてたのはわたしの暮らしじゃない、乞食の暮らしをけなしただけさ。

クレミュロス　ところが世間じゃ、貧乏は乞食の兄弟と言うじゃない

か？

貧乏神　ディオニュシオスがトラシュブロスに似てると言う[1]お前さんたちだからね。だが、ゼウスにかけて、わたしの暮らしはそんなもんじゃない、そんなものになる気づかいもない。お前さんの述べたてる乞食の暮らしは無一物で生きてくことさ。貧乏人の生き方は節約をして仕事に精を出し、余分もない代わりに必要なものには事欠かない。

クレミュロス　デメテルにかけて、あんたの説明だと、そりゃ実に仕合せな暮らし[2]だ、勤倹節約のすえは埋葬の金も残らぬとするとね。

貧乏神　お前さんは嘲ったり茶化したりして、真面目に議論する気がない。そして福の神よりわたしの方が人間を、気心でも姿形でもすぐれたものにするってことを、ご存じない。あの人にかかっちゃ、足の痛風持ちや太鼓腹や太脛や大でぶばかりできる。一方わたしのは痩せ形で、蜂のような腰をもち、敵に対しては意地が悪い。

クレミュロス　お前さんはきっと、飢えによって蜂のような腰にするんだ。

貧乏神　こんどは思慮分別のことに移ってあんたたちに教えますが、慎ましさはわたしのとこにあり、傲慢は福の神のものです。

クレミュロス　盗んだり壁を掘ったりするのは、いかにも慎ましやかだからな。

ブレプシデモス　ゼウスにかけて、人目を避けるってのは慎ましやかじゃないか。

貧乏神　それじゃ方々の市々の演説家たちを見てごらん、貧乏な間は民衆と国家にとって正しい人たちなのだが、いったい国家を食い物にして金持ちになると、たちまちよこしまな者になり大衆に叛き民衆を敵とする。

クレミュロス　ひどく口汚ないが、そいつは一々ごもっともだ。だが痛い目見るのは同じこと、講釈で得意にならせはせんぞ。福の神より貧乏神の方がええと説き伏せようとする以上は。

貧乏神　あんたはその点について、このわたしをちっとも反駁できないで、たわ言を並べたり、じたばたするばかりじゃないか。

クレミュロス　だがみんながお前さんから逃げるのは、どうしたわけだ？

貧乏神　わたしが人間を立派にするからさ。子供を見ればよくわかることです。子供のためをいちばん考える父親から、子供は逃げるものです。正しいことを知るのはかようにむずかしいもので。

クレミュロス　じゃお前さんは、ゼウスもいちばん強いものをよく知っていないと言うのかね？　あの方だって財産をもっておいでだからな。

ブレプシデモス　〔貧乏神を指して〕そしてこの女をわしらのとこに追っ払ってる。

貧乏神　だが、クロノス[3]以来の目爛れで、ほんとうに心まで盲のご両人、ゼウスはもちろん貧乏です。わたしはこのことをはっきり教えて進ぜよう。もしあの方が金持ちだったら、自分でオリュンピアの競技[4]を設けて、そこに四年ごとに全ヘレネスを集めてるのに、どうして競技の優勝者には野生のオリーヴの冠を与えて表頌するのでしょう。金持ちだったらきっと黄金の冠を出さなくちゃいけないのに。

クレミュロス　それはあの方もお金を大事にしてることの証拠じゃないか？　お金を節約してぜんぜん使わないという料簡から、優勝者にはつまらない冠を出してお金は自分の手もとにしまっとくのさ。

貧乏神　お前さんはあの方に、貧乏よりずっと恥ずかしいことをなすりつけてるわけさ、金持ちのくせにそんなにしわんぼで欲深とすると。

クレミュロス　ゼウスさまがお前さんにオリーヴの冠をのっけてくたばらせるように。

貧乏神　この世のよいものはみんな貧乏神のおかげということに、あんたたちが大胆にも異議を申し立てるとは。

クレミュロス　ヘカテ[5]に訊いてみたって、金持ちと貧乏とどっちがいいかすぐわかるさ。この女神の言われるには、物持ちや金持ちは毎月ご馳走を供えてくれるが、貧乏人はお供えが置かれる前にひっさらって行く、とさ。

〔以下、激しい調子で〕消えて失せろ、一言もほざくな。説き伏せたって説き伏せられぬぞ。

貧乏神　おお、アルゴスの市、かれの言葉を聴きなされ。[1]

クレミュロス　お前の食卓仲間のパウソン[2]を呼ぶがええ。

貧乏神　情けなや、この先どうなることやら。

クレミュロス　とっととわしらの前から消えて鴉のとこへ行け。[3]

貧乏神　大地のどこに行ったらよいか？

クレミュロス　首枷のとこだ。ぐずぐずせんで急ぐんだ。

貧乏神　あんたたちは、いまに必ずわたしをここに呼びもどすさ。

クレミュロス　そんとき来ればよい。今は失せろ。[4]わしにとっては自分は金持ちになって、一方お前は、頭を打ちながらいつまでも泣く方がええ。

〔貧乏神嘆きつつ退場〕

ブレプシデモス　ゼウスにかけて、わしは金持ちになって、女房、子供といっしょに[5]ご馳走を食って暮らしたい。そして一風呂あびたあと、てかてか光って風呂屋を出るなり、職人ども[6]や貧乏神に屁をひっかけてやりたいわ。

クレミュロス　すれっからしの阿魔め、やっと行きおった。わしとお主は、できるだけ早くあの神さまをアスクレピオスのお社にお連れ申して床につけにゃ。

ブレプシデモス　手間取るは禁物、また誰かやって来て大事な手段を何か邪魔するかも知れんからな。

クレミュロス〔自分の家の戸口に向かい〕おい、カリオン、掛け蒲団をもち出して、そいから福の神さまをしきたり通りにご案内し、家のなかで用意したいっさいがっさいを運び出すんだ。

〔三人とも舞台を去る。これから次行までの間に一夜が経過したわけで、役者のいない間、コロスの歌舞が行なわれたらしい。そこにアスクレピオス神殿から帰ったカリオン登場〕

カリオン　おお、テセウス祭[7]にあんなにたびたび、ほんのちょっぴりの大麦粥をパンで掬った[8]ご老人がた、何という幸福、何という幸運にありついたんだ、それにほかの、正しい暮らし方をして来たひとたちも。

コロス　おお、お前の仲間のうちじゃいちばんよくできたひと、いったいどうしたんだ。何かよいことの知らせを持って来たように見えるぞ。

カリオン　旦那さまがこのうえない仕合せな目にあわれた、いや、むしろ福の神さまご自身だが。盲人の代わりに目明きになられて[9]、その瞳はらんらんと輝いている、大慈大悲の薬師アスクレピオスの御業によって。

コロス　お主の告げるは歓喜と歓声。

カリオン　否でも応でも、ここは[10]大喜びすべきところ。

コロス　すぐれた子供に恵まれた方、この世の光、アスクレピオスの御名を呼ぼうよ。

〔クレミュロスの妻、戸口より出て来る〕

妻　この騒ぎはいったい何かしら？　何かいいことの知らせだろうか？　これに憧れてわたしは長い間、うちでこの人を待っていたんだから。

カリオン　早く、早くお酒を出して、お内儀さん、そしてあんたも飲むんだ、あんたの大好物ですからね。あんたに善いものをみんなひとからげに持って来たんで。

妻　そいでどこにあるの？

カリオン　わたしの言葉のなかに。すぐ呑み込めます。

妻　じゃ、大急ぎですっかり吐き出しとくれ。

カリオン　じゃ聴いてください、わたしは事件を爪先から頭のてっぺんまで全部話しますから。

妻　わたしは「頭のてっぺん」はごめん[11]だね。

カリオン　いま降って湧いた結構なことでも？

妻　とにかくその事件とかはいやだよ。

カリオン　わたしどもは、前にはいちばんみじめだったが、今では誰にもまして仕合せで幸運なあの方をご案内して神さまのところに着くとすぐ、最初に海辺にお連れ申して水浴をさせました。

妻　ゼウスにかけて、幸運にちがいないね。老人が冷たい水を浴びたとあっては。

カリオン　それから神さまの境内に行きました。祭壇にお菓子やその他のお供え、ヘパイストスの焔へのご馳走[1]を捧げたのち、しきたり通りに福の神を床につけました。わたしどもはめいめい藁蒲団をこしらえました。

妻　ほかに誰か神さまに願いごとをする者がいたかね？　(六六四)

カリオン　ええ、その一人にネオクレイデス[2]がいましたが、この先生は盲人なんだが、盗みにかけては目明きより上だ。そのほかいろいろの病気持ちどもがおりました。灯心の火を消して神さまに仕える人がわしどもに寝るように告げ、何か物音がしても黙ってるように注意したとき、みんなおとなしく横になりました。　(六七〇)

　ところが、わたしはどうも寝つかれません。一人の婆さんの頭の、ちょっと先に置いてあるお粥の鉢がえらく気にかかって、そいつに憑かれたみたいではって行きたくなりやした。ふと目を上げると、神主がお菓子や干無花果を神聖な祭壇からかっさらって行くのが見えるじゃありませんか。そいから、その先生は祭壇を一つのこらずぐるっと廻って、ひょっとしたらお菓子が残ってやせぬか[3]と調べ上げる。そうして見つけたものは、自分の袋にお供えしました。そこでわたしもかようなしわざは全く正しいことと考えて、あのお粥の鉢を狙って起き上がりやした。　(六八四)

妻　まあ、ほんとうに情けない人、そいで神さまはこわくなかったの？

カリオン　はい、神々にかけて、わたしは神さまが冠をつけて、わたしより先にあの鉢においでになるのが心配でした。というのは、神主がわたしに先に教えてくれたから[4]です。さて婆さんは、わたしの立った音に気づいて手を伸ばしました。そこでわたしはしっと言ってから、まるで神さまの蛇[5]みたいに、それに噛みついたわけです。すると婆さんはすぐに手を引っ込め、おとなしく蒲団をひっかぶって横になったが、怖さのあまりに、いたちより臭い屁をひった。わたしはその間に、お粥をだいたい平らげてしまった。そいからもう腹いっぱいなので、寝ることにしました。　(六九五)

妻　神さまはおいでにならなかったの？

カリオン　それまでは。ところがそのあとで滑稽きわまることを仕出かしました。神さまが近くに来たときに、とてつもないおならをやらかしやした。腹がすっかり脹れていたんで。

妻　そいでお前さっそく神さまに嫌われたんだろう。

カリオン　いいえ、ただお伴のイアソー[6]が顔をあからめ、それにパナケイア[7]が鼻をつまんで身をそらしただけ。香をひったわけではないので。　(七〇〇)

妻　ご本尊は？

カリオン　ゼウスにかけて、いっこうに気にかけられなかった。

妻　お前、あの神さまは田舎者と言うわけかね。

カリオン　ゼウスにかけて、それは違います。あの方は糞食らい[8]ですよ。

妻　おお、お気の毒な。

カリオン　そのあと、わたしは怖くなってすぐに頭からひっかぶったのですが、あのお方はぐるぐるとあらゆる病気をいともしさいに診察して廻られました。そいから一人のお伴の子供が、石の乳鉢と乳棒と小箱とをあの方のそばに置きました。　(七一一)

妻　石の？

カリオン　ゼウスにかけて、ちがいます、小箱はそうじゃない。

妻　このくたばりそこない、お前さんどうして見えたんだい、ひっかぶってたって言ったじゃないか。

カリオン　古い上っ張りを通してね。ゼウスにかけて穴がたくさんあいてるんで。まず誰より先に、ネオクレイデスに膏薬を擦り込みにかかりなすった。乳鉢にテノスのにんにくの頭[9]三つを投げ込み、そいから無花果の汁と海葱[10]を混ぜて乳鉢で砕きなすった。そいからスペーットス[11]の酸で溶き、先生の瞼をひっくりかえして塗りつけた。ひとしお痛い目にあわせるためにね。すると先生、悲鳴をあげて跳び上がり、逃げ出した。そこで神さまが笑いながら仰せられるには、「さあ膏薬つ

けてここにじっとしてるんだ、民会にかけて誓言するやり方はこれでおしまいだぞ(1)」

妻　あの神さまって、なんて国を思う聡明な方でしょう。

カリオン　そのあとで福の神のわきに坐ってまず第一に頭を探り、そいから綺麗なタオルを取って瞼のまわりを拭きました。パナケイアは、あの方の頭から顔全体を紫色の布で包み、そいからご本尊が合図の舌打ちをすると、たちまち神殿の奥から二匹の蛇が現われましたが、その大きさときたらとてつもないもので。

妻　〔怖れをなして〕おお神々！

カリオン　この蛇どもが紫の布の下に静かにはいって瞼を舐めにかかりました、わしの推量ですがね。するとあんたがお酒を十杯もあけぬうちに(2)、なんと奥さん、福の神が目明きになって起き上がられた。わたしは嬉しさに手を打って旦那の目を覚ましてしまった。一方神さまも蛇どもも、たちまち神殿のなかに姿を隠しました。そいから福の神のわきに寝ていた連中があの方を祝ったことといったら、とうとう夜っぴてお日さまが出るまで、起きていたありさまでした。わたしはあの神さまを誉めたたえましたが、なにしろ福の神を即座に目明きにし、ネオクレイデスは前よりいっそう盲目になさったんですから。

妻　おお、王者にして主なるお方、何たる偉力をあなたはお持ちか。だがお前さん教えておくれ、福の神さまはどこにおいでなの？

カリオン　いまおいでです。あの方のまわりはえらい人だかりでした。前々から正しくてささやかな暮らしをして来た人たちがあの方を祝い、喜びのあまり誰も彼もあの方と握手しました。ところが裕福でしこたま財産をもち、それもよこしまなやり口で手に入れた手合いは眉をしかめ、そして仏頂面をしていました。ほかの連中は冠をつけてあの方の後から笑ったり歓呼の声をあげてついて行きました。老人どもの穿きものは、足並みそろった行進に高く鳴り響いた。ところで、さあ、あんたたちもみんないっしょに舞い踊り歌いなさい。もう家に帰っても、袋のなかの麦粉が切れたなどいわれる気づかいはないんだから。

妻　ヘカテにかけて、わたしもお前さんにパンをつないだ冠をつけたいわ。こんないい知らせをもって来たんだから。

カリオン　さあぐずぐずしちゃいられませんぜ、あの人たちがもう戸口の近くまで来てるんだから。

妻　それじゃ、わたしは中にはいって振舞いのお菓子(3)をもって来よう。あの方の眼を新しく手に入れた召使に見立てて(4)。

カリオン　わたしはあの人たちを出迎えよう。

〔妻は家のなかに入り、カリオンは退場。ここにコロスが行なわれ、福の神登場〕

福の神　何はさておき日輪を崇め奉り、次いでは尊厳なるパラス(5)の音に聞こえたこの土地、してまたわたしを迎えいれたケクロプスの全国土を。わが身の不運を思えばまことに恥ずかしい、何も知らずにとんでもない人たちといっしょになり、私の付き合いにふさわしい人たちを無知のゆえとは言え、避けていたとは。おお、哀れなわたし、どれもこれも間違いをやっていたのだから。だが、いまや一切を逆さにして、これからはあらゆる人に、わたしが悪人どもに身を委せたのは本意でなかったことを示すとしよう。

〔クレミュロス登場〕

クレミュロス　〔舞台脇に向かって〕消えて失せろ。いやはやまことにうるさいことだ、ひとがうまくいくとたちまち現われる友だちなるものは。肱で突いたり向う脛にぶつかったり、めいめい何か好意を示すつもりなのだ。わたしに話しかけなかったものがあるだろうか？　老人仲間でわたしを広場で取り囲まなかったのがあったかな。

〔クレミュロスの妻、菓子の類を手に戸口より現われる〕

妻　〔クレミュロスに向かい〕おお、いちばんいとしい人〔クレミュロスと福の神の両方に〕あなたも、それにあなたも、ご機嫌よう。さあそれでは、しきたりですから、この振舞い菓子をとってあなたの上に撒きますよ。

福の神　そいつはごめんだ。私が目明きになってからはじめて家のなかにはいるんだから、何も持ち出さんで、むしろ運び込んだ方がふさわしい。（七九三）

妻　じゃほんとうに振舞い菓子はお受けになりません？

福の神　家のなかで、炉のわきでな、これがならわしだから。〔観衆に向かって〕そうすりゃ俗悪な真似[1]も避けられよう。狂言の作者にとっても似合わしからぬことだからな。干無花果だの菓子だのを見物の衆にばら撒いて、この趣向で笑わせようなどというのは。

妻　ほんによいことをおっしゃります。〔観衆を指して〕それデクシニコス[2]が干無花果をひったくろうと立ち上がりました。（八〇二）

〔福の神、クレミュロス、その妻、戸口のなかに入る。コロスの舞踏。その間にカリオン家の内から現われる〕

カリオン　〔コロスに向かい〕おお、皆の衆、仕合せとは何と心地よいものではござらぬか、しかも自分の家からは何一つ持ち出さんでよいと来ては。わしらの家にはお宝の山が、べつによこしまなこともせぬのに、飛び込んでまいった。こうして金持ちになるとは、全くもって愉快なこと。櫃には白い麦粉が満ち、両手壺には花の香も高い黒い葡萄酒があふれる。わしらの箪笥には、不思議なことに金銀がぎっしりとつまってる。水溜めはオリーヴ油を縁までたたえ、香油瓶には香油があふれ、二階には干無花果がいっぱいだ。酢の瓶も小皿も水差しもすべて青銅製にあいなった。腐りかけた俎はごらんの通り銀製となった。わしらの提灯は、急に、象牙作りとあいなった。召使どもは黄金のスタテール貨[3]で丁半の慰みをしてるし、糞したあとで石で拭いたり[4]したのは昔のこと、今じゃわしらは贅沢のあまり、いつでもにんにくを使っとる。そして旦那はただいま家のうちで頭に冠をつけて、豚と牡山羊と牡羊を犠牲に供えてござる。わしは煙に追いたてられて来た。とても家のうちにはいたたまれぬ。わしの瞼は煙に咬みつかれてしもうた。（八二二）

〔「正しい人」が、侍童に古びた外套と靴とを持たせて登場〕

正しい人　小僧、わしについて来い、あの神さまのとこへ行くんだ。

カリオン　おや、そこをまかり通るひとは誰だ？

正しい人　前にはみじめだったが、ただいまは仕合せな人間だ。

カリオン　お見受けいたすところ、たしかに立派なひとだ。

正しい人　いかにも。

カリオン　で、ご用件は？

正しい人　あの神さまを訪ねてまいった。あの方のおかげでたいへん仕合せになったのでな。と申すのは、わたしは父親からたっぷり遺産を受け継いで、困っている友だちどもを助けてやった。これは世のなかのためになることと考えたのでな。（八三一）

カリオン　そこでさっそくお金が足りなくなった。

正しい人　いかにもその通り。

カリオン　それ以来、おぬしはみじめだった。

正しい人　いかにもその通り。そこでわしは考えた。それまで困ってるのを助けてやった者たちは、いったんわしが困ったときにゃ、きっと友だち甲斐があるだろう、と。ところがその連中は私を避けて知らぬ顔さ。

カリオン　そのうえ、きっとおぬしのことを嘲ったにちがいない。

正しい人　いかにもその通り。そこでわしのお櫃は乾上がって没落とあいなった。だが、今はちがう。そんなわけで、あの神さまにお礼言上の殊勝な気持でここまで来たわけさ。（八四一）

カリオン　ところで、神々にかけて、あのお伴の小僧が持ってる古着は、いったいどうしたわけで？　教えてください。

正しい人　これもあの神さまに奉納[5]する気で来たので。

カリオン　まさか大秘儀のときそれをひっかけて信徒仲間に入ったんじゃあるまい？

正しい人　いやちがう、あいつを着て十三年間震えとった。

カリオン　あの履物は？

正しい人　あれもわしといっしょに冬を凌いで来たのさ。

カリオン　そいで奉納に持って来たってわけか？

正しい人　ゼウスにかけて、いかにも。

カリオン　神さまにみごとなお土産をご持参ですな。

〔一人の告訴常習者[1]、証人を伴って登場〕

告訴常習者〔独白〕ああ、情けなや、尾羽打ち枯らした哀れな己が身。三たび不幸な、いな四たび、五たび、十二たび、いや一万たびも。やれ、やれ。かくまでもたび重なる不運にかきまわされるとは。（八六五）

カリオン　魔よけのアポロンともろもろの神さまがた、この男はいったいどんな不幸にあったのです？

告訴常習者〔カリオンを認めて〕むごい目にあったものじゃないか。家財一切を失ったんだ。この神さまのおかげなんだが、やがてまた盲目になるさ、この世に正義がなくならぬ限りは。（八六九）

正しい人〔カリオンに〕どうやら事情が読めたわい。誰か知らぬが不幸なひとがやって来る、だがこりゃよくない刻印[2]のひとらしい。

カリオン　ゼウスにかけて、天晴れでかした、あいつがくたばるとは。

告訴常習者　どこにいるんだ、昔通りにもういちど目明きになった、独力で即刻にもわれわれ全部を金持ちにしてみせると約束した先生は？　昔通りに、こいつはそれどころか、われわれの仲間を没落させた当人だ。

カリオン　じゃ、いったい誰をそんな目にあわせたんだ？

告訴常習者　このわたしさ。

カリオン　お前さん無頼漢か盗人の仲間か？

告訴常習者　ゼウスにかけて、お前さんたちこそ怪しいぞ、きっとわしの金を取ってるにちがいない。（八七二）

カリオン　おお、ダマテル[3]、この告訴気違いは何て騒々しく飛び込んだもんだ。きっと腹がへって気がふれたのにちがいない。

告訴常習者　お前さんは一刻も早く広場[4]に行くがええ。あそこで車の上で拷問されて、きさまの悪事を告白するんだ。

カリオン　呻くのはきさまだぞ。

正しい人　お助けのゼウス[5]にかけて、あの神さまは全ヘレネスに対して一大恩恵を施すことになる、告訴気違いをこっぴどくやっつけちまえば。（八七九）

告訴常習者　ああ、情けなや。お前さんまでいっしょになって嘲る気か？　ところでこの上っ張りはどこで手に入れたんだ？　きのうは擦れ切った外套を着てんのを、この目で見たぞ。

正しい人　きさまにびくびくしたりはせんぞ。〔指環を示しつつ〕わしはこの指環[6]をエウダモス[7]から一ドラクメで買ったんだ。

カリオン　だが「告訴気違いの咬傷用」とは書いてないぞ。

告訴常習者　とにかく失礼千万じゃないか。両人してわしを嘲り、ここでやっとることは一言も話さない。両人がここにいるのはたしかによからぬことのためだ。

カリオン　ゼウスにかけて、お前のためになることじゃない、よく覚えとけ。

告訴常習者　ゼウスにかけて、わしの財産で両人とも、ご馳走を食うつもりだろう。（八九〇）

正しい人　ほんとうにきさまは、証人もろとも八つ裂きになるがええ。

カリオン　腹のなかは空っぽでね。

告訴常習者　わしの言い分を嘘だと言うのか？　家の中じゃ、こん畜生、魚や肉をどっさり焼いてるじゃないか。〔香りを嗅ぐ鼻息〕ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ。

カリオン　不幸者、何か匂うかね。

正しい人　たぶん寒さの香りだろう。こんな擦り切れ外套きり着てないんだからな。

告訴常習者　おお、ゼウスはじめもろもろの神々、こやつどもがわしに失礼を働くとは、こりゃ我慢できましょうか。全くやりきれぬは、わしのような立派な愛国者がひどい目にあうとは。（九〇〇）

正しい人　お前さんが愛国者で立派だと？

告訴常習者　他に並ぶ者もないぞ。

正しい人　では訊ねるから、答えてごらん。
告訴常習者　何のことだ？
正しい人　百姓かね？
告訴常習者　それほど気がふれてると思うかい？
正しい人　じゃ貿易商か？
告訴常習者　うん、ときにはそのふりをすることもある。[1]
正しい人　すると何だ？　何か技を覚えたのか？
告訴常習者　ゼウスにかけて、そうじゃない。
正しい人　じゃ働かずに、どうして、何で食って来たんだ？
告訴常習者　国家と個人の事柄すべての世話役なのさ。
正しい人　お前が？　どういう料簡で？
告訴常習者　わしが買って出るだけだ。[2]
正しい人　泥棒先生、どうして立派だなどぬかせるんだ、かかわりもないことに手を出して人から嫌われるくせに。（九一〇）
告訴常習者　阿呆鳥め、力の限り自分の国につくすのが、わしに無関係と言えるか？
正しい人　やたらに干渉するのが、国につくすことか？
告訴常習者　現行の法を擁護し、他人がこれを犯した場合に黙認せぬのだ。
正しい人　国家はそのためにわざわざ審判員[3]を任じているじゃないか？
告訴常習者　誰が告発するんだ？
正しい人　希望者だ。
告訴常習者　つまり、わしはそれなのだ。だからわしのところに国事が集中する。（九一九）
正しい人　ゼウスにかけて、いやはや国事も悪い保護者をもったもんだ。だがお前、静かに何もせずに暮らす気にゃならんかね？
告訴常習者　だがお前さんの言うのは獣の生活じゃないか、何も仕事をもたない生活じゃ。
正しい人　もっと別の仕事を覚える気はないか？
告訴常習者　ごめんだね、わしに福の神ご自身やバットスのシルフィオン[4]をくれたって。
カリオン　急いで上っ張りを脱ぐんだ。
正しい人　［告訴常習者が従わぬのを見て］こら、お前さんに言ってるんだ。
カリオン　そいから靴を脱ぐんだ。
正しい人　［告訴常習者がこれにも従わぬので］みんなお前への言いつけだ。
告訴常習者　じゃ、このわしの前にきさまたちのうち好きな者が進み出るがいい。
カリオン　よし、わしがその当人だ。
［カリオン、告訴常習者の上衣と靴を脱ぎとる。つれの証人恐れて逃げ去る］
告訴常習者　情けなや、白昼に裸にされた。（九三〇）
カリオン　きさまは他人事（ひとごと）にちょっかいを出して暮らすのがいいと思ってるじゃないか。
告訴常習者　［つれの証人の逃げたのに気づかずに］こやつの乱暴を見てくれ。わしはあんたに証人になってもらうぞ。
カリオン　だがお前の連れて来た証人は逃げちゃったぞ。
告訴常習者　やれやれ、独りで虜（とりこ）になってしまった。
カリオン　今となって喚くか？[5]
告訴常習者　おお、またしても。
カリオン　［正しい人に向かい］あんたのぼろ外套をくれないか、この告訴気違いをそいつでくるむんだ。（九三六）
正しい人　そりゃいかん。ずっと前から福の神に捧げた品だ。
カリオン　それじゃ、こんな無頼漢や盗人よりもそいつを捧げるのにもっとよいとこがあるかな？　福の神は厳かな着物で飾った方が似合う。
［カリオン、正しい人の古外套を告訴常習者の肩にかける］
正しい人　あの履物はどうするんだ？　言ってごらん。

カリオン　それも今すぐ、こいつの顔を野生のオリーヴの木に見立てて[1]釘で打ちつけよう。

告訴常習者　退却するよ。お前たちには全くかなわぬことがわかったからな。だが、もし仲間を一人手に入れたら、たといそいつがやくざにしても、[2]わしはこの手ごわい神を今日にも処罰するぞ。明らかにひとりで勝手に民主政治を崩壊させてるんだから、市民の評議会や民会の同意を得もしないで。

正しい人　さあ、わしの鎧(よろい)に身を固めて[3]行くんだから、銭湯[4]に駆け込むがええ。そいからあそこで立ちんぼの大将になって暖(あった)まるがええ。わしだって以前にゃその場所を占領してたんだから。

カリオン　だが風呂番が皐丸をつかんで、あいつを戸口から引き出すにきまってる。一見しただけで、あいつが悪い刻印(しるし)の人間とわかるだろうから。さてわしらはいっしょに家(うち)にはいって、あんたに神さまを拝んでもらおう。

〔二人とも家のなかに入る。コロスの舞踏。そのあとで派手な着物を着た老婆、菓子をのせた皿をもつ婢を伴って登場〕

老婆〔コロスに向かって〕おお、おなつかしきご老人がた、わたしはほんとうに新しい神さまのお住まいにたどりついたのでしょうか、それともすっかり道を間違えてますかしら？

コロス　たしかにおたずねの戸口にご到着です、可愛いお嬢さん、と申すのは、えらくはにかんでお訊ねなので。

老婆　それでは、中の人を誰か呼びましょう。

〔クレミュロス戸口から現われる〕

クレミュロス　それには及ばない。ちょうどわたしが出て来たんだから。したが、お訪ねの特別の理由を話していただかにゃ。

老婆　おお、おなつかしいお方、恐ろしい不法な目にあいました。あの神さまが目明きになられましてから、わたしの暮らしを生き難いものにされました。

クレミュロス　そりゃまたどうしたわけ？　ひょっとすると、あんたもやはり女の間の告訴気違い[5]なのか？

老婆　ゼウスにかけて、わたくしはちがいます。

クレミュロス　じゃ籤(くじ)に当たらんのに法廷で飲んでた[6]というのか？

老婆　ご冗談でしょ。わたしは情けないことに気がいらいらしてるの。

クレミュロス　そのいらいらの正体をさっそく話してごらん。

老婆　聴いてください。わたしには好きな男の子がありました。貧乏だけれども、顔立ちがよくて美しく、それに人柄もまじめでした。何かわたしが頼むと、すべてきちんと立派にやってくれたのです。それでわたしも、この子のために万事努めてあげました。

クレミュロス　いつもお前さんにいちばんねだったのは何かね？

老婆　たいしたことはないので。わたしに対してはひどく遠慮がちでしたから。上衣のために二十ドラクメのお金、履物のために八ドラクメをねだるくらいでした。それから姉妹(きょうだい)のために下衣を、また母親のために上衣を買ってくれと頼んだり、小麦四メディムノスを求めることもありました。

クレミュロス　アポロンにかけて、話のとおりならたしかにたいしたことじゃない。きっとあんたに遠慮してたんだ。

老婆　そしてこんなねだりごとをするのも欲からではなく、わたしが好きだからだと言ってました。わたしの上衣を着て、わたしを想い出すためで。

クレミュロス　こりゃぞっこん惚れ込んだ男の話だ。

老婆　ところが今ではあのいやなやつは同じ気持を失って、すっかり心変わりしてしまいました。と申すのは、わたしがこのお菓子やそのほかあのお皿にのってるおいしいものを送り届けて、それに今夜行きますと言い添えたのに——

クレミュロス　どうした？　言ってごらん。

老婆　届けた品にあの乳菓子を添えてつっ返して、あの人のところにもう二度とわたしが行かないようにし、お菓子を返したうえに、かてて加

えてこう言うのです。「ミレトス人はその昔、戦いに勇ましかりき」[1]
クレミュロス　きっと気質は悪くない奴だった。今では金持ちになったんで豆汁などは喜ばないんだ。以前は貧乏ゆえに何でも平らげたのさ。
老婆　ほんに、以前は、二柱の神にかけて、毎日わたしの戸口に現われました。(一〇〇七)
クレミュロス　お葬いのために？
老婆　とんでもない、わたしの声だけでも聞きたかったので。
クレミュロス　〔独白〕物をもらいたいからさ。
老婆　そして、ゼウスにかけて、わたしが沈んでるのを知ると、いつも優しく「小鴨ちゃん」とか「小鳩ちゃん」とか呼んでくれました。
クレミュロス　〔独白〕そいから履物の銭をねだったんだろう。(一〇一三)
老婆　大秘儀[2]の折に、ゼウスにかけて、車で運ばれるわたしに誰かが目をつけたので、そのためわたしは一日じゅうぶたれました。あの子はそんなにやきもちやきでした。
クレミュロス　〔独白〕どうやら、独りで食うのが好きだったんだ。
老婆　それからわたしの手は全く美しいと申しました。
クレミュロス　〔独白〕二十ドラクメを差し出すときのな。
老婆　またわたしの肌の香りが快いとか――(一〇二〇)
クレミュロス　〔独白〕タソスの酒[3]を注ぎ込んでたんなら当り前さ、ゼウスにかけて。
老婆　それからわたしの眼差(まなざし)が柔かくて美しいとか――
クレミュロス　〔独白〕そいつなかなか抜け目のない男だ、色気違い婆あの貯えを食いつぶすとは。
老婆　ねえ、あなた、あの神さまの仕打ちも間違ってますよ。ひどい目にあってる者をいつでも助けると言いふらして。
クレミュロス　じゃ、あの方にどうさせたらいいんだ。言ってごらん、そしたら実行されよう。
老婆　ゼウスにかけて、わたしのおかげでいい目にあった者にわたしへの恩返しを強いるのが当然です。さもなけりゃ、あの子は仕合せになる資格は全くありません。(一〇三〇)
クレミュロス　毎晩あんたにお返しをしたんじゃないか？
老婆　でもわたしの生きている限り見棄てないと約束しました。
クレミュロス　そりゃもっともなことだ。だが今じゃ、あんたを生きてないと思ってんだ。
老婆　ねえあなた、わたしは心の痛みにやつれ果てました。
クレミュロス　〔独白〕いやちがう、見たところ腐り果てて[4]る。
老婆　指環を通してわたしを引き抜くことだってできますよ。
クレミュロス　〔独白〕指環が篩(ふるい)のたがだったらな。

〔花冠をつけ、松明(たいまつ)を手にした若者登場〕

老婆　あれ、ほんとうにあの若者がやって来た、最前から悪口を言ってたご当人よ。どうやらお酒盛りにおでましらしい。
クレミュロス　そうらしい。花冠をつけて松明を手にやって来る。(一〇四一)
若者　〔老婆に向かいうやうやしく〕ご機嫌いかが？
老婆　何て言ってるの？
若者　昔のお馴染みさん、急に白髪(しらが)におなりですね、大空にかけて。
老婆　情けない、こんな辱めを受けるとは。
クレミュロス　〔老婆に〕お前さんに会うのは、だいぶ久しぶりのようじゃないか。
老婆　いつからって、あんた、昨日うちに来たばかりよ。
クレミュロス　すると、あの先生は普通の人とは逆だな。一杯機嫌になると、いっそうよく視(み)えるらしい。
老婆　いいや、あの人はいつも無遠慮な性質(たち)なのよ。
若者　〔独白〕おお、わだつみのポセイドンに年寄りの神々[5]、婆さんの顔に皺(しわ)のふえたこと。(一〇五一)
老婆　ああ、ああ、松明を寄せちゃいや。
クレミュロス　〔独白〕ほんにその通りだ。火の粉が一つでもついたら、婆さんを古い注連飾(しめかざり)[6]みたいに燃しちまうだろう。
若者　久しぶりにわたしと遊びませんか？

老婆　どこで、あんた？

若者　ここで、胡桃を握って。

老婆　どんな遊び？

若者　あんたに歯が何本あるか。[1]

クレミュロス　わしも当ててみよう。三本か四本だろう。

若者　〔クレミュロスに向かって〕払ってください。奥歯一本きりないんだ。

老婆　かわいそうに、ちょっと頭が変らしいね、こんな大勢の前でわたしを洗濯桶にするなんて。[2]　(一〇六二)

若者　〔老婆に向かい〕誰かあんたを洗い上げたら、[3]その方があんたの得だろう。

クレミュロス　いやちがう、いまは売り物の格好[4]だが、お白粉が洗い落とされたが最後、顔の皺は一目瞭然さ。

老婆　年齢ばかりくって、あんたもどうやら正気じゃないね。

若者　爺さんあんたを口説いてるらしいぞ。そしてわたしが見てないつもりで、あんたのオッパイに手を出してる。

老婆　〔クレミュロスに〕アプロディテにかけて、[5]わたしはいけない、このいけ好かない人。　(一〇六九)

クレミュロス　ヘカテにかけて、とんでもない。気違いじゃあるまいし。だが、お若いの、このお嬢さんを嫌ったら捨てておかんよ。

若者　ところが、わたしはぞっこん惚れてるんでして。

クレミュロス　それでもお前さんの悪口を叩いてる。

若者　どういう悪口で？

クレミュロス　あの人の言うところでは、お前さんは失敬なうえに、「ミレトス人はその昔戦いに勇ましかりき」と言ったとか。[6]

若者　わたしはこの女のためにあんたと喧嘩はごめんですよ。

クレミュロス　何？

若者　あなたのお年齢に敬意を表して。他の者だったらこんな振舞いは許せないんだが。さあお嬢さんを抱いて大喜びで消えなさい。　(一〇七九)

クレミュロス　わかってる、気持はよくわかる、もう女といっしょはまっぴらってとこだろう。

老婆　誰がそんなこと許せます？

若者　〔観衆を指しつつ〕この一万三千人[7]とやった女など話をするのもご免だ。

クレミュロス　だが、あんたは酒を飲むのは嫌いじゃないんだから、いっしょに滓も飲み干す義務があるぜ。

若者　でもこの滓は断然古くて腐ってる。

クレミュロス　酒漉しを使えばなんとかなるんじゃないか。まあ、家のなかにはいりたまえ。

若者　あの神さまに参詣してこの冠を奉納したいと思います。

老婆　わたしもあの方に一言申したいことがある。

若者　わたしははいるのやめた。　(一〇九〇)

クレミュロス　なに、心配はいらん、まさか手籠めにもすまいて。

若者　なかなかいいことをおっしゃる。これまでずいぶん長いことあの女を塗りあげた[8]んだから。

老婆　さあ、行きなさい、わたしはあとからはいります。

〔二人とも家に入る〕

クレミュロス　おお王者ゼウス、あの婆あが若僧にしっかりくっついてる様子は、まるで牡蠣みたいだ。

〔クレミュロス家のなかに入る。コロスの歌舞があって、ヘルメス登場、クレミュロスの戸口を叩いて身を潜める〕

カリオン　〔戸口のうちから、戸口を開きつつ〕戸口を叩いたのは誰だ。どうしたわけだ？　誰もいないらしい。だが戸口がわけもなしに音を立てるとは、泣きたがってる証拠だ。

ヘルメス　〔現われる〕あんたに用なんだ、カリオン、待ってくれ。

カリオン　あんたか、じゃ、あんたが戸口をあんなに強く叩いたんだね。

ヘルメス　いや、そうしかけると、お前さんが先に開けたんだ。とにか

く駆け込んでご主人を呼んでくれ、それから奥さんと子供たちと、それから召使たち、それから牝犬、それからお前自身、それから牝豚を。

カリオン　教えてください、いったい何ごとです。

ヘルメス　おお、やくざ者、ゼウスさまはお前たちを一つ鉢でかき混ぜて、ありとあらゆる者をバラトロン[1]に投げ込むおつもりだ。

カリオン　〔独白〕こんなこと知らせる触れ役は舌を切られる。[2]しかし、どうしてわれわれをそんな目にあわそうと企てなすった？

ヘルメス　お前たちが前代未聞の恐ろしいことを実行したからさ。福の神の目が元通りに見えるようになって以来、誰も乳香や月桂樹やお供え菓子や犠牲の獣や、その他何にせよ、われわれ神々に向かって捧げる者はないのだ。

カリオン　たしかに、もう捧げる者はありますまい。あのころにわれわれのことを親身に考えてくださらなかったから。

ヘルメス　ほかの神々のことはわしにはどうでもいいんだが、このわたしはほんとに参った、身を削られる思いだ。

カリオン　いいことを言うね。

ヘルメス　以前なら居酒屋のおかみのとこで何でも手に入った。朝っぱらから、酒入り菓子、蜂蜜、干無花果、つまりヘルメスの好物は何でもござれだった。今日日（きょうび）は腹ぺこで、足も宙ぶらりん[3]で休息さ。

カリオン　正しい報いじゃないかな、こんな結構なものをくれた人をときどき罰したり[4]したんだから。

ヘルメス　ああ情けなや、ああ、月の四日目[5]に焼く平（ひら）菓子よ。

カリオン　今は亡き者[6]を慕っていたずらにその名を呼ぶ。

ヘルメス　ああ、昔食い慣れた腿肉（ももにく）よ。

カリオン　ここで空中球乗りの芸当[7]をすりゃいい。

ヘルメス　ああ、昔食い慣れた舌を焼く臓物よ。

カリオン　痛みのためにあんたの臓物がひっくりかえってるらしい。

ヘルメス　ああ、半々に水で割った[8]酒の盃よ。

カリオン　〔汚ない水の入った鉢を示しつつ〕こいつを飲み干して[9]さっさと退散なされ。

ヘルメス　自分の友を助けてくれまいか？

カリオン　あんたの頼みがわたしでお役に立てることなら。

ヘルメス　上手に焼けたパンと、家のなかで供えている肉の大きな一切れを持って来て食わしてくれまいか？

カリオン　ですが持ち出しは禁止で。[10]

ヘルメス　だが、お前がご主人の器[11]をこっそり失敬するたびに、わたしはいつも目つからないようにしてやった。

カリオン　壁掘り先生[12]、ご自身分け前にあずかるという条件でね、いつもよく焼けたお菓子が届いたでしょう。

ヘルメス　だが、そいつもお前が後で平らげたんだ。

カリオン　でも、あんたはわたしと同じにひっぱたかれたわけじゃない、わたしが失敬してつかまったときにも。

ヘルメス　お前さんもピュレを占領した一人[13]なら、怨みを根に持たんでくれ。そして、神々にかけてのお願いだ、わたしを同居人に入れてくれんか。

カリオン　すると、神々を棄ててここに腰を落ちつけるというわけで？

ヘルメス　お前たちのとこの方がずっといいんだ。

カリオン　なに？　あんたは逃亡をいいことと思う？

ヘルメス　どこでも[14]仕合せに暮らせるところが祖国なんだから。

カリオン　あんたがここにいてくれると、一体どんな役に立つかしら？

ヘルメス　戸口のところで蝶番（ちょうつがい）の[15]神に祀（まつ）るがよい。

カリオン　蝶番の？　だがもう廻し[16]の必要はない。

ヘルメス　じゃ商売の神は？

カリオン　わたしどもは金持ちです。どうして小売商のヘルメスなどを養う必要がありましょう。

ヘルメス　じゃ欺きの神[17]は？

カリオン　欺きの？　まっぴらです。今では詐欺は無用で、まっすぐなやり方きり要りません。

ヘルメス　じゃ道案内の神は？

カリオン　あの神さまご自身目が見えます。だからわたしらは道案内など要りません。

ヘルメス　では競技の神になろう。[1] これなら言うことあるまい。福の神にとっては、音楽や体育の競技を催すのがいちばんふさわしい[2]からな。

カリオン　いろんなあだ名をもってるのはいいもんだな。この人もおかげで暮らしの途を見つけちゃった。無理もないことだな、審判員がよくいろんな番号に登録[3]されようと骨折るのは。

ヘルメス　じゃ、この条件で家に入れてもらうぜ。

カリオン　よろしい。そして井戸のとこに行って、手ずから臓物を洗いなさい、さっそくにも一人前の下働き[4]に見えるように。

〔二人とも家のなかに入る。代わってゼウスの神官登場〕

神官　クレミュロスがどこにいるか、はっきり知ってる者はないか？

クレミュロス　〔戸口から出て来て〕どうしたんだ、あんた？

神官　どうしたもこうしたもお話にならない。例の福の神の目があいて以来、腹が減ってまいってしまった、食う物が何もないんだ。しかもわしはお助けのゼウス[5]の神主だというのにな。

クレミュロス　いったい全体どうしたわけで？

神官　誰もお供えをする気にならないんだ。

クレミュロス　そのわけは？

神官　だれもかれも金持ち[6]なんだ。だが以前何も持ってなかったころには、たとえば商人が難破から免れれば犠牲を捧げたし、また裁判で無罪になった者もお供えをした。また吉兆を得ようと犠牲を捧げる者は、神主のわしを招いた[7]ものだ。今日日(きょうび)と来ては、綺麗さっぱり誰一人犠牲を供える者はないし、境内に足踏み込む者とてない。もっとも、糞しに来る者は一万を越えようが。

クレミュロス　〔独白〕あんたは慣わし通りその分け前にあずかる[8]んじゃないか？

神官　ところでわしは、お助けのゼウスをほったらかしてここに落ち着きたくなった。

クレミュロス　心配ご無用、神さまがお望みなら万事うまくいく。実[9]はお助けのゼウスは家のなかにおいでなんだ、招かれずしておいでになった。

神官　それは願ってもない吉(よ)い知らせ。

クレミュロス　では即刻にも――〔神官が家のなかに入ろうとするのをさえぎって〕ちょっとお待ちを――福の神を、昔女神アテナの宝物室(おくら)を守って鎮座しておられたところに祀り[10]ましょう。〔家に向かって〕さあ誰かここに火のついた松明を出してくれ、〔神官に〕あんたはそれを持って神さまの先に立ってくだされ。

神官　それは何より大事な役。

クレミュロス　誰か福の神を呼び出しなさい。

〔福の神と老婆、家から現われる〕

老婆　わたしの役は？

クレミュロス　神さまの鎮座につきものの壺[11]を頭にのせて厳かに運ぶんだ、この女(ひと)は刺繡(ししゅう)をした着物[12]を着て来た。

老婆　でもわたしがやって来た用件は？

クレミュロス　万事うまくいくよ。若僧も夕方にはお前さんとこにきっと来る。

老婆　ゼウスにかけて、ほんとにあの人がわたしんとこに来ると保証してくださるなら、壺を運びますよ。

〔老婆壺を頭に載せる〕

クレミュロス　ところで、この壺はほかの場合とはさかさまだぞ。ほかの壺だと湯葉(ゆば)[13]がいちばん上にあるんだが、ここじゃ婆(ばば)の上に壺がのっかってる。

〔福の神たち行進をはじめる〕

コロス　さて、われらもぐずぐずしてないで退場すべきときが来た。この方々のうしろから歌いながらお伴と参ろう。

〔役者もコロスも一緒にアクロポリスに向かって行進の形で退場〕

訳註

三九九(1) デルポイのアポロンの託宣を述べる巫女（みこ）ピュティアは鼎（かなえ）の上にすわってこれを行なった。

(2) アポロンの神託を求めた者は帰宅するまで月桂樹の冠をとらず、身体の神聖の証とした。

(3) 喜劇特有の思いがけぬ冗談の言葉。

四〇〇(1) ポイボスはアポロンの異名。「お冠から」は、アポロンの託宣を告げる巫女が月桂樹の冠をつけていたうえに、すわっていた三脚台にも月桂樹の冠がつけてあったことからこう言ったもの。

(2) 『蛙』一四七二行、『鳥』一六三八行にも神を人間扱いにした例がある。カリオンの疑い深い冗談を示す句。

四〇一(1) 古註はけちんぼで金持ちの悲劇作者と伝える。

四〇二(1) 家の壁を掘って侵入する賊。ギリシア人の民家は一般に簡素で土の壁は容易に穴が掘れた。

(2) ロジャースの説明によれば姦通の場を相手の女の夫に押えられた者は、かれによって殺されても仕方がなかったが、金を出して示談にしてもらい、ただ身体の毛を抜かれるだけですませることもできるの意。

(3) ペロポネソス戦役にスパルタを援助して以来前四世紀の間ペルシアの大王はその豊かな資金によりギリシアのポリスの分立抗争を助長していた。

(4) 『女の議会』一〇二行の註参照。

(5) 三段橈船は当時のアテナイの軍艦。無産の市民や在留外人がその漕ぎ手となり、前五世紀には一日三オボロス、前四世紀にはだいたい一日四オボロスの日当をもらった。

(6) アテナイ人でペロポネソス戦役の敗北後アテナイの軍事的復興にペルシアの援助の下に活躍したコノンが、スパルタに対抗するために前三九三年にコリントに配置していた傭兵隊。イピクラテスはこれを率いて前三九〇年春スパルタ軍を破った。

(7) 前三八九年の十人の将軍の一人。古註によればデマゴーグで、公金横領のゆえに訴えられ、財産没収にあった。

(8) アリストクセノスという人物でパンピロスの子分であった。

(9) 『女の議会』一〇二行の註参照。

(10) ここは古註は文字通りにとってピレプシオスを講釈師のような者に考えロジャースもそれに従っているが、ピレプシオスなる者が国家への債務のために投獄されたことがデモステネスに見えるので、「自己の債務について虚偽の釈明をする」の義にとった。

(11) 前三九一年以来キュプロスのサラミスの王エウアゴラスがペルシアから離反し、やはりペルシアに反抗していたエジプト王と結んだ。エウアゴラスに好意を示したアテナイは、かれを通じてエジプトを応援するに至ったと考えられる。

(12) ライスはコリントにいた有名な遊女。ピロニデスは「驢馬」とあだ名された醜くて教養のない、しかし金持ちのアテナイ市民。三〇三行参照。

(13) ティモテオスは四〇二ページ註(6)に述べたコノンの子で父と同様にアテナイの国勢伸長に活躍した人物。父の莫大な遺産を継いでアテナイ市内に豪壮な邸宅を建てたが、邸内の塔がことに人々の噂に上ったのでカリオンが言及したもの。

(14) カリオンがたびたび口を出すのをとがめた表現。

四〇三(1) 以下クレミュロスは市民にふさわしい事柄を、カリオンは奴隷らしく食物のことばかりを挙げていることに注意。

(2) ギリシア神話のアルゴ船乗組員のうちでもっとも視力の鋭いので知られた人。

(3) ピュトーはデルポイの別名。アポロンが神託を告げるときには神域の月桂樹が揺れると信ぜられていた。

四〇四(1) 金の有難さに対する感謝の念も示されずに。

(2) 以下次行まではアテナイの民衆裁判所での審判員の法廷分属と日当受取りの制度をもじって老人たちの死期の遠くないのをあざけっている。民衆裁判所では、審判員がいくつかの法廷のうち、自分に利害関係または興味のある事件を扱う法廷に勝手に出席することを禁じ、抽籤により当たった法廷に分属するように定めていた。抽籤により一つの開廷日に必要な審判員として当籤した者は、さらに法廷分属の抽籤を経たのである、一つの壺のなかにΛ（ラムダ）以下当日開廷される法廷の数だけの文字が書かれた金属製の「樫の実」が入

っており、当籤者は壺から自分の引き出した「樫の実」についている文字を主宰するアルコンに示し、それと同じ文字で示された法廷に入って裁判した。本文で、「番号札」と訳したのの原字は「文字」であり、右の「樫の実」の文字に当たる。そして老人を冷やかして何号法廷とあるべきを「柩」と言っているのである。

(3)　審判員の日当受取りは各法廷の審判員の間から抽籤で当たった五人の人たちがおこない、審判員たちの名前を書いた小木札（これは当人が当日持参して入廷にさいし係りのアルコンに手渡したもの）によって名を呼び日当を（小木札とともに）与えた。それゆえかりに「引換券」と訳したのは、この名前入りの小木札である。ギリシア人にとり冥土への三途の川の渡し守であった「カロンが引換券をくれる」とあるのは古註にあるように **Charon** と **Archon** が同じ文字から成っていることの洒落を含んでいるかも知れない。しかし前四世紀初めにはアルコンが、すなわち開かれた法廷が六つ以下なら、九人のアルコンのうちの六人のテスモテテスが法廷を管理していたわけであるから、日当の手渡しもかれらが行なったのか、アリストパネスがあまり厳密でなく、アルコンがその役をするように考えたのかは決しがたい。

(4)　二五三行にあるように貧しい農民たちはこの草の根を食べる習慣があった。ここはその食物には目もくれずに急いでの意。

(5)　ミダスは小アジアのプリュギアの伝説的な王。手に触れたものが何でも黄金に変わったという話で有名であるが、かれはまたパンとアポロンとの音楽の競技にパンに勝利を与えたために、アポロンの怒りに触れ、アポロンはかれの耳を驢馬のそれに変じたと伝えられる。

(6)　文脈には関係のない擬音で竪琴の絃音をまねたもの。

(7)　以下はアテナイ農民の素朴で愉快な戯れのさまをカリオンとコロスのかけ合いの形であらわしており、『オデュッセイア』第九巻に歌われた冒険談が織り込まれている。一眼の巨人キュクロプスの一人ポリュペモスに捕えられたオデュッセウスの一行がオデュッセウスの知恵によりポリュペモスを酒に酔わせ、かれの眼を焼け杭で潰して盲目にし、巨人の洞穴から無事に逃げ出した話である。ポリュペモスは羊を飼っていたので、自らをポリュペモスに擬したカリオンがコロスを羊や山羊にたとえて呼びかけたのに対し、コロスは自らをオデュッセウスの部下に擬してポリュペモス退治の話でやり返しているわけである。古註は、作者がここでキュテラのピロクセノスの『ガラテアとキュクロプス』という劇からトレッタネロの擬音や二九二行を借用したと伝えている。

四二五 (1)　『オデュッセイア』第十巻に見える有名な魔女のキルケ。彼女は薬を食物に混ぜてオデュッセウスの仲間に供し、かれらを豚に変じたが、オデュッセウスの望みに応じてかれらを再び人間に戻した。

(2)　一七九行にみえるようにコリントで遊女のライスがピロニデスを迷わした出来事への言及。ライスがキルケにたとえられている。「ピロニデスの仲間」というのは事実に反するが、上述のオデュッセウスの物語から勝手に連ねた文字。

(3)　これはカリオンの前の句とは理窟上はつながらないのでロジャースはピロクセノスの劇の文句か、或は田舎者の間の、ふざけた際の周知の文句だったかとしている。

(4)　オデュッセウスのこと。『オデュッセイア』第二十二巻一七〇行以下にオデュッセウスが、不忠実な山羊飼いのメランティオスを捉えさせ、縛り上げたうえ柱の上高く吊るしたことが見えるのにちなむ文句。ただし「睾丸つかんで」は『オデュッセイア』にはない。

(5)　『女の議会』六四六行とその註を見よ。

四二六 (1)　あそことはデルポイのこと。クレミュロスの頭の冠によってデルポイ帰りのことが明らかなので、神殿の奉納物を盗んだと察したのである。

(2)　これはクレミュロスが盗みのかどで裁判にかけられ、一段高い被告席でその家族とともに憐みを求めている姿を想像した文句。次行の命乞いの小枝とはオリーヴの小枝に羊毛をまきつけたもので嘆願者のしるしであった。家族は審判員の同情をひくために出廷したもの。

(3)　パンピロスは当時のアテナイの有名な画家。アペレスの師で遠近法と戦争画その他の群像の構成に優れた。ここで言及された画は、ミュケナイ王のエウリュステウスにより敵意を懐かれていたヘラクレスが死んで、その母アルクメネや、その子供たちがアテナイに逃れたところ、エウリュステウスからのまわし者が来たので、恐れたヘラクレスの一族がアテナイ王に庇護を嘆願したところを描いたものと考えられている。

四二七 (1)　ローマ人のヴェスタに当たるかまどの女神。

(2) ポセイドンの属性はさまざまであるが、ここで「海の神」とその属性の一つを訊ねたのはブレプシデモスの不信を表現している。
(3)『アカルナイの人々』一〇三〇行以下参照。この時代にはペロポネソス戦役の打撃によってこの制度が行なわれなくなっていたのであろう。
(4) ギリシア人の医薬神。この神の神殿はペロポネソスのエピダウロスにもっとも有名なものがあった。アテナイのアクロポリスの南麓にもペイライエウスの港にもあったが、アイギナの島のそれがアテナイの付近では重要だった。『蜂』一二二行参照。
(5) 驚愕の表現。『女の議会』一〇六九行参照。
(6) 復讐の女神たち。われわれの知る悲劇ではアイスキュロスの『慈みの女神たち』に出るので有名であるが、それが松明を持っていたかどうかは明らかでない。別のいかなる悲劇作品に言及しているかも不明。
(7) 古註は「生来恐るべきものではなく、われわれを欺こうとしてもできぬゆえ」と説明しているが、ロジャースのいうように六一二行と同様に単なる常套の呪いの言葉とみてよい。
(8) これまでの登場人物の会話からでは、福の神は少数の正しい人たちを幸福にし、したがって悪人どもは貧乏になるので、貧乏神がこの世から追い出されることにはならない。しかし作者は正直者が金持ちになるという変革の結果、あらゆる人たちが正義と敬神を心がけ（四九七行参照）、けっきょくすべての人々が幸福になって（四六〇行、一一七八行参照）貧乏神の居場所がなくなるとしているのである。
(9) 原語の **barathron** はアテナイ市にあった、死刑囚の屍を投げ込んだ岩の狭間。『騎士』一三六二行その他に頻出するがその正確な場所は不明。だいたいアクロポリスの西のニンフの丘の西麓で城壁の外と推測されている。

四〇八 (1)「この阿魔」すなわち貧窮のゆえにかような武具まで質に入れるというので、前四世紀初頭のアテナイ中産市民の経済状態を推察させる句である。
(2) 共に拷問の道具。
(3) 告発者が、被告が有罪ときまったときの刑量をも誌した訴状を提出した制度への言及。
(4) ここの原文の **prattontes** を古註は「死ぬこと」と見ているが、ロジャースとともに「議論をはじめる」の義にみる。

四〇九 (1) 財貨を指す。
(2) 市民の間の私的な信仰団体であった。
(3) 召使と訳した **therapōn** は奴隷である。奴隷制度の上にたつ市民たちだけの天国の思想は『女の議会』六五一行以下にも見られる。
(4) テッサリアは北部ギリシアの地方で、この時代まで有力な豪族たちが支配しポリスの発展がおくれた。豪族の土地を耕したのはペネスタイとよばれた奴隷身分の隷農であった。そのような事情から人浚いと訳した奴隷商人 **andrapodistēs** がこの地方に多かったと思われる。
(5) 自由人を浚って奴隷に売るのは古代のアテナイにおいても犯罪であり、捕えられれば死刑とされた。
(6) お前の述べたその不吉の言葉がお前に降りかかるように、という呪いの表現。本篇六五一行参照。似た表現は、『アカルナイの人々』八三三行『雲』四〇行にもみえる。
(7) 貧民は冬に公衆浴場の炉のわきに集まって暖をとることが多かった。その際に誤って火傷になることへの言及。本篇九五二行以下を参照。

四一〇 (1) ディオニュシオスはこの時代のシュラクサイの有名な僭主（前四三〇年ころ―前三六七年）。有能であったが暴君的な面で知られる。トラシュブロスは前五世紀末から前四世紀はじめにかけてのアテナイの民主派の立役者だった人物。前四〇四年「三十人の支配」により追放されたが、亡命者たちと共に同年末アッティカ北境近くのピュレの地を占領し、同志が集まってから翌年ペイライエウス港を占領した。その後「三十人」の側を戦いに破り、アテナイの民主政治を復活した。その際スパルタの主張により「三十人」の派と民主派との間には和解が成立し、大赦により「三十人」は別とし、その派への復讐は行なわれなかった。かようにトラシュブロスは民主政のために働き、そののちコリント戦役にアテナイ海軍を率いて活躍したが、前三八九年に小アジアのピシディアのアスペンドスで原住民のために殺された。民主派を代表する人だったが、その威勢のゆえにかれを同時代のディオニュシオスになぞらえて非難する者もあったので、ここの貧乏神の言葉となったと思われる。アリストパネスがトラシュブロスに好意を寄せていたことは『女の議会』二〇三行からわかる（それへの註参照）。
(2)「仕合せな」と訳した **makaritēs** の語は物故した人を現わす漢字の

「故」の字の意味によく使われた。それで本文のすぐあとに埋葬のことがみえるので皮肉な洒落であると思われる。

(3)　クロノスはゼウスの父。すなわち太古以来のひどい目爛れの意味。

(4)　優勝者の賞がオリーヴの枝でつくった冠だけだったことについてはヘロドトス第八巻二六に注目すべき記事がある。

(5)　系統の不明な地下の女神。妖怪と結びつけられ、または彼女自体が妖怪と考えられ、そのようなものが出ると信ぜられた三叉路にこの女神の祠が設けられ、毎月十三日地下神につきものの魚を含むお供えが行なわれた。

四二一(1)　これは『騎士』八一三行にも見え、エウリピデスの作品の引用と考えられている。

(2)　『アカルナイの人々』八五四行に悪党の親玉としてみえ、『女だけの祭』九四九行には貧窮のゆえに断食を守る者とされた画家。

(3)　「鴉に」という表現はいろいろの動詞と結合して、いつも呪いの文句として見えている。

(4)　正確な意味は不明であるが、古註に女が泣くときは自分で自分の頭を叩くとあるのによりかように訳した。

(5)　『女の議会』六五二行参照。

(6)　ここに作者の若いときから変わらぬ、農民びいきの精神がみられる。

(7)　テセウスはアテナイ統一の英雄。その事業を記念する祭には Synoikia (集住祭) とよばれるものがあったが、テセウス祭のことは前四世紀の碑文にも見えている。

(8)　テセウス祭に貧市民たちは国家の金で饗応された。しかしそれは大麦粥とパンという質素なもので、人々はパンを匙の形にえぐって粥をすくって食べたものらしい。

(9)　以下次行までは悲劇からの引用らしい。古註はソポクレスの佚篇「ピネウス」からのそれとしている。

(10)　これは医薬神アスクレピオスが名医として知られた英雄マカオン、ポダレイリオスの兄弟やイアソー、パナケイア、ヒュギエイアの姉妹の父であったことを指す。

(11)　カリオンは前行で、「一部始終」の意味を「足から頭まで」と言うが、頭までの句が五二六行に見えたように呪いに使われたので、細君はさっそく「ごめんだ」と答えている。四〇九ページ註（6）参照。

四二二(1)　これは前行の「お菓子などのお供え」と同格であり、祭壇に捧げられたものがヘパイストス（火の神）の焔で焚かれたことから来た句。

(2)　『女の議会』二五四行、三九八行以下に見え、そこでは民会で活躍した「目爛れ」の演説家とされている。

(3)　盗んだことを当人の身分と神殿の場所柄からふざけて言ったもの。

(4)　これは「神官が、かれ自身の振舞いによって実例を示してくれた」の意にもとれるし、また「神官が信徒たちに、寝る前に、深夜暗黒のなかにアスクレピオスご本尊が現われてお供えを集められると教えた」とも解される。

(5)　アスクレピオスの聖蛇として知られた茶色の、大きな口をもった、しかし無害の蛇。

(6)　アスクレピオスの娘。

(7)　アスクレピオスの娘。

(8)　古註は「医者が糞尿を検査して報酬を得るからか、或は医学の泰斗ヒッポクラテスが、伝えによれば、ある患者が助かるか死ぬかを調べるために、人間の糞を味わったからか」としている。

(9)　テノスはアッティカの東南に当たるイオニア人の島。にんにくの頭をロジャースは clove (鱗茎) と訳しており、リデル＝スコットの辞典は head = inflorescenceと説明してここを引いている。

(10)　ラテン名は skilla で非常に苦くて刺戟性の植物。

(11)　アッティカの区名でアテナイの東南方ヒュメットス山を越えたところにあった。ここの酸のことは詳しくはわからない。

四二三(1)　これは写本の本文であり、クーロンはそれに従い、「ネオクレイデスはこの『治療』によって完全に盲目となり、もはや民会に出られず、また今までのように誓をして証言をしたり、演説をしたりできなくなるであろう」の意にとっている。しかし「民会にかけて証言する」ということは他に例がないので、「決議に対して、宣誓した上で異議を申し立てる」の義にとる考えが有力である。ロジャースもいうようにここの本文が怪しいのであるが、とにかくネオクレイデスの民会での活動が不可能にされるか、制約されることを意味している。

(2)　この表現にはすでに六四四行以下にみえるようにクレミュロスの妻が酒

好きだったことへの皮肉が含まれている。

（3） 原字は「振りかけられるもの」を意味し、奴隷を新たに購入したとき、かれが家にはじめて入る際に主人がかれを歓迎してふりかける小さな菓子や干無花果をかく呼んだ。七八八行以下、七九五行、七九八行参照。

（4） 福の神の目がはじめて視力を回復してわが家に入るのを新しく買った奴隷の住込みにたとえた表現。

（5） 伝説に大地から生まれたアテナイ初代の王とされる人物。

四四（1） アリストパネスは俗悪な所作によって観衆を喜ばすことを軽蔑していた。『雲』五三七―五四四行、『蜂』五七―六六行、『平和』七三九―七五〇行参照。

（2） この人物のことは他に見えず不明。

（3） アテナイでは四・三六グラムの一ドラクマ、またその四倍の四ドラクマの銀貨だけが鋳造されていたが、小アジア海岸方面のギリシア都市では金のスタテール貨も鋳造された。その重量は各市で区々であるが、キオスやキュジコスの一スタテールは一ドラクマの約四倍の約十六グラムであった。

（4） それは貴重な食物だった。『蛙』四八二行以下ではディオニュソスは尻ふきには海綿を使っている。

（5） エレウシスにおける、デメテルの大秘儀。それは秋のボエドロミオンの月（九、十月にわたる）に行なわれた。同月の二十一、二十二日の入信式には神劇の実演と解説が行なわれた。大秘儀に対する小秘儀は毎年春のアンテステリオンの月に行なわれた。ここの古着の一件につき古註は、秘儀の信徒は入信のときに着ていた新しい衣をエレウシスの神殿に奉納する慣習があったことを伝える。それゆえ正しい人の持ってこさせた古着はそれではないことが一見明らかであるが、カリオンはそれを知りつつふざけたのである。

四五（1）『アカルナイの人々』九〇四行以下参照。

（2） 悪い人間を悪貨にたとえた例は『アカルナイの人々』五一七行や本篇九五七行参照。

（3） デメテルに同じ。

（4） 古註は「奴隷を縛りつけて処罰する車」と説明している。『蛙』六一五行以下参照。

（5） 四二一ページ註（6）をみよ。

（6） これは蛇に咬まれた場合などのための護符の役をした指環である。それにはどのような目的に役立つかが書いてあったと想像され、次の八八五行の訳文が考えられた。

（7） 古註は「魔法の指環を売った貴金属商」とか「悪霊や蛇その他に対するお護りの指環を製造した学者」と伝えている。

四六（1） 貿易商のふりをする、とは古註によれば「貿易商は食糧の供給に重要な役割を果すとの理由で兵役を免除されたから」であった。『女の議会』一〇二七行とそれへの註参照。

（2） ソロンの立法によって市民は、自分が被害者でなくても不正を行なう者を訴える権利が認められた（アリストテレス『アテナイ人の国制』九章一節）。これはポリス的生活の司法の面での大きな進歩であったが、同時に告訴を仕事にする者を生むもととなった。九一七行参照。

（3）『蜂』に詳しい。通常「陪審員」と訳されるが、専門の司法官はないので厳密には陪審者ではない。

（4） バットスはアフリカ北岸のギリシア植民市キュレネの建設者で、この市ではその後前五世紀半まで八代にわたりバットス家が支配した。八人の王のうち半数はバットス、半数はアルケシラオスの名を帯びた。つまりここのバットスはキュレネの王家を指しているが、その王領地には薬用、食用に珍重された一種の植物のシルフィオンが栽培され、王家はその専売によって富んだ。

（5） 古註は「ソポクレスの『エレクトラ』（一四一六行）からとった半行」と説明しているが、アイスキュロスの『アガメムノン』の一三四五行をも参照。本来悲劇においてアガメムノンやクリュタイメストラが殺されるとき、最初の一撃に続いて第二刃を受けたときの悲鳴。

四七（1） 古註は「神殿の附近のいたるところの野生のオリーヴその他の樹木に奉納物を釘で打ちつけるならわしだったから」と説明している。告訴常習者の面は実際に履物を釘づけできるように作られていたのであろう。

（2） 直訳すれば「無花果の木のようなものでも」。無花果の木が材木として軟くて役に立たぬことから、この形容詞は人間についても「下らぬ、役に立たぬ」の義に使われた。ただしここでは告訴常習者の言葉として、かれの **sykophantēs** というよび名の構成部分たる **sykon**（無花果樹）の語から来た形容詞が使われていることに意味がある。古註は「暗に告訴常習者を意

味す」と説明している。

(3) 鎧は重装歩兵の楯、剣、槍、兜、胸甲、脛甲の全体を指した。ただしここでは「正しい人」のもって来たぼろ着物と古い履物。

(4) 四〇九ページ注(7)をみよ。

(5) クレミュロスはこれまで家のなかにいたので八五〇行以下のカリオンと告訴常習者との対話は知らぬはずであり、一方九七〇行ではこれを知っているようになっている。しかしかかる不合理はアテナイの喜劇では問題でなかった。

(6) 「飲んだ」というのはアテナイ婦人の酒好きを諷したもので「裁判した」とあるべきところ。「籤に当たらんのに」というのは日当かせぎのために法廷に必要な以上の審判員が開廷日に集まるので、そのうちから当日必要なだけの人をアルコンが抽籤器で選んだのである。

四二八 (1) アテナイオスは、ミレトス人が、エポロスの説くように、古くはスキュティア人を撃退し、黒海方面に植民市を多数建設するなどの活躍をしたが、その後にはアリストテレスの述べるように奢侈と享楽に耽り、剛健の風を失ったので、「ミレトス人は昔戦いに強かった」という諺が生まれたとしている。この諺は要するに昔は在ったが今はなくなった状態を語っており、若者が老婆に興味を失っていることを知らせたものである。

(2) 大秘儀については四一四ページ注(5)をみよ。その際にアテナイ市から西方のエレウシスまで聖道を通っての信徒の大行列が行なわれたが、上流の女はこの約二十キロの道を馬車で行った。

(3) アテナイ女の酒好きを諷している。タソスの酒は芳香で知られていた。『女の議会』一一一九行註参照。

(4) 非常に痩せたものについて使われた譬え。

(5) 古註は「老人たちを司る神々で、相手が老婆であるためこれによびかけた」としている。ツェッツェスの註は「ポセイドンもまたディオニュソスやアポロンと異なり、年とった神々の一人」としている。

(6) これはもちろん便宜の訳で、原字はオリーヴの枝に羊毛を巻きつけ、また無花果や菓子や瓶に入れた油や酒を結びつけたもので、祭礼に担ぎまわったのちに家の戸口につけられた。日がたてばすっかり枯れて薪のように燃えやすかった。

四二九 (1) もちろん本来の遊びは歯の数を当てるのではなく、一人がいくつかの胡桃を手に握って相手にその数を当てさせ、当たらないと一〇五九行にあるように賭けの金を払った。

(2) 「汚い水をぶっかける」の意味で悪口を言うこと。

(3) 前行の「洗濯桶」と関連した言葉であろうが、ツェッツェスの註は「synousia のためかく言った」と説明している。

(4) 古註は「商人のように胡麻化してる」の義に解しているが、ロジャーズやファン・デールのように「売れるように美しく見せかけてる」の義にとるべきであろう。

(5) これは娘が誓いに使う表現で老婆はあくまで若い気持でこれを使った。次行の「ヘカテにかけて」は婦人の誓言で、男のクレミュロスがこれを返事に使ったのは皮肉の意味である。

(6) 若者はクレミュロスが一〇七三行以下に言った言葉を無視して、自分が老婆に惚れているふりをし、またクレミュロスもこの女に気があると信じたふりをして、老人との女の奪い合いはごめんと言うのである。

(7) この「人」と訳した etōn はアリストパネスには珍しい etēs（市民）の複数所有格とも etos（年）のそれとも見られ得る。ここは前者の訳語をとったが、老人の高齢をひやかす意味も含まれているかも知れない。一万三千という数には深い意味はない。一九四行の十三タラントン、八四六行の十三年を参照。

(8) 本来「（船に）瀝青を塗った」の意で、性交したことの隠語。

四三〇 (1) 四〇七ページ註(9)をみよ。

(2) ラヴェンナ本古註は「犠牲獣の舌は言葉の主であるヘルメスに供えられる」と説明している。ここに「触れ役」と訳した原字は使者、伝令でヘルメスは神々の触れ役であった。そこで「舌は伝令（ヘルメス）のために」と言う諺が生まれたが、本行ではこの諺にひっかけて、大変な凶報をもたらしたヘルメス自身の舌が切られるようにと言うのである。

(3) ヘルメスは本来神々の伝令として走りまわる役だった。

(4) これが何を指すかは明らかでないが、居酒屋が何か商売上で罰せられた事件が最近にあって観衆の記憶には新しかったらしい。ここではヘルメスは商業の神として呼びかけられている。

（5）ヘルメスは月の第四日にゼウスの末子としてマイアから生まれたと伝えられ、この日に人々はこの神に平菓子を焼いて供えた。
（6）ヘラクレスが死んだ美少年ヒュラスを追慕するのを評した言葉。現存せぬ悲劇のなかの句と解されている。
（7）これはアテナイ人の間でディオニュソス祭典の際に行なわれた一種の遊戯で、革袋に空気を入れてふくらませたものの上に片足で永く留まる競技であった。落ちなかった者は酒を満たした革袋を賞としてもらった。
（8）酒一、水三の割に割って飲むのが普通で半々のは強い酒。
（9）ロジャースはカリオンが汚水の入った鉢をもっていたと推測し、ファン・デールはここでカリオンが屁をひったと考えている。
（10）もちろんそのなかの食物を食うために。
（11）ヘルメスは盗みの神でもあった。
（12）夜盗のこと。四〇二ページ註（1）をみよ。
（13）四一〇ページ註（1）をみよ。
（14）リュシアスに同じような句がみえ、かような考えが反ポリス的として非難されている。
（15）戸口で扉の蝶番の近くに、顔を除いて下の方は柱状、ただ陽物のみをつけたヘルメスの像を建てるならわしがあった。それは泥棒よけのためだったと古註釈にみえる。
（16）この語 strophē はもちろん「蝶番の（strophaios）」と相手が言ったからもち出したものであるが、「廻転」から転じて「詭計」とか「遁辞」の意味があった。
（17）ヘルメス=ドリオス、『女だけの祭』一二〇二行にもみえる。

四二

（1）ピンダロスにヘルメスは優勝者に賞を与える者としてみえる。
（2）公の競技のための費用は富裕市民が公共奉仕として輪番に負担した事実からかく言ったものであろう。
（3）「番号」と訳した原字は gramma で正確には「文字」である。『アテナイ人の国制』六三章四節、六四章一節に明らかなようにアテナイ人は前四世紀の初頭以来希望者は裁判の審判員となれたが、かれらはその所属の部族の内で十の部に分かれ、各部はアルファからカッパまでの十の文字で呼ばれていた。文字が番号の役をしていたのである。本文のように「いろんな番号に登録」して開廷日の抽籤に当たり日当をかせぐためには上掲書六四章一節からみると自分の鑑札を偽作して、それを二つ以上使う必要があったはずである。なお四一七ページ註（6）参照。
（4）これまでにヘルメスのさまざまの属性が対話に現われたが、このゼウスの下働きの性格は上の競技の神としての性格とは別で、カリオンはもっとも有難くない役をさせる条件でヘルメスを家に入れるのである。
（5）人間の運命を左右する大神としてのゼウスの諸属性のうち「救済者」たることは重要だった。とくに一一八〇行にみえるように航海者はこの神に頼ることが多かった。
（6）前に告訴常習者のような悪人は福の神の開眼により不幸になったように見えるのに反し、ここで万人一様に富者となったとされていることに注意。四六〇行、四九七行参照。四三〇行への註参照。
（7）これは吉兆をもって供犠したのち自宅での振舞いに神官を招いた、の意。神官は昔からのならわしの、犠牲獣からの取り分をもらうほかにご馳走になったわけである。
（8）神官が前註に述べたように役得として犠牲獣の肉や皮の分け前にあずかる習慣があったのを皮肉ったもの。
（9）古註もレーウェンも、福の神が実にお助けのゼウスなのだ、の意に解しているが、ロジャースはゼウスがヘルメスのように困り果てて福の神のもとにやって来ている、の意にとる。これに従う。
（10）アクロポリスのパルテノンのアテナ女神像の後ろの室。「宝物室」と訳した原語は opisthodomos で「後室」。そこは前五世紀のアテナイの盛時にはほんとうに金、銀に充ちていた。
（11）祭壇や神殿の完成したときの式典には豆を煮たものを容れた壺を供える習慣があった。
（12）これは行列に参加する女の晴れ衣であったが、老婆はもちろんそんなことを予測せず、ただ男の気に入るために着て来たのである。
（13）湯葉の原字 graus の語は「老婆」の意味と、乳やその他の汁を熱したときに表面にできる「泡、上皮」の意味とがあった。それで作者は次の行にわたる駄洒落を入れたのである。訳では「婆」に音の近いものとして湯葉とした。

解説

高津春繁

ギリシア最大の喜劇作者アリストパネス **Aristophanes** はピリッポス **Philippos** を父、ゼノドラ **Zenodora** を母として生まれた。彼の生年に関する確かな伝承はないが、その初期の作品が他人の名義で上演され、前四二四年の「騎士」に至って始めて自分の名で合唱隊を与えられている点から、彼がこの年に法定の年齢に達したとすれば、前四四五年頃に生まれたと考えられる。彼はキュダテナイ **Kydathenai** の区（デーモス）に属していたが、アイギナ島に地所があったために、この島と密接な関係があったらしく、政敵から市民権に関する疑いをかけられたという話が伝わっている。彼の作品と称されるものの題名は全部で四十四篇伝わっているが、作品そのものが現存するのはその中の十一篇と多くの断片にすぎない。彼と同時代には彼の外に多くの喜劇詩人があったが、彼らの作品は断片以外には一篇も伝存するものがない。

彼の作品で年代が明瞭にわかっているものは次のとおりである。括弧の中のは失われた作品。

（「宴の人々」　前四二七年）
（「バビロニア人」　前四二六年　市のディオニュシア祭）
「アカルナイの人々」　前四二五年　レナイア祭
「騎士」　前四二四年　レナイア祭
「雲」　前四二三年　市のディオニュシア祭
（「リハーザル」　前四二三年　レナイア祭）
「蜂」　前四二二年　レナイア祭
「平和」　前四二一年　市のディオニュシア祭
（「アムピアラオス」　前四一四年　レナイア祭）
「鳥」　前四一四年　市のディオニュシア祭
「女の平和」　前四一一年　レナイア祭
「女だけの祭」　前四一一年　市のディオニュシア祭
「蛙（かわず）」　前四〇五年　レナイア祭
「女の議会」　前三九二年
「福の神」　前三八八年
（「コカロス」　前三八七年）

アリストパネスが生まれ育ち、多くの傑作を書いた前五世紀後半は彼の祖国アテナイの全盛と凋落との最も激しい変転を見せた時代である。前六世紀末からギリシア世界に迫って来たペルシア帝国は、小アジア沿海地帯を支配下におさめ、ついで前四九〇年に直接にギリシア本土に侵冦した。この年のマラトンの野の、十年後のサラミス湾での戦いで勝利を得たギリシアに指導者としての位置を確立したのが海のアテナイと陸のスパルタであった。

アテナイはその後デロス同盟を足がかりとして、海上帝国を築き上げ、キモン、ついでペリクレスの指導のもとに、着々として勢力を拡大すると同時に、その国家体制も、ソロン、クレイステネスなどの改革を経て、民主的な形態を整えた。ここには東の小アジアのイオニア風の自由なのびのびとした物の考え方と西方ドリス式の峻厳壮大な幾何学的な尺度を重んずる態度とが混り合って、その黄金律的な配合から、史上でもユニックな一つの頂点が作り上げられた。アッティカはその自由な進取の気性で広く海外に発展し、商業の上からも国外の人々をひきつけるとともに、思想、芸術、文学の面でも門戸を開放し、全ギリシア世界からここに登竜門を求めて有能な人士が群れ集まったのである。思想的な面だけを考えてみても、プラトンの対話を読めば、アテナイの一市民たるソクラテスがいかに大勢の当時の国外の名高い思想家たちと交じわり、問答する機会をもち得たかを知って、驚くであろう。これらの人々は、ちょ

うど現在のパリやニューヨークやロンドンに来て、世界的に認められる道を拓こうとする思想家や芸術家と同じように、アテナイに蝟集したのである。

アリストパネスが成長した紀元前五世紀の四分の第三期は、まさにこのような時期であった。しかし彼が成人し喜劇を続々と上演しはじめた前四二七年から世紀末にかけては、アテナイは前四三一年に始まり、前四〇四年の降服に終わったスパルタとの死闘に国運を賭して戦っていた。この間のアテナイの運命の起伏は激しく、アリストパネスは和平論者として終止し、クレオンやヒュペルボロスなどのデマゴーグを攻撃し、そのためにクレオンによって攻撃されることもあった。彼はまた新しい物の考え方を導入して、一時ギリシア思想界の指導権を握ったソフィストたちにも反対した。

ペロポネソス戦争後、世紀が変わる頃からアッティカの喜劇は、以前の激しさを失い、人身攻撃、時事問題の諷刺から、わりあいに温和な、一般的な諷刺に移ったが、アリストパネスもまたこの流れにそって、往昔の激しさを失った。この時期の作品は二つしか残っていないが、伝存作品中最後の「福の神」（前三八八年）は明らかにこの種のものである。その後彼は息子のアラロス Araros を世に出すために、最後に「コカロス」Kokalos と「アイオロシコン」Aiolosikon の二作をその名の下に発表したということであるから、彼の逝去の年は恐らく前三八五年前後と考えてよいであろう。

アッティカ古喜劇の形態　ギリシアの喜劇が発達して、悲劇と同じくアテナイのディオニュソスの祭礼に競技の形式で上演されたのは紀元前四八八、七年のことであって、競技者は最初は三人であったが、ついで五人、前二世紀には七人となった。前五世紀末までのアッティカ喜劇を古喜劇と称するが、その内容は、単なる笑劇ではなくて、激しい人身攻撃、政治上思想上の時事問題が多く、遠慮会釈のないその自由さは驚くべきものがある。そのために前四四〇、四三九年には個人攻撃禁止令が出たくらいである。これは三年後には廃されたが、後になって再び禁令が公布されたことがある。

アリストパネスが喜劇を書いた時代には、古喜劇の形態は悲劇にならって、ほぼ完成せられ、大体きまった型があった。悲劇と同じく、喜劇もプロローグで始まる。ここで作者がこれから扱おうとする問題が見物に知らされる。次に合唱隊の登場。合唱隊員の数は、悲劇より多く、二十四人で、アリストパネスの作品の名が示すように、鳥、蛙、蜂その外の動物の形で登場することもあった。合唱隊登場以後諷刺の本題が展開される。その間に「論争（アゴーン）」agon と称する、善玉悪玉が互いに異なる主張を持して言い争う部分がある。本題の部分が終わったところで「パラバシス」parabasis という、合唱隊が作者の代弁者となって見物に話しかけ、作者の意見や見物に対する苦情そのほかの個人的なことがらを述べる長い部分が挿入される。そこから劇は一転して、作者の主張どおりになればどんなに世の中が愉快になるかを見せる全くの悪ふざけともいうべき部分に移る。もっともこの部分は、時には反対に作者の攻撃したような世の中や、また作者の主張そのものと関係のない場合もあるが、とにかく騒々しく猥雑で、全くの無礼講である。また時には「蛙」のように以上の順が逆になっていることもあるが、おのおのの部分が一つの喜劇の中に含まれていることには変わりはない。この間にアリストパネスはうっとりとするような美しい抒情詩を合唱隊に歌わせるかと思えば、エウリピデスそのほかの悲劇詩人をもじり、考え得る限りの悪口雑言でもって手あたり次第に人々を罵倒し、卑猥きわまる科白や洒落をとばす。その変転自在、意表に出る唐突さは驚くべきものがある。言葉は抒情詩と悲劇のもじりの部分の外は、ほとんどアッティカの当時の日常会話である。

作　品　アリストパネスの作品は、前に述べたように、題名は四十四伝わっているが、以下、伝存の作品を中心として、内容がわかっている二、三の失われた作品にもふれながら、彼の作家的生涯をたどってみたい。

不幸にして失われた彼の最初の作「宴の人々」Daitales は前四二七年

上演、たちまちにして満都の人気をさらった。その合唱隊は英雄ヘラクレスの宴に出席すべく選ばれた十二人の男とその息子たちより成り、詩人は新式のソフィスト的教育をうけた青年と古い伝統的な質実剛健な訓育を経た青年とを登場させ、前者は裁判好き、女好き、酒好きのハイカラ野郎となり、ついに親父と喧嘩して彼を法廷に訴えるというのが筋であったらしい。作者はここにすでに後年の「雲」と同じ題材を取り扱っているのであって、彼のソフィスト嫌いがこのように早い時代に始まっているのは注目に値する。

次の「バビロニア人」**Babylonioi** は前四二六年の市のディオニュシア祭で多くの外国使臣の前で演ぜられ、この中でアリストパネスはデマゴーグのクレオン **Kleon** をはじめとして多くの権力者を攻撃したため、クレオンによって訴えられ、詩人自身の言葉によっても、相当につらい目にあったらしい（「アカルナイの人々」三七七行、「蜂」一〇一五行以下）。この劇の合唱隊はアテナイの民衆の奴隷となった同盟諸国の人々より成っていたらしいので、「バビロニア人」は、のちの「蛙」と同じく、正規以外の合唱隊の名より取った題名であると思われる。

翌四二五年のレナイア祭に詩人は現存の「アカルナイの人々」**Acharnes** を上演し、ペロポネソス戦争のためにその田畑や果樹園を荒され、困窮している農民の味方として和平論をとなえ、主戦論者クレオンを再び攻撃し、先輩のクラティノス **Kratinos** と競争相手の同年輩のエウポリス **Eupolis** の二大喜劇作家を破って一等賞を得た。この劇は「バビロニア人」と同じく、カリストラトス **Kallistratos** の名のもとに上演された。題名は、スパルタ王アルキダモス **Archidamos** のアッティカ侵入と農園荒廃策によって打撃を蒙った好戦的なアッティカの一デーモスで、炭焼に名高いアカルナイ **Acharnai** の老人の合唱隊に由来する。

幕が開くとディカイオポリス **Dikaiopolis** がただ一人で国会が開くのを待っている。時刻におくれてやっとのことに人々が集まり、国会の愉快なもじりの場面が展開される。ペルシアの大使が出て来る滑稽な場面ののち、ディカイオポリスは自分だけでスパルタと和を結ぶ。彼は田舎の地所に退き、一人で平和のうちに鄙のディオニュシア祭を祝おうとしているところへ、好戦的なアカルナイの老人たちが追って来て、反逆者を石で撃ち殺せと叫ぶ。ここでアリストパネスが好んで用いた悲劇詩人エウリピデスの作品のもじりの中に、ディカイオポリスが和平論を一席ぶつ。合唱隊の半分はこれに従うが、半分はますますたけり狂って、時の名高い将軍ラマコス **Lamachos** に助けを求める。将軍は仰々しい鎧兜に身を固めて、のそりのそりと威張り返って現われるが、大袈裟に呻るだけで、議論に対してはただ威し文句を並べるだけで退散する。ここに主戦論者も大将に見すてられ、平和論に従う。次にパラバシスののち、ディカイオポリスの平和がもたらしたいろいろの利益と楽しみが、当時アテナイにいじめられていたメガラ人、ボイオティア人らとの物品の交易、好戦論者の情けない有様とによって示される痛快滑稽な場面の連続。最後にラマコスがボイオティアの戦場から重傷にうめきつつ兵士にたすけられながら、一方ディカイオポリスは飲酒競技で一等となって、これまたふらふらになって二人の笛吹女に助けられて、登場、合唱隊は彼を勝利者として迎える。

これはまことに愉快な、作者のあらゆる特徴を発揮した劇である。悲劇のもじり、メガラやボイオティアの方言の滑稽な模倣と彼らの頓馬な愚鈍ぶり、ラマコスの悲劇的な口調など、作者のウィットは縦横に振われ、詩人は力と才とを若々しい気にまかせて惜し気なく浪費している。

翌四二四年、アリストパネスはレナイア祭に上演した「騎士」**Hippes** によって、クラノスの「サテュロスども」とアリストメネス **Aristomenes** の「材木人足」を破って一等賞を得た。これは仇敵クレオンに対する辛辣な攻撃である。四二五年にペロポネソス半島西岸ピュロス湾内にあるスパクテリア **Sphakteria** 島にあったスパルタ軍をアテナイの将軍デモステネス **Demosthenes** が包囲していた。クレオンはアテナイの議会で将軍たちの無為無策を攻撃し、みずからピュロスに出かけたところ、まことに偶然の幸運によって、すでに力つきていたスパルタ軍が投降し、彼は自分の力によって敵軍を一撃のもとに破ったかの観を装って、

わずか二十日の間にデモステネスがすでに九分九厘まで手中に収めていた勝利の名誉を横取りして帰国した。その翌年の冬に上演された「騎士」で、デモステネスとニキアス Nikias の二人の将軍が登場して、クレオンに苦情を言うのはこのような事情によっている。

劇の名はアテナイの上流階級である騎士の一隊より成る合唱隊に由来する。幕が開くと、アテナイの市民（デーモス）を擬人化した気むずかしい老人デーモス Demos の奴隷デモステネスとニキアスとが、新参の主人の面前でばかりうまく立ち働いてその機嫌を取り結ぶことのうまいパプラゴン Paphlagon、すなわちクレオンのお覚えのめでたさに比して自分たちの情けない有様を嘆いている。二人がクレオンの秘蔵する神託集を盗み出してみると、彼は腸詰売りによって地位を奪われるとある。そこへ腸詰売りが現われ、クレオンと論争し、その破廉恥、無知無学にはさすがのクレオンもかなわない。クレオンは彼を訴えるべく立ち去るが、腸詰売りもそのあとを追う。ここにパラバシス。訴訟に勝った腸詰売りとクレオンとはデーモスの御機嫌を得るべく競争するが、デーモスはクレオンを退け、腸詰売りを家令にする。第二の短いパラバシス。腸詰売りの魔法によって若返ったデーモスは昔のペルシア戦争時代の若々しい姿で現われて、最近の自分の非行を認める。

この劇は、作者自身が腹を立てすぎているために、滑稽というよりは罵声の連続であり、諷刺があまりにもむき出しになりすぎ、直接でありすぎる。作者は諷刺の対象と自分との間に距離をおくことを忘れている。真正面からの嘲罵は喧嘩にはなっても諷刺にも喜劇にもなりかねる。

翌四二三年の市のディオニュシア祭上演の「雲」Nephelai はアリストパネスの嫌いなソフィスト攻撃であるが、これはびりから一番の三等賞という始末であった。自然、宇宙、神、人間、特に道徳律などに関して新しい解釈を試み、事の善悪を問わずとにかく裁判、議会、論争で勝利を得ることを最終目的とする弁論術を開拓したソフィストたちはアテナイにおいて人々の心を奪いつつあった。伝統的なあらゆる観念は批判され、破られていった。ここに醜いシレノスのような顔、夏冬を問わずただ一枚の着物に、はだしで歩きまわり、従来のあらゆる固定観念を問答によって検討して破り、自分の観察と推論とによってあらゆるものの価値を判断しなおし、その上に建てた不動の道徳律に立って不合理な伝統的なものを無視し、行動する奇人ソクラテスがあった。喜劇にはまったくのおあつらえむきの人物である。アリストパネスは例の少々無責任なやり口でソクラテスを事もあろうにソフィストの代表に仕立て上げ、あらゆる当時の新傾向をば自然哲学もソフィストも十把ひとからげに彼におしつけ、この大哲人の店たる「思考店（プロンティステリオン）」Phrontisterion を舞台とした痛快な喜劇を作った。

田舎者で旧弊親父のストレプシアデス Strepsiades は貴族趣味の息子ペイディッピデス Pheidippides の馬狂いのために借金で首がまわらなくなり、借金取り撃退法を学ぶために息子をソクラテスの「思考店」に徒弟に出そうとするが、息子が言うことを聞かないので、自分で入門する。「雲」は合唱隊を作っている。あらゆるいんちき師、とりとめのない思想家、地上から足のはなれた詩人どもの空々漠々たる守りの女神なのである。先生は新入り弟子の頭の悪さに腹を立て、ついに退学を命ずるが、雲のとりなしでやっと息子の入学が許される。ソクラテスは新入りの前で名高い正論と邪論の討論をさせる。これは「宴の人々」と似た新旧教育法の青年に及ぼす影響の問題で、昔からの厳しいしつけ、運動競技による心身の鍛練、ホメーロスそのほかの詩歌による教育を主張する正論は、こんな古くさいお化けは全部蹴飛ばして、勝手気ままに世を送り、しかも少しも困らぬ術を教えようという邪論に破られる。息子のめでたい卒業に礼金を持参した親父は、息子が借金取りを新式方法で撃退するのを見て喜ぶが、祝賀の宴に親子は喧嘩をおっぱじめ、息子は親父をひどい目にあわせたあげくに、親父をなぐるのは正しいことであると例の新式方法で証明する。絶望の極、親父は思考店に火を放つ。

アリストパネスは、もちろんある点まではわざとであろうが、アナクサゴラスそのほかのイオニア式自然哲学者の説やソフィストの詭弁、弁論術、そのほか、あることないことをごっちゃまぜに思考店の大先生と

青瓢箪で栄養不良の弟子どもに押しつける。奇想天外な新説が持ち出される。これはまことに痛快で、ちょっと漫才の趣きがあり、見ているほうは面白かったろうが、その代表にされたソクラテスこそいい面の皮で、ソフィストを片っぱしから論破していた御当人がこんな目にあっても、一般の見物人にはどちらも同じように見えたに相違ないから、まことに困った誤解の種があるいはここに一粒まかれたかも知れない。プラトンがその「ソクラテスの弁明」で「雲」を師の悪評の一つの原因として引いているのもこのような事情のためと、「雲」の上演後三十年を経て、昔のアテナイとすっかり事情が変わっている時に、この作品が思い起こされ悪用されたためであろう。同じプラトンはその後の作品で、年代を前四一六年に仮設した「饗宴」では二人を仲よく同席で酒を汲み議論させていることは、「雲」上演がこれらの二人の間柄を破る原因とはならなかったことを示している。さもなければアガトンともある社交人が二人を同じ席に招待するわけがない。なお注目すべきは、この劇の主人公はストレプシアデスで、ソクラテスはわき役にすぎないことである。ところが後世の人からみれば、主人公はどうしてもソクラテスとしか考えられない。彼があまりにも偉大でありすぎたことが詩人にも哲人にも不幸の原因となったのである。なおアリストパネスは「雲」が三等となったことにいたく失望し、改訂を行なったと伝えられるが、現存の「雲」は、少なくともパラバシスの部分は明らかにこの改訂作に属していることが種々の点から認められる。この改訂された「雲」は上演されたことはなく、現存の作品には多少の前後矛盾があるから、あるいはこれは新旧二つの「雲」の混合体かも知れない。

翌四二二年の作品ではピロニデス Philonides の名でレナイア祭に上演され、二等賞を得た「蜂」Sphekes が現存している。この年に詩人の宿敵クレオンは北方ケルソネソス半島のアムピポリス市の攻防戦でスパルタの勇将ブラシダス Brasidas とともに殪れた。「蜂」でアリストパネスは日給わずか三文を貰って、デマゴーグどもに頤使せられている陪審員の一人ピロクレオン Philokleon（「クレオンびいき」の意）老人を主人公として、定見も定職もないくせに、控訴の方法もない最終審の陪審員たちがデマゴーグに煽動されて、無責任な判決を行ない、たった三文の捨扶持で彼らに瞞着され政争の具とされていながら、自分の権力に酔っている様を仮借なく追及している。

頑固な裁判気違いの親父ピロクレオンの病気を治療しようと息子のブデリュクレオン Bdelykleon（「クレオン嫌い」の意）はいろいろの治療法を試みるがすべて失敗に終わり、ついに親父を家の中に閉じ籠める。そこへ仲間の老人どもが夜も明けやらぬうちに誘いに来る。これが怒りっぽくて、誰だろうがおかまいなしに刺す「蜂」の合唱隊である。ピロクレオンは仲間に励まされて、逃げ出そうとするが失敗する。息子は親父が所有していると思っている権力は要するにデマゴーグたちの道具にすぎないことを明らかにする。幻滅に憤り嘆く親父のために息子は家の中で模擬裁判を開廷するが、被告のラベス犬（Labes「摑み屋」は前四二五年にシシリアに遠征した将軍ラケス Laches を指す）が横領の罪で訴えられながら、無罪になったことをピロクレオンは悲しむ。ここで詩人自身の誇りと昔の人々を賞讃するパラバシス。そのあとは乱痴気騒ぎで、ブデリュクレオンは裁判から引退した父親を慰めるために社交界の気のきいた宴会に連れ出すが、服装礼儀作法会話の予行演習にもかかわらず、ピロクレオンは宴会で虎になり、乱暴狼藉とダンスで幕。

敵味方の二人の主戦論者がアムピポリスで殪れた翌年、ニキアスの平和によって記念されるべき前四二一年に、アリストパネスは平和条約締結に少し先立って、市のディオニュシア祭に「平和」Eirene を上演、二等賞を獲得した。一等はエウポリスの「追従者」、三等はレウコン Leukon の「プラトレス」Phratores であった。

アテナイの百姓トリュガイオス Trygaios の二人の奴隷が巨大な甲虫に糞団子をまるめてやっている。トリュガイオスはペロポネソス戦争の長びくのに業をにやして、この甲虫に乗って、神話の中で天馬ペガソスを駆って空を飛んだベレロポンよろしく、天に登ってゼウスと談判しようというのである。天上に来ると神様のほうでも戦争の長いのにいやき

がさして、「戦争」にオリュムポスを引き渡し、もっと上の方に引越してしまっている。「戦争」は「平和」の女神を押し籠め、自分はラコニア（＝スパルタ）、メガラ、シシリア、アテナイという戦争の要因となった諸々の国を巨大な擂鉢でこねてサラダを作ろうとしているが、擂粉木がないので、アテナイに借りにやると、アテナイの擂粉木であるクレオンは紛失し、スパルタに行かせると、ここの擂粉木ブラシダスもなくなっている。これは両人が前年戦死したからである。これにはまいって、「戦争」が家の中に入っている間に、トリュガイオスは百姓たちの合唱隊といっしょに平和の女神とその二人の腰元「秋の実りの姫」**Opora** と「祭りのにぎわいの姫」**Theoria** を救い出す。ついでパラバシス。「祭りのにぎわいの姫」はアテナイ市の参議会に献じられ、トリュガイオスは「秋の実りの姫」と結婚する。これ以後は恒例の大騒ぎで、最後は陽気な婚礼の歌と行列で結ばれる。この劇にもまた改訂版があったらしく、現存の劇にも多少前後矛盾する所があるが、正確な事情はわからない。

前四二一年から四一五年の間の作品は全部失われている。ニキアスの平和は多くの不平不満をコリントス、メガラ、ボイオティアに残したまま締結された。アテナイはアルゴス、エリス、マンティネイアと同盟を結び、前四一八年マンティネイアの野でスパルタ軍と戦って破れた。アルゴスは同盟を破棄し、アテナイは前四一五年アルキビアデス **Alkibiades** の影響によってシシリア遠征を計画し、東西にまたがる海洋帝国を夢みていた。このような情勢のうちにアリストパネスは前四一四年の市のディオニュシア祭に「鳥」**Ornithes** を上演したが、この後世古喜劇の傑作と呼ばれた作品は競技では二等となり、一等はアメイプシアス **Ameipsias** の「乱痴気騒ぎ」、三等はプリュニコス **Phrynichos** の「孤独者」であった。

「鳥」は「平和」と同じく素晴らしい夢を乗せたファンタジーの世界である。訴訟に明け暮れるアテナイに愛想をつかしたペイステタイロス **Peisthetairos** とエウエルピデス **Euelpides** は鳥の国に、神話伝説の英雄で鳥になっているテレウス **Tereus** をたずねて、鳥の都市を空中に建設するよう勧告する。自分たちの敵である人間の言葉を鳥の合唱隊はなかなか聞き入れようとはしないが、ついに説き伏せられる。ついでパラバシス。ペイステタイロスとエウエルピデスも鳥の国の住人となり、新市は「雲時鳥国」と命名される。ついでおきまりの騒ぎで、新市建設のおりにやって来ては、何かにありつこうとするへっぽこ詩人、易者、都市計画で名高いメトン **Meton**、母市からの監督官、法令集売りが次々に現われては追い払われる。ここに第二パラバシス。巨大な空中城壁の完成のために、人間どもの供物の煙が天上にとどかないので神々は閉口し、使者を鳥の国に送り、王笏と「支配」**Basileia** を贈り、ペリステタイロスはこの輝く美貌の若妻「支配」と結婚する。

これは鳥の国から人間の世界を眺めた倒錯による痛快な諷刺である。この劇の目的が何であるか昔から論の分かれるところであるが、これを何かただ一つの問題への諷刺とするのは誤りで、むしろ限りない想像の愉しい飛翔、人間世界をはなれて見た時のその滑稽さの自覚ともいうべきものであろう。このような倒錯的手法は、その後の諷刺文学――たとえばルキアノス――の好んで利用するところとなった。

アテナイの夢は、しかし、間もなく前四一三年の、ツキュディデスの歴史に残るシシリア遠征軍の悲惨な末路によって粉砕された。エーゲ海の大部分の同盟都市にも見はなされたアテナイは、それでも健気に再び艦隊再建に取りかかったが、長い戦争にあきたアテナイ市民の声は再びアリストパネスの「女の平和」**Lysistrate** となって現われた。前四一一年に上演されたこの劇には女性の男性に対する性的ストライキという滑稽な猥褻な仮面のもとに真剣な平和への願いのむごい現実がかくされている。世はすでに公然と和平論を称えることを許さなくなっていた。アテナイはヒステリックな状態にあり、その言論の自由は危機に瀕していたと考えてよい。アリストパネスはこのような間接的な形による主張以外には、方法を見いだし得なかったのであろう。

アテナイの若夫人リュシストラテは「軍を解く女」というその名の示すように、アテナイとスパルタとの間の平和をもたらすために、全ギリ

シアの女の代表を集めて、男に対して戦をやめるまでは決して情交を許さないという風変わりなストライキの決議をさせる。女軍はアクロポリス山上に立てこもる。老人と老女の合唱隊が、一方は薪木の煙で女どもをいぶし出そうとし、一方は水甕でこれを消そうとする争いに、老人達は水びたしで敗走する。シシリア遠征失敗のあとに、公事をつかさどるべく前四一三年に設けられた十人のプロブロス **probulos** と称する役人の一人が、アクロポリスに保管してある国庫の金を海軍建設の経費のために引き出しに来るが、追い払われる。女のほうでも脱走しようとする者が出るが、男のほうでも困りはて、スパルタからも使者が来て、男どもは女のストライキに耐えかねて、平和を望んでいると告げる。やがて両国の使者が現われて、リュシストラテのとりなしで平和が定められる。

同じ年の市のディオニュシア祭に上演された「女だけの祭」**Thesmophoriazusai** では、アリストパネスは政治むきの諷刺から、エウリピデスに対する揶揄にむかっている。アリストパネスはすでに「アカルナイの人々」で、この大悲劇詩人の写実主義を諷して以来、いつもエウリピデスのソフィスト的な傾向、写実主義、斬新な趣向、法廷演説的な口調をからかってきたが、「女だけの祭」では本式に彼を主要人物として登場させ、その悲劇のもじりを立てつづけにやってみせる。

幕が開くとエウリピデスとその親戚の老人ムネシロコス **Mnesilochos** が登場。詩人の女に対する攻撃を怒って彼女らが自分たちだけの祭りであるテスモポリア祭 **Thesmophoria**（アテナイの太陰暦のピュアネプシオンの月の十一―十三日、今日のだいたい十月から十一月頃に行なわれた）で、彼を生かすべきか殺すべきかを討議するという報を得て、若い悲劇詩人アガトン **Agathon** を訪問する。アガトンは前四一六年に最初の悲劇の勝利を得、その次の夜の祝賀の宴会が、プラトンの「饗宴」の場とされている作者である。「饗宴」でもわかるように、彼は素晴らしい美男子で、その詩は華麗な美辞麗句にみちたものであった。アリストパネスもこの喜劇でアガトンに恐ろしく手のこんだ華麗な歌を唱わせる。エウリピデスは彼に女装して祭に潜入、自分の弁護をしてくれるように頼むが、アガトンはこの危い役目を丁重に辞退する。そこでムネシロコスが女装スパイの役目をかって出て、派手なアガトンの女の衣裳を着用に及んでテスモポリアに出かける。おかしな女姿のムネシロコスは大いに女の悪口を言ってエウリピデスを弁護するが、女の腐ったみたいなクレイステネス **Kleisthenes** の御注進で、見破られる。ムネシロコスはそこでエウリピデスの例の「テレポス」を真似て、女から赤子を人質に奪い、それが赤子ならぬ酒袋であることを発見して、たちまち犠牲に供し、酒を一滴残らず飲み干してしまう。次にエウリピデスの三つの悲劇のもじりによる脱出計画。まず「パラメデス」**Palamedes** で、この英雄がトロイアでオデュッセウスの奸計によって殺害された時に、その急を告げるべく櫂に文字を彫んで海中に投じたオイアクス **Oiax** を真似て、オールのかわりに絵馬に文字を彫んでアクロポリスから投げるが、効果がない。ここに女が男にまさっていることを歌うパラバシス。ムネシロコスは次にエウリピデスが去年上演して大成功を得た「ヘレネ」を思い出し、この絶世の美女になりすまし、エウリピデスはその夫メネラオスとなって救出しようとするが、役人が来てこれも失敗。今や板に縛りつけられたムネシロコスは、岩につながれて海の怪獣の餌食に供せられようとして、英雄ペルセウスに救われた王女アンドロメダ **Andromeda** となり、エウリピデスの同名の名高い悲劇のもじりが始まる。これも失敗に帰したのち、エウリピデスは自分の姿で登場し、女たちと和議が成立、ムネシロコスの番をしている巡査をまいて、逃げ出す。

この劇の面白味はアリストパネスのパロディにある。アガトンの召使いのとんでもなく誇張されたもったいぶった詩的な言葉、アガトンの歌う手のこんだ当時流行の最新式の人をくすぐるような歌、きたならしい老人ムネシロコスが派手な黄色い女の着物を身につけて、自分のために千艘の船の遠征軍をはるばると海を越えてトロイアまで船出させた絶世の美女ヘレネや可憐なアンドロメダ姫となり、これまた七十歳の老人のエウリピデスとの間にかわされる悲劇のロマンティクで美しい場面のグロテスクな滑稽さは少々残酷でさえある。

この作品と次の現存の前四〇五年レナイア祭上演の「蛙」との間に詩人はアルキビアデスを攻撃した「トリパレス」Triphales、最初の「福の神」、恐らくエウリピデスをからかった「フェニキアの女たち」、「女だけの祭」の改訂版などを書いているが、すべて伝存しない。「蛙」Batrachoi はプリュニコスの「詩神」、プラトン（これは哲学者とは別人）の「クレオポン」Kleophon を破って勝利を得たのみならず、まったく例外的に再演を許されるほどの人気を得たが、この名誉はパラバシスの中の愛国的な言葉が見物の心を打ったためで、第二回目の上演に際しては、詩人は劇の冠である蔦の葉の冠のかわりに、アテナ女神に聖なるオリーヴの冠を与えられたという。これはアテナイ市の与え得る最高の名誉であった。しかしこの劇は愛国心高揚のためのものではなく、パロディによるアイスキュロスとエウリピデスの二大悲劇詩人の文学批評である。アテナイはこの劇上演の前年にソポクレスとエウリピデスの二人の偉大な悲劇詩人を失い、今や悲劇は凋落の一歩手前にあった。劇の神たる酒神ディオニュソスはこれを憂えて、冥府からエウリピデスを連れ戻そうと、かつて冥府に下って地獄の門の番犬、三頭の怪物ケルベロスを生け捕って来た英雄ヘラクレスに化けて、冥府行を図る。

幕が開くと酒神がにやけたサフラン色の長袍の上に豪傑ヘラクレスの獅子の皮と棍棒をもち、奴隷をつれて登場。いろいろな滑稽味、神話のもじりの末に、冥府の王の宮殿でいよいよアイスキュロスとエウリピデスの二人の詩人の大試合が始まる。エウリピデスが地獄に下って来て、それまで地獄の悲劇の王の椅子に坐っていたアイスキュロスよりその座の譲渡を要求し、地獄の亡者の大衆どもを煽動したために騒ぎが起こり、酒神を判者に悲劇の試合をしようというのである。二人は互いに相手の弱点をつき、劇の人物、構成、文体、内容、プロローグ、歌と音楽と次次にあらゆる部分にわたって激論し、ここにアイスキュロスの誇張にみちたオブスキュランティズム、もったいぶった様子、大袈裟な表現、勇気凜々甲冑と槍と尊大古風に比して、エウリピデスの詭弁、警句、屁理屈、写実主義、新式モードの歌などが次から次へと、批判のかわりにもじりによって実演される。ついに両人の悲劇を巨大な秤にかけて量ることとなり、二人は互いに一番重たそうな詩句を皿に載せるが、重さの点ではエウリピデスのハイカラな吹けば飛びそうな新式の文句はアイスキュロスの途方もない大袈裟な句には及ぶべくもない。しかし酒神はなおも二人の軽重をはかりかね、二人に現在のアテナイの悲境救済方法を求める。この返答によってついに酒神はアイスキュロスを選び、地獄から合唱隊の喜ばしい歌に送られて地上にむかう。

この劇の名「蛙」は、酒神の冥府行の途中、アケロンの湖を渡る時に歌う蛙の合唱隊に由来しているが、これは第二の合唱隊で、正式の合唱隊はエレウシスの秘教入会者として死後喜ばしい生活を得た人々より成っている。悲劇の仕合はこの秘教に入会したアテナイ市民の前で行なわれるのであって、常にエウリピデスをもじり弥次り倒しつづけてきたアリストパネスは、この場合にも最後にはアイスキュロスに軍配を挙げてはいるものの、エウリピデスに対する賞讃の心はあちこちに認められ、劇そのものの価値ではアリストパネスは優劣を定めかねている。この劇上演の前四〇五年はアテナイが前年にアルギヌサイ Arginusai で得た海戦の勝利も戦死者の遺体の始末や沈没船乗組員救助の不始末による提督たちに対する弾劾という不幸な結末に終わり、アルキビアデスは国外にのがれ、ついに前四〇五年のアイゴスポタモイ Aigospotamoi の海戦の敗北によって味方も金も船もなく前四〇四年にスパルタの軍門に下るという迫り来る断末魔の暗い影に蔽われている時であったことを思えば、詩人がパラバシスそのほかで全くの異分子である政治上の問題を取り上げて、挙国一致のスローガンの下に政争をやめることを勧め、追放のアルキビアデスの才を惜しんでいるのはやむにやまれぬ愛国の衷情の現われであったのであろう。

「蛙」上演後の数年間はアテナイにとって最も暗い時期であった。前四〇四年にスパルタに屈したアテナイは、スパルタの傀儡政権の下に喘ぎ、スパルタの将リュサンドロス Lysandros をたのむクリティアスら三十人の寡頭政府の圧制は恐怖時代を現出した。前四〇三年民主派のトラシュ

ブロス Thrasybulos はテーバイを基地としてアッティカに入って、ペイライエウスにより、アッティカは内乱の状態となった、この時ようやく極端な反民主主義方針の非を覚ったスパルタ王パウサニアースは、貴族派と民衆派との間に立って、極端な貴族派の三十人を初めとする人々をエレウシスにおき、アッティカは二分された。この状態は前四〇一年に至るまで続いた。前三九九年のソクラテスの裁判と死刑とは、このような市民相互の反目と憎悪と猜疑の生んだ最も不幸な結果の一つであった。昔日の自由な時代の面影は今はなく、内乱のうちに生まれた個人的な憎しみは容易に消えない。法廷には内乱時代の市民の行動が常に持ち出され、大衆の寡頭政権、貴族階級に対する疑いと懼れの念は、新しい民主政体から寛容と中庸の徳を奪い去った。喜劇もまた以前の激烈で自由な政治的個人的諷刺をやめて、よりおだやかな、より一般的な気分のいわゆる「中期喜劇」の時代に移ったのである。「蛙」と、次に現存するアリストパネスの作品「女の議会」Ekklesiazusai（前三九二年）との間に、喜劇のこの移行が行なわれたと考えてよいであろう。

前四〇四年から三九五年の九年間スパルタの桎梏のもとに喘いだアテナイは、前三九五年にテーバイ、コリントス、アルゴスと同盟を結び、ハリアルトスにリュサンドロスを破り、海上でもコノン Konon は前三九三年クニドスで大勝利を得たが、前三九四年にはネメイアとコロネイアで同盟軍は敗北を喫した。軍隊の給料で生活している民衆は戦争の継続を欲し、またアテナイに残っている者の多くは陪審員としての日給で口をつないでいる。民会に出席する者の数は日一日と減少し、投票に必要な人数をかき集めるのがひと仕事となり、終に陪審員と同じく、民会出席者にも給料を出さざるを得なくなった。このような情勢裡に上演された「女の議会」が、かつて成功を博した「女の平和」と同じ趣向、同じ政治的問題を取り上げながら、時事問題には関係なく、女の議会占領とそれにつづくおかし味にすぎないのもなんら怪しむに足りない。

アテナイの女たちがプラクサゴラ Praxagora の指揮下に、夫たちがまだ寝ている間に、その着物を着用に及んで男装して議会に行き、多勢でもって女に政治を委任するという議案を通過させる。男どもは議会に出るにも着物を盗まれているので出られない。女どもはプラクサゴラを女将軍に選び、財産と男女関係をすべて共有にするという共産主義的な政治を行なうことにする。ただし女の場合には、年取った女、より醜い女のほうが若い美しい者に対し優先権をもつという但し書きつきである。ここから醜悪な二人の老婆に無理矢理に引きずられる美少年などというこの新式法令のもたらす滑稽な結果が現われる。このプラクサゴラの共産国家はプラトンの「国家」に描かれている理想国の中の共産社会にあまりにもよく似ているので、両者の関係が昔から問題となっているが、「国家」がこのように早い時に公けにされたとは考えられないので、アリストパネスはプラトンから何らかの意味でヒントを得たのか、またはプラトン以前にも思想家の間でこのような考えが相当に広く論議されていたから、プラトンとは関係なく、この突飛な考え方を揶揄したのかどちらかであろう。

前三八八年に上演された「福の神」Plutos は全く中期喜劇的になっている。すでに「女の議会」で非常に弱体化した合唱隊はここではほとんどないに等しく、パラバシスもない。劇の内容もプルトスすなわち福の神の盲目的不公平という一般的な題材に移っている。正しいが貧乏なクレミュロス Chremylos は奴隷のカリオン Karion といっしょに盲目の老人の福の神を医神アスクレピオスの神殿の治療によって目明きにする。貧乏神が現われて自分こそあらゆる勤勉、倹約などの徳の根源であると主張するが、追い払われ、目明きになった福の神の公正な富の配分の下にクレミュロスは栄える。当時のアテナイでは成金、政治家、密告者などが栄え、労働者はまことにひどい有様であった。昔から農民や労働者の味方であったアリストパネスは中期喜劇の時代となっても、やはり未だ彼らの味方であり、一見単なるお伽噺のようなこの劇もまた、裏には彼の同情がひそんでいる。

＊　　＊　　＊

アリストパネスの喜劇は、悲劇と同じく、全部詩形を取っているけれ

ども、会話の部分は全くの日常のアッティカの口語であるが、彼の得意とする悲劇のもじりの部分は一目で明らかなように誇張された悲劇のスタイルで書かれている。彼はあらゆる諷刺作家がそうであるように、つきることのない言葉の泉の持主である。驚くべき長い新造語、突拍子もない言葉の使い方、立てつづけに出る悪口雑言、よくもまあこのようにおかしな言葉がつきないものと思う程である。しかしアリストパネスが合唱隊に時おり歌わせる抒情詩のスタイルの歌は一転して甘美なリリシズムに満ち、それは彼が揶揄してやまないエウリピデスを思い起こさせる。彼の魅力の一つはこの歌にあった。

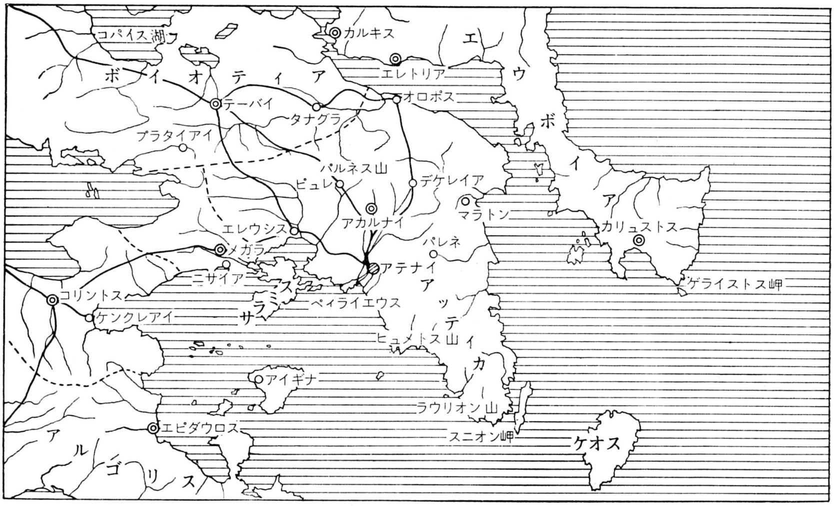
アリストパネス以外の同時代のみならず、彼以後の喜劇も、メナンドロスのわずかな作品を除いては、断片以外にはすべて失われてしまったので、彼の喜劇がアッティカ喜劇の長い歴史の中にどんな位置を占めるか、判断がむつかしいが、最初から彼の名声は高かった。一等賞を得たこと四回、三回の三等賞、一回の三等という記録は、同時代の他の作者を凌駕し、プラトンも「饗宴」で彼が哲学者たちに認められている点に言及している点からも、生前の彼の評判が察せられる。

彼の作品の主題はクレオン、ヒュペルボロス、アギュリオスのようなデマゴーグ、新式様式の思想、教育、生活、文学に対する諷刺、攻撃、悪口、揶揄であった。エウリピデス、ソクラテス、メトンなど、新しい道を開く人々をデマゴーグと同じく彼は攻撃する。アイスキュロスの悲劇、古いマラトンの勝利への回顧はこの詩人の同情がどこにあったかを示している。彼は常にペロポネソス戦争の最大の犠牲者たる農民や貧しい労働者の友であって、戦争によって利を得ている者共を倦むことなく攻撃しつづける。彼は理屈ではなく、感情的に和平論者であり、静かな田舎の生活の讃美者であり、彼の中の多くの歌は彼がいかに自然に親しみ、これを愛していたかをよく物語っている。しかしアリストパネスは彼の競争相手のエウポリスのように自己の主張をあくまで持する人ではない。クレオンに対してかくも勇敢に闘ったと自負するこの人は、四百人の寡頭政治にもクリティアスにもふれない。しかしアリストパネスは喜劇の作者であって、その目的は人を笑わすにある。この点では彼は天下一品で、ウィット、倒錯的想像力、非論理な推理、洒落、地口、悲劇のもじり、痛快に長くて一口にはとても発音出来かねる複合語、辛辣きわまる悪口雑言、猥褻、悪ふざけ、くすぐりが息をつく暇もなく見物に投げつけられる。どこまでが真剣なのか、どこからがふざけなのか見当がつかない。プラトンは「饗宴」の中でこの詩人につかみ所のない愛に関する途徹もない真面目なようなふざけたような演説をさせているが、さすがはプラトンである。恐らくここにアリストパネスの悲しみがあるのであろう。

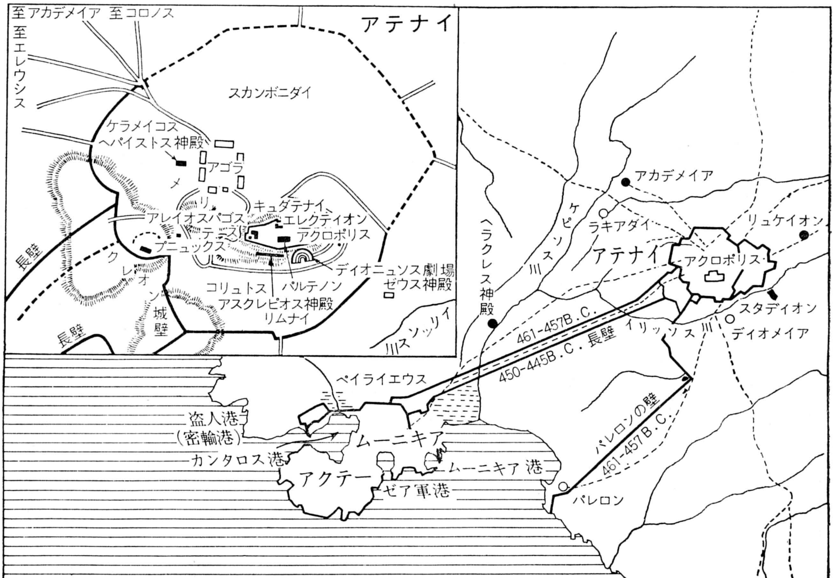


ストリュモン川
トラキア
ヘブロス川
アブデラ
アンピポリス
タソス
サモトラケ
カルディア
ケルソネソス
キュジコス
カルキディケ
ポテイダイア
スキオネ
レムノス
ミュシア
エーゲ海
アイオリス
テッサリア
ドドナ
コルキュラ
アケロオス川
パルサロス
アルテミシオン岬
レスボス
ミュティレネ
スペルケイオス川
オレオス
リュディア
エウボイア
アイトリア
ロクリス
オプス
カルキス
クラゾメナイ
サルデイス
デルポイ
オルコメノス
キオス
スミュルナ
イタカ
ボイオティア
アッティケ
イオニア
ピュレ
コロポン
カユストロス川
テーバイ
マラトン
キュレネ
アカイア
ペレネ
メガラ
ゲライストス岬
カリア
シキュオン
コリントス
アテナイ
サモス
エペソス
エリス
オルネアイ
サラミス
アルゴリス
ザキュントス
オルコメノス
ケオス
アルカディア
アイギナ
スニオン岬
ラウレイオン
オリュンピア
レプレオン
アルゴス
ミレトス
デロス
テュレア
タユゲトス山
セポリス
メッセネ
スパルタ
ラコニア
ナクソス
ピュロス
アミュクライ
プラシアイ
キュクラデス諸島
スパクテリア
アモルゴス
地中海
メロス
タイナロス岬

ギリシア全図



アッティカ周辺図



アテナイ付近図

410　喜劇詩人ピロニデス初優勝
この頃から中期喜劇的な作風を持つストラッティス，テオポンポスの活躍
?　＊アリストパネス「トリパレス」（断片）
409　ソポクレス「ピロクテテス」
エウリピデス「フェニキアの女たち」「ヒュプシピュレ」（断片）
409/8　＊アリストパネス「フェニキアの女たち」（断片）
エウリピデス「オレステス」
アリストパネス「ゲリュタデス」（断片）
406　エウリピデス，つづいてソポクレスの死

405　＊アリストパネス「蛙」レナイア祭で優勝
プリュニコス「ムーサイ」（断片）二等
プラトン「クレオポン」（散佚）三等
エウリピデスの遺作「バッコスの信女」「アウリスのイピゲネイア」
405/4　＊アリストパネス「テルメソスの人々」（断片）

401　ソポクレスの遺作「コロノスのオイディプス」

399/8以後　＊アリストパネス「こうのとり」

392　＊アリストパネス「女の議会」
389/8　＊アリストパネス「福の神」中・新喜劇の要素濃くなる
387　＊アリストパネス「アイオロシコン」（断片），「コカロス」（断片）を息子アラロスが上演する
385　＊この頃アリストパネスの死

＊　＊　＊

361　新喜劇詩人ピレモン生まれる
360　この頃中期喜劇の全盛，アンティパネス，アナクサンドリデス，アレクシス，エウブロス，アラロス等の活躍

350　新喜劇詩人ディピロス生まれる（—262）
この頃から各地に常設劇場が設置され，俳優組合が結成される

342　新喜劇詩人メナンドロス生まれる（—291/0）

五月に樹立，九月崩壊
410　キュジコスの海戦でアテナイ海軍，スパルタ軍を敗る

407　アテナイ艦隊ノティオンでスパルタ軍に敗れる
406　アルギヌサイの海戦でアテナイ海軍勝つ
405　アイゴスポタモイの海戦でアテナイ艦隊全滅

404　アテナイの降服，長城の破壊，三十人政権樹立
デロス同盟の解体
403　三十人政権崩壊，民主政体の回復

400　スパルタ，ペルシア間に戦争
399　ソクラテスの死
395—386　コリントス戦争
394　クニドス沖でスパルタ海軍，ペルシアに大敗，スパルタ軍コロネイアで圧勝

386　プラトン，アカデメイア創設
アンタルキダスの平和

＊　＊　＊

384　哲学者アリストテレス生まれる（—322）
383　雄弁家デモステネス生まれる
378　第二アテナイ同盟の結成

359　ピリッポス二世マケドニア王となる
357—355　アテナイと同盟都市間の抗争
357—354　マケドニアのギリシア植民地，ピリッポスに征服される
359—346　神聖戦争，ピリッポスのギリシア侵入
356　アレクサンドロス大王生まれる（—323）

347　プラトンの死
346　ピロクラテスの平和

	エウリピデス「ヘラクレスの子供たち」 喜劇詩人プリュニコス初上演		過激派クレオンと穏健派ニキアスの対立
428	エウリピデス「ヒッポリュトス」 喜劇詩人の活動を制限する法令		
427	＊アリストパネス，処女作「宴の人々」（断片）を上演し二等を得る この頃エウポリス「隊長たち」（断片）	427	アテナイ，ミュティレネを鎮圧 スパルタ王アルキダモスの第四次アッティカ侵入 哲学者プラトン生まれる（—348/7）
426	＊アリストパネス「バビロニア人」（断片）大ディオニュシア祭で優勝，クレオンを諷刺したため訴えられる ＊この頃アリストパネス「ケンタウロス」（断片）（?）	426	クレオン，戦争政策を積極的に推し進める アルキダモスの死
425	＊アリストパネス「アカルナイの人々」レナイア祭で優勝 クラティノス「嵐の中の人々」（断片）二等 エウポリス「新月」（散佚）三等 喜劇詩人プラトン初上演 エウリピデス「ヘカベ」（または 423?）	425	アテナイの将軍デモステネス，ピュロスを占領，クレオンのスパクテリア攻略成功，彼の名声大いに高まる
424	＊アリストパネス「騎士」レナイア祭で優勝 クラティノス「サテュロイ」（散佚）二等 アリストメノス「薪運び」（散佚）三等	424	スパルタの将軍ブラシダス，アテナイ側のアンピポリスを占領
?	＊アリストパネス「百姓たち」（断片）（または 422?）		
423?	＊アリストパネス「商売人」（断片）レナイア祭（?）で上演		
423	＊アリストパネス「雲」大ディオニュシア祭で三等 クラティノス「酒瓶」（断片）優勝 アメイプシアス「コンノス」（散佚）二等 エウリピデス「ステネボイア」（断片）	423	アンピポリス奪回に行ったクレオン，敵将ブラシダスと共に戦死
422	＊アリストパネス「蜂」レナイア祭で二等		
421	＊アリストパネス「平和」大ディオニュシア祭で二等 エウポリス「追従者」（断片），「マリカス」（断片）	421	スパルタとの和約成立（ニキアスの平和）
421/0?	＊アリストパネス「ダイダロス」（断片），「ダナオスの娘たち」（断片）「ニオボス」（断片）		
420	エウリピデス「救いを求める女たち」 この頃ソポクレス「オイディプス王」 ペレクラテス「粗野な人々」（断片）優勝	420	アルキビアデスの反スパルタ政策
419—412	＊この間にアリストパネス「アナギュロス」(断片),「ポリュイドス」（断片）	419	ペロポネソス戦争再開
419	エウリピデス「アンドロマケ」		
418	ソポクレス「エレクトラ」（または 410?）	418	スパルタ軍マンティネイアの戦いで勝ち，ペロポネソスでの覇権取り戻す
417	ペレクラテス「脱走の人々」（断片）		
416	エウリピデス「狂えるヘラクレス」（または 423?）	416	メロス遠征，全市民を虐殺
416/5	エウポリス「バプタイ」（断片）		
415	エウリピデス「トロイアの女」「パラメデス」（断片） 喜劇における個人諷刺を禁ずる法令	415	ヘルメス像冒瀆事件 シシリア遠征
414	＊アリストパネス「アンピアラオス」（断片）レナイア祭，「鳥」大ディオニュシア祭で二等 アメイプシアス「酒宴の人々」（散佚）優勝 プリュニコス「世捨人」（断片）三等 ペレクラテス「提灯」（断片）		
413	エウリピデス「エレクトラ」この頃なお「イオン」「タウリスのイピゲネイア」	413	シシリア遠征軍失敗
412	エウポリス「デーモイ」（断片） エウリピデス「ヘレネ」「アンドロメダ」（断片）		
?	＊この頃アリストパネス「レムノスの女たち」（断片）		
411	＊アリストパネス「女の平和」レナイア祭，「女だけの祭」(または 410?)	411	シシリア遠征失敗の反動，四百人政権

アリストパネス関係年表

(1) この年表はアリストパネス在世期間を中心に，生没の前後に若干の関連事項を添えて編まれている。

(2) 二欄に分かたれているが，左欄にはアリストパネスを含む演劇関係の事項を，右欄にはその他の歴史的事件を挙げて，両者を対照できるようにしてある。

(3) 左欄において，アリストパネス関係の事項は＊印を付してある。なおアリストパネスの作品中，断片のみ伝わるものは（断片）と，散佚して題名のみしか伝わらないものは（散佚）と断わってある。

(4) 作品の上演年代は，確実なものはむしろ少なく，不明なものや異説のあるものが多いが，不確実なものは疑問符を付してある。

アリストパネスと他の喜劇悲劇	歴史的事件
500 この頃喜劇詩人エピカルモス，シチリアで活躍	
499 悲劇詩人アイスキュロス初上演	
496 悲劇詩人ソポクレス生まれる（—406）	492 ペルシアの第一次ギリシア遠征
490 この頃喜劇詩人クラティノス生まれる（—422）	490 マラトンの戦い
487 大ディオニュシア祭で喜劇競演が国家行事として初めて催され，キオニデスが優勝	
480 この頃悲劇詩人エウリピデス生まれる	480 サラミスの海戦
476 アイスキュロス「縛られたプロメテウス」	479 プラタイアイの戦い，ミュカレの海戦（ペルシア陸海軍敗退）
	478/7 デロス同盟の結成
472 アイスキュロス「ペルシアの人々」	469 ソクラテス生まれる（—399）
470 この頃ミモス劇の創始者ソプロン生まれる（—400頃）	
467 アイスキュロス「テーバイに向かう七将」	460 ペリクレスのスパルタ，ペルシア相手の両面戦争政策
458 アイスキュロス三部作「オレステイア」	
456/5 アイスキュロスの死	449/8 ペルシア，アテナイ間に和約成立（カリアスの平和）
＊　＊　＊	＊　＊　＊
445 ＊この頃アリストパネス，アテナイ市キュダテナイオン区のピリッポスの子として生まれる	446 アテナイ，スパルタ間に三十年の和約成立，両面戦争終り，平和が訪れる
クラティノス，アリストパネスと並ぶ三大喜劇詩人の一人エウポリス生まれる（—411）	
443 クラティノス「トラキアの女たち」（断片）	443—432 アテナイの全盛 ペリクレス時代（—429）
442 レナイア祭に初めて喜劇競演が催される	
441 ソポクレス「アンティゴネ」（または 422？）	
440 喜劇における特定個人の諷刺攻撃を禁ずる法令定められる	440 サモス，アテナイに離反 この頃からソフィスト活動始まる
	439 サモス平定される
438 エウリピデス「テレポス」（断片）「アルケスティス」	438 コリントス，コルキュラ間の争い パルテノン神殿完成
437 喜劇詩人ペレクラテス初優勝	437—432 プロピュライアの建造
	432 コリントスの植民地ポテイダイア，アテナイに反乱
431 エウリピデス「メデイア」	431—404 ペロポネソス戦争
430/29 エウポリス初上演 クラティノス「ディオニュサレクサンドロス」（断片）	430 アテナイにペスト流行
429 この頃ソポクレス「トラキスの女たち」	429 ペリクレスの死

レ

ロ

人名・地名索引

(1) この索引は，本巻に収められたアリストパネス全作品（従って断片は除く）中に現われる固有名詞（神名，人名，地名等）を集録したものである。

(2) 出所は作品名の略記（略号の説明は下段参照）と行数で示してある。ただし行の数え方は便宜上原典のそれによった。従って訳文では必ずしもその行数が一致しないことがあるが，検索の際にはそれほど不都合はないはずである。

(3) 神や英雄の名は，しばしば異名や父称によって置き換えられるが，それらは一応本来の呼称の項にまとめて挙げ，それぞれの特別の呼称をあわせて記入してある（たとえばアテネの項を参照）。

(4) 喜劇の特性から，地口や駄洒落風に架空の呼称がしきりに現われるが，そのまま訳したのでは意味がないので，訳文では大抵別の形でその効果を示そうとする場合が多い。そういう場合には原語の呼称を記載してもほとんど意味がないので，概ね省略した（例えば「アカルナイの人々」808 行「紀の国」の訳語に付けられた註を参照)。

(5) 作品名はラテン表記の題名の頭二字をとって略記してある。

Ac = Acharnenses 「アカルナイの人々」
Av = Aves 「鳥」
Ec = Ecclesiazusae 「女の議会」
Eq = Equites 「騎士」
Ly = Lysistrate 「女の平和」
Nu = Nubes 「雲」
Pa = Pax 「平和」
Pl = Plutus 「福の神」
Ra = Ranae 「蛙」
Th = Thesmophoriazusae 「女だけの祭」
Ve = Vespae 「蜂」

なお　原典は Oxford Classical Texts 中の Hall-Geldart 校註本による。

ア

アリストパネス　　世界古典文学全集　第12巻

昭和39年 5 月25日 発行

訳者代表　高　津　春　繁
発 行 者　古　田　晁
印 刷 者　山　元　正　宜
発 行 所　株式会社 筑　摩　書　房
東京都千代田区神田小川町 2—8
振替東京 4123　電話(291) 7651